

広西大洗奮闘記

井の頭線通勤快速

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園艦存続を確立させた大洗女子学園の戦いは、残酷な事にまだ終わっていないかった。その存亡の危機に対して大洗はどうするのか！だがその陰で、動き出す者たちがいた…

映画の若干のネタバレがあります。

評価も遠慮なくやってください。

毎週日曜日のうちには更新しています。

注意

今後実在した人物名、組織名が登場しますが、この作品はいかなる人物、組織、思想を賛美、非難する意図を有してはおりません。また登場する人物に関する性格などはこちらでも調べますが必ず変なところが生じます。変な所は遠慮なく突っ込んでください。

11月19日 完結しました。

11月20日 活動報告にあとがきを投稿しました。

目次

広西大洗奮闘記	1	運命の光	1
広西大洗奮闘記2	華の香り	13	
広西大洗奮闘記3	他所の決断	25	
広西大洗奮闘記	4	ズレを呼ぶズレ	39
広西大洗奮闘記	5	the bird	52
広西大洗奮闘記	6	向かうは	62
広西大洗奮闘記	7	蒲生邸事件	72
広西大洗奮闘記	8	誰が為に	82
広西大洗奮闘記	9	ターゲット	95
広西大洗奮闘記	10	良い航海を	104
広西大洗奮闘記	生徒会+ α と学ぶ戦間期中国史講座	上	112
広西大洗奮闘記	11	泥を被るべし	123
広西大洗奮闘記	12	青い川	135
広西大洗奮闘記	13	清貧な酒飲み	148
広西大洗奮闘記	14	「会話」	156
広西大洗奮闘記	15	狐は疾風に尋ねる	169
広西大洗奮闘記	16	僥倖を任す人	178
広西大洗奮闘記	17	ルアー	189
広西大洗奮闘記	18	普遍的価値	201
広西大洗奮闘記	19	ソロモンの子孫	214
広西大洗奮闘記	20	騎士と母と水墨画	223
広西大洗奮闘記	生徒会+ α と学ぶ戦間期简单世界史講座		233
広西大洗奮闘記	21	この小説の貴重なサービスシーン	241
広西大洗奮闘記	22	三枚目	251

広西大洗奮闘記	4 5	我らの相手	452
広西大洗奮闘記	4 4	Guwangdong Guwangsi	446
広西大洗奮闘記	4 3	歴史	440
広西大洗奮闘記	4 2	最悪の状況	435
広西大洗奮闘記	4 1	反攻	427
広西大洗奮闘記	4 0	あくまで予測	421
広西大洗奮闘記	3 9	囲まれて	412
広西大洗奮闘記	3 8	久々の練習	406
広西大洗奮闘記	3 7	安敦とジャンヌ	402
広西大雨奮闘記	3 6	諸君、私は日曜日が好きだ。	395
広西大洗奮闘記	3 5	壁ドン	389
広西大洗奮闘記	3 4	人の噂は	384
広西大洗奮闘記	3 3	硬鉄と軟鉄	379
広西大洗奮闘記	3 2	李のアイデア	373
広西大洗奮闘記	3 1	地下	368
広西大洗奮闘記	生徒会+@と学ぶ戦間期中国史講座 下		354
広西大洗奮闘記	3 0	スタンダード島	341
広西大洗奮闘記	2 9	忍	329
広西大洗奮闘記	2 8	保険	318
広西大洗奮闘記	2 7	あんまん	308
広西大洗奮闘記	2 6	清の窓	295
広西大洗奮闘記	2 5	主のご加護を	285
広西大洗奮闘記	2 4	事実もまた物語	272
広西大洗奮闘記	2 3	Oarai	261

広西大洗奮闘記	46	久々	458
広西大洗奮闘記	47	演説	468
広西大洗奮闘記	48	スポーツたる戦車道	475
広西大洗奮闘記	49	生存のために	482
広西大洗奮闘記	50	対処	487
広西大洗奮闘記	51	夢、そして正夢	493
広西大洗奮闘記	52	名家の子孫	500
広西大洗奮闘記	53	動員	508
広西大洗奮闘記	特別編1	12使徒に見下ろされ	516
広西大洗奮闘記	54	歓迎	526
広西大洗奮闘記	55	蓋	532
広西大洗奮闘記	56	配置	539
広西大洗奮闘記	57	ワン	544
広西大洗奮闘記	58	痛 怒 恨	553
広西大洗奮闘記	59	非難先	560
広西大洗奮闘記	60	バケモノ	568
広西大洗奮闘記	61	空を舞う	574
広西大洗奮闘記	62	一人、そして二人	582
広西大洗奮闘記	63	周りを囲う塀の中に	590
広西大洗奮闘記	64	名女優	595
広西大洗奮闘記	65	三人の来訪者	602
609 広西大洗奮闘記	66	G i v e m e a p u r p o s e .	
広西大洗奮闘記	67	総動員体制	617
広西大洗奮闘記	68	大漁旗	622

広西大洗奮闘記	69	風船	630
広西大洗奮闘記	70	全国代表大会	639
広西大洗奮闘記	オリキャラなどの紹介回		645
広西大洗奮闘記	71	D・xi (大洗)	658
広西大洗奮闘記	72	支援物資	663
広西大洗奮闘記	73	ごろう	668
広西大洗奮闘記	74	肉叉	678
広西大洗奮闘記	75	案内	684
広西大洗奮闘記	76	ラスト、ネクスト	690
広西大洗奮闘記	77	かいはつぐらし!	695
広西大洗奮闘記	78	法要	699
広西大洗奮闘記	79	前進	705
広西大洗奮闘記	80	花瓶	708
広西大洗奮闘記	特別編2	ナポリタン	713
広西大洗奮闘記	81	取引	722
広西大洗奮闘記	82	太陽光発電	728
広西大洗奮闘記	83	旅行者と仕事上の理由	733
広西大洗奮闘記	84	天上の大輪	738
広西大洗奮闘記	85	ひこうき	741
広西大洗奮闘記	86	通知表と鍋	748
広西大洗奮闘記	87	涙	761
広西大洗奮闘記	88	先の未来を	768
広西大洗奮闘記	89	新世代	773
広西大洗奮闘記	90	願はくは(終)	788
広西大洗奮闘記特別編		習志野	803

広西大洗奮闘記 1 運命の光

10月8日午後 大洗学園艦

空を眺めると快晴ではないが雲はちらほら見える程度だ。角谷杏は漫然と時間を潰していた。高校3年生は10月を過ぎてから午後は大学入試に向けた特別授業となっている。

しかし、そんなのは推薦で合格が決まっている彼女には関係ない。一応生徒会長の仕事はあるが、同じく推薦で合格した小山がほぼこなしてくれている。今まで生徒会長になってから廃校の緊迫感に包まれていたが、それから思いつきり解放された為かあまりやることか思いつかない。思えばあの時の風紀委員達もこんな気分だったのだろうか。

気がつくとグラウンドの方から履帯の回る音が聞こえる。そういえば他の学年は今の時間必修選択科目の時間か。ならばちよいっとお邪魔しよう。

グラウンドでは6輦の戦車がパンツァーカイルでの走行訓練を行っていた。3年生がいない為ヘッツァーとポルシェティーガーは訓練から外れている。またそど子、びよたんもいないのでカモさんチームとアライクイさんチームは砲撃訓練を満足に行えてないらしい。おまけに自動車部が4人中3人抜けた為車輛の整備が大変だとも聞いた。

丁度いい。手伝うとしよう。走行訓練を終えて、車輛が次々とレンガの倉庫の前に集まってくる。その中の一輦から西住みほが顔を見せた。

「あつ…会長さん、どうも。」

キユーポラの上から礼をした彼女はすぐに車輛から降り、角谷の前に来た。

「あの…授業は…」

「ああ、私ね、大学決まっちゃったからさく、この時間出なくて良いんだよね。という事で練習来てみちゃったわけ。」

「でも、この後は練習を切り上げて車輛整備をしようかと思っている

のですが……」

「いやーよ。私も手伝うよ。」

「あ、ありがとうございます。」

みほが礼を述べると、他の車輛から出てきた者達も一緒に謝意を示す。各車の操縦手が倉庫の決められた場所に駐車し、みほはその間に各車の車長に改善点を指摘する。

駐車が終わるとそれぞれ工具を持って自分の車輛に向かう。角谷もヘツツアーの前に向かい、様子を確かめる。あの試合で随分と派手な使い方をしたせいでその後自動車部から愚痴を言われたことが思い出される。

まあ、感慨にふける時でもないので履帯の様子を確認し、緩そうな所は適宜締めていく。元が38tだけに締めて損はない。他の車輛の者達もツチャに指摘を受けつつも基本的には自力で整備する。

この時はまだ気づくはずがなかった。まだ彼女達の戦いは終わっていないかったのだと。

光が、その空間を大きく包んだ。目を瞑るが、瞼を貫通し目を突き刺す。手で塞いでも変わりはない。

どれくらいの間堪えただろうか、とても長く感じられた。その後光は収まったがチカチカして目を開くことが出来ない。やつと薄く目を開くと、みほの周りに見えたのは目を塞いだまま倒れていた人の姿だった。近くにいた沙織の体を揺さぶる。

「沙織さん、沙織さん。」

「んん……みほりん、大丈夫だった？」

沙織は目を閉じたまま身を起こす。

「まだ目がチカチカするけど、他は大丈夫そう。」

「それにしても、今の何？」

「何があったの……」

「どうしたのでありますか？」

他の者も身を起こし始める。みほはましになった目で辺りを見回してみると、まだ倒れている人、少しは大丈夫そうな人、様々だがそ

れ以外に大きく変わったところはない。

「何かは分からないけど、とにかく変わったところはなさそうだけど……」

「いや、そうでもないぞ。」

帽子をはめ直しながらエルヴィンが倉庫から出て空を見上げる。

「今日、あんなに曇っていたか？」

「えっ?」

目がましになった者は倉庫の外に出る。確かに、今の空は青空が殆ど見えない。雲も灰色がかっている。

「確かに……」

「倒れていた間に雲が出たんじゃないか?」

「いや、それはないと思うぜよ。」

おりようが胸元から懐中時計を取り出す。

「今、2時半ぜよ。」

「!」

練習が終わったのは2時10分過ぎ、その後整備をそれなりの時間やっていたことを考えると、倒れていた時間はどんなに考えても10分もない。その間にあれ程雲が出るはずがない。

「と、とにかくここであれこれ考えても仕方ありません。動ける人は車輛整備の続きを、まだ目がチカチカする人は休んでいてください。」
みほが大きめの声で指示を出す。

「まあ、そうだな。」

「取り敢えず続きやろう。」

その場にいた者は手放していた工具を手にとって作業を開始した。しかし、角谷はそうはしなかった。

「ごめん、ちよつと用事を思い出したから戻る。」

「は、はい。」

「ありがとうございます。」

他の者達からの挨拶を気にせず生徒会室に向けて走り出した。校舎に入り、ノックもせず生徒会室に飛び込む。ふとあの学園廃校を通

告された時の感覚が心をよぎった。

「小山、大丈夫か。」

「会長！何とか大丈夫ですが、今の光は……」

「分からない。でも最低でも何かが起こった。それは間違いない。何か連絡はないのか？」

「えつと……あれ？」

小山がケータイを取り出し、直後に不思議そうな顔をする。

「どうした？」

「ケータイ、圏外になってます。」

「そんなはずはないだろう。学園艦で圏外なところなどないはずだ。ましてや学校内は連絡出来ないはずがない。」

「でも、実際圏外です。」

小山が画面を見せる。確かに画面の左上にアンテナは一本も立っていない。

「今の光で基地局でもやられたのか？」

「問い合わせも出来ないし、どうしたら……」

祈るように小山が胸の前で手を組んでいると、ピー、ピーと耳を突く電子音がする。

「この音は緊急無線？」

「私が出るよ。」

角谷は隣の倉庫の中にある無線機のイヤホンを手に取り、会話ボタンを押す。

「こちら生徒会。」

「こちら船舶科の艦長大橋です！と、とにかく急いで艦橋部に来てく
ださい！」

「な、何があつたんだい？」

向こうの慌てぶりにこちらも思わずたじろぐ。

「実物をお見せしなければ絶対通じません！早く！」

「と、取り敢えず今からそっち行くから、問題あるなら他の艦長とか教官とかに頼つといて。」

イヤホンを外し会話ボタンを切る。

「どうしたんですか。」

「……これは、ただ事じゃないね。艦橋に呼び出された。行ってくる。小山はここに残っておいてくれ。」

胸のざわつきは益々酷くなる。小山の返事を確認し、角谷は上着を一枚羽織って財布片手に生徒会室を飛び出した。

校舎の前を通りかかったタクシーを捕まえて行き先を告げる。その白髪の運転手は返事一つで車を走らせた。車窓から見える大洗学園艦の町の眺めはいつも通りだ。

だが胸に抱えた不安はそれを安心と捉えさせない。艦橋部入り口に着いたタクシーにコイン4枚をちょうど払って階段を駆け上がる。操船室の扉を開くと窓ガラスの向こうに青い海が広がっている。

「角谷会長！お待ちしておりました！」

すぐに白い船形帽を被った女子が一人近づく。

「大橋ちゃん、何があったんだい？」

「こちらに他の艦長も集まっていますので、そちらで説明します。」

大洗女子学園の船舶科は3交代制でこの巨大な船を動かしている。艦長も無論学生だ。その為3グループそれぞれに艦長が指名され、指揮をとっている。その一人大橋がせかせかと答えると角谷は操舵室の隣の部屋に連れていかれる。

「遅くなった。角谷だ。」

「第一班艦長の長坂です。」

「第三班艦長のおー、井上です。」

それぞれ自己紹介を終えると井上が大きくあくびをする。

「やめてよ井上。」

「仕方ないでしょー。8時まで勤務してて授業受けた後の昼寝中を叩き起こされたんだから。」

「とにかく、大橋ちゃん、何があったんだい？」

席に着いた角谷が身を乗り出す。

「会長、今この艦がどこにあるかご存知ですか？」

「ああ、冬休みに入る前に南の方を回るんじゃないか？今は八丈島の方じゃなかったかな？」

「そうです。我々はここからの補給船を2時半に受ける予定でした。」
「2時半って、もう30分はすぎているよ。」

角谷が腕時計を確認する。長針はしつかりゼロを指し、短針と直角を形成している。

「我々はあの光を受けるまでレーダーでその補給船を捉えています。しかし光を受けた後それが捉えられなくなり、今まだその補給船と連絡が取れていません。」

「補給船が消えたのかい？それはすぐ海上保安庁に」

「いえ、それがどうも違うようなのです。」

「ん？どういうことだ？」

長坂が大橋の顔を覗き込む。角谷の頬を汗が流れる。この状況とあのエルヴィンと小山の言葉が無関係とは思えなかった。大橋は無言で机の上に線の書かれた紙を見せる。

「これは？」

「一番近くて西に10海里ほど離れた海岸線をレーダーで計測してみたものです。」

「海岸……線……」

角谷はそこに見えた曲線に見覚えがあった。

「これは……」

「信じられませんが、これが大洗から日立までの海岸線とほぼ一致しました。少なくとも元々いた八丈島付近の海岸線とは一致しません。」

「……ど、どういうこと……」

井上が驚きではつきりと目を覚ましたようだ。

「補給船が消えたのではなく、我々が姿を消した。そうとしか思えません。」

「大洗港と連絡は？」

「それが、規定の周波数では全く繋がらないのです。周波数変えるときは通達が来るはずなのですが……それと自動操縦が使えなくなつたので一応今この艦は手動で沿岸に向け運行させています。」

「……」

4人が無言で腕を組んでいると、船舶科の生徒の一人が部屋に飛び込んできた。

「艦長！」

「どうした。」

「これ以上沿岸には近づけません！」

「は？何を言っているんだお前。」

「ソナーの調査でここから先どこも水深250メートルないことが判明しました！南進する他ありません！」

「そんな馬鹿な！ソナーの結果見せてみろ！」

大橋は椅子を倒して立ち上がると、すぐに隣に向かった。

「……何なんでしょう、全く。」

部屋に残された3人のうちの一人、長坂が顔を伏せる。

「八丈島からいきなり大洗沖に吹っ飛ばされ、かつ連絡がどこも取れないって……」

「大橋ちゃんの答えがイエスなら、見当はつくけどね。」

「会長、この後の航路どうしましょう。」

井上は不安げな顔を崩さない。

「エネルギーを一番消費しない速度で運行してくれるかい？補給船がこないから次いつ補給できるか分からないし。他は任せるよ。」

「分かりました。」

大橋がゆっくり部屋に戻ってきた。

「……マジだ。」

「……そう。だったら答えは一つしかないね。」

角谷は椅子の背もたれに勢いよく身を預ける。

「この世界は『我々がいた』世界ではない。そりゃケータイも圏外になるよ。」

「……別世界か何かということですか？」

「分からない。でも日本があることを考えるとそうそう変な世界ではないと思う。」

「でもそんなこと有り得るんですか？現実的に。」

「でもこの現実を他にどうやって説明する？」

「それは……」

分かってている。私がどれほど馬鹿らしいことを話しているか。しかしそれ以外の説明が思い浮かばない。

「仮にそうだとして、我々は何をすれば良いんですか。」

「取り敢えず援助を求め、生産体制を強化するよ。この大洗学園艦に住む3万人の命を守るのが最優先だからね。あとこの話はまだ確定したわけではないから他言無用で。」

「分かりました。それでは業務に戻ります。」

角谷を除く3人は船形帽を被り直して部屋からぞろぞろと出て行った。角谷も席を立ってドアの方に向かい、開いていたドアから廊下に出た。そして階段を降りようとしたその時、

「繋がった！」

その声が操舵室から上がり、角谷も操舵室に急いで戻った。

「何がいい！」

「あ、いえ、地上のラジオの回線を受信できたようで。」

「つけてみて。」

「はい。」

無線士がヘッドホンを取り、スピーカーに繋ぐ。

「ガガ……ピー……昨日、広田外務大臣が蒋中国大使と会談せり。4日に閣議にて決定された内容を提議する模様。……今月3日にエチオピアに侵攻を開始したイタリアに対し、国際連盟がイタリアを侵略者として制裁を準備する採択を可決す。……」

ニュースと思われる内容がスピーカーから流れてくる。

「日本語だね。」

「やっぱり向こうは日本なんだ。」

船舶科の学生達から安堵の声が漏れる。しかし、角谷はそうではなかった。

「1935年10月……」

「へっ?」

いきなり喋った角谷に対し隣にいた長坂が気の抜けたような声を上げる。

「……これが、我々のいた世界の過去なら、エチオピア侵攻は1935年10月に起こったはず。」

「会長？」

「我々は、過去に飛ばされたのか？」

「……と、とにかく会長、どういうことでしょうか？隣で教えてください。」

顎に指をかけながら瞑想に耽る角谷の肩を大橋が叩き、小声で現実
に引き戻す。

「ん、ああ。分かった。」

角谷は大橋に手を引かれ隣の部屋に連れ込まれる。扉を音を立てて閉められるとその扉に寄りかかる。

「過去、とは？」

「この世界は多分1935年の10月だ。さっきのニュースで我々の世界でその頃にあったエチオピア侵攻のニュースが流れていたからね。それがあるということは、我々のいた世界とこの世界では大きな差はないと思う。」

「な、なるほど……」

「でも向こうが日本と分かったなら話が早い。何か連絡が取れたら食料とかが得られないか交渉してみて。その辺は任せるよ。」

「……分かりました。他の二人にもそのように伝えておきます。」

「この話もできるだけ他言無用で。あと今後ラジオは受信させないようにならせて。」

「情報統制ですね。分かりました。お任せください。」

大橋は敬礼を返す。

「何かあったらまた緊急無線で頼んだよ。」

「はい。」

「それじゃあ私は戻るよ。」

角谷は大橋に手を振り、階段を降りた。そして艦橋部から適当にタクシーを拾って学校に戻ることにした。来た緑のタクシーに手を挙げて止めてもらい、開いたドアから頭を下げて乗り込む。

「学園前までお願いします。」

「了解。」

扉が閉まると、車は走り出す。角谷は焦りを落ち着かせようと外を眺めるが、一向に収まる気配がない。

「お客さん、そう言えばさっきの光あつたでしょう。」

信号待ちの時に中年くらいの運転手が角谷に声をかけた。

「あれに関して前のお客さんから変な噂を聞いたんだよ。」

「何です?」

少し気になり、食いついてみた。

「あの後いきなりケータイが圏外になってテレビが映らなくなったのはなんやらタイムワープしたせいとかなんとか……」

「……」

「まあ、そんなSFじみたことある訳ないですよね。またどつかの妄想野郎の流した話ですよね?」

「あはは……そうですね……」

私は、妄想野郎なの……か。角谷は苦笑するしかなかった。

車は校門の前に止まり、今度は1000円を払ってお釣りを受け取ると、ゆっくり校舎内を歩き、途中の自販機でさっきの小銭でお茶を一本買い、それを片手に生徒会室にノックをして入った。

「あ、会長。」

「小山、何かあったか?」

「圏外であることの苦情電話が来た以外はありません。」

「そうか。」

角谷は自分の椅子に音を立てて座る。そして机の上にあつた干し芋の袋を手に取り、1枚丸々口に押し込む。隣では優勝旗が力なく垂れている。まだこの予想が正しいかは分からない。あまり話はしたくない。ペットボトルを口の前で傾け干し芋に吸われた水分を回復させる。

「会長。」

「なんだい?」

「何を……言われたんですか。」

小山が俯き気味に膝の上に拳を乗せ震わせている。

「……補給船がしばらく来れないそうだ。」

「！」

「つまり、どこかから補給を受けられなければみんな飢え死にする。」

「……やっぱりですか。」

「ああ、これはまずいな……」

「いえ……本当にここは現代ではないんだな……と。」

「！気づいていたか。」

「まだ予想に過ぎませんが。」

「大丈夫だ。私も同じ予想を持っている。ついでに言えばもう少し進

んだ予想もあるが、聞いてくれるか？」

「……はい。」

角谷は小山に洗いざらい話した。海岸線のこと、補給船、水深、そしてラジオで聞いたこと。それを聞きながら、小山は何度か頷いたが何も言わなかった。

「最低でも言えるのは、我々が現代にいないことと海の向こうは日本ということだ。とにかく、私たちは安定した補給を受けられるまで今の食料、燃料、日用品で耐えなくてはならないということだ。」

「仮に1935年だとしたら……まだこんな大きな学園艦は造られてませんよね。」

「そう。だからそんな場所を見つけるのは至難の技だろう。しかも、この情報は学園艦の住民にはできるだけ伏せておきたい。」

「どうにもならない情報を与えて不安を煽つたらいいけませんし。」

「ということと今回は補給船が来れなくなった、という情報だけ流して生産体制と検約体制を整えて耐えたいと思う。そして安定した供給を何処からか受け取れるようにする。」

「賛成です。それだけで十分でしょう。」

「それじゃあ小山は学園艦内への放送準備を放送委員にやらせといて。私は船舶科にこの事を伝えとくよ。」

「分かりました。」

二人は立ち上がり、それぞれの仕事を始めた。

広西大洗奮闘記2 華の香り

少し前 学園周辺

「何だったんだらうね。」

あんこうチームの5人は帰り道に干し芋アイスの店に入り、それぞれのアイスを頼んでいた。その中で沙織が切り出す。

「あの光でありますか？」

「でも、雲が増えた以外は何も変わらなかったんだらう？」

「変わりました。」

華だけはアイスが他の者より3ランク大きい。

「華さん、どうしたの？」

「あの光の前と後で空気の匂いが少し変わったのです。」

「空気の匂い……でありますか？」

周りの者はその言葉を脳に吸収できない。

「前は余り煙の匂いがなかったのですが、光の後はそれがいつも通りに戻ったんです。」

「煙の匂い……か。」

麻子が顎に指を当てる。

「今この学園艦どこ航行しているんだっけ？」

「えっと、確か伊豆諸島の近くであります。」

「そうとは思えないのですが……」

ぴんぽんぱーん

生徒会より緊急告知、緊急告知。えー、本日から諸事情により補給船が来れなくなるとの通告がありました。その為、再び補給船が来れるようになるまで皆さんには儉約体制を取っていただきたいと思えます。急で申し訳ありませんが、何卒ご協力お願いします。繰り返します。……

不意にアナウンスが学園艦中に広がった。店の中にいた彼女達にもそれは届く。

「儉約体制……でありますか？」

「補給船が止まったのか……」

「それって、大変なことなんじゃ……」

「だよ。これからどうなるの？」

一気に皆が不安げな表情になる。優花里が生徒手帳をパラパラとめくる。

「えっと……非常時に関しては、と……ありました。」

「どんなの？」

沙織が身を乗り出して手帳を覗き込む。

「儉約体制は、補給船の運行が停止したり備蓄量が規定を下回った時に発令されるものでありまして、生徒会が臨時にエネルギー、食料などを一括して管理する権限を与えられます。ただこれは備蓄が回復したり、補給船のアテがついたら直ぐに解除されるであります。」

長つたらしい文言を優花里が要約する。

「生徒会ってそんな権限まで持ってたんだね。」

「どうせ補給船が来ないのなんて2・3日なんだから心配することもないだろう。この船には3万人が1カ月生きられるだけの備蓄食料があるらしいからな。」

麻子が楽観的にスプーンを口に運ぶ。

「結構マシなんだね。」

みほが呟いたそれに皆がさっと視線を向ける。

「あ、いや、黒森峰の時に1回台風の影響で補給船が来れなくなった時があつて、その時は大変だったから……」

「何があつたのですか？」

「補給船が止まった途端学園によって戒厳令が発令されて、食料は配給制、夜間行動の禁止、省エネ命令とか色々あつたから……あ、でも戦車道だけは規制は無かつたな。」

「何それこわい。」

「まあ大洗ではそこまでやらないだろう。」

「でも、どうして雨も降ってなくて風もほとんど無いのに補給船が来れなくなったのでしょうか？」

「補給船を出す港で問題が起こったんじゃない。」

「そんなところではありませんか？ケータイでネットを……あれ？」

画面を開いた優花里が手を止める。

「優花里さん、どうしたの？」

「ケータイが圏外であります。」

「えっ、本当？」

沙織やみほもケータイを開くが、同じく圏外だ。

「どっか設定弄ったかなー。」

「3人一緒なんだ。沙織だけが何かをやったわけではないと思うぞ。」

「同時にケータイの基地局もダメになったのでしょうか？」

「……そうとしか考えられないでありますな。」

珍しく話題が尽きかけている上、5人ともそれぞれのアイスを完食している。なのでテーブルの上で会計をまとめ、店を出て各々の家の方へと帰っていった。

生徒会室

「それじゃ、頼んだよ。」

「分かりました。風紀委員の意地にかけてこの学園艦の風紀を守ります。」

おかつぱの二人が角谷の方を向き一礼する。角谷はお茶片手に干し芋をちびちびつまむ。2人が生徒会室から去ると、小山が倉庫から書類を持ち出す。

「学園を残すために協力してくださいだった皆さんを取り締まるの少し気が引けますが……」

「こうでもしないと規制に反発する人が暴動とか起こしかねない。それは補給停止が長期化すればするほど激しくなるだろうからね。それで小山、それはなんだ？」

「これですか？以前一度儉約体制を取った時の資料が見つかりました。」

クリアファイル一個分の資料の束が角谷の前に置かれる。

「どれどれ……前出されたのは40年前か……石油ショックの時だね。」

「この時は補給できる港から離れていたので、近づくまで4日間儉約

体制を取ったようです。」

二人はファイルを頭から開き、さつと覗く。

「ふむふむ。石油の配給制をやったのか。」

「会長の予想が正しいなら、我々が真つ先に取り組まなくてはならないのは食料ですね。」

「配給制とるかー?」

「我々の備蓄食料は1月分です。まずはそれらをいくら持たせるか考えましょう。」

「あとは農業科、水産科に増産を指示しよう。」

「でも、それは直ぐにできることはありません。今学園艦上の店にある保存食をこちらで購入し、備蓄を増やすのはどうでしょう?」

「予算は?」

小山は少し言い淀む。

「……戦車道を停止します。」

「!」

「戦車道の車輛修理費や部品代を節約します。それに水の補給が止まったため海水淡水化装置を稼働させざるを得ません。そのためエネルギーが不足することが予想されます。」

戦車道で消費される石油をこちらに回すことが一番効果が早く、今後を見据えても必要な処置だと思えます。」

「……駄目だ。」

「何故です! 戦車道の寄付金の残りを戦車道ではなく食料、エネルギー関係に回した方が」

「戦車道の停止はしない。」

腕を組んで背筋を伸ばし、視線は真つ直ぐ正面を向いている。

「……理由を聞きましょう。」

「まず、戦車道は今や学園艦の象徴となりつつある。それを止めたら学園の求心力も下がるだろう。それが治安悪化に繋がりがねない。」

「しかし、求心力と人々の生活、どちらが大事か言うまでもないでしょう。」

「それだけではない。先ほど言った通りここが1935年だとした

ら、これがどういう時か分かるか？」

「日中戦争前、第二次世界大戦前、でしょうか？」

「戦前戦車道の最盛期さ。来年にはベルリンでの世界大会も控えているはず。」

「会長……まさか、貴女は……西住さんを三たび負けられない戦いに巻き込むつもりですか！」

柄にもなく小山が角谷の机に拳を叩きつける。

「交換条件もなく物資をくれる国はないだろうね。物資も産業もない我々に出せる交換条件は2つ。未来の知識を教えるか、優秀な戦車道チームを協力させるか。」

私はこの時代が私達のいた時代に影響を及ぼさないように後者を取るべきだと思う。戦車道チームの力は存続させておきたいのさ。」

「ですが、ただでさえ戦車道に向け儉約に儉約を繰り返していた学園財政に余裕はありません！このままでは現在の1月分の備蓄食料のみで航海を続けなくてはいけませんよ！」

「生徒会権限を使つていい。何とかして予算を作れないか。」

「下手に生徒会権限を使うと不満が溜まります。それが暴動に繋がったら治安悪化も何ありません！」

「戦車道は止めん！」

「いいえ！戦車道は止めて少しでも長く航海を続けられるように備えるべきです！日本から援助もらえる保証もありませんし！」

前から仲の良い2人に今までで一番激しい言い争いが起こった。互いに睨み合い、角谷は地位を、小山は身長差を味方に相手を抑えようとするが、2人がそんなに甘い訳がない。お互いに話すこともない。無言の時間だけがその場を過ぎていた。

コンコン

その緊張を解いたのは扉からするノックの音だった。視線は互いに外れたが、暫く無言は続いた。

「……どなたですか？」

小山がやつと口を開く。

「あ、すみません。河嶋です。」

「……おお、カーしまか。入れ。」

「失礼します。」

扉が内向きに開き、いつも通り片眼鏡をかけた河嶋が入った。

「で、カーしま。何の用だ？」

「いえ、今回発令された節約体制の状況を確認したくて……」

「補給船が来れなくなったのよ。」

「それがどうして来れなくなったのでしょうか？」

「補給予定の港が使えないらしくてさー……」

「なるほど、ありがとうございます。」

「それだけか？カーしま。」

会長は干し芋をまたちびちびつまみ始める。

「あと、町の状況を……」

「どうした？」

「町のコンビニやスーパーでは節約体制を受けて食料を手に入れておこうと、買占めが多発しています。おそらく事業者からの反発は必至かと……」

「まあ、予想通りだな。」

「どう対処しましょう？」

「対処しなくていい。」

「へっ？」

2人はその反応に「戦車道やろっか」よりはちよつとマシなくらいの衝撃を受ける。

「対処する余裕もないし、1月分の食料を多分2月弱かけて配るから、みんなが食料持つてくれている方がいい。店に食料無くなれば騒ぎも収まるしね。」

「な、なるほど……」

「じゃあカーしま、農業科と水産科にフル生産してと伝えて。空き地の自由利用を認めると付けて。それが終わったらお前は勉強してこい。」

「はっ。」

一礼して河嶋は直ぐに部屋から去った。二人はその背中を見送っ

た後も扉をじつと眺める。

「やっぱり桃ちゃんには言わないんですね。」

「……まあ、言う必要もないだろう。結果は目に見えているしね。」

その状況を想像して二人は少し頬を緩ませる。

「それで、戦車道の件ですが、練習回数と予算の削減で手を打ちませんか？」

「……どのくらい？」

「予算1／3、放課後練停止、授業中練を週2から週1でどうでしょうか？」

「……予算半減にできない？」

「……それ以外が大丈夫ならば。」

「……分かった。そうしよう。」

「では浮いた分の予算と石油は海水淡水化装置の稼働と農業科、水産科の支援に回します。買う保存食が無くなりそうですから。」

「それでいいんじゃない？」

今までで一番激しい言い争いは双方の合意のもと決着がついた。

「あとは……今後を考えますと、私達だけで運営するには限界があると思うんです。」

「生徒会のみんなも協力してくれるだろう。」

角谷は力が抜けたのか手を頭の後ろに組んで背を反らし伸びをする。

「ですが、この現実を伝えて受け入れ、それに対して建設的な意見を述べてくれる人はいますかね……無論生徒会の皆を信頼しない訳ではないのですが。」

「小山が言いたいのは口が硬く、冷静で、学園の為に頑張ってくれて、かつ仕事のできる人が欲しいんでしょ？」

「残念ながら下の生徒会のみんなの中にそれを全て満たせる人は……」

「いるじゃん。」

「！」

「生徒会じゃないけど何時でも冷静で、義理堅く、守りたいものの為な

ら全力で、真面目に何でもしてくれそうな人。」

角谷は少し首の角度を上げ、見上げるように語る。

「……！」

小山もようやくわかったようで、一つ手を叩き頷く。

「五十鈴さん！」

「一時期仕事も手伝ってくれたし私は彼女なら妥当だと思うけどね。」

「でも彼女の場合、西住さん達に話が回る可能性も……」

「五十鈴ちゃんは理由さえしつかり説明すれば、ちゃんとやらないでくれるさ。かーしまみたいなことにはならないよ。」

「……そうですね。」

「生徒会のみんなにはこの先事務処理が増えるだろうから、分担するように言つとこう。小山、明日の放課後五十鈴ちゃん呼んどいて。」
「分かりました。」

次の日 普通一科二年A組教室

「……で、本当なの？」

沙織が華を軽く問い詰めているように見える。

「放課後生徒会の人に呼び出されたって。絶対ろくなことじゃないよ！第一なんで華なのよ！」

「まあ、呼び出されはしましたが、そんな深刻な感じはしませんでしたけれど……」

「生徒会の皆さんは理由もなく厳しくする人達じゃないと思うよ。」

二人の斜め前にいたみほも会話に加わる。

「恐らく生徒会の仕事を手伝って欲しい、というくらいではないでしょうか？私一度手伝ったことがありますし。」

「だ、だって沙織さん。もう廃校の可能性はないんだよ。そんな深刻なことは無いと思うよ。」

「うう……分かったよ。でも華、何か変なことがあったら必ず言つてね！」

人差し指を立てながら沙織が華に迫る。

「華さんなら大丈夫だよ。」

「沙織さん、本当にお母さんみたいですね……」

「や、やだー。華、褒めても何も出ないからね！」

(褒めてる……のかなあ……)

少し顔を赤らめる沙織を眺め、みほは苦笑するしかなかった。

放課後、華は一人で生徒会室に向かった。生徒会室の前に立つと、急に不安が心を覆った。あの時、みほを援護した時、角谷会長からの脅しに毅然と抵抗したが、心の中に不安が無かったと言えば嘘になる。

それが心をよぎったのもあるが、更に不安を覚えたのは華が薄々だが「この今いる世界が我々のいた世界とは異なる」と感じていたことにある。皆には不安を余り煽らないように言ったが、本人はあの光のあと空気そのものが大きく変わっていることに気づいていたのだ。一つ大きく深呼吸をするとノックを3度した。

「五十鈴華です。」

「どうぞ。」

小山の返事を聞き、部屋に足を踏み入れる。

「失礼します。」

ドアノブを持ち替えて扉を閉め、ゆっくり角谷の方に近づき、慎ましく礼をした。

「よく来たね。」

角谷はいつも通り干し芋を齧っているが、一口一口が何時もより小さい。

「その前に、ドアの向こうを確認してくれるかい？」

「……それほど大事なことなのでしょうか？」

「他の人には聞かれたく無い。」

「分かりました。」

華は扉の前に戻り、一度外を見るが、人影はない。それを確認すると華は再び角谷の前に立った。

「それで、ご用事とは？」

「単刀直入に言おう。生徒会の仕事を手伝って欲しい。」

「何故でしょう？戦車道大会の終わった今、生徒会の方々の手が足り

ないことは無いと思いますが。」

「今回の儉約体制の為には必要なんだよね。学園の物流とかまで統率しなくてはならないから。」

「それで、何故私なのですか？それにそれが人には聞かれたく無いこととは思えないのですが。」

「君は、学園艦の存続の為に、どんなことでも手伝ってくれるかい？」
角谷は正面から華の顔をじつと見つめる。その雰囲気思わず華もたじろぐ。

「……勿論です。私にできることなら。……ということとは、学園艦は今どんなことでもしなくてはならない状況なのですか？」

「……そう。この学園艦は廃校と同レベルの危機に直面している。」

「馬鹿馬鹿しいことと承知で申し上げますが、それは我々が現在『インターネットの存在しない世界』にいることを意味しているのですか？」

華はこうは言ったものの、それに角谷が頷いて欲しい訳ではなかった。むしろ首を横に振って欲しかった。しかしその希望は角谷が首肯したことで打ち砕かれた。

「……余程の人でなければその結論には至らないと思うけど。」

「空気が変わったのです。」

「空気？」

「あの光の後、それまでののんびりした空気から黒森峰との試合の前や大学選抜との試合の時などの緊張した空気に変ったのです。それがかつ考えられないほど急速に雲が増え、ケータイは繋がらない。」

それで私が至った結論は、世界そのものが変わってしまったというものでした。」

「空気か……これは一本取られた。とにかく、そういうことだ。そして、今回聞かれたく無かったのもこの事だ。これがこちらの予期しない範囲で漏れたら混乱しか生まない。」

私達はそれよりもこの世界についてももう少し詳しい情報を持っている。聞かない？ただしこの事は他言無用。まだ確定してないからね。」

「お願いします。」

角谷と小山は船舶科からの情報を可能な限り伝え、それに基づく予想と今後の方針を説明した。華は戦車道予算の半減の部分以外は顔色ひとつ変えずに黙って聞いていた。

「……戦車道の件は仕方がないのでですか？」

話が終わって少ししてから、華が口を開けた。

「削らざるを得ません。戦車道は何かと金がかかりますから。」

「……分かりました。この学園艦の為に、私も協力します。」

「ありがとう。もう一度言っとくけど今回の内容は他言無用で。」

「生徒会の仕事に加わる、くらいは言っても大丈夫でしょうか？」

「んー、まあそれくらいならいいかなあ。んじや早速、さつき農業科と水産科からフル生産までに掛かる時間が伝えられたから、それより前の配給計画を立てるよ。」

「はい。」

二人の少し大きめの返事から、仕事が回り出した。

仕事の合間に、男は窓の外を眺めていた。ただ呆然と、あの出来事を少しでも忘れるために。

「……くそっ！」

しかし、忘れる事なんて出来るはずもなく、やり場のない怒りを肘掛けにぶつけると、再びペンを取って走らせ始めた。

この男の名は辻廉太。文部科学省学園艦教育局局長である。ガルパンの中では数少ない男キャラの一人として役立って？いる。大洗女子学園を廃校にしようとした張本人だ。

しかし角谷杏を筆頭とした大洗女子学園の戦車道を使った抵抗の挙句、学園艦を存続させる事が決定してしまった。戦車道連盟理事長の印の入っている証明書まである。存続させるしかない。

しかしもともと廃校予定だった学園艦を存続させるとなると莫大な費用が必要となる。あの巨体を動かす燃料費、物資輸送船の手配、学園艦解体手続きの全面キャンセルによるキャンセル費など諸々ある。そんな金は財政赤字の続くこの国から出てくるはずもない。

おまけにその失態のせいで左遷されるのではないかという噂まで

たっている。

「あの……大洗の奴らが宇宙にでも吹っ飛んでくれれば……」

本当にそんな事を思いたくなる。がそんな夢物語をあれこれ弄る暇もない。辻は書類を整理し、金を作ろうと模索する。その時、不意に前の扉が三度ノックされる。

「辻くん、ちよつといいかね。」

「あ……高谷さん……」

部屋にはスーツを着た初老の紳士が入ってきた。辻は席を立ち一礼する。この高谷は入江の直属の上司だ。

「忙しそうですね。」

「まあ……自業自得つてもものでしょうけど。」

「でも君ほどの人間だ。策は打っていたのだろうか?」

「ええ……それらは全てひっくり返されてしまいましたけど……それで、ご用事は何でしょう。左遷ですか?それとも退職金でもくださるのですか?」

「せつかちな君も。そんな悪い話じゃない。むしろ君にとっては最高の話だろう。」

「大洗にかかる費用が全部チャラになる話とかならないんですが。」

「その為の『バミューダ』だろうか?」

目の辺りに影を作りながら高谷が口角を上げる。紳士の面影はない。

「! 貴方にその話が来たという事は!」

「そう、私は『バミューダ』の完成を君に伝えに来たのさ。」

「そうですが……それさえ、それさえあれば!」

「大洗に金はかからんぞ。汚名なぞ晴らしてやるといい。」

二人は天井を見上げどこまでも響き渡るほどの大声で笑いあった。

広西大洗奮闘記3 他所の決断

その日のうちに学園艦内5ヶ所にて備蓄食料の配給の開始を発表。次の日までには各家庭に配給時に必要な番号が通達された。

「……疲れましたね……」

生徒会室で小山が目の下にクマを作りながら椅子に深く座り込む。

「だね……流石に3万人分の暗証番号を1日で作るのはキツかったか……」

「それに配給場所に番号チェック用の名簿を作って自転車で届けたりしましたし……」

3人はそれぞれの椅子の背もたれにもたれる。

「幸いだったのはインターネットが使えなくてもWordとかExcelは使えたことですね。手書きでやるとなったらどれほどキツイか……」

「うわあ……そりややだね。まあ、生徒会で良かったね。学園…宿泊証と短期休学届けを直ぐその場で発行できたし……」

「他の生徒会の皆さんにも苦勞をかけましたから、今日くらいは配給担当以外お休みをとってもいいのではないですか?」

「うん……そうしてあげて……」

その言葉を最後に3人の会話は止まった。華が生徒会の皆に休みを与えて生徒会室に戻ると、2人はすでに寢息を立て、華も椅子に倒れこむように座り、いつの間にか氣を失っていた。

唐突に鳴った電子音によってふと目を覚ました角谷は1回天井に向け腕を伸ばし、隣の部屋に歩いて行った。

「ふあい?生徒会です。」

「あ、どうも、船舶科の長坂です。」

「ああ、今の時間長坂ちゃんの間か。ふああ。」

「あ、はい。……大丈夫ですか?」

「まあ。それで、何のご用事?」

「あれ?会長はご存知ないのですか?」

「何をだい?」

「近くに学園艦が居るんですよ。」

「……」

無線機の前で、角谷は口を半分開きながら立ち尽くしていた。

「はあ？？」

「ここが過去だ、という予想がバケツからひっくり返される感覚とともに角谷の眠気は吹っ飛んだ。」

「ど、どういうことだい？」

「いや、居るっただけです。規模は我々の学園艦より大きいです。」

「……通信とれる？」

「今やってます。」

「じゃ、取れたら連絡しようだい。」

「分かりました。もう直ぐとれるはずですよ。」

角谷は無線機のボタンを押して会話を終わらせた。部屋に戻り再び椅子に腰掛け、2人を起こさないように瞑想にふける。

（もしこの世界に学園艦が居るとしたら、それは『我々の世界から来たもの』か、『この世界が我々の世界の過去ではない』かのどちらからだ。

後者だとしたら我々にも今後の予測がつかない。つまり、交渉の材料が1つ減る、という事だ。前者ならこう言って……）

前者、後者それぞれの場合の指示を頭を掻きながら纏めると、瞑想を一回止め、お茶を持ってきた後、干し芋をつまむ。

時折歯に付く切れ端を舌で取ろうとするが、今日は何故か下唇の裏に入ったのがなかなか取れずに不快感が生じる。それをやっこさ取り、干し芋1枚食べ終わったころ再びあの電子音が聞こえてきた。

「会長、学園艦が何か分かりました。」

「ああ、長坂ちゃんか。で、何だったんだい？」

「……聞いて驚かないでくださいよ。あれ、知波単学園艦です。」

「知波単？んで、それは……」

「ご安心ください。我々の事もご存知でしたから、我々と同じ世界から来たもので間違いありません。」

「……今、何処だっけ？」

「えつと……館山沖ですから、東京湾口の辺りです。東京湾の水深が

浅いため、これ以上入れないみたいです。」

「長坂ちゃん！日本から物資が受け取れているか知波単に確認して、イエスなら知波単の口添えでウチらも物資貰えないか交渉してみて。」

その言葉を聞き、角谷は直ぐに纏めていた指示を出した。

「私ですか？そんな事無理ですよ！第一私は学園艦の艦長の1人に過ぎないんですよー！」

「私も今からそっち向かうから予備交渉して、着いたら手ごたえを教えてください！」

「えー……まあ、あまり期待しないでくださいよ。」

「とにかく頼んだ！」

返事も聞かずイヤホンを投げ捨て、手早く準備を整える。

「あ……会長、おはようございます。」

その音でか、小山があくびしつつ背筋を伸ばす。

「小山、ちよつと出掛けるから何かあったらよろしく。」

「あ、はい。分かりました。艦橋ですか？」

「そう。もしかしたら補給が貰えるかもしれない。」

財布をポケットに突っ込み、部屋から出ようとする。

「んん、これだけですかあ……まだまだたべられますよ……」

椅子の上で眠る華の寝言が角谷の動きを一瞬止める。

「……五十鈴ちゃんは好きだけ寝かしてあげて。あ、ちゃんと配給担当の時間は守った上で。」

「会長もお気をつけて。」

小山は柔らかく包むような微笑みを華にかけたあと、時計でそろそろ配給の準備を始める時間だと確認し、指示関連の書類の整理を始めた。

校門の前の車通りは確実に減っている。なにせ燃料もこちらで管理しており、海水淡水化装置の稼働のため供給量をこれまでの3割程度まで減らしているのだ。ガソリンの値段も無論跳ね上がる。そんな中で不要不急の行動をする人はいないだろう。

しばらく待って、1台のタクシーを拾った角谷は行き先を告げて乗

り込み、運転手は無言で車を走らせ始めた。

到着すると角谷は手の中に用意していたコイン4枚をトレーに置くが、運転手はそれを取ろうとしない。疑問に思っただけを見るとメーターが20円上増しされていた。

「ああ、検約体制のせいでガソリンが値上がりしましてね。検約体制の間だけの特別処置ですからご協力ください。」

角谷は小銭をもう2枚トレーに置くと、運転手はやつとドアを開け、角谷を降ろした。

階段を駆け上がり、操舵室に飛び込む。

「長坂ちゃんは何処だい！」

「会長！長坂さんは部屋を出て左に3つ目の部屋にいます。」

船舶科の者から軽く礼を言っただけで、再び駆け出す。言われた部屋の前に着いた角谷は深く深呼吸した後、軽くノックし扉を開いた。

「長坂ちゃん、いる？」

「会長、どうも。」

返事した長坂はヘッドホンを外した。

「それで、首尾は？」

「知波単は取り敢えず交渉で日本から援助をもらっているようですが、こちらが物資を貰えるように、との交渉はとにかく話のわかる人物を呼んでほしいの一点張りで……」

「相手は？」

「学園長の西条、という方です。」

「変わってくれ。」

長坂から手渡されたヘッドホンを頭に付け、無線を繋いでもらう。

「こちら大洗女子学園、大洗女子学園。どうぞ。」

『こちら知波単学園です。』

「私は大洗女子学園生徒会長の角谷と言います。学園長にお繋ぎ願えますか？」

『……分かりました。』

相手が変わるまでに少し時間がかかったので、その間に言うことを纏める。

『知波単学園長の西条といます。角谷さん、よろしくお願いします。』

「こちらこそ。さて、日本から情報が入っていると思いますので、少し質問してもいいでしょうか？」

『何についてでしょう。』

「この世界、についてです。私はこの世界が我々のいた時代の過去だと思っています。」

『当たり前ですね。こちらが確かめたところこの世界の今日は1935年10月10日です。』

「日付けだけ同じですか。」

『そうですね。上陸交渉時の日本の様子やここ数日で手に入った国際情報から鑑みてもそう見るのが妥当でしょう。』

「ありがとうございます。それで、我々の希望と致しましては、水と食料の安定供給、あと洋上停泊の許可さえ頂ければこちらは如何なる条件でも飲みましょう。既に日本との関係を構築なさっている貴校にはその仲介をとって頂ければ幸いなのですが…」

『……非常に申し上げにくいですが、恐らく貴校が日本から長期的な援助を受けられるようにするのは無理だ。』

「！」

『日本は我々の援助だけで恐らく精一杯だ。何せ今の日本政府の注目は東北地方の震災、凶作による農業不況に向けられている。今回の我々も東北に現保有物資の3分の2を無償譲渡する。』

失礼を承知で言うが、貴校にその同量を求めるとなれば学園艦がスツカラカンになってしまいうだろう。』

『それでも構いません。学園艦に安定がもたらされるのであれば。』

『しかも、それだけでも無理だ。我々はそれに加え現在保有している八九式中戦車、九五式軽戦車の全てを譲渡し、更に九七式中戦車開発に向けて旧型を1輜譲渡し、戦車道隊員を全てその搭乗員として帝国陸軍に入らせている。それだけのことが貴校に出来るか?』

「……貴方は戦車道の少女達を中国の大地に、ノモンハンに送り込むおつもりですか?」

『それだけではない。研究者としてかなりの数の教員が引き抜かれた。さらに日本政府が学園の運営にも関わってくる。自治権も大幅に縮小された。』

……貴校がこれと同等の要求を飲めるといふならば交渉してもいいが、我が校としては貴校に日本にいて欲しくはない。』

「……検討はしてみますが、日本にいて欲しくない理由は？一応お伺いしましょう。」

『……この世界が過去ならば、我々の未来は分かっているだろう。この世界にいつまでいるのかは知らないが、もし10年以上いるならば、その頃に知波単学園艦が海の藻屑と化していても可笑しくはない。』

我々は生憎食糧の備蓄が殆ど無くて日本以外に行けず、この要求をのむ他なかったが、貴校には出来るだけ大東亜共栄圏の外に出てもらいたい。それが貴校にとって一番良い選択だろう。』

「なるほど……では早急に話を纏めてご連絡致します。」

『分かりました。大洗が助かることをこちらでも願っております。』

長坂の方を向いた角谷は右手で左の掌をチョップし、無線を切ってもらおう。長坂がスイッチを切って無線を止めると、角谷は席を立ちながらヘッドホンを外し、それを両手で握りしめた後それを何かを抑えるようにそつと台の上に戻した。

「会長……？」

「……畜生……」

「えっ？」

「何でもない。急いで小山達と話し合ってくる。今後交渉の要請があってもまだ話が纏まっていないと断っておいて。」

「……はい。」

「あつそうだ。ウランの稼働状況確認して、あとどれくらい移動出来るのか教えてくれる？」

「了解です。」

角谷はさつと上着を羽織って、学園に戻る為に早足で艦橋部から下っていった。

その日の昼

「えっー！」

「練習時間の削減ですか！」

午後の戦車道の授業のためいつもの倉庫の前に集まった皆の前には小山と華がいた。その2人から通告された言葉に皆困惑を隠せない。

「……申し訳ないけど、本当に補給船のあてが無くてかなり厳しい状況なの。儉約体制の間だけ、練習時間を週1の授業だけ、放課後の自主練は禁止。予算を半分に削減させてください。」

「半分って……現在でもかなり整備とかカツカツでやっているのにさらに削るんですか！」

頭を下げた小山に対しツチヤが訴えかける。

「実際皆さんの生活用の電気と水道を維持するので石油などは精一杯なんです。そこから何とか週1で訓練を行える石油を回したんです。ご理解を……」

華も隣で頭を下げる。

「とにかく、儉約体制の間だけです！水産科とか農業科はフル生産体制に向け授業時間や休憩時間を削ってまで作業をしてきています！です！お願いします！」

「あの……どうしてそんなに補給船が来れないんですか？」

手を挙げたのは澤だ。

「南の島の方で唯一の港の機能が停止しているんです。その復旧の目処が立ってないので……とにかく、すみませんがお願いします！」

二人が再び頭を下げ、周りの者も小山の説明に一応納得したようだ。

「西住さん、すみませんがその形で練習を行ってくれますか？」

「は、はい……」

「では、次の仕事があるので……」

そう言って2人は皆に背を向けて走り去った。照る太陽のもとに

残された者たちは顔を見合わせる。

「……仕方ないんだよね。」

沙織が真つ先に口を開く。

「そうだな。実際食糧は戦時ドイツの如く配給制となっているし、ガソリンも大幅に値上がりしている。その食糧とエネルギーを一括で管理しているんだから、生徒会の方々が大変でない訳がないだろう。だからこそ、生徒会の仕事の経験のある五十鈴さんを引き抜いた、といったところだろうな。」

エルヴィンがまともな考察を述べる。

「はあ……早く儉約体制解除されないかなあ。」

「ですよねえ……」

「全くだな。配給が2回のうち朝早くに1回あるせいで取りに行けない。」

「それは麻子が毎朝遅刻するだけでしょ。」

ため息をつく者も見られるが、どうにもならないことなど分かっている。

「ところで西住隊長。今日は何するんですか？」

「車輛の清掃にしましょう。整備はこの前したので、磨くくらいにしておいてください。」

「分かりました！」

その指示を受けて、戦車道履修者は雑巾とホースを取りに向かっていった。

生徒会室に戻った2人は配給しなかった残りの量を受けてどれくらい追加で配れそうか計算する。

「2日は現在の備蓄を使って追加で配れるかな？」

「ですがもらっていない方はこちらからお配りしないといけませんね。えっと……あ、このお年寄りの方まだ配給受けてません。」

「どこの方？」

「学園艦の中央の右側の方です。」

「ちよつと誰かに行ってもらわないと。その近くで他に配給受けてない人いる？」

「えつと……」

華が書類を漁っていたその時、生徒会室の扉が音を立てて大きく開かれた。そこにいたのは、角谷だ。

「あ、会長！」

「会長さん。」

気付いた2人が声をかけるが、角谷はピクリとも反応せず、真っ直ぐ自分の椅子に座る。机の上の干し芋の袋を手に取り、乱暴に開けて中から数枚取り出して一気に口に押し込む。

その様子を2人はただ黙って目で追っていた。それをお茶で流し込んだ角谷は拳で机を叩きつけた。

「会長……？」

「……日本から安定した物資供給は恐らく受けられない。」

「えっ？」

「それを受けるならば、我々は破滅しかねない。」

「会長さん。どのような条件を出されたのですか？」

「……この近くには知波単学園艦がいる。」

「知波単ですか！ここは1935年のはずじゃあ……その頃にはまだ知波単は無いはずですよ。」

「どうやらウチと同じ理由らしい。そこが日本から補給を受けているんだが、その条件が過酷なのさ。とてもウチで受け入れられるものではない。」

「な、何が……」

「物資全部没収。戦車譲渡。自治権剥奪。」

「！む、無茶な……」

「知波単は更に戦車道履修者を全員帝国陸軍に入隊させられているらしい。これらを知波単が呑んでるんだ。我々がこれ以下の条件を出して日本が呑んでくれると思うか？」

角谷の目には悲哀が見える。自分達の学園艦の経済力、乗員の6割を学生が占めている、それを嘆いているのだろうか。

「……日本は呑んではくれないでしょう。受け入れてもらうには更にこちらが学園艦を空っぽにする勢いで物資や情報を与えなくてははい

「……無理です！そんな条件を受け入れたら学園艦の経済は破綻しますし、それが住民の皆さんに知られたら生徒会の腰抜けとか言われて学園の求心力が落ちます。」

学園の緊急事態である今、求心力が失われれば学園艦は無秩序状態になります。そうになったらどうしようもありません。」

「……でも、これを飲まなければならぬ可能性もある。日本以外に行けない場合だ。」

「エンジンの稼働状況が悪い、ということですか？」

「エンジンの大規模改修とかは寄港しないと出来ないからね。」

「無ければ……」

「呑む他無いな。また西住ちゃんとか戦車道のみんなどか、学園艦の人々に本当に苦労かけるけど。」

3人はただ俯く。そうなって欲しくないと願うが、どうにも出来ない。

「……早く、帰れませんかね……元の世界に。」

「ぼやくように小山がつぶやく。」

「……我々是我々に出来ることをやろう……学園艦の存続、住民の生存が一番だ。」

そうは言ったが、我々はただ頭を悩ますことしか出来ない。

「……小山さん、作業の続きをしましょう。」

3人は沢山ある業務をこなすことで、一時的にこれを忘れる事にした。

しばらく先程までの作業の続きが行われた。名簿で配給を余り受け取れていない人をチェックしそれをリストアップすると、その人数は300人にのぼった。無論これに麻子が入っていたのは言うまでもない。

「で、これを配りに行かなくてはならないんだけど……」

「次の配給の準備がそろそろ始まってしまいますね。」

時計は3時を示している。五時から配給だから食糧の輸送などの準備を考えるとそろそろ準備をしていた方がいい。

「私、次の時間窓口担当だ……」

小山がポケットから取り出された小さく折りたたまれた紙を開く。窓口担当は配給の準備とそこまでの食糧輸送と片付けを行わなければならぬのだ。

「でしたら、私窓口担当ではありませんし、その間に配布に行きましようか?」

「お願いしても良い?」

「はい。」

「じゃあ、配給を受け取れてない人が多い地域は……ここね。」

小山が纏めてあったリストと机の上の地図を見比べ、地図上の一地域を指し示す。

「麻子さんの家の辺りですか?」

「そうね、ここら辺に10軒纏まっているからそこをお願い出来ます?」

「他の地域はいかがでしょうか?」

「他の手が空いてる人に頼むわ。」

「分かりました。では配給の始まる前に済ませてきます。余り分はどちらに?」

「えっと……確か校舎裏の倉庫に入れてあるはずよ。それだけ箱に違う色で印つけてあるから分かると思う。」

「ありがとうございます。」

住所の書かれた書類を携え、華は生徒会室を出ていった。2人はそれをじっと見送る。

「……本当にありがたいですね。頼んだことはしっかりこなしてくれそうですし、意見はしっかり言ってくれますし。」

「だね。まあ西住ちゃんにとつてのカーシみたいな感じかな。」

「確かに言えてますね。……本当に、何時になったら帰れるんでしょうね……」

ぼやくように小山はまた繰り返した。

「親に会えないのは辛い?」

「……むしろ、永遠の別れになってしまわないか、という恐怖の方が強

いです。」

「……やれる事をやる、学園艦存続はそれでなんとか出来た。しかし、今回ばかりはそうもならないかもしれない。」

「……」

角谷の頬を汗が流れる。やはり彼女も一人の人間。いつもは飄々としているが怖いものは怖いのだ。

「というより、小山、そろそろ配給の準備をやった方が良いんじゃないのか?」

「……ああ! そうでした。すみません。失礼します!」

小山も慌てて生徒会室を飛び出した。部屋には角谷だけが残される。

「……確かに、小山の言う通りなんだよなあ……」

椅子の背もたれに寄りかかって天井を眺める。天井の色と筋は変わらない。家族と会える、話せる、特に後者はケータイさえあればすぐに出来た。これらがいかに幸せか、これがいかに有限なものなのか、心に何本も突き刺さる。

「何で私たちこんな所にいるんだか……」

これが運命なのか。神が物事を決めているとしたら、神は大洗を何としても無くしたいと決断しているのだろうか。角谷は神に祈ってみた。胸の前で両手を合わせてみた。困った時の神頼みと言われるだろう。

しかしそれでもそうしなければならぬ程彼女も追い詰められていた。ところが思いの外早くこの願いは神に通じてしまったのだ。

研究室に入ると、文系の辻にとって視界が訳の分からん機械で埋め尽くされた。

「これが『バミューダ』か。」

「はい。」

辻の言葉に白衣の研究者が答える。しかしそれが茶に染まりつつあることから激務の様子が伺える。

「これで、過去や未来に行けるのか?」

「まあそうですね。正しく言えばパラレルワールドに行くんですけども。」

「どういうことだ？」

「過去や未来についた途端、その世界は現在の時の流れと分離されま
す。その為今までの歴史が変わることはありません。」

「それはありがたい。」

高谷が顎に指をかけながら頷く。

「それで、辻くん。大洗には何年行ってもらうんだい？」

「キリスト教で嫌われている数字にちなんで13年で。」

「君も結構酷いねえ。」

高谷は奥歯で笑いをかみ殺す。

「それでは、行った先の9月30日から14年後の1月1日まで、戻つてくる時間も2026年でいいですか？それの方がこいつの故障のリスクが減るので。」

「ああ、構わない。」

「それと、いつからになさいます？」

「うーん、そうだなあ……戦車道やってるし、第二次世界大戦が始まる前くらいにしたいから……。」

「1935年くらいで良いのではないか？気分だが。」

「良いですね。そうしましょう。」

「分かりました。」

「それで、君は大洗だけを行かせる気かい？」

「まさか。」

すました顔で辻は答える。

「では君、すまないがこの7校もお願いして良いか？」

用意していた紙を高谷が手渡す。研修者はその紙をじっと見て、数
度指を折ると高谷の顔を見て答えた。

「構いませんが、ちよつと仕事が増えるので送るのが10月8日にな
ってしまいますが、よろしいですか？」

「OKです。」

「では、頼んだぞ。」

そう言うと2人は研究者に手を振り去っていった。研究者は立って礼をした後背中をじつと見送っていた。2人が部屋から離れたのを確認すると、彼は再びキーボードを弾く。

(もはやこれを使うことは避けられない。これは核兵器と同じくらい使ってはならないもののな。せめて、私に出来ることはないだろうか。向こうで生活に困らない為に出来ることは……)

広西大洗奮闘記 4 ブレを呼ぶブレ

華は指定された家に食糧を配って回っていた。だが10軒に配給する分の食糧を積みながら自転車で走るのは、見た目以上に力持ちである華でなければ難しいだろう。配れば減っていくものの、初めは厳しい。

「えっと、次のお宅は…麻子さん家ですね。」

それが何とか2軒まで減らし、名簿で次に載っていたのは麻子の名だった。それは今の場所からほど近い。

「麻子さんの家って結構大きいんですね。何で寮在住ではないんでしょう?」

疑問に思ったが構わずペダルを漕ぐ。間もなく華は麻子の家の前で自転車を止めた。呼び鈴を鳴らすと、まだ制服姿の麻子が扉から出てきた。

「五十鈴さん。」

「麻子さん、今朝の配給の取りにいらっしやらなかった分の一部を渡しにきました。」

「ああ、すまない。」

「いえいえ、これが私の仕事ですから。」

麻子に食糧の入った袋を手渡すと、麻子は両手でそれを受け取った。

「麻子さんの配給は向こうの集会所で受け取れます。今後は受け取れない毎には来れなくなってしまうので取りに来てくださいね。」

「……努力する。」

「ではこれで失礼します。」

「待ってくれ。」

再び自転車にまたがり、最後の1軒を配りに行こうとした華を麻子が呼び止めた。華は動作を一旦止め、視線をそちらに向ける。

「……授業出てないが、大丈夫か?」

「……宜しければ教えて頂けますか?」

「儉約体制が終わったら来てくれ。沙織と一緒に教える。」

華は一瞬顔を曇らせたが、麻子は気づいた素振りを見せていない。「……では。」

「生徒会忙しそうだが、身体には気をつけてな。また戦車道やろう。」
「……是非。」

珍しく麻子が積極的に声を掛けるが、華の様子は変わらず、逃げるように顔を背け自転車で去っていった。

「……なんか変だな。」

麻子はその背中が角を曲がるまで見送った。彼女はその背中が消えた後、少し頭を悩ませながら家に戻っていった。

「……そういえば、夕方の配給そろそろだな。集会所だっけ？行かないきやな。」

祈りを終えた角谷の頭に、またあの電子音が響く。隣に行つて無線機をとると、先程とは異なる声が聞こえてきた。

「角谷会長、船舶科の井上です。」

「今度は井上ちゃんに変わったのか。如何したの？」

「長坂さんに頼んでいらした話が纏まったのでご報告をと。」

「……それで？」

喉が全力で鳴らされる。

「現在の減退中の稼働状況では沖縄までしか行けません。一応北ならロシア領まで行けるかどうか……」

「……そう。」

「ですが、”あれ”の使用許可さえ頂ければ距離を伸ばせます。」

「あれ？ああ、あれかあ……あれねえ……国から使用禁止を指示されているんだよねー。」

「ですが、ここが本当に過去なら、国もへったくれもなく少しでも助かる道を選ぶのが良いのでは？何せ貴女は国の決定に逆らった方でしょう？」

「しかもさあ、あれ何年も動かしてないじゃん。動くの？」

「……調べてみます。が、今までの点検記録では異常は見られません。」

「動かしてから事故が起こつたらシャレにならないからね。しつかり頼むよ。いつ頃稼働出来るか分かる？」

「恐らく明後日には分かるかと思えます。では安全の確認が取れ次第ご連絡します。失礼します。」

「りよーかい。」

無線は切られた。日本で今まで事故を起こしたことのある”あれ”を動かして良いのか。ここは洋上。逃げ場はない。事故を起こしたら終いだ。

「ロシア、か。」

現在最も有力な候補はロシア、ソビエト連邦だろう。あれだけ大きな国なら我々を受け入れる余裕があるかもしれない。距離も何とかなる。考えるのが普通だろう。

「取り敢えず2人が帰ってくるまで待つか。」

しかしこれは船の進路と運命を決める重要な事だ。独断では決められない。事情を知っている2人には伝えなくてはならない。こんな時にケータイが使えたらと鬱陶しく思うが仕方がない。

角谷は干し芋を摘みながら行くべきか、それとも無理にでもあれを稼働させるか、考え続けた。

彼女は優等生、無論ソビエトに関する基礎的な知識は持ち合わせている。この頃ならスターリン独裁体制が確立されているだろう。我々は恐らく未来の知識を与え労働力を提供しつつ、何処かに停泊するのだろうか。

「そういえば、あの時もロシア領だったっけ？」

角谷はふと全国大会の準決勝を思い出す。北緯50度付近で行われた準決勝だ。夏に行われたはずなのに大雪だった事が思い出される。ルーレットで決めるのは面白いが、色々と面倒だった。移動とか方向指示とか移動とか、今はそんなのが些細に思えてくるが。

「あんこう踊り……ねえ。」

みほがいきなり踊りだしたあんこう踊りを思い出して嘖き出すように笑う。人間は昔から物事を決断した時には踊る、という。桶狭間の前の信長などの様に。

その決断をさせた当人にまた決断させた私は、さらに彼女に決断を迫るかもしれない。秘密は、何時までもつだらうか。今からは未来、元々の世界からすれば過去に不安のある内に広めたくはない。

「早く何とかしたいねえ……」

口からその言葉を漏れださせると、角谷はもう1枚干し芋を摘んだ。

長針がゼロの時に短針と直線を作り、それから大分過ぎた頃、小山がやつれた顔で生徒会室に戻ってきた。先に戻った華は机で業務をこなしている。外は真つ暗で街灯の灯りも薄い。

「おっ、小山お疲れー。」

「……あつ、会長。」

体を前傾姿勢にし、黒い影を背負っている。

「……小山さん、とても疲れていらつしやるご様子ですが。」

「いや……ちよつと配給を貰いに来たお爺さんに問い詰められちゃったもので。」

「ほう。」

「どうしてこんなに補給船の停止が長引いとるのだ、と。学園艦の皆さん、結構不満溜まっているみたいですよ。」

「……3日目ですか……」

角谷は持っていた干し芋を袋を伏せ、難しそうな顔をする。

「それがこの先高まっていくのかと思うと不安で……」

「ですよね……残念ですが日本に頼らざるを得ないので？」

「ああそうだ。それで思い出した。」

伏せ気味だった顔を角谷が急に上げた。

「?何をですか?」

「何処までいけるか、つて話。」

「稼働状況のことですか。」

「そうそう。それがね、船舶科曰く現状の劣化中のエンジンだところから沖縄までしか行けないって、北に行けばなんとかソ連領まで行けるらしい。」

「ソビエト連邦ですか……」

「でもね、”あれ”を使えればもつと距離を延ばせるらしい。今安全を確認させてる。」

「あれ……ですか。使えるのでしょうか？」

「今までの定期点検では問題ないとは言っていたけどねえ。」

「あの一、すみません。」

華がおずおずと手を挙げた。

「如何したの、五十鈴ちゃん。」

「あれ、つて何ですか？」

「ああそうか。五十鈴ちゃんには知らなかったんだね。この学園艦に原子力エンジンが搭載されているのは知っているだろう？」

「ええ、勿論。」

「その他にもう一つ、大規模な装置が搭載されているのさ。その名も大洗使用済み燃料再処理施設。」

「そ、そんなものが学園艦に！六ヶ所村とかで失敗しているにも関わらずですか！」

「まあね。昔のお偉いさんが試験的に建設したものとみただけど。」

「……それは、使えるんですか？」

「今までに1度だけ使用されたけど、その時は問題なかったらしい。でもそれが20年以上前だから今回使えるかは明後日報告されるよ。」

我々が決めなくちゃいけないのは、使える場合は使うか、使う場合の目標はどこか、また使えないとしたらソ連か日本、どちらを頼るべきか。これを決めておきたいのさ。」

「どちらから話し合いますでしょうか？」

「んじゃあ、使えなかった時から。」

「つまりソ連が日本か、ですよね。私は今の学園艦の皆さんの不満を考えますと無理にでも日本から援助が貰えるようになるべきでは？」

「この前の条件だと私達破産しかねないけどそれでもかい？」

「それでも、です。」

角谷の問い掛けに華は正面からしつかり頷いた。

「私もそうするべきだと思います。」

「小山もかい。それはまた何故？」

「この時のソ連の現状は悲惨です。五カ年計画によって得た工業力と引き換えに、農業の集団化によって多くの餓死者を出しています。そんな国が私達に食糧を提供してくれるとは思えません。」

「なるほどねえ。それじゃ、2人もそう言っている事だし、無理な時は何とか日本に頼み込もう。」

「はい。それで、問題なく動かせそうな時はどうしますか？」

「まず同様の理由でソ連はないとして、日本か他国を信じるか。距離は食糧の事も考えると恐らくベトナム、フィリピンまでなら範囲に入るだろうね。さすがにオーストラリア、インドネシアまでは無理だろうけど。」

「その途中にある国と言いますと、中国、でしょうか？」

「あとはこの時まだ香港はイギリス領だし、マカオもポルトガル領だよ。」

「ベトナムもフランス領だったと思います。あとフィリピンもアメリカ領でしたか？」

「えっと、確か実質的な独立国だったはずです。」

「んじゃ、その5カ国が日本よりまともな要求を呑んでくれるか、だね。」

「中国なら呑んでくれるのでは？あの国の経済規模を考えれば日本ほどひどい要求は出さないと思いますが。」

「この当時の中国は日本より経済規模は劣っていますし、国民党は共産党との戦いの真っ最中です。我々に支援が出来るかは微妙かと思えます。妥当なのはイギリスでは？」

「ほう、それはまたどうして？」

角谷が軽く首を傾げながら小山の方を向く。

「我々を日本から逃げてきた者たちと思わせれば我々は日本の中国進出に対する圧力となり得ると思わせられます。そうすればそう重くない条件で受け入れてくれるのでは？」

「それは日英間の対立を煽らないかい？それに香港はイギリス本土から遠い。本当に私達を守ってくれるかな？」

「日英関係は満州国問題などですでに悪いので大丈夫かと思えます。守ってくれるかと言われると……断言はできません。これはフランスも同様かと。」

小山は顔を曇らせる。やはり、全てを満たせる国など無いのだ。

「……まあ、日本よりマシな条件で受け入れてくれる場所が南にありそうだというのはわかった。あとはこれも交渉次第だね。取り敢えず施設が動かせるなら沖縄の方に進路を取ろう。それで順に交渉していこう。」

「分かりました。」

「とにかく、まずは安全性が優先だ。それが確約できない限り、南には向かわない。」

「はい。」

「それでは、明日に向け仕事しましょう。」

小山と華は疲れを隠しながら、再び書類の山との格闘を始めた。南に向かうならばこの体制をかなり長期化させる事になる。厳しい戦いになる事は分かっていた。

しかし彼女らは大洗を、この学園艦を愛するが故に自らその責務を買って出たのだ。

この決定がこの世界をパラレルワールドとして現実から大きな変化を生じさせたとは3人は気づくはずもなかった。

その日の夜、そこには武部沙織、冷泉麻子、秋山優花里とこの部屋の持ち主である西住みほがいた。明日が10月11日の体育の日で祝日である事もあり、沙織の提案でみほの部屋で夕食をとろうという事になった。あんこうチームのものはそれに賛成し、現在に至る。

「じゃーんー！」

眼鏡をかけエプロンを着た沙織が大皿を持ってちやぶ台の方に来た。

「おおー。すごく美味しそうです！」

「ん……」

「わあー！」

麻子は眠そうだが少しほおを緩ませ、他の2人は目を輝かせている。そこには美味しそうな香りを漂わせる回鍋肉がそこにはあった。といつても本物ではない。何せ肉が入ってないのだから、まあ中華風野菜炒めというのが妥当だろうか。

「まさかあの配給の真空パック入りの刻み野菜がこんなになるなんて！」

「ふっふっふっ、私の手にかかればこのくらいすぐできるわよ！男の子にモテるには回鍋肉だからね！」

「沙織前に『男の子にモテるには肉じゃが』って言ってなかったか？」
自慢げな顔の沙織に麻子が躊躇なく突っ込む。

「ぐっ……だ、だって今月号の雑誌にはそう書いてあったもん！」

「……その雑誌信頼できるでありますか？」

優花里も麻子の側に回った。

「ま、まあ、冷めないうちに早く食べよ。」

「そうでありますな。ご飯も炊けたでありますし。」

「だな。沙織の棒みたいな話はご飯食べながらも聞ける。」

「ちよつと麻子！それどういう意味よ！」

みほがなんだかんだでその場を纏めて、ご飯と取り分けられた野菜炒めが並んだのち、4人は手を合わせた。

「いただきまーす！」

元気な声とともに4人の箸は真っ直ぐに野菜炒めへと向かう。口に入れた途端ピリツとくる辛さと程よい甘じよっぱさ、歯ごたえのいい野菜が彼女達を唸らせる。

「んんん。美味しい！」

「……美味しいな。」

「武部殿、流石であります！」

「そうですね。やはりモテるにはこれなんだよ！」

「それは関係ない。」

「そんなことないもん！」

「あはは。」

いつも通りの仲の良い時間が彼女らを包んでいた。たわいもない時間、これが彼女らの至福の時であった。

「それにしてもさあ、配給って量少くない？1回の配給が1食分もない気がするんだけど。1月分備蓄あるんでしよう？」

「備蓄全部を使い切るわけでもないと思うでありますよ。」

「もうちよつと出してくれても良いのに。」

沙織が口を尖らせた。

「華さん……居ないんだね。」

みほが思い出したように口を挟み、他の3人の顔にも影がさす。

「学校の授業にも出てないし、華大丈夫かなあ。」

「心配であります。」

「五十鈴さんならここ来る前に来たぞ。」

麻子のその一言に3人は素早く食いついた。

「えっ！で、どうだった！」

「いや、朝の配給貰わなかったから今後の注意も兼ねて来てくれたんだが、なんか暗かったな。儉約体制終わったら勉強教えるって言ったんだが。」

「やはり生徒会の仕事で疲れてらっしゃるのでありますか？」

「でもさ、私の部屋華の部屋に近いじゃん。華ね、どうやら部屋に帰ってないみたいなんだよね。」

「どういうこと？」

「学校で寝泊まりしているみたいなのよ。」

「そこままでありますか！」

「沙織が帰ったあとに帰って、朝早く出て行ってるんじゃないか？」

「物音も聞かないんだけどねえ。」

沙織が頭を悩ませながら、4人は華を気遣う。この時、みほの頭に1つのズレが生じた。

「……そういえばさ、もう儉約体制入ってから3日経つのに、まだ補給のアテがないのかな？」

「島の補給港が使えない、という話でしたでありますか？」

「3日も移動したら他の港から受けられるんじゃない？」

「ああー、確かに。」

3人は納得したように頭を上下に振る。

「学園艦、どちらに向かってたっけ？」

「えっと……」

優花里がカバンを漁り、コンパスを取り出し、それを眺める。するとすぐに、優花里の顔がみるみる変わっていった。

「ど、どうしたの？優花里さん。」

「に、西住殿！艦首の方はどちらでありますか！」

「ゆかりん、どうしたの？」

急に慌て出す優花里に皆はついて行けていない。

「えっと……こっちなな？」

みほがボコの飾られた棚の方を指差す。優花里ははつきりと唾を飲み込んだ。

「間違いありません。学園艦は、西に向かっています。」

「西？」

「おかしいな。」

麻子が箸を置き、首をひねる。

「何が？」

「この学園艦は伊豆諸島の近くにいたんだろう？それで一番近い港が使えない今、できるだけ早く補給を受けられるには、どっちに行くといいっ？」

「北？でもそれに行くために少し進路を変えているだけかもしれないよ？」

「伊豆諸島の東の沖に北進するのに邪魔になる島はない。真っ先に北に向かうのが普通だ。最悪でも西に向かう必要はない。」

「……麻子さん、つまりどういうこと？」

「生徒会、もしくは船舶科の者たちが補給を受けようとしてない可能性がある、ということだ。受ける気ならば真っ先に来たの本土の方に向かうはず。」

「……何よそれ……」

「でも、生徒会も船舶科の人も補給を受けないで何も得がないと思う

けど……」

「わからん。でも、何かある。廃校の時のように生徒会の人達が何か隠しているのかもな。」

麻子の予想を聞いて部屋の空気までも青ざめていく。

「……生徒会の方々が何かを隠すのはそれが明らかにできないほどとても重要な問題か、確定していないことでもありますかな？」

「生徒会ならそうだろう。だがこれはあくまで私の予想だ。まだ何かを隠していると決まったわけじゃない。しかも隠しているとしたらそれ程知られたくないということだ。何か考えがあるに違いない。」

「気になるけど……明らかにしないほうがいいと。」

「まあそういうことだな。」

「……」

「と、とにかく早くご飯食べてしましましょう！冷めてるでありますよ。」

「そ、そうだね。」

彼女らは無言でそれらに箸をつけた。しかしその味は先程ほど美味くなかった。

食事の後入り口までの3人の見送りをしたみほは部屋に戻って机に向かう。しかし先程起こった謎が彼女の集中を削ぐ。

彼女は鍵を手に入れてしまった気がした。そしてその鍵がパンドラの箱の鍵だと思わずにはいられなかった。

溢れ出そうとする好奇心を抑えようと、彼女はその日は早めに床についた。

「……あれから4日か。」

辻は頭の後ろで手を組みながら後ろにもたれかかっている。世間は蜂の巣をつついたような騒ぎだか、この学園艦教育局長室にはそれとは真逆の空気が詰まっていた。何せ大学選抜と戦った8つの学園艦がいきなりこの世から姿を消したのである。

現在も海上保安庁による必死の捜索が行われているが全く手がかりがなく、学園艦教育局にも疑いはかけられたが明らかにされるはず

もなく、ただいたずらに時間が過ぎるだけだった。

雑誌などでは補給船の乗員の「見えていた学園艦が急にいなくなつた。」とかいう証言が載せられているが世間では相手にされていかない。むしろこちらとしてはその方が嬉しい。まあ「パラレルワールドに吹っ飛んだ。」などといきなり言われて信じてしまう奴もどうかと思うが。

「辻くん。」

「あ、高谷さん。」

その部屋に明るく右手を掲げながら上司の高谷が入ってきた。

「仕事はどうだね。」

「万々歳です。政府もこの一週間の間に学園艦発見の兆しがなければ予算は削る他ないと言つてましたし、お陰で大洗とその他の学園艦にかける分の予算は浮きましたよ。」

「それは結構！でも君の管理責任は問われないのかい？」

「局長室にひたすら籠っていた私が沖繩から北海道までの学園艦の管理をしろと？それに今の様子だと牟田口文部科学大臣が責任を取つてくださりそうですし。」

「あのビフテキ好きか。ちようどいいな。あいつの女好きと仕事の適当さにはウンザリしてたんだ。」

高谷が吐きすてるように呟く。

「これが中間管理職の特権つてやつですよ。」

「流石だな。」

「それで、ご用件は？」

「ああ、そうそう。今回の『バミューダ』に関わった研究者についてなんですが、このままにしとくかね？」

「そのままでもいいのではないのでしょうか？」

「何故だね。今回の内容話される可能性があるぞ。」

「話してどうなります？」

「それは、メディアとかを通じて世論に……」

「それを国民が信じると思えます？」

「！」

「パラレルワールドに行く機械、SFじみたそんな物を作れるなんて誰が信じます?」

「確かにそうだが、公開実験とかして存在を証明したら……」

「誰かを送って、その人がパラレルワールドに行ったなんてどうやって証明するんです?ただ消えて戻ってきた、それだけでパラレルワールドの存在は証明されません。話すことも嘘だと言われればそれまでですし。」

「……なるほど、恐れ入った。君の思考には敵わんよ。」

高谷は両手を挙げて息を深く吐く。

「まあ、でも少しは何かやっとくべきでしょうね。」

窓の方に周りながら辻は顎の下に指を置く。

「どんな事だい?」

「口封じまではしなくてもいいから……あの機械を秘密裏に文科省管轄にするとか。」

「なるほど、あれほどの機械、何処からか援助がなければ作れるものではない。そしてそんな物にカネをかけるところなんてない。確かに回収してしまうのが妥当だな。」

「それに使える人間が居なくなるとそれもそれで面倒ですし。」

「確かにな。それではそのように取り計らおう。」

「すみません、その類はお願いします。」

「無論だ、任せろ。ではな。」

「では。」

その後すぐにその機械は極秘に文科省の管轄となった。研究者が1人残らず文科省に引き抜かれたのは言うまでもない。

(杏。)

誰かが角谷を呼んだ。それが誰かはすぐに分かった。

(……お母ちゃん?)

(お前どこ行ってたんだい!)

角谷の視界の前に、母の姿。間違いない、母だ。

(お母ちゃん!)

彼女は真っ直ぐにその人に飛びついた。あの懐かしい匂い、暖かさが顔を包む。

(心配したんだよ。そろそろ大学に行くから一旦家に戻るっていうのにどこか言っちゃまって。)

(よかった…本当によかった……)

(全く、今後は気をつけるんだよ。)

「お母ちゃん!」

角谷の上半身は飛び起きた。息が荒れ、目の前には先程までいた母の姿はない。背中のヒンヤリとした汗が嫌悪感を誘う。彼女の視界には電気が消された真っ暗な生徒会室が広がる。

目が慣れてきて辺りを見渡すと、机の上に乗った山のような書類と自分の席の隣でぐったり垂れ下がる優勝旗、そして小山と華が布団を並べていた。

「はあ……」

頭を抱え、嘆息する。悪夢、ではないだろうが気持ちの悪い夢でもない。この残された虚無感はどうにもしがたい。まるで麻薬のような夢だ。

荒れていた呼吸は落ち着き、混乱しつつあった頭もなんとかなくなった。

「……シャツ変えよう。」

角谷は布団から抜け出し、倉庫に置いてあった自分のカバンの中から新しい自分のシャツをとり、音を立てないよう気をつけながら着替えていく。1つ伸びをしたのち彼女は再び布団の中に戻った。

時間は起きるにはまだまだ早い。疲れを残さないようもう一眠りしようとした矢先、彼女の耳に嗚咽が入ってきた。その音のする方へ耳を傾けると、小山が体を震わせていた。

「……お母さん……うう……」

「小山……」

角谷はもう一度身を起こし、小山の背中をゆつくりとさすった。それをしばらく続けていると、落ち着いたのだろうか、嗚咽が止み、柔らかな寝息が聞こえてきた。それに安心して角谷も布団を被る。

「……本当に、いつになったら帰れるんだろうな……」

角谷は今日何度目かの自問を繰り返したのち、眠りの世界へと戻っていった。

次の日、学園の授業は休みだった。だがしかし先日から続いている儉約体制により、殆どの学生の食事は食堂での配給に頼られていた。

仕組みは簡単。朝の配給の時に学校で食べる旨を伝え加工費200円支払えば、その分の食料が食堂に回され食堂で調理されたものを食べられる、というわけだ。言ってしまうえば給食である。これは食堂の方々の雇用の維持も兼ねていた。

みほと沙織もここに来て席に着いていた。彼女らのトレーには他の者と同じメインのカレーに付け添えのひじきと大豆の煮物が乗っていた。彼女らにはちょうどいい量である。まあ、五十鈴華にとっての0。何人前かは考えないことにしよう。

「……やっぱり少ないよね。」

皿の上のものをスプーンで掬いながら沙織が声をかける。

「そうかな、私にはちょうどいいけど。」

「いやみぽりん、これ配給1回分だからね。」

そう。これは配給1回分である。つまりこれが半日分であるのだ。

「昨日夜ごはん みんなの1回分使っちゃったから、朝ご飯ほとんど無くて困っちゃったよ。本当にもっと配給多くくれないかなあ……学園艦に住む人全員に1月配れるだけはあるんでしょ?」

「確かに1か月補給が無いことはないと思うけど……他の住民の方も我慢しているんだし、私達だけが貰うわけにはいかないよ。生徒会の方も考えがあるんだろうし。」

みほはパンドラの箱を開けまいと沙織を宥める。

「廃校のことも隠してたしき、何かある気がするんだよね。そういえばき、次の寄港日も無期限で延期されたんだよね、掲示板にあったけど。もう折角の彼に会えないじゃん……」

(確か、カレー屋さん、だっけ?)

「ま、まあ、彼なんてそうそういなくなるものでもないから……それに麻子さんもあまり深入りしない方がいいってたし。」

「そうだといいいけど……まあ、確かに私達だけで出来そうな問題じゃなさそうだしね。」

彼女らは残っていたカレーを食べ終わると共に家に帰っていった。その後、この日1日2人はこの話題に触れず、いつも通りのたわいもない話を続けた。考えれば考えるほど何があり得るのか分からなくなり、疑うことは気持ちの良いことでもないのだから。

夕方 女子寮の一室

少女が1人、テレビの前のソファに座っていた。彼女の前のテレビで流れているアニメはエンディングソングの導入が流れ始めている。その画面に白い歌詞が並び始めると、彼女はリモコンの停止ボタンを一瞬の躊躇の後に押した。

「はあ。」

彼女にとってアニメ視聴は趣味なのだが、その割には浮かない顔だ。テレビの画面は録画番組の一覧を示しており、先程見ていたと思われるアニメの名前が書かれている一番下の欄のみ、他よりも色が薄くなっている。

「……どうしょ。」

阪口桂利奈はソファの背もたれに大きくもたれかかった。しばらくただボケーッと天井を眺めている。この部屋には彼女1人、反応を返す人はいない。

「全部見ちゃったよ……あゆみから映画借りようかな……」

そう、テレビが流れなくなった為阪口は今まで録画していたアニメを見ていたのだが、録画に入れていた分はさつきで最後だったのだ。HDレコーダーに入れたものを引っ張り出せばまだまだ数があるが、今はそんな気も起きない。

「何時まで儉約体制続くの……」

これもひとえに儉約体制による戦車道の練習の減少がある。暇になったのだ。しかも配給も多いとは言えず、お腹も空いてきた。

夕飯として食べられる量は少ないがとにかく夕食を取ろうとしていたその時、ベランダの窓ガラスを鋭くつつくような音がする。まさか泥棒、と思い抜き足差し足忍び足で窓に近づき、そっとカーテンをめくると、灰色じみた少し大きめの鳥が窓ガラスを突いている。なんだ鳥かと一安心して餌が欲しいのかと窓をゆつくりと開いた。

今思えばこうすれば鳥は逃げるのが当たり前だが、この時はその灰色じみた鳥が逃げる素振りも見せなかったので思いもしなかった。

阪口はそれが何の鳥かわからなかったが、とりあえず大きめの鳩みたいな鳥だったので、ナッツでもあげようかと台所に戻って棚を漁る。だがそれらしいものと言えばゴマしかない。

「ゴマでいいかなあ。」

と棚の前でボソツと阪口は呟いた。

「ゴマか、まあ嫌いじゃないな。あとできれば水も欲しいな。」

「……えっ?」

この部屋には阪口ただ1人しかいないはずである。いや、正しくは1人と1羽である。つまり、そう流暢に反応を返せるのはその鳥しか居ない。

「ダメか?」

「シャベツタアアアアア!!??!!??!!??!!??!!??」

そう叫び、持っていたゴマのパックを握りながら阪口は腰を抜かした。

「……驚き過ぎだろ。」

しばらくのち、彼女の部屋の前には女性が1人仁王立ちして

いた。

「阪口さん！騒がないようにって言うているでしょう！両隣の部屋の人から苦情来てんのよ！高一でしよう！」

「すいません、すいません。」

阪口はただただその人に頭を下げ続ける。

「今後はこのようなことが無いように！」

その女性は最後に阪口を睨みつけると、ドアを大きな音を立てて閉め、去っていった。

「……はあ。」

鍵をかけると先程までの落ち込んだ感じが増長された阪口はリビングダイニングに戻っていった。その鳥は合間に皿にのったゴマをつまみ、コップの水を半分ほど一気に飲み干した。

「プハー、うめえ！生き返る！」

「ああ、そう……」

鳥は息を大きく吐きながら上を向く。

「それで、どうしたの？鳥さん。」

鳥の皿の前に体育座りして阪口は聞いた。羽で口元を拭ったその鳥は答えた。

「飼い主にこの世界に飛ばされた。」

「あい？」

「この世界について伝えたいから、ちよいと学園長か生徒会長に会わせて欲しい。」

「……くそSFアニメの背景紹介より展開が急すぎて分からないんだけど……まずこの世界って何？この世界も何もここは現実でしょ？」

「……このことを君に言っただけいいのか分からない。が、ここは君達の世界じゃない。」

「……まあ、よく分かんないから、とりあえず何で話せるか教えて。」

「私はヨウムという種なんだが、」

「オウム？」

「ヨウムだ。」

「……鳥さんでいいや。」

「まあ続けるが、その品種は言葉さえわかれば話せる。私は飼い主に教えられた。」

「……まあ、オウムみたいに話せるのね。てかオウムじゃん。」

「そういうことではないんだが……まあそれで、その飼い主が君たちを君達の世界から今の世界に飛ばす機械を作った人間だった訳で、飼い主はその機械を本心では作りたくなかったらしく、君達が助かるために情報を伝えようとわたしが飛ばされた、ということだ。」

「……頭がパンクしそう……」

阪口は頭を抱えうずくまる。

「まあ、学園長か生徒会長に会わせてくれればいい。この学園艦を実質的に動かしている人間に会わせてくれ。その後はこちらで何とかする。」

「それなら会長さんかなあ……明日聞いてみよう。」

「会えるのか？」

「まあ、多分。お互い知ってるから。」

「それは助かる。」

「ただね鳥さん……問題があつて……」

「？」

「この寮、ペット禁止なんだよね。」

「……日中は出かけるよ。」

「ありがとう。それで、明日の放課後に言いに行くから、その頃に学園に来てくれる？」

「いつぐらいだ？それに学園、というのは何処にある？」

「えつと、こっちの方に飛んでつたら赤いレンガの建物があるから、そこに3時半でいいかな？」

「分かった。明日調べておこう。」

「で、うちに泊まるの？」

「いや、自分のねぐらがあるからそこで寝るよ。」

「あ、そう。じゃあ、明日よろしくね。」

阪口は窓を開く。最後に水を飲み干した鳥は飛んで窓際に向かう。

「ゴマと水、ごちそうさまでした。」

「今後もよろしくね。」

「じゃまた。」

そう言つて鳥はベランダから大空へと帰つていった。

「……結局何だつたんだろ？」

阪口は外を眺めながら呆然と立っていた。明日の放課後に待ち合わせることに以外は頭に入っていないかつた。

「あ、そうだそうだ。夕ご飯。」

大洗の夜は暗い。街灯の他に電気が付いていないのだ。何だ当たり前ではないかと思う者もいるだろうが、学生が殆どであるこの街では寮に入っている者が多く、そういうところは決まって消灯時間が定められている。この夜中に散歩者など殆ど居ない。おまけに飲食関係の店はそのほとんどが閉められている。

だが、冷泉麻子はその街を歩いてきた。彼女がしばらく歩くと、珍しく明かりが一部灯っている建物が見えた。麻子は真つ直ぐそこに向かう。扉の前でインターホンを押して名を呼ぶと、二つ返事でそれが開いた。

「レツちゃん。久しぶり。」

「山本さん、久しぶりだな。」

気軽な感じで声をかけてきたのは船舶科の長坂班の1人、山本だ。麻子とは中学時代の同級生であり、沙織以外の数少ない古い友人の1人だ。

「前に艦橋に見学に来た時以来かな。」

「西住さんを案内した時か。」

「まあ、上がって上がって。私あと30分くらいで出かけちゃうけど。」

「構わない。失礼する。」

麻子は靴を脱ぎ、部屋に入る。狭いワンルームだ。

「お茶あるけど飲む？」

「構わない。そんなに長居する気もないしな。」

「いや、でも驚いたよ。まさか帰ったらポストにお邪魔するからよろ

しく、って書いた紙が入っているなんて。」

「ケータイが使えればこんな事にはならなかったんだがな。迷惑だったならすまん。」

「良いよ良いよ。てか明日学校だよね。こんな時間に良いの?」

「まあ、私は夜型だからな。朝は前よりかはマシになったとはいえまだまだきつい。」

「変わらないね。前と。」

「山本さんもな。」

お茶を淹れた山本は部屋の真ん中のちゃぶ台に麻子と向かい合うようにして座る。

「それで、わざわざ何の用?頭の良いレツちゃんが私に聞きたいことって?」

「山本さんなら知っているんじゃないかと思ってな。」

「なにを?」

「この学園艦が西に向いている理由。」

その言葉を聞いた瞬間山本の顔から笑みが消えた。

「正しく言えば西南西といったところか。伊豆諸島沖にいた我々が補給を受けようとするのになぜ西に行く?ましてや南の方など何の当てもない。」

「……」

「さらに言えば儉約体制に入ってから4日経っているのに補給の当てがまだない。いくら何でも長いだろう。日本側がとも手抜きをしているとかじゃない限りありえない。我々の存続が決まったのは周知の事実。そんなことをしたら国が国民から思いつ切り批判を喰らうはずだ。」

つまり国は我々を助けてないわけではない。助けられないと考える方が自然だ。それなら相当の理由がある。」

「……」

「私はそれを暴いて人に晒す気は沙織にだってない。ただ知って、私の能力が活かせるならば学園に協力したいだけだ。私だって学園の一人。折角存続させた学園を守りたいと思う。」

「……」

「頼む、この学園艦に今、なにが起こっているんだ……教えてくれ……山本さん、貴女なら知っているはずだ。」

麻子は床に頭を着けんばかりに下げた。目を力を込めて閉じ、歯を必死に食い縛る。山本はただその様を眺めながら、無言のまま無表情で座っていた。

「……ごめん、それは、無理。」

「！」

申し訳なさそうに山本も頭を下げた。

「船舶科には現在情報統制が敷かれているの。情報を漏らしたものは罰則まで規定されているわ。確かにレツちゃんの協力は今の学園にプラスになると思う。でも、その為に私は船舶科としての義務を捨てるわけにはいかないの。本当にごめん……」

「山本さん……それなら」

「でも、少しヒントをあげることができる。それを自分で解いて生徒会に直談判するならいいよ。」

「え？で、でも情報元がバレたら……」

「大丈夫。レツちゃんは秘密を守ってくれるでしょ。」

「……ありがとう、山本さん。」

麻子はあげていた頭を下げ再び大きく下げた。

「いいよいいよ、レツちゃんが解決してくれたら私も嬉しいし。それで、私があげられるヒントは2つ。1つ目はここが伊豆諸島沖ではないかと。」

「……まあ、予想通りだな。」

「2つ目は私達は何をしようとも文科省からの支援は受けられない、ということ。」

「文科省からの支援か……」

「これでいい？」

「分かった。ここから先は私が考える。そろそろ出かけるんだろう？私はこちらで失礼する。」

麻子はそう言って立ち上がる。

「まだいるけど？」

「いや、帰る。」

山本が少し引き留めるが麻子は背中を向け答える。

「がんばってね。」

「ああ。」

玄関で靴を履いた麻子は山本に一礼して去っていった。

「…………ふう。」

山本は席に戻り湯飲みに残った茶を飲み干した。

「これで、少しは上手く行って欲しいね。」

彼女は制服に着替えてカバンを肩にかけると、湯飲みを洗い場で軽く洗って部屋を出て行った。

広西大洗奮闘記 6 向かうは

「今日だね。」

「はい。」

角谷と小山はあの電子音を待っていた。今日は大洗使用済み燃料再処理施設の使用が出来るか分かる日である。その結果によって大洗の運命は大きく変わる。朝の配給から2人はその音を待っていた。

「会長さん、配給終わりました。」

そこに華が戻ってきた。どうやら朝の配給は無事に済んだようだ。

「それで……連絡はありましたか？」

「いや、まだだ。」

「それでは、私は日本に関する提案についてまとめておきますね。」

「ああ、よろしく。」

華は自分の席でパソコンの電源をつけ、しばらくしてキーボードを叩き始める。

「それで、もし安全性に問題が無かったら日本にはどう言いましょう。」

「元々日本政府には何も言っていないんだし、何も言わなくていいんじゃない？」

「長期的でなくとも少し物資などは貰えませんか？」

「交換であげられるものがない。大洗の学園艦には相手から物資を得るにふさわしいものが無い。情報とかはすでに知波単が伝えてるだろうしね。それは知波単に対しても一緒だ。」

「確かにそうですね。」

「それに補給を受けちゃうとルール上儉約体制解除しなくちゃいけないから、1回解除してもう一度発令したら次は暴動が起きるよ。逆に解除しなかったら風紀委員が何を言ってくるか……」

「ああ……」

「これを使うようになるとしたら、交渉大変そうですね。」

「……」

かなりギリギリの文言を画面に表示させながら華がつぶやく。学

園艦への長期的な食糧の援助と引き換えに保有している食糧全て、研究者として教師陣を派遣、戦車道履修者の陸軍入隊、その他諸々である。

とにかくあの西条が言ったスツカラカンが現実になるような文言だった。

「……これからどれを差し引いて日本が認めてくれるか、ですね。」

「厳しいだろうね。日本には負担を背負ってもらうんだ。そう易々と行くはずがない。」

「ですよね……」

彼女らは無線機の向こうから聞こえてくるであろう言葉を信じた。話をやめた華は再びキーボードを叩く。

小山は配給を今朝貰わなかった人の資料を他の生徒会の者から受け取り、再配給と日数増加分の計画を立てている。

「……この調子だと2日分くらい余りそうですね。」

「……2日か、そんなものだろうね。」

「やはり日本以外に行くとしても一月強で安定供給受けられる場所を探さないと……」

「うーん……」

「やはり、アジア圏から抜けるのは厳しいのでは？」

「そうだね、だったら前挙げた国の中から選ぶしか無いね。」

そう答えたその時、彼女らの耳にあの電子音が入って来た。3人の唾を飲む音が重なる。角谷がゆっくりと席を立ち、隣に向かう。ヘッドホンを耳につけボタンを押すと、声が入って来た。

「こちら船舶科の井上です。」

「どうも、角谷です。」

「先日仰っていた再処理施設の件ですが、」

いつの間にか隣から2人も集まっている。祈るように手を組み、成り行きを見守る。

「動かせません。問題ありません。」

「本当に？」

「稼働するのは問題ありませんが、そもそものウラン核分裂反応の効

率が悪いです。」

「まあ、この船も古いからね……修理計画はバブル崩壊の時に延期になったって聞いたことあるし。」

「ウラン燃料の再処理にも力を入れますが、再処理燃料だけでは稼働できないですし、廃校騒ぎの時に学園艦から出て行った際に、エンジンの核分裂運動を収束させるようにしていたようで……やはり長距離の運行は厳しいです。」

「あの文科省の役人、嫌な爆弾残してたね。それで、どこまで行けるかい？」

「それは現在計算中です。ですが恐らくフィリピンくらいが限界かと……」

「……分かった。その結果を聞いてよかった。計算で結果が出たらよろしく。」

「分かりました。」

角谷はボタンを切り、ヘッドホンを取り外しふうと大きく息をはいた。

「会長、それで……」

はいた分を大きく吸い込んだ角谷は部屋で叫んだ。

「大洗学園艦は、西に進路をとる！」

「……はい！」

その小さな部屋で、角谷は南西にこの学園艦の希望を託すことを宣言した。2人は祈りの形の手を力強く握りしめて返事を返す。

「それぞれそれに基づいて行動してね。」

「まずは中国ですね。」

「中国語を話せる人を呼ばないとね、誰かいたかな？」

「次の配給の時に募集かけときます！」

「りよーかい。えつと、他には、風紀委員呼んでくれる？」

「如何したんですか？」

「これから航海も長くなるから、暴動とかを抑える為に夜間行動を制限したい。」

「なるほど。」

「確かに原子力発電の力に現在の発電はそれなりに頼っていますから、節電出来れば航行できる距離が伸び、助けてくれる国の選択肢が増えるかもしれませんね。それに加えて治安維持に繋がるなら尚更です。」

「じゃあ夜7時から船舶科以外夜間行動禁止。それと節電のキャンペーンやろう。」

「7時、というのは？」

「その頃ならもう先生も学校出ているだろうしね。」

「ですが仕事で遅れることもあるかもしれませんが、先生を禁止から外すとか時間を遅らせるなどを行った方がよろしいのでは？」

「うーん、余り例外は作りたくないんだよね……じゃあ、一律で8時でどうかな？」

「8時なら大丈夫だと思います。」

「じゃあそれで、五十鈴ちゃんさっきの作業止めて、誰かに休み時間に風紀委員呼ばせといて！」

「はい。」

「小山は中国語を話せる人を探せるように準備よろしく！」
「分かりました。」

3時半、赤レンガの倉庫前

その前に立つ阪口桂利奈の前に灰色の鳥が舞い降りた。

「良かった。ここで合ってたか。」

「よく時間分かったね、鳥さん。」

「近くの家のベランダから見せてもらった。」

「なるほど……」

「早速だが、生徒会長の所に案内してくれ。他にやることはない。」

「良いよ。で、どう来る？」

「どう、とは？」

「このまま飛んでくるの？」

「ああ……肩を借りてもいいか？」

「爪立てないでね。」

「分かった。」

一連の会話を終わると、ヨウムはそつと舞って阪口の差し出した右肩の上に止まり、ほおに気をつけながら羽を畳んだ。

「それじゃあ、案内するね。」

「よろしく頼んだ。」

阪口が歩き出そうとしていたその時、そのレンガの倉庫の陰から五人の少女が、いや一人を除いてそれを覗いていた。

「桂利奈、何しているのかな？」

「なんかお話ししてるみたい……」

「でも鳥しかいなくない？」

「鳥と話せるってなんかそれ夢の世界みたい。桂利奈ちゃんすごい。」

「……」

上から順に澤梓、大野あや、山郷あゆみ、宇津木優季、丸山沙希だ。彼女らは戦車道で同じチームの仲間だが、いつも終礼のあと教室でチームの者や他の友人と雑談に興じている阪口が急いで出て行ったので気になってついてきたのだ。

「あ、移動するみたいだよ。」

「どうする？付いてっちゃう？」

「秋山先輩みたいにスパイしちゃうー？」

「いいかもそれ！」

「……」

まあ、ノリの良い連中である。

「……まあ、桂利奈だし大丈夫でしょ。」

「じゃあ、偵察訓練開始！」

常識人の部類に入る澤もそれに同調し、ウサギさんチームによる偵察訓練が開始された。

「そういえば、」

「んっ？どうしたの？」

彼女らと逆に向かいながら肩の上のヨウムは阪口に声をかける。

「さつきお前を尾行しているらしき奴らがいたぞ。」

「えっ？尾行？」

「なんか4・5人いたな。いいのか？」

「……まあ、いいんじゃない。何かあるわけでもないし。」

阪口は気にすることなく生徒会室に向かうことにした。何棟も並ぶ校舎の間を縫って進み、何人かの人に振り向かれたものの特に何もなく生徒会室の前にたどり着いた。

「ここって、生徒会室だよな。」

「桂利奈、何か生徒会に用があるのかな？」

「でもだったら何で鳥を連れてったのー？」

「うーん……」

「……」

「え、沙希、どうしたの？」

「……」

「アニメ見せて欲しいって頼みに行った？」

「桂利奈ちゃんならありえるかもー。」

「でも、鳥が何故いるかはわかんないよね。何でだろう。」

「鳥、鳥、とり……」

「うーんわかんない！とにかく出てきたら聞いてみようよ。」

「それじゃあ偵察訓練にならないよ。」

5人がごたごたしていた頃、作業中の角谷達の所に一人の生徒会の者が入ってきた。

「失礼します。」

「どうしたの？」

角谷はこなしていた書類のチェックを一旦止め机に置く。

「会長にお会いしたいと言うものが来ているのですが。」

「誰？」

「高1の阪口、という方です。」

「阪口ちゃん？ウサギさんチームの？」

「何のご用でしょう？」

キーボードを叩いていた小山も1回手を止め話に加わる。

「えっと、この学園艦の将来に関する重要事項をお伝えしたいので中

に入れて頂きたい、と。」

「それって、本当にそう阪口ちゃんが言ったの？」

「いえ、正しくは彼女が連れていた……」

その生徒会の者は言葉を詰まらせ、左右をチラチラ見る。

「どしたの？」

「鳥が、鳥がそう言ったんです。」

「鳥？」

「はい、鳥です。」

「ふーん……入ってもらって。」

「会長、いいのですか？」

「まあ、面白そうじゃん。」

「分かりました。」

すぐに阪口とその方に乗った鳥が案内のもと部屋に入ってきた。

「会長さん、こんにちは。」

「どうもよろしく。」

阪口は浅く礼をし、ヨウムもそれに合わせ首を倒す。

「……本当に鳥だね。」

「そうだが。」

「で、お話があるそうだけど。」

「ああ、君は済まないが外に出てくれ。」

ヨウムは阪口の方を向いて言うと、肩から地面に飛び降りた。

「鳥さんの話よくわかんないからいいや。」

あつさりと阪口もそれに従う。そして、阪口が外に出たあと扉の鍵を華が閉めた。

「さて、重要事項ってのは何だい？」

ヨウムは知っていることを洗いざらい話した。この世界のこと、将来のこと、そしてこの世界に飛ばした張本人について、ヨウムの出身も含めてだ。その告白を受けた3人はただ呆然と立ち尽くしていた。

「……こんなものかな。」

「まさか……あの辻さんが……」

「あいつ……まだ諦めてなかったか。」

「帰れるのが13年後…ですか。」

「ああ。現在が1935年で、帰れるのは1948年の最後の日だ。」
理解が済むと、怒りが3人の中に沸き起こってきた。

だがしかしその怒りを相殺しかねないほどの絶望が彼女らを覆っていた。

「そういえばさ、この世界に知波単学園が居たんだが、何か知らないかい？」

角谷が鳥の目を見据える。

「この世界にはあなた方と同じ境遇にあっている船が他に7隻いると聞いたことがある。その1つかもしれないな。」

「知波単がいて、私達を含めて8隻……」

小山はすぐに答えにたどり着いた。

「……大学選抜との試合に参加してくれた学園が、」

「えっと、黒森峰、聖グロリアーナ、プラウダ、サンダース、アンツイオ、知波単、継続……7校です。」

華が指を折って数える。

「それらかもね。どう、鳥さん。」

「船の名前までは聞いていないから判断はしかねる。」

「ですが、他にあの役人が送りたい学園艦はないでしょうし、おそらくこの7校かと。」

「だろうね。鳥さんは今後どうするよ？」

「この船のどこかを飛んでいるよ。他に言うこともないうえに私に出来ることなんて他にないだろうし。」

「分かった。情報ありがとね。」

「失礼する。すまないが窓を開けてくれるか？」

「あ、はい。」

たまたま窓の近くにいた小山が窓を開け、ヨウムはそこから大空へと飛び出し、帰っていった。部屋に残された5人は余りに突然伝えられた多くの情報に立ち尽くす。

「会長、あの鳥の言っていたこと、信じられますか？」

「私は信じるよ。そうじゃなければいくら何でも詳しすぎる。」

口調はいつも通りだが、神妙な顔で答える。

「そうですねけど……でも私達が13年も親に会えないって……」

「信じたくないんだろ？」

「はい……」

今までの絶望、2度の廃校の可能性は1年だった。廃校になろうとなるまいと一年先にはどれだけつらく後悔した状態だろうと終わっていた。

しかし今回の絶望は文字通り桁が違う。13年、その頃には小山と角谷は30歳近い、そこまで私達はこの学園艦を残さなければならぬのだ。おまけにその期間は第二次世界大戦を挟んでいる。厳しい、という言葉で片付けられるものではない。

「私も、頑張るしかない、とか何とかなる、とか無責任なことを言う気はないよ。」

けどただ絶望して何もしないというのは間違いだと思う。少なくともこの学園艦を受け入れてくれるところが現れるまで私はこの学園艦を導く必要がある。これは全校18000の生徒から選ばれた私の義務だ。

だから私は例え一人になっても、そして西住ちゃんを脅した、とかとは比べようのない悪事を働いてでも、この学園艦を残す。」

目線の先には向かいの机に乗った書類、パソコンしかない、が角谷はそれらではなくもつと遠い、目に見えないものを睨みつけていた。

「……確かに、あの役人の思うままになるのも面白くありませんし、私は会長さんに全力で協力します！」

華が胸の前の拳を握りしめながら言い表す。

「……小山、ここから先のことはお前を一生苦しめ続けるものになるかもしれない。ここでお前が引くとしても私は止めない。」

「……いえ、私は会長がそこまで覚悟を決めていらっしやるならば、この身を学園の為に捧げましょう。」

小山は決心したように背筋をすっと伸ばした。

「じゃあ、やるぞ。それぞれ作業の続きをやってくれ。あと次の配給はどうなってる？」

「えっと、もう手配は済んで各配給所への輸送を行っているはずですよ。」

「じゃあそのまま頼んだ。」

阪口が生徒会室から出てくると、外にはウサギさんチームの仲間が全員並んでいた。

「あれ？みんなか。」

「桂利奈、生徒会室に用でもあったの？」

挨拶より前に澤が聞いた。

「いや、昨日家に来た鳥さんがここに来たと言って言ったから連れてきてただけだよ。」

「しゃべる鳥？」

「オウムみたいな感じ。」

「それで、鳥さんは何の用だったの？」

「なんか昨日いろいろ言ってたけどわかんない。厨二病みたいなこと言ってた。」

「ネットが使えない理由知ってたらよかつたのに……」

「そういえばさ、あゆみ。なんか映画のDVD貸してくれない？テレビが見つからないせいで録画のアニメ見飽きちゃって。」

「いいよ、この後家来て。」

「というか、また上映会しない！」

「さんせー！」

「沙希も来るって！」

「帰りお菓子買ってこ！」

「お店閉まつちやつてるから無理だよ。それより映画何にする！」

山郷の家で映画を見ることにした彼女らの間では、そのまま鳥の話は立ち消えになってしまった。

広西大洗奮闘記 7 蒲生邸事件

次の日は土曜日、学園は休みだ。船舶科は人員の配置整理がこの前済んだようで、艦長の担当時刻も入れ替わっている。だから今後は前来た時に来てもいけないかも、と友人から手紙を貰った。それ以外には何も書いていない。

次に変わる時間が書かれていないところをみると、もうこの件に関して私には聞かないでくれ、ということのようだ。

時計を見ると今は昼の12時だ。頭がいつもの朝より軽い。最近早く起きれるようにはなったが朝は辛い。やはり時間を気にせず眠れる休日は素晴らしい。

また瞳を閉じる気も起きないので私は身を起こし顔を洗いみずを一杯飲み干すと、何かを食べようと冷蔵庫を開いた。が、

「あ……全部食べたんだった。」

私の遅刻記録はちよくちよく増えている。まあ連続にしない様には気をつけているのだが。昨日は夜遅くに出かけたせいか、本当に朝がきつくて遅刻した。

そのため私は朝の配給を昨日も今日も、それ以外にも何日か受け取れていない。昨日の夕方に貰った分は夜でなくなった。

まいった。このまま夕方まで何も食べられないのは苦痛だ。だが現在食べ物売っている店はこの学園艦上にはない。仕方なく私はもう1杯水を飲み上下の寝巻きを着替えることにした。私服に着替えが済むと机に向かい、読書灯をつけ昨日借りた『蒲生邸事件』続きを読み始める。

黙ってページをめくっていたが、いくらか読んだところで彼女は手を止めた。中に葉を挟んで本を閉じる。本を机の端に寄せると彼女は例の件について考えを巡らせ始めた。

(まず状況を確認しよう。まず目が痛くなるほどの光が襲って、エルヴィンさん曰く雲が急激に増えた。そのあとケータイとテレビが通じなくなつて、食糧が配給制になり、あそっういえば1回五十鈴さんが来たな。あの時勉強に誘ったがやけに暗かったな。

で、この学園艦が西南西を向いていて、山本さんそのことを聞いたら2つヒントを貰ったな。ここが私達がいたはずの伊豆諸島沖ではないということ、それとどうやっても文科省からの援助は貰えないということ……文科省か。

伊豆諸島から移動した、そして現在西南西を向いている。で、現在テレビとケータイが繋がらない。ということは、私達は日本からかなり離れた太平洋上にいるのか？いや、これはこの学園艦が日本に向かっていているとしたらだ。それに伊豆諸島沖からそこまで移動した説明が見つからない。

要するに、問題なのはどうやってそう急に伊豆諸島沖を離れたか、だ。この学園艦は動いているようだからどこにも行けなくなってしまうた可能性は低い。どこにも行けるのに、寄港できない。つまり港がないか港に寄れないか……)

麻子はこんがらがった頭を整理すべく紙に要項を箇条書きする。

(……ヒントはかなりあるんだが、それが1つに繋がらない。)

いきなり腹がなる。やはり朝起きて何も食わないのは厳しい。だが満腹では頭が働かないので今のうちに水で耐えながら思考を続けた。

(光……急激に増えた雲……確か青空が見えていた状態から一気に空が灰色になったんだよな。一気にか……)

ふと机に視線が向く。そしてさっきまで読んでいた『蒲生邸事件』の雪を被った洋館の屋根と割烹着姿の女性の姿が目に入る。箇条書きにしてもまだ少し頭が混乱しているので、気晴らし気分でシナリオを思い返してみる。

その時思い返したそのシナリオが彼女に一筋の光を生じさせた。しかし彼女は頭を左右に振り回す。

(ばかなー！ばかなー！私は狂ったのか！なぜそんなことを思いつく！これは空想！これは小説なんだぞ！)

だが、すぐにもう1つのことも分かってしまった。箇条書きと何度も見比べる。

(これも、こうなって、これが、こうなる……矛盾が、ない。だが、安

易にこれに頼る訳には……この世界が、我々のいた世界では、ないなんて……)

彼女は席を立った。衝動だった。寄港日は来ない。つまりあいつは家にいる。確かめられるかはつゆ知らず、水を飲み干した彼女は家の鍵をかけて暖かく照らす太陽の下を走り出した。

真昼間のせいか、土曜日にもかかわらず街に人はいない。この時間になれば身体も目覚める。たどり着いた学生寮の階段を数階分駆け上り、彼女はその部屋の前にたどり着いた。呼び鈴を鳴らすとやはりあいつは家において、鍵を開け扉が、それは彼女にとっては希望か絶望、どちらかにつながる扉だった。

「あ、麻子。何かあったの?」

「沙織! 無線機貸してくれ!」

「えっ? いいけどどうしたの、そんな慌てて。」

「いいから! 失礼する。」

「あ、ちよつと、麻子。」

「ベランダ入るぞ!」

「話聞いてよおー。」

制止も聞かずに家に靴を脱いで上がり込み、奥の大きな窓を大きく開く。沙織の部屋は一度行った廃校から戻る際に無線使用のため階を上げてもらったそうだ。熱心なのは試験勉強に協力した麻子からしてもありがたい。

しかも窓の外を眺めると北のほうに見えた、海岸線だ。つまり向こうには陸がある。

「……よかった、陸が見える。距離も遠くないな。」

「え? 本当?」

隣で沙織が目を凝らしているが、よく見えていないようだ。

「……コンタクトしても見えないのか?」

「視力2には敵わないよ。」

「よし、無線機をベランダに出そう。」

「あ、うん、わかった。」

重い機械を外に運び出し、コードが繋がったままであることを確認

してダイヤルをゆっくり回す。雑音が長く続く。それが一瞬途切れた。左右に回しながら麻子はその一点を探す。それがやっと繋がった時、声が聞こえてきた。

『……ガ……ピー……じつありましたイタリアのエチオピアしんこ……に伴う国連の制裁ですが……かはあるのでしょうか?』

『いえ、この決議は……か的に英仏が侵攻を容認……たと考えて差し支え……いだろう。というのも……』

ここで麻子は無線機のスイッチを切った。ただ呆然自失として腰が抜けたように座っている。

「え……今の何言ってたの?」

「……」

「国連が何とかがどうか言ってたけどあれは何?」

「……」

沙織は麻子の体を揺さぶるが反応はない。次は首が折れんばかりに力強く揺さぶられると、やっと麻子は自我を取り戻した。

「……なんで、だ。」

「えっ?何を言ってたの、あのラジオ!」

麻子は1つ深呼吸し、自分を落ち着かせると素早く言い放った。

「沙織!世界史の教科書か資料集あるか?」

「世界史の教科書?あ、あるけど、それが」

「いいから見せてくれ!」

「さっきから麻子どうしたのよ。」

「早く!」

「分かりましたよー。」

沙織はむくれた顔で机を少し探して教科書を取り出す。それを奪うように受け取った麻子は後半の方を開き、そこからしばらく無言でめくり続けた。

そしてそれはあるページで止まった。そのページに指を走らせ、間もなくそれは止まった。

「……1935年10月……」

「だーから、麻子何があったのよー!」

「第二次エチオピア侵攻だ。」

「は？」

「さっきの無線はそれを伝えていた。恐らく日本の放送を拾ったんだろう。くそっ！何でこれで論理が成り立ってしまうんだ！何でなんだ！」

「で、そのエチ……何ちゃらというのは何よ。」

「……すまない沙織、世話になった。」

「だから何なのよー！話聞きなさいよー！」

麻子は教科書を机の上に置いたままさつと立ち上がり、部屋を出ようとドアノブに手をかけた瞬間、間の抜けた単一音調の低音が少し長めにその部屋に響いた。

「……」

「……」

ゆっくりとだが麻子のほおが紅に染まり始めた。

「麻子、ご飯食べてないんじゃない？」

麻子は沈黙し、沙織に背を向けたまま気恥ずかしそうに頭を下げた。

「やっぱり。遅刻減っているとは言ってもまだまだあるし、昨日も遅刻してたから朝の配給貰えてないし、麻子は休日起きるの遅いから今朝も貰えてないだろうし、ご飯なくなってる頃だと思ったよ。話も聞きたいし、何か食べてつてよ。私はまだ備蓄があるから。」

そう言つて沙織は返事も聞かずに冷蔵庫を探し始めた。確かに麻子は半日以上水以外口にしていない。そして夕方まで貰えないのは厳しい。仕方なく麻子はその誘いに乗ることにした。

麻子が机に座らされている間、眼鏡をかけた沙織が鼻歌を歌いながら手持ちのものに調味料を加えフライパンを振っている。十分も経たずに麻子の前の机の上には皿に乗ったチャーハンが乗っていた。

「さあ、はやく食べて！」

「……美味そう。」

「でしよー！」

皿の上のチャーハンは湯気を立て、白米の白さを見せながら唐辛子の赤みとキャベツ、ピーマンの緑が負けないくらい主張する。麻子はまた腹のなる前にスプーンでそれをすくって口に運んだ。胡麻油の香ばしい香りと唐辛子の辛味、野菜の優しい甘みが同時に口に広がった。麻子は無言で次、またその次とチャーハンをすくい続ける。「それで、」

チャーハンを口に頬張る麻子の正面に座った沙織が口を開いた。

「無線機貸してご飯も作ったんだから麻子が何を知ったのか、私にも知る権利があるでしょ？」

麻子は口のを飲み込んでから話を始めた。

「……本当に聞くか？この話は絶望しか生まない。お前がただの興味でこの話を聞こうとしているなら、私は絶対に話さない。」

「麻子は絶望しているの？」

「もちろん。今のこの世界に絶望している。何もかも、な。」

「……？」

沙織は机の上に置きつ放しだった世界史の教科書をめくり始め、麻子がさつき見たページを開いた。そのまま沙織は黙読を続ける。

「……えっと、さつき言ってたのはエチオピア侵攻、これ？」

「そうだ。」

麻子は最後の一口を放り込む前に答えた。

「……うーん、何でこんな昔のことをラジオでやってたんだろう。しかもここら辺まだ授業でやってないから分かんないよ。というより、本当にこれのことやってたのかな？」

「……やはり教えられないな。それに山本さんとの約束もあるからな。」

「山本さん？ああ、麻子の船舶科の知り合いか。その子がどうしたの？」

「山本さんと誰にも言わないと約束したんだ。例えばそれがお前であっても。」

「何で山本さんが関係するの？」

「山本さんがいなければ今回のことは分からなかった。船舶科は情報

統制を行っているが、それを侵して罰則覚悟で教えてくれたんだ。これに報いないわけにはいかない。」

「……麻子は何をする気？」

「生徒会の皆さんと五十鈴さんを助ける。恐らく生徒会の皆さんはこの話を分かっているはずだ。」

「分かった。もう私の分かる話じゃない。華が楽になるよう助けてあげて。」

「もちろん。それじゃあ、ごちそうさま。またいつか今日頂いた分返す。」

立ち上がって皿を流しに入れる。

「いいいいいいよ、気にしないで。」

「必ず返す。失礼する。」

玄関での沙織の見送りに答えた麻子は、再び絶望の扉を開け帰っていった。沙織は麻子の背中を遠くに見ながら何かにひびが入ったような感じがした。しかし、沙織はその音に気付かないふりを自分しながら流しの皿を細く出した水で洗い始めた。

2012年10月13日 日本戦車道連盟本部

「……どういことでしょう。」

「どういこととは？こちらが聞きたい。」

その部屋では窓の側に立った小太りで紋付袴を着た親父が扇子片手に直立して、席に座った女を見下ろす。

「とぼけないでください。なぜ、来年度のこの8校の補助金停止及びその他の戦車道を導入している学園の予算削減に同意しているのですか！戦車道連盟会長！」

女は勢いよく席を立ち、親父と目線を合わせる。

「君は昨今のニュースを知らないのかね。それを考えれば自ずと答えは分かるだろう。」

「ええ知ってますとも！ですが、まだ行方不明になってから1週間も経っていません！」

「1週間も、だ。蝶野君。あれからあの8校の消息は少しもない。微塵もない。海上保安庁が全力で操作しているにもかかわらずだ。仮

に沈没しているとしたら、もう乗員の生存の可能性はない。

そして8校がなくなったと思われる時間より少し後に日本各地で微弱な津波を観測している。それは学園艦があつた所に近いほど強い。

すなわち何らかの理由で8校の学園艦が同時に沈没したと考えるのが自然だ。」

「そんなことがあり得るのでしょうか？8校同時になんてほぼ起こり得ないでしょう。それに沈没していながら近くの港に一切、SOSさえ無線を送らない、挙句には住民からの連絡も誰も受け取っていない、これは異常ではないでしょうか？」

「1つだけ可能性はある。テロだ。まあ、爆破を目的にしたハイジャック、と言つてもいいかな？」

「テロ、ですか。」

「そう。まず学園艦というのは基本的に管理体制が甘い。この前の大会でもサンダース大付属に大洗のスパイが進入したという報告が入っている。あの金が有り余っているサンダースでさえ一介の学生に進入を許す有様なのだ。進入準備万端のテロリストが進入しても不思議はない。

船内の警備体制も甘い。なにせ船内を含めれば平面にしてかなりの広さがある。警備も行き届かなくなるだろう。

そして準備が整い次第同時に何十箇所も爆破する。あの小さい大洗学園艦でさえ船底250メートルもあるんだ。水圧で早急に傾くくらいはするだろうな。」

「しかし、学園艦はブロック工法のはず、どこかで水は止まるのでは？」

「それいつも含めて爆破するのさ。だから今回テロで沈没したとしたら、相当の手練れを使い、かつかなりの予算と準備期間をとつただろうな。」

とにかくこう言うわけで、沈没の可能性はある。そして現在これが最も有力であるのもまた事実だ。

で、だ。国は存在しない学園に金を出すわけがない。そして現在の

高校の戦車道を考えてみよう。まともな学園が残っているか？いなくなつたのはまず4強の黒森峰、プラウダ、サンダース、聖グロリアーナ。そして今回の優勝の大洗。そのほかの有力校の継続、知波単、アンツイオだ。これらがいなくなつてまともに行っているのなんてマジノくらいなものだ。そんな所に金は出ない。

そしてプロ選手候補が今回ほぼいなくなった。プロリーグの成立を目指す文科省としてもこうなつては高校生戦車道を支援する理由がない。だから減らすことに合意した、というわけだ。」

「それはあなたが合意した理由ではないでしょう。なぜ、彼女らを信じないので！仲間のために国に抵抗した彼女らを！」

「そうは言つても存在しないものはしない。そんな物のために金をとつとくくらいなら国債を1円でも返した方が何倍も得だ。」

「とうとうあなたまで国の犬に成り下がりましたか！戦車道連盟も落ちぶれたものですね！」

「何とでも呼びたまえ。私は元来戦車道の拡大に反対だった。戦車道連盟はバブル期の借金を現在も返済し終わっているわけではない。」

そんな中戦車道を拡大したらどうなる！試合の増加！補償金の増加！この前の大学選抜との対決は廃遊園地だったから良かったものの、その前の大洗のエキシビジョンマッチなんぞ補償金だけで何百億とか吹っ飛んだんだぞ！おまけに修理してすぐのところを吹っ飛ばしおつて！そんなことが続いてはまた戦車道連盟が何も出来なくなる時が来る。

スポンサーだって今で大口のところは決まっている。これから先大幅な収入増は見込めない。補償金の出ない状況が起こつたら、2度と戦車道は出来なくなる。私はそれを避けたいのだ。

少なくとも戦車道を拡大するのは今ではない。無論、彼女らが生存しているならばこちらとして最大限の援助はしよう。」

「……」

「蝶野君、今日は帰つてくれ給え。捜索は海上保安庁の仕事だ。そういえば、西住の師範は体調が優れないそうだ。見舞いにでも行つたらどうだ？」

「……失礼します。」

蝶野は底知れぬ怒りを押さえつけながら、連盟会長の言うことに従い背を向けて、扉を大きく音を立てて閉じて去っていった。

広西大洗奮闘記 8 誰が為に

翌日10月14日昼、生徒会室。彼女らに日曜日はない。が、幾分はましになった。というのも第2次世界大戦を挟むと分かった時点で日本に停泊することを諦めたからだ。

パラレルワールドとはいえこれまでの歴史があるなら、日本が戦争に突入するのは明らかだ。それならまだ海外を頼ったほうがまし、ということになった。

大陸に近づくまでは内政に従事できる。まあ、その内政こそが一番大変なのだが。

「五十鈴さん。これが中央部の配給もらえてない人の表ね。」

「分かりました、早速手配して渡してきます！それで、渡す分は配給にいらしてない回数より減らすのですよね？」

「大体半分でいいわ。その余りは追加配給分に回すから。」
「了解です。」

鍵を握った華が部屋から飛び出していく。今日は配給をもらえてない人に追加配給を配りに行く日である。生徒会の者は1人を除いて多忙である。その1人は机で書物を開きながら干し芋の袋からまた一枚取り出してかじり始める。

「会長ー、手伝ってくださいいよー！」

「頑張つてねー。私は私でやることがあるから。」

「先程から何読んでらっしやるんですか？」

ダンボールを抱えた小山が角谷が読む本を後ろから覗き込む。

「世界史の本ですか。」

「戦間期のね。まず現在私たちのいる世界の歴史が分かってないとうしようもないからね。んで、今は中国史を確認してる。」
「なるほど、そういうことなら。」

小山もダンボールを抱えたまま部屋を飛び出していった。

「今は国共内戦の時代か。かといってこれを何か交渉のネタになるかは微妙だな。やはり物資を渡すこととかを条件に交渉するしかないな……。」

華は自転車で担当になった地域に向かっていた。選んだのは麻子のいる地域である。ここ最近生徒会室にこもりっぱなしで皆の顔を余り見ていないので、その1人の麻子の顔をふと見たくなったのだ。まあ、一度会ったことはあるのだが。

担当は前と同じ10軒、そしてあと1軒残した状態で麻子の家の前に来た。呼び鈴を鳴らすと、窓が開いて麻子が姿を見せる。

「五十鈴さんか。」

「配給、貰えてない分をお渡しに来ました。」

「ああ、すまない。少し待ってくれ。」

麻子は慌て気味に玄関のほうに周り、外に姿を見せた。

「えっと、こちらが配給分です。」

華が麻子に大きめの袋を渡す。

「結構あるな。」

「麻子さん、朝の配給に全然いらしてないですから。」

「……善処する。」

華のにこやかな顔に思わず麻子も肩をすくめる。

「五十鈴さん、あと何軒あるんだ？残りを見る限りそこまで数はない気がするが。」

「次で最後です。次は距離も近いですし、すぐ終わると思います。」

「それじゃあ、ちよっとうちに上がっていかないか？その1軒の配給の後でいい。」

「えっ？」

「少し話したいことがある。」

「はあ……」

華は腕時計を確認する。戻る予定の時間は20分先、そしてここから学園までは自転車で5分もあれば帰れる。

「10分くらいでもいいですか？」

「それくらいあれば大丈夫だ。」

「ではすぐに届けてまいります。」

さっと自転車にまたがった華は出発し、外で立ったままいた麻子の前に数分のうちに再び戻ってきた。

「さあ、上がってくれ。」

「失礼します。」

敷地の一角に自転車を止めた華は靴を少しかがんで脱いだ後に麻子の家上がった。先に部屋に入った麻子は台所の机の上に配給のものを乗せると、席の手前に華を案内した。華が席に着いたことを確認した麻子もその正面に座り華の目を見る。

「それで、お話とは？」

「……時間もないし単刀直入に言おう。今我々のいるのは、1935年の日本、なんだろう？」

「！」

「その顔は当たりか……NOであってもらいたかったのだが。」

「な、なぜそれを……」

「沙織の家で無線を借りた。そしたらその時期にあった第二次エチオピア侵攻の話が流れてきた。それ以前の情報を整理していたらこの世界が我々のいた世界でない、と仮定すれば全て矛盾がなかった。」

「そ、そのことは」

「安心してくれ。沙織にさえ言っていない。私はあなた方に協力する資格を得たかったただけだ。」

「協力、ですか。」

「日本が近くにいなながら補給がもらえてないところを見ると、日本には断られたんだらう。私が何をできるかはわからないが、どこから補給をもらうとしてもちよつとは役には立てると思う。」

華は長く息を吐いた。

「……分かりました。とにかく、そのことは誰にも言わないでください。協力していただけるのはありがたいので、今後の対応は生徒会の方と相談して決めます。」

「わかった。気長に待とう。すまないな、わざわざ家に上がってもらってしまった。」

「いえいえ、生徒会も忙しいので人が増えるのはありがたいです。すみませんがそろそろ時間なので……」

「ああ、ありがとう。」

華は腕時計を確認して、足早に自転車にまたがって麻子の家を後にした。華とて麻子を信頼していないわけではない。情報が他に漏れている、とは思わない。

しかし生徒会の予期していないところでこのことを知る者が出てしまった。それを知ったものによって万一広まったら、この学園艦はどうなってしまうのか、風に髪をなびかせながら考えているとただでさえ強い不安が上乘せされた。

「麻子さんが変なこと言ってた？」

次の日の昼休み、食堂で配給分を貰っていたみほ、沙織、優花里の3人は4人用の机を一つ使って昼食をとっていた。

「そうそう、昨日の昼にいきなり部屋にやってきて無線機貸せって言出して、で、それを聞き終わったらなんか呆然としちゃって、麻子朝ごはん食べてなかったみたいで食べさせながら何があったのか聞いたけど、麻子の船舶科の友達との約束とか、絶望しかないとか言ってる話してくれないし、よく分かんなかったから帰しちゃった。」

沙織があまりに急にべらべらと話すものだから、2人は情報を処理しきれず少し反応がなかったが、まもなく優花里が言葉を返した。

「確かに良く分かりませんね。絶望しかない、とはどういうことなんでしょう？」

「何に絶望してるんだろう？」
「でしょ。全然分かんないでしょ？」

そう答えながらも、実は沙織を除く2人には心当たりがあった。そう、この前みほの家に集まった時のあの会話である。

なぜ、この学園艦が西を向いているのか。そして、なぜ1週間も節約体制が続いているのか。

特に後者はかなりの悩みだった。みほは食糧が一括管理され節約体制開始直後の買占めで物がなくなったため、コンビニが休業中で趣味のコンビニを眺めに行けないし、優花里は配給分がギリギリで秘蔵のレーションに手が伸びてしまいそうだ。

優花里は家族と共に学園艦にいるからいいが、みほはここ1週間姉

と連絡が取れずにいる。不満は溜まる一方だった。だが、みほはそれをパンドラの箱と思っていた。興味で開けてはならないものだ。

「そうだ！次戦車道じゃん！」

考え込んでいた2人の頭を沙織が手を叩く音が振動させる。

「おお、そういえばそうでありますな！」

「久しぶりだよー。なんか遠距離恋愛の彼に会えるみたい！」

それに反応して優花里が何かを言おうとしたが、みほが優花里の肩を叩いた。喉で突っかった言葉を堪えて見てみるとみほは優しく微笑みかける。

「頑張ろうね。」

「は、はい！」

「じゃあ、早くご飯食べちゃおう！」

食事を終え皿を指定の場所に戻した3人は赤レンガの倉庫に向かう。来てみると扉が開いている。戦車道の練習がない時はいつも閉まっているから、誰がいるのかと3人は中を覗き込む。

「あれ？麻子？」

「ん……ああ、沙織か。」

皆に背を向けていた麻子は首をこちらにひねる。

「麻子さん、早いなだね。」

「まあ、な。」

「なぜ冷泉殿はポルシェティーガーを見ていらっしやったのでありますか？」

麻子が見ていたのはいつも皆が乗るIV号ではない。レオポンチームが乗っていたポルシェティーガーである。

「いや……少し気になっただけだ。」

「まさか麻子、また授業サボったんじゃない？」

「そんなことはない。昼食後にここに来た。」

「では五十鈴殿以外集まりましたし、そろそろ戦車を動かす準備を始めましょうか。」

「やっぱり華は来れないんだね。」

「仕方ないだろう。短期休学届けがまだ出ているんだから。」

「大変なんだね。」

4人は戦車に乗り込む。やはりこの中にととても安心できる。麻子が仕上げにイグニッションを押してエンジンをかけ始める。

「少し冷えてきましたから、エンジン長めに温めないといけませんね。」

「だね。まああと授業開始まで十五分だから時間はちようどいいかな？」

「だね。あ、他の人も来てるみたいだよ！」

頭の上のハッチから顔を出した沙織が知らせる。それを聞いて他の者も自分に近いところから顔を覗かせる。

「皆さん、早めに来るんだね。」

「やっぱりみんな戦車道が好きなんだよ。」

いつも通りの格好をしたカバさんチームを筆頭に各チームがこの赤レンガの倉庫に集い、授業開始の10分前にはすべてのチームがエンジンがかかる準備を始めていた。その間みほ達は砲弾を車内に載せながら準備を始めた他のチームの者やあんこうの仲間とたわいもない会話をしていた。

エンジンのかかり始める煙と轟音があちこちから見え始めた頃、全員が揃ったはずの倉庫に1人の女性が顔を見せた。真つ先に沙織が気づく。

「あれ？華？」

そう、そこにいたのは華である。いつもなら普通のことなのだが、今回ばかりは周りの者も疑いを持たずにはいられない。

「何事でありますか？」

砲弾を抱えて歩いていた優花里も声をかけた。

「こんにちは。みほさんと麻子さんはちよつとお話が、あと優花さんはその砲弾、置いておいてください。」

「あ、はい。」

優花里は素直に砲弾を立て、麻子とみほはそれぞれ頭の上で開いていた出口から身をよじり出す。華の案内される方に向かいだどり着いたのは、先程まで優花里が何度も足を向けていた砲弾置き場だつ

た。37ミリから一番大きい88ミリまで、長いものや短いものなど
多種の砲弾が砲弾ケースに並んで刺さっている。

「それで華さん、お話って?」

「……この砲弾、練習何回分ですか?」

「えっ? えつと……88ミリ砲弾は使わないから……一番使う長砲身
75ミリ砲弾が2回分にちよつと足りないくらい、かな?」

いきなり聞かれて焦ったものの、みほはケースの数から答えを出
す。

「……2回ですか……足りませんね。補給がないので当然といえば当
然ですが……ん」

「2回って今回と次も使えるから、2週間貰えなくても問題ないよ。」

「みほさん、節約をお願いします! 次の補給のあてが本当に分からな
いのです!」

「えっ? 2週間でも足りないの?」

目を見てはつきりと言われたその言葉、そしてそのあと華の黒く深
い瞳に見つめられたのに思わずみほもたじろぐ。

「……はい。」

「……」

麻子はその隣で無言で立っている。

「……どれくらい、保たせればいいのか?」

「最低、あと3回。出来れば4回、です。」

「……ということは、あと3週間は補給がない訳ですか。」

「……」

華のその無言をみほがどう捉えたかはともかく、みほはそれを承諾
した。

「それでは、練習前に失礼しました。」

華は二人にお淑やかに礼を述べ、足早に去ろうとしていた。その一
瞬、華は麻子のそばで耳打ちする。

「放課後、生徒会室へ。」

「ああ。」

それを聞くと、華はさらに歩調を上げる。

「……早く、戦車道やろうね。」

「？」

「い、いや、なんでもないよ。」

「……う？では。」

出口近くで一度立ち止まった華は首を軽くひねったものの、深く気にせず次の仕事に向かっていった。その日の選択授業の時間は砲声が少なく華道と茶道の選択者は静かであることを喜んだという。

麻子は終礼後、皆に気づかれないうように気配を消して教室を出て行った。特に沙織になんて見つかった日には何を問い詰められるかわからない。あの時は追及されなかったが、次がそうとは限らない。

鞆を抱えて広い校舎に敷かれている廊下を歩き、生徒会室の前に来た。やはり昨今の激務が中からの飛び交う声と入りにくい雰囲気醸し出す。しかしそれに臆せずに扉をノックすると、生徒会の一人が姿を見せた。

「五十鈴さんに呼び出された冷泉だ。」

「ああ、分かりました。少々お待ちください。」

話を通っていたらしく、そう待つこともなく麻子は生徒会室に入ることができた。生徒会室は手前が生徒会庶務などの業務を行う広い部屋、そしてその奥に会長などがいる会長室がある。

手前の部屋はパソコンに向かう者、書類を引っ掻き回している者など様々な者がいる。案内してくれた者は会長室にノックし扉を開いた。部屋の中央にはまた別に机が置かれ、その上に所狭しと物が並ぶ。

「失礼する。」

「おつ、冷泉ちゃん。よく来たね。ま、とりあえずこつちこつち。」

入り口近くで礼をしている麻子に対し、自分の席に着いている角谷はラフな感じで読んでいた本に葉を挟み、あと少しだった干し芋を食べきった。そのあとの角谷の手の動作がこちらに呼ぶものだったので、言われるままに角谷の机の前に来る。机の隣には小山が背筋を伸

ばして立っている。

「ところで、五十鈴さんは？」

先程の部屋にもこちらにも麻子をここに呼んだ華の姿はない。

「ああ、五十鈴ちゃんなら次の配給の準備に行ったよ。」

「なるほど。」

「……それで、聞いた話だと地上の無線を拾ったと。」

ラフな感じが急速に減少する。

「ラジオでだが。」

「それでこの世界が過去だと気付いたと。」

「そうだ。他の理由も総合して、これが一番矛盾がないと判断した。」

「流石学年1位だね。だけどね、『この世界の過去』だと答えとしては

満点じゃないんだな。」

「どういうことだ？」

「生徒会に協力してくれるんだよね？聞いたところによると補給関連で。」

「私の出来ることなら。」

「よし、それじゃあ教えよう。」

角谷は小山の補足を交えつつこれまでわかっていることを麻子に伝えた。この世界、行き先、運営の現状、その他多くのことを麻子に伝えた。麻子は基本は理解できるがためただ頷いて聞いていたが、その最中に言ったことはとても聞いていられるものではなかった。

「それと、私たち帰れるの13年後らしいんだよね。元の世界に戻るのも。」

「えっ？」

「今が1935年で帰れるのが1948年の年末だか……あれ？冷泉ちゃん、大丈夫？」

「……」

少しの間のあと、麻子は一枚のドミノのごとく前に倒れた。

「れ、冷泉さん！」

「！」

前にいた二人はすぐさま反応し駆け寄る。幸い前にあった角谷の

机には当たることなく床の絨毯に身を委ねている。小山はその麻子を素早く仰向けに直し、頭を膝の上に乗せ体を揺らす。

「冷泉さん！冷泉さん！」

角谷は素早く扉を開け、生徒会の1人を呼び止めた。

「人が倒れた！保健室の先生を急いで読んできて！」

「は、はい！」

呼び止められた者は持っていた書類を近くの机に置きこれまた素早く飛び出していった。角谷は再び麻子の元へ戻る。小山が声を掛けながら頬を軽く叩き続けている。麻子の顔へ耳を近づけると、呼吸音はつきり聞こえる。そこまで重大な事態ではないようだ。

とりあえず頭を置いていた小山の膝を少し首の方にはずらし気道を確保していると、すぐに保健の先生がAEDを抱えて走ってきた。生徒会室で書類の束に軽く当たった気がしたが、まあいいだろう。

「その人？」

「はい。呼吸ははつきりしてませんが、気道を確保してあります。」

少し麻子の様子を見た先生は1つ息を吐いた。

「大丈夫よ。多分貧血か何かだわ。ちよつと保健室で横になつてもらいましょう。」

「よかった……」

小山が胸をなでおろす。

「それじゃあ、私が連れて行きます。」

角谷は軽々と麻子を背中に背負うと、AEDを持った先生とともに生徒会室を出て行った。

「小山。何かあったら頼んだよ。」

「はい。」

目の前の闇に横一文字に光が差す。そうだ、急に視界の上と下から黒い闇が迫って、それが完全に閉じられた瞬間私は倒れたんだ。だが、まだ光しか見えない。やつと、目が慣れ始めてきた。あれ、ここはどこだ。白い天井と周り。そして、1つの顔。

「おつ。冷泉ちゃん、やつと起きたか。」

声のする方へ首を回す。

「会長さん……か。」

「大丈夫かい？」

「いや……あまり良くはないな。」

頭がボーとする。視界もまだまだ完全にはつきりとしてはいない。しかし間もなく周りにあった白が布であったことが分かった。会長が椅子に座っていることも。

「……は……」

「保健室だ。まあまだ休んでいたほうがいい。先生もそう言った。」
「連れてきて貰ったようで……すまない。」

「いやいや、無事なら何より。」

しばし無言が続いた。ボーとしていた頭はやつとしっかりと回路が動き出したようだ。

「……冷泉ちゃんはさ、なんでこの学校を助けようとするんだい？」

「……どういう意味だ？」

「そのまんまさ。正直今までの出席とか考えると、冷泉ちゃんって、あんまり集団のために動かない気がするんだよね。」

「……」

「あ、ごめん。言い方悪かったかな？」

「いや、当たりかもしれない。確かに、私は纏まって何かをするのが好きじゃない。趣味は読書だし選択科目も元々は書道のつもりだった。遅刻取り消しがなかったら戦車道をやってなかった。毎朝起きるのも辛い。」

仲間と会える場としては好きだが、あまり学園そのものは好きじゃないのかもしれない。

「……じゃあ、なんでそんな学園のためにわざわざ無線借りてまで秘密を調べて生徒会を手伝おうとするんだい？」

「……おばあの為だ。」

「おばあちゃんか……」

「この学園が変だということに気付いたとき、真っ先に思ったのがおばあさまとまた会えるかどうかだった。おばあのみが唯一の肉親である

私が一人になる前に会えるかどうか。私は過去だとわかった後も過去に来たのだから元の時代に戻れる手段もあると心のほんの片隅では思っていた。

だが……だが……13年先まで帰れないんだったら、その頃にはおばあは……」

「……」

麻子は角谷と逆の方に寝返りをうち、顔を布団で覆った。

「……それじゃあ、私たちを手伝ってはくれないのかい？」

「……いや、知ってしまった以上手伝うしかない。おばあにも合わせる顔がない。」

「……私は、たとえどんな悪になっても学園を、学園艦を残す。帰ってから卑怯者とか恥晒しと言われても構わない。そのつもりで私はいる。私を手伝ってくれるなら、相応の覚悟を持ってきてくれないと困る。」

「覚悟……」

「覚悟は、あるかい？」

麻子はしばらく目を逆に向けたままだった。だが、ちよいと体を浮かせ、少し勢いをつけて枕の上に頭を叩きつけ、仰向けに戻った。

「ある。」

「それを、支えるものは？」

「……沙織だ。」

「ほう？武部ちゃんか。」

「あいつは、私が小学校からの親友だ。中学、高校と知り合いやちよつとした友人はいたが、やはり沙織だけは別だ。それを守り、ともに帰りたい。それとこのまま腐っていたらおばあにも申し訳がたたない。だから私はやる。」

「でも非難されることをやる方がおばあちゃんに顔向けできないんじゃないのかい？」

「どちらにしろ変わらない。やらなければなぜやらなかったと怒られ、やればなぜやったと怒られる。だったら、少しでも沙織と学園の役に立った方がいい。信じてもらえるか？」

「……分かった。信じよう。でも冷泉ちゃんには生徒会の仕事じゃなくて他のことを任せようと思っっているんだ。」

「他のこと?」

その時、扉の開く音とともに先生が保健室に戻ってきた。

「角谷さん、その子どう?」

「目覚ましましたよ。」

「そう、ならよかった。それじゃあ、あなたは生徒会の仕事に戻ってなさい。あとはこっちでやつとくから。」

「はい。お願いします。それじゃ、冷泉ちゃん。明日も放課後來て。」

「分かった。」

角谷はそう言うと、保健室を出て行き、廊下からは駆ける音が聞こえた。

「あなたは今日は下校時刻まで横になつときなさい。」

「……」

麻子の首肯に微笑みかけた先生は、そのまま布の裏に下がっていった。

広西大洗奮闘記 9 ターゲット

次の日である10月16日、午前の配給を終えた後の角谷と小山、そして華のもとにかの電子音が聞こえた。隣の部屋に向かった角谷は少しの会話の後に間もなく元の部屋に戻ってきた。

「何かあったんですか？」

「いや、船舶科の井上ちゃんからこれからの航路とかについて説明があるんだって。行ってくる。」

「分かりました。」

「昼までには戻るよ。」

角谷は机の上に乗っていた飲み物のボトルを手に取り、上着を羽織って手を振って出かけていった。

学園から艦橋までは歩けば20分かかる。頭の上は雲が出ていて風も冷たいので、思わず角谷は襟を立てる。街を歩く人も車もない。艦橋の足元までたどり着くとそこから内部の階段を上っていく。

「会長、お呼びしてすみません。」

少し息があれながら階段を登り終えると、そこに井上が待っていた。

「やあ。いいよいいよ別に。」

「では、こちらです。」

井上に案内されるままに操舵室の隣の部屋に入った。部屋ではすでに他の時間の艦長の長坂と大橋が席についている。

「おやおや、これは艦長がお揃いで。」

角谷が席の背もたれを引いて席に着くと、早速地図を広げた井上が話を切り出した。

「現在我々の学園艦は足摺岬の沖を西に進んでいます。なにぶんエンジンの調子が減退気味で、動けるうちに動かしている次第です。」

それで、これは船舶科の過去の資料から分かったことなのですが、この時代の中国の沖は学園艦航行向けに掘られておらず広く大陸棚が広がってまして、その為にかなり大陸から離れて航行しなくてはな

りません。」

4人は地図を前に額を突き合わせる。

「離れてって、どれくらい?」

「300キロはあります……」

「……本当に?」

「その距離だと無線が混線せず繋がるとは思えないですね。」

「ではどうやって交渉するのですか?」

「学園艦内に1隻輸送船があります。それで沿岸まで近づくか上陸してもらって交渉してもらおう形になるかと。」

「……問題はたった1隻の輸送船の言うことを相手国が信用してくれるかどうかだね。」

「飛行機でも飛ばしてくれると早いのですが……」

「まあ、行ってみるよ。」

「あとそうになると問題は……」

「石油、か。今元の備蓄の7割が残っているけど、淡水化装置での使用停止して値上げと供給の削減やった方がいいかな? 不満溜まりそうだけど。」

「そうですね。香港とマカオに頼む際も同様になると思いますから、石油はあるに越したことはありません。」

「分かった。それはこちらでやとく。」

「それと、今後の航路ですが、まずこのまま九州の東を進み、宝島、奄美大島の間を抜けて東シナ海に出ます。そしてそこを抜けた時に会長には学園艦を離れて頂き、台湾海峡は水深の都合上通れないので与那国島、台湾の間から台湾の東へと抜けて香港方面へと向かう予定です。」

宝島から与那国島までは3日ほどかけてゆっくり航行する予定なので、支援が受けられないのであればできるだけ早く戻ってきてもらいたいです。」

「ちよっ、ちよっと待ってくれ。」

井上が地図上を指で示すが、飲み物を口に含んでいた角谷はボトルを置き、その手を出してそれを呼び止める。

「我々を受け入れてもらうことは相手国からしたら国の運営に関わる重大なことだ。それを連絡取れてから2日弱で決めて貰うのは無理じゃない？私だったら即断るね。」

「し、しかし食糧、燃料に余裕がない以上、長居は避けるべきだと思いますが？」

「……1週間は欲しい。足りなくならないように食糧はなんとかするよ。」

「そこまでおっしゃるのなら1週間取りましょう。しかしそこが燃料などから判断しても限界かと思えます。では、恐らく明日の夜には宝島周辺に到着しますので、それまでに輸送船を点検させておきます。」

「随分急だね。」

「そこはなんとかお願いします。」

「こりや今日、明日は忙しくなりそうだ。」

「それでは、他に何かございますか？」

「いや、特にないよ。」

「こちらからも他にはありません。では交渉、よろしくお願いします。」

「ああ、頑張るよ。あ、そうだ。情報統制上手くいつてる？」

「一応罰則規定設けましたし、風紀委員にも統制に協力してもらってますから多分大丈夫です。」

「おっけー。じゃあこれで失礼するよ。」

「ありがとうございます。」

起立した3人の礼を後に角谷は部屋を出て息を少し荒らしながら階段を下り、学園へと戻っていった。

「……本当にいいのか？」

「何がだい？冷泉ちゃん。」

その日の放課後、角谷の机の前には麻子が直立していた。角谷は躊躇なく干し芋を半分ほど一気に食べた。

「いや……後ろがとんでもなく忙しそうなんだが、私と話しているのか、と。」

麻子の後ろでは小山と華がキーボードをかなりの速度で叩きながら、もう1人いる男を交えて言い合う声がする。

「いやー、明日から私出かけちゃうからさ、今日中に話せてむしろ良かったよ。」

「ならいいが……それで、昨日言っていた他のことって何だ。」

「いや、今回いろんな国から援助を貰えるように交渉するって話でしたでしょ。」

「ああ。」

「それで、日本からは受けられない、というのも理解していると思う。ではどこから受けるか？そのうちの1つが中国、まあ中華民国だね。そことの交渉は英語でもいいけど、相手の好感度を上げて少しでも援助貰える可能性を上げるためにも中国語でやりたい。」

「いくら何でも明日までに中国語を覚えるのは無理だぞ。」

「そりゃそうだ。明日からの通訳は英語科の松阪先生が中国語話せるそうだから、事情を話して来てもらうことになっている。英語も無論大丈夫だしね。だけど今後も考えると松阪先生1人に頼るのも悪いし、もう1人中国語を話せる人が欲しい。」

だからマニユアル見て戦車を動かせるほどに吸収できる冷泉ちゃんにそれを頼もうと思うのさ。そのために必要なら何だってやるよ。」

「なるほどな……だが、やはりそれなりに話せるようになるまでに時間はかかるだろうし、その頃には中国に援助を断られているかもしれないが、それでもか？」

「まあ、もう1つの仕事を兼ねてもらおうしね。」

「もう1つ?」

「見張り。」

「何のだ?」

「西住ちゃん達の。」

「……」

椅子に座っていた角谷は正面を向きなおし、背筋を伸ばして一つ息を吐いた。

「ぎつらいことを言っているとは思いますが、冷泉ちゃんはいつもあんこうチームとして戦車乗っているから分かると思うのさ、西住ちゃんの敵の作戦を察する力を。西住ちゃんにこの現実を伝えるのは今じゃない。」

これからの交渉でやはり戦車道はタネになると思う。そしてそれへの反対が湧くのは必至だろうね。反対を抑えるには既成事実、つまり援助協定を結んだ上でその時に事情を説明して、そうするしか我々が助かる道はない、と言うしかない。交渉を纏めるまで知ってもらわないはいかないんだ。」

「……そうせざるを得ないのか。」

「我が校は他にアンコウくらいしか特産はないしね。やはり乗員の6割が学生じゃ渡せるものは少ないよ。まさか所有物没収とかやる訳にはいかないし。で、西住ちゃんとか戦車道の他の人がこのことを知らないままにしておくことをお願いしたい。」

「……だが、秋山さんは現状を疑い気味なうえに、西住さんに至ってはこの前五十鈴さんからあと2週間以上儉約体制が継続されうると聞かされているから、我々をかなり疑っていると思うぞ。」

麻子は腕を組みながら眉を潜め角谷を見る。

「だけどその疑問を自分で解く前に、2人とも恐らく冷泉ちゃんに1回相談してくると思う。だからその時に冷泉ちゃんは今の状況とは別の方向へ2人の思考回路を向けるなり言うことを否定して欲しい。何かあったら小山か五十鈴ちゃんに連絡頼むよ。」

「……それは、この学園艦存続のために必要なことなんだな?」

「そう。最悪のパターンは西住ちゃんが住民の生徒会への不満の代弁者として担ぎ上げられることだ。」

学園の救世主である西住ちゃん相手ではこちらは迂闊に手を出せない。そして現在の体制は崩壊する。」

「西住さんが自分から行動するとは思えないが……」

「西住ちゃんは自分の信念を曲げることはない子だ。つまり生徒会が何かを隠していてそれを解く必要があると感じるか、あとは仲のいい友人からお願いされたら行動に移すだろうね。」

「沙織とか秋山さんとかか……行動に移されたら援助が貰える前にこちらが自壊、少なくとも混乱するな。そして混乱している組織を受け入れるところはない、と。分かった。1度調べない方がいいとは言ったが、何かあればできるだけ対策しておこう。」

「流石だね。それでね、一応辞書と中国語に関する本を渡すから頑張つてね。まあ冷泉ちゃんならこのせいで大幅に成績落ちることはないでしょ。」

「すまない。」

「それじゃ、以上！何かあったら連絡よろしくね。」

「その前に1つ聞いていいか？」

背もたれに勢いよく倒れた角谷を麻子が呼び止める。

「ん？」

「貴女は私がこの世界について知ることを予想していたのか？」

質問を聞いた角谷はまた上体を起こす。

「……まあ、可能性の1つとしては予測はしていたね。」

「……凄いな。」

「まあ、この時期だったのは渡りに船だったけどね。」

「そちらこそ流石だな。変なことを聞いたな。それでは失礼する。」

「頑張つてねー。」

角谷の机の上の数冊の書籍を受け取った麻子は、律儀に一礼すると後ろの3人を邪魔しないように注意しながら会長室を去った。

「……これで、西住ちゃん対策はよし、と。それで2人とも、調子はどう？」

「明日までなんて急すぎます！あ、松阪先生すみません！これは中国語で何て言うんですか！」

「食糧は農業科、水産科が増産への餌と肥料不足の解消を言ってきています。それを解決できない限り配給期間の長期化は何とも……」

小山は提案文書、華は食糧配給期間長期化への対策を練っており、小山の作業を茶色縁の眼鏡をかけた中年の男が手伝っている。

「いやー、松阪先生。手伝っていたいで、更に明日からの交渉について来ていただき本当にご迷惑をおかけします。」

席を立つた角谷は小山の席のそばにいた松阪のもとに腰を低くして向かう。

「構わないよ。私だってこの学園に住む1人だ。君達が弛まぬ努力をして掴んだ学園存続を無駄にしたくないのは当然だろう。だが、私も現地の人ばりに中国語が話せるわけじゃない。英語でもいいなら、英語で交渉をしたいものだ。」

「そこは向こうの出方次第ですね。では引き続きよろしくお願いします。私は明日からの準備を。」

角谷はヒイヒイ言っている小山と資料を見比べながら新たな書類を成す華を後ろに、隣の部屋で明日の出発の準備を始めた。まあ、呼び止められた気がしたのは気のせいということにしておこう。

その日の夕方、みほの前には広い海があった。陽は学園艦の船首の方の彼方に反対側まで空を紅に染めながら広がる。風は余りない。だがこれから後ろから風が吹く時間帯になるのだろう。その時は肩までの髪も耳を覆うに違いない。

「みほりん、どうしたの？」

後ろから彼女より髪の長い沙織が近づいてくる。彼女らの手には物の詰まったマイバックが握られている。買い物帰りの学生のように見えるが、買い物物ではない。

「いや……海を見たかった、だけ。」

みほの顔は相変わらず海を眺めていた。

「……ちよつと見ていこうか。隣失礼するね。」

半円状に飛び出したテラスの縁、かつみほの左横に沙織は手を乗せた。

「やっぱり夕焼けって綺麗だね。」

「……そうだね。」

「どうしたのみほりん。こんな日常で元気でなくなっちゃうのも分かるけど、だからこそ自分から元気出さなきゃー！」

肩に手を乗せて励ますが、反応は芳しくない。

「……この海の眺めってさ……頑張った成果の1つなんだよね。」

「そりゃあね。だって学園艦が残んなきゃこの景色見えないし、山の中もいいけどやっぱりこっちの方が私は好きだな。ゆかりんは生き生きしてたけど。」

「ちよつとき、あの向こうの方見てくれる?」

みほは左手をダルマの首のように下が引き伸ばされた太陽とは逆の方に向ける。

「何かあるの?」

沙織はテラスの縁から大きく身を乗り出し、指差す方を見る。だがみほは指を差したまま返事をしない。

「……今っ!」

「へっ?」

1回みほが口にした言葉を沙織はよく聞き取れなかった。しかしみほはそれに対する返事をせず、沙織はそのままみほの指す方を眺め続ける。そして少しして、みほが言いたかったことが沙織の目に飛び込んできた。

「……光? 灯台かな?」

そう、それは周期的に点滅を繰り返す白い光だった。

「……そう。そして多分距離もそう遠くはないと思う。」

「それがどうかしたの?」

「……陸が近い。なのに、私たちは補給を貰えてない。」

「みぼりん?」

みほは海の方に視線を戻し、そのみほを沙織は隣から見つめる。

「……昨日の練習の前に、私華さんに呼ばれたでしょう。」

「ああ、来てたね。何言われたの?」

「補給が貰えるのにいつまでかかるか分からないから、砲弾の使用量を節約してくれって。」

「だから昨日の練習砲撃訓練少なかったんだ。というより、そんなに砲弾の残り少なかったっけ?」

「……2回練習するのに問題ないくらいはあった。つまり、2週間先も補給船の来る当てがないということ。」

「……これがあと2週間も続くの?」

「近くに陸がある。港もあると思う。なのに2週間先まで補給船が来れない……つまり南の島の港が使えないから補給船が来れない、ということじゃない。」

「……」

「何かある。港が使えないとかそんな些細なものじゃない問題があるんだと思う。」

「……生徒会に任せちゃっていいんじゃない？ 私たちが戦車道なり何なりでどうこうできそうな問題じゃなさそうじゃん。それに麻子も明かさない方がいいって言ってたし。」

「……やっぱりそうだよね。」

「もー、一人で考え込むのはみぽりんの悪い癖だよ！ 考え込むのは考え込むのが上手い人たちに任せないと！ 早く帰ってご飯にしないと日が暮れるよ！ 明日も学校だし。」

「……そうだね。」

やっとみほは海の方から視線と体の正面を外した。陽はもう半分ほど向こう側に沈み、今にも暗闇が周りを覆わんとしていた。みほは沙織をもつてしてもどうにもならないほど不安と恐怖に包まれていた。情報は入ってくるが、この包みを見ほはそれを用いて解こうとする気にはならなかった。

広西大洗奮闘記 10 良い航海を

中華民国首都 南京

扉を開き、1人の中年くらいの男が自身の執務室に戻ってきた。「閣下。」

部屋で待っていた者が礼儀正しく敬礼する。それに軽く答えると、壁に大きく掛かっている白地の中国の地図に背を向けつつ席に着いた。

「如何なる御用ですか？」

「南昌に電話する。少し下がっていてくれ。それと茶を頼む。」

「はっ。」

再びかしこまって敬礼すると、その男はそそくさと部屋を去った。机の上に電話を移した彼は受話器を取り、相手のいる場へ向けて指を当てた。かけてから間もなくコール音は途絶えた。

「ー。」

「私だ。雨農に変わってくれ。」

「ー。」

部屋の男はそれだけで口を止めたがすぐに別の男に変わったようだ。

「ー。ー。」

「雨農、例の知波単…とやらの情報は入ってきたか？」

「ー。ー。」

「そうか。それで？」

「ー。ー。」

「ほう…そうか。意外だな。」

「ー。ー。ー。」

「ふむ、他にもあるとは。それについては何か情報は来ているか？」

「ー。ー。ー。」

「日本の動向、ひいては親日派の動向とも関連するかもしれないから。頼んだぞ。」

「ー。」

そう言うと男は耳に当てていた受話器を電話機に戻し、電話機を後ろの棚に戻した。それから机の左脇にある大きな地球儀に手をかけ、日本、本州、東京から微妙に東にずれた程に指を当てる。それと同時に彼の右の方からノックが聞こえる。

「どうした?」

「お茶をお持ちしました。失礼してもよろしいでしょうか?」

「ああ。」

戻ってきた付き人が台の上に乗せ、湯気を漂わせる茶を机に置く。男は少し香りを嗅いだのち、異常はなさそうだと感じて少し口に含んだ。やはり普通の茶であり問題なかった。喜ばしいことだ。味も宜しいのだから尚更だ。

東からくる例の艦、それをどうするかは早急に纏めねばならないだろう。

10月17日夜 大洗女子学園艦補給船ドック

何時もは補給船がひっきりなしに訪れるここもしばらく補給船が来ていないせいかわつそりしている。荷物を背中に抱えてエレベーターで降りてきた角谷の向こうの方では灯が点いている。

「会長、お待ちしました。」

「おや、長坂ちゃん。来てもらっちゃって悪いね。」

船の前で待つ長坂に角谷は近づきつつ軽く手を振る。

「いえいえ、これも仕事のうちですから。」

「それで、輸送船の準備はどう?」

「問題ないです。食糧と水も積み込み済みです。これから少々他の日用品を積み込みますが、それも間もなく終わるでしょう。」

「仕事が早くてありがたいね。」

「そちらからいらつしやるのは2人でよろしいですか?」

「ああ、私と松阪先生の二人だよ。」

「ところで、松阪先生は?」

「ちよつと中国語の関連書類持ってくるから遅れるって。」

「分かりました。おいお前ら、早く運べ!」

荷物を持って船に向かう一人が足を止めていたのを見た長坂がその者に叫ぶ。その者はすみませんと一言口にして歩みを再開した。

「いいよいよ。まだこっちは出発しないんだし。」

「そうですがこういう所もきっちり締めとかないと今後面倒になりますから。」

「じゃあ、いつもの事だけど出かけている間も学園艦のことよろしくね。」

「お任せください。そちらこそ我々に幸運を持ってきてください。」

「ははは、そんなこちらに都合の良い条件は提示しないよ。やはり相手が相手だからね。厳しくはなると思うよ。」

「大丈夫ですよ。文科省をやり込めた貴女なら。」

「だどいいけどねえ。」

後ろからのエレベーターの到着音を受けて顔を向けると、白い船体を前に語る二人の後ろから書類カバンを手に持った茶縁の眼鏡の男が駆けてくる。

「いやあ、角谷くん。待たせてしまって申し訳ない。」

「ありがとうございます。そういえば、一緒に行かれる間の授業はどうなさいましたか?」

「代講を頼んだ。病気で休むことにしておいてもらった。」

「なるほど、それなら大丈夫でしょう。」

「そろそろ出発かね?」

「ええ、負けられない戦いです。」

「頑張ろうじゃないか。」

2人はがっちりと握手を交わす。角谷の方が手は小さいが、力は変わらない。

「それでは、今回同行する操縦士をご紹介します。山本ー、田中ー!」

「はい!」

長坂の呼びかけに輸送船の中から顔を出した2人から元気な返事が帰ってくる。

「お前らを紹介するからちよつと来い。」

「あ、はい。今行きます。」

輸送船から駆け下りる音ののち、間もなく山本と田中は長坂のところに来た。

「えっと、こいつらが今回同行する山本と田中です。私の班の操縦担当の一人で、その中でも腕がいいので信頼してやってください。」

「松阪先生、会長、よろしくお願いします。山本と言います。」

「田中です。よろしくお願いします。」

「よろしくね。」

「よろしく頼む。」

二人は頭を上げた黒い短髪の山本と茶じみた肩にかからない程度のストレートの田中とそれぞれ再び握手を交わす。

「えっと、それじゃあ確認いいかな？行き先はとりあえず上海周辺。位置はリーダー使ってこちらを確認してそれを伝えてくれる？」

「はい、もちろんです。」

「食糧、水は1週間分。あとは燃料も。」

「大丈夫です。」

角谷と長坂の確認作業が一区切りついたその時、入り口の方からまたエレベーターの到着が知らされる。

「ん？」

「会長ー！」

向こうから多くの人が駆け寄ってくる。

「みんなか。」

その群れに感慨を感じている間に角谷の前方の視界は人で埋まっていた。

「交渉頑張ってきてくださいー！」

「学園のことはやっておきますー！」

集まった生徒会の仲間たちは次々に激励の言葉をかける。

「うん、やってみせる。この学園艦が助かるまで！」

一人一人答えていると向こうから一人近づいてくる。近くに来ると角谷の周りの群れはモーセよろしく割れた。

「小山。」

小山の目の下のクマが激務を物語る。角谷はカバンから小山の激

務の賜物を取り出し、小山の目の前に突き出す。

「安心しろ！これは無駄にはしない！そして、私が離れている間は小山がこの学園艦のトップだ。しっかり纏めといてくれよ！」

すこしうつむき気味だった姿勢がぴんと伸ばされる。

「……お任せください！」

「五十鈴ちゃん！」

角谷が声をかけると、すこし後ろから華が顔を出す。

「はい。」

「小山をしっかりと支えてあげてね。」

「はい！」

「他のみんなも仕事はしっかりね！暴動起きたら起こした人と一緒に全員でアンコウ踊りを学園のグラウンドでやってもらおうから！」

「はい……えっ？」

「よし、それじゃあそろそろ時間だ。乗りこもう。」

群れのものの一部の膝はガクガクと揺れ、他にも動きが急にぎこちなくなる者など様々な反応が見て取れる。が、角谷はそれを無視して背を向ける。

「そうだな。早く話は伝えたほうがいい。」

「エンジンは？」

「もう掛けてあります。」

「それでは、良い航海を。」

敬礼をして見送る長坂の傍の階段を登り、4人は船に乗り込む。

「よし、山本ちゃん、田中ちゃん。出発だ！」

「はい。」

リズムを刻むエンジン音が大きくなり、周期も短縮されていく。そして、輸送船とこの学園艦とを繋いでいた鎖が外された。船は円を描いて大海の方へ船首を向ける。

警笛はない。ただ船のみが明かりも灯さずに海へ飛び出している。輸送船の後ろでは角谷と田中がにこやかに手を振っている。そしてドックに残った者もそれに振り返している。

助かるという幸運を願って。学園艦から出た輸送船は更に船首を

左に回してドックの者たちの視界から去っていった。

「みんな……」

輸送船が見えなくなった後、ドックに残った一人、小山が切り出す。

「やるよー!」

「はい!」

出航した4人は船内の操舵室に集まる。

「それで、上海まではどれくらいかかるの?」

「飛ばして17時間以上はかかりませぬ。」

海の方を向いたまま舵を握る山本が答える。

「そんなにか!」

「まあ、700キロありますから仕方ないですけど。」

「結構あるね。理想としては上海に着く前に中華民国との交渉の場があれば良いんだけどねえ。」

「夜も遅いですし明日もありますし、会長と先生はお休みになってください。我々が操縦とかやるとききますから。」

「良いのかい?無線くらいなら手伝えるよ?」

「それが我々の仕事ですから。」

山本と田中の二人はにこやかに角谷と松阪の方を向いた。

「それじゃあ……」

「お言葉に甘えて。」

それを聞き角谷と松阪は布団のある倉庫へと物を取りに向かった。そのまま、その晩は時折船舶科の二人の声がする他は特に物音もなくふけていった。

翌朝、角谷が寝ていた倉庫の一室で目を覚まし、一つ大きく伸びをして布団をたたむと輸送船のデッキへと身を出した。

船の周りを一回り歩くが、やはりあまり大きくない。海風が容赦なく角谷に吹き付け、髪を巻き上げる。

「気持ちいいー!」

船のデッキの柵に腕をのせ、その強い風を味わう。船はとても早く進み、後ろに白い泡の筋が何本もついてきている。前を見れば青い海

が視界いっぱい広がっている。

しばらく海風に当たっていたが、お陰でちよつと肌が乾燥してしまったようだ。顔を洗うべく船の中に戻り挨拶がてら操舵室に向かう。

「おはよー。」

「あ、おはようございます。」

「いやー、昨日からずっとやってもらっちゃって悪いね。」

「なんだかんだ交代でやってたりしますし、寝不足はいつもの事なんですね。」

「だよ。」

田中の言うことに山本が同調すると、2人は顔を見合って笑い出した。

「やっぱり船舶科は大変だねえ。」

「その代わりのこの学費ですから、おあいこですよ。」

「しかも休みなしでしょ。」

「停泊時にはたまに休暇が貰えたりしますね。といつても行く場所もないですけど。そういう日は気が済むまで寝るに限ります。」

「そういう日くらいしか出来ないもんね。」

「そんな中でこんなよくわかんない世界の操縦頼んじやって悪いね。」

「まーしかし、この世界で私たちはどうなってしまうんでしょうね。」

「一歩間違えれば奴隷行きかもしれないからね。」

「……奴隷ですか?」

「奴隷というのは語弊があるかもしれないけど、搾取の対象には十分なり得るよ。」

「……頑張ってください。残念ながら我々には何も出来ないのだから……」

それを聞いた角谷は腹の底から大きく息を吐き出すと、窓の外に広がる海に背を向けた。

「顔洗って朝食作ってくる。」

「あ、お願いします。」

角谷は船内のキッチンらしきところに向かう。まあ、キッチンと

いっても給湯室に一つコンロが取り付けられたくらいのものだが、それにしては大きな鍋やらフライパンやらがあちこちにある。何せ学園艦は本土からかなり離れた場所も航行するのだ。それに補給する補給船、輸送船の航路も伸びる。そのためには自動的に乗員への飯を一気に作って楽する必要があるわけだ。

角谷はフライパンを1つ手に取ってまな板とともに洗い、業務用の冷蔵庫に詰められた食糧の中から適当に足が早そうな野菜を見繕って刻み、野菜炒めを作り始めた。野菜の水分が抜けて炒めやすくなつたところに塩胡椒で味をつけ、さらに混ぜて出来上がりである。

皿は洗われて棚にあるので4つ取り出し、パンとともに乗せれば朝食の出来上がりである。それを2回に分けて持っていくと、操舵室にはちやぶ台が用意されている。

やはり日用品を積んでくれてありがたいと思いつつ、起きてきた松阪とともに存亡を賭けた一つの戦いに向けて朝食を摂った。操舵室は時折入る無線の音以外は波の音で占められていた。

広西大洗奮闘記 生徒会十αと学ぶ戦間期中国史講座 上

生徒会十αと学ぶ戦間期中国史講座

小山「……て、いきなり何ですかこれ？」

角谷「いやーこの小説って歴史物っぽいからさ、やっぱり歴史とか何とか分かってないと読者の方もつまないんじゃないかね？ってことで作者が書くことにしたんだって。」

冷泉「まあ歴史上の人物とかも出てくるからな。説明した方がいいだろう。」

五十鈴「……というわけで始めるのですが、ご注意です。」

作者からこの変な設定だらけの駄文を読んでくださる心の広い読者様への注意

・WIKI参考にしています。

・キャラ崩壊。

・独自見解が混じります。(思想的な寄りはできるだけ抑えるつもりです。)

・解説にネタを混ぜますが、実際の歴史とは一寸たりとも関係はございません。

・これで歴史を勉強した気にならないように、特に受験生！こんな読むなら資料集や教科書見ろよ！受験に関係ない話も載せるから！

・これも歴史上のいかなる人物、出来事、思想を評価、賞賛、非難するものではありません。

・変なところあったらコメよろし。てか絶対あると思う。

・物語本編の流れとは関係しません。

登場人物

解説 小山柚子(メイン)

補足 冷泉麻子、角谷杏(ツツコミ)

疑問提示 五十鈴華(？の提示とか)

その他多くの歴史上の人物のみなさん

小山「何で私が解説なんでしょう？」

角谷「簡単。私だと軽い感じになるし、冷泉ちゃんは説明苦手だし、五十鈴ちゃんよりは小山の方がいいでしょ、て訳。」

五十鈴「私まだ世界史の授業でそこまで習っていませんので、小山先輩お願いします。」

小山「……分かりました。」

角谷「作者から辛亥革命の辺りからよろしくだつて。」

小山「辛亥革命からですか。ではうだうだやつても何ですし、早速始めましょう。」

清末期と軍閥時代

小山「ではその前の清についてはサクツとやります。満州族により成立した国家、清はアヘン戦争、太平天国の乱、アロー戦争、清仏戦争、日清戦争など多数の戦争に敗北を続ける中で弱体化していきま

す。無論ただ侵略を受け入れたわけではなく、曾國藩、李鴻章らによる洋務運動が展開されたり、康有為、梁啓超らによる変法運動が展開されたりして近代化を進めようとはしましたが、戦争による挫折、保守派の弾圧などにあい、いずれも失敗に終わります。」

冷泉「李鴻章は下関条約での清国全権だったことでも知られているな。因みに洋務運動と変法運動の違いは前者は清の政治体制は維持した上での近代化を目指したのに対し、後者は立憲君主制を目指したことがあるな。」

小山「そして度重なる戦争の敗北により、また賠償金の担保として清領のあちこちに欧米列強は租借地や鉄道利権を得ます。」

角谷「租借地っていうのは期限付きでの領有権譲渡または売却のことだね。イギリスが得た香港とかが有名かな。日本もロシアが得ていた南満州鉄道の利権を日露戦争で手に入れてるね。」

小山「そして度重なる賠償金を背負わされた清を更にズタズタにする出来事が起きます。1901年、欧米人への不満が高まった清の北部で義和団と呼ばれる宗教結社が暴動を起こし、当時の権力者であ

る西太后は気でも狂ったのか義和団を支持し列強に対し宣戦します。これにより北京の列強の大使館は義和団に包囲されます。」

五十鈴「暴動を起こしている人たちを支持しちやったんですか！」
冷泉「義和団が唱えていたスローガンが扶清滅洋といってな、つまり欧米を追い出して清を榮させようということだ。だから清としても弾圧するのは気が引けた、という訳だ。これを義和団事件と言う。」
小山「が、軍事力で勝てるはずもなく間もなく8カ国共同出兵により義和団事件は鎮圧され、清は賠償金として4億5千両、日清戦争の倍以上の賠償金を支払うことになります。」

西太后、義和団「やってやるやってやるやーってやるぜ♪きーらいな列強をぼーこぼこにー♪戦争はすーるもの堂々とー♪」
英米独澳日露伊仏「するわけねえだろおええ！そんな訳ねえじゃん！」

西太后「へ、へ、へ」

角谷「まあこんな感じだね。こーゆーのもやるからよろしく。」

小山「その後流石にこれはまずいと保守派も含め光緒親政と呼ばれる改革が行われます。しかしこれは最初に言った辛亥革命により清が滅ぼされ終わります。」

辛亥革命といえは、孫文の名を思い浮かべる人も多いでしょう。孫文（孫中山、実は中国ではこちらの呼称の方が有名。）は革命を志し1894年ハワイで興中会を結成。その後革命運動を行っていた華興会、光復会などの団体を纏めた中国同盟会の総理として、華僑の援助を受けてその後何度も失敗しつつ革命運動を続けていきました。この時の孫文が唱えた方針を民族の独立、民権の伸長、民生の安定の3つから三民主義と呼びます。

この辛亥革命の契機となったのは、1911年に清政府が民間資本で建設しようとしていた幹線鉄道を国有化しようとしたことです。しかしこの国有化は借款のタネ、つまり借金の担保にするためだったので、建設地の四川省で暴動が起こります。この流れの中で、長江流域の武昌にいた清軍の革命派が蜂起し、清からの独立を宣言します。そして長江以南の各省がこれに続きました。

当時アメリカにいた孫文はこれを機に帰国し、翌年1月1日、南京で中華民国臨時大總統に就任します。」

角谷「武昌は今の武漢の一部と思ってくれればいいよー。」

小山「ですが、成立したばかりの中華民国に清を倒すだけの力はありませんでした。そこに目をつけたのが清の軍人で近代的な新建陸軍を設立した袁世凱でした。彼は中華民国と交渉し、清の皇帝を退位させる代わりに自分が中華民国大總統になることを提案します。

近代的な軍事力を握る袁世凱と戦うのは不利だと孫文は袁世凱と手を結び、袁世凱は当時の清の皇帝の宣統帝を退位させました。これにより清王朝は滅亡、袁世凱を大總統とする中華民国が成立しました。」

冷泉「案外ここまで長いな。」

小山「とにかく続けます。孫文は宋教仁とともに国民党を結成し、議会での戦いを始めようとします。これに対し袁世凱は首都を北京に移し、国民党を弾圧して議会を解散させ、実質的な独裁政権を樹立します。これを北京政府と呼びます。これに対し孫文も武装蜂起を起こしますが、これは失敗に終わります。

その翌年の1914年、サライエヴォでセルビア人がオーストリア、ハンガリー二重帝国の皇位継承者を銃殺したことをきっかけに同盟国と協商国に分かれて第一次世界大戦が勃発します。日本の当時の大隈政権もこれに乗じて協商国側に加わりドイツに宣戦布告、ドイツが租借していた山東省青島や南洋諸島を占領します。そして中華民国北京政府に対し二十一カ条の要求を突きつけ、袁世凱はこれを受け入れます。」

角谷「これを受け入れた5月9日を中国では国恥記念日として反日感情を強めたんだよね。まあ内容が満州利権の存続、旧ドイツ利権の譲渡、さらに工業や内政の運営に日本を干渉させろって言っているものだから仕方ないけどね。」

冷泉「でも実際要欲しかったのは満州利権の存続、できればドイツ権益の譲渡くらいで、あとは断つてくると日本が読んでいたという話もあるけどな。あとは交渉で削る気だったらいい。」

角谷「最後通牒しといてそれはないでしょう。」

小山「まあとにかくこれを受け入れた袁世凱は皇帝を名乗ろうとしますが、これに対し孫文は第三革命を行い、これにそれまで袁世凱に協力していた軍人も加わって袁世凱の帝政は取り下げられ、その後すぐに袁世凱は病死します。」

彼の死後、北京政府では各地の軍閥が近代化を進める中で覇権を狙って争いが続けられます。最初に実権を掌握した段祺瑞は協商国側に加わり同盟国に宣戦し、また寺内政権の秘書から借款を受けます。この際に払われた1億4500万円は今の約3兆円に当たります。」

五十鈴「すごい金額……」

冷泉「ちなみにこの段祺瑞政権はそう長く持たなかったから貸した金は全然帰ってこなかったけどな。」

五十鈴「」

小山「ほかの軍閥は後で纏めて名前だします。とりあえずこんなところでしょうか？」

角谷「おっけー。この調子でよろしく。」

小山「ではこれからもやっていきましょう。」

北伐と国共合作

小山「第二革命の失敗時に、孫文は日本に亡命し、中華革命党を結成します。また第一次世界大戦は協商国側の勝利に終わり、パリで講和会議が行われヴェルサイユ条約などが結ばれます。このパリ講和会議で中国は二十一カ条の要求の破棄と山東省の租界の回復を要求しましたが、日本の要求を受けたこともありこれは拒否されます。」

これを受けて1919年5月4日、五、四運動とよばれる抗議運動が北京で発生し、それは全国に拡大し、ストライキなども起きました。これによりパリの中華民国の使節団は条約に調印しませんでした。五、四運動を受けて孫文は武力革命から民衆の力による革命へと方針を転換。名前も中華革命党から中国国民党に改めます。

のちにドイツとは国交を回復し、国際連盟の原加盟国、非常任理事

国として国際的な地位を向上させていきます。」

五十鈴「前の国民党とは別なんですか？」

小山「はい、また別にです。また同時期、北のロシアで二月革命、十月革命によりロシア帝政、その後にできた臨時政府は崩壊し、社会主義国であるソヴィエト共和国が誕生します。ソヴィエト共和国がカラハン宣言を出し、中国に持っていた利権の放棄を宣言したことを受けて中国国民党はソ連寄りの立場を取り始めます。

同じくソ連の影響を受けて1921年、上海で陳独秀らの若い知識人の呼びかけのもと中国共産党が成立。これには毛沢東なども加わっていました。

孫文はソ連支持だったこともあり、1924年、中国国民党第1回大会を開催し、『連ソ、容共、扶助工農』のスローガンのもと、対北京政府のために共産党員の中国国民党への個人入党が許され、第一次国共合作が成立します。この後、内戦を終結させたソ連の支援のもと中国国民党は軍事力を増強させます。

その頃、北京政府はワシントン会議で山東問題や二十一か条問題について一定の解決を行えましたが、清の時代に奪われた関税自主権の回復については上手くいかず、財政が破綻。統治能力が低下します。

翌年に孫文は病死しますが、その二月後に当時租界地であった上海の労働争議を外国軍隊が鎮圧したことをきっかけに五、三〇運動という反帝国主義運動が勃発。そのさらに2ヶ月後に中国国民党は広州国民政府を樹立し、翌年1926年7月に中国統一のために孫文の死後実権を握った蒋介石（中正）を司令官として広州から北伐（出師北伐）が開始されました。これには民族資本家、特に蒋介石の妻の一族である浙江財閥が後押しし、翌年一月には武漢を占領、蒋介石の反対はあったものの中国国民党左派が武漢に汪精衛（兆銘）を首班に国民政府を遷都します。」

角谷「ちよいと小山ストップ。寸劇混ぜるよ。」

小山「さつきみたいのですか？」

冷泉「文字の羅列だけじゃ面白くないしな。」

小山「はあ。」

角谷「それじゃ、始めるよー。」

冷泉「軽い感じだがまあ許してくれ。」

「簡単北伐劇場」

蒋介石「孫文先生の意味を継いで中国統一するゾ！」

馮玉祥（甘肅省の軍閥）「おう協力してやるよ。」

蒋介石、馮玉祥「殺っちゃうよ！殺っちゃうよ！ほらほはほらほら。」

周蔭人「ぐはっ！」

孫伝芳「うぎゃ！」

閻錫山（山西省の軍閥）「俺も協力させてよ頼むよ頼むよ。」

蒋介石「おk。」

蒋介石「南京、上海占領！」v

上海の人「やったぞ！これで帝国主義をぶっ潰せる！」

上海の人「資本家や地主も追い出しちまえ！」

蒋介石（……共産党支持やばいな。）

資本家「共産党は先祖代々の財産や土地を取り上げるそうです。」

地主「このまま中国が共産主義国家になったらどうするのです。」

蒋介石「わかりました。何とかしましょう。」

1927年 4月 上海クーデタ 第一次国共合作の崩壊

蒋介石「共産党員は犯罪者だ！厳罰に処せ！」

毛沢東「井崗山に逃げろ！蒋介石、今に見てろ！」

蒋介石「アカは害悪、はつきりわかんかね。よし、南京国民政府も

立てたし、それでは統一再開だ！」

汪精衛「すみません左派追い出したんで合流させてください。」

蒋介石「……まあいいか。」

呉佩孚「あべし！」

張宗昌「ぎゃあああ！」

田中義一（当時の日本首相）「やい山東に来るんじゃないやねえぞ！来たら戦争な。」

蒋介石「ちよっ！日本と軍閥との2正面とか無理ゲ！山東はどうぞどうぞ。山東は避けて進撃だ！」

(實際濟南で武力衝突が起こっている。)

張作霖(満州の軍閥、当時の北京政府の実権を握っていた。)
「逃げるー! 日本さん助けてー!」

関東軍「だが断る!」

張作霖「」

張作霖、奉天で爆殺。

張学良(張作霖の子)「国民党に合流しまーす。」

蔣介石「北平(今の北京) 占領! 北伐完了ー!」

完

角谷「ざっくりこんなもんだね。」

五十鈴「なぜ一部の軍閥の方しか場所を紹介してないんですか?」

冷泉「軍閥はちよこちよこ本拠地変えてたりするから、一箇所ここだと言うのは難しいんだ。」

五十鈴「なるほど。」

角谷「じゃ、小山続けて。」

第一次国共内戦と第二次国共合作

小山「上海クーデタでは5000人以上の共産黨員、労働者が殺害される痛ましい事件となりました。国共合作を行った共産党は北伐に協力するとともに各地に黨員を送り込み、解放区と呼ばれる地域を中国各地に建設していきます。」

上海クーデタののち、毛沢東一行は湖南省で武装蜂起(秋収蜂起)を起こすも失敗し井崗山に逃れ、党の中心からは失脚したもののそこで朱徳率いる軍と合流してソヴィエト政権を樹立します。彼らは井崗山を根拠地に中国の江南地方で地主の土地や財産を没収し貧農に分配する土地改革を行っていきました。しかし、共産党も一枚岩ではなく、農村での運動を重視する毛沢東らに対し、党の主流派はソ連により設立された各国共産党による組織のコミンテルンの支持を受け都市での活動を重視していました。

毛沢東は1931年に江西省瑞金に建設された江西ソビエトに移動し、中華ソビエト共和国臨時中央政府の樹立を宣言し、主席に就任

します。」

角谷「これと同じ年に日本が柳条湖事件をきっかけに満州事変を起こして満州国を建国するんだよね。」

小山「蔣介石を中心に中国を統一した南京政府は北京政府が出来なかつた諸外国との条約改正を行つて関税自主権を回復。さらに当時の硬貨の主体だった銀貨の流通を禁止して統一貨幣制度を導入し財政的基盤を確立します。また社会生活の近代化を推進し、総動員への基盤を築こうとしていました。」

この蔣介石政権は安内攘外、すなわち国内の安定を抗日よりも優先するとして日本と1933年に塘沽停戦協定を結び満州国建国を實質承認します。そして5度にわたり瑞金のソビエト政権に対する侵攻を行い、約3年後ついに瑞金から毛沢東ら一行を追い出すことに成功します。」

五十鈴「……共産党はどうやって4回も国民党軍を撃退したんですか？」

冷泉「徹底したゲリラ戦だな。先ほど言った朱徳将軍がゲリラ戦こそが有効だと大学で論文を書くほどの人物で、国民党軍が50万人を動員した第4次侵攻も撃退している。因みに紅軍は10万ちよつとだ。」

五十鈴「みほさんの遭遇戦に通じるものがある気がします。」

冷泉「この朱徳将軍は日中戦争時も共産党の軍の八路軍の司令官として日本軍を苦しめたからな。」

角谷「でも1933年に上海にいた共産党の本部が瑞金に移転してきて、この人達は無論都市での活動を重視する人たちだから毛沢東の農村重視路線に反対して軍と政治から追い出し、朱徳らの唱えるゲリラ戦から積極攻勢に路線を変えたんだよね。」

そしたら国民党軍にいたドイツ人の参謀のゼークトが唱えたトーチカ包囲戦法で補給が止められてさらに爆撃をくらいまくって完敗。瑞金を放棄せざるをえなくなるのさ。」

小山「そして瑞金を放棄した共産党は新たな拠点を求めて長征と呼ばれる大移動を開始します。これは距離にして12500キロメー

トル、日本の北から南を二往復、東京から博多を6往復半する距離に相当します、もの距離を進み、瑞金から西安の北の町、陝西省延安までの二年がかりの大移動に成功しますが、国民党からの追撃や山地、底なし沼などの厳しい自然を前に犠牲者が相次ぎ、瑞金を出る時に86000人いた軍勢が延安に着いた時には6000人に減っていたそうです。」

角谷「これは酷いね……」

冷泉「おまけに毛沢東は出発する時マラリアの病み上がりだったそう。よく生きてたな。」

小山「この長征の最中の1935年、長征途中立ち寄った数少ない都市の一つ遵義で会議を開き、毛沢東は共産党の主流派を瑞金陥落の原因と非難して追い出し、指導権を確立します。またその年の8月に八一宣言を出し、内戦停止と抗日民族統一戦線の設立を訴えます。」

これに対し蒋介石は変わらず共産党打倒を訴え、延安に根拠地を定めた共産党を追撃します。」

冷泉「この間にも満州国を建国した日本は上海に侵攻したり熱河地方に侵入し、さらに塘沽停戦協定で定められた非武装地帯に冀東防共自治委員会（のち政府）を樹立して華北分離工作を進めていたな。」

小山「そしてついに事件が起きます。共産党征伐に向かっていた国民党軍の将軍となっていた張学良が八一宣言の支持と抗日民族統一戦線の樹立を求めて1936年末に西安に来た蒋介石を捕らえて軟禁します。」

これの解放に共産党の周恩来が協力し、1937年に盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が勃発したのを受けてやっと蒋介石も共産党との協力を許し、第二次国共合作に成功。抗日民族統一戦線を設立します。」

角谷「こんなところかなー。」

小山「ふう。」

角谷「小山おつかれー。」

小山「やっぱりきついですね。」

五十鈴「でもおかげでいい勉強になりました。ありがとうございま

す。」

冷泉「だがこれからが本題なんだがな。」

角谷「そーだねー。タイトルに関する話を次はしなきゃいけないからね。今回はその準備に近いからね。」

小山「……まだまだきつそうですね。」

五十鈴「メイン料理の前に腹に溜まるものを食べさせられた気分です……」

角谷「まー次も頑張っていこうよ。」

冷泉「そうだな。」

五十鈴「今回は広西大洗奮闘記の解説編をご覧くださいただき誠にありがとうございます。今後も投稿して参りますのでどうぞよろしくお願います。最後に前作で出てきた人物をさらっと紹介します。」

角谷「ググった方が早いかもね。」

小山「それは言わないでください……」

蔣中正（字 介石）

中華民國の軍人、政治家。第3代、第5代国民政府主席、初代中華民國総統。北伐を完遂させ中華民國の最高権力者となる。日中戦争には勝利するものの、共産党との内戦に敗北し台湾に逃れる。

公式な場では派手な軍服などを着たが、プライベートでは質素で生真面目な性格だった。余談だが陽明学が好き。

戴笠（字 雨農）

中華民國の政治家、軍人。満州事変後に蔣中正の指名で藍衣社特務処長となり、親日、共産、民主勢力の弾圧、指導者の暗殺などを行う。西安事件後の張学良の収監、護送なども担当している。1938年に藍衣社が解散されると軍事委員会調査統計局（軍統）の副局長になり、人数を増やしてさらなる弾圧、暗殺などを展開。日本軍に対しても攪乱工作を仕掛けている。

蔣中正からの信頼は厚かった模様。

広西大洗奮闘記 11 泥を被るべし

「……」

「……とうとう近づいてきてしまいましたか。もう少し皆さんの買い溜めが保つと思いましたが。」

「そうですね……」

朝の配給を終えた小山と華は1つの要求書を前に視線を落としていた。

「元々予期してはいたことですが……」

「これが実際に起こると……」

「反発は必至ですね。下手したら学生主体の暴動になりかねません。」
「会長さんが交渉してくださるのですから、こちらも混乱は起こさないようにしないと……」

「それで、どう対処しましょう。工学科に話は通しましたか？」

「連絡したところ『まず材料をくれ。話はそれからだ。』とのことです。」

「そうですね……」

「材料があっても学園全体の需要に対する自給はできないのではないのでしょうか。」

「この学園艦には工場は無いですからそうなりますね。こうなったら1つしか手段は有りません。」

「何ですか？」

紙の上に視線を落としていた華の顔が小山の方に向く。小山は唾を喉に1回流してから口を開いた。

「儉約体制のさらに上、今まで一度も発令されたことのない、統制体制です。それを導入します。」

「……確か学園艦の全物資の管理権を生徒会が握るのでしたっけ。ですが今まで一部市場に頼った分があっただけに仕事は増えそうですね。」

「それに今まで市場に任せていたものまで統制するのですから、住民の方の不満が溜まるのは必至です。それで、備蓄はあるのですか？」

「余りないです。学園生徒が通常通り消費して10日くらいだと……」

「10日ですか。それがあんならとりあえず一部を購買に送りましょうか。統制体制導入は時期尚早です。」

「……私も会長さんを信頼しないわけではありません。ですが、最悪の事態も想定すべきです。早めにやって少しずつ供給できる期間を延ばすための手を打っておくべきではないですか?」

「……それと、暴動か……」

「それなら風紀委員の権限を拡大しては如何でしょう。何せ現在は実質的に日本の学園艦ではないのですから、日本政府から非難をくらうことはありません。」

「……暴動の未然弾圧に回しても支障はない、と。」

「はい。」

「……」

華の提案を受け入れるか、小山は頭を悩ませた。確かに学園艦の住民の方を生き残らせることは重要だ。それが我々生徒会の役目でもある。

しかし、その為にここまで規制をかけてもいいものだろうか。私たち同じ学園艦に住む者を力で弾圧しても良いのか、良心がブレーキをかけていた。

「……会長さんは学園艦を残す為にはどんな悪事でもやると仰って、我々はそれについていくことを自分自身で決めたんです。我々も覚悟を決めるべきです。」

「……泥を被るのが私たちの役目と。」

はつきり意思を宿した目を見開いた華が頷く。それはみほをかばった時を彷彿させた。

「……私は、会長を信じます。あの時学園艦教育局と交渉した会長を。だから、交渉失敗の報告が届くまで統制体制は導入しません。」

「かといって1週間先に報告が来たとしても、その時には備蓄はかなり切り崩されていると思いますよ。」

「ですが、値上げの要請くらいはできます。少し気は引けますが仕方

ありません。また交渉失敗の報告がきたら、その場で統制体制の導入を行います。

それと並行して不要なペンと消しゴムの類の回収を実施しましょう。それでどれだけ持つかは微妙ですが、足しにはなるとも思いません。」

「……そこまで仰るなら。」

「では早速購買に依頼してきましょう。五十鈴さんは方が一統制体制になった際の導入の準備をお願いします。」

「分かりました。」

それを伝え、華が自分の席に戻ったのを確認すると、小山は隣の生徒会室に向かい近場において手が比較的空いている1人をちよつといい、と呼び止めた。

「はい?」

「昼休みに風紀委員の2人に来るよう呼び出してくれる?」

「了解しました。」

それを聞くと会長室を通って倉庫に入り、少し圧力の高めの水道から水を一杯汲んで飲み干した。

昼休み、呼び出された生徒会の2人は会長室に案内された。

「失礼します。金春です。」

「後藤です。」

「どうぞ。」

にこやかに席についていた小山は席を回して2人の方を向く。その前へと2人は礼儀正しい移動してくる。

「何の御用ですか。」

「まずは風紀委員の夜間の取り締まり、お疲れ様です。それでさらに仕事を追加することになり申し訳ないのですが、このまま補給船のあてがないならば儉約体制のさらに上、統制体制を導入せざるをえなくなるかもしれません。その際住民の皆さんの不満から暴動が起こりえませんか。」

そして窓の割れたガラスの法則のように、1か所の暴動はこの学園

艦の住民の不満を爆発させる可能性があります。それを防ぐために風紀委員の権限の強化をしようと思っています。」

「それを使って未然に取り締まってほしい、と。」

「話が早くて助かります。」

「それで、どれ程までの権限強化を想定されていますか？」

「そうですね……反対行動実施者、計画者の統制体制終了までの拘束と取り締まり時の簡易的な自衛道具の所持を許可しようかと。」

「国からそれに関して何か言われることへの対策は？」

「この拘束は秘密裏に行ってください。国に対しては無許可行動に対する自衛行動と伝えます。」

「……大丈夫ですか？ 国に学園艦を潰せる口実を与えかねないと思いますが。」

「補給を与えていないと知られる方がよっぽど都合が悪いはずですが。戦車道で優勝しながら廃校にされかけた我々の方に国民の支持は向いています。日本が独裁国家でもならない限り流石に廃校にはしないかと。」

「国からしたら支持率低下と政権喪失を下手に招くよりはマシということですか。」

「そうです。」

「……分かりました。準備は整えておきます。そど子が残した風紀委員の意地と誇りをお見せしましょう。」

「頼りにしています。」

「以上ですか？」

「はい。……あ、それとこの事に関する情報が風紀委員内から漏れないように対策をお願いできますか？」

「情報ですか……とりあえず幹部で相談しておきます。」

「いえ、できればお2人で決めてもらいたいのですが。」

「……」

（そこまで情報漏洩を気にしますか）

2人は一度視線を合わせた。それで通じたようだ。

「……検討しておきます。」

「よろしくお願いします。」

「では、失礼します。」

2人は揃って礼儀正しく礼をすると、小山のにこやかな視線を背中に受けながら部屋を去っていった。

扉が閉じられ、さらに奥の部屋からも扉の前閉じた音が続いた時、華が口を開いた。

「いつまで治安が保つか……」

「取り締めれば取り締まるほど住民の方の不満はたまる。だけど取り締まらなければ爆発する。」

「いたちごとくこと化しそうですね。」

「取り締めりには限界があります。だからその前に補給を受けられるようにしなくちゃいけない。」

「やはりそこまで長距離は行けませんね。」

「我々にできるのはその限界を伸ばし、交渉の成功を祈ることだけです。」

「あと上海までどれくらい？」

「あと3〜4時間といったところでしょうか？」

前を見ながら田中が舵を握る。

「そろそろだな。」

「だね。何か聞かれても対応できるように先生もここにいてね。」

「もちろんだ。ところで、言う内容はこれで良いのか？」

「嘘つくわけにはいかないでしょう。」

「この時代大洗学園艦は存在しないぞ。」

「でも学園艦はローマ時代からあるから話は通じるでしょう。中国でも明の時代には似たようなものがあったといえますし。」

「まあいいが、やはり不安だな。」

「この時代日中関係悪いですしね。」

「とりあえず話を聞いてくれるかどうかだな。」

「それは話の持ってきようですね。」

「それで出来るのか？」

「とにかくやってみます。向こうにも相応の利益が与えられればいいわけですから。」

「まあ、そこは任せる。私に出来るのは通訳くらいだからな。」

「よろしくお願いします。」

その輸送船は大陸を目指して西進を続けた。

「西住ちゃん……」

「どうしました?」

角谷がぼそりと口にした一言に山本が反応する。

「あ、いや、ちよつとね。」

「西住、ってあの戦車道の隊長か?」

「今回もまた苦勞かけてるなあ、と。」

「……角谷くん、西住くんは何者だ?」

「何者、とは?」

「私は戦車道に詳しいわけではないが、あの残り物の戦力で全力のあの黒森峰に勝つのが不可能に近い所業だということは分かる。それを成し遂げ、おまけに社会人さえ撃破する大学生チームを掻き集めの高校生チームで撃破するそのリーダー、西住みほ。彼女は何なんだ?」

「何てことではないです。戦車道とそれを通じた友達作りが得意なだけのそんじよそこの女子高生ですよ。」

「……本当にか?」

「ええ。変なクマは好きだし言いたいことあつても躊躇するし、友達とは普通に喋りながら帰宅する、そんな子です。」

「……」

「もしかしたら、さらに苦勞かけることになってしまいかもしれないですが。」

「……だろうな。それにしても空が青いのは気持ちがいいものだな。」

松阪が窓の外から空を見上げる。そこには雲が細かく、適宜に散らばった空が広がっていた。

「おおー。確かに海ばかり見てたから気づかなかつた。」

「こりゃいいね。」

船を操縦する2人も同調する。だが1人、角谷だけは何も動きを見せない。

「……」

「こんな時だ。少しのことでもいいことと捉えないと気が腐るぞ。」

「……本当ですね。」

少し顔を伏せつつあった角谷の方から一瞬の笑い声が漏れた。

「パゾ美、何だと思う?。」

「何が?ゴモヨ。」

昼休みの終わりまで彼女らは余裕がある。まあ食事中ではあるが、邪魔をしない程度のお話は彼女らの精神に背くことではない。

「幹部にさえ統制体制の情報を伝えてはいけないって、余程だと思っけど。」

「情報漏洩を防ぐためだと思っけど?この情報が予定前に漏れて反対運動でも起きたら撤回とかもありえるし。」

「撤回したら影響あるほど補給が厳しい、ということ?。」

「そう。ここ2週間弱ほど補給船来てないわけだから、」

「そっよ。」

ゴモヨはパゾ美の目の前にその指を突き出した。

「ど、どっ?。」

「なぜ2週間近くも補給船が来ないのか、という話よ。」

「?南の港が急に使えなくなったからって聞いたけど。」

「それでこれほど補給船が来ないのが長期化すると思う?2週間もあつたら本土から補給船を出すくらい造作もない事でしょう?。」

「確かに……でも実際来てたら儉約体制は解除されるし、それにいくら何でも生徒会が密入船させているとしても船舶科が補給船が入ってきているのを見逃す事はないでしょう。彼女らも儉約体制で被害を受ける人達なんだから。」

「そう、だから補給船が来ていないのは確実ね。だったらなぜこんな長期間補給船は来ないのか?それは、目的はともかく補給をこちらから受け取っていないから、という事になるわ。」

「補給を断っているって事？」

「そう。だとしたらこれほど儉約体制が長期化し、統制体制を導入するのにも納得がいくわ。それに、こちらから日が差している事もね。」

「どういうこと？」

「太陽はどっち？」

「それは……」

窓際に座っていたパゾ美は自分と向かい合うゴモヨの右上に輝く太陽に指を伸ばす。

「船首は？」

パゾ美は少し頭を悩ませたのちに彼女の右どなりにある板ガラスの平面に垂直に刺さるよう指を向けた。

「つまり、この学園艦が向かっているのは南西、ということね。」

「！ということは一！」

「そう、この学園艦は補給船が来ないにもかかわらず本土から離れるように航行しているということよ。いくら何でも変じゃない？」

「なぜ！彼女らも食糧とかが不足する事を吉とは思わないんじゃない？」

身を乗り出すように反論してくるパゾ美をゴモヨの手は押し留める。

「まあまあ少し落ち着いてよ。儉約体制の間食糧、エネルギーは生徒会の管轄になるわ。つまり生徒会の権限が増える。そして統制体制になればさらに権限が増すわ。」

そして今回の情報漏洩の警戒。もし私たちが幹部にこの事を言わなかったらどうなると思う？」

「……私たちに仕事を丸投げしてくる？」

「そうじゃないわ。幹部は私たちに不満を持つはずよ。何せ下手したら国の法律の根本に背く事をやろうとするのに、その議論にも参加できずに動けと言われるんだから。」

「ということとは……」

「そう、もしこのまま生徒会の言うとおりにしたら風紀委員は分裂しかねない。」

「で、でも生徒会としても儉約体制、統制体制の不満を抑えるために風紀委員は必要でしょう？それを分裂させて利益はあるの？」

「……そぞ子の時は生徒会と風紀委員は一線を画しつつも協力関係を保ってきたわ。」

それはなぜか。生徒会は学園艦廃止と戦車道に注力してきて、その間の学園内の治安を守る役目を果たしたのは私たちだった。つまり役割分担を果たしていたわけよ。

だけど学園艦廃止がなくなった今、生徒会がそれを続けるつもりはないとしたら？そして私たちはそぞ子の後継者として風紀委員を取り仕切っている者たち。」

「つまり、目的は私たちの排除……」

「そして自分たちに従順な風紀委員の確立を目指している。これはまだ確定はしていないけど、警戒する必要があるはずよ。単に文科省と喧嘩しただけかとも思ったけど、それはさつき向こうが直々に否定したわ。」

「確かに言ってたね。私たちの補給を止めても国に利益はないって……」

「だから、私たちは生徒会が補給船を止めている、もしくは他に補給船がこんな長期間こない理由を突き止めて、場合によっては今の生徒会を引きずり下ろす必要だってあるかもしれないわ。」

「引きずり下ろすすといっても、どうやって？」

「ー。」

「……えっ！」

「それが最善だと思うわ。まあ、理由の裏付けは取ったほうがいいわね。」

10月18日 中華民国 首都南京

「どうした？」

「閣下、お電話です。」

昼食を済ませ、少し漢書でも読んでから仕事に戻ろうとした男に、付き人が話しかけた。

「誰からだ？」

「上海の呉市長です。」

「ほう。すぐに向かう。待っていてもらえ。」

「はっ。」

付き人は執務室へと小走りで去り、蔣は水を一杯もらったのちに執務室へと戻った。付き人から受話器を受け取り、耳に当てる。

「蔣だ。」

『お忙しいところすみません。呉です。』

『どうした？日本軍がまた上海に来たか？』

『……貴方に冗談は似合いません。蔣閣下。』

『……妻からもよく言われる。それで、本題は？』

『いえ、奇妙な船が1隻上海に来たもので、ご報告を、と。』

「奇妙な船？」

『はい。沿岸にいたのを哨戒艇が見つけてまして、交渉がしたいなどと北方の言葉でいうので連れてきた次第です。』

「お前言葉は分かるのか？」

『分からないので北方出身の者に聞かせました。それで、その者が言うには男1人、若い女子3人が我々は大洗女子学園なるものから来て、物資が枯渇しているから長期的な援助を求めたいなどと言っているそうです。今その者たちは軍の方に預かってもらっています。』

「どこから来たって？」

『大洗女子学園、だそうです。私この名前は初めて聞いたのですが、蔣閣下はご存知なのですか？』

『……その者たちはどこの出身だか聞いたか？』

『いえ、ですが男は北方の言葉で話しているそうです。』

「男、は？」

『ええ、他の若い女は日本語で話している、との報告です。日本人とみて問題はないかと……』

「やはりか……」

『どうします？このまま密入国の疑いで捕らえることも十分できますが？』

「いや、日本との関係悪化に繋がりがかねない。丁重にとまではないか？とも軍の預かりからは解放して少しその者らの言うことを聞いてみてくれ。」

『それでよろしいのですか？』

「構わん。」

『外交部長を通す必要は？』

「汪か。あいつは日本寄りだ。言う必要もあるまい。」

『確かに二つ返事で済みそうですね。それでこちらで北方の言葉が分かる者から話は聞いてみますが、どうやら若い女の中の一人が中心で、男は通訳みたいな扱いだそうです。』

「ふむ……そうか。とりあえず話を聞いておいてくれ。対応はこちらで考える。」

『了解しました。それでは失礼します。』

向こうの回線が途切れたのを確認して、男は受話器を戻した。

「……来たか……とは言ったものの、日本語の上手い奴といえば、張か何か……でも張は今湖北省にいるし、何も北平にいるからな。呼ぶわけにもいかないし……」

執務室の席に着き、頭を悩ませる蔣の正面から聞こえた3度の軽やかなノックが彼の顔を起こさせた。

「ちよつと出てくれ。」

「はい。」

電話の間も微動だにせず立っていた付き人が扉の方に向かう。

「はい？」

「今大丈夫かしら？」

付き人が扉の隙間から蔣の方へと視線を戻す。

「奥様です。」

「美齡か。入れてくれ。」

「はっ。」

付き人がゆつくりと扉を開け、その向こうからチャイナドレスに身を包んだ麗しき淑女が姿を見せた。

「美齡、何の用だ？」

「少し時間があつたから寄つただけよ。あまり仕事もないから。」
「そうか……」

(美齡、か。)

妻と目線を合わせていた蔣は少し視線を外して考えこみ、再び電話を手に取つた。

「どうしたのよ。」

「少し待っていてくれ。」

「？」

蔣は指を使いある場へ電話が繋がるようにする。電話は少し時間をおいて繋がつた。

『はい、呉です。』

「たびたびすまん。蔣だ。」

『蔣閣下、如何なさいました？』

「例の者たちについて一つ確認して欲しいことがあるのだが。」

『はい？』

「その者たち、英語話せるか？」

『英語、ですか……すみません、現在報告はありません。』

「分かったら一報くれるか？」

『はっ。早急に確認させます。』

「よろしく頼んだ。」

再び蔣は受話器を音を立てて戻した。

「どんな用？」

少しトゲのある声が蔣に来るが、これくらいならもう慣れている。

「もしかしたら、上海に行つてもらうかもしれない。」

「上海？何かあるの？」

「一つ交渉を頼むかもしれない。」

広西大洗奮闘記 12 青い川

放課後の前に聞こえた放送を、会長室にいた2人は快くは思わなかった。

「……幹部を動かしましたね。」

「ええ。できるだけ情報を知る人は少なくしておきたかったのだけども。」

「でも、風紀委員がこちらの意向を無視したということは……」

「何か感づいたかもしれない、と?」

「はい。」

「……何かあっても動きがあつてから対処、で問題ないと思います。」

一度華と目線を合わせていた小山は再び視線を離れた。華はどこかしら心に突つかかるところがあつたが、小山もこう言っているからとあまり気にしないことにした。

「そういえば、会長さん大丈夫でしょうか。まさか捕まつてたりとかは……」

「ありえない訳じゃないよね。……いや!そんなことはない!信じましょう!」

小山がいきなり腹から響く声を出したものだから、華は呆然と首を縦にふるしかなかった。

「あ、と。そろそろ配給準備始めないと。次私当番だ。」

「配給も始めてそろそろ10日ですか……」

「まあもともと1月分を1月半かけて配給する計画だから余裕はあるけど……」

「もし、不満が高まってきたら、」

「……食糧を多めに配給して一時的に抑えることも検討しなくちゃいけないわね。」

「一時的、ですか……やはり早めに補給を受けられる様になるのが一番です。」

移動教室などの際に使われる分割教室がこの大洗女子学園

には多数ある。何せ1学年3000人の規模の学園である。それぞれがカリキュラムによつては移動したりを繰り返すのだ。その分割教室は大教室と呼ばれる100人以上入れるものもあればたった20人入れるほどの小教室まで各種ある。

因みにこの大洗女子学園は学園艦としては小規模の部類に入るのだから、他の学園艦ではどうなるか推察がつかうだろう。

その小教室の一つが風紀委員幹部集合の場所だった。

「……集まったかしら？」

「大丈夫よ、ゴモヨ。全員揃つてる。」

委員長の後藤モヨ子、副委員長の金春希美を正面に、多数のおかつぱ幹部がその狭い教室の中に席を連ねている。

各クラスから選ばれる風紀委員は総数350人程である。なおこれが割り当ての各クラス一人の総計より少ないのは船舶科など一部の学科は選ばれないからである。そして風紀委員は担当がそれぞれ存在し、それぞれに担当長が決められている。多少違いはあるものこのにいる幹部はほぼ担当長だと思つてもらつて構わない。

「廊下に人はいる？」

扉に近いところに座っていた者が少し開けた隙間から外を覗く。

「いないです。」

「では、風紀委員幹部緊急会議を始めるわ。」

「案件は何ですか？」

真つ先に発言したのは嘉沢南美、風紀委員の通称だとカナンである。彼女のおかつぱの長さはそと子とほぼ同じだ。

「生徒会が、更なる規制の強化を求めてきたわ。」

「治安の取り締まりですか？それなら担当長の私とエドムだけで宜しいのでは？」

カナンが席を一つまたいだ右のゴモヨより少し長めのおかつぱを指差す。エドム、本名江戸川夢華もまたこの学園艦の治安維持担当長である。この2人の違いを挙げるなら担当が高校か中学か、それだけである。

「確かにそれだけなら2人だけでいいのだけど、問題はそれに関する

向こうの発言なのよ。」

「向こうの発言、ですか？」

ゴモヨはまずは生徒会からの指示内容、それから学園艦に関する現状の疑問、それらから導き出される問題を明快に纏めた。やはり学園の一組織とはいえトップに立つ者、論理的な語り口である。それを最後まで聞いていた幹部たちは大半は同意の意を込めた様子で頷き、残りは手を挙げている。真つ向から否定する者はいないようだ。

手を挙げている者たちから意見を聞くと、次のようなことが上げられた。

・生徒会が何かを隠していることは分かるがそこから風紀委員の解体は論理の飛躍がないか。

・生徒会からこの会議に対する妨害がないから、風紀委員の混乱は少なくとも副次的な者ではないか。
などである。

「とりあえず聞いた限りだと、生徒会が何かを隠していることへの異論はないと認めてもいいかしら？」

ゴモヨの前に座る者たちから反応はない。

「……それじゃあ、生徒会の隠していることを明らかにする。その方針はいいかしら？」

「明らかにしてどうするのですか？」

「……本当に自分たちの権力強化のために補給を止めていたら、それを止めさせる必要があるわ。故意に補給を止めて住民を苦しめるだなんて風紀委員として許していいことではないわ。」

故意では無いとしても、この10日程補給が止まっている現状を考えれば生徒会が有効な手段を取れていないということ。こちらが動く必要があるわ。」

「なるほど。」

先程疑問を述べた者は納得してくれたようだ。一息ついた後ゴモヨは再び口を開いた。

「それで、そのための調査担当を新たに編成したいのだけど……どこか人員に余裕あるところで口が固い人がいれば教えてくれる？」

「ウチの学園艦治安担当は無理です。何せ生徒会から頼まれた夜間外出禁止対策の見回りで人員がギリギリなんです。むしろ欲しいくらいですよ。」

一番人数の多い学園艦治安担当長のハマコ、本名浜公子は速攻で断った。

「やはり学園艦治安は無理よね。他はどう?」

「高校学園治安担当は恐らく数名出せますが、真面目な奴という人多分2、3人ではないかと……」

「中学学園治安担当も同じ程度が限界ですね。中学への取り締まりを少なくできるならいいのですが。」

「どこも厳しそうですね。」

「ウチはいつでも、なんなら全員出しても良いっすよ!」

「えっ?」

後ろの方にいた陽気な黒丸メガネのおかつぱが背もたれに身を預け手を挙げた。

「ヤボクは……学園艦店舗運営補佐担当だったわよね。」

「いやー、購買以外の店舗が買い占めで締められちゃったので運営を助けるも何もないんですよ。それで暇なうえに購買は見張るもくそもなくズルしそうにないんで担当員使ってくれて構わないっすよ。」

「それよりヤボク、貴女は風紀委員としてその言葉使いは治しなさいよ。それで、口が固い人はいるわけ?」

「いるよ、数人は。」

「ではそこから調査担当を編成するわ。他に何か意見のある人はいる?」

ゴモヨは部屋を見渡すがやはり反応はない。これは風紀委員というものが反応するのをためらう者たち、という訳ではなく単に面倒事を全て抱えてくれる存在が自分から現れてくれたことに一安心したのだ。

「では、ヤボクは残ってちょうだい。他は今回のことはそれぞれの担当員内密にお願いするわ。では、解散。」

「失礼しました。」

風紀委員らしく丁寧に礼をし、そろそろと扉から出ていったおかつぱの群れの話し声が遠ざかった部屋の中には3人だけが残された。ゴモヨ、パゾ美、ヤボク、本名矢暮久子である。そのヤボクは後ろから前の方に近づいてきた。

「……礼くらいは真面目にやりなさいよ。」

「これはすみません。」

「ん、じゃなくてみ、よ。」

「はいはい。それで、選抜したのはいつ連れて来ればいいですか？」

「はいは一回……そうね。明日放課後に呼んでもらえるかしら。話が広がらないように候補に直接声を掛けてちょうだい。」

「人数は？」

「候補は何人いるの？」

「元々ウチが学園艦上の店舗に疑いがかけられた際に予備調査できるようになってますんで、その経験者だけで5、6人はいるかと。」

「……なるほど。だったらその全員でいいわ。呼んでもらえる？」

「了解です。それとつすね、これは一つ提案なんです……」

「何よ？」

「――。」

「……なるほどね。その手を打ってみて損はないわ。やりましょう。」

上海沖で輸送船ごと捕らえられた4人はまず軍人らに銃を突きつけられながら上陸して寒い牢獄みたいな所に押し込まれたものの、その数時間後には今度は先ほどよりはだいぶマシなアパートみたいな所に押し込まれた。部屋は机一つのこぎつぱりとしたところで外には銃を構えた歩哨が警備をしていてくれている。

「……怖かったですね。」

「まさかいきなり両手を挙げさせられて背中に銃を突きつけられるとは思わなかった……」

「……まあでも今はマシな場所に連れてきてくれたから、これから何かするわけじゃないでしょう。」

「だといいいけどな。」

船舶科の2人は青ざめ、他の2人は真顔で壁に寄つかかかって座っている。背中に銃口が当たるなど日本で普通に住んでいれば考え辛いことだから仕方ない。しかし学園艦のトップである角谷はそうも言っていない。

（今回は殺されるってことはなさそうだけど、次はこうとは限らない……思いの外色んな国と交渉するのは厳しいかもね……）

「先生、それでさ今ここどこらへんか分かる？」

「トラックで輸送されていた時に浦東の文字がチラツと見えたから上海からそう遠くは離れていないはず、だが細かい場所までは……」

「おっけー。それさえ分かれば十分。それと山本ちゃんと田中ちゃん、」

「……はい？」

机を前に俯きつつあった2人はその顔を上げ、角谷の方へ向ける。

「現在の学園艦の位置って聞いている？」

「……もし船の中で聞いていたものと同じ速度、同じ方角で進んでいたら今は与論島沖かと思います。」

「ゆっくり進んでくれるとうれしいね。分かった。」

「それで角谷くん。これからどうするつもりだね？」

「どうもしません。」

「へっ？」

「いやー、だって見張られて手持ちには資料しかないこの状況で何が出来るんですか。このまま相手が乗るかそるかを見極めるしかないでしょう。」

「……問題は成功した時はいいにせよ失敗した時にこのまま学園艦に帰れるか、というところだろうな。」

「それも中華民国としても日本人である私たちを殺したとしても日本との関係悪化に勝るメリットがないくらいは分かっていると思いますよ。」

それを聞いていた船舶科の2人はほっと胸を撫で下ろすが、

「だけど、帰りの船に細工とかされてても文句は言えないねえ。」

次に言ったこの言葉にやはり震えるのだった。

「しかし……暇だ。」

「仕方ないね。何も無いもんね。」

4人は揃って天井からぶら下がり一定周期の時を刻む電灯を眺める。この時代だと珍しいものなのかは知らないが、同じよそこらの部屋ではないようだ。天井の筋を角谷が20本まで数え終わった時、扉がノックされ外に立っていた歩哨が内向きに扉を開いた。

「入るぞ。」

「どうぞ。」

「こちらは上海市の職員の方だ。」

歩哨の挨拶に松阪が答え、3人を呼んで並ばせた。中に入ってきたのは歩哨ともう一人、それとは対照的にスーツに身を包んだ役人風の男だ。

「よろしくお願ひします。それで、いかなるご用でしょうか？」

「私は上海市長の呉鉄城氏に代わり、貴様らの要望とやらを受け取りにきた。」

「受け取ってくださいるんですか？」

「そうだ。内容はこちらで判断する。」

「分かりました。おい、角谷くん。」

松阪は隣に座っていた角谷の肩をたたく。

「どうしました？」

「こちらの要望を受け取ってくださいるそうだ。渡してくれ。」

「……あ、はい。」

角谷がカバンから取り出した書類を受け取った松阪はそれに両手を添えて男に差し出す。片手でそれを取った男はその場でさっと目を通すと、目線を松阪の方に向け話し始めた。

「……君たちはどこに1万人が1月半食べられる食糧を備蓄しているのだね？」

「そちらに書いてある学園艦、というところです。」

「そんなものが本当にあるのか？」

「あります。」

「どこにだ。」

「日本領与論島西部の沖合です。」

「それと、お前たちの中で英語が話せる者はおるか？」

「I can speak English.」

「……分かった。案件はこちらで預かろう。食事は適宜部屋に入れる。」

「そこまでしていただきありがとうございます。」

「……行くぞ。」

「はっ。」

その書類を丁寧に封筒に入れカバンに入れた役人風の男は歩哨に見送られ部屋から去った。

その時間わずかに数分、しかしその男と話した松阪はもちろん、彼の横に並ぶ3人の少女たちも、男が去った部屋の中で自分の荒れ狂う鼓動を全身から部屋中に響かせていた。その理由の一つが男の腰にあったことは言えるだろう。そのことは角谷に危機感をさらに募らせさせるには十分すぎた。

2012年 10月18日 東京都虎ノ門 文部科学省

学園艦教育局 局長室

「……」

「……」

「これはこれは珍しい。よくぞいらっしやいました。」

かなり不機嫌な顔で席に並んで腰掛ける2人の淑女、その後ろに並ぶ4人の女子の前で一人の男が腰を低くして対応している。

「特に西住流の家元さま、この頃体調が優れないとお聞きしていましたが、お元気そうでなによりです。」

「……」

しかし前にいる二人の淑女のうちの男から見て右、入り口から見て左にいる黒い上着を身に纏った方に座っているのは西住流家元、西住しほである。そのしほは不機嫌な顔を崩さずにみほをビビらせた冷酷な視線をこの男、辻に向ける。

前の二人には湯気を登らせ良い香りを鼻に届ける茶、後ろの四人に

はペットボトルの茶が辻から直々に手渡された。それを終えた辻は彼女らの正面に伸びるソファアの中央に腰を下ろした。

「さて、西住流と島田流。戦車道の名家中の名家とも呼べる二流派の重鎮がこの学園艦教育局に何のご用でしょう。」

西住しほの辻から見て左に居るのは島田流の家元、島田千代である。真っ先に口を開いたのはしほだった。

「……今回の高校戦車道参加校への戦車道予算の削減、これはどういうことでしょうか？」

「どうもこうも、我々が世界大会、プロリーグの際に有望視していたのが今回の8校だった、それだけのことです。その8校がどうなったかは西住さん、貴女が一番よくご存じでしょう。」

「……ですが、残された他の8校の中にも変革を進めているマジノ女学院のようなところもあります。一律でかなり削るのは如何なものかと。それに戦車道の発展という文科省の方針とも矛盾するのでは？」

「ほう……それでは西住さん、貴女は脈々と受け継がれてきた伝統的な西住流が、どこぞの馬の骨とも知れない人物が作った戦術に負けるというのですか？」

「勝負は時の運と申します。」

「おや？西住流は何よりも勝利を尊ぶ流派のはず。負けを計算に入れてよろしいのですか？」

「……プロリーグを見据えた発展と矛盾」

辻はすつと手をしほの前に出し、言葉を区切らせる。

「確かに私は貴女に世界大会の委員をお願いする際に『戦車道を発展させる。』と言いました。それが文科省の指針だったことも間違いありません。しかし貴女は一つだけ間違えている。」

「……どういふことでしょうか？」

「私は今後、つまり将来にわたって戦車道を発展させ続ける、とは一言も言った覚えはありませんよ？」

「!?？」

「確かに世界大会に向けた受け入れ準備として戦車道を発展させる必

要はあります。しかしそれはあくまで受け入れ準備として、です。将来に渡って戦車道の発展を保證するような馬鹿な真似は致しません。」

「馬鹿な真似とは何ですか！前の試合といい貴方は戦車道を何だと思いか！」

思わずしほが声を荒らげ、机に拳を叩きつける。しかし、辻は動じない。

「馬鹿な真似は馬鹿な真似です。補償金だけで小国の国家予算くらいなら一息で吹き飛ばし、広まれば日本のあちこちで煙が昇るようになる戦車道を誰が好きで広げますか？」

「貴方が……戦車道を誘致したのにもかかわらずですか。」

「誘致する方針を定めたのは内閣の方です。私はその命令をもとに動いたにすぎません。今回の件で残念ながら世界大会を見据えた優秀な人材の多くは失われてしまい、国の予算の赤字も増え続けている今、予算をそちらに配分するわけには行きません。だが、最低でも今程度の状況の維持なら良いでしょう。」

「……それならば島田流も文科省に協力致しません。世界大会からは身を引かせていただきます。」

言葉に詰まるしほに対し、次に話し始めたのは島田千代である。

「西住流は引こうと引くまいとどうでもよろしいですが、島田流はそうはいきません。」

「いいえ、引かせていただきます。」

「本当に引いてしまってよろしいのですか？」

「島田流とて戦う者達です。その家元に二言はありません。」

「このまま島田流が世間から貶められ続けても、ですか？」

「貶められる？」

「8月の戦いを見せていただきました。私は一つのことを感じました。高校生チームを率いた西住みほさんと貴女方、戦法が似ているように思えたのです。」

その場に合わせた的確な戦術の変更、防御と同時に敵の数を漸減させ、攻撃するときは一点集中。そして分散しつつも連携を重視。つま

り、貴女方は我々が与えた有利な装備、物量、連携、そして相手と似たような戦法を持ちながら貴女方は負けたのです。

負けたことについて私はどうこう言うつもりはもうありません。文句を言っただけで変わるものでもありませんし。しかし、これをブン屋に渡したら?」

「☒」

「素人目でもこれだけ共通点上がるのですから、ブン屋からしたら掃いて捨てるほど湧いてくるでしょう。何故かまだその手の話はでないみたいですが。」

「……脅しですか?」

「ええ、それがどうかしましたか?」

「……人の上に立つ人物とは思えませぬね。」

「島田流も西住流も、我々文科省の要求をどちらも見事に裏切ってくれました。信頼するわけがありません。」

「……」

「その代わりと言っただけですが、世界大会に協力いただけのならば今の西住さんの地位を島田さんにお譲りしましょう。」

「なっ!」

「西住流よりも島田流がこちらについて頂けた方が好都合ですし。」

「どういうことですか!」

いきなり発した言葉を受けてしほは辻に食ってかかった。

「なに簡単なことです。世界大会で活躍してもらうのは西住流ではない。島田流の後ろの方々だ、ということですよ。島田流としても西住流を打倒した形になりますから、体面も経つと思いますよ。」

それに世界大会に出なくて未来が潰されるのは貴女方ではない。後ろにいる千代さん、貴女の娘とその大事な仲間なんですよ。」

「っ……」

娘、その語を聞いた千代の口が止まる。

「西住さんは今回は引いていただきたいと思えます。なにせ中心選手にする予定だったまほさん、みほさんがあの様な事態になってしまったのです。これからさらに忙しくなるこちらとしても辛い経験をさ

れている貴女を受け入れ続けるのは厳しい。ここは島田さんが乗るにせよそるにせよ、退いて頂けないでしょうか？」

「……少々時間をください。検討します。」

しほはそう言うと、その場では話さなくなった。千代はただ手を膝の上で握り、決断をためらっている。

その様子をやりきれない思いで眺めていたのが後ろに並んでいたメグミ、アズミ、ルミの三人の大学選抜チームの副官である。3人は無論世界大会に出場したい。しかし、それに対するこの役人の戦車道を卑下する言いよう、対応に強い反発を覚えた。家元が迷うのも無理はない、それが3人の総意だ。

しかし彼女らよりずっと小さい一人の少女は右手にボコられグマのストラップをにぎってじつと何かに耐えている。やはり隊長も怒っておられるのだろう、3人はそう捉えていた。

「……てやる」

その少女は隣にいるルミが一瞬気が取られるだけの小さな声を出した。

「やーってや……」

「？」

「……をぼーっ(ぼっ)……」

「ここまで来て、やっと3人はあることに気づいた。

(隊長が歌い出した！)

そう、この島田愛里寿は歌い出したのだ。

「……ただかーぜきり……」

頭を悩ませている千代はそのことに気づいていない。

「……ーめをみてー」

その様子を3人は止めようともなにもしない。なんにせよそれが我々の隊長の決定なのだから。

「……きてーいーけー」

最後のけ、をはつきり言っただけか全員の視線がいつせいに愛里寿の方を向いた。それらの視線に対する躊躇いは見せたが、それは歩き出した愛里寿の次の言葉で打ち消された。

「お母様！」

「……何、愛里寿。」

千代の左正面に立った愛里寿は床に膝をつき、そのまま額をも床につけた。

「お母様お願いします！私を世界大会に出場させてください！」

千代も人見知りをする娘がよく知らない男と女のいる前で土下座している光景に半ば啞然としている。他の者は無論だ。

「……私も、ここで出場することが戦車道の誇りと意地を大きく損なうものだ、ということとは分かります。しかし！それでも！それでも私は仲間とともに戦車道をしたいのです！」

「……それだけ？」

「それと……みほは、あの時戦った高校生のみんなが死んでいるはずがありません！私は、彼女らが帰ってきた時に島田流の島田愛里寿として、彼女らと堂々と戦車道で再び勝負がしたいのです！その時に、少しでも強くなって！次は勝つために！その為に少しでも強い敵と戦えるかもしれない世界大会に出場したいのです！」

世界大会後に再び戦車道が凋落するようなことはさせません！私が文科省の力を借りずとも、島田流の意地と技で必ずや戦車道を興隆させます！」

その言葉が彼女の飛び級するほどの明晰な頭脳から導き出されたのかそれともただの理想なのか、それは分からない。ただ一つ言えるのはその行動が島田千代を決断へと導いたことだった。

島田千代の世界大会委員への就任と西住しほの世界大会委員の解任が起こったのは、それから間もなくのことだった。

広西大洗奮闘記 13 清貧な酒飲み

中華民国 首都南京

「……そうか、分かった。失礼する。」

電話の向こうのものにそう言って蔣は受話器を戻した。

「……ふう。」

「それで、向こうの提案内容は何なのよ？」

蔣の目の前にはまたしてもチャイナドレスに身を包んだ彼の妻がいた。

「……長期的な補給物資の援助の代わりに技術者や現在保有の食糧、それに多量の鉄鋼の提供、だそうだ。」

「こちらから長期的に物資を与えるにしては少し向こうに有利な条件ね。」

「だが、鉄鋼の量が伊達じゃない。何せ15キロトンだって言うんだから。」

「15キロトン！」

「場合によっては増量しても良いそうだ。」

「将来的な対日戦に備えた武器製造にはもってこいね。だけど、そんな鉄鋼がどこにあるのよ？」

「……お前は、学園艦って知っているか？」

「名前くらいは。アメリカにいた時、歴史で昔イタリアとかでそのようなのがあったって聞いた覚えがあるわ。」

「今回の大洗、とやらはそれらしい。それも桁違いに大規模なものだそうだ。」

「確か大洗学園艦？ていうのは日本から来たのよね。日本がそのような物を作ったというの？信じられないわ。」

「こんなに分かりきっている嘘をつくとは思えない。誰が見ても嘘だと思えることを言って支援を貰おうとする間抜けはいないだろう。信じてみても良いんじゃないか？」

「……仮に信じたとしても確認はどうするのよ。」

「その学園艦がいるらしい場所を聞いた。日本の南の与論島、という

島の沖らしい。今夜周に頼んで明日そつちに飛ばしてもらおう。」

「戦闘機を飛ばすのね。だけど日本領に近づく訳でしょう。日本を刺激しないかしら?」

「日本の狙いは華北だ。予め理由をつけた上で通告すれば問題ないだろうし、それだけ大規模な船ならば遠目でも存在が分かるだろう。」

「なるほど、でも警戒は続けるべきね。」

「それと、向こうによると通訳らしき男は英語を話せるらしい。お前、明日上海に行ってもらえるか?」

「内容に関する議論は南京でやるんでしょう?どうして私が上海に行かなければならないの?」

「お前には1つ頼みたいことがある。向こうのリーダーが若い女子、だそうだ。仮にこの学園艦を受け入れたら彼女もこの国の運営に少しは関わることになるだろう。お前は彼女がこの国の運営に加わるに相応しいか確かめてもらいたい。」

「……分かったわ。明日朝向かって良いかしら?」

「頼んだ。」

「それじゃ、出発の準備に入るわね。」

そう言っただけで彼女は蔣に背を向けて付き人の開いた扉から去っていった。

「君。すまんが茶を1杯持ってきてもらえるか?」

「分かりました。」

まだ扉に手をかけていた付き人は部屋から出てその扉を閉じた。蔣は机の上にある電話の受話器を取り、今度は一度交換局に繋いでから空軍軍官学校、略称空軍官校に繋いでもらう。日は結構傾いてきているが、向こうに繋がるのは思いの外早かった。

『こちら空軍軍官学校。』

「蔣だ。周学校長を頼む。」

『少々お待ちください。』

暫く間があったのでちよいと手持ちのメモを確認しておく。交渉で問題になるのは向こうの要求が長期的、最低3年であるのに対し、向こうが差し出すのは全て一時的なものである。確かに大量の鉄鋼

は興味を引くが、この条件であまり良い結論は導かれまいだろう。
『すみません。こちら周です。』

「蔣だ。忙しいところすまない。」

『どのような用で?』

蔣はこの周至柔に与論島付近にいる例の艦について詳細を述べた。
『……なるほど、その学園艦とやらが我々に援助を求めてきている、と。』

「そうだ。だがこちらとしても存在が確定していないものに援助はできない。その確認を君達の中の誰かに頼みたい、という訳だ。生徒の訓練のついでなどで構わないからお願い出来ないか?」

『……ですがそんな曖昧なところなら、初めから要求を蹴ってしまっても良いのでは?』

「もし真実なら鉄鋼を大量に貰える。空軍の強化を進められるぞ。もし飛ばしてくれて我々が受け入れることになったら空軍のさらなる拡張を約束しよう。」

『分かりました。明日都合をつけましょう。』

「まあ本当に飛ばしてもらうのは日本に通告をした後だから、その確認が取れ次第連絡する。その際に準備が出来ていれば構わない。」
『了解しました!』

向こうの通話が途切れたのを確認して蔣も受話器を再び戻した。

「これで、空はよし、と。」

一息ついたときちようど付き人が茶を彼の机の上に運び、蔣はそれを口に含んだ。喉の奥から水が身体中に広がる。だが、まだ彼の仕事は終わらない。しかもあまり気の乗らない相手である。次に連絡しなくてはならないのは自分に2度逆らった汪精衛なのだから。

武部沙織。彼女は大洗女子学園にて戦車道を受講し、隊長車のあんこうチームの通信手として2度の大洗女子学園の勝利に貢献した。彼女の趣味の1つは結婚情報誌を読む、という彼女より十数歳年上の女性が持つていて不思議はないものだ。

夕方の配給後に夕食を摂った彼女は皿を洗剤で洗い、そのの

水が切れるまで待っている。何時もの彼女ならばそこで来月号の結婚情報誌を手に、夏休みにD○とかP○Pを与えられた小学生状態で読み込んでいることだろう。

しかし、この10月18日だけは様子が違った。彼女が手にしていたのはなんと世界史の教科書だったのだ。中間試験が近いのか、というところでもない。試験は一週間後の25日から5日にかけて行われる。彼女はこういうことに関しては真面目に勉強するたちではない。ことに理、社の記憶系は試験前日に急いで一夜漬けする、そんなものだ。

そんな彼女が何故一週間も前に世界史の教科書に目を通していいのか？おまけにその世界史の教科書の見ているページが次の試験範囲ではない箇所、第二次世界大戦前の国際情勢なのだから疑問に思うなという方が難しいだろう。

彼女は無言でその周辺を前後している。雨戸が締め切られ人工の光で埋められた部屋に、皿から垂れる周期的な滴下音、そしてこれまたかなり周期的な紙をめくる音が響く。彼女のページの往復の軸となっているページに書かれていたのはヒトラーとムツソリーニが並んでいる画像とその周りに書かれた文字の群れ。そのページの一番上に書かれていたのは

「エチオピア侵攻」

だった。

「麻子が言っていたのってこれよね……」

あの時みほにあんなことを言ったとはいえ、沙織自身も友人のあの奇妙としか言えない行動に興味を持たないはずがない。あの時友人が開いたそのページ、それに友人の言っていた絶望、の意味が分かるのではないかと文字に目を通す。

「……第二次世界大戦前、か。確かに絶望といったら絶望だよね。」

沙織も幾度かテレビのドキュメンタリーや8月頃に流れるニュースなどでこの戦いがどれほど悲惨なものだったのか知っている。だがこの絶望がなぜ友人の絶望に繋がるのか、どうしても理解が及ばない。友人にはあつて彼女にはない絶対的な亀裂、それが彼女の思考を

阻害していた。

「……」

水滴が垂れる音の周期は次第に伸びてくる。彼女の使える水から垂れる滴は壁を穿つには足らなかつた。そして皿がタオルで拭いて問題なくなつた頃、沙織は思考を止め教科書を棚に戻した。皿を片付け終わった頃にはもう彼女の頭の中は次の結婚情報誌までに寄港できたらいいな、という言葉に包まれていた。

10月18日夜 東京

「もう一杯いかがですか?」

「ああ、ありがたくいただくよ。」

額から人の字型に何本かシワが通つた男が差し出したコップに、入り口近くに座つたさつききの男よりは少し若い男が酒を注ぐ。

「それにしても、この度は個人的にお呼び頂きありがとうございます。」
知波単の代表としてお礼申し上げます。」

「なに、構わないよ。そちらから貰つたもののお陰で少し陸軍の要求も収まつたからな。」

「そちらこそこの度頂いた物資のお陰で我々は放逐され滅亡する運命から逃れられました。これはそのようなことと比べられていいものではありません。」

「では今後も協力をお願いしますよ。西条学園長。」
「勿論ですよ。岡田首相。」

そう言つて男は酒を口に入れた。すぐに喉には流さず、口の中でこねる。

「……ふむ、この酒結構おいしいな。」

「これは我々のいた世界でも有名な酒でして、我々の学園艦にも少ししか置いてありません。」

「それは勿体無い……」

「ですが、学園艦の中にそこら辺に詳しいものがあるのでそつちに送って研究させ、いつかこれ以上のものをそちらでも作れるようになりますよ。」

「ははは、それは楽しみだ。ささ、学園長も飲んでみたまえ。」
「ではありがたく……」

隣にいた女中の持った瓶から西条のコップに酒か注がれ、それを半分ほど一息で飲む。

「それで、今回私をお呼びになった理由とは何でしょう?」

顔を引き締めて問う西条に対し、岡田も口角を下げる。

「知波単の今後だ。現在は我が国の統制下に置いてあるが、それに反発するものもいる。陸軍などその典型だ。そんなものに金を、物資を使うなら対ソに向けた陸軍の拡張に回せと言つてきよる。特に知波単から貰った物資を陸軍にあまり回さず、鉄鋼も海軍に回したことを言っているのだろう。」

私が政権にいる限りは何とかできるが、将来に渡って知波単の安全を保障することは出来ない。」

「……つまり、早く物資の補給を受けずに自立した体制をとれ、と。」
「そういうことだ。」

「幸い我々の学園艦では農地の拡張を進めています、計画が完全に遂行されても自給にはまだ足りません。我々が自立するとすれば、我々の学園艦に乗る者の一部を本土に移住せざるを得ないかと……」

「……満蒙移民として送るか……考えておこう。こちらとしてもこちらに住む住民が餓死されても困るのでな。」

「ありがとうございます。こちらからも有能な人間はこちらに送っていきますのでお使いください。それと、例の大洗の件ですが……」

「ああ、君達が断ってくれた艦のことか。断ってくれて助かったよ。これでもう一隻受け入れていたら私の身が危ない。」

あともう数ヶ月であなたの身が危なくなるんだけどな、という考えは頭の中に留めた。

「いえいえ、我々としても大洗とは良好な関係だったので沿岸の航行を許していただき感謝したいくらいです。」

「君達が言うにはかの艦は一回り小さいうえにあまり武装が無いようだからな。受け入れても利益は少ないし航行させても攻撃される心配も無い。これで手を打つのが妥当だ。」

「確かにそうですね。」

二人は少しほおを緩ませたのち、揃ってコップを口にあてた。その時、一人の女中が西条の右側の扉をノックし、岡田の許可とともに入ってきた。

「どうした?」

「廣田様よりお電話です。」

「廣田から?分かった。」

「廣田外相からですか?」

「ああ、おそらく中国関連だろう。」

コップを机の上に戻した岡田は少し不機嫌そうに席を立ち、部屋を出て行った。

自身の執務室に戻った岡田は受話器を持った女中から片手で受話器を握った。

「岡田だ。」

「首相、少しよろしいでしょうか?」

「手短に頼む。客人がいるんだ。」

「これは失礼。では早速。中国の蔣作賓大使から連絡で、明日与論島付近に大洗学園艦の存在を確認するため戦闘機を飛ばすことを容認してほしい、とのことです。」

「我が領土付近に戦闘機を飛ばすだど!認められるはずが無いだろう。」

「それが領土上空には入らず、我々は大洗の受け入れを検討する上で確認のみであるから容認してほしい、とのことです。」

「ふむ……それは陸軍には言っているか?」

「?いえ、首相への連絡が第一と思いましたが。」

「そのまま陸軍には伝えるな。蔣大使には黙認すると伝えろ。ただしできる限り遠方から確認し、与論島付近に大洗学園艦は存在する、そして万が一墜落した際にこちらは何もしない、と付けてな。」

「陸軍以外へは?」

「伝えずとも良いだろう。下手に陸軍に話が回って関東軍とかに動かれるわけにはいかない。中国にあの大洗学園艦が受け入れられると

は思えないがな。」

「分かりました。ではそのように伝えておきます。」
「頼んだ。」

「五十鈴さん、工学科に確認は取れましたか？」

「はい。船内の不要な鉄鋼やブロックの隔壁などを切断すれば数は作れる、と言ってますが、代わりに重機を動かすので燃料がほしいとのことですよ。」

無線を切った華が隣から戻ってくる。

「幸いさらなる値上げのお陰で石油の備蓄の減少は抑えられているので、回してもいいでしょう。」

「しかし鉄鋼15キロトンとは、私たちが伝えておいて何ですが想像もつきませんね。」

「この学園艦の大きさを考えたら微々たるものでしょう。何せ学園艦のブロックの隔壁1つ切り出せば昔の空母の甲板ほどの鉄板が出来る上がるのですから。」

「生憎空母の甲板が予想できません。」

「私もです。」

ふふふと少し笑いあい緩んだ空気の中、1つ扉を挟んだ向こうが少し騒がしくなる。

「どうやら、夕方の配給の片付けが終わったみたいですね。」

「もうそんな時間ですか。」

「明日の朝は私が配給担当ですね。」

「五十鈴さん、ちよつと今夜配給行ってきた人を1人呼んできてくれる？」

「あ、はい。」

隣に行った華は間も無く1人の生徒会の者を連れて会長室に入ってきた。その者は背筋をすつと伸ばして小山の前まで来る。小山もそれに椅子をその者の方へ回して応える。

「……それで、配給の際に不審な動きはありましたか？」

「住民の皆さんはもうこの配給に慣れていらっしやるようで、特に不審な点はありませんでした。しかし……」

「しかし？」

「風紀委員の中に配給後の我々を見張っているような人物がいるようです。幸い早めに気がついて近づくと走り去って行ったので情報の漏洩などは心配しなくて良いかと。」

「走り去ったということは、あまりその人をよく見れなかったのでしょうか？なぜ風紀委員と断定できるの？」

「おかつぱだというのは確認できました。」

「……流星にそれだけで断定するわけにはいかないわね。」

小山は背筋を軽く丸めながら肘を肘掛に乗せ頬杖をつく。

「仮に彼女が風紀委員の者ならば、風紀委員は配給の後の我々が気の抜けた時を狙ったのだと思われます。放課後の集合の件といい風紀委員の動きを注視する必要はあるかと思われます。」

「でも、風紀委員は現在深夜の見廻りとか風紀維持はしつかり行つてくれて報告もくれているのでしょうか？」

「ですが、それは我々を欺くための偽りという可能性も……」

「とにかく！」

その者の言葉を止めさせるほど小山がいつになく声を荒らげ、肘掛を殴りつける。

「まだ風紀委員の行動かどうか曖昧な現在、こちらから風紀委員を敵対視して行動する訳にはいきません！仮に風紀委員が叛逆の意思を持っておらずにこちらから敵対視して手を切られたら、誰がこの学園艦の反発を抑えるのです！風紀委員が風紀維持の為の行動を止めたら暴動が起こる可能性は増えます！それだけは絶対に避けなければいけません！」

その場にいた者は少し後ずさりした格好で立ち尽くしていた。そこにさらに小山の叫びを聞いた野次馬が隣から入ってくる。その者たちを眺めながら息を整えた小山は柔らかな顔で語りかけた。

「……皆さん、あんこう踊りはしたくないでしょうか？」

その場にいた者は無言で一斉に首肯した。

翌日。

上海のアパートらしき1室に留め置かれた角谷ら4人はあまりにあまりに暇すぎて机のそれぞれの辺にそれぞれがいてたまに

こういう声を順に発していた。

「……いつせーのーせさん！」

机の上には親指を上にした拳が計6つ乗っていた。山本が声を出したタイミングに合わせて親指を上げるものと上げないものがある。

「……3、だな。」

「よしー！」

山本がガッツポーズを作り拳を1つ引っ込める。

「じゃあ次……いつせーのーせゼロー！」

今度はその隣の角谷から無邪気な声が出る。

「……ふっ。」

松阪が指を立てていたため、これは失敗に終わる。

「なに松阪先生勝ち誇ったような顔してらっしやるんですか？」

「いやあ、この勝負始めてから角谷くんが一番勝っているから、今回はそれが止められてよかったな、と。」

「そんなのまだ分かりませんよ。このあと1週して誰も上がらないかもしれないですから。」

「まあそうなんだが……」

「ここ持ってきてくれるご飯はとても美味しいんですけど、外に出れないし騒がしいし、早めに出たいですよ。」

「あまり量ないけどね。」

「それでも配給の量に比べたら十分マシですよ。」

「……やっぱり、苦労かけてるんだな……」

急に角谷の顔と言葉が曇り、船舶科の2人はそれを見て自分たちが言ったことに気づき申し訳なさそうな顔をする。ゲームによって少し良くなった空気は一瞬にして崩された。松阪は教員としてこの場をなんとかしたかったが、自身も必要量ギリギリの配給を貰っている身。何かを言っつてこの場の場を固められるはずもない。しかし、しばらくして聞こえた階段を上ってくる数種の足音はその場の空気を再び固めた。

「……誰か来る。」

「飯の時間には早いですよね。」

「とにかく並んで待つておこう。」

扉の前で少し会話が行われ、見張りの者が扉の鍵を開け開いた。「入るぞ。」

見張りの者とそれに続き何か香港とかの映画に出てきそうな女性とそのボディガードらしき黒服の男が2人部屋に入る。

「椅子。」

女性が言い放つと、黒服が素早く椅子を用意する。女性はそこに腰を下ろす。その様にこの部屋にいる者はこの女性が只者ではないと確信した。

「この方は南京からお越しになったソン　メイリン様だ。」

「ソン　メイリン……。」

角谷は聞き取れた言葉の部分のみを繰り返し、松阪は横一列に並んでいた状況から一步前に進み出る。

「初めまして、レディ、ソン。私はこの度参りました大洗女子学園の通訳の松阪、と申します。」

ソンは挨拶への返事もせずにただ中国語であいさつした松阪を見つめている。松阪は列にいた角谷を手振りて一步前前へ出させる。

「に、你好……。」

松阪に習って最敬礼しながら数少ない中国語の単語を投げかけると、ソンはクスリと笑って口を開いた。

「Nice to meet you, girls and gentleman。」

「!?？」

前に出た2人は目を見開きながら礼を戻す。その目の前でソンは微笑みながらこの4人を見回していた。

「では、ソンさん。貴女がいらっしやったのは我々との交渉の為ですか？」

宋美齡の簡単な自己紹介と今後は英語で会話する、と決めた後に話しだしたのは松阪だ。

「いいえ。私はただ貴方がたと話をするために来たのですよ。」

「話、とは具体的に何でしょう?。」

角谷も自身がこれまで習った英語の知識を使い会話を試みる。

「本当に単なる会話ですわ。政治的な議論をするつもりはありません。」

「会話ですか。とはいうものの、今回の物資補給に関する話でなければ、共にお話することはないと思いますが。」

「補給物資の話ならば簡単に終わりますわ。」

「えっ?。」

美齡の顔からにこやかさはいつの間になくなっていく。

「はつきり言わせていただきますと、」

中華民國は間違いなく大洗学園艦への物資補給を断るでしょう。」

昼過ぎ、廊下の外から秒針のカウントより早いペースで足音が響く。まもなく行政院による会議が行われる会議室の中の両サイドに並んだ閣僚の前に、一番遅れて入ってきた蔣が腰を下ろした。「中全会も近いのに急に集まってもらって、さらに遅れてしまったすまない。1つ報告を受けるのが遅れてしまった。」

「なに、構わんよ。」

席について早々に頭を下げた蔣に言葉をかけたのは財政部長であり妻の姉の夫に当たる孔祥熙だ。

「それよりも、会議を早めに始めてしましましょう。」

教育部長の王世傑が続く。その声に合わせて場の空気も挨拶を抜き

にする方向になっていった。

「それで、今回の概要は外交部から、という形でよろしいでしょうか？」

「良いだろう。一応説明をお願いできるか？」

まず発言した汪精衛の提案に蔣も同意し、汪は礼を言つて言葉を続けた。

「それでは皆さん既にご存知だとは思いますが、例の大洗学園艦の件についてです。かの学園艦から提案を受けましたので、それを受け入れるか否かを議論したいと考えております。提案の内容は既にお手元に資料としてご用意しましたのでそちらをご覧ください。」

一人を除き他の各部長は資料をめくり始める。その一人である蔣はしばらく黙つてその様子を眺め、最後の一人だった交通部長の朱家驊が机に資料を戻すと口を開いた。

「それと、今朝空官学校に学園艦の存在を確かめさせたところ、日本から通告された通り全長目測で7キロ以上の化け物じみた空母型の艦が確認された。甲板に相当する部分にかなりの数の住宅が建てられているらしい。」

「なるほど、それが事実ならこの鉄鋼15キロトンやら1万人分の食料を1月分以上というのも納得できるな。」

孔も顎に指を当てて納得した様子だ。

「しかし問題は3年間もの間ここに書かれた量だけ物資を安定して補給させられるかだろうな。一齐に遅れる量も限界がある。」

「……やはりそこですよね。」

「財政部としては無理だな。現在上海など工業都市で共産党の出した八、一宣言に伴うストライキが頻発している。とてもじゃないがまず十分にこれを供給できるか保障できない。」

「外交部としても難しいでしょう。九一八事変（満州事変の中国側の呼称）以後、というより二十一か条の要求を日本が突きつけた時点で我が国の国民は反日に傾いています。この現状で日本人である大洗を受け入れるとなると……」

「……なるほど。軍としても共産党追撃の後は対日に動くことにな

る。日本との全面戦争になれば幾ら何でも日本海軍に対して大陸から沖縄周辺までの制海権が握れるとは思えない。対日戦が始まるまでに、即ち共産党を倒すまでに3年も掛けるわけにはいかない。が、この大量の鉄鋼は今後の軍備増強に一役買うかもしれない。」

「軍備増強ねえ……」

「すみません。」

「どうした、騷先？」

手を挙げた朱家驊、字騷先を見た蔣は話を止めさせ、孔も自身の丸い顔を朱の方を向ける。

「それよりも、この大洗というのは何者なんですか？全長7キロもある空母型のものなんて日本でも、いやアメリカでも建造できると思えないのですが。」

「情報では日本にもう1隻同様の艦が東京湾の外にあるらしい。それは日本から物資補給を受けているそうだ。」

「……本当ですか？としても、そのような大型の艦2隻に関する情報がCC系から全く流れてこないのは不気味ですな。」

「それに関しては藍衣社からも来ている。だが向こうの代表として来ているのが日本人で、彼女らが日本の学園艦を名乗っているのだからそうとしか考えられん。」

「……」

「艦内のものを貰って全員上陸させて、有能なやつだけ残して秘密裏に山奥にでも追いやってしまったらどうだ？」

「まず全員上陸させるためにわざわざ輸送船を与論島の近くまで送るのか？おまけに山奥に追いやる手間の方が面倒だぞ。秘密裏ならなおさらだ。」

「それに代表として来ている人間でさえ中国のどこの言葉も話せないのだから、有能だとしても使える人間はそんなにいないだろう。日本人が我々の手引きで大量に上陸したのが民衆にばれてさらなるストライキが起こる方が面倒だ。」

「……やはり一度の物資提供が出来れば御の字だな。」

「だが、その一度が民衆にばれて国内が再び混乱でもしたら今は壊滅

に近い共産党が息を吹き返すかもしれないぞ。」

「……軍としてはこの鉄鋼と食糧は興味深いのだが、ここまで弊害が大きいのなら諦めた方が良さな。」

「いずれにしても向こうの出した条件で乗るわけにはいかないでしょう。」

「では援助は断る、という方針は良いかな？ 異議のあるものは挙手を。」

「異議なし！」

その場にいた部長たちから一齐に声が聞こえ、誰一人として腕を動かすものはいなかった、はずだった。

「ん？」

しかし、1本だけ腕が天井を向いている。

「すみません、1つ疑問が……」

「遑先か、何だ。些細なことならこのまま賛成多数で決定したいのだが……」

「いえ、その大洗学園艦とやらは航行しているのですか？」

「ああ。雨農から報告を受けた時はもう一つの同型艦の近くにいたそうだが……」

「東京から与論島沖まで、石油を燃料として航行してきたのですか？ 領内で石油を自給できない日本が？ この大きさだと燃費が悲惨なことになると思いますが……」

「……確かに。では石油では動かしてない、と。」

「私はそう思います。そしてこの大きさの学園艦を動かしている訳ですから、そのエネルギーは我々の人知を超えたものだ。」

「……口を挟んで悪いが、君は何が言いたいのだね？」

孔が腕を組み背もたれに寄りながら顔を朱の方へ回す。

「……この学園艦は、我々と同じ理論の上には成り立っていないのかもしれない。」

「すまない。ますます分からない。」

蔣も孔も眉を潜めながら朱の顔を覗く。

「まさか学園艦が別世界から来たとも言うのかね？」

「話が向こうと通じていますから、流石に別世界というのは言い過ぎだと思えます。しかし、学園艦が我々の知らないエネルギー源を持っている、とは十分に考えられます。そのエネルギーを使うことができれば、我が国に革命的な影響を及ぼすかと。」

「しかし、それを我が国がコントロール出来るのか？しかもそれに投資するにも資金、物資などが要る。それとさらに学園艦に物資補給するなら幾ら何でも割に合わん。」

「外交部としても日本人を受け入れてさらにストライキが頻発されれば、そのエネルギーを用いて支えるための工業力が低下します。その上日本からの情報流出であれば日本との開戦の要因になり兼ねません。ただでさえ戦闘機派遣で刺激しているのですから、これ以上は避けるべきです。」

「……やはり、日本人を受け入れることと物資補給をしなければいけないという2つの弊害に勝る利点は無さそうだな。行政院としてはこの要求は断ろう。」

「……そうですね。」

朱も疼く学者魂を抑え渋々納得した。

「……さて、」

「蔣閣下、他にもあるのですか？」

手をつき背筋を整える蔣に王が問いかける。

「いやいや、この要求を完全に話し合わずに頭から断るのは国として如何なものか、と思ったのだが。」

「つまり、無理な要求を突きつけて断らせた方が他国などの印象もまだ良くなる、と。私はその必要はないと思うが。相手は国家ではないのだから、そもそも対等に議論する必要もない。」

「しかし、相手は日本を離れたとはいえ日本の学園艦ですよ。下手に日本の心象を悪くすることもないと思えますが。」

朱は蔣の方に加勢する。

「とはいっても……方が一相手がこちらの出した無茶な条件を呑んだらそれはまた面倒だろう。」

「向こうは少なくとも数10万人が1日に消費する食糧を持っている

のですよね。ならば無茶な要求を突きつければ大人しく引き下がるのではないですか？」

「しかし補給を貰ってない学園艦は孤島のようなものだ。少しでも状況が改善しそうならば食いついてくるかもしれないぞ？」

「食いつかれては困りますよね……」

「やはり万が一のことを考えて、断固受け入れないと伝えた方が宜しいのでは？」

「……そうだな。では、大洗の者たちにはその方向で伝えるとしよう。」

蔣のまとめに周りの者は同意した。

「それと大洗の者たちはこのまま帰すか？」

「将来的に敵となりうるか、ですか。」

直後に孔が言った言葉に反応したのは汪だった。

「ふむ……それは今朝送った美齡の返事次第でいいだろう。」

「奥さんを上海に送ったのですか？」

「あいつは今まで私より多くの人に会ってきた。私よりも人を見る目はあるだろう。」

「確かに美齡なら安心だ。」

孔も賛成の意を表した。蔣は不満のある者とは聞いたが、反論は上がってこない。

「では、美齡の返事を待つとしよう。」

その場で他に議題もなく、行政院の会議はお開きとなった。

「……なるほど。」

「貴女が失敗したのは大きく2点。まずは今の中華民国に対する理解、即ち我が国の日本に対する悪印象を甘く見ていらしたこと。もう1つはそちらが要求したのが長期的なことであったのに対し、そちらから提供されるものが短期的なものであったこと。責任を感じる期間はこちらの方が長くなるわけですから、こちらが嫌うのも当然です。」

「……」

角谷は美齡から発される言葉を脳内でできるだけ早く変換しながら

ら理解しようとした。

「……我々との交渉が失敗したら他国に頼るのでしよう？日本から去ったということは、恐らくまた西に。」

「……はい。」

「でしたら、この経験は貴女にとってプラスになったと思います。この先どのように交渉されるかはわかりません。また私も外国の方との付き合いがあります。が外交に関しては門外漢なので、忠告するというのがおこがましいかもしれませんが、伝えておきたいことがあります。」

「はい。」

目を一瞬たりとも逸らさない。

「まず、貴女がたが相手国を利用しようとしているのと同時に相手国も貴女がたを利用しようとしているということ。そして、外交というのは利用し合いであるのと同時に騙し合いでもある、ということですよ。」

「cheating each other……」

「流石にイギリスほどの舌の数は必要ないですが、もう一枚くらいあると便利だと思いますよ。」

「……」

「そして、恐らくそれが貴女がたが生き残る道、なのでしよう。」

「そういうもの、なのですか。」

「そうです。」

「……一つ宜しいですか？」

「何でしょう？」

「貴女は、なぜそのようなことを私に教えてくださるのでしようか？何処からともなくやってきた怪しい存在なのに。」

「……そうですね。私は未知の世界に飛び込んだことがあるので、貴女に少し共感したからでしょうか……申し訳ありません。詳しくは分かりません。」

「……未知の世界。」

「貴女がたの提案内容と学園艦などから、貴女がたが私の常識を超え

た人たちだと推察できます。だとするならば、貴女がたにとって私たちの世界は未知、少なくとも又聞きした世界であるはずです。」

「……その通りです。」

「だからこそ、この世界が貴女がたの常識とは異なるとお伝えしたかったのかもしれない。」

「……ありがとうございます。」

「もう暫くすると貴女がたに要求拒否の通知が来ることでしょう。生憎私がお助け出来るのもここまでです。」

「……私は生憎諦めの悪い人間です。」

「そうですか。」

生徒会長を務め、大学も推薦で受かる角谷だ。美齡からの格式高い英語にもしつかり返す。松阪は一步下がって口を挟まずに待ち、船舶科の二人は半ば放心状態でオーバーヒートしていた。

「……では、私はこれで。」

美齡が席を立って黒服を一瞥すると、黒服の男は椅子を回収して扉を開く。

「……幸運を。」

最敬礼で見送る4人を背に、美齡はモデル歩きでその部屋を去っていった。扉に再び鍵が掛けられ、足音は徐々に小さくなっていく。それが聞こえなくなった時、角谷は急に足が無くなったように重力に引かれて腰を床に落とした。

「……」

呆然と美齡の去った扉の中央を見つめている。

「……完全に失敗、か。」

「……ええ。」

松阪も両手を腰に当て深くため息をつく。

「……一応返事を待とう。まだ正式に断られた訳ではない。」

「あとは……安全に帰れるかどうか……」

「……」

「小山……ごめん。」

角谷の視線は扉から床に移っていた。

もう日が沈み、業務を終える者がちらほら見え始めた頃、総府の前にやっと車が戻ってきた。

「……やっと着いたわね。」

「お疲れの出ませんように。」

運転手の見送りのもと、美齡は総府に入り真っ直ぐに蔣のいる執務室に向かう。扉の前にはあの付き人がすつと立って待っていた。

「宋様、蔣閣下がお待ちです。」

「分かったわ。」

中に案内されると既に蔣の机の前で椅子が準備を整えていた。用意が良いことだ。

「美齡、待ってたぞ。」

「それで、早速報告した方が良いかしら？」

「そのために来たのだろう？」

「ええ。」

椅子の前に立つと付き人が後ろから椅子を軽く押す。その力加減が丁度良く、美齡は心地良く着席できた。

「それで、大洗の代表らしき少女は我々の敵となると思うか？」

「敵とはなりえない可能性が高いと思うわ。」

「……ほう。それはなぜ？」

「彼女はリーダーとしては優秀だと思うわ。彼女がリーダーとなれば人はついて行こうとする。けどそれはその集団内での話。彼女は正直で、さらに経験が足りないがゆえに外交や政争に弱い。仮に我々と仲の悪い国に行ったとしても政争などで追い落とされる可能性が高いと思うわ。」

「……我々と直接戦うトップにはならないと。」

「ええ。それで、彼女たちは如何するの？」

「敵となりえないなら、日本との関係をわざわざ悪化させる必要もない。」

「……」

「このまま帰そう。」

広西大洗奮闘記 15 狐は疾風に尋ねる

放課後、ある小さな会議室に来たのは丸メガネのヤボクだった。後ろから入って黒板の前に座っていたのはゴモヨとパゾ美である。

「……こちらに来なさい、ヤボク。」

「何っすか？」

「……調査を開始してから1日、何か進展があるはずよ。」

「進展……ですか？」

「まさか無いと言うつもり？」

「いや、あるにはあるんすけど、断定できないものも多いんす。」

「まあいいわ。とにかく情報を出しなさい。あるんでしよう？」

ヤボクは持つてきていた紙をめくり始めた。

「ええと、まず船舶科内で情報統制と緘口令が敷かれていましてね、これには罰則、それも強制退学及び退艦というのが課せられているよ。なんで聞き出すのは厳しいっす。」

「……その緘口令に協力はしてるけどやっぱり随分物騒な罰則ね。」

「これに関しては船舶科内で決定したことなので生徒会に対して追求はできないっす。」

「……まあ次。」

「次は生徒会長の角谷杏、についてっす。16日に艦橋方面に歩いている姿が確認されているんすけど、それ以降の目撃証言は無いんすよ。」

「生徒会室に籠っているんじ……え？」

急にゴモヨの顔が引き締まり、顎に手を当て顔を背ける。

「如何したの？ゴモヨ。」

「昨日生徒会室行った時、小山さんから話聞いたよね。」

「うん。」

「その時、角谷会長……居なかったわよね。」

「……まさか。」

「今学園艦に居ない可能性があるわ。」

「その可能性は既に調査を開始してるっす。ですが、断定までいくには時間がかかるっす。それと配給の終了後に生徒会の者が何か漏らさないかと見張りに行かせたんすけど、バレかけたらしいっす。」

「……それは大丈夫なの？」

「生徒会室を遠方から見張らせているやつによると生徒会側に動きは無いそうなんで大丈夫っすよ。」

「……気をつけなさいよ。」

「徹底させるっす。」

「……要するに、角谷会長が居ないかもしれない、それだけ？」

「そうっす。」

「そう、ありがとう。引き続き調査を続けなさい。」

「了解っす！」

丸メガネのおかつぱは敬礼を決めると部屋を飛び出していった。やはり調子のいい奴だ。

「……仕事はしてくれているようで何よりね。」

「そうだね。それで、ゴモヨ。」

「何よ？」

「鬼の居ぬ間に洗濯するの？」

「……鬼が居ないか未定だし、仮にそうだとしても流石に鬼の戻る前に準備が整わないわ。統制体制が導入され抵抗運動の準備が整って、そして生徒会が学園艦の住人に関する情報が隠匿されていると証明できるまでね。」

「……でもその鬼はこの学園艦を守ったカリスマ。倒して支持は得られる……かな？」

「だから前言った策があるんでしよう。」

「それはまだ取らぬ狸の皮算用だよ。」

「いいえ、それは一言で成り立つはずよ。テレビもネットも繋がらない今だからこそ、ね。」

夕刻 とある一軒家

この家は学園艦でも広い敷地面積を持つ部類に入る。庭も付いて

いて二階まである。随分と贅沢なものだ。

「……次の配給取りに行くのだから……」

その家の中のリビングで4人の少女がそれぞれ思い思いの本を読んでいる。それぞれ

『ローマの属州運営と商品作物』

『第二次世界大戦前後における移民社会の動向』

『守りきった城、の地理的優位性』

『幕末、明治維新における列藩会議論の果たした役割』

という興味がなければ手にも取らないであろう本を丹念に読み込んでいる。

「たしか、もんざだったと思うぜよ。」

「私か。丁度良い所なのだが時間も決まっておるし致し方無い。」

六文銭の赤いバンダナを巻いた左衛門佐が本に武田菱の書かれた葉を挟んで立つ。

「たしか暗証番号のやつはいつもの籠の中に入ってるはずだ。」

「承知。」

「行ってらっしゃい。」

左衛門佐は1人いつも通りの格好で家を出て行く。残った3人のうちリーダーのカエサルも本を置きヤカンで湯を沸かし始めた。

余談であるが、基本的にこの家で作られる茶は緑茶が多い。

日本茶派が2人、麦茶派が1人、気にしない人が1人だからだ。夏は麦茶が増える。

ヤカンの水蒸気が出口の笛を鳴らし、笛の部分を開いて用意していた湯飲みそれぞれ注ぐ。こうしないと日本茶好きが文句を言ってくるから仕方ない。

湯飲みが程よく暖まった頃にそれを1杯ずつ急須に移し、すぐに戻す。黄色い日本茶を許せるのは麦茶派とカエサルのみだ。最後の一杯戻し終えた頃、本を畳む音がする。

「エルヴィン、読み終えたのか?」

「いや、もう5時か。」

「そうだが。」

左衛門佐の行った夕方の配給の時間まではあと少しだ。床に座っていたエルヴィンは腰を捻りながら立ち上がる。

「少し出かけてくる。」

「どこに行くぜよ?」

「グデーリアンの所だ。」

「グデーリアン?何かあるのか?」

「ちよつと聞きたいことがある。」

「エルヴィンがグデーリアンの聞きたいことというところ……戦車のことぜよ。」

「まあ、そんなところだ。」

「飯と外出禁止までには帰ってこいよ。」

「Why not。」

エルヴィンは机に置かれた湯飲みを空にして、少々冷蔵庫を覗いてから出かけて行った。

「しかし戦車道の授業が減らされた今、戦車に関しては聞きたいこととして一体何だ?戦略論なら西住隊長に聞いたほうがいいだろう。」

「しかも時間も気にしていたから約束もしてしていたみたいぜよ。」

「と、そうだ。茶を淹れたから渡しとくよ。」

「おお、ありがたいぜよ。まあ、帰ってきたら聞けばいいぜよ。」

「そうだな。」

カエサルが首のマフラーを払う。2人は風もないのにマフラーと法被が揺れたような気がした。

配給に向かう人の移動に軽く逆らいつつエルヴィンは道を急いだ。心の中で膨らんだ風船が針で割れない程度に突かれていた。何故だろう。自分でもこの膨らみを思うたびに嫌になる。そうこうしているうちに目的の場所の前に到着した。入り口では3色の帯が降っていつている。

「インターホンは……これか。これは直に入った方がいいな。」

扉を開くと中には椅子が数個並び、その正面には大きめの鏡が取り付けられている。

「失礼します。」

「はい。」

返事をしたのはグデーリアンにそっくりな女性だ。直に会ったのは初めてだが、彼女の母だとすぐに分かった。彼女の方もまたエルヴィンが客ではないと推察がついたらしい。

「どうしました?」

「すみません。戦車道で一緒にさせて貰ってます、松本と言います。グデ……いえ、優花里さんいらっしゃいますか?」

「優花里ですか、ちよつと待つてくださいいね。」

その女性は階段の下に向かい、下からグデーリアンの本名を呼びかける。その歓迎の返事は入り口にいたエルヴィンの下まで聞こえる。

「どうぞ。」

「あとすみません。これ宜しかったら。」

エルヴィンは手持ちの袋に入れていたものを女性に差し出す。女性にはあらあらと言って受け取り、エルヴィンは一言伝えて階段を登って行った。

「エルヴィン殿、お待ちしております!」

「急で悪いな、グデーリアン。」

座布団を用意して部屋で待っていたグデーリアン、秋山優花里に挨拶するが、それよりも目に入ったのは部屋の壁を全て覆わんとする砲弾、戦車の部品、模型、ポスターなどの品だった。自身の家がシエアハウスのため、名の通り第二次大戦時期に造詣のあるエルヴィンでもここまでの品は持っていない。というより持てない。

「……初めて来たが、すごいな。」

「へへへ。恐れ入ります。」

頭のモフモフ頭を掻きながら優花里が答える。

「特に砲弾。今は戦車道をやっているから不思議ではないが、それよりも前から持っていたのだろうか?」

「そうですね。戦車道始まってから買ったものはむしろ少ないです。」

「アハトアハトから38ミリまで、ドイツ以外のも多いな。」

「アハトアハトはIV号のよりも断然重いので、今でもトレーニング

に使ってますよ。」

「……だから二つ持っているのか。」

「はい。それ以上は流石に手が出ませんが。」

話の通じる者同士だと会話が弾む。家にいるのも歴史好きばかりだが、好きな時代が一番近いおりようでもこうはいかない。話がさらに盛り上がろうとした時、扉からノックが聞こえてくる。

「失礼します。お茶でもどうぞ。」

「ありがとうございます。」

コースターの上にコップを乗せる。入っているのは好きな麦茶だ。

「それで、松本さんは戦車道で一緒にしたっけ？」

「はい。I-I-I号突撃砲の車長をやっています。優花里さんには知識など色々教えてもらってお世話になってます。」

「あらあら。だとしたらすごいエースの方じゃない。」

「え、エースだなんてそんな……」

「とりあえず、ゆっくりしてね。」

「それでは、お言葉に甘えて。」

優花里の母はコップを乗せていた台を持って部屋を出て行った。

「そういえばエルヴィン殿が松本、と苗字で呼ばれるのは珍しいと思います。」

「そうか？まあクラスが違うから当然か。戦車道だと完全にエルヴィンだからな。クラスでは松本さん、だが。」

「あまりイメージが湧かないであります。」

「そちらがクラスでグデーリアンと呼ばれないのと一緒だ。」

「……分かったような、分からないような……それで、エルヴィン殿。今日はどうして約束までしていらしたのでありますか？」

エルヴィンは急に顔を曇らせ、それを帽子のつばを下げて隠そうとする。

「……一つ相談したいことがある。」

「相談、でありますか？」

「乗ってくれるか？」

「勿論であります！」

「……私は、見たんだ。」

「見た？」

「……今、大洗学園艦に儉約体制が敷かれているのは知っているな。それは、補給船が来れないが為に敷かれたものだ。」

「それが故に配給制をとっていますね。」

「だが、私は……輸送船が1隻、夜陰に紛れる形で学園艦から出発したのを……見たんだ。」

「えっ！ど、どとどういうことですか！」

「つい一昨日のことだ。外出規制の掛かる時間まで私は夜風にでも当たろうとテラスから海を眺めていた。そうしたらだ、何か音がしたんだ。間もなく学園艦の後ろ側から船が現れた。」

おかしいとは直ぐに分かった。何せ夜で辺りは暗いのにも明かり一つ付いてなかったうえにやけに低速だった。恐らくエンジンを響かせないため。つまり存在がばれてはいけない船、だということだ。」

「それは……補給を求める船、では？」

「いくら今の我々がネットもケータイも通じていない現状でも流石に何も通じないということはないだろう。そんな状況で停泊させないなら尚更だ。第一通信も出来ない状況で船を海に放り出す訳がない。つまり通信は何かしら取れるということだ。それならわざわざ船を出す必要はない。」

「……確かに。」

「グデーリアンも少しは気づいているだろう。この学園艦は南の島の港が使えないから補給が貰えない、という訳ではないと。」

「……それは。」

優花里の脳裏をよぎるのは、西を向く学園艦、麻子の不思議な行動、そして戦車道で急遽決まった砲弾の節約。

「……本当の理由は何だと思う？」

「……無難なところであるなら、文科省が補給を止めた、といったところでしょうか？」

「……妥当だが、それは私たちに隠すことか？しかもネットもテレビも繋がらないようにしてまで。今まで生徒会は廃校、廃校阻止の撤回

など多種の情報を隠してきたが、ここまで徹底したことはないだろう。」

「……では、いったい……」

「ここから先は完全に私の想像に基づく予想だ。確証はない。自分でもまだ信じられていない。だが、これなら一番矛盾がない。」

「……何でありますか？」

「今いるのが……ついこの前まで我々がいた世界ではない、ということだ。」

「……へっ?」

「やはりそうなるだろうな。自分でも分かってないのだから。だが、それならネットもテレビも衛星放送もGPSも繋がらず、補給船も来ず、そしてそれが8日の光からガラリと変わってしまったこと、そしてあれ程強烈な光を浴びたにも関わらず誰も健康被害などが出ないこと。光が何か以外は説明がつかってしまう。」

「……無理矢理な感じは否めません。」

「だから相談に来た。生憎私の考える限りだとこれぐらいしか思い浮かばない。」

「何故そこで私なのでありますか?どちらかと言えば冷泉殿の方が考える事に関しては得意かと思いますが。」

「……グデーリアンの論理的思考、計画性の高さを借りたいのと、私がそもそもあまり冷泉さんと一対一で話せる自信が無いからだ。」

「流石に冷泉殿にはかありませんよ。」

「戦車についてのグデーリアンの説明は何時も分かりやすい。それはうちら全員の共通の認識だ。そして2度に渡る潜入の成功。制服の準備、輸送船の時刻も調べ上げている。並大抵のことでは無いはずだ。」

「そ、それは西住殿の為ですから……」

少し顔を紅くして優花里は顔を逸らす。

「とにかくだ。私はグデーリアンを頼りたい。」

「あの……今の話はカバさんチームの皆さんには……」

「まだ言っていない。皆何かと行動っ早いからな。それで、グデーリ

「アンはどう思う。」

「……そうですね。まだエルヴィン殿の言ったことが事実というのは時期尚早過ぎますが、何か隠されていることがある。それは船舶科が知っている。これは言えると思います。あともう一つ聞きたいのですが。」

「何だ？」

「エルヴィン殿は、この疑念を解いてどうしようとお考えでありますか？」

「どうする、か。私はただこれが嘘だと信じたい……本当なら私は戻るまで親にさえ会えない。」

「それで、ありますか……確かに私みたいに家族とともに乗艦しているの方が稀ですからね……」

「そして、もう戦車道で他の学園と試合も出来ないんだ……継続高校とか戦ってみたかったんだがな……」

「……」

「……聞いてもらって助かった。時間をとってもらってすまない。」

「いえ……」

「失礼する。また何かあったら相談に来てもいいか？」

「大丈夫です。」

コップを空にしてエルヴィンはコースターと共に静かに部屋を去った。部屋に残された優花里は座布団の上で座ったまま身体から熱がじわじわと奪われて行っているのを感じた。その為か優花里は次に部屋に母が入ってくるまで何分空いたのか知らない。

「あの松本さん、礼儀正しいいい子ね。でも帰り際すこし落ち込んだように見えたけど優花里何かあったの？」

「……いいえ、特に何も。」

広西大洗奮闘記 16 僥倖を任す人

翌日の10月20日の夕方、交渉は一切しないと書かれた通知を片手に四人はまた銃を突きつけられつつトラックに載せられ、最初に入港した軍港に連れてこられた。トラックから降ろされると前には乗ってきた輸送船がちゃんと停泊していた。

「お前たちはこれから戻ってもらう。備品は基本そのままだ。ただし上海から出航してからしばらくは哨戒艇を護衛につける。」

その場にいた兵から松阪を通じて角谷が問う。

「しばらく、ってどれくらい?」

「1時間程と聞いている。それと、お前たちに会いたいと言っていらつしやる方がいる。」

「私たちに?」

すると兵の後ろからスーツ姿のメガネの男が姿を見せた。

「大洗の者たちよ。」

しかし男の言葉は松阪には分ならず戸惑ったような所作を見せたため、男は一息ついて後ろに来ていたまた別の者呼んだ。

「おい、こいつらに北の言葉で挨拶してやれ。」

「はっ。」

呼ばれた男は前に進み出て角谷たちに大きく礼をする。

「出航前に失礼する。この方は上海市長の呉閣下だ。」

「上海市長!」

松阪の驚きようなを見た角谷が聞くが、その返事を聞いた直後二人は揃って呉に最敬礼を示した。

「……上海市長が我々にどのような用でございますか?」

「いや、はるばるここに来た者たちに少し興味を持ったのと、このご時世に食料を食っておきながら我々に利益が無いことへの恨み節をぶつけようと思っただけさ。」

「……山本くん、田中くん。」

「えっ、あ、はい。」

2人より下がって頭の回路を数本切らしていた船舶科の者たちは

それらを再び繋げる。

「君たちは我々の持ってきた食料を4人の1日分だけ残してほかは持ってきてくれるか？美味しい食事をもらった礼だ。」

「は、はい！」

駆け出した2人を見ながら呉は隣の者に言いかける。その者がどうしたのかと聞くので松阪は利益だと答えた。

「……それで、君たちはなぜこの国に来た。私は君たちを日本の艦から来た者と聞いているが、援助を求めらるならそのまま日本にいた方が良かったのではないかね？」

「……私は詳しいことは分かりませんが、トップに聞いている暇もないのでお答えしますと、貴国は未来も残り続けるでしょう。」

「日本が滅ぶとでも言うのかね？というより、なぜ君たちがそのようなことを知っている？」

「貴国と日本は将来的に戦争に突入するでしょう、それも予期しない時に。そして、そのとき勝つのは貴国だ。貴国は日本よりも多くの味方と自国の民の力を用いてこれに勝利するでしょう。」

「……予言か？」

「いえ、私たちが知り得ている情報から考えられることです。」

「……」

「だからこそ、我々は勝ちそうな国と共にしようとした訳です。」

「……君たちは我が国を理解してないか未来が読める、どちらだろうな？」

「理解してないのだと思いますよ。この前面会した方にもそう言われましたから。」

「……そうか。」

その頃、やっと船内から船舶科の2人が袋を背負って出てきた。

「食料……少し残して持ってきました。」

「ありがとう。こっちに置いてくれ。」

「はい……」

足元に置かれた袋を開けまじまじと見つめた呉はまた隣の者を通じて聞いてきた。

「これは何だ？」

「保存が効く食料です。冷暗所に保存しておけばかなり保ちます。」

「どの位だ？」

「えっと……」

松阪は上の方にあつた銀のパックの一つを手に取りじつと眺める。消費期限らしきところには2014の四文字。

「2年後まで大丈夫ですね。」

「!??見た目よりも長く持つのだな。」

「生憎数はありませんし、礼としても微妙だとは思いますが、どうぞお使いください。」

呉は近くにいた兵を2人ほど呼び、袋を背負わせると一言礼を言つて帰つて行つた。

「話は終わったか。」

先程の兵が銃を携え寄ってくる。

「ええ、お願いします。」

「ではとつとと乗り込め。すぐに出航するぞ！」

松阪は少し悪いと思いつつも生徒たちを急かして船に乗り込ませる。そして哨戒艇の出航を示す青い四角の旗が掲げられたのを確認して、田中が舵を握つて4人は上海を離れた。

軍港を離れてしまえば辺りは真っ暗だ。4人はテレビなどで見た上海の夜景イメージとはかけ離れた様を見て、やはり過去というのが事実であるということを見にしみさせた。

小山は夜中、眠っていた頃に耳を突く緊急無線の音で目を覚ました。隣で寝ている華が目を覚ましていないところを見るとどうやら自分はよく眠れていなかった模様だ。

とにかく体を一つ伸ばして少しふらつきつつ隣に向かい、イヤホンを耳に差し込む。ボタンを押した瞬間、けたたましい音がさらに鼓膜を刺激し、寝ぼけていた小山の脳を強制的に目覚めさせる。

「……はい。生徒会の小山です。何ですかこんな時間」

「副会長!会長が!角谷会長が!」

少しイラつきながら答えているとその声を遮るようにまた鼓膜刺激させられる。

「どなたですか!」

「あ、すみません。船舶科艦長の大橋です。ですが本当に艦橋に来てください!角谷会長が帰ってこられます!」

「会長が……分かりました!すぐに向かいます!」

小山は素早く会話を切り、制服の上着をパツと羽織って音を立てる間もなく生徒会室を去った。外に出た小山は異様な暖かさを肌身で感じた。夏、までとは言えないが初夏と言われれば十分納得できる気温である。

学園艦は予定通り南に向かっている。だがこれから会長が帰ってこられるなら少し速度を上げるのだろうか、そんなことを考えながら自転車が跨り街灯も余りない道を駆ける。だが、間もなく小山は誰かに呼び止められた。

「ちよつとそこの自転車の人!こっちに来なさい!」

明かりを持って呼び止めたのはおかつぱの2人の女だ。つまり、風紀委員だ。小山は言われた通り彼女らの前で自転車を止める。

「貴女今何時だと思っ……て、副会長さん?」

「こんな時間までご苦労様です。」

「あ、ありがとうございます。て、そうじゃなくて、こんな時間に何してらっしゃるのです?外出禁止の時間ですよ。」

「すみません。艦橋から呼び出されたもので。」

「船舶科からですか?一体何ですか?」

「角谷会長が補給を受けられるようになるか交渉に向かわれていたのですね。その結果を聞きに行くんです。」

「角谷会長、そんなことなさってたのですか?そういうことなら。」

「ありがとうございます。一応このことは内密に。」

小山はにこやかな顔の前に指を立てた後再び自転車を走らせた。

そのまま艦橋の下に自転車を止めた小山は急いで階段を駆け上がると、上で白い船形帽をかぶった船舶科の1人に呼び止められ

操舵室に案内された。

「失礼します。小山副会長です。」

「大橋さん！会長からの無線は！」

「こちらです。」

蜂の巣を突いたような騒ぎを通り抜けて艦長の前に進む。手渡されたヘッドホンを頭にはめて少し痛みを堪えながら無線を繋いでもらう。

「こちら大洗女子学園学園艦、大洗女子学園学園艦。応答願います。」

ドラマか何かで聞いたような言葉で小山は聞いたが、返事はない。

「……会長！小山です！」

「ああ、小山か……」

「交渉の結果はどうになりましたか！」

「……」

「会長！」

「……」

「……会長？」

「……すまない。完全に、失敗だ。」

「……」

「交渉そのものを向こうから打ち切られたよ。」

「……そうですか……」

「小山には、無理してもらってまで提案内容を書いてもらったのに、すまない。」

「……いえ、まだ、私たちは終わっていません。まだ次があります。」

「……」

「いつ、戻っていらっしやいますか？」

「今日の夜中、だそうだ。上海から5時間以上乗っているが、上海からは一日かかるらしい。」

「今夜、ですか。」

「本当にすまない。」

「次、頑張らしましょう。」

「……うん。」

角谷は今まで利益の得られない交渉を経験したことがない。それゆえに今回の出来事にショックを抱いていた。

「後一つお願いがあるのですが、今回購買から販売品の不足のため食糧、燃料以外のさらなる備蓄放出を求められたのですが、その為には統制体制の導入が必要になるんです。その許可を頂けますか？」

「……いいよ。」

「ありがとうございます。それとそれに伴いまして、これにより学園への反発が高まることが予想されますので、風紀委員への権限を強化したいのですがよろしいですか？」

「……具体的には？」

「反対行動実施者、計画者の統制体制終了までの拘束と取り締まり時の簡易的な自衛道具の所持の許可、といったところでしょうか？」

「……ふむ……日本はもう、関係ないからね。」

「日本で決められた法は無視しても取り締まられません。」

「……おっけー。それでよろしく。」

「では、前者は明日、後者は今日の昼には発令の用意を済ませます。」

「……よろしくね。」

「それでは、また今夜。」

「……ああ。」

最後の返事を確認して小山はヘッドホンを外して待つていた無線士に渡す。彼女らは引き続き角谷らの乗る輸送船に位置情報を提供しなくてはならないのだ。

「今夜戻ってらっしゃるそうですね。」

「ええ、その前にご一報入れます。」

「ありがとうございます。」

「誰か、下まで送ってやれ。」

小山は一礼して部屋を出て、付添いの人と共に下まで降りていった。

「……はあ。」

「どうしました？大橋艦長？」

「いや、なぜ小山副会長は交渉を断られてもあの様に冷静にいられる

んだろうな、と思つてな。あの人もこの先責任が増すんだぞ。」

「それは我々も変わりませんよ。」

「……それもそうだな。」

「それは本当なの？」

「ええ、夜間行動の見回りをしていた者から聞いた話だと小山副会長が直々にそう言っていたそうよ。」

日曜日にも関わらず朝早く、眠い頭を叩き起こしてゴモヨとパゾ美は学園に急ぐ。

「そして、補給を受け取れる様に交渉をしてきた、と。」

「ええ。これはチャンスよ。」

「へ？」

「補給が貰えるとしたら儉約体制打ち切るだろうし、貰えなければ統制体制が導入されるきっかけになるかもしれないわ。」

「つまり、それで向こうの動向が分かる。」

「それだけじゃない。帰ってくるなら補給船ドックに戻ってくるはず。そこに調査をさせれば詳しい動向が分かるかもしれないわ。」

「今朝行きがけにヤボクを呼び出したのはその為だったのね。」

「角谷会長が戻ってくるまで時間は余りないわ。すぐに動きましよう。」

気がつくともう彼女らは校門の前にとどり着いていた。すぐさま風紀委員会の部屋に飛び込み、資料を調べはじめた。しばらくして良い感じに資料が上がってきたころ、駆けてくる足音の後に扉がノックされた。

「会長、ヤボクつす。」

「入りなさい。」

丸メガネのおかつぱは中に少し控えめに入ってきた。

「こんな朝早くになんすか？」

「一つ頼みたいことがあるんだけど、その前に貴女は何か情報を得ているの？」

「特にないっす。」

「角谷会長に關しても？」

「いえ、特にウチには来てないっす。」

「……そう。それで頼みたいことは、今日、明日に学園艦のドックに潜入する委員を選んで欲しいの。角谷会長が補給を求めて艦外に出てらっしゃるといふ情報が入ったわ。その確認と生徒会の動向を見るためにドックに貴女の所から誰か潜入させて欲しいの。」

「潜入っすか？」

「そうよ。」

「待つてくださいいよ。無理無理無理っす！確かにウチら学園艦店舗運営補佐担当は違反の疑いのある店舗の調査とかを仕事にしていますけど潜入とかそこら辺は門外漢っす！そんなことできる奴がいるわけないじゃないっすか！」

「でもよ！これさえ出来れば向こうの動きの詳細を掴めるかもしれないのよー！」

「ばれたらどうしようもないじゃないですか！しかもそれが風紀委員の者だとばれたらウチらもただじやすまないっすよ！現状は生徒会と風紀委員は協力関係なんすから。」

「……でも貴女たちのところ以外に出来るところなんてないじゃない。」

その後もゴモヨとヤボクの口論は続いた。確かに情報を掴める確証はない。その為に潜入に慣れていない者を送る。それは確かにリスクが高すぎた。

「……あのー。」

その口論の中、おずおずとパゾ美が手を挙げた。

「何よー！」

「一つ提案なんだけど、秋山さんに潜入して貰うっていうのは？」

「秋山さん？誰っすか？」

「戦車道の人よ。確かにあの人は潜入とか得意だけど、戦車道にも関連しないのに潜入してくれるかしら？」

「でも受けてくれたら風紀委員を送るよりよっぽど都合がいいよ。風紀委員じゃないんだし。」

「……確かにそうね。万一ばれても風紀委員とは縁がないと言い逃れが効くわ。」

顎に指をかけ思案する。

「だったらその人にして貰えばいいじゃないですか。」

「確かに賭ける価値はあるわ。じゃあ呼び出して話をしておきたいのだけど……」

「生徒会に聞かれると面倒だよな。」

「じゃあクラスの風紀委員を通じて直に呼び出せば良いわ。確か秋山さんは二年普通2科C組だったわね。」

「えっと、そうだね。合ってる。」

「じゃあパゾ美！朝そのクラスの風紀委員を捕まえて事情を言って秋山さんを……いつ連れてきてもらおうかしら？」

「昼つすかね？」

「そうね。じゃあ食事後に呼んで頂戴。」

「分かった、行ってくるよ。配給の時に校門の所で捕まえればいい？」

「顔は分かるわね？」

「じゃあ頼んだわ。」

パゾ美はすぐに部屋を飛び出していった。配給が開始する前に配給所の一つの学校に来るものが多いのでうかうかしてはいられない。

「ヤボクは引き続き生徒会の動向と会長の行き先について重点的に調べて頂戴。」

「了解つすー！」

ヤボクもまた同様に部屋を出て行った。ゴモヨも授業に遅れる前に“秋山さん”に伝える内容を纏める。これは風紀委員から彼女に頼むもの。向こうに利はない。だが、それでもやらなくてはいけない。それがこの学園艦、そして学園を護る風紀委員の務めなのだから。

角谷とその一行は輸送船の中で漫然と過ごしていた。

「……えっと、盗難されたと思われるものが数点あります。」

「……そう。活動に支障は？」

「ありません。ただ鍋の数が足りない程度ですし。」

「あ、そう。他には？」

「天気は平穏です。学園艦からの報告だと到着予定の少し前から雨になるそうです。」

「まあ、でも雨で沈むような船じゃないでしょ。」

「報告は以上です。」

「じゃ……頑張つてねー。」

角谷はそのまま船舶科の2人を残して操舵室を去っていった。

「……会長、元気ありませんね。」

「そりゃあ、ねえ。あそこまで意気消沈されるところからも不安になってくるんだけど……」

「といっても、我々は中国語のちの字も分からないから、こういう形でしか協力出来ないしね。まあ、細かいことは上に任せた方がいいよ。」
「……それにしても、行きもしんどいのに帰りはさらにしんどいってなんなのよ。」

「帰ったらさ、休み貰わない？」

「あ、それいいねー！」

「だって2人で40時間は操縦と通信したわけだし。」

「……それ、5日分だね。そして、私たちが出かけていたのは5日、丁度。」

「……あ。」

「……」

「……うん、なんか、期待させてごめん。」

「……いや、日常生活に戻るだけだから……」

顔から生気が急速に奪われた二人は無線と舵に手を戻そうとした。

「何？休暇？」

その時、松阪がちよつと寝癖の残った頭でこちらに来了。

「あ、松阪先生。おはようございます。」

「いやー長く寝ちまってすまんね。それで、休暇もくれないなんて何で船舶科はそんなにブラックなんだい？」

「……いや、5日で5日分仕事したからですが？」

「いや、軟禁されてた分も業務に含んでいいだろう。もし貰えないと言われたら私が直に交渉してやる。」

「……え、あれって飯もらって部屋でぐーたらしてただけですけど？それと腰の黒い物に怯えたくらい？」

「……威圧されるほどなんだから業務でいいだろ。」

「……本当にいいんですか？」

「私もこの様子だと次の仕事がありそうだけど、取り敢えずこの船の中は休みだ。だが君たちは学園艦に帰る前まで仕事があるんだ。休んでもバチは当たらないさ。」

「……キター!!？」

「帰ったら寝るぞ!!？熟睡万歳!!？」

言葉を聞いて一旦電源を切ってから付け直してから一気に狂乱演舞しだす二人を見た松阪は船舶科の業務の忙しさに少し怯えた。

角谷は不安に襲われていた。次の交渉先が交渉に失敗した際にこうして帰してくれるとは限らない。さらに学園にも長期的な負担をかける事になる。今回の偶然に感謝しつつも次の交渉への不安は少しずつ角谷の堅い心を削り取っていった。

広西大洗奮闘記 17 ルアー

「パゾ美、そっちはどう？」

「何とか手配に成功したよ。」

「後は秋山さんを待つだけね。だけど会長が帰ってくる時間が分からないのは問題ね。」

「それは調査班に任せようよ。でも秋山さんへの見返りも用意できてないからね……」

「戦車関連で何かあるかしら？」

「風紀委員で用意できるものはないと思うよ。」

「そうよねえ……」

2人が揃ってため息をつくとき、扉からノックが聞こえてきた。

「……誰？」

「ヤボク、じゃないよね。秋山さんにしても早いし。」

「ちよつとパゾ美出てくれる？」

パゾ美は扉をゆつくりと開いた。

「どちら様ですか？」

「すみません、五十鈴です。金春さん、後藤さんはいらつしやいますか？」

扉の前ですつと立っていたのは、華だった。

「は、はい。いますか？」

「少しお話しが有りますので、申し訳ありませんが生徒会室までご足労願えないでしょうか？」

「生徒会にですか？分かりました。少しお待ちください。」

パゾ美はすぐに中のゴモコに呼びかけ部屋を出て、華の案内のもと生徒会室に向かった。生徒会室まではそこまで遠くはない。

入ると部屋の中では忙しくなく生徒会の者が働いている。華に案内されて入ったのはさらに奥の会長室だった。部屋では小山が叩いていたパソコンから手を離して待っていた。

「すみません。お2人とも急に来てもらってしまつて。」

正面に向けて二人に向かって深く礼をしながら挨拶する。華は部

屋の端に寄り口を挟まずに待っていた。

「いえいえ。ところで案件とは？」

「前にお話ししました権限強化のお話です。会長からの許可も得ましたので前にお話ししました内容を認めたいと思います。こちらの内容でいいか確認をと。」

ゴモヨとパゾ美は揃って差し出された書面の中身を確認めるが、問題は無い。問題はなかった。

「大丈夫です。これをお願いします。」

「現状でもかなりの仕事をお願いしていますのにさらに増やすことになってしまってすみません。」

「いえいえ、学園と学園艦の風紀と治安を守るのが私たちの役目ですから。」

座ったままながら頭を下げてくる小山にはむしろ礼を言いたい。

「……そういえば、角谷会長はどちらに？」

「風紀委員はやはり真面目でしたね。」

「ありがとうございます。ですが、どういうことでしょうか？」

「今朝深夜見張りの担当の方にお伝えしたのですが。」

「聞いてませんね。」

「いえ、内密にしてくださいと言ったもので。」

「……私たちを試したと。」

「今回の権限強化は過激すぎと取られても仕方ない内容です。ですからそれを行う風紀委員は私たちが信用できる存在であって欲しいのです。」

画面の方に視線をそらせつつ小山はそう口にした。

「……それで、信用頂けましたか？」

「ええ、勿論。」

柔かな笑顔をお互い交わす。

「それで、角谷会長は？」

「少し艦外に出かけてらっしゃいます。」

「今回の件などでお話ししておきたいのですが、いつ頃お戻りになりますか？」

「今夜遅くと聞いてます。ですから明日いらつしやるのがいいかと。」
「分かりました。ではそうさせていただきます。」

「お話しは以上です。」

「では、私たちも仕事に戻ります。失礼します。」

ゴモヨはパゾ美より少し深めに頭を下げて、その後二人は小山に見送られて書類を手に生徒会室から去っていった。

「……最高の呼び出しだったわね。」

生徒会室から離れたところでゴモヨはそうぼそりと呟いた。

何時も通りの混雑を見せる食堂で作られた今日の昼食には白身魚のバター焼きとパン、そしてスープと付け添えに粉チーズをかけたサラダが付いていた。

「……このパンちよつと硬い。」

四人で机を囲んでいた中で沙織が一口齧られたパンを握って不満げに言う。

「乾パンよりはマシであります。」

「ゆかりんの食事の基準が気になる。」

「それ言ったら米軍のレーションよりは何でもマシだと思うぞ。」

「ま、まあ、魚とスープ美味しいからいいんじゃない、かな？」

華を除くあんこうチームの者たちは日曜日も学校で昼食にありついていた。

「そういえばさ、いつもゆかりん日曜は家で昼食摂ってるじゃん。何で今日は食堂に来たの？」

「それがですね、今朝急にクラスの風紀委員の人がウチに来まして、昼食後に風紀委員会室に来るようになって言われたんですよ。あまり面識は無かったです。」

「風紀委員に？優花里さん何かあったの？」

「私自身も心当たりはないのですが、何か用事でもあるのでしょうか？」

「風紀委員か……」

「どうしたの、麻子？」

「いや、最近遅刻の取り締まりが厳しくなったな、と。」

「いつも時間通りに来るのが普通なの！」

「日曜日まで8時に配給受け取りに行くとか何の苦行だ……」

「で！今日は行ったの？」

「何とか終了ギリギリには、そのせいで今もとても眠い。帰ったら寝る。」

「明日もちゃんと起きなさいよ！」

「……多分無理。戦車道には行くから。」

「戦車道は午後でしょ！」

既に片目を閉じつつある麻子の前です。沙織が注意している光景。

「……西住殿。何時も通りでありますな。」

「うん……華さんがいれば、ね。」

「生徒会ですか。儉約体制はまだ続くのでしょうか？」

「戦車道の練習も戻して欲しいし、今後もあるから練習試合も組みたいけど……これじゃあ。」

注意はまだ続いている。ちょうど昼食を終えた優花里は皿を纏めて席を立った。

「じゃあすみませんが皆さん。ここで失礼させていただきます。」

「気をつけてね、優花里さん。」

「大丈夫ですよ。」

優花里は笑顔で手を振りながら食堂を去り、皿を所定の位置に片付けて軽いカバン片手に風紀委員室に向かう。悪いことをした覚えはないので不安がる必要もない。廊下ではすれ違う人も無い。ただ、1人だ。

まもなく風紀委員室にたどり着いたが、人の気配が無い。ノックしてみたが返事もない。暫く待ったが扉から出てくる人も無い。呼び出しておいて失礼とは思ったが、いらっしやらないなら仕方ない、と元来た道に戻ろうとした。

「あつ。」

しかし戻る必要はなかった。横を向いた優花里の視線の先には、ともに戦車道の練習をやっている者の内の2人がいたのだから。

「秋山さん、すみません。お待たせして。」

「い、いえ。私も今来たばかりですので。」

「早速で悪いけど、中に入って貰える?」

「は、はい。失礼します。」

少し駆け込むような形で入った2人を追って優花里も部屋に入る。部屋の幾つかの机の上には資料が無造作に載せられている。ゴモヨはそのうちの一番奥の唯一何も載っていない机の前に腰掛け、パゾ美はその前に優花里を案内する。

「えつと、それでお話というのは……」

「秋山さんには風紀委員から1つ仕事をお願いしたいのだけど……」

「仕事、ですか?」

「学園艦の輸送船ドックに潜入してもらいたいの。」

「輸送船ドックですか?なぜでありますか?」

「……これからは風紀委員が入手した機密だから誰にも話して欲しくないのだけど、いいかしら?」

ゴモヨは机に肘をのせて目元を隠す。

「……誰にも、ですか?」

「そう。誰にも。」

「……それを聞いてこの案件を断ることはできますか?」

「ええ、勿論。秘密にしておいて貰えば構わないわ。」

「……お聞きしましょう。」

優花里は唾をひとくち飲み込んで正面に向き直る。

「現在の儉約体制が補給船が来ないことによるものということを知ってるわね。」

「ええ。」

「それについて私たちが入手した情報によると、角谷会長が補給を受けられるように輸送船に乗って交渉に向かわれたらしいの。そして、その角谷会長は今夜ドックに帰っていらっしやる。」

「……」

「そこで秋山さんにはドックに潜んで貰って生徒会が行き先や結果などを漏らすでしょうからそれを聞いてきて欲しいの。」

「生徒会相手、ですか。」

エルヴィンが言っていた輸送船はおそらくこれのことであろうと判断できた。

「生徒会はさらなる規制強化を行おうととしているわ。統制体制、というね。」

「統制体制？」

「これよ。」

ゴモヨはパラパラと生徒手帳をめくると、あるページで止めて優花里の前に突き出す。

「えっと、食糧と燃料だけでなくすべての物流を生徒会が一手に握るのでありますか。」

「そう。これが導入されるということは今でさえ大きな生徒会の権限がさらに拡大されるということ。それを認めるならこちらも生徒会を信用できるだけの情報が欲しいのよ。」

「ではなぜそれを外部の私に頼むのですか？風紀委員の方から出す方が安心だと思いますが。」

「風紀委員に潜入の技術のある人なんていないわ。下手に潜入してバレルより上手な人に頼みたいのよ。」

「……」

確かにここで潜入して情報を得られればエルヴィンが言っていた事を解くカギになる

しかし、時間もないし危険を冒してまで行くべきか……

だが人に会わないように潜入する訳であるから、作戦会議に出席したサンダースとか人前を歩き続けたアンツイオの時よりはマシかもしれない。

「生憎十分なお礼として渡せるものはないけれど、やってもらえないかしら？次の寄港日に月刊戦車道最新刊を差し上げることくらいならできるけど……」

「やりましょう。」

優花里は一瞬目の色を変えると、すぐさまゴモヨの前の机に手を乗せ、身を乗り出しながら答えた。

「えっ！いいんですか？」

「はい！ぜひ！」

「……ではお願いします。今夜遅くとしか聞いていないので長時間ドックにいてもらうかもしれません……」

「大丈夫です！なんとかなるであります！」

「あとこれ、船舶科の制服を手に入れておきましたのでよろしければ……」

「はいっ！この秋山優花里、全身全霊をかけてこの任務を全うします！」

その後2人はテンションが急上昇した優花里の勢いに押されつつも手に入れた情報の一部を伝えた。

「ありがとうございます！失礼いたしました！」

次の月刊戦車道はおまけ付きであります！イヤッホウウウウウ！と心で叫びつつ、カバンに制服をしまった優花里は敬礼を決めると風紀委員室をスキップしながら出て行った。

「……ほんと？」

「いや、ほんとだね。」

「……半分やけくそだったけど、まさか月刊戦車道で釣れるとは……」

「……ま、まあ、やってくれてよかったじゃん。明日の朝に報告くれるそうだから、それを待とうよ。」

「そうね。そしたら私たちは自衛道具の点検をしましょう。使えなかったら意味がないわ。確か裏の倉庫にあるのよね。」

「使用訓練をしなくちゃいけないし、忙しくなりそうね。」

「そうね。風紀委員全員に通り教えるわよ。そのために私たちが使えるようにならないと。」

風紀委員室に残っていた2人も間もなく嬉々とした顔で部屋を飛び出していった。

ゴモヨたちが去った後も小山と華は必死でキーボードを叩き、統制体制導入に向けた準備に励んでいた。学園艦内のすべての物流を管理するのだ。ただならぬ準備が必要になる。まあ、今まで管理

してきた燃料と食糧が一番大変なのだが、それ以外にも学業に必要なペン、ノート、ルーズリーフ、チョーク、その他云々までも管理下に入れるので教師陣との関係悪化の可能性もある。

中華民国との交渉に失敗した今、不満を与えない程度に備蓄を削らなくてはならない。その塩梅が難しい。隣の者達の一部は昼食を取りに行つたが小山と華は少し遅れていくのが通例となっている。住民の不満の矛先となるのは自分たち生徒会幹部だからだ。

だが、そろそろ食堂での配給がひと段落つきそうな時間になつてきた。小山は一回キーボードから指を離し大きく伸びをした。

「んんー。とりあえずここまでかな？」

「小山先輩、どこまで進みましたか？」

「学業関係のものの流通方針まで。」

「結構進みましたね。」

「今夜に会長が帰つてこられるから早めに終わらせないとね。しかし、これだと統制体制導入は明後日からになっちゃうね。」

「量が量ですから仕方ないと思いますよ。」

「と、そろそろ昼ご飯だね。」

「もつと食べたい、というのは贅沢ですよ……」

「流石にね。私たちだけ贅沢する訳にはいかないでしょう？」

「……そうですね。」

「こればかりは会長にお願いするしか……」

その暗くなりつつあった空気をノックの音が打ち壊した。

「はい？」

「冷泉さんがいらつしやってます。」

向こうからは生徒会の者の声がする。

「麻子さんが、ですか？」

「入ってもらつてください。」

「分かりました。」

間も無く、その声の主に連れられて麻子が入ってきた。

「あなたは仕事に戻つて。区切りが付いてたら昼ご飯食べてきていいわ。」

「分かりました。」

声の主は一礼して部屋を去った。

「……失礼する。」

「麻子さん、どうしました?」

「一つ気になることがあったから報告しに来た。」

「なんですか?」

「……秋山さんが風紀委員に呼び出された。しかも風紀委員を家に送ってまで。」

「……普通に風紀指導では?」

「秋山さんはルールを破る人じゃないし、そもそもなぜ明日普通に学校あるのに今日呼び出したんだ?」

「……さあ?」

「考えられるのは一つだけ。風紀委員から秋山さんに今日頼みたいことがあると考えるのが自然だ。」

「風紀委員からですか?」

麻子は立ったまま少し腰に手を当て頭をひねると、恐る恐る言い出した。

「……まさかとは思うが、会長さんが帰ってこられる日は?」

「今夜よ。」

「!?今夜だと!」

「それがどうかしたのですか?」

「今すぐ到着を明日に繰り下げてもらってくれ!」

二人の机に手を乗せて麻子が珍しく大声を出す。

「えっ?どういうことですか?」

「秋山さんに我々を偵察させるつもりかもしれない。」

「偵察!まさか!」

「風紀委員がこちらの動向を掴むために秋山さんをスパイとして使うかもしれないということだ!」

「で、でも風紀委員が何の為に?」

「小山先輩!前にも風紀委員らしき人物が配給後に偵察に来た件があったじゃないですか。向こうがなにを考えているかは分かりませ

んが、警戒はしておくべきです。いくら今協力関係にあるといっても。」

「でも、秋山さんが風紀委員に同調して偵察なんてするかしら?」

「秋山さんはすでにこの世界を疑いつつある。無論それを知っているだろう我々も。その為の情報が得られるならば同調するとしてもおかしくはないな。」

「貴女たちは戦車道での同じチームの仲間を疑うの?」

「それとこれは話が別です。学園艦を守るためなら私たちは何でもやると決めたじゃないですか!」

華は席の向かいにいる小山に向けて力を込めた言葉を投げつける。

「……それと一つ矛盾があるわ。冷泉さん、秋山さんが風紀委員に呼ばれたのっていつ?」

「昼ご飯の後だが。」

「そうじゃなくて、風紀委員が秋山さんの家に行ったのは?」

「今朝だな。時間までは分からない。」

「風紀委員はついさつき呼び出した時に初めて会長が艦外に出てらっしゃると知ったのよ。それで今朝我々を調べる為に秋山さん呼び出せるかしら?」

仮に夜に会った風紀委員から情報が上がってきたとしても、携帯電話の使えない今そこまで急速に情報を幹部に伝えられるかしら?」

「しかし、風紀委員の能力を侮る訳には……」

「……だったら、現在情報を得てはいないけど存在の可能性がある反生徒会の者たちへの情報漏洩を避けるため、出来るだけ情報を漏らさないように会長にお願いするわ。それならいいでしょう?」

「……情報漏洩を避けてくれるなら良いが。」

「そうですね。」

「それじゃあそれを船舶科を通じて伝えておいて貰うわ。」

「……分かった。それじゃあ失礼する。」

「今後も何かあったらお願いしますね。」

麻子が部屋から立ち去ると、華がじっと小山の方を見つめている。

その視線に気づき視線を返すと、華は口を開いた。

「小山先輩。」

「どうしたの？決定に不満？」

「いえ……わざわざ日程を繰り下げてるのは輸送船側としても厳しいと思いますので妥当な判断だと思います。それよりも、なぜここまで風紀委員を信頼なさるのですか？疑うだけの要因は出てきていると思います。」

「……風紀委員がただの委員会の1つに過ぎなかったら私も疑っていただけでしょうね。だけど風紀委員はそうじゃない。風紀委員がいたからこそこの半年間混乱は無かったのよ。」

「……どういうことでしょうか？」

「学園の廃校。その情報を学園艦の人々に知らせないように風紀委員には情報統制して貰っていたの。だから、貴女も桃ちゃんがプラウダ戦でこぼすまで廃校について知らなかったでしょう？」

「ええ……」

「ニュース、ネット、新聞、そして噂に至るまで風紀委員は内部、外部問わず徹底的にやってくれたわ。廃校を知るものを最小限に抑えてね。」

お陰でこちらは戦車道による廃校阻止に全力を傾けることができた。そして戦車道に最高幹部を参加させて人員補充にも役立ってくれた。私たちだけでは廃校は阻止できなかったのよ。」

「……そんなことが。」

「そして、今回も儉約体制の導入を受けて治安を守ってくれている。信頼しない理由がないわ。」

「……」

「確かに私も全く疑っていない訳ではないわ。だけどそれを断定し、対策するにはまだ情報が不足している。私は、最後の一片までそうでない可能性がなくならない限り、風紀委員を敵視しない。」

「……分かりました。その意向に従いましょう。」

「ありがとうございます。でも会長が風紀委員への対策するとおっしゃるなら私はそれに協力する。学園の、大洗女子学園の為に。」

「私も出来る限り協力します。」

小山は一口水を飲むと、肘掛に手を乗せてゆつくりと立ち上がった。

「……さて、そろそろ食堂が空いてきた頃でしょう。行きますか？」

「ええ、そうしましょう。」

広西大洗奮闘記 18 普遍的価値

10月22日の朝早く、秋山優花里は雨上がりの少しぬるい空気の中をあるもの片手に校門を通りぬけ、学園の中に飛び込んだ。行き先は無論風紀委員室である。扉の前にたどり着き物凄い勢いで扉をノックすると、ゴモヨが扉を開けてその中に優花里は倒れこむように入っていった。

「……どうしたの、秋山さん。」

「おはようございます！潜入に成功しました！」

「流石は秋山さんね、感謝するわ。それで、何か情報は掴めた？」

立ち上がって一つ背筋を伸ばすと、優花里は辺りをきよろきよろと見回した。

「……すみませんが、これを繋げられる機械はありますか？」

その手には小型のビデオカメラとマイクロSDが握られている。ゴモヨが整然とされた部屋の奥の指差した先には小さめのテレビが用意されていた。

「あれでいいかしら？」

「はいーありがとうございますー！」

優花里は嬉々としてそれに歩み寄り、準備を軍歌らしきものを鼻歌で歌いながら整えていく。そして準備が整うと画面の上を音楽と共に映像が流れ始めた。

画面の中央に堂々と『補給船ドック潜入記録』と書かれた白字の字幕が現れる。間も無く画面は切り替わり、船舶科の帽子を被った上下逆さまの優花里の顔が映る。

『こんばんは。私は今学園艦の補給船ドックに來ています。私も何度かここに來たことはありますが、やはり補給船が來てないためか少し静かです。それではその時を待ちたいと思いますー！』

「……なによこれ？」

「いやあ、昨日帰ったあと編集してきました。テロップもまだ仮なんですけど。」

「……そうじゃなくてね……」

画面には1時間後、と映っていたのだが、2人は優花里の方に視線を向けていたので気づかなかった。

『……おっ！明かりがついてゆつくりと扉が上がっていつてます。やはり何かいらっしやるようです！』

「それで、ここは？」

「補給船ドックの近くの倉庫の中です。船舶科の方もそこそこ忙しくされてましたので手伝うふりをして潜入し、隠れました。」

「……なるほどね。」

『あ、輸送船が入ってきました。でも明かりも何も付けてませんね。こんな夜なのに。』

輸送船は雨音と共にゆつくりと船舶科の誘導に従って停泊位置に停止し、岸と綱を繋がれる。間も無くタラップが取り付けられ、4人の男女が降りてくるが、それを出迎える生徒会の者たちを含め、皆の面持ちは暗い。

「かなり近くで撮れたわね。」

「お陰で声も若干ですが聞き取れたであります。」

「それはありがたいわ。」

最初に降りてきたのは角谷とすぐに分かる。そして彼女が小山の前に向かったのも。

『会長、お疲れ様です。』

『……』

『……今回の件は確かに残念です。しかし私たちは交渉を辞めても諦めてもいけません。学園の、学園艦の住民を一人も死なさずに残す、それが私たちの役目でしょう！会長！』

『……』

『だからこそ、次の交渉を成功させる為にも全力を尽くさなくてはいけないのです！気落ちしている暇はありません！』

『……小山。』

『……会長？』

『すまない……』

角谷は小山の制服の腹の辺りを握り、身をそちらの方に委ねる。小

山はただ無言でそれを受け入れた。

『……これからの予定のところは、中華民国より国力が劣る、もしくは本国から遠い。やはり、十分な支援は受けられない。だからこそ、ここで、中華民国から支援が受けられるようにしたかった……のに……』

『……早く、行きましょう。』

『ああ……』

近くにいた華に連れられて角谷は奥のエレベーターの方に向かっていった。

『松阪先生、船舶科のお二方。今回はご同行いただきありがとうございます。皆様の努力を生かせず申し訳ありません。』

『……角谷くんは何か学べたようだ。きっと次は成功させてくれるさ。』

『……』

船舶科の二人は返事もせずに顔色や目の下にクマを作って立ち尽くしていることから、よほど精神的、肉体的激務だったか思わせる。『では夜も遅いので、ここで解散します。松阪先生には引き続き交渉の通訳をお願いしたいのですが……』

『勿論構わないよ。』

『ありがとうございます。長坂さん、次の担当はこの二人以外からお願いします。』

『分かりました。他の艦長にも同様に伝えておきます。』

『それでは、これで。』

小山は残っていた者たちに深く礼をしてその場を立ち去った。暫くして画面から人が立ち去り、画面の向こうが暗くなる。

『……これにて報告をおわります。』

また上下逆さまに優花里が映った後、何故か画面に提供と書かれて船舶科と優花里の家の理髪店の名前がこれも白字で出てきた。

『……』

『……』

3人はずっと黙って画面を見ていた。

「……どうでありますか?」

「……よく作ったね。」

「それほどでもないですよー!」

パソ美からの指摘に優花里はちよつと首を後ろにそらして右手で頭を搔く。ゴモヨは一つ咳払いして話を始めた。

「とにかく、今回で生徒会に関する重要な情報が手に入ったのは事実ね。」

「そうでありますな。まずは今回補給は本当に止められていて、台湾から受けようとしていたこと。」

「台湾に行っていたのはそうでしょうね。あとは日本からの補給の遮断は生徒会が望んで行ったわけではないこと。生徒会が他からの補給の当て無しに日本からの補給を切るとは思えないわ。たとえばそれが権力強化のためだとしても。」

「あとは松阪先生、船舶科が生徒会に協力していることだね。」

「松阪先生は英語と中国語が話せるから来ているのだと思われれますな。」

「本当にありがとう、秋山さん。悪いんだけど、このデータコピーして貰ってもいい?」

「勿論であります! えっと、このパソコンに入ればいいでありますか?」

「そうね。必要だったらこっちから私のタブレットに移すわ。」

「ではサクッとやっておきますね。」

パソコンの前に座った優花里はマイクロSDをSDカード型のものに差し込み、それをさらにパソコンの脇に入れる。再び鼻歌を歌いながらパソコンをいじる優花里の後ろで、ゴモヨは難しい顔をして腕を組んでいた。

「……参ったわね……これじゃ完全に日本政府による補給の遮断としか考えられないわ……」

「そうになったら生徒会を追求出来ないね。まあ、こうなったらまた生徒会に任せるしかないんじゃない? 学園の治安を守るのが風紀委員の役目でしょう?」

「……」

「あの、移し終わりましたよ。」

呼びかけられて顔を上げると、優花里が前に立っていた。

「あ、ありがとう。秋山さん、約束通り前の内容と今回のことも内密にお願いね。」

「勿論であります！」

扉の前で1つ敬礼すると、優花里は授業に向けてカバン片手に立ち去った。

「私たちも行こう。風紀委員幹部が遅刻とか洒落にならないよ、ゴモヨ。」

「……そうね。」

朝の配給担当の仕事が終わらせ、各担当の配給所から荷物を片付けて戻ってくる。今朝は華も担当の1人だった。他の者たちは授業に勤しんでいる中、お淑やかにあくびをしながら華は生徒会長室に戻ってきた。

「ただいま戻りました。」

「お帰り。」

返事を返したのは小山だけだったが、華は入るとすぐに足を止めた。

「会長、おはようございます！」

「五十鈴ちゃん、おはよう。」

「昨日調子良くなさそうでしたが、大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫。寝てなんていられないよ。」

「……ならいいのですが。」

角谷を気遣いながら華も自分の席に着いた。

「……さて五十鈴ちゃんも帰ってきたことだし、小山もちよつといいかい？」

「はい？」

「どうしました？」

「今後のことさ。」

「今後つて、次は香港と交渉をするのではないのですか？」

「……その通りさ。だが、その前に私は……2人に謝らなければならないことがある。」

角谷は皮の椅子の背もたれに寄りかかることなく背筋を伸ばしてまっすぐ前を見つめ、手を膝の上に乗せている。

「？」

「……私は二人に前こう言ったはずだ。」

『例え1人になっても、そして西住ちゃんを脅した、とかとは比べようのない悪事を働いてでも、この学園艦を残す。』

と。そして私についてくるかどうか決断を促した。しかし……決断出来ていなかったのは私だったよ。」

「……」

「今回の交渉で、向こうの高い地位の人であるソンという人から外交とは何たるかを教えられた。それを知らなかったから、私は、いや大洗女子学園は中華民国からの補給を受けることができなかった。」

「……」

「本当に、申し訳ない。」

角谷は前の机に頭をつけんばかりに下げた。

「……私も受け入れられるような案を出すことができませんでした。ですが、次こそは成功させます。」

「私もです。今まで通り、いやそれ以上に協力します！」

「ありがとう……これからは私も補給を受ける為に全力を尽くすことにするよ。それと、1つ提案があるんだが、いいかな？」

「はい。」

角谷は頭を上げると、自分の財布の中から札を一枚取り出した。そしてそれを握りしめたのちにくしゃくしゃと丸めて近くのゴミ箱に見事に投げ入れた。華と小山はただその丸められた札に視線を投じていた。

「……これさ。私たちのいた世界の日本政府がない今、さっきの札には一銭の価値もない。日本は管理通貨制度だからね。だけど、まだ学園艦に住んでいる人はこの紙切れに価値があると思っっている。」

「……」

「小山、生徒会が掻き集められる紙切れはいくら分だ？」

「えっ？えっと……これまでの戦車道などでかなりカツカツでしたので、急に集めるとなると1000万くらいではないでしょうか？」

「いや、それで十分。確か香港に出発するのは4日後だから、それより前にこれを普遍的に価値あるものに変えておきたい。」

「普遍的に価値あるもの、ですか？」

「貴金属。」

「……つまり、学園艦の皆さんの先入観を利用してものを奪うと。」

「そうだけど、交渉前に相手に渡せば悪印象は与えないよ。またそれが多くあれば経済力や技術力があることも主張できるしね。」

印象が良ければ交渉できる可能性も上がる。そうすれば学園艦の人々全てに利益がある。」

「……なるほど。そして統制体制で物流を全て生徒会が握っているから、買った貴金属をこちらで使うこともできると。」

「そう。」

華は割り切ったように角谷の話を聞いているが、小山は少し顔を歪める。

「……良心が痛みますね。」

「学園艦を残すって、そういうことさ。人の上に立つ人、人を守らなければならぬ人はそれ相応の責任と苦痛を背負うのさ。」

「……分かりました。早速明日までに現金を出来るだけ集めさせます。」

「小山は質屋さんに協力仰いで、高値で買取するって情報も広め始めて。原価以上になっても買い取ると。目標は明後日に買い取りを始めるよ。」

五十鈴ちゃんは図書室からイギリス統治時代の香港に関する資料全部集めてきて、終わったら小山の手伝い。」

「了解しました。」

二人はすぐに隣の生徒会室に入り、向こうで指示を出している。角谷も世界史の教科書を手元に置くと久しぶりにパソコンをつけて、W

ordの新規ページを開き冒頭にこう打ち込んだ。

『香港への提案概要』

「……二枚舌、ね。」

一言口にした後Enterキーを2度軽く押して、続いてこう打ち込んだ。

『Bestow the prestige of King George V should be revered to the Hong Kong governor,』

(敬愛すべきジョージ5世の威光を授かる香港総督へ)』

「……」

と、ここで角谷は指を止めた。

「……香港総督って、誰だ?」

その日も茶道と華道の選択者を中心に、静かな時間だったことを喜んだという。そして練習を指揮しているみほからしたら、確実に減っていつている砲弾を眺めるのは余り気持ちの良いものではなかった。とても満足とは言えない。みほには早く儉約体制が解除されることをひたすら願うしかなかった。

どうして解除されない状況が続いているのか、情報は少しずつ集まってきたが、調べようという意欲は食糧の不足による慢性的な空腹で削られていた。食糧備蓄の長期化の為に実行していた配給量の削減は、人々から思考の余裕を奪う点では良いのかもしれない。無論食べ物への恨みは怖いとも言うが。

幸いなのは中間試験の為来週は砲弾の備蓄の減少を眺めなくてすむことだった。練習は終わり、戦車の点検も済ませた履修者は終礼に向けて各々の教室に戻っていく。無論エルヴィンもその一人だったが、倉庫から去ろうとすると何者かが肩を叩いた。

「ん?」

後ろを振り向くと優花里が背を丸めて立っていた。

「どうした、グデーリアン。」

「エルヴィン殿、すみませんが今夜も前と同じ時間に来て頂けますか

？」

「……ん、ああ、構わないが。」

「では、よろしくお願いするであります。」

「アーレス クラー

(承知)。」

そして背を丸めながら優花里はそそくさとカバさんチームから去っていった。

「……エルヴィン、グデーリアンと何を話しているんだ？ つい一昨日グデーリアンの家に行ったばかりだろう。」

「いや、急に家に呼ばれた。用件は聞いていない。」

「……エルヴィン、お主何か隠しておるな？ グデーリアンと共に。」

「……」

「……無言は肯定と同義、ということを知っているぜよ？」

「……特に話すようなことは隠してない。」

「魂の名前を与えあった我々に話さないようなことがあるのか？」

他の3人はエルヴィンの前で半円を描いて囲み、視線を1人に集中させる。

「……儉約体制がここまで続くのには理由があるのだろう。それが何かは私には皆目検討もつかない。そんなことだ。」

「嘘は……ついていないな。」

カエサルが目を覗き込むが、エルヴィンの表情に変化はない。

「だが、それでなぜグデーリアンの家に行ったぜよ？」

「グデーリアンの論理的思考力なら何か分かるかもしれないと思ったからさ。」

「ああ、なるほど。」

「だが、何も変わらなかった。単にそれだけさ。」

「だとしたら、グデーリアンはなぜエルヴィンを呼んだのだ？」

「あの数秒の会話で目的が分かったと思うか？」

「ムリぜよ。」

おりょうがそう言ったのに合わせて他の2人も顔を横に振る。

「……分かんが、呼ばれたのは私一人だ。私一人で行くのが道理だ

ろう。」

「配給の受け取りはもんざだから心配ないな。行ってこい。」

カエサルは微笑みを見せつつエルヴィンの肩を数度叩いた。

「ありがとう。」

「その代わり何を言われたかは教えろよ。」

「ああ。」

戦車道の練習が終わると学園から帰り、いつもの様に過ごした後にエルヴィンは一言告げて家を去って前とほぼ同じ時間に理髪店の前に立った。

「失礼します。」

入るとまたこの前と同じように扉を開くと、また同じようにグデーリアンの母が彼女を迎え入れ、中に入れてもらう。今回は菓子を持ってこれずに申し訳ないと言うと、笑って学生なんだからそこまで毎回持ってこられるとこちらが心苦しいと返される。笑っていらっしやる顔を眺めていると、やはり親であることを再認識させられた。

上に案内されて部屋に入ると、前見た通りの戦車に関するグッズの中で優花里はテレビに電源を入れて待っていた。

「エルヴィン殿、急なことながら来て頂き、ありがとうございます。」

「なに、急に呼び出したということは新情報か何か入ったということだろうか?」

「はい。その通りであります。」

「早速で悪いが、それは何だ?」

床の上に腰を下ろして優花里を見ると、優花里は答えずにテレビを弄りだした。

「どうしたんだ?」

「見て頂きたいものがあるんです。」

準備を終わらせリモコンを手に取ると、優花里はエルヴィンにテレビに差し込まれたイヤホンの片方を渡した。そして画面に流れ出したのは優花里が風紀委員に見せたあの映像だった。

「……これは何だ?グデーリアン。」

画面を優花里が切った後ちよつと間を置いてエルヴィンは尋ねた。

「実はですね、風紀委員から昨日の夜に出かけていた生徒会長が輸送船ドックに帰ってくるという情報を掴んだので調べてきて欲しいと頼まれてまして、調べた結果がこれであります。」

「なるほど、道理で見たことがある景色なわけだ。」

「で、これを見せて風紀委員の方と話したところ、台湾と交渉し、それに失敗したこと。生徒会が故意に補給を止めたわけではないことなどが推察できる、という話になったであります。」

「……確かに、別の場所からの補給の当てもなく日本からの補給を切るのは阿呆を通り過ぎているな……」

「その通りであります。」

「……」

「エルヴィン殿？どうされました？」

「……」

「エルヴィン殿！」

「……一ついいか、グデーリアン。」

「はい？」

「動画の会長が降りてきた辺りをもう一度見せてくれ。」

「あ、分かりました。」

画面が再び付けられ、優花里は少し巻き戻すとその場面にたどり着いた。

『……これからの予定のところは、中華民国より国力が劣る、もしくは本国から遠い。やはり、十分な支援は受けられない。だからこそ、ここで、中華民国から支援が受けられるようにしたかった……のに……』

「ストップ。」

「えっ？はい！」

いきなり言われた一言に戸惑いながらも優花里は画面を止めた。

「……何か、変なところでも？」

「……今、中華民国から支援を受けられるように、って言ったよな。」

「ええ。だからこそ台湾との交渉」

「台湾、か……」

「中華民国というのは、台湾のことでもありますよね？」

「だとしたら、中国はどうだ？中国は台湾よりはるかに経済規模は大きい。国力も勝ると思っただろう。そして今回、中国の名を挙げなかったことから中国とは一括で交渉しなかったことが伺える。」

そして、この短期間で会長は中国、台湾と両方往復して交渉して失敗したというのか？だいたい、我々はそもそも台湾のことを中華民国と呼ぶか？」

「中国では門前払いされたとかならまだ分かりますが、確かに私たち、素では中華民国とは呼ばないですね。」

「これは曲解に近いが、私はこの『中華民国』が『台湾』と同義ではないことも想定に入れるべきだと思う。あともう一つ分からないのは我々から補給を切った訳ではない、すなわち日本、文科省が我々への補給を止めた、その理由だ。」

「我々が廃校を回避したのが気に入らないとかでしょうか？」

「それがばれたらさらに国民からの激しい非難にさらされるぞ。それに見合う利益もない。」

「……確かに分かりませんねえ。」

「私はこの二つが気になった。それで、この見せてもらった内容は伏せたほうがいいのか？」

「ええ、お願いします。風紀委員の方からそう頼まれているので。」

「分かった。それでこの疑問はどうする？」

「私が私からの疑問という形で風紀委員に伝えておくであります。」

「よろしく頼んだ。と、そろそろ帰らないといけないな。」

時計を確認したエルヴィンは急に立ち上がった。確かに帰るまでの時間を考慮したらそろそろ日も暮れてしまう頃だ。

「そうでありますな。ではまた何かあつたらお伝えします。」

「よろしくな、グデーリアン。失礼する。」

そして前の時とは異なり若干してやったような顔をしてエルヴィンは帰っていった。優花里の母も彼女を心配するようなことはなかった。エルヴィンが帰った後の3人からの指摘を軽く流したのは

言うまでもない。

広西大洗奮闘記 19 ソロモンの子孫

次の日、学園艦に久々に流れ出した放送により学園艦内に統制体制が導入されたことを知らしめた。その放送を終えた角谷は生徒会長室に歩いて戻ってきた。中に戻ってくると小山と華の他にもう1人いる。

「ただいま、その人は？」

「会長、この方は学園艦で質屋を経営してらっしゃる坂木さんです。」
「どうも、質屋を経営しております坂木といいます。この度小山さんに呼ばれて参った次第です。」

黒い帽子をかぶった少し小柄の男はこちらを向き帽子を外して深く頭を下げた。

「質屋さんか、よろしくね。生徒会長の角谷だ。用件は聞いているかい？」

「いえ、ついさつき来たばかりですので。」

「そう。じゃあ小山、ちよつとその椅子をこつち持ってきて。」

「はい。」

椅子は角谷の机の前に用意され、男はそこに腰掛けた。座っても腰が低いのは変わらない。

「それで、質屋の私へのご用事とは一体何でしょう？」

「坂木さんでしたっけ？坂木さん物の値段とか鑑定できますよね？」

「ええ、それが出来なきや仕事になりませんから。」

「ではお願いがあります。学園として今の状況はかなり不安定なのに分かるでしょう。だから、生徒会としても今持っている資金を将来的にも安定した価値のあるものに替えておきたいのです。そこで住民の皆さんから貴金属や高級品を買い取りたいのでその価値の判定をお願いしたいと思います。無論お礼はたっぷり支払いますよ。」

「今持つてらっしゃる資金はお幾らで？」

「小山、幾ら集められた？」

「現在1200万円程です。思ったより早く集まりました。」

「1200万!?!?」

「元々戦車道とかに回した分とかも削りましたし、他にも色々。」
「……なるほど。では何時から?」

「決まったらすぐに学園艦中に広めますから直ぐですね。報酬は3日で30万払いますよ。」

「……本当ですか?」

坂木は少し上半身を前に倒す。

「勿論。」

「では、させていただきます。」

「ありがとうございます。では、こちらからの要件を聞いてもらってそれが終わったら直ぐに始めましょう。」

「分かりました。」

角谷は坂木と他の二人を交えて話し合いを始めた。幾度か坂木が驚くような素振りを見せたが、先ほどの報酬を提案された為か全て受け入れた。

「それじゃあ、これでやっていただきますけどいいですか?」

「勿論です。」

「出来れば三日で殆どこの資金を使い切ってくださいね。」

「ええ。上限を設けて誘いますので。」

「あと店舗に生徒会の者を一人付けますので、何かあればその者を経由してお願いします。」

「分かりました。では仕事の準備があるので私はこれで。」

坂木は帽子を頭に戻して、カバンに詰められた札束を背負った数人の生徒会の者の付き添いのもと、生徒会室を去って行った。

「……会長、」

「どうした、小山。」

少しの間を置いて小山は発語した。

「報酬も紙切れですよね。」

「勿論! 小山は紙切れ、さらに集められたらよろしくね。」

その日、角谷は学園艦内に2度目の放送をかけた。

統制体制の導入が発表される少し前、優花里はいつも通り火

曜日の授業を教室で受けていた。そして3限の授業が終わり、次の授業に向けて片付けと準備に勤しんでいた。といつても何てことはない。教科書をカバンにしまい他の教科書とロッカーの資料集などを机に置くだけのことである。人と話すこともなくただ席に座って次を待つか戦車について少し考えるか迷っていた。すると休み時間にも関わらず自分の名を呼ぶ者がいる。方向から察するにこのクラスの後ろの方の扉からようだ。そちらに視線を向けると、よく見た顔がこちらに向けて手を振っている。

「武部殿。お呼びでありますか？」

「ゆかりんちよつと来て。」

「はい。」

幸い準備も終わっているので躊躇いなく扉の方へ向かう。そして廊下まで出た優花里に向けて沙織は直ぐに話し出した。

「ゆかりんさ、この前の日曜日先に行っちゃったじゃん。」

「すみません、風紀委員の方に呼ばれたもので。」

頭を下げると沙織は慌てて右手の本来の二の腕を左右に振る。

「あ、いやいや怒ってるわけじゃないの。あの後さ、麻子も私たちより先に行っちゃったんだけど何か知らない？麻子に聞いても教えてくれなくて。」

「いいえ、何も聞いてはおりませんが？」

「そうかあ、ゆかりんも知らないか。最近麻子の様子の変だから理由があるかと思ったんだけど。」

「……………どういふところですか？」

「うーん……………最近いつも増えて喋らなくなったりとか、あとはおばあちゃん、つて言うのと急に怒り出すようになったとか……………寝てても駄々こねても飛び起きるからね、ある意味有難いけど。」

「……………急に怒り出すですか……………そういえば、前に武部殿の家に冷泉殿が来たと伺った気がするであります。」

「ああ、そんなことあったね。」

沙織は思い出したように数度うなづく。彼女にとってはその程度のものだ。

「……どんなこと話されたか覚えてらっしゃいますか？」

「何だっけな……」

右側頭部を右手の親指で突きながら左手の平で膝を支える。

「無線いきなり借りて……確か、世界史のエチオピアが何とかかんとか……」

「……えちおびあ、で、ありますか？」

「世界史の教科書見れば思い出すと思うけど……て、そろそろ次の授業あるからまた後でね！」

「あ、はい。」

沙織はさつと言ってぱつと駆けて行ってしまった。

「……昼休みちよつと聞いてみますか。幸い今日教科書持ってきてますし。しかし、えちおびあ……ですか。あそこの歴史は全く分かりませんね……」

優花里は頭のひらがな5つをぐるぐる回したまま次の授業に向けて教室に戻っていった。その為か次の授業の間に学園艦内に放送された統制体制の導入の案内は余り気にならなかった。

昼休みに入ると挨拶が済んだ後すぐさま弁当箱をカバンから引つ張り出し、机上の教科書を加えて普通1科A組の教室に向かう。そして教室の後ろから頭を入れ名を呼んで廊下まで来てもらった。どうやら沙織の方もいつも通り食堂に向かうようで、話をするために食堂へ向かうことにした。西住殿を加えないのは少し心苦しいが、直感的に巻き込まない方が良いと思った。優花里は予め席を確保し配給を受け取ってくる沙織の到着を待つ。早めに来た為かそこまですばずに配給を受け取った沙織がトレーの上にそれらを並べて合流した。

「では先に食事を始めてしましましょう。」

「そうだね。お腹も空いたし。」

「いただきます！」

優花里は弁当箱の蓋を開き、沙織は箸を手取る。

「今日のゆかりんの弁当は……」

「流石に親もそう毎日キャラ弁にはしませんよ。」

「なんだ、つまんないの。」

弁当箱を覗き込んだ沙織は直ぐに口を尖らせた。どうやら見た限り港ごとのカレー屋は余り気にしていないようだ。優花里は沙織とたわいない話を続けながら食事がひと段落つき周りが騒がしくなってくるのを待った。しばらくして配給を受け取ったものも増えて空席は減り、2人が会話する声など目立たないほど笑い声などが飛び交い始めた。

「……武部殿。」

一つ咳払いした後少し声のトーンを落とした。それに応えて沙織も背筋を伸ばす。

「……何処であるか、分かりますか？」

持ってきていた世界史の教科書をすつと沙織の前に差し出した。

「えつとね……」

沙織はそれを受け取ると全体の後ろの方のページに指を入れ、そこからとある時代を見つけてなるべく時間軸の一点に焦点を当てる。そして指はまもなくある一枚のところまで止まった。

「(ハハハハ)。」

親指で教科書の中心を抑えながら差し出されたページを優花里はじつと見つめた。沙織の言ったひらがな五つはカタカナへと変換され、それがこの教科書に当てはめられる。だが、分からない。このページに何の意味があるというのか。

「冷泉殿が何故このページを開いたのかはご存知でありますか？」

「なんか無線貸してくれて言ってきたのでそれで繋げて聞いてみた後にいきなりそんな感じで言ってきたんだよね。無線は何言ってたか全然聞こえなかったけど。」

「……それでこのページでありますか……」

「分かる？」

「……いえ。あと他には何か言ってたでありますか？」

優花里はそのページの端を内側に軽く折り込む。

「あとはこの世界の何もかもに絶望しているとか言ってたかな？」

「冷泉殿がそんな厨二臭いことを!?!?」

「私もよくわかんないけどそんな感じのことは言ってた気がする。」
にわかには信じられないが、嘘をつくような人だとも思えない上に
嘘をつく理由も考えられない。

「どう？」

「ますます分からないであります。何もかも……何もかも……」

隣にある弁当がまだ少し残っているのも忘れて優花里は頭を抱えた。

「とにかくゆかりん、時間がある訳でもないから早く食べちゃったら
？」

「そ、そうでありますな。」

優花里は再び弁当に手をつけた。彼女の母が味付けなどを考えないとは思えないが、それでも味足りない気がする。沙織も彼女の分の残りを食べ始めた。無言である。特に急いでいる訳ではないが、今悩んでいること以上に考えることを増やしたくない。最後の一口を口に入れると、優花里はさつさと弁当箱を片付け始めた。

「とりあえず、教えていただきありがとうございます。」

「そう？役に立ったのならそれでいいけど。」

「ちよつと冷泉殿について考えてみます。」

優花里はゆっくりと席を立ち、若干失礼とは思いつつもその場を離れようとした。

「あ、そうだ。」

それを沙織の一つの拍手が止めた。

「どうしたでありますか？」

「いや、確か麻子生徒会を手伝うとか言ってた気がするんだよね。」

「でも冷泉殿は学園にいらしていますよね。五十鈴殿みたいに働いていらつしやる訳ではないと思います。」

「そうなんだよね。でも何かしら手伝っているんじゃないの？よく知らないけど。」

「……生徒会、でありますか。」

「どうしたの？」

「いえ……特に大事なことでは。ではすみませんがこれで。」

「あ、うん。」

優花里は人混みよりはマシなくらいの群れを掻き分けて沙織の視界から行ってしまった。

「……麻子、何を見つけたの……」

学園の授業は終わり、風紀委員の活動も開始された。ソド子もゴモヨも風紀委員室に向かい業務に就く。作業を始めてからそうも経たないうちに扉をノックする者がいた。

「どちら様ですか？」

「あ、すみません。ヤボクっす。」

「報告の時間はまだ後じゃないの？」

「ちよつと興味深い人物がいるもので。」

「まあ扉越しもなんだし、入りなさい。」

「失礼するっす。」

丸眼鏡から顔、上半身、下半身の順でヤボクは部屋に入ってきた。

「それで、その人物は誰よ。反乱でも計画しているの？」

「いえ、むしろ逆と言ったほうがいいっすかね？」

「どういうことよ。」

「新たに生徒会に協力している人物が分かったので報告させてもらっす。」

ヤボクは手持ちの資料を確認した。

「ウチの学年の首席の冷泉麻子って人物が日曜の食堂での配給のあと生徒会室の方に向かってましてね。それをたまたま見かけた部下が尾行して突き止めたそうっす。」

「冷泉さんが？」

「そうっす。ですがこれまで関係が見つからなかった事なども考慮すると、そこまで深い関係ではないんじゃないかと。」

「……変ね。冷泉さんがいかに天才かは角谷会長、小山さん、五十鈴さん含めて分かっているはずよ。関係があるなら利用しない理由がないわ。」

「そうっすけど、出席もいつも通りですしこれといった行動も見られ

ないっすよ。冷泉さんに対する行動も監視しておけばいいんじゃないっすか?」

「それで良いんじゃない、ソド子。」

「……そろそろ試験だから監視を潜らないとは限らないけど、他に手段もなさそうね。ヤボク、引き続き情報は集めておきなさい。反乱の傾向があつた時の鎮圧も早急にね。」

「了解っす。また何かあつたら連絡するっす。」

丸眼鏡は一礼して素早く部屋を出た。やはり忙しいのだろうか、監視対象がここまで多いと。

「……ソド子、秋山さんの情報で生徒会が自分たちの利益のために補給を切つてないことは分かつたんだから、私たちも素直に生徒会に協力していたほうがいいんじゃない?」

「確かに生徒会が補給を切つた訳ではないことは言えたわ。」

「だとしたら監視をする必要もないでしょう、人員を割いてまで。」

傍にいたパゾ美はゴモヨの正面まで回ってくる。

「でも、彼女らは独裁過ぎた。」

「えっ?」

「彼女らは我々にとつてとても、とても重要なものを、放棄した。」

「つまり?」

「生徒会是我々学園艦の住人に一言も勧告することなく家族、友人、その他多くの知り合いの人がいる日本の本土を捨てたのよ。」

「本土を捨てたって……」

「だとしたら台湾と交渉するはずがある? 政府と同時並行で交渉しているということはないでしょうから、現在政府とは交渉してはいないでしょうね。つまり本土からの補給を再開されない。だとしたら学園艦には1月もの食糧が備蓄されているにもかかわらず、節約体制始めてから2週間も政府との交渉を続けていないことになるわ。これは学園艦を残すことに並ぶ生徒会長の職務放棄よ。」

「で、でも補給が貰えないなら他の国に頼らなくちゃいけないでしょう?」

「別に補給を他国に頼ろうとすること自体はいいのよ。問題はそれを

学園艦の住人に一切伝えてないこと。他国から補給を受けることになればその学園艦は他国のものも同然となるわ。それを住人に説明していかないことが問題なのよ。私たちも親には簡単に会えなくなってしまうかもしれないのよ？」

「…………た、確かに…………」

「だから、計画は続行するわ。鬼を追放するまではせずとも、現状を生徒会長から伝えさせる。その為にね。」

広西大洗奮闘記 20 騎士と母と水墨画

「小山一、それで買取を始めたのはいいけど、売れ行きはどうなの？」

「ええ、今日1日1200万円相当の品と交換できたそうです。」
「200万円か……午後から始めたにしては上々かな？」

角谷はその言葉に少し安心したのか、干し芋を摘み出した。今日は最近では珍しく2枚目に躊躇なく手をつける。

「ですが、不要のブランド物や化粧品とかも混じっているので、とくに後者なんかは素直に喜んでいいのか……」

「交渉相手で前みたいに女性が出てきたらいいだろうけど、そうもいかないだろうねえ。引き続き買い続けるように言ってくれる？ 貴金屬だったらどんな高値でもいいから。」

「分かりました。」

「やっぱりね、金銀とかならどの国でも重宝されるからね。」

「そこら辺は少ないですね。やはり公立の高校に通っていらつしやる方が殆どですから、言ったら悪いですが余りそういう物を持っていらつしやる方が少ないのかも……」

「まあ、交渉に使えそうな高価な物が手に入ればいいから。あとさ……」

角谷は机の上の数冊の書籍が横たわってできた山を指差す。

「香港に関する資料なんてウチの学校結構あるもんだね。」

「本当ですね。確か香港ってアヘン戦争後にイギリスが租借したんですよね。」

「そして私たちの世界だと1997年に返還された、んだけど今の世界だと普通にイギリスのアジアの拠点の一つだ。そして今の香港のトップの香港総督は Sir William Peel氏だ。因みにあと2月で変わるらしいけどね。」

「Sir、ということとは騎士ですから偉い方なのでは？」

「その人相手かは分かんないけど交渉する必要があるね。で、今提案内容打ち込んでるんだけど英訳が面倒でさー。しかも松阪先生試験

準備があるから出発当日までは余り協力出来ないって言われちゃったんだよね。まあイギリス英語は何とかなるからいいんだけど。」

角谷は目の前のパソコンを開き、キーボードを叩き始める。

「何とかなるんですか……やはり会長はすごいですね。」

「いやあー、それほどでもないよ。まだ文面は半分しか完成してないし。明日終わるかなあーこれ。とりあえず中華民国に提案したのを修正、追加しつつ文面組んでるから。」

「追加って何を加えるんですか？」

「前回の内容はこちらが向こうに長期的な補給を求めたのに対して、こちらは一回あげて終わるものしか無かった。だから今度はこちらから向こうに長期的な利益となるものも含めるのさ。」

「とはいっても、この学園艦に工場とかはありませんし、長期的に物資を供給することは出来ないのでは？」

それを聞いた角谷の顔は笑っているのか悲しんでいるのか分からない。

「……小山、この学園艦にあるものはモノだけじゃないぞ。」

「技術ですか？」

「それもあるが、次がイギリスだからこそ伝えられるものがある。」

「イギリスだからこそ？」

「……今回こそが、戦車道を売り込むチャンスなのさ。」

「イギリスにですか。確かに戦車道には参加していたとは思いますが、余り戦前戦車道でのイギリスのイメージが無いのですが？」

「だけど世界で始めて戦車を使ったのはイギリスだからねえ。売り込む価値はあるよ。」

「なるほど……西住さん達には申し訳有りませんが……」

「香港も確かに日本には占領されるけど、中国の泥沼に巻き込まれるよりかはマシさ。それにイギリスなら流石に女性を軍人に組み入れたりはいないだろうしね。もしかしたらその前に離れる算段もつくかもしれない。」

「日本が宣戦するのは1941年の末ですからね。そう考えれば安心かもしれません。」

「それを含めて、あとこれも付けようと考えてる。」

角谷はメモ書きのようなものを小山の前に見せた。

「何ですか？えつと……農水産業増強計画（仮）？」

「一応書いては無いんだけど、将来的に援助ではなく交易という形で物資を受け取れるようになれないかな、と。」

「農業科、水産科の強化により学園艦のみで食糧を自給できるようにする、ですか。」

「学園艦の住宅、学園地域以外を開墾して農地を増やしてね。」

「これは向こうに聞かなければ分かりませんが、人員が足りますかね？」

「補給が受けられるようになって沖合に停泊できれば船舶科の人員に余裕が出来るはずだから、それを回そうと思っっているよ。」

「これはちよつと農業科、水産科には聞けませんし、船舶科にどれ位余裕が出来そうか確認を取ってみます。」

「あとき、開墾に必要な重機を動かす分の石油計算しといてくれる？必要な更に価格を上げざるを得ないから。」

「向こうに回しておきます。が、夜も遅いので計算は明日になるかと。」

「ありがとう、頼んだよ。」

小山は渡されたメモ書きを握りながら隣の部屋に向かった。

「……サンダースとかならともかく、やっぱりウチの学園艦じゃあ長期的な対価は厳しいよなあ……一時的に渡すものがどれだけ多いか、そこになつてしまふんだよなあ……」

優花里は部屋で机の上に世界史の教科書に乗せて思索を始めた。目的は昼間沙織が何を言っていたのか理解するためである。

（もし武部殿が仰っていたことが本当ならば、冷泉殿は生徒会を手伝っていることになりませんが、西住殿からも冷泉殿の遅刻が増えたと聞いていませんし、授業を受けない日は特に無いと聞きました。冷泉殿が生徒会に協力していると決めるのは拙速であります。

しかし、エチオピア侵攻ですか……それとこの大洗学園艦に何の関

係があるのやら……)

優花里は机の上の教科書を開きそのページに書かれた文を読み直す。中華民国、統制体制、学園艦、補給途絶、その他今回の件について関係ありそうな文言を思い浮かべるが、これといって当たるものもない。論理として以前にそれらを自らから遮る大いなる壁の存在を感じた気がした。

「……試験も近いうえに度々で申し訳ないですが、またエルヴィン殿に相談するしかなさそうでありますな。」

自分の不甲斐なさにため息をついて優花里は教科書をたたみ棚に戻した。

翌日10月24日、この日は試験の前日というこもあり、授業は4限で終わった。その後家で昼食をとり、ちよつと散歩に出かける。一夜漬けは運動でもして血流を少し良くしてからやった方が効率が良い。西から雲が近づいてきているが、陽には被らずさんと照っている。

優花里は甲板から下に降りテラスの方に向かった。この統制体制の御時世のせいかすれ違う人もいない。だからこそ、ただでさえ目立つ格好の人はすぐに見つかる。

「エルヴィン殿。」

「おおグデーリアン、ここにいたか。」

「折角ですし、話はベンチに座りながらでも。」

「そうだな。」

ちようと出会った場所の近くにベンチがあったのでそこで話すことにした。海を向いて2つあったので左側に腰掛ける。しかし座つてすぐは2人は話さず、ただ柵の向こうに途絶えつつみえる水平線を補完する。

「……あの時も、ここだったかな？」

目を細めつつ空を眺めるエルヴィンがぼそりと口にした。

「何時でありますか？」

「……黒森峰との決勝戦の前日さ。」

「あの日ですか。」

「あの日、私は、いや私たちは皆でこちら辺のベンチに腰掛けてカツ丼を食ってたんだ。縁起をカツいだって訳だ。」

「そういえば、こちらもあるこうチームの皆さんとカツを食べましたな。」

「そちらもか。まあいい。その時は勝てば、黒森峰に勝つのが如何に難しいか分かっているけど、私たちのこの学園艦は守られるものだという純粹、な希望があった。」

「ですが、我々はその時の皆さんとさらに他の方の協力まで得て此処を守りました。」

「そう、守ったさ……でも、私は今の学園艦が残ったこの状況を素直には喜べない。」

「何が起こっているのか、分からない。だからこそ、調べる意味がある、のでありますか?」

「そうだな。それで、今日はどうした?」

「昨日武部殿から冷泉殿について聞くことができました。」

「冷泉さんか?あの人がどうした。」

優花里は沙織から聞いたことを思い出せる限り伝えた。そして最後にこれは又聞きですがと付け加えた。

「……本当に冷泉さんがそう言ったのか?」

「私も疑いましたが、武部殿がそう嘘をつく理由もないと思います。」

「なるほど、だとして武部さんが話していることが真だとすれば、冷泉さんは少なくとも生徒会に参加しようとしている。」

「ですが、西住殿曰く冷泉殿の生活が大きく変わった様子は見受けられない、とのことですよ。」

「参加してないこともあり得る訳か。しかし冷泉さんの能力を知っている生徒会の人や五十鈴さんがみすみす放っておくというのも変な気がするな。」

「そこで私はこれから風紀委員に協力しつつ情報を集めたいと思っています。」

「風紀委員か?確かにグデーリアンは協力したことがあるがこれ以上

協力する価値はあるのか？」

「風紀委員の方は独自で情報を集めていらつしやいます。私たちだけでは調べられないこともご存知かもしれません。」

「ふーむ……すまないが、私はちよつと距離を取らせてもらいたい。私は風紀委員に口答えしたことがある身だ。とても協力を素直に受け入れて貰えるとは思えない。」

「ああ、そうでしたね。では私は協力して情報は出来る限りエルヴィン殿にもお伝え致します。」

「だが、これから試験期間だ。あの風紀委員が調査を優先するとは思えない。試験期間は捗らないだろうな。」

「まあ、試験終わるまでに万事解決しているのが理想ではありますが。では試験が終わってから協力していきたいと思います。」

「頼んだ。それと、1つ気になるのは、」

「やはりエチオピア侵攻でありますか？」

「それで何故あのような発言に繋がるのか、私も分からない。一応私も知ってはいるが、陸のラジオの特集か何かを拾ったものだろうな。今回の件と関係があるとは思えない。流石に中華民国が台湾ではないというのも考え直せば暴論だしな。」

「陸のラジオを拾った、ですか。そんなところでありませんよな。」

「まあ、今後も協力していけばいい。私は親に会えると分かれば満足さ。そろそろ戻るか。流石に留年はしたくないからな。」

「ですね。では、今度は試験後でありますかね？」

「そうだな。ではな。」

エルヴィンは一人席を立ち先にそのベンチを離れていった。優花里は続いて帰ろうと思ったが、何故か身体に力が上手くかからない。何も、分からない。エルヴィン殿は暴論と仰ったが、それも我々にとって都合のいい暴論ではないかと疑いたくなる。

「……本土のラジオ……で、ありますよね。」

その否定がどうなるかは。

信じられない。だが、彼女にとっては見慣れつつある光景

だ。百歩譲って襖の向こうから

「菊代、今日はもう一杯頂くわ。」

というならまだ分かる。それでも百歩譲ってなのは奥様はそこら辺の節度はしつかりわきまえた方だと身をもって知っているからだ。仕事でも飲むことはあるが、その時は仕事スイッチでも入るのか酔って帰ってくることはない。

「菊代おく、早くもう一杯持つてきなさいよ。」

だからこそ、こんな声が聞こえてくることはありえなかった筈なのだ。しかもこれが今日初めてではないのなら尚更だ。

奥様はあの日以来こんな感じである。毎日のように海上保安庁に電話を掛けては受付の人にウザがられている。どうやら人工衛星による映像までも捜査に導入したが、まだあの日の8隻の学園艦は1つとして見つかったはいないらしい。文部科学大臣が辞任したがそんなことはどうでもいい。

問題は、その8隻の学園艦にこの家のお嬢様2人が乗っていらしたことだった。今日こそは奥様のこれをお止めせねばなるまい。

「奥様。」

「菊代く。次。」

「ご無礼を承知で申します。これ程までに酒をお飲みになるとこの先の行動にも支障が生じます。今日はこの程度でお止めください。西住流は前に進む武道、ここで立ち止まるわけにはいかないでしょう。」
「……煩いわね、家政婦の分際で。それに貴女は西住流の者ではないじゃない。」

「承知の上です。ですが、既に世間では奥様に対し悪評が立っていると聞きます。西住流が蔑まされることは奥様の望むところではないでしょう。」

「……」

「私は西住の家に仕える者としてそのようなことを放って置くわけにはいきません。お二人が帰っていらした時に、奥様は今のよう無様なお姿をお見せになるのですか。」

「分かってるわよー」

西住しほは左手の拳で机を思いつきり叩いた。右手に握られたコップの中の酒が激しく波面を作る。

「でしたら、尚更」

「だけど私はどうすればいいのよ！家元を継いだと思ったら後継者を二人とも失うなんて！まほは……まだ甘かったけれど、将来、私が継がせる時はしっかりした西住流の後継者になってくれる。みほとはまだ和解出来てないのに……」

「……」

「みほは、あの子は西住流ではない。でも、今後の日本の戦車道にも必要な子よ。まほが詰まった時もみほが助けられるだろうし、みほが詰まってもまほが助けるわ。2人が揃って、初めて西住流も日本の戦車道もこの先何十年も上手く回る、のに……」

いつの間にはしほの目からは涙が2筋流れていた。

「もう、世界大会の委員も辞めざるを得なくなってしまった……先祖にも顔向けできないわ。そしてまほとみほがいなくなってもう二週間……。どうしてよ。本当にどうしてこうなったのよ！二人ともちゃんと母に姿を見せなさいよ！」

しほは二人の名前を交互に呼びながら机に突っ伏して号泣し始めた。そうだ。なぜ私は忘れていたのだらう。彼女は母だ。娘たちの無事を心配する1人の母親だ。それが故に彼女は自分の現在の絶望を忘れようとするが、それと西住流家元としての意思がせめぎ合い、そのことさえも忘れようとしているのだ。

これだけは残念ながら私には出来ないことだ。ただ、その時を。あの2人が私たちの前に姿を見せる時を信じよう、どのような姿であれ。

中華民國 桂林

「徳鄰。」

その部屋に1人の顔がのっぺりとした男が入ってきた。奥にいるまた別の者に話しかける。

「健生か。どうした。」

その者は並んだ歯を見せながら答える。のっぺりとした男は書類を確認しながら答えた。

「部下が新たな蔣の政府の動向を拾ってきた。」

「ほう、それで？」

「どうやら、大洗学園艦なるものの来航を断つたらしい。」

「何だそれは？学園艦なら分かるが、どこをやつた？まあ、蔣も何者か分からんやつを泊めたりはしないだろうな。」

「それで、その学園艦が南下しているという話があるんだが。」

「ウチには関係ないな。というより、学園艦クラスなんぎを受け入れる、そんな余裕があるわけないだろう、東も。それより、自警団の訓練は進んでいるか？」

「ぼちぼちだな。まあ、いざという時はかなりの数を動かせるが、増強を進ませすぎると蔣にまた睨まれかねないからな。」

「金も十分とはいえんしなあ。東もデモ騒ぎが続いているというしどうしたのか……」

「まあ、それは東との交渉次第だろうさ。」

「それで、共産党の奴らの第1波は陝西まで着いたらしいな。」

「ソビエト自治区か。そして蔣はそれを追撃せんとしている、か。」

「我々は方針を変えずにいればいいさ。」

礼送出共をな、と付けて部屋の主は席を立った。

「しかし、我々も考えなければならぬ。共産党が生き残ったということはまだ蔣は戦いを続けるだろう。そしてそれが終わった後に牙をむくとなれば、」

「ウチか東か馮か閻か龍か……日本、か。」

「我々は蔣が牙をむく前に戦うか、これからも蔣と組んで日本と戦うか。」

「前者の為の東との提携だったな。しかし、蔣の政権は諸外国から認められていて正統性がある。そして前それをやって我々は大いに失敗しただろう。そして今度こそは日本が内戦に介入する。」

飯にこちらについても、どちらかが勝てないように調整してくるだろう。」

「かといって、我々が団結しても、国力差から考えて日本に勝てるのか？我々は今まで少数民族の反発を抑え込んできた。戦争となれば反発は増すだろう。つまり日本と対峙すれば内憂外患の状況で戦わなければならぬ。」

「どちらを背負つても厳しいな……」

「我々は八、一宣言を現在支持していない。」

「そりゃ、そんなことしたら黄がブチ切れるわ。」

「だが、蔣と対峙するならそれも考慮に入れざるを得ない。」

「……本当に考えることが山ほどあつて気が滅入りそうだ。」

のっぺりとした男は持つてきていた書類に再び目を落とした。

「気になるか？その学園艦。」

部屋の主は立ちながら思い切り歯を見せて笑いかける。

「いや、蔣の政権の状況で蔣と『交渉』に持ち込めるとは、どんな者たちなのだろうか、とな。普通は門前払いだろう。」

広西大洗奮闘記 生徒会十 α と学ぶ戦間期簡単世界史講座

小山「それで、次は何をやればいいんですか？」

角谷「作者が次回作以降に向けてストック作りたいたいから、今回は前言った今作に出てくる人たちの紹介をするよ。タイトル紹介は次に回すよ。」

冷泉「あと少しこの時期の世界情勢をさらっていくぞ。」

五十鈴「だから前作と少しタイトルがちがうんですね。」

角谷「それじゃ早速始めていこー！」

五十鈴「とそのままに注意です。」

作者からこの変な設定だらけの駄文を読んでくださる心の広い読者様への注意

・WIKI参考にしています。

・キャラ崩壊。

・独自見解が混じります。(思想的な寄りはできるだけ抑えるつもりです。)

・解説にネタを混ぜますが、実際の歴史とは一寸たりとも関係はございません。

・これで歴史を勉強した気にならないように、特に受験生! かなりの読むなら資料集や教科書見ろよ! 受験に関係ない話も載せるから!

・これも歴史上のいかなる人物、出来事、思想を評価、賞賛、非難するものではありません。

・変なところあったらコメよろし。てか絶対あると思う。

・物語本編の流れとは関係しません。

登場人物

解説 小山柚子 (メイン)

補足 冷泉麻子、角谷杏 (ツツコミ)

疑問提示 五十鈴華 (? の提示とか)

その他多くの歴史上の人物のみなさん

小山「では早速今作に出てくる歴史上の人物について紹介をさせていただきます。」

呉鉄城（字 不明）

国民党派の政治家。孫文派、後に蒋介石派となり、北伐終了後に軍閥が起こした中原大戦において張学良を蒋介石側に引き込んだことなどで蒋介石から信任を得た。

一九三二年に上海市長兼淞滬警備司令に任命され、第一次上海事変の阻止に奔走するが失敗した。その後も上海市長を務めている。

汪精衛（字 季新）

多分今作の中国人では蒋介石の次に有名な人。汪兆銘とも呼ばれる。蒋介石を三度裏切つて二度合流した人。

まずは北伐中に蒋介石から離れて左派寄りの武漢国民政府を樹立。これは後に共産党系への清党工作を進めることで合流。

二度目は反蒋介石派が作った広東国民政府に参加したが、これは満州事変による大同団結により合流。

そして最後は日中戦争時に日本の傀儡政権である南京国民政府を樹立し、その首班となった。一九三五年の十一月に狙撃され、その傷がもとで日中戦争終結前に死去。

宋美齡

蒋介石の妻。父は浙江財閥の創始者。幼い頃にアメリカに留学し英語が話せた為、英語の話せなかった夫の蒋介石の通訳としてカイロ会談などに同行している。

また政治家としてもアメリカからライニングタイガース（アメリカの航空部隊）の参戦を取り付けたりなど、ファーストレディーとして活躍した。

周至柔（字 不明）

中華民國の空軍軍人。北伐、国共内戦の最中に空軍の必要性を感じ、海外に留学。帰国後、中央航空学校校長に任ぜられる。日中戦争時にはほぼ全期にわたり中国空軍の総指揮をとった。

岡田啓介

日本の軍人、政治家。第31代内閣総理大臣。軍人としての最終階級は海軍大将。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦に従軍したのち、1934年に組閣の大命を受けて内閣総理大臣に就任する。岡田自身は対英米戦には反対だったが軍部を抑えきれずロンドン、ワシントン海軍軍縮条約から離脱するなど苦況に立たされる。

二、二六事件で襲撃され、秘書官の松井伝蔵が反乱軍に射殺されたものの、岡田自身は逃げ延びる。その責任を取り内閣総理大臣を辞職し、長老として東条内閣打倒の動きを起こしたりもするが、表舞台からは遠ざかった。

狸とあだ名されるほどのおとぼけでそれで議会での天皇機関説に関する追求を逃れたりもしている。

清貧であり常識人であったが、無類の酒好きでもあった。

廣田弘毅

日本の政治家。第32代内閣総理大臣で、1935年時は岡田内閣の外務大臣。外務省に勤めた後、岡田内閣の後を継いで首相になる。外務大臣の時期には対中融和政策をとったが、軍部との折り合いが上手く付かず、戦争を防ぐことは出来なかった。

文官で唯一のA級戦犯として絞首刑となった為同情的な目で見られることもあるが、実際は決断力に欠けていたようだ。

孔祥熙（字 庸之）

中華民国の政治家。蒋介石政権において財政部長、行政院長などを務める。宋美齡の姉の夫にあたる。財政部長前期にはそれまでの銀本位制を改めることなどの財政改革によって戦争に向けた財政を整えたが、後期には私腹を肥やしているとされてその役を罷免された。

王世傑（字 雪艇）

中華民国の政治家、法学者。蒋介石政権において外交部長、教育部長などを務める。また日中戦争時には抗日宣伝を指揮している。

朱家驊（字 驩先）

中華民国の政治家、地質学者、教育者。中山大学校長や交通部長などを務める。また両広地質調査所を作るなど地質学者としても活躍した。

小山「こんなところでしようか？」

五十鈴「岡田さんだけ長いですね。」

冷泉「まあ、そんなもんだらう。」

角谷「おつけー。分かんなかったら全員日本語のWikiあるから調べてみてね。」

小山「それで次は何を？」

角谷「簡単でいいから世界情勢を解説しよう。」

小山「それはまた範囲が広そうな……」

角谷「世界恐慌からでいいってさ。」

冷泉「それで1935年までだ。」

小山「したら、アメリカ史からですかね？」

角谷「まあ、満遍なくやってくれりゃいいから、任せるよ。」

小山「では、まずは世界恐慌の背景から話していきましょう。第一次世界大戦後、自国が戦場になったヨーロッパ諸国と比べ、アメリカは戦場にならなかっただけでなく、ヨーロッパ諸国の戦債を多く保有していました。」

それらに伴い軍需産業で発展した重工業と豊富な資金により、アメリカは空前の好景気に突入します。社会が大量生産、大量消費時代に移行し、また豊富な資金は株に過剰に注ぎ込まれ、株価は大きく上昇しました。」

しかしこの繁栄の1920年代と呼ばれた空前の好景気もある日をもって終わりを迎えます。それが『暗黒の木曜日』、1929年10月24日に株価が下がったことを受け株の売却が加速しました。これをきっかけにすでに過剰生産、過剰投機が起こっていたのが表面化し、そこに農業生産物価格の下落と金融機関の相次ぐ倒産が相まってアメリカは不況に襲われます。」

また株主はその損失の補填のため他の分野に投資していた資金を引き揚げ始めたことにより、それに含まれていたヨーロッパなども同様の不況にさらされることになります。」

五十鈴「このときアメリカ政府はどうしたのですか？」

冷泉「何もしなかった。」

五十鈴「えっ？」

角谷「流石に何もしなかったは言い過ぎだけど、当時のフーヴァー政権が自由主義経済を信奉していたために対応が非常に遅れたのは事実だね。」

小山「この後、1933年にフーヴァーが落選するまでアメリカは不況に対して大規模な対策は講じませんでした。ですがそれは次に大統領となったフランクリン・ルーズヴェルトによって大きく転換されます。」

彼は様々な改革を行って経済に介入することで不況を乗り越えようとしてきました。この政策をニューディール政策と呼びます。主だったものとしては全国産業復興法でカルテルの設立を認め、テネシー川流域開発公社を設立して公共工事を行ったりしています。」

冷泉「この全国産業復興法は違憲判決食らってるけどな。」

小山「これらの政策によりアメリカ経済は復調の兆しを見せますが、傷跡は深く急激な改善まではいきませんでした。」

そしてこのことが世界情勢に大きな影響を与えます。まずはそれまでの国際協調体制が破綻し、一国主義が台頭します。まずはイギリス、フランスやアメリカなど国外に植民地などの市場をもつ国々は植民地などとの経済的関係を強化し、高関税で外国商品を排除するブロック経済をとります。」

しかし市場を持たないドイツ、日本、イタリアなどではブロック経済に反発し軍事力による植民地や市場の獲得に乗り出します。これらによりそれまでのヴェルサイユ、ワシントン両条約による体制は崩壊していきます。」

角谷「ブロック経済の例としてはイギリスのオタワ連邦会議によるスターリングブロックが有名だね。」

小山「これに対し、国内の経済の混乱により共産党とナチスが台頭したドイツでは1933年にヒトラー内閣が成立します。これはヴェルサイユ体制への不満と共産党の台頭に対する軍部、経済界、中間層の不安を取り込めたことが一因です。」

ナチスは国会議事堂放火事件によって共産党を追い落とし、その後

の議会で全権委任法を可決して政府に立法権を与えることでヴァイマル共和政は崩壊、ナチスの独裁政権が成立します。」

角谷「どうして政府に立法権を与えることが独裁政権に繋がるかというと、」

こんなせいさくやりたくないな。

そうだ、ほうりつをつくってしまおう。

角谷「て感じで法律を作れちゃうからなんだよね。」

小山「ヒトラー政権は四カ年計画で戦争経済を確立すると共に大規模な公共事業によって失業者を取り込み支持を拡大しました。同時にニルンベルク法を制定しユダヤ人の定義をすることでユダヤ人への迫害を行っていきます。また1933年に国際連盟を脱退、さらに1935年に再軍備を宣言します。これに対して」

英仏伊「ストレーザー戦線を結成してドイツを抑えるぞ！」

英(でもなあ……戦争したくないし国民の支持も得られないよなあ……)

2ヶ月後……

英「ドイツくん、我がイギリスの35%までなら海軍作っていいよ。」

独「わーい。」

英独海軍協定締結

仏伊「は？何考えてんのイギリス！」

伊(でもフランスも政権ゴタゴタでまともに抵抗できないし、チャンスかもな。)

伊「よし、アドワの恨みを晴らす時だ！エチオピアに攻めこめ！」

第二次エチオピア侵攻の勃発

英仏「ちよ待てい！侵略は許さんぞ！国際連盟で制裁してやる！」

伊「でもさ、未開人を文明の力で明るく照らすのがヨーロッパ人の役目でしょ？ちゃんと今のイギリスとフランスの植民地には入らないからさ。」

英仏「どうぞどうぞ。スエズ通つていいよ。石油の禁輸はなしだ。」
エチオピア「誰を売ってる！ふざけるなあ！」

小山「という感じで英仏は独伊の拡大をとめることは出来ませんでした。またこのほかにもポルトガルでサラザールによるファシスト政権の成立を許すなど反ファシズムの動きは失敗します。

しかしソ連率いる共産国家は他の国の共産党と共に1935年のコミンテルン大会で人民戦線戦略を採用することを決議します。」

冷泉「ソ連は共産国家だったから世界恐慌の被害をあまり受けなかったんだよな。」

小山「ソ連は2度にわたる五カ年計画によって農業の集団化と重工業化、そしてネップと呼ばれる部分的な市場経済の導入により認められた富農のクラークと都市資本家であるネップマンの撲滅を行います。これにより農民に多くの餓死者が出ましたが、急速に重工業化が進められました。」

あと日本では1931年に柳条湖事件をきっかけに満州事変を起こして満州を占領し、清の最後の皇帝の溥儀を担ぎ上げて傀儡国家満州国を建国します。しかしリットン調査団の派遣により日本による侵略と判断されたため、国際社会からの非難の元国際連盟から脱退します。」

角谷「冀東防共自治政府とかは前回やったからパスるね。」

小山「あとはインドでガンジー、ネルーら国民会議派による反英運動の成果として限定的な自治を認めさせた新インド統治法が決められたり、シヤムが立憲君主制になってそのあと国号がタイになったりとか、サウジアラビアが成立したくらいでしょうか？」

冷泉「あとはスペインのブルボン朝による王政から共和制になったくらいだろうな。」

小山「じゃあこんなところですね。」

五十鈴「今回もこの『広西大洗奮闘記』読んでくださり誠にありがとうございます。」

角谷「作者も第何話まで行くかわかってないけど、気楽に見ていてねー。」

冷泉「次回はタイトル紹介だな。」

小山「フラグは立ててますから、分かる人もいると思いますが。」
五十鈴「次の解説編は30話の後の予定です。よろしくお願ひしま
す。」

広西大洗奮闘記 21 この小説の貴重なサービスシーン

部屋では角谷がキーボードを叩いていた。画面にはアルファベットが適度に隙間を取りつつ整然と並べられている。

「会長、船舶科と農業科から返答が得られました。」

隣の部屋から両手にペンとメモ用の小型のノートを握った小山が部屋から戻って来る。

「それで？」

「農業科からは人員さえ得られれば艦首付近の農地のさらなる拡大は可能と、ですが水と肥料と土砂の流出を防ぐための一定の面積の林が必要とのことです。」

「肥料、生ゴミ出たらそれで何とかならないかな？」

「古典的ですが、考えてもいいかもしれません。やはり薬品関連は授業優先にせざるを得ませんから。林も何とか残せれば、といったところでしょうか。」

「薬品、といえば化学科から要求来てたよね。」

「なんやら授業準備で過って塩酸の瓶を割ってしまったって数が足りないので補給が受け取れたら優先的に欲しいと……。」

「無理だね。」

「ですね。やはり食糧と日用品無しには。」

「日用品、って私たちが求めてきたものではないけどね。」

「過去ですしね。」

「それで、船舶科は？」

「もし補給を安定して受けられるならば学園艦を止めてそのエンジンなどの可動部の点検と原子力関連の者を残せば、即ち学園艦を再び可動出来る状態にするための最低限必要な人材を残してくれば5割以上の人員は回せるだろうとのことですよ。」

「5割以上か。それは大きいね。」

「ではそれも過半した上でこの農水産業増強計画を立てていきます。」

「あとは坂木さんここで今日の紙切れとの交換は？」

「今日は束が3つ減ったそうです。」

「ふうむ。これである程度は交換が出来たかな？」

「そうですね。お差し出し出来る貴重品もそれなりに有りますが、本当に売りたい物はもう出てきてしまっているのです、この先の価値の高いものの増量は厳しいのでは？」

「……そうなる、使えそうなものを今日のうちに持ってきてくれる？」

「……明日の夜に出発ですか。」

「………つと、よし！」

角谷はずつと叩いていたキーボードから指を離して斜め後ろに大きく伸びる。

「んー、終わったー！これを明日松阪先生にチエツクして貰えればオツケーだー！」

「おー。おめでとうございます！」

「これで何とかイギリスと上手くいけばいいけど……」

「イギリスでもその後を考えねばなりませんね。」

「それまでには原子炉がマシになってくれればいいけど。」

「それと、住民の不満も気にしなくてはなりません。もう配給を始めから2週間程、どうにかして不満を解消させませんと。」

「……爆発しかねないよね。でも下手に今1回配給増やして味を占められたりあとあと食糧が足りなくなる方が怖いんだよね。まあ、交渉纏めれば済む話なんだけどね。」

「流石にこの様子だと農学科、水産科の増産が間に合うか分からないですしね。」

「……と、そうそう。今日も夕方の配給組7時くらいに帰ってくるかね？」

「五十鈴さんたちならそのくらいには帰ってくるんじゃないですか？」

それを聞いた角谷は背もたれから身を起こして指を小山の方に向ける。

「それじゃあさ、8時くらいに艦橋の大浴場取ってくれない？」

「大浴場ですか？いつも通りに学園のシャワー室ではないのですか？」

「今日は折角気分がいいし、それに不満抑えるために住民に開けている娯楽の一つなんだから、私らが使っても良いよね。」

「はあ……船舶科にまた連絡しておきます。」

「いや、私が連絡しとくから小山は隣のみんなにそう伝えといて。あと一応その報告机に置いて。」

「分かりました。」

小山は持っていたノートを角谷の机の上に置いて隣へ向かっていった。角谷も久々に席を立ち、痺れる足を屈伸で戻してからゆっくりまた別の隣の部屋へ向かう。無線からイヤホンを手に取り、船舶科のいる艦橋へ繋げる。

「もしもし。船舶科の長坂です。」

「長坂ちゃん？角谷だけど。」

「今度は会長ですか。人を送れるかどうかは先程小山副会長にお伝えしましたが？」

「あーちがうちがう。まずは今夜8時から1時間艦橋の大浴場取れる？」

「大浴場ですか？生徒会用のではありませんか？」

「いやー、流石に生徒会の人間を全員連れてくると生徒会用だと狭くてね。」

「うーん。まあ、今日1日だけなら大丈夫ですかね？試験始まってますし、そうなると学生客も減るので。というより、生徒会全員こっちに来ちゃって仕事大丈夫なんですか？」

「まー夜になれば物流関係の仕事も減るし、今日は明日からに向けた交渉の準備が一応くぎり着いたからね。」

「それなら良いのですが。」

「あと飲み物持ち込み大丈夫？」

「うーん……こぼさないでくださいよ。」

「ありがと。あとは明日からついてくる人は？」

「こちらで大橋班から2名選んでおきました。前の様に出発前に顔合
わせで。」

「おっけー。それじゃあ、よろしくね。」

角谷はいつもの場所にイヤホンを戻して鼻歌を拭きながら隣に
戻ってきた。

「……ん？やけに騒がしいね？」

すぐに生徒会室の方が騒がしいことに気づく。その訳は扉の前に
辿り着くとすぐに分かった。

「温泉だー！」

「やっとな満足にシャンプー使えるよ！」

「ギターー！」

角谷は手を掛けたドアノブから手を離し、自分の席に戻り、画面を
眺める。

「……ふう、何処にも苦労かけてるねえ。とにかくこれを成功させね
ば、私たちには明日がない。」

8時過ぎに艦橋に到着した生徒会員総員は角谷の先導の元
意気揚々と大浴場へと向かった。皆手には旅館で貰うようなグッズ
を握っている。

「じゃ、よろしくね。」

大浴場の前に立っていた担当の者に場所を空けてもらおうと、後ろか
らの猛烈な圧力を察して角谷は道を空けた。最早奇声に等しい音声
とともにその穴から生徒会の者たちが突入する。

「1時間ですからね！」

「はーいー！」

小山の呼びかけに対しても軽い返事しか返ってこない。楽しげな
会話とともに皆急いで風呂に入る準備を整える。

「小山。例のもの、持ってきた？」

「もちろんです。」

「じゃあ、人数分入れて渡しちやって。」

「はい。」

小山は風呂に入る者たちに一つづつ注意を付けて手渡していく。そしてその残りが2つになり、それらを角谷と小山が手にとつて風呂場へ向かう。中では既に身体をひと洗い済ませた者たちが湯船に浸かって待っていた。

角谷と小山もすぐにそれに合流する。湯気は湯船からもうもうと立ち登るが、角谷は中にいる顔を全て確認できた。湯に入った瞬間はびりつとくるが、時期に腹まで浸かると気持ちよくなり、右手を挙げそのまま肩までつかった。

「ふー。」

「会長！挨拶があるんでしょ！早くお願いします！」

「全く、入って一息くらいつかせてよ。」

「会長、お願いします。」

「んじや、今まで私たちは2週間学園艦の存続に向けて働き続けてきた！残念ながら中華民国に対しての交渉は失敗したが、その反省を我々はまだ生かす余裕がある！そして、その時が明日からだ！」

私はこの間で必ずや支援を得られるようにする！だから今日は私がこの全ての努力あつて交渉に迎えることを自覚するために集まつてもらつた！生憎乾杯できるものはみんなの手にある茶くらいしかないが、この時間くらいは無礼講だ！私を励ましてくれ！」

それでは、柄になく前置きが長くなつてしまったが、我々の大洗女子学園の存続を誓つて、乾杯！」

「乾杯！」

全員の紙カップが高く掲げられたのちに、その全てが各々の口に運ばれた。小山が素早く紙カップを回収しつつ、角谷は生徒会の者たちの中に突っ込み、軽くもみくちやにされている。

「ていうか、頑張つてんの生徒会だけじゃないですよ、会長。住民の皆さんと農業科、水産科、船舶科を忘れたら怒られますよ。」

「そーだそーだ！」

「しまった。」

「やっちまえー！」

という感じで水かけ祭りも発生しており、これを外から眺める男が

いたら、さながら阿房宮のような光景だろう。まあ人数は阿房宮の千分の一よりも少し多いくらいだが。

暫くして生徒会の者たちはそれぞれのグループに分かれてお喋りを始め、角谷はそれを抜けて露天風呂へ向かった。外は中とは寒暖の差が激しく、湯船に向け滑らない程度の早足で向かってすぐに入ろうとする。

「っー」

だが露天風呂は中よりも温度が高く、思わず入れかけた足を上げる。だが次は足が浸かり、そのまま身体を沈めていく。

「会長さん。」

「五十鈴ちゃんか。今ここにいるのはこれだけ？」

「そうですね。他は大浴場にいるか、本格的にシャワー浴びてます。」

シャワー場は全て埋まっており、旅館の温泉定番の羊油のシャンプーが惜しみなく使われている。角谷は手の力を借りつつ、床の石を軽く蹴って華のもとへ向かう。

「今日はみんなの気晴らしですか？」

「まあそうだね。まさかここまで喜ばれるとは思ってなかったけど。でもさっき言ったこともある。」

「むしろ会長さんって励まそうとするとさらに陽気に励まし返されそうなイメージなんです。」

角谷の顔は先程までと非常に対照的だ。

「でも、交渉だけは……励まされたくもなるんだ。」

「と言いますと？」

「文科省での交渉で、背中に銃は突き付けられないからさ。」

「……」

「だから、期待を背負っていることを嫌でも身に染み込ませないと精神的にやっていけないんだ。香港でもマカオでもインドシナでもフィリピンでも私たちはよく分からない異界人。何らかの方法で動きは確実に封じられる。それはやっぱり恐怖さ。」

「……残念ながら私には分からないです。」

「分からなくていいさ。自分の命が人に握られている事なんてあつて

欲しくない。だから交渉に行くのは私と通訳の松阪先生と船を動かす人だけでいい。必要最小限さ。」

「……はい。すみません、別のことで私から一つ聞いておきたいのですか、いいでしょうか？」

「どうしたの？」

「……風紀委員のこと、どう考えてらっしゃいますか？」

「風紀委員、か。」

角谷は首を傾げ肩に湯をかける。

「小山副会長は廃校の情報の流出を全力で止め、今回も治安維持に協力してくれている風紀委員を無闇に疑うことはできないと仰っています。」

「……でも、配給後に見に來たり、秋山ちゃんを呼び出したりもしているんですよ。」

「要件までは確認できていませんが。」

「そして、こちらから与えたとはいえ、この学園艦で数少ない『暴力』を使う機関だ。確かに現状協力してくれているが、今まで暴動などの動きを持つてこないことも疑う要因にはなる。」

「疑い始めるとキリがないとも言いますが。」

「だけど一度生えてしまえば收拾がつかない。その為には全ての芽に気を配らなくちゃいけないさ。」

「……風紀委員はその芽に含まれると。」

「そうなるね。私の前までは共に生徒を統制する機関として余り仲は良くなかったしね。今回くらいだよ、まともに協力したの。」

「ではこちら風紀委員の動向をつかめた方が良いですかね？」

「そうだね。かといってこちらが疑っているとばれたら向こうは動くかもしれない。細心の注意を払う必要があるね。」

「……分かりました。小山副会長に黙ったままというのは心に來ますが、念のため警戒しておきます。」

「よろしくね。」

角谷は湯の中で足を前に伸ばす。

「それと、一つ提案なのですが、」

「なにになに?」

「制服で交渉に向かうというのは、余りよろしくないと思うのですが。」

「ほう。それはまた何故?」

「確かに私たちからすれば制服は正装かもしれませんが、相手は我々の常識が通じない人たちです。そして相手からしたら制服はよく分からないミニスカートとリボンのついた襟付きの長袖くらいとしか見られません。」

「ふむ……確かに一理あるね。じゃあ、五十鈴ちゃんは何が良いと思うの?」

「そうですね……次は香港ですか。香港ならイギリス領ですから、ドレスとか?」

「ドレス、ね。似合うかな?」

「ですが爵位を持つ方にあうならば、それなりのファッションは必要だと思えますよ。」

「確かに買取で高い服はあるだろうけど、私着れるかな?」

「丈を何とかできれば大丈夫だと思います。あとは……香港も元中国ですし、チャイナドレスもありかもしれません!」

「ち、チャイナドレス……」

胸の前で手を叩きながらにこやかな顔をしている五十鈴にいや流石にとはい返せない。

「確かこの前世界史の資料集眺めてた時にチャイナドレスは中華民国が女性公務員制服として決めたものって書いてあったんです。それなら私たちが日本から来たという欠点も抑えられるかもしれませんよ!」

角谷はやっぱり五十鈴ちゃんってどっかしら抜けてるところがあるんだよな、と少し頭を抱えつつ、この嬉々と話す者の言うことをどうやって否定しようか思いを巡らせていた。

「あ、会長! 励まされる張本人が出てっっちゃダメじゃないですか!」

「無礼講の間にやるんですから早く来てくださいよ!」

まだ時間のあるうちに他の生徒会の者たちがこっちに來ている。

これは好都合と角谷はこの会話を区切ることに成功した。

生徒会の者たちとひと時を過ごし、風呂の時間は終わった。帰りは上着をもう一枚羽織って帰路につく。風呂出た直後だが彼女らはこの後20分歩き、おまけに買い取った貴重品を生徒会室へ運んで貰わねばならないのだ。楽あれば苦ありとはよく言ったものだ。

次の日、10月25日の夕刻、学園艦は東沙群島の西方に辿り着いた。香港はここからほぼ真北にある。マカオはその少し西だ。学園艦内部の補給船ドックでは長坂艦長の指導のもと出航に向けた準備が着々と進められている。今回はちよいと差し入れの荷物と食糧が増えているので手間がかかり、前よりも準備が長引いている。「すみません、そちらは準備が整っているのに、こちらが時間をかけてしまつて……」

「いいよいいよ。別にこっちもそう急ぐわけじゃないんだから。」

角谷は結局五十鈴の案の折半、自身が持つ一番きちんとした服である長めの黒いスーツに腹に皮のベルトを締めタイツを履いた、お高いフランス料理店に安心して行ける服をチョイスした。背中にはもう1セットの白いワンピースが入っている。そして生徒会の者の一部が角谷の顔に薄化粧を施した。

今回乗る4人は化粧とかに興味を持つ暇もない船舶科2人と男1人と角谷だ。そして角谷も髪型は人並みに気にするが、化粧を余りするたちではない。その為にカバンに増えた一つの入れ物にはその担当者が書いたメモ書きが入っている。

松阪も要求を受けて買い取りのアル〇ーニのスーツを着こなしてきた。

「それで、今回の交渉予定の確認だが。」

「はい。まずは香港、そしてマカオを予定しています。香港の結果は万が一失敗したら一度外洋に出て無線の届く範囲で学園艦に伝える予定です。」

「なるほど。で、前の中国語の提案内容を持っているのは何故だ？」

「一応資料程度には使えるかと。」

「分かった。食糧は2週間分か。」

「無論そこまで長居する気はありませんが、向こうも判断に時間が必要ですからあつて損はありません。ですが備蓄にも余裕がないので前みたいにあげるのは厳しいかと。」

「ふむ。」

荷物の搬入も終わり、長坂が2人の娘を連れて角谷の方に来る。

「すみません、やっと終わりました。」

「ありがとね。その子らが今回来る船舶科の人？」

「そうです。こちらの短髪が有馬、こっちの長髪メガネか永野です。共に大橋班で優秀な人材です。」

「じゃあ今回は2人に操縦と通信とか任せるからよろしくね。」

「はい！」

角谷の差し出した手に応えながら2人は元気に返事した。それらの挨拶が終わると、角谷は後ろで待機していた生徒会の者たちと顔を合わせ、一言だけ放った。

「前の出発の時の罰則、有効だからね。」

そのこれに対して、生徒会の者たちは前ほど狼狽えなかった。

その30分後、4人の乗った輸送船は手を振られながら汽笛もなしにゆっくりと補給船ドックを出ていった。香港までは9時間の予定である。夜空は少し曇っているのか、余り星は瞬かなかった。

広西大洗奮闘記 22 三枚目

風紀委員室では外は暗いが委員長が灯りをつけて資料を確認しており、その中に副委員長が入ってくる。

「ゴモヨ、今夜の見張り担当は無事出発したよ。」

「ありがとう。それでパゾ美、例の件は？」

「一応ハマコからのやつカナンとエドムの所からちよつと引っ張って深夜見回り増やしたよ。」

「そう、それで？」

「深夜見回りはちよくちよく入れ替えさせて、護身具の使用訓練やらせてるよ。」

「護身具の使用訓練って、この紙の？」

ゴモヨは持っていた資料を机の上に置き、ファイルから紙を一枚引っ張り出して見せる。そこには今回許可された護身具である鉄製の50センチくらいの細い棒による護身、効果的な攻撃方法が記されている。それを幹部層が深夜見回りから帰ってきた者たちに教えているのだ。

「そう、文部省からのやつ。これに則ってやってるよ。」

「了解よ。それを続けてちょうだい。」

「というよりも、何でこんなの資料が残ってるんだろう。」

「これ書かれたのは学園艦が設立されて直ぐなんだけど、当時はまだ終戦から時間が経ってなくてまだ孤児とか浮浪者が街にいた時代なのよ。そして学園艦は重工業への大規模な公共事業であると同時に復興の希望でもあったわ。」

確かにサンダースとか黒森峰とかの学園艦の方が大きいけど、それでも大洗学園艦は水戸、大洗、鉾田の復興のシンボルだったのは確かよ。だから孤児とか浮浪者はそれにすがろうと侵入した。資料見ただけで開校から暫くはそういう人たちの犯罪がかなりあったみたいね。」

「そういう人たちの摘発を風紀委員がやってたの？」

「本土も似た状況だったからかまだ警察も学園艦に向けた準備が、即

ち駐在所の人員などが十分に用意できてなくて、その穴埋めというのに生徒による自治という方針を引っ付けて風紀委員による治安維持が行われていたみたい。これはその時の引き継ぎ資料ね。」

「なるほど、でも警察も準備が出来てきて風紀委員が危険というのもあつて5年後には大規模な治安維持活動からは身を引いたと。」

「ついこの前までの学園艦治安担当なんて治安のちの字位しかこなせてないのに、今じゃ警官と一緒に治安維持だからね。まあ元々6割学生だと帰宅途中の下手な寄り道の摘発位しか仕事もないわよ。」

「それで訓練なんだけど、みんな試験期間中だしそこまで時間も取れないからあまり進みは良くないよ。必要人数が上手く使えるようになるのは早くても来月頭になるよ。」

「……来月、ね。」

「つまりゴモヨが言つてたことを実行するのはそれよりも先になるよ。それでも本当にやるの?」

「勿論よ。まだ補給が回復してないのだから私たちが動かないと。それとヤボクから新たな情報は来てないの?」

「私には来てないよ。今は活動量からしてまともな情報が上がってきそうにないね。」

「でも深夜見回りで学園艦の左側に見張りを優先的に回しているわよね。」

「うん、ゴモヨが前言つてたようにフィリピンへの交渉の船が出ていないか確認させてるよ。でも左側だけでいいの?」

「人数もかつかつなんだから絞るしかないの。私たちのいた場所から南西に、そして最近は西に進んでいることから、この学園艦はフィリピンの方に進んでいるわ。そしてフィリピンの首都マニラに行くなら、いやそれを抜きにしても南に行く必要があるわ。」

「それが学園艦の左側、と。」

「そうよ。ベトナムかどうか迷ったけど、より親日、親米なのはフィリピンね。」

「……それでゴモヨ。例の件をやる日は決めてるの?」

「一応ね。今後の進行に合わせて変えるかもしれないけど、実行する

日は猶予が切れた時にするわ。」

「猶予……なるほど。その日なら何とかなるかな？じやあその日に……」

「……では私たちも帰って明日に備えましょう。」

茨城県大洗町

町から外れていく通りから一本裏に入ったところに和の趣漂う一軒の家がある。その家にはここ4年半ほど老婆が一人で暮らしている。その和服の老婆が一つの持ち物と共に和室に入ってきた。腰を曲げているがそれに抗うように早く歩き、仏壇の前に正座した。

開けられた障子からは風が流れ、老婆の白髪にシワのある頬を撫でさせ、刺した線香の煙を入り口の方へ押し流す。そしてその煙の行き先は彼女には分からなくなる。

彼女は仏壇上段に並べられた2枚の写真立てを左に一枚ずつゆつくりとずらし、持ち物をそれらの右に加えた。それを整え終えると、彼女は姿勢を正座に戻し、無言で手を前で合わせた。しかし、彼女は心が口から飛び出すのを抑えられなかった。

「……何でだい？」
上段には写真立てが3枚並び左から女、男、一回り若い娘となっている。

「……あんたらが死ぬ前に喧嘩してたってことは聞いたよ。だけさ、そんなに、そんなに心残りだったかい？」

彼女は前で合わせていた手を下ろし、膝の上で拳を作る。

「……どうして、こんなに早く娘をそっちに呼び寄せたんだい？まだ……17の娘だよ。」

いつもは覇気のある声で話す彼女にその様子はない。

「……この老婆を一人で残させて、何が面白いんだい！何でだい！何でだい！」

いつの間にか彼女は両目から涙を流しながら正座のまま前屈して畳を何度も叩いていた。

「……お仲間ごとまとめて連れてつてくれたお陰でこっちは孫のための葬式も出来ないよ。今回のことで私は状況を聞く限り艦長を責めることも、学園を責めることも出来ない。何も、ないのさ。」

線香は風に掻き消されかけていて、煙がかなり手前から分からなくなっている。

「……なあ、なあ！そこまでかい！あんたは娘と和解するのに、10年も耐えられないのかい！誰も責めることも出来ずに残された、一人で寂しくそっちに行くしかないこの老婆の気持ちがあんたに分かるかい！」

彼女は立ち上がり、写真立ての一番左を睨みつけつつ叫びかけた。しかし、写真は柔かな顔のまま彼女を見つめ返す。それは他の二人も同様だ。無言だ。

「……もう、帰ってこないのね。急にはっと見つかるなんてことはないのね。」

彼女は再び座り直した。暫く座って仏壇の台を見つめる。瞳を閉じ、手を合わせ直す。彼女は祈った。神でも仏でも他の如何なる高等なものに対してではない。ただ、3人の冥福のみを。

腰を上げた彼女は部屋を年相応の動きで出て行った。部屋には開かれた障子から風が吹き込む。

そしてその風がぴたりと止んだ時、ほぼ時を同じくして線香は根元を残してその輝きを失った。

輸送船は出航した。夜の闇の中を光も灯さず北に進む。角谷は来ている服にシワがつかないように気をつけながら椅子に座って書類を眺めつつ時を過ごす。書類の内容を確認しているが、スペルミスや変な所は見受けられない。流石試験を作る方のチェックは素晴らしいと感心していた。

「そんなに私のチェックが不安かい？」

いつの間にか正面に回っていた松阪が角谷に怪訝な顔で聞いてくる。

「いえ、むしろ私の出した提案内容の方が不安ですよ。」

「だがそれは私たち大洗の出せる限界に近いだろうか？」

「そうですね。強いて除いているとすれば有能な人材を送ることくらいでしようか？」

「それはまた何故？中国には提案したんじやなかつたか？」

「中華民国には必要でもイギリスでは要りませんよ。私たちがロンドン大学の優秀な人材などに勝てるだけでも？」

「無理だな。そしてイギリスに対する代わりの利点が戦車道、というわけか。」

「そこで押せるかどうかですね。そしてこちらの西住ちゃんという優秀な人材を向こうが信じるか、最悪でもそれを示せる機会を得られるか、が重要なポイントです。無論他にも優秀な人はいますが。」

「……そのカッコもその為か。」

「これでも妥協したんですよ。」

「まあ、確か身分の高い人に会いに行くんだ。正装するのは妥当だな。提案してくれた方に感謝しなきゃな。」

松阪も自身のスーツの裾を整えながら話す。次に話すことがあるか角谷が思索していると、外に繋がる金属の扉の方から小石が当たるような甲高い音がした。それは連続して2回起こった。

「何だ？」

「破片か何か飛びましたかね？確認してみます。」

角谷は服の後ろに手を当てつつ立ち上がり、扉の方へ向かう。風はあまり吹き込んでこないところを見ると何か当たった訳ではなさそうだ。その少し開いた扉をさらに開くと、そこには一羽の灰色の鳥が羽を畳んでいた。

「……鳥？」

「久しぶりだな。」

鳥がこちらを向きながらくちばしを開いた。

「……ああ、鳥さんか。久しぶり。こんな時にどうしたの？新しく情報でも手に入った？」

「いや、今回船で出かけているあたり補給が貰えるように交渉に行くんだろう？その為の応援みたいなものだ。」

「ありがとう。取り敢えず中入る？」

「お邪魔しよう。」

「水とか要る？」

「いや、わざわざ洋上で迷惑はかけられない。」

「まあ、じゃ肩乗っつけてくれる？」

「了解。」

扉の隙間からちよつと飛んだ鳥は角谷の右肩にその両足を乗せた。そうすれば自動的に角谷の後ろにいる松阪にもその姿が見える。

「鳥か？角谷くん鳥なんて飼ってたのか？」

「誰だお前？」

「うおっ！」

松阪は一步後ずさり、顔を引きつらせる。

「この方は松阪先生。今回の交渉に同行してくださる先生だ。松阪先生、この鳥は確かヨウムって種類で喋れるんですよ。」

「あ、ああ、そうなのか……それで、この鳥は？」

「自分で言っていたことによると、私たちをこの世界に送った装置を作った人間が飼っていた鳥だったかな？」

「そうだ。今は学園艦の上を飛んでいる。」

いきなりのフアンタシーな光景に瞬きの回数を増やしてさらに混乱を深める。動画とかでオウムが人の言うことを繰り返す光景は見た事があるが、ここまでまともに人間の言葉を話されれば常識が揺らぐのは当たり前だ。

「それで、どうなんだ？」

「どうって？」

「補給を受けられるのに必要なこと、それを分かっているのか？」

「勿論、私たちに補給を与えてそれ以上の利益があると思つて貰うことですよ。」

「だがその欠点は補給を与えることだけではないこともか？」

「だから、私たちは日本の学園艦じゃない。そう書いたのさ。」

「……正しくはどこの国の学園艦とも明記せずアルファベットで書いたんだろう。」

「……分かった。それじゃお邪魔した。」

鳥は繕っていた翼を戻して扉の方へ両脚を揃えて跳ねて行く。

「済まんが、扉を開けてくれないか？」

「とそうだ。一つお願いしていい？」

「ん？まあいいが？」

「えつとき、前に生徒会室であった時一緒にいた五十鈴ちゃんって分かる？」

「髪が長い方が、短い方が？」

「長い方。その子に協力してくれない？」

「構わないが、何をだ？」

「多分『風紀委員への調査』と言えば向こうが詳しく教えてくれるはずさ。」

『ふうきいいんへのちようさ』だな。そう聞いてみよう。それじゃあ扉をお願いできるか？」

「了解。」

角谷が両手で扉を開くと鳥は大空へと飛び去った。

「……これで大丈夫かな？」

「何だったんだ……今のは……」

「そういうものです。まだ香港までは長いですから、ゆっくり休みましょう。」

その日の夜、既に生徒会の者たちは床についていた。無論小山と華もそうである。しかし華はそのまま瞳を閉じる気にはならない。横の書類の乗った机を視界の隅に置き、主だった範囲は天井で占められる。

そろそろ配給開始から2週間以上が経つ。備蓄量が日ごとに減っていく様は気持ちの良いものではない。まだタイムリミットは先だが、食糧が無くなることと暴動が抑えられることに等号は成立しない。後者が先だ。即ちこれまでの交渉に必要な期間を考えれば今回の交渉の失敗がどのような影響を及ぼすか、華は心配せざるを得なかった。

そして風紀委員は優花里を協力させているようだが、こちらはそれさえも確認出来ていない。そしてそれが今も起こりかねないことは彼女の不安を増幅させていた。

明日も仕事はある。休まねばならないとは思っているが身体はそれに抗う。夜に眠れない時は羊を数えると良いとふと思い出し数えてみるが、頭の中でメエメエ鳴いてうるさい。それは山羊にしても変わらないので、頭の中で花を活けていくことにした。

剣山を前にして一本一本確実に集中して活けていく。今回の作品はやはり戦車だ。戦車が華々しく砲火をあげる様を示そうと力を込めて活けていく。

しかしその集中は一つの物音で途切れ、作品はバラバラに崩れてしまった。物音の正体を探しに身を起こすが、物がずれているようなところはない。しかしその間にもう一度2回何かを叩くような音がする。隣の部屋に繋がるどの方向でもない。

後ろだと気づき、そこにある窓側に向かう。カーテンを払うとそこには黒いシルエツトが月に照らし出されていた。そしてその黒いシルエツトは窓を再び先で窓を突いた。華はそれが人間ではないと確認して小山を起こさないようにゆっくりと窓を開ける。

「……鳥、ですか？」

そこにいたのは暗くてよくは見えないが鳥のようだ。

「……み、」

「えっ？」

「……水をくれ……」

「……えっと、前に阪口さんに連れられていらっしやった鳥、ですか？」

「そうだ、だから早く水を……」

「あ、水ですね。分かりました。」

華は取り敢えず水道のある隣の部屋から水を一杯コップに汲んで持って来た。それを鳥のくちばしに近づけるとすぐさまそれにくちばしを突っ込み水をあつという間に減らしていく。

「……とても喉が渴いてらっしやったのですね。」

「……はー、とにかく助かった。」

鳥は一回息を吐くとまた水を飲み始めた。

「……水だけですか？」

華がそう聞くと鳥はコップからくちばしを離し見上げた。

「何がだ？」

「目的ですよ。」

「いや、それだけじゃない。むしろこれからがメインだ。」

「皆さん寝てらっしゃいますので静かにお願いします。」

「ああ、分かった。ついさつき船がこの学園艦から出てきてたのを見つけて追ってみたらあの小さな会長が乗ってたのさ。そして話を聞いたら君の『ふうきいいんへのちょうさ』という仕事を手伝ってくれ、と頼まれたんだ。」

「風紀委員への調査ですか。」

「何をすればいい？そもそも風紀委員ってのは何だ？」

「風紀委員というのはこの学園艦の治安を警察と共に守っている組織だと思ってください。」

「ほう。」

「！そうだ！あなたなら風紀委員を見ても怪しまれませんし、情報を探ってくれませんか？」

「構わんが、情報って何の？」

「教えてくださった情報も含めて今回の件に関する情報は学園艦の皆さんには伏せてあります。それを風紀委員が探っているかもしれないという情報が入ったので、どこまで掘んでいるか探ってください。」

「何故それが必要なんだ？」

「風紀委員が学園艦の数少ない暴力装置であり、そこが情報を集めているとなれば、警戒する必要があります。万が一暴動などを起こされれば会長の交渉は意味を成しません。」

「なるほど。情報を探るか……限界はあるが何とかなるだろう。代価は餌くれないか、報告に来た時でいいから。」

「勿論です。それと、報告は私に直接お願いします。」

「そこの寝ている娘でもいいんじゃないのか？」

鳥は小山の方をくちばしを振って示す。

「いえ、この小山さんは風紀委員への調査に懐疑的です。私が行います。」

「……よし分かった。協力しよう。風紀委員はどうやって探せばいい？」

「おかつぱ、つまりちび○るこちゃんみたいな髪型の人間を探せば大丈夫です。」

「……全員そうなのか？」

「はい。」

「クローンの類じゃないのか？」

「それぞれ髪の長さが違いますからそうではないです。あと風紀委員の前では喋らないでください。」

「聞き出すことは出来ないか……まあ、やってみよう。」

「ありがとうございます！」

「水ありがとな。失礼する。」

「はい。何かあればお早めに！」

鳥は翼を広げ大空へ帰っていった。空の雲には隙間ができ、ちょうど月が顔を覗かせている。華は布団に戻ると、今度は花を活けることなく眠りにつくことができた。

広西大洗奮闘記 23 O a r a i

10月26日 香港島北西部 花園道付近 香港総督府
「サー、ピール。」

一人の紳士がその執務室に入ってきた。

「おはよう、今日は昨日の雲が飛び去った清々しい日だね。」

額を日に反射させ光らせる鼻下に髭を付けた老人が優しくそんな顔で答える。

「はい、その通りです。」

「今日の業務はどうなっている?」

「はい、今日は電話と飛行場の視察と夕方に資本家の皆様との会食の予定です。」

紳士は手元の手帳を確かめる。

「なるほど。」

「ですが、その前に今朝入った奇妙な話が……」

「奇妙な話?」

「ええ、ビクトリアハーバーに無国籍の輸送船が入港しようとしたのを海軍が捕らえたのですが、」

「海賊の類ではないのかね?」

「それにしてもやけに正装してまして、彼らが言うには我々は学園艦の者である、食糧などの物資が不足しており、将来的な食糧供給を条件に補給を受けたいと申し立てているとのことですよ。」

「はあ、学園艦か。それで今はどうしている?」

「引き続き海軍が捕らえております。ですが若い女三人と男一人なので男から聞き出しておりますが、めぼしい情報はまだ……」

「国籍などもか?」

「はい。見た目はアジアンですが彼らが提出した要求書によるとオアレイ女子高校という学園艦から来たそうです。」

「オアレイ?何の名前だ?中国語ではなさそうだが。」

「分かりません。ですが、その要求書に信じられないことが書いてあるんです。」

「何だね？」

「えつとですね……」

その紳士は腕を組んだまま口ごもる。

「良いから申してみよ。」

「その学園艦、全長が7.6 km、横幅が1 kmある空母型のものだろうです。」

流石の老人もそれを聞いた時回路の一本が切れかかった。

「……それは最近建造が始まったという空母の何倍の大きさかね？」

「確か……縦幅だけでゆうに30倍は越えます。」

「……いくらなんでも我が大英帝国を遥かに超える技術を持つ国などおらん。それをこのご時世に軍備としてではなく学園艦として作る余裕のある国力と資源を持つ国もおらん。アメリカでさえ技術的にそんな空母型作れないだろう。」

よってまずそんなものの存在が信じられるはずもない。それに学園艦ならばどこの国のものかこちらに伝えるべきだ。交渉も何もない。帰ってもらえ。」

「無理があるのは承知で言いますが、交渉に来てそんな航空偵察すれば簡単に分かるような嘘をつく人がいますかね？」

「それが本当ならそんな学園艦に支援するだけの物資はここ香港にはない。嘘なら騎士道において嘘をつく相手と交渉する必要はない。」

「本国に確認を取ったほうが良いのでは？」

「流石に本国から香港に物資を運ぶことはないだろうから必要ないと思うが……退任ギリギリで不祥事を起こすわけにもいかないし、その学園艦の保有国との関係を私の独断によって悪化させる訳にもいかないか……そうだな。一応本国に連絡は入れておかないといかん。電話を繋げてくれ給え。」

「どちらに……」

「外務省だな。その学園艦に関する話が伝わっているかもしれない。とはいってもNOと帰ってくるのを聞くだけだろうがな。」

「分かりました。」

紳士は電話機を持ち出し、このピール総督の時代に整えられた自動

化された電話網を通じて、ロンドンのキングチャールズストリートにある外務省へと繋げる。

「こちら大英帝国外務省、どなたですか？」

電話に出たのは若い男の声だ。

「香港総督のウィリアムだ。サミュエル準男爵にお繋ぎ願えないかね？」

「申し訳ありませんが、サミュエル外務大臣は只今会議に出席されていらつしやいます。」

「ほう、それは失敬。いつ頃お戻りになるかね？」

「予定ではあと10分程でお戻りになるはずですが、何分昨今は会議が長引きがちなのでどうなるかはこちらも把握出来ません。」

「そうか……では戻られたら香港の港に国籍を名乗らない学園艦の使節がお見えになったのでその対応についてご相談願いたいとお伝えして頂けないかね？」

「承知しました。その様にお伝えします。」

「では失礼するよ。」

受話器を戻した老人はその手を紳士の方に向ける。

「君、一応海軍には彼らを粗略に扱わぬよう指示せよ。あとこの情報は内密にな。」

「はっ！」

その紳士が部屋を出ようとした時、老人は一声かけそれを呼び止めた。

「それと、彼らの要求書を写して良いから用意してくれ。」

「はっ？それは何故？」

老人ははあと溜息をついて続けた。

「騎士が男爵に内容を説明できずに口ごもって如何する？上の仕事を下は問題なく完遂できるようにする。それが騎士の契約というものだ。」

角谷たち一行は今回は背中に銃を突きつけられることはなかったが、身体検査で武器を持っていないことは確認された。幸いに

も女子3人の検査は女性がやって下さったことは彼女らのイギリスに対するイメージを良好なものにした。

そして松阪一人だけが別の部屋に行き3人は纏まってちよつとした部屋に案内された。確かに前の4人でいた一室よりはグレードが高いが、コンクリートの無機質さが角谷を除いた2人の不安を強くするらしい。

「……か、角谷会長、だ、大丈夫ですよね？」

その一人の有馬が角谷の側で話す。

「こんなの前に行った時に比べれば素晴らしい厚遇さ。あと、ここでは出来るだけ英語で話して。無理なら黙っててね。」

「……oh……。」

永野は角谷が小声で伝えたそれを早めに受け入れたようだ。

船舶科はその授業と実務の関係上いわゆる頭のよろしい人間というのはそういない。無論技術で引張ってこられたこの2人は多数派だ。そして角谷一人で話すこともないので、自動的にこの部屋は無言となる。

この無言は外にいる相手からすればただ恐怖に襲われていると思われるため都合がいいのかもしれないが。部屋の机の上の水の入ったコップは誰も取ろうとしない。

(……しかし、松阪先生も全てを知っているってわけじゃあないからねえ。果たして如何なるものやら……)

角谷が一番最初にコップの水を口に入れ、暫くしてから飲み込んだ。黙ってその場でじつとして、異変がないことを確かめる。

「…… It's fine. We can drink it.」

二人はそうとだけ答えて、それぞれの水を飲み、机の端の方にそれぞれ離して置いた。そして再び皆それぞれの簡易ベッドの上に座るなり寝そべるなどして無言の時間が過ぎる。

部屋に時計も無い為何分経ったか分からないが、暫くして外の廊下を響かせながら近づく靴の音があった。それは彼女らの部屋の前で止まると、鍵の開く音がして扉はこちらに開けられた。向こうにいた

のは腹に縦二列に金のボタンを並べた中年手前の男だった。

「Is there a girl name "Ann" in this room?」

(アンという名の娘はこの部屋におるかね?)」

「Ann? That's my name.

(アン? 私の名前です。)」

呼ばれたことのない名だったが、他の二人の名前からしてそう呼ばれるのは角谷しかない。すぐさま男の前に直立する。男は見た目より身長が高く、角谷を頭一つ半見下ろす。

「How can I help you?

(何の用で? ございますか?)」

「I heard that you have documents about a demand to Hong Kong. Is it possible for you to hand me over them?」

(私は貴女があなた方から香港への要求に関する書類を持っていると聞いた。ご提出願えないだろうか?)」

「I understand. Here it is.

(受け取ってくださいますか? 承知しました。こちらです。)」

角谷はカバンの中の提案書の入ったファイルを取り出し、それを男に差し出す。

「I certainly received it.

(確かに受け取った。)」

男はファイルの中身を確認し左手に携えた。

「And ah...

(それと.....)」

「Hm?

(うん?)」

「Take this as a return of it.

(受け取ってくださいましたお礼としてこちらをどうぞ。)」

角谷はもう一つカバンから箱を取り出すと、それを男に渡した。

「A watch?

(腕時計?)」

「Exactly. This watch does not require battery. As long as it doesn't break, you just need to shake it to start this watch every time you need.

(その通りです。この腕時計は電池が必要ありません。この腕時計が壊れない限り、振るだけでいつでも時計を動かすことができますよ。)」

「Hm, there is such a watch.

(ふむ、そのような時計があるのだな。)」

男は入れ物から時計を取り出すと外見を確認する。見た目はそんな高くなさそうだが、確かに電池入れらしきものはない。しかし時計は正確に時を刻んでいる。時間もすっかり香港の時間に合わせられているようだ。

「Ok, I understand. I'll keep it for you.

(分かった。貴女のためにこちらもお預かりしよう。)」

男は箱にそれを戻すと、扉を閉めて靴の音を時と共に小さくしていった。

「……That was nerve-wracking……」

(緊張した……)」

角谷はその音がかなり離れたのを聞いて自分の簡易ベッドに座り込んだ。

「あ、会長。小声なら日本語でも大丈夫じゃないですかね?」

「小声で話していたら何かを隠していると疑われる。黙っていた方がお得。」

「……OK。」

「God only knows……」

(神のみぞ知る……)」

試験といえど何だろうか？山かけ、カン、一夜漬け、捨て問、1週間前から真面目にやる奴、試験の間の休み時間に記憶系を出来るだけ頭に叩き込む奴、完徹と昼寝のルーティン、最終日の解放感、そして教科。とある漫画ではモンスターへのバトルと化しているが見た目はそんな激しいものではない、頭の中を除けば。

ただ一つ一つ自身の目の前の問題を記憶と論理で制覇するだけだ。その為の頭であり集中力である。

しかしそれを阻害するものがある。そういうものは抜こうとすればするほど根が深くなる。煩惱とまでは言わないが、受けるものからすればそうも思いたくなる。秋山優花里にとっては『不安』がそれに当たった。勉強不足による不安ではない。勉強なら単位を絶対に落とさないくらいには十分勉強した。これまでのテストの感触も悪くない。

だが、不安だ。確かにあの時エルヴィン殿は自身の強引な暴論だと仰った。けれどそうではない、のではないかという思いは抜けない。中華民国、その呼称が優花里の脳内を巡る。

それと確かにこの世界が我々のいた世界ではないならば、ネットが使えずテレビも映らず、何より日本からの補給が切れたこと、その理由が説明できる。確かに考えられない、あり得ない。しかし現在のこの長期間補給が来ないし寄港も出来ないということも本来ならば十分あり得ないはずのことなのだ。その疑念、万一本当だった時の疑念、それが優花里の煩惱となっていた。

しかしそれを断定出来るわけもない。この学園艦にいる限り外は確認しようがないからだ。そして船舶科との関わりもない優花里は外に出ようがない。しかも自分がそう思いたくないのなら尚更だ。間もなく試験の5分前を知らせるチャイムが鳴り、監督の先生がクラス分の問題と解答用紙を脇に抱えて教室に入ってくる。優花里も背筋を伸ばして次の教科に備える。確か次は数学のBである。

(頑張らなくては)

解決されない。そしてそれが確実に解決されるとしたら補給が来るか来ないか、残念ながらその時しかないだろう。すなわち今彼女に

出来るのはこれから目の前に渡される紙に答えを導く理論を並べる
ことだけである。そう考えるしか抑える手段はなかった。

「こちら香港総督のウィリアムです。」

老人は紳士から渡された受話器を手に取った。

「こちら大英帝国外務省。サミュエル外務大臣がお戻りになりました。
事情も既にお伝えしております。」

「おおそうか、それはありがたい。それでは電話を変わって頂けるか
ね？」

「はい。暫くお待ちください。」

若い男の声は途切れる。手元には用意させた写しと彼らの娘の一
人から預かった時計が置かれている。つけ心地も悪くなく、交渉次第
では貰ってしまおうかとも思える。が、外交と私情は別だ。ここは
はつきりとNOと伝えねばならない。

「……こちらもう直ぐ議会の反発で辞めさせられそうな外務大臣だ
が、何か用ですか？」

「ははは、こちらも後任の到着待ちですから大した差は有りませんよ。
しかしそちらも就任直後の条約で責められるとは不幸なことです
な。」

「ですが、我が国はあの条約を結ぶ必要がありました。イタリヤもフ
ランスも信用できません。そして国民は戦争も求めていません。つ
いこの前もロンドン塔の前で反戦デモが起こったばかりです。ドイ
ツはソ連との壁です。少しは力がなくては困ります。」

「……まあ、外交関係は私は口出す気はないですし、会議が1時間長引
いたことからそちらが忙しそうだということは分かりますので、早
速本題に入りましょうか。」

「はい。確かそちらに学園艦が寄港した、でしたか？」

「いえ、正しくはその使者が寄港したというところですよ。」

「そして要求書を提出したと。」

「はい。」

「内容を教えてくれますか？」

「分かりました。」

老人は写しに書かれた文言をそのまま読み上げていく。時たま向こうがこちらにもう一度読んでもらいたいと止めたが、概ね何も支障なく文面は伝えられた。聴き終わった後の向こうから返事はない。

「……」

「どうですか？ 私はこの香港の状況からしても即刻断るべきかと思いますが。」

「……1年物資を供給する代わりに3年間食糧の供給を受けられると。」

「その1年分の物資が桁違いです。それに向こうの提示してきた量で間に合う保証も向こうが言ってきた量供給してくれる保証も有りません。」

「敷地を考えればあり得なくはないですが、これは向こうの生産の様子を視察しないと読めないですね。」

「……」

「この文章、本当にこのまま提案してきたのですか？」

「はい。」

「としたら外交文書としてはやけに裏表がないですね。外交力はあまりない人物が書きましたな。ここなら即刻クビですね。」

「……」

「戦車道、か。我が国も前に導入したな。やはりソビエト、日本などには人材も劣るが、この前人材来たからなあ。」

「……」

「ですが、どこの国の学園艦でしょう？ オアレイなんて聞いたことも無いですが。そうだ、インドに行つて労働力となって貰うことを条件に交渉出来るかもしれませぬね。」

「……あの、すみません。」

「どうしました？」

「いえ、どうして先程の要求書に書かれていた学園艦の大きさに疑問を持たれないのか、と。」

「ああ、全長7.6 km、横幅1 kmというものですか。」

「はい。そんな学園艦をどこの国が造れるというのでしょうか。我が大

英帝国でもアメリカでさえも学園艦にそんな国力を割くことはできません。はなからの存在さえ疑うのが当然でしょう。」
「何故と言われましても……」

本土にそれを超える学園艦が来航しているんですよ。」

「……………へっ?」

その一言に対し老人からは腑抜けた声が飛び出す。

「優秀な人材と大量の紅茶を供給してくれまして、しかも自活することからボールドウィン首相も寄港に乗り気です。きっと私が辞職する頃には正式に寄港しているでしょう。」

「……………本当ですか。」

「しかもその中に戦車道の選手が居たそうで、寄港したカーディフでウェールズの戦車道チームと戦わせたところ、こちらがこてんぱんにやられたそうです。」

「……………はあ。それで、なんという名前なのです?」

「確か名前は……………」

「と言いましたかな？」

広西大洗奮闘記 24 事実もまた物語

「そちらもGirls High Schoolですか。」

「そうです。ですが男性人口が少ない訳ではないので、農業なども考慮しても交易で十分自活できるとのこと。こちらは既にジョン内務大臣とボールドウィン首相などが極秘ながら視察なさっております。」

「……それは内密な事のですか？」

「ええ、まだ決まってる事ですから。議会に出すのは正式に協定の内容が定まってからでしょう。その学園艦が存在しているのはどうやらアイルランドの東部の沖合のようなんです。」

「そこからカーディフまでよく来ましたな。」

「どうやらそこまでしか水深の都合上来れないようで、そこから輸送船に乗って使節が来たようです。正式に交易内容などが協定で決まり次第北へ迂回すると聞いてます。」

「……分かりました。それでこちらのオアレイの方の対処はいかがでしょうか？」

「……聖グロリアーナが交易で自給可能とはいえ物資提供などは考慮しなくてはならないと思います。今後も考えますとそちらは1年分物資の補給を受けていますから断ると思いますが、やはり首相他に相談した上でお返事します。」

「いつ頃になりますかね？」

「一人確認とるだけならばすぐに済むのですが、閣僚全員になると少なくとも明日には厳しいかと。」

「しかし明後日は日曜日、さらに難しいのではないですか？」

「向こうは回答期限を指定してないのでしょう？」

「まあ、そうですね。」

「ですからこちらの対応の確認が取れるまでお待ちいただきたいと思えます。」

「……分かりました。それとこのオアレイ学園艦がどこの国のものか分かりましたらご一報を。」

「はい。分かり次第その国に連絡を取り、ご連絡します。」

「……そう言えば、その聖グロリアーナの学園艦はこの国のものなのですか？」

「……彼女らが言うには日本とのことなのですが、日本政府に確認を取ったところそんな学園艦は存知ないとの一点張りです。確かに日本の現状を考えるにどう足掻いてもあの大きさの学園艦を作る価値はない上わざわざ日本から来る必要もないかと。」

「では何で日本なんていうのでしょうかねえ。」

「大国の威光、というものではないでしょうか？」

「……全くわかりません。何でそのようなものがあるのか。誰が、何の目的でその様なものを作り、そしてそれがそこを離れたのか。そもそもそんな巨大なものの燃料はどうなっているのでしょうか？」

「……そこに関しては向こうが視察を受け入れてくれないのです……実際分らない事も多いですが、受け入れる利益が大きいのも確かです。」

「……」

老人は一つ息を吐く。

「……事実は小説よりも奇なりとは、よく言ったものですね。」
「全く。」

もう、部屋の壁の色もそこに稀にある染みの形も窓の枠の若干の傾きも分かっている。ここに入れられて3日目が終わわり、4日目の朝の日差しがこの部屋に差し込んでいる。角谷はベッドの上で急に目が開き、身を起こした。まだ完全には部屋の下までは照らされておらず、黒っぽい染みはその目には映らない。部屋から出れるのは用をたす時のみ、その時は見知らぬ者たちに対してちゃんと外で待つてくれているだけ英国紳士なのだろう。しかしここまで待っているとなると、本土での議論にでもなっているのだろうか。外の様子は見えず、たまに船が響かせる汽笛が耳に入る程度だ。そして松阪先生は部屋には来ていない。もう一度身を倒し一休みすると、部屋の下まで日が差してきた。顔の前に出した手の光の当たる面が時間を追って広くなる。やっと時間が出来たと角谷はカバンから一冊の本を取り出

し、手元で眺め始めた。

「……あ、会長……えー……good morning。」

別のベッドで寝ていた有馬が身を起こした。

「……what do you read?」

「……French。」

「フレンチ?」

有馬は遠目ながらその本のカバーを覗こうとしたが、本屋で掛けられる紙のカバーを掛けられていて題が見えない。確か角谷会長、選挙に出馬した時に趣味に料理と書いてあったことを思い出し、有馬は一人で腕を組んでうなづいていた。きっとこの軟禁生活の少しの気晴らしなのだろうと。

(もし香港で補給を断られたら次はフランス領インドシナしかない。ポルトガル、フィリピンは国力から考えて受け入れてくれるとは思えない。だからフランスとの最初の関係は悪くしたくない。だからせめて挨拶程度は覚えて少しでも好感度を上げなくては……)

とまあ深いことまで思索していたことには気づかなかつた。その後片手で書を読みながらも片手でちよいと手をぶらぶらさせていることがその短髪娘には包丁を握ること、炒めること、その他諸々の料理の所作に見えてくるのだから人間の先入観は恐ろしいものである。

角谷が挨拶の文言を幾つかさらに頭に入れた頃、扉からノックが聞こえた。そう言えば朝食がまだである。

「Good morning。」

(おはようございます。)

「Good morning, Ann. Sorry for disturbing but I have some business for you。」

(おはよう。早速ですまないが君に用がある)

「What is it?」

(何ですか?)

「There is a man who wants a con

versation with you. Don't worry, the other guys will bring some breakfast to your members, so come with me.

(君と会話を交わしたい人がいる。他の者が君のメンバーに朝食を運ぶので、安心して私に付いてきてくれ。)

「... Okay, I understand.

(了解しました。)

角谷はやつと来たかのように返事以上にほおの角度を上げて腰掛けていたベッドから立ち上がり、戻した本をカバンに入れてそれを片手に扉の前に来た。

「Let's go.

(では行きましょうか。)

「Okay.

(わかった。)

入り口にいた紳士は角谷が出て来たのを確認して、先導しつつ出発した。残された二人は顔を見合わせたが、黙ったまま何もなく、その場で待つことにした。

角谷は外に案内された。その途中ですれ違う者たちが案内の男に敬礼をして道を避けていくことから、この男はそこそこの地位にある人物と見える。外には小さな船が一隻繫留されており、男は船の上で指で乗ることを指示する。角谷は港の岸壁から船に飛び移り、間も無くその小舟は少し波打った海に放たれた。兩岸には山と山がそびえ、その間を縫うように小船は進み、ちよつと進んだところで船は対岸に泊まった。あまり大きな港ではないが、先には車が一台用意されている。それに紳士の後に続いて乗り込むと、車は坂を登り、しばらくして白塗りの建物の玄関前に入った。この間紳士は無言で案内は全て身体言語だった。というより、来いと待ての二つしかない。運転手は敬礼して見送り、角谷も勝手は分からないが敬礼を返す。そのまま無言で案内した部屋の前で紳士は角谷を静止させるとノックの後男が出て来た。

「The governor ordered me to bring them here. Let us through.」

(香港総督の要請で連れてきた、通してくれ。)

「Roger. Please come inside, sir. (了解です。どうぞお入りください)」

男が扉を開くと角谷はその男に続いて部屋に足を踏み入れた。部屋の奥の机には少し歳をとった紳士が席に着き、その前に荘厳というほどではないが装飾のついた二つ椅子が並べられている。そしてその奥の方の椅子にはスーツの男がいた。

「Well, well. Nice to meet you Ms. Ann and... Mr. Matsuzaka」

(これはこれは。初めましてアンさん、そして……松阪先生。)

「……えっ?」

数度目に聞いたその声の主は先程まで角谷を案内していた男である。

「……私たちははこのスーツの男の人をマツと呼んでいます。この人は今まで本名を明かしていませんでしたが、今の一言で分かりました。そしてマツザカはどこから見ても日本人の名前です。それが英語の通訳として、そして交渉人としてここに来ているということは、あなた方が日本人だということです。」

「Wait until she sits, lieutenant.」

(待て、彼女が座ってからだ、中尉)

「Roger... Sir Peel.」

(承知しました...ピール卿)

日本人だと、ばれた? そうしたら、この時代の日英関係って、という不安が彼女の顔の表面の水滴と足に現れる。ちなみにこの部屋、ストープは付いていない。言われるままに角谷は指定された席に腰掛けた。

「どうも、私はロイヤルネイビー中尉のアーサーと言います。以前仕事の関係で日本に住んでいたことがあります、この通り日本語を話

することができます。」

「……」

「……黙秘を続けてくれても構いませんが、こちらとしてはそちらにある交渉を持ちかけたのです。」

「……Negotiation?」

「……交渉、ですか?」

「……とその前に、あなた方は日本人で、オアレイは日本の学園艦の扱いですよ?それを確認しておきたいのですが。」

「……」

「……知波単……聖グロリアーナ……」

「……」

無言だが、その身体が一瞬震えたのを男は見逃さなかった。

「……その様子だとお二つともご存知のようですね。そして先程、交渉という言葉を理解なさった。私はただ用があると行って呼んだだけなのに。」

「………流石、大英帝国の情報機関は素晴らしいですね。」

「!か、角谷くん!」

松阪は手を伸ばして制しようとするが、構わず話しは繋がる。

「そうです。私たちは日本人で、そして大洗は日本の学園艦です。私は角谷杏、こちらの先生は松阪忠良といいます。」

「……アンズとタダヨシですか。こちらこそよろしくお願いします……あなた方は聖グロリアーナ女学院をご存知ですか?」

「聖グロリアーナがどうかなさったのですか?」

「ただいま本土にて支援するかどうか交渉中です。知波単も聖グロリアーナもご存知となると、あなた方はやはり同じ『日本』という国家から来たようですね。」

「はい。」

「ですが、諸々の視点から考察しまして日本があののような学園艦を幾つも作り、運用できるとはとても思えません。そして、日本政府の外務省は知波単を除く学園艦との関与を否定している。勿論あなた方も。」

「……それで、交渉の内容とは？」

「取引をしましょう。こちらとしては三つ。まずあなた方は何者なのか、それを詳しく教えていただきたい。そしてもう一つはどうやって全長7・8kmもの空母型の学園艦が航行できているのか。とても石油とは思えません。ましてや日本なら。即ちあなた方は相当なエネルギーを利用できているということ。それを教えていただきたい。最後に戦車道のためにあなた方が保有している戦車を売却していただきたい。」

「それで、そちらの対価は？」

「残念ながら我々には聖グロリアーナとあなた方を共に長期的に受け入れる余力はありません。その代わりに今現在香港にある物資の一部の提供と今後の交渉のための各国への紹介状を書きましょう。そちらの方が話もスムーズに進むと思いますよ。」

「……物資の量は？」

「残念ながらあなた方の要求量の10分の1程度しか出せません。ここは狭い上に人も多く水もないです。余裕があるわけではないのです。」

「……どうしても長期的には受け入れてはもらえないと。」

「どちらか一方なら聖グロリアーナの方が条件が良いですから。」

角谷は膝の上に手を乗せ頭を捻った。やはり私立のお嬢様学園艦の聖グロリアーナ相手では支援量は敵わない。要するに寿命を一月強伸ばすか、ここを捨てるか、の二択である。だがここで物資を受け取ったら学園艦の統制体制は終わる。再度統制体制の導入などとなったら学園艦は暴動や反乱でまみれるだろう。かといってこの紹介状は捨てがたい。場合によっては米仏への斡旋も狙えるかもしれない。そこで押すしかない。松阪は隣で角谷を見守る。口を出す気配はない。

「……物資の提供は長期的でない限り御断りします。その代わりに我々に関する情報をそちらにお伝えして、そして後ほど要求書に記した鉄鋼の一部を譲渡する代わりに、アメリカ、フランスとの仲介をしていただけないでしょうか？」

「アメリカとフランスですか？それはまた何故？」

「イギリスが無理でしたらその2カ国に支援を求めます。幸いその2国の拠点のフランス領インドシナとフィリピンがここから遠くないところにありますから、交渉の価値はあるかと。そしてそこに貴国の斡旋があれば交渉成立の可能性は高まります。」

「それで、我が国の利益は聖グロリアーナが提供を拒む『あなた方が何者か』と鉄鋼を、」

「500t程提供しましょう。」

「そしてあなた方が米仏に利を与えればそれは斡旋した我が国への信用にも繋がると……」

Sir Peel.

(ピール卿。)

「What is it, lieutenant？」

(何だね？アーサー中尉。)

「Their request is for you to act as a mediator in its negotiation with America and France. In return they will provide with their information, steel and iron. This is so that the negotiation will go smoothly and by doing this your country will benefit.」

(彼らは情報提供と鉄鋼の提供を条件としてあなたにアメリカとフランスへの交渉の斡旋を求めています。今後の交渉をより円滑に進めるためであり、彼らが成功すればそれを斡旋したあなたの貴国にも利益があるとのこと。)

「Certainly, in this case, if we don't accept their request, the decision will be left up to me. But if their request is med

iation then we need the permission from the Ministry of Foreign Affairs.

(確か今回のことは彼らを受け入れさえしなければ私に決定が委ねられていたはずだ。しかし斡旋とまでなると外務省の許可がいるだろう。)」

「True.

(そうですね。)」

「If there is not enough time, can you ask them if just my personal letter of introduction would be enough?」

(時間に問題があるならば私個人による紹介状でも構わないかと聞いてくれないか?)」

「……そちらの保有している物資に余裕があるなら外務省に頼んでもますが、我々に交渉を持ちかけている時点でそこまでのではないのでしょうか。そこで香港総督の紹介状で構わないかと仰っています。」

「香港総督サー||ピールによる紹介状ですか。そこで私たちの身分を危険のないものだど保障するとの記載とその地位を保障する印とサインがあれば構いません。」

「……では、あなた方に関する情報をこちらに教えていただき、鉄鋼を譲渡してもらう代わりに、こちらからは香港総督からの紹介状をお渡しすると。」

「お願いします。」

「それでは、オアレイと聖グロリアーナに関する情報を伝えてください。」

「……. I see. I was guessing that you weren't from this world but now, it makes sense that you are from the future.

(……なるほど。我々の知らない世界から来たとは思っていたが、未

来たったか。」

「Yes. We, Oarai, St. Gloriana and Chihatana came from Japan about 80 years from now.

(はい。私たち大洗、聖グロリアーナ、そして知波単は今から80年後の日本から来ました。)」

「In the future, is there anything that makes traveling to the past possible?

(未来には過去に時間旅行が可能なようなものまで出来ているのかな?)」

「Yes. It's closed to the public but it seems to exist.

(はい。公にはされていませんが存在するようです。)」

「I don't know why St. Gloriana is still keeping it a secret but anyway, I understand you're backround and why you came here. It's hard to believe it but this explains the situation currently occurring. I have no choice but to believe.

(何故聖グロリアーナがこのことに関して沈黙を続けているかはともかく、あなた方がここにきた背景と理由は分かった。俄かには信じられませんが、大洗、聖グロリアーナそして知波単の今の状況に説明が付く。私も信じざるをえない)」

老人は首を横に振るが、拒否の表情ではない。

「Thank you for your understanding.

(ご理解いただき感謝します。)」

「Okay. I will verify the information

ation from St. Gloriana through
the Cardiff expatriates. Pro-
bably the confirmation will en-
d by tomorrow so please wait
until then. To make up for keep-
ing you under arrest, I will ta-
ke you to the hotel.

(ではこのことに関して聖グロリアーナからカーディフ駐在員を通し
て確認を取ります。明日までには確認が完了すると思うので、それま
でお待ちください。それと今まで軟禁状態だったお詫びと言つては
何ですが、ホテルへとお連れします。)

「アーサーといった男はそう言つて近くの電話を手を取つた。

「No, it's okay. We were the one
who came here from nowhere, so
we had no choice. Don't worry
about it.

(いえ、大丈夫です。私たちが勝手に来たのですからあの状況は仕方
ないです。お気になさらず。)

「……But……」

(……そうは言いますが……)

「Above all, I'm sorry for my mem-
bers who are still under arrest
in the Navy room, so just put
me back in that room without
hesitance.

(何より海軍の部屋に残してきた二人に申し訳ありません。私も差別
なくそこに戻してください。)

角谷は席を立つ素振りを見せてまで見を前に倒しつつそれを制す
る。

「Lieutenant Arthur. Since she p-
rovided the information we wan-

ted and now she is strongly demanding for the request, why don't we accept it?

(アーサー中尉。彼女は私達の要求を飲み、情報を伝えてもらった。彼女がここまで言うんだ、ならば私達も彼女の要求を受け入れるべきではないか?)

「... Understand. Instead, we will arrange dinner.

(...分かりました。その代わり夕食はこちらで手配しましょう。)

「Thank you.

(ありがとうございます。)

「Alright then, as soon as we get the confirmation tomorrow, we will contact you. Then please bring the Letter of introduction. I'll accompany you when returning to the ship, also.

(それでは明日確認が取れ次第そちらにご連絡しますので、そしたら紹介状をお持ちください。帰りも私が同行しましょう。)

「Fortunately, everyone would be relieved that I don't have to be using my sluggish English.

(なら慣れない英語を使わなくも大丈夫ですね。私も他の人も安心します。)

「to hear that. There is just one joy the atmosphere of Hong Kong.

(それは良かった。一日しかないがせめてこの香港の空気を楽しんで

くれ。）」

「Yeah, though I'll be staying in side the room, I'm hoping to enjoy till the end.

(ええ、部屋の中からですが最後まで楽しませてもらいます。）」

「Lieutenant Arthur, take them here they should be.

(アーサー中尉、彼らを送って行ってくれ。)

「Yes sir. ではアンズとタダヨシ、私についてきてください。明日必要なものは渡します。」

「送り迎えありがとうございます。アーサーさん。」

Hoping your country and our friendship will last forever.

(貴国と我々の友好が末長く続かんことを。)

角谷は男と老人に深く頭を下げた後、松阪とともに部屋を去った。部屋に残された老人は後ろで立っていた秘書を振り返って呼ぶ。

「君、印を用意してくれないかね？ 私が歴とした大英帝国の一員であると示すものを。」

広西大洗奮闘記 25 主のご加護を

「美味しい。」

「こんな物しかなくて済みませんが。」

「いや、ゴミ箱にもまともな飯が入らないからな。腹に入るものは味に関わらず食べてきた。だから味に拘れる今に少し喜びを覚えているんだ。」

また少し栗の実をくちばしで拾い口に入れる。

「美味かった。」

「それで、この4日で分かったことは何ですか？」

生徒会長室の開かれた風からは風が少し吹き込む。そして、空は曇っているがその分子レベルの隙間からさえ赤い光を通そうと太陽は努力する。

「まずはこの時期に護身具の訓練を夜間に行っていること。」

「それは向こうにその権利が与えられたのがちよつと前ですから、鍛錬でしょう。」

「それと、ここから先は聞かれると面倒くさい。近くに誰もいないことを確かめてくれ。」

華は窓を離れ扉の方の鍵を確認する。外からはパソコンのキーボードを叩く音と普通の声での会話が飛び交っている。華が窓に戻ると灰色の鳥も窓枠に戻った。

「まずは風紀委員の中で『胡瓜』と名付けられた計画があるらしい。内容には分からん。」

「胡瓜？」

「心当たりがあるのか？」

「いえ、風紀委員と胡瓜の連想がただけです。」

「……顔を見る限りあまりいい感じの連想ではなさそうだな。」

「はあ……それと他には？」

「……生徒会の情報は一部ながら掴まれているぞ。」

「！ど、どこまで！」

「……中華民国と交渉したことは確実だろう。他は分からん。」

「それが掴まれているという事は……事は思ったよりも重大みたいですね。」

「まあ、私は協力はするが味方をするとは言っていない。無論向こうに漏らす気はさらさら無いがな。」

「それは何故?」

「向こうの雰囲気を見てる限りエサねだったら追い返されそうだから。」

「……そうですか。その他には?」

「夜間も眺めてみたが、人員は削減してはいるものの見回りを怠っているなどという事はないようだ。」

「……分かりました。今後は『胡瓜』の動向とこちらのことをどこまでつかんでいるか、の2点を重点的にお願いします。」

「了解。道端のどんぐりでも拾いながらぼちぼち集めるよ。」

「ありがとうございます。」

「すまん、水くれるか?」

華は近場に用意しておいたコップをくちばししての前に差し出し、それを鳥は飲むと大空に帰っていった。

「……中華民国に行ったことを風紀委員は知っている。それは即ちこの現状を風紀委員が把握している可能性がある、と。逆にこちらが中華民国との交渉に失敗したことも知られている。」

鳥の色と紛れる灰色の空を眺めながら五十鈴は考える。会長は芽は全て摘まなければならぬと仰った。

「……そもそも、何故風紀委員がこのような事を知る必要があるのでしょうか。」

そう、そこなのだ。今までも調査をしてこちらの動向を掴もうとしていた節があったが、それを行う理由があるならば反生徒会の者たちの動きをそれから推察する為か、もしくは

「生徒会に対抗する動きを起す為……」

それは今までも何度かシミュレートした動きだが、それが現実となる可能性が彼女の中では跳ね上がった。これらを問題なく一番早く解決できるのは無論交渉の成立であるが、それを左右する事は彼女に

はできない。

度々言うが本当に彼女たち生徒会の者に出来るのは治安維持、即ち相手への一端の信頼を守ることだけなのだ。そして、その為に彼女たちは自身への批判を厭わないと決めたのだ。

「……流石に無策という訳にはいきませぬね、この母校大洗女子学園の為に。」

華が窓を閉めて腕時計の確認が終わった頃、隣の部屋にぞろぞろと人が足を何本も踏み入れる音がする。そしてその中の2つがこの生徒会長室に入ってきた。

「午後の配給終わりました。」

「お疲れ様です、小山先輩。それでそろそろ月を跨ぎますが、皆さんの様子は如何ですか？」

「……学生の皆さんの話し声が少なかったことくらいですか。」

「学園艦の活気が失われていると。」

「そうですね。しかし食糧の備蓄も半分を切ってますし、1日でも長くこの学園艦を残す為には仕方ないと言える程度かと思えます。そう言えば、窓際で何をしてらっしゃったのですか？」

小山と目を合わせていた華は窓の空の方に視線を戻す。

「……天気が悪いですね。」

「確かに今夜は一雨来そうですね。未だ降ってないのが不思議なくらいです。でもその前に配給が済んだのなら何よりです。」

「それと、前に阪口さんが連れてきた鳥の言ったことが正しいなら、この世界には、あの時、助けてくださった皆さんがいらっしゃるんですよ。」

「……ええ。」

「それで、言っていたことが正しいなら、彼らは間接的ながら私たちが呼んだことになるのではないかと……」

「そんなことはありません！」

「えっ！」

華が振り返ると両手に拳を握りしめた小山が立っていた。

「貴女は……あの時、助けに来てくださった皆さんの行為を否定する

のですか!」

「そうではありません。私たちがこの様な結果を招いたかもしれないと言っているんです。皆さんは仲間を守る心、みほさんが守ろうとした戦車道の精神を持って私たちの学園艦を助けてくださいました。でも、私たちは皆さんがこうなることを助けられなかった……」

「もしかしたら、他の皆さんも知波単のように補給を受けられて助かっているかもしれません。しかし、今この時に私達のように、場合によっては私たちよりも悲惨な環境でこの世界にいらつしやるかもしれないません。そう思うと、心が捻じ切れる気がするんです。」

「……まだ、信じるには早いです。知波単だけが来ている可能性はまだあります。そしてあれを本当に信じるなら、私たちは……」

「帰れないよりは幾分マシということになりますね。」

「帰れないよりは、ですけれどね。」

「だがからこそ、考え得る最悪の事態ではないから、私はあの鳥を信じているんです。」

雨だった。風も強い。コンクリートの灰色の棧橋、何時もは雲を奮い立たせる様な警笛が鳴らされるべきである、そんな場所でアーサーは1枚しつかりとした封筒に包まれたものを角谷に差し出した。

「こちらが香港総督、ウィリアム ピール卿からのあなた方の紹介状です。」

「ありがとうございます。」

角谷は松阪に傘を預けて両手で受け取ると、傘の中で中身を少し確認し、それを元どおり戻した。

「この度はこの様な厚遇を受けられたことに感謝します。」

「その代わりに得られた情報は我が国の今後の運営に欠かせないものになりました。こちらこそそちらの要望が受け入れられなくて申し訳ないです。」

「いえ、その代わりに私たちの盟友、聖グロリアーナ女学院が助かるな

らば、嬉しい限りです。」

「それにしても、本当に出航なさるのですか？時間をおいた方がよろしいのではないですか？」

アーサーは怪訝な顔で空を眺める。頭の帽子を風で飛ばされない様に手はそれを握っている。

「いえ、時間が惜しいのです。たとえ雨風が吹こうとも。一刻も早く次に向けて動き学園艦の住人に安心を与えなくてはなりません。」

「……アンズ、貴女はどうしてその学園艦を守ろうとしているのです？」

「……急にどうなさいました？」

「今回の我々はあなた方をできるだけ紳士的に扱うように総督から命令を受けたためそのように扱いました。しかしこれから交渉に向かわれる場所はそういうところではないはずですよ。」

「そうですね。中華民国では背中に銃を突きつけられながら護送されましたし、外と中に一人ずつ監視員がいましたし。」

「それが普通です。今回もあなた方の質の高い格好がなければこちらも同様な措置を取り得たでしょう。そこまでして何故……」

「私は5年半、大洗学園艦で過ごしてきました。そして皆さんには話さなかったことですが、私は一度、いや考えようによつては2度この学園艦を守れた、はずだった。私は元々志望学生数が少なくなっていた学園を守ることを公約にして学園艦のトップに立ったから、私はこの愛する学園を守るんです。」

日本には3度目の正直というものと2度あることは3度あるという2つのことわざがあるのですが、私は前者を信じたいのです。」

「……詳しくは知りませんが、余程大切なものなのでしょうね。ところでその大切なものがトップである自分がこのように交渉に来ている時に乗っ取られるということは考えないのですか？」

「考えません。私が運営に残してきたのは、皆信頼できる人だけですから。」

「しかし……」

「能力だけならば、学園内に残した運営の幹部にも勝る人間がいる

でしょう。しかし能力だけの人間は、いずれ人の人望を集め過ぎる。そしてその人は、味方とともに私に反逆する。平時の民主国家はそれで構わないかもしれませんが、今も前も非常時、そうも言っていられませんか。

だから、信頼できる、学園廃校の瀬戸際を一緒に守れた時の仲間を私が居ない間の運営として残したんです。」

「海軍の同じ艦で戦った仲間のようなものですか。」

「よく分かりませんが、近いと思います。」

角谷と松阪がアーサーと話し込んだところに無邪気な声が飛び込む。

「会長、出航準備整いましたよ。」

「おー、ありがとね。」

そうは答えたが、こう話している間にも雨風は激しさを増す。全く、気持ちよく話くらいさせて貰いたいものだ。

「それでは、そろそろ。鉄鋼は生存の証明にお送りしましょう。」

「ええ、アンズ。タダヨシとアンズの守る学園艦に主のご加護を。」

握手を済ませた2人に十字を切って、背中を見送る。うるさい梯子を足で押さえて船に乗り込み、角谷が封筒を抱えて中に駆け込んだ後、松阪が梯子を取り外した。一隻の輸送船が嵐へ身を投じたのはそれから間もなくのことである。

「Lieutenant。」

(中尉)。

その船が遠く離れた頃に部下の男が敬礼して後ろで立っている。

「What is it?」

(如何した?)」

「The Army, Navy and Air force, all exercises has been cancelled, sir。」

(本日の訓練は陸軍、海軍、空軍ともに中止することです。)

「……OK。」

(……わかった。)

「Please return as soon as possible, sir.

(閣下も至急お戻りください。)

確かにこの嵐では訓練も何もないだろう。

「もう少し判断が早ければ良かったのかもしれないですね。」

そう男は呟いて、部下に連れられて頭の帽子を抑えながら帰っていった。棧橋は今日は少し多めに削られそうである。

「しかし、未確定ながらアメリカでも同様の学園艦が確認されたとの情報があります。フランスは政権がコロコロ変わりますから決定が良くも悪くも覆りやすいです。果たして彼女らは何処へ向かうのでしょうか?」

胡瓜、この草のルーツはインドのヒマラヤ山麓が原産と言われている。そして前漢の時代に武帝によって派遣された張騫がシルクロードを通じて西から種を持ち帰ったとも言われている。今回このプランにこの実の名を冠したことに關する理由としては、主に二つある。一つにはこの胡瓜という実の現在の日本での扱われ方に理由がある。普段食べているあの青い胡瓜、あれは熟していない。熟すると黄色くなるそうだ。

我々は嘗ては黄色かったが、昨今は生徒会の下で青いままいることを強いられた。確かに学園艦の存続という大義があった期間があったことは認める。そしてその時はこちらも出来る限りの協力をした。

しかし、今はその大義を協力しているこちらに正式に、完全に知らせない。我々はこの自らで得た情報から判断することのできた非常時に対して指を咥えて待っていることは出来ない。我々は黄色くなり、この有効な手段を打てていない生徒会から放たれるべきである。

二つ目には生徒会、戦車道履修者などあの時我ら風紀委員の幹部と共に廃校跡で待機させられたものたちにとって我々と胡瓜から連想されるものは彼らにとっては我々の愚劣性を示してしまうものだからである。逆に言えば愚劣性を示すものをプランに冠することで相

手は仮にこれを聞いても油断するだろう。

確かに日本政府は、学園艦教育局は我ら風紀委員一人一人の存立条件である風紀維持を学園の廃止という形で剥奪しようとした。そして今回、再び大洗女子学園を廃校に追い込むために補給を切ったと思われる。だが、それでも、我々は、学園艦の住人は皆日本の民であり、日本の学園艦の民である。

我々は和解すべきなのだ。嘗ての互いの行動を許し、この大洗女子学園を日本の学園艦であり続けさせることは、学園艦の民の許可なしに変えていいものではないのだ。それを生徒会は真意を問わずに変えようとしていることは火を見るよりも明らか。法は、ルールは正義の為にある。それが正義を成さないならば、破ることも辞さない姿勢であるべきだ。だからこそ、正義を以ってこの学園艦を日本に連れ戻すべきなのである、手遅れとなってしまう前に。

その為に、動くことのできる我々風紀委員が動かなければならないのである。他国の者としての差別、偏見、妬み、無辜の学園艦の民がそういう目に合わず、我らが他国の者たちに迷惑をかける存在ではないようにするべきなのだ。風紀委員の諸君！前を向こう！準備を整えよう！生徒会の誤っている道を正す為に！

抑えめの拍手がその大教室に鳴った。壇上に立っていたゴモヨは額の汗を拭って台を降りた。

「どうだった。映画に出てくる演説っぽくしてみたんだけど。」

「……はー、話慣れてない言葉を使うのは疲れるわよ。」

「でもお陰でみんなの士気は上がったみたいだよ。」

「それは何よりね。じゃあ、明日も最後の試験があるし、仕事のある人以外は返しておいて。」

「分かった。あとハマコ、カナン、エドム、ヤボクは残しとくよ。」

「第一段階の用意ね。」

頷いた。パゾ美は次に壇上に上がり、マイクに手を伸ばす。

「それでは風紀委員臨時全体集会は終わります。仕事のある方は各自の業務へ、他の人は試験に備えてください。では高校治安維持担当長カナン、中学治安維持担当長エドム、学園艦治安担当長ハマコ、学園

艦店舗運営補佐担当長ヤボクはこの後ちよつと残って、他は解散してください。」

部屋の中にいた数多の風紀委員は風紀委員らしく静かに部屋を立ち去って行った。部屋にはゴモヨ、パゾ美、呼ばれた4人、そして外で立っていた警備担当が戻ってきた。

「それで、どうだった？」

「はい。外で監視していましたが、特に変な動きを見せた者は居ませんでした。盗聴関係に關しましても問題は無さそうです。」

「杞憂で済んでよかったわ。あなたたちも戻りなさい。」

「はい。」

ハマコの指示に従って学園艦治安担当の2人は帰っていった。

「それにしても委員長、先ほどは凄かったつすね。」

「ヤボク、その口調で褒めても何も出ないわよ。」

「それで、今回我々が残されたのは？」

「一応小声で言うわよ。……胡瓜計画第一段階を始動するわ。最終計画は生徒会に与えられた期限が尽きるとき。カナン、手配は済んでるわね？」

「ええ。クラスの奴が張っています。明日の放課後に集まることまで揃めています。」

「ハマコ、武装の準備は。」

「今日から時間を拡大出来ればその日には一定の練度になるでしょう。」

「では……よりカナンのところが動きなさい。それが全ての引き金になるわ。我ら大洗女子学園風紀委員会の歴代最大の計画よ。失敗、漏洩は許されないわ。皆その日を待って、その日まで耐えて、その日までに、いやそれからも気を引き締めて掛かりなさい。」

「はい。」

「その日から我々が学園艦に正義と平穏を取り戻すのだから。」

ゴモヨが円になって話していたその中心に彼女の右手を置く。それに合わせて周りの者も手をその上に乗せる。その場にいた全ての者の手が重なったとき、ゴモヨは声を張り上げた。

「風紀委員、フアイトー！」
「オー！」

「ぎゃー！」

「船は大丈夫？」

「駄目です！この高波でうまく舵が効きません！」

「沈没だけは避けて！岸壁と海底には注意を！」

「取り敢えず停泊できる場所を。」

「この船、北へ流されてます！」

「だから今日は止めとこうと言ったんですよ。」

「それは聞いたけどどこまでとは聞いてない。」

「戻れないのか？」

「反転なんてさらに無理です！無線関係も全然通じません！」

「しずまないようにしてくれええ。」

「流石に……これは酔いそう……」

「どっか港ー！」

「神様仏様何でもいいからヘルプ！」

天候は船にとって欠かせないものである。そうソクラテスも言っている。間接的にはあるが。

定期試験最終日、喜ばしいものである。それを示すかのように空には昨日の跡はちつとも残っていない。たとえその試験が赤点をギリギリで何とか全教科回避したんじゃないかと若干の疑いと共に思う時でさえ。最後の2教科3教科、それがあと一つになればやる気が上がり、それが尽きればイヤツホウと叫びたくなるのが勉強嫌いの常である。そうならないのは勉強が趣味みたいな人ぐらいだろう。

この磯辺典子もイヤツホウと叫びたくなる方の部類であつた。ところがそうは叫ばない。彼女にはやると決めていることがあつた。そうと決まれば早速動き出すのみ。

試験後の終礼前には素早く服を着替え、礼が終わつたとともに体育館へ一直線に進む。一番乗りして早速倉庫からネットとボールを持ち運ぶ。それを立てている間に他の3人の仲間も合流しボールもポールもネットも準備が整えられ、10分後には完全にバレーコートとボールの用意が整えられていた。そして片方のコートの中心に集まつた4人は手を重ねる。

「何時も心にバレーボールを忘れるな！」

音頭をとるのはキャプテンの磯辺だ。

「はいっ！」

「大洗バレー部！ファイトー！」

「オー！」

これを合図にアップが開始される。30週コートの周りを走つたあと、20往復多種の動作を交えつつダッシュを繰り返す。普通の人間ならこれだけでも息が上がるが、ここにいるバレー部員4人はさらに声を出しまくっていても至って元気である。パス練習では磯辺の相方の一年は既に向こうで決めているらしく、向かい合つてのパスが始まつた。

これまた4人で体育館中が彼女らの声に染まるほどの大声である。そして二つのボールは互いの間をゆつくりと、そして徐々に速くなつていく。間も無くボールを叩きつける激しい音が聞こえ、それが途切

れると休む間も無く次である。それぞれ二人ずつコートに入り、目まぐるしい速さでボールがそこを行き来する。スパイクまで交えていることが彼女らが只者ではないことをありありと示している。その激しさがピークに達しようとしていた頃、体育館の入り口に一人の少女が姿を見せた。その時だった。

「練習終わり！片付け！」

磯辺の大声はボールの浮遊を止め、各人すぐさま片付けに移る。ボール、ボール、ネットなどの品はそれぞれあつという間に片付けられ、5分後にはまつさらな体育館に別の部活の者たちがぞろぞろと入っていった。

「やっぱり時間的に微妙ですよ、キャプテン。」

荷物を片手に口を尖らせるのは佐々木だ。

「そう言うな。元々朝練前だけだったのがこうしてちよつとした時間でも使わしてくれるように生徒会がしてくれたんだ。」

「でもその分以上戦車道の練習が減ってしまいましたから、嬉しいとは言いい切れませんね。」

「本当にな。早く思いつきり戦車道やりたいけどなあ。」

「それよりもお腹すきましたし、食堂行きませんか？そろそろ並ぶの空いてきていると思いますし。」

「そうだな。行くか。今日の昼は何だったかな？」

「確か、和風野菜炒めです。」

「そんなのばっかりだよね。」

「まあ、備蓄してあるものの多くが缶詰と真空パックの野菜って聞いたことあるから。」

「それにしても……やっぱり配給って少なくないですか？一日一食半くらいしかない気がするんですけど。」

「学園艦にいる人皆同量なんだから文句は言えないだろう。」

「ですが、もう朝の練習の後でもお腹すいちやって……」

「もうちよつと何とかありませんかあ……早く補給船来ないかなあ……」

「これは高一の3人共通の不満のようだ。」

「よく噛んで食べる、あとは根性だ！」

「……はいつ、キャプテン！」

何時もの返事だが、やはりちよつと覇気がない。

「配給食べて食休みしたら、筋トレして走るぞ！」

「おー。」

確かに食堂の列は最近にしては短めだった。磯辺、近藤、佐々木、河西の4人はそれぞれ昼食分の乗ったトレーを受け取る。そして丁度正方形に近い形をした机の辺に二人ずつ陣取る。挨拶とともに彼女らは箸をとった。

「……まあ、さつきはああ言ったが、実際どうやって空腹凌いでる？」

「私は水を飲んでますね。あとは家にある備蓄をちまちま食い潰しながら。」

「私もそんなところだったんですが、ついこないだ備蓄を食べ尽くしちゃって……」

「うわあ……それはキツイ……」

「それにしても皆さんよくあの量で大丈夫ですよ。特に五十鈴先輩とか。」

「二食分はあるからじゃない。そう言えば五十鈴先輩、前の練習には参加してなかったよね。」

「確か生徒会に協力してて授業も出ずに仕事してるって聞いたな。」

「それはまた大変な仕事を請け負いましたね。統制体制って学園艦内の全ての物流を管理するんですよ。それに関わるって……」

「流石だな。五十鈴さんらしいというか何というか、集中したらとんでもないこと出来そうだしな。」

「そう言えばふと思ったんですけど、まだこの食堂で昼食とっている人いますよね。」

「まあ、席の3割は埋まっているかな？」

「何時もなら、この時間こちら辺は風紀委員が見回りしているのに、今日はその人数がやけに少なくありません？」

晴れた。頭の上は。

「……大丈夫ですか？」

「……うん、多分。」

「……一応、船は動いているな。」

「……まあ。」

しかしこの輸送船の中はどよんとした空気が漂っている。中の4人はうつ伏せなり仰向けなどの状況で床に転がっている。

「それで、船の動きはどうなの？」

「流石にあの嵐に揉まれましたから良くないです。港に入って整備したいです。」

「港ね……香港戻る？」

「ですが西に出た後かなり北に流されましたから、寧ろそっちの方が近いのではないかと。」

「北だと中華民国だな。」

「中華民国か……一応面識はあるから、金さえ何とかなれば多分泊めさせはくれると思うけど……」

「それで更に貰ったその紹介状が有るから交渉くらいは出来るかと思うぞ。」

「正直ポルトガルは頼りになりませんし、この船は中華民国で修理して、学園艦に戻ってインドシナ経由でフランスと交渉してみましよう。」

「分かりました。そしたら今のこの船の動く限りで北を目指します。ですがそこそこの改修設備は欲しいんですが……」

「この船には載せてないのか？」

「停泊させながらの作業の方が早いし正確だしやり易いですよ。」

「うーん、ここら辺だと広州だろうか？」

「じゃ、そこで。」

這うように船舶科の二人は操縦桿の場所に戻り、ソナーのスイッチを入れた。

「……そう言えば角谷くん。」

「何でしょう？」

「前に香港総督の方の前で話したことについてなんだが、どうして動

力に關しては言葉を濁し続けたんだ？歴史については少し伝えたにも関わらずだ。」

「……ちよつと先までならパラレルワールドとはいえど大幅に歴史が変わる事は無いだろうということと……」

「と？」

「聖グロリアーナが売ることのできる情報を残しておきたかつたんです。多分お嬢様学校で資金があるといっても、それがここで使えるとは限りませんから。」

「なるほどな。しかしイギリスというアメリカに次ぐ世界有数の国家からも物資が貰えないとなると、かなり選択肢は絞られたみたいだな。」

「我々が使える範囲だとフランス、フィリピンだけですな。しかも既に学園艦から渡せる物資は尽きつつあります。あと食糧さえ一月保てば御の字でしょう。」

「かなり危険な博打に入りつつあると思うぞ。確か他に7隻の学園艦がこの世界にいるんだらう？」

「人間き、というより鳥聞きですから完全に信用とまではいきませんが、多分大きな嘘はついていないと思います。」

角谷も松阪も身を起こして近くの椅子に腰かける。見ると相互の着ている服がシワにまみれている。

「……ちよつと服を変えてきます。」

「私もそうしよう。私は向こうの倉庫で着替えるから、角谷くんはこつちの方でいいか？」

「分かりました。」

「後君たちは？」

松阪は船舶科の二人の方を向く。

「私たちは大丈夫です。船はこちらでやっておきますのでごゆっくり。」

「そうか、なら。」

松阪に続いて角谷もそれぞれの荷物を持って部屋を出た。有馬と永野は立ち上がりそれぞれ無線と操縦桿を握っている。

「……服の変えって持ってる？」

「部屋になら一着。」

「やっぱり三着以上制服の上下持っている人って贅沢だよな。」

操縦桿を片手で持ちながら胸元を掴んで中に空気を入れぱたぱたと動かした。

「……この仕事、ロクなもんじゃないね。」

学園艦甲板中央部のアパートの一つ、5階建ての一見どこにもある普通のアパートから少し離れたところに1両の九五式小型乗用車が停車した。近くの駐車場に入ったそれは間もなくエンジンを停止した。

「……こちら監視担当。対象の3人は既に部屋に入っていることを確認しました。どうぞ。」

「……こちら先遣隊、こちらも入室を確認。準備は整っています。どうぞ。」

トラックからはぞろぞろと同じようなおかつぱ頭の集団が下車する。そしてその者たちは足音を控えてゆっくりアパートの階段を登り3階を目前に控えた場所に纏まる。こういう時に静かにするのはどこでも不文律だろう。

「こちら担当長、了解。突入隊の配備完了まで待機しなさい。」

「こちら監視担当。内部からの情報で確実に例の件に関する話になっている模様。どうぞ。」

「突入隊、準備はどう？」

「こちら突入隊、待機隊それぞれ所定の位置に着きました。」

「了解。」

「何時でも行けます。どうぞ。」

その向かいの建物の一室で双眼鏡を構えていたカナンは差していたイヤホンの一つと目元から双眼鏡を外した。

「委員長。」

「カナン、大丈夫なのね。」

椅子に座っているゴモヨは前のめりで膝に肘をつけて手に顎を乗

せて待つ。

「ええ、前もって狙いは付けていましたから、間違いありません。突入隊も夜間訓練で優秀な者をハマコから借りられましたから問題ないと思います。」

「……」

この一声は運動会の銃声より、朝になるアラームよりはるかに重いスタートだ。ゴモヨは口元で指を組んで息を吐き出す。その後少し音を立てて息を吸い込んだ。

「……やりなさい、カナン。」

「……第一段階作戦、開始しなさい。」

それを聞いた先遣隊の一人が相手に対して手を挙げる。それに頷いた相手はその表札を確認して、少し震える指でその高田と書かれた表札の脇の縦筋のみが目立つインターホンを鳴らす。二度りピートされるそれは受け答えの為に一人の少女を呼び出した。

「はい?。」

「すみません、こちら生徒会の配給担当の者ですが、明後日から急遽この地区の配給計画が変更されましたのでご説明に参りました。お手数ですがこちら開けて頂けないでしょうか?。」

「……あ、分かりました。今行きます。」

その間に目の前で待機していた者たちは金属の棒を片手に身を低くしてそろそろと部屋に近づく。そしてこの扉の前に立っている者、腕章は外していない。二度、鍵が回った。そして、扉の向こうから茶髪気味の少女が姿を見せた。

その時だった。腕章の無い片手がドアノブを掴んでいた少女の腕を握って強く引き、外に向けてバランスを崩させる。その首を抱えドアから引き離し、そのままうつ伏せにコンクリートの地面に押し付ける。掴まれた少女は訳が分からず抵抗する間もなかった。

「突入開始——」

首を抱えたまま叫ばれたその声を合図に、部屋の近くに並んでいた者たちは一斉にその開かれた扉から勢いよく入っていった。床に身体を押し付けられた少女にはもう一人が脚に乗っかって抑える。突

入した者たちはワンルームに直進し、部屋にいた他の二人にも同様に素早く床に押し倒し、腕を封じた。

「な、何なんだ！あんだ達は！」

床に抑えられた一人がそう叫ぶ。手の空いている突入隊の一人が部屋の真ん中に置いてある机の上に置いてあった紙を手を取った。

「……直訴状。宛先は……生徒会だな。」

二人がかりでそれぞれの人間を押しえつけている部屋の中に先程の相方が歩いて悠々と入ってくる。それを見た突入隊の隊長らしき人間が向き直って敬礼する。

「副委員長。予定通り3人の確保に成功しました。」

それにパゾ美は敬礼を返す。

「無用な暴力はふるってないわね。」

「ええ、床に抑えているだけです。」

「私たちをどうするつもりだ！」

今度はもう一人が叫ぶ。パゾ美は落ち着いて持っていたカバンからファイルを取り出し、そこから更に書類を取り出した。腕時計の間を確認して口を開く。

「2012年10月31日、14時3分。高田あかり、杉本沙羅、吉田麗香。以上3名を学園艦内での不許可運動によって学園艦の治安を乱そうとしたことよって風紀委員長の許可のもと特例風紀指導を受けてもらうわ。」

「……な、何だそれは。」

「連れて行きなさい。」

「お、おい、待て。」

「話なら向こうで聞くわ。」

床に押し倒された3人はその場で手首に紐を巻かれ、外に連れ出された。

「証拠は確保したわね。」

「ええ、こちらです。生徒会向けの直訴状。内容は生徒会に情報開示を求めるもの。間違いなく黒です。指導室の準備はどうなってますか？永らく使っていないと聞いたのですが。」

「昨日から確か店舗運営補佐担当が清掃しているはずよ。あと彼女らの配給用のカードとかは回収しなさい。」

「はっ。」

外でエンジンに入る音が聞こえる。そしてそれが遠ざかった頃、パゾ美はその空虚となったワンルームを去った。

「護送開始。どうやら無事に成功したようです。」

向かいの建物にいたカナンは持っていた水筒の水をぐいっと喉に送ると額の汗を拭った。

「……最初の布石は問題ないわね。」

「ええ、あとはこれで生まれた余裕をどう活かすかです。」

「彼女らは丁重に扱いなさい。」

「良く伝えておきます。」

「立場は違えど将来的な仲間なのだから。」

国民党中央執行委員会西南執行部常務委員、陳済棠執務室。

陽は斜めに傾き、沈もうとしている。

「伯豪、どうした？」

縦長気味の鼻の高い男に対して机に向かっていた男は答えた。

「出来れば次のインフラ計画の精査に当てるつもりなのだが。」

そう言いつつも机の上の資料を端に寄せている。その答えた男は目が少しぎよろつとした少し色黒気味だ。

「広州市商会の者が広州の港で一隻の大型の輸送船を拿捕したそうです。」

「どこの船だ？」

「男を調べたところ、前に上海に来ていた大洗、という者たちのようです。」

「ほう……確か、南京の奴らには断られたらしいな。」

「持っていた荷物を一度没収し危険物などを持っていないか確かめたところ、南京と香港に提出したと思われるこちらの要求書などを持っています。人数は男が一人、若い女が三人です。」

「奴らはここに何しに来たんだ？交渉か？」

「いえ、昨日の嵐で船の調子が悪いので修理したいとのことですが。」
「何だ、そんなことか。ドルでもポンドでも払わせて場所貸せばいいだろう。」

「ですが一応日本の船のようですし、確認までに。」

「……まあ、話はわかった。金さえ出せば修理でもさせてやれ。そういえば南京からはそういう奴らが来たとは聞いたが、交渉の内容については聞けてないんだよな。」

「ええ、ですが……」

「お前が持っているのはそうだろう。それをちよつと見せてくれないか？」

「……では、」

縦長の顔の男、李漢魂、字伯豪は持っていた数十枚を机に置いた。机に向かう陳はそれの束の一つを手に取りペラペラと無言でめくり始める。それがひと段落つくと、次に手に取ったのは封筒だ。

「何だこれは？ 香港総督の紹介状？」

折られたそれをぱつと開くと、ちゃんと印とサインの書かれた紙であつた。

「……なるほど。確かに本物のようだな。それでこつちが恐らく香港に提出したものでしょうか。」

今度は英語で書かれた別の紙の束をめぐり始める。時たま棚に置いた英中辞典で調べつつ読み進めていく。その間李は何も言わずにいた。が、陳がそれを読んでいる時に、李の背後でノックがした。

「伯南殿、いらつしやいますか？」

「幄奇か。どうした？」

「紅軍追討に関する相談がございました。」

それを聞いた陳は部屋の中で待つように指示し、丸顔の字幄奇、本名余漢謀は部屋で李の斜め後ろに立った。

「伯南殿は何を見てらつしやるのだ？」

「どうやら前に上海に来た大洗とかいう奴らがここ広州に来たらしくてな、それで彼らの要求書を読みたいと仰つて。」

「はあ、四川の辺りにいた私にはよく分かりませんが、」

小声で李と余は言葉をかわす。すると陳は紙の束を元に戻し、これまでも含めて一つにまとめる。

「……ふむ。」

「どうですか？私も一応目を通しましたが、とても……」

「そういうえば、彼らの格好は？」

「か、格好ですか？えつとですね……確か、代表と思われる少女が白いワンピース、男が紺のスーツ、そして残り二人の付き添いの少女らは頭に船形帽を乗せた白を基調とした格好だそうです。」

「奴らはカバンとかは持ってないのか？」

「代表と男が黒、他の一人が白でもう一人は黄緑でしたかな？」

この問答から余には少し嫌な雰囲気を感じた。

「輸送船はどんなのだ？」

「輸送船はこの広州に来る輸送船にしては若干大きめの部類ですね。この大ききで4人しか乗員が居なかったのは私も驚きました。大洗のものと思われるマークの他は目立った塗装はなく、鉄のしつかりしたやつです。」

「……そうか。あと、お前戦車道って知ってるか？」

「戦車道ですか？……確か、日本に耳の治療に行った時に軽く聞いた気がしますが、何やら女子がタンクに乗るやら何やら……詳しくは知りません。」

「私もソ連で聞いたことがあるが、人が死なぬよう配慮されている以外はタンク同士の対決らしい。」

「それがどうなさいました？」

「それについては南京には言っていないようだが、香港には自分たちにはその有能な指揮官がいると伝えたらしい。」

「……はあ。」

陳は一度顎に指を当てて少し考えたあと、意を決したように口を開いた。

「よし決めた！」

「何をですか？」

「奴らと交渉する！」

これを聞いた李とその後ろの余は頭から全てすっぽ抜けたような顔で立ち尽くした。

「えええつ?」

そしてそれが少しのちの叫び声に繋がった。

「いやいやいや、待っててくださいよ。だってこの内容、確か奴らの1年分の物資寄越せと言ってるんですよ!今の軍事費を全て削つても無理に近いですよ絶対!」

まだ余が呆然としつつある中、李は早めに正気に戻り反論する。

「向こうは香港の内容からまず交渉することを求めている。それに乗るくらいならいいだろう。」

「ですが、こちらの物資食われる以上の利点があるとは……」

「鉄鋼とか。どうやらこの学園艦とやらかなりの大きさがあられるからな。実際キロトン単位で鉄鋼くれると書いてあるからな。本当にそんな大きさがどうかは黄に練習機でも飛ばさせればいいだろう。」

「ですがこちらで勝手に受け入れるとなると、南京が何を言ってくるか……」

「そこだ。我々がこの広東、西南の地で生き残るには多少なりとも南京と差別化せねばならん。これの受け入れはそのタネになる。またこの政権を支えてくださっている展堂殿も欧州で体調がよろしくないと聞く。我々の政権の存立意義を現状あの方に頼っている以上将来的にはそれから脱却せねばならん。」

「それはそうですが……」

「それとこれは一番大事なのだが……」

「何がですか?」

「大洗は日本から来た奴らだったな?」

「ええ。」

陳は一つ咳払いして他よりもはっきりと告げた。

「日本はここ広州から北東、そして前の香港は南。風水的に北東の白と南の黄緑は最高に良いのだ!」

(やっぱりかー!)

口には出さないがこの陳という男に慣れている二人は心の中でそう叫んだ。この陳済棠という男、一つの省を实质握っているだけあって能力はあるのだが、このように風水とか占星術を政治や人事に持つてくるところが珠？に傷なのだ。

広西大洗奮闘記 27 あんまん

今日は良い日だ。晴れているというだけではない。無論ここにいる者たちには試験はないからそれが終わったからでもない。「はい。確かに生徒会への直訴を計画していた者たちを捕らえました。現在は特例風紀指導の扱いにしています。」

「ありがとうございます。」

小山は胸の前で手を組んでまで礼を述べている。

「それで統制体制解除まで風紀指導を続けますが、よろしいですか？」

「ええ、勿論です。この状況ですから一度そのような動きがあると全ての不満に火をつけかねません。流石は風紀委員。半年以上情報を伏せ続けてくれただけありがとうございます！」

「いえいえそれほどでもありません。これも我らが大洗女子学園の風紀維持の為ですから。今後も風紀委員としては見つけ次第摘発を進める所存です。」

「ゴモヨさんとパゾ美さんはどうしてらっしゃいますか？」

「委員長と副委員長は現在捕らえた3人の風紀指導を確認してらっしゃいます。」

「分かりました。今後もよろしくお願いします。」

「では、これで失礼します。」

身体を折ったカナンはそのまま生徒会長室から出て行った。

「……とりあえずこれで芽の一つは潰せましたね。」

両脇に手を当てながら五十鈴が閉じられた扉を見て鼻から長めに息を吐く。

「いえ、一つじゃないはずです。」

「……他に何かそのような話があると聞いてらっしゃるのですか？」

「いえ、そうではありません。今回の確保にかなりの人員を投入したそうです。そんな大規模で作戦を行えば確実に人目に付きます。学園艦は閉鎖空間。いかにSNSなどが通じなくともうわさなどでこの話は広まるはずです。たった直訴計画だけで特例風紀指導。その恐怖は確実に行動、暴動の芽を潰したはずです。」

「……なるほど。確かに効果はありそうですね。」

「暴動のきつかけとなる行動が起きなければ規制する手間もかからないのですから。評判は気にしていません。」

「食糧の余裕がなくなってきた今、量は増やせませんし……そろそろ午後の配給の時間ですね。私次の担当なので準備に行ってください。」

「ではこっちでこのノート在庫とその今後の利用の計画、仕上げておきますね。」

「よろしくお願いします。それにしてもこのノートやその他の紙に関してなのですが、リサイクル紙の運用は出来ませんか？確か設備は有ったと思うのですが。」

「前に伺ったのですが、インクなどを落とす洗浄液が足りないそうです。これをやらないで紙を作ると黒っぽい紙が出来てしまうとか。」

「なら仕方ありませんね。行ってきます。」

華はデスクトップにその計画をあげたまま腕をまくって部屋を駆け出た。

机を並べ、その背後には小分けされた食糧が山積みされている。会場の一つでは5人程の生徒会の者たちが忙しく動いている。何せ一つの会場には5000人以上が食糧が手渡されるのだ。5カ所の配給所で8人ずつグループで配置された彼女らは食糧の倉庫からの搬入から後片付けまで全て行う。5時から6時頃にかけて地区ごとに並んだ人々にカードの枚数と変なところが無いかを素早く確認し食糧を袋に入れ、名前の所にチェックを入れる。休みなしのきつい作業だ。午前は学園生徒のかなりが昼食として受けるが、午後はそういうこともない。

「……とりあえず準備はこんなものでしょうか？」

しかしもう3週間近くこの作業を1日2回、ローテーションがあるから3日に2回ほどだが繰り返している彼女らはもう慣れつつある。初めは3時から始めていた準備ももう3時半から始めるようになった。

「それじゃあ5時から住民の皆さん入るからチェックを忘れないよう

に。」

「はい。」

華はこのグループのリーダーではない。一人の作業員だ。華は生徒会長室で何時も業務を行っているとはいえ生徒会では新入り。その分この時間は若干気楽とも言える。そして間も無く、地区ごとに並ばされた住民がぞろぞろと会場に入場してきた。どこかで耳にした話だが、この様な整然とした行進は練習しなければ出来るものでもないそうだ。そして頭の人が机にたどり着くと、すぐさまカードの確認が始まる。

「カードのご提示を。」

「はい。3人分ですね。」

「ありがとうございます。次の方。」

次々と来る人に規定の量の食糧を渡していく。その機械的作業の中で華は思案した。この風紀委員が我々に都合の良い行為を今したのは何なのだろうか。まさか私の考えが思い過ぎかもしれないと疑いもしたが、結局はあの鳥の結果を待たねば分からないだろうというに至った。この切迫した状況、いかに風船をしぼませるか、今度はそこに考えを移すことにした。

「……はあ。それで大洗を我々が受け入れるかどうか話を通したいと……」

電話口の向こうの男は軽く呆氣にとられている。

「そうだ。」

「いや……ですが、その要求をそのまま飲むということは無理というのはご存知ですよね。」

「そりゃそうだ。私もそこまで馬鹿ではない。寧ろどこまで相手に出させるかを交渉にて図りたい。向こうの目的はとりあえず安定して飯が食えるところを見つけたことだ。そこさえ認めれば向こうから権益を引つ張り出せるだろう。」

「その権益が鉄鋼などというわけですか。」

「そういうことだ。それを市商會に回せばその支持も得られよう。軍備の更新にも一役かうかもしれん。」

「……分かりました。では私の方から執行部と政務委員会の者は集まるように指示を出しておきましょう。この時期に合わせれば向こうへの牽制にもなり得ます。」

「ありがたい。西から来る二人がいるから、会議は明々後日かな？ まあそこは任せる。」

「桂林から半日はかかるとは本当にインフラ整備は急務ですな。」

「全くだ。柳州の航空学校を経由するとはいえな。それでは資料と彼らへの連絡はこちらで準備するから召集に関しては任せていいか？」

「あともう一つ、彼らを残しておくなら彼らと西の方の飯と泊まらせる場所の費用はそちら持ちでお願いしますよ。こんな急なんですから。」

「ううむ、仕方ない。」

「では場所と時間は決まり次第ご連絡致します。」

「よろしく。ではな。」

陳は受話器を自身の机の上の電話機に戻した。取り敢えずチャンスが貰えたことを喜ぶばかりだ。これが私の広東政権のさらなる長期化に繋がるのならば。そこに男がノックの後扉を開けた。

「うまくいきましたか？」

「李か、何とか毅公はやってくれるようだ。これで話は少し進みそうだな。」

「広東省政府主席を務められながらこの仕事までこなされるとは流石ですね。」

「だな。ところで伯豪、お前はこんな遅くに何の用だ？ もう11時前だぞ。」

「えつとですね市商会の方から連絡が来まして、彼らの港湾使用に関する件なのですが、彼ら私たちに持ち物服以外没収されているので少しも金を持ってないそうです。」

「……そりやそうか。」

「というより元々金自体あまり持っていないようです。それについてどうするかと、あとは現状市商会管轄の倉庫に彼らを置いているが、どうしたら良いか、と。」

「倉庫はいかん、これから交渉するかもしれない方を相手に。市商会にはこれから費用私持ちでホテルを取るから、そこに連れて行くように言ってくれ。そして……船を修理させると倉庫に置かれるという扱いを見て脱出されるかもしれないから……そうだ。金を払っていないことを名目に船は停泊させるがそこには近づけさせないようにしてくれ。」

「分かりました。そのように伝えておきます。」

「それを伝えたら今日はもう帰っておけ。明日から忙しくなりそうだしな。」

「はっ。」

陳が腰に手を当てて背筋を伸ばしてそう言うと、李は敬礼ののちその場を早足で離れ去った。張った身体の力を抜いた陳の目に、机の上に置かれた没収品目の書かれた手書きの紙が目に入った。その紙をペラペラとめくっていると、一つの単語が目に入った。

「……食糧、銀の袋入り……保存用か？」

我々はこの大洗というのが日本から来た学園艦だということくらいしか分からないが、最悪でも南京政府に断られてから何も補給を受けていないということは分かる。そうでなければあの様な紹介状は書くまい。そこにある食糧に保存用があるのは至って自然だ。

「……調べたら何かわかるかもしれないな。中山大に一個回させようか。」

今日から霜月。実際の旧暦だと10月くらいなのだろうか？いや、そんなことはどうでもいい。そんな呼び方はここでは嘘だというの間違いない。いくら元来大洗学園艦がいろいろ回るとはいえど、この時期に図書室のクーラーが回りその上で袖をまくっても寒くない。夏という表現をしてもさして問題はないように思われるのは違和感がある。ただ一つ言えるのはこの環境がここで机越しにはす向かいの状況でひたすらにペンを走らせ続ける片眼鏡と中のおっぱいにとっては丁度良いということだった。

「……」

「……」

特別授業の合間を縫ってでもやらねばならないのは受験生なのだから当然だ。この片眼鏡の解いていた数学の問題のAの欄に解が書き込まれようとしていた時、はす向かいの人間もそのペンを置いた。思わずこの片眼鏡もちよいと早足で書き込む。向かいの人間が一つ伸びをしていると、片眼鏡は小声で話し掛けた。

「……ソド子。」

「私は園みどり子よ。それにここは図書室。静かにしなさい、河嶋さん。」

「……流石だな、風紀委員長。」

「元、よ。それで何の用よ。」

「静かにしなくていいのか。」

「いいから早く言いなさいよ。」

「丁度そちらも勉強の区切りが良さそうだからな。ちよつと気晴らしに水を飲みに行こうと思っているんだが一緒に来ないか?」

「……なぜ私を誘うの?」

「丁度近くにいたから、というのと話したいことがある。」

「話したいこと?……」

「ああ、ちよつとな。」

「……まあ、元戦車道選択同士の縁ですし、下の授業の邪魔にならないなら行っても良いわ。」

「勿論だ。」

「それなら行きましょうか。」

二人はノートと参考書をたたみ、席を立ててその場を離れた。生憎水道は階段を降りた先にしかない。揃ってそこに向かう。そこに着くまで、河嶋が話すことはなかった。二つ並んだ水道に着いた二人が水をそれぞれ飲むと、先に口を離れたソド子が口元を手で拭う。

「……それで話したいことって何よ。」

遅れて河嶋も口を拭う。

「いや、昨日私の借りてる寮の近くで何やら風紀委員が大規模な摘発らしきことをやってみたみたいでな。」

「それを元の私に言う?」

「それと今回、儉約体制、統制体制が導入され、寄港も補給も受けていないことは無関係ではない気がするんだ。」

「だから何よ。」

「……嫌な予感がするんだ。この無期限の寄港延期が続けば、私たちはセンター試験までに寄港できるのか、今までの努力が泡沫とならないか。」

「そんなの私たちにはどうしようもないから勉強を続けるほかないでしようよ。」

「……それはそうだが、もう一つ。私は元々生徒会の人間だ。この状況、統制体制が導入されさらに風紀委員が実力行使を行ってまで治安維持を行わざるを得ないことがどれほどのことか推察はつく。」

「……」

「そしてこの暑さ。また我々は見捨てられたのかもしれないな。」

「そこら辺の交渉とかは生徒会に任されてるだろうし、風紀委員は風紀を守るだけよ。それゴモヨもパゾ美も理解してるわ。」

「……そして食糧備蓄が切れるまであと8日、これまでの状況からその期間でそれが解決出来ることに疑いを持ってしまおう。たとえばそれをやっているのが会長と柚ちゃんとはいえ。」

「そろそろ戻りましょう。辛気臭くなりすぎると勉強とモチベーションに影響するわ。」

「……最もだな。」

風紀委員室、そこでは終礼後丸くした机の外に並んだ人によつてささやかな会合が開かれていた。

「聞かれてないわね？」

「ええ。反応は有りません。外も見張り付けたので大丈夫でしょう。」

「では早速始めていくわ。ハマコ、昨日の深夜はどうだった？」

「深夜は出歩き等は確認されませんでした。日中は場所によつて風紀委員を避ける仕草を見せる人間が増えたそうです。」

「まあ、そりやそうっすよね。事情知らなきや私もそうしますよ。」

「そして昨日のカナンの反応も良好ということは、」

「この度のことで生徒会から一定の信頼を得られたことは間違いない

「と思います。」

「ここに居るのは治安維持に関係する各担当長たちである。」

「それとヤボク、新たな情報はないの?」

「活動も昨日から本格的に開始させたんですけど、どうやら本当に生徒会には動きがないらしくて……」

「武装とかは?」

「全く。」

ヤボクは両腕を広げて首を横に振る。

「……暴動が起こったらここ一番に襲撃されるところなのに呑気なものね。」

「こつちからしたら非常に好都合ですけどね。」

「それで、今回集まったのはどのようなご用ですか?」

「胡瓜の今後よ。その計画と今後の展開を確認するわ。」

「第二段階ですか。確か生徒会を出来るだけ孤立させるんでしたね。」

「第二段階についてはカナンに頼むわよ。私はハマコと最終段階の細かなところを絞っていくわ。」

ゴモヨの丁度向かいにいたカナンを手で指し示す。

「分かりました。まずは担当を派遣して辺りの『櫓』から順に落とさせていきます。」

「『櫓』は大体三つのうち二つ落とせば十分ですかね?」

「そうですね。そして時機が来たら『二の丸』、のち『本丸』ね。」

「『本丸』は出来るだけギリギリに狙います。『厄介な番兵』に睨まれると面倒ですから、万が一睨まれたとしても相手には十分な時間を与えないようにします。」

「それで良いわ。一番『二の丸』が落とすやすそうだけど、」

「『二の丸』が先に落ちそうならばそちらを優先し、その伝で『櫓』の一つを狙います。そこはこちらの判断に任せて頂けますか?」

「勿論よ。」

「……これが成功すれば、私たちには絶対的な正義が手に入りますね。」

「一つ良いっすかね?」

話の筋から離れていたヤボクが手を挙げて割り込む。

「何よ、ヤボク。」

「その正義に関してなんすけど、一つ案が有りまして。」

「何よ。」

「角谷会長の動向はあの人全然外に出てないので掴めてないんすけど……」

ヤボクは部下の集めた手持ちの資料も見せつつ、ある計画について口にした。それがひと段落ついた時、それを聞いていたゴモヨは次の様に纏めた。

「……つまり『肉まんが食べにくかったら割って冷まして食べる』ということね。」

「例えはどうかと思うっすけど大体そんな感じっすね。これができりや『本丸』以外に我々の行動の正当性が手に入りますよ。」

ヤボクは得意げな笑顔を振りまく。

「確かに手は百個打つても損はないです。使えるなら使いましょう。」

「そうね。もし出来て目が離れたらそれはそれで好都合ですし。」

「ならこの計画はエドムのところに回すわ。エドム、頼んだわよ。」

「ええ、中学で変な動きのある奴は特に居ませんから喜んで全力を傾けます。ヤボク、貴女のところとの連携が大事になるから頼んだわよ。」

「はいはい。ま、私が言ったことっすし必要そうな情報も回しとくっす。」

「では任せたわよ。」

と紙を取って計画許可証を書こうとしたところでゴモヨは手を止めた。

「それで、この計画なんて呼ぶの？」

「さっきの委員長の例から肉まん計画というのは？」

「確かにこれまた間の抜けたような名前だけど……」

「あんまんにしましょう。」

「いや問題はそこじゃないっしょ。」

「会長だけに。」

そのカナンの言葉はその部屋を夏から一気にオイミヤコンまで吹っ飛ばした。ここからそこまでの移動速度は音速なんかはるかに超えていただろう。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……………本当にすみませんでした。ですが真面目な案でもありますよ。」

「もうあんはいいわよ。」

「甘いものって全くとっていいほど配られてないじゃないですか。ですから成功させて甘いものを食べられるようにと……………」

他の5人は一斉に唾を飲んだ。配給で甘いもの、砂糖を使っているものは保存がききにくい、ため配給されにくい、というよりほぼされにくい。糖分摂取するなら備蓄を漁るか夏目漱石みたくジャムを食べるくらいしかない。

「……………それでいきましょう。」

「分かりました。では早速準備を始めます。」

「以上で終わりにするわ。解散。」

30秒も経たぬうちに風紀委員室からその6人は消えていた。

朝早くからこの字徳鄰、本名李宗仁の仕事は始まる。軍人としても、この土地の指導者としてもやらねばならないことは多い。ところがその日の朝は違った。真つ先に書類の決済から始めようとしたところで電報担当の者が部屋に飛び込んできた。

「閣下！李閣下！電報です！」

「電報？それにしてはやけに慌てているな。どこからだ？」

「広州からです！」

「広州？何だ、よくある話じゃないか。どれどれ……」

渡された紙に書かれた文字を読み進める間も無く、一瞬で李はこれが不味いものだと思った。

「……大洗、だと？」

「それだけではありません！」

「それについて政務委員と執行部が集まるから、健生と明日のうちに広州入りしろ？冗談じゃないぞ！」

「ええと、私は大洗というものを知らないのですが、どのようなもので？」

「それより健生と黄を呼んでこい！あとこの要件を広州に詳しく聞いてこい！」

「は、はっ！」

この二人がこの李の執務室に集まるにはそれから30分弱かかった。この間李は悶々と過ごさざるを得なかった。二人はそろってその時間に来た。

「徳鄰、こんな朝早くにどうした？」

「李先生、どうしました？」

「……明日のうちに広州に来いだとき、俺と健生は。そう政務委員と執行部から呼び出しがかかった。」

「……はっ？明日？」

「いくら何でも急すぎではありませんか？」

「そんなに急ぐとはどんな案件だ？」

「……大洗の件らしい。」

「……ああ、そういえばいたな、そんな奴らが。」

「何ですかそれ？」

「そうか黄は知らないのか。奴らは大洗学園艦という学園艦のようだ。何やら南京の蔣のところにも物資が貰えないか交渉に来たらしい。」

「学園艦、ですか。それがこつちの話題に上がるということは……」

「そう、蔣はそれを一蹴したということだ。ということは広州に奴らが来たのか？」

「事情は今向こうに聞いているが、もうすぐ来るだろう。だが来ていることは確かだ。」

「で、広州は何のために呼んだんだ？まさか奴らを受け入れるつもりとでもいうのか？」

「まさか。確か奴らは物資を求めてたんだろう。そんなのがこの両広にある訳無かろうが。」

後から入ってきた二人の後ろから二度のノックがその会話を止めた。

「どうした？」

「電報担当の者ですが、」

「入れ。」

扉の音が閉まる前に話は再開された。

「それで会議の議題なのですが、大洗学園艦とやらの代表がこちらに来たので彼らを受け入れるか否かとのこと。」

「それだけか？」

「そうではないでしょう。今日から南京で六中全会ですから、それを牽制する意味もあると思われます。」

「だとしたら広州から前もって連絡があるはずだがな。」

「だが本当に大洗を受け入れる気にいるのなら、それを我々抜きで話し合われて決められると、我々のただでさえ弱い政務委員会と執行部での発言権がなくなってしまうかねない。行くしかあるまい。」

「気に食わんが……本当にその気ならこちらにも損だからな。」

李と字健生、本名白崇禧は顔を歪ませつつ仕方なさそうに息を吐いた。

「そうと決まったならば準備を済ませるぞ。軍事関連は鶴令に、内政は黄、お前に任せる。」

「分かりました。全身全霊をもつてことに当たります。鶴令殿にはこちらでお伝えしておきましょう。」

黄は素早くかかとを揃え敬礼する。

「助かる。あとは明日柳州に向かう準備と白雲まで飛んでもらうための飛行機を手配しなくては。これは私がやろう。」

「では私は大洗に関するさらなる情報がないか確認しておこう。あと南京の動向も。」

「頼む。本当に広州が話し合う気なら相手のことを知らないままではいられまい。それでは今日の仕事は、それぞれの職務を全うすることだ。」

「はっ！」

その部屋に残る者はいない。この大広西を蔣の手から守る役に立つのか、それを判断する。ただその為に。

角谷たちが留め置かれたホテルは角谷にとってはかなり高級そうな代物に思えた。ベッドはビジネスホテルなどで見る単一色の掛け布団ではなく、薄手で薄めの色だがそれでも使い分けられた色によりこの数色の部屋に輝きを与えていた。四人はそれぞれ別のベッド以外のスペースで寝転がってさらに転がれるほどの大きさの部屋に入れられた。場所もそれぞれ離れており、おまけに入口には一人ずつ歩哨まで立てている。

窓のカーテンを開いた向こう側には緑多い中庭が広がっており、南国風の花がめいっばい太陽向けてそれを見せびらかしている。外には自由に出られないのは香港と同じだが、それでも倉庫よりは遙かに良い上に、料理も香港の最終日前日クラスのもものが夕食で出された様には思わず喉がなった。出来ればこのレシピを知りたいとも思ったが、それは叶わないだろう。

角谷は食事の後落ち着かず部屋を歩き回った。カバンは取られ

この部屋には何も持ち込めていないから、フランス語や中国語の単語を頭に入れることも出来ない。脳内で繰り返し返すが精一杯である。何よりも輸送船の修理をする為の場を求めた結果こうなっていることに違和感の他の語は当てはまるまい。

「如何したもんかな……」

まずここは中華民国のはず。共産党系はこっちは来ていないはずだから、我々との交渉を蹴った彼らにとって我々を泊めること、ましてやこの様な待遇を設けることに利はないはずだ。

しかし動けない以上相手の意図を掴む機会はない。窓側に置いてある肘掛付きの椅子に腰を下ろし、何も出来ない時間の中で学園艦のことを憂いた。

「……早く次に向かわなくちゃいけないよね。そうしないと……」

タイムリミットは案外近い。次をインドシナかフィリピンにするかはまだ決めかねているが、迷う時間もないかもしれない。

昼飯は来たものの、口に唾液が広がらない。眼前の食事が劣るというわけではなく、寧ろ昼食としてはかなり良いものだと思うし、角谷自身も考え事をしていたので空腹を感じていないわけでもない。これに角谷は一端の罪悪感を抱かざるを得なかった。かといってこれを食べないというこれまた更に罪悪感を生みそうな行為をする訳にもいかないので、いつもの食事よりは飲む水を増やしてそれを食べた。辛かった為か思いの外苦労はしなかった。

食休みもただ椅子に座って茫然とする他はない。その時窓の外で風が吹く音がして、偶々目に付いていた花の花びらが宙に高々と舞った。今日が土曜日なら放課後だが、生憎今日は木曜日だ。ちょうどその時、定期的な来客が扉を鳴らした。単なる皿の回収である、と思っていたが、そのボーイは角谷に一枚の紙を渡して何か言った。その言葉は中国語らしく意味はさっぱりだったが、紙の英語はすぐに分かった。

There is a visitor coming for
you so please do not go out side
of the room.

(来客が来るので部屋の外に出ないように。)

どうやらその客は定期的なものではないようだ。もうすでに私は外に出れない状況だろうという言葉は心のうちに伏せた。

陽が建物の向こうへと赤い色をして沈みこんでいく。その客は銃を携えた別の歩哨とともに部屋に踏み込んだ。ところがこの歩哨が言った紹介がさっぱり分からない。だが幸いなことに頭の上の帽子の中央に花の様なバッヂがついているその客自身は英語が少しは話せるようだった。とにかく窓際の椅子をもう一つ出して、握手を交わした。やはり角谷よりは遥かに大きい。

「Nice to meet you, Ms. Annzu. I'm
Ch·n J·t·ng.

(貴女に会えて光栄です、杏。私はチェン ジータンと言います。)

「Nice to meet you, Mr. Ch·n. Sorry but can you tell me who you are? I cannot understand Chinese so I don't know what the guy was telling to me.

(お会いできて光栄です、チェンさん。すみませんがあなたが何者かお話しして頂けませんか？先ほどの来客が中国語で何かを伝えようとしている様子でしたが、私は肝心の中国語が理解できないので。)

「Oh, excuse me for that. I work
as the Gu·m·ndāng zhōngyāng zh
·x·ng wěiyu·nhu·zh·x·ng xīn·n
b·ch·ngwěi, or the member of
the Central Executive Committee
of Kuomintang. Just regard me
as the ruler of the Guāngdōng
g.

(おお、失礼しました。私は国民党中央執行委員会西南執行部常務委員を務めています。この広東を実質的に治めている者と思って頂ければいいです。)

「Ruler of the Guāngdōng... What is your purpose that you let you come here?」

(実質的に広東を治めている者……ここにいらした目的は何ですか?) 「……I would like to accept your plan, however not exactly as it.

(……私はあなたの計画を受け入れたいのです、もっともあなたの案そのままではないですが。)」

この歩みが合っているとは思えない、仮にこれが解のある数学のようなものならば。彼女はその人を尾行した。友であるその人である。もう一人の人がこの人と生徒会に繋がりと聞いてたそうさ。そしてその人が嘘をつく様な人とはとても思えない。すなわち付けた先がこの生徒会室の前で、名前だけ言ってこの統制体制下の生徒会室に堂々と入れたことはそのれっきとした証明となる。それを確認すると直ぐさま彼女は動いた。

外に飛び出てちようど生徒会室の裏手となる所で屈んで耳を澄ませる。持ち物があれば擬態なりせめてコンビニの制服には着替えておきたいところだが、無いものは仕方ないので珍しく右寄りの後ろで髪を留めた。癖っ毛には似合わぬと思うが流石にそのままはずい気がした。

途切れ途切れだが声が聞こえる。ボイスレコーダーがないのが惜しまれるが、それよりもその主が先程入った者と彼女も良く知った、生徒会副会長とまた別の仲間のものだったことが身を震わせた。

「……即ち前の風紀委員の突入で……へ視線が逸れているということですか?」

「そうだな。とは言っても……への非難が無いわけではない。無論……そうなる奴は居なそうだがな。……風紀委員が歩いているだけでそこを避ける奴までいる。」

「もう一つ……になるものが増えたということですか……」

「学園艦の食糧の備蓄は大丈夫なのか?」

「……そこまで余裕があるとはいえませんが。あと……てば十分でしょう。」

「会長も今は香港に向かわれているんだらう？」

「ええ、もう1週間近くいらっしやいません。」

「あと……回る余裕もあるか分からないと……。今後も様子を見て時折報告をお願いします。」

「任せろ。それにしても、……何もやってないのか？」

「この前突入まで……ださった方をそう疑うことは厳しいです。それにやるとしても人員がいまません。」

「会長は……と仰いましたが……」

「……です。」

「注意は払った方が良くと思うがな。会長さんの仰るのも……だ。」

「……分かりました。今後万一不穏な情報が入り……ら、そのことも検討しましょう。無論入らないとは思いますが。」

「分かった。それでは失礼する。」

「今後もよろしくお願いします。」

そのあと、扉が閉まったと思われる音が耳に入った。彼女は慣れない手つきで髪留めを取ると、自身のカバンをさっと取ってある場所への道を飛んで行った。

ある場所に着いた。そこはつい最近彼女も訪れたことがある。入口の者に自身の名前を言い、新たな情報云々言うど、相手が部屋で何か言い、クラスをしっかりと確認された上で入室が許された。

「どうも、秋山さん。」

「お久しぶりであります。」

挨拶した向こうには書類棚からこちらに身を向けたゴモヨが立っていた。

「それで新たな情報があると聞いたけど何かしら？」

「はい、生徒会に關してです。生徒会室の裏手で話を聞いたところ、どうやら冷泉殿は学園内の様子を觀察し、それを生徒会に報告しているようです。」

「……冷泉さんにしては随分能力不相応な仕事ね。他にも妥当な人が

いると思うけど。」

「それと現在会長さんは学園艦ではなく香港に向かわれていらつしやるこのことでもあります。」

「……香港？」

「はい。その辺りは結構はつきりと聞こえたので間違いないと。」

「……何故？香港単独で何か出来るというの？あそこは一応一国二制度を取っているけど、流石に中国の意向に反して受け入れることなんてしないはず……」

席に着いたゴモヨは逸らしていた顔を再び優花里の顔の前に戻す。

「……」

「どうなさいました？」

「……秋山さん、あなた何故ここに来たの？」

「……どういう意味でありますか？」

「今回秋山さんには仕事を頼んだりはしてないわ。即ち今回は秋山さん、あなたの判断でこれを集めたということ。ここまでの事がたまたま聞くことが出来たとは思えないし、あなたの目的は何？それを私に伝えてあなたは何を求めるの？」

優花里は少しの間答えに窮した。あるにはあるが少し口に出すのは憚られた。しかしその間ゴモヨはただじっとそうしている優花里を凝視し続けている。

「……今の現状を知りたいからです。風紀委員の方はその組織力によって私単独で調べられるよりも遥かに多くの情報を持っておられます。」

「つまり私たちの情報とあなたの情報収集力を合わせて、現状の詳細を把握するため、と言うのね？」

「そうであります。」

「なぜ？秋山さんの家族がこの学園艦に乗っておられるから会えないことはない。知ったとしても一人暮らししている他の人よりかは影響が薄いと思うけど。」

「……私の尊敬する、西住殿のためです。西住殿は……私が言うのもおこがましいのですが、親御さんとの断絶が未だ続いていらつしやい

ます。仮に現状のように海外に学園艦が離れるならばそれを取り戻す機会は減ってしまうでしょう。

私は、彼女を尊敬する一人として、同じ車輛の仲間の一人として、可能なうちにそれを取り戻して貰いたいのです。」

「……つまり西住さんのために学園艦は日本にあつて欲しいと……それは西住さんに確認したの？本当に彼女はそれを望んでいるの？」

もしそうでないならばそれは単なる秋山さんのエゴでしかないわ。エゴイストを抱える余裕は生憎うちには無いわよ。」

「……」

「……とはいっても実際人員は不足気味だし、秋山さんには前の潜入や今回のことでも協力してもらったから、無下にするわけにもいかないわね……条件があるんだけどいいかしら？」

「何でしょう？」

「まず、秋山さんって戦車道のカバさんチームの人と仲がいいわよね？」

「まあ、確かにエルヴィン殿などはよく歴史に関して話したりしますが……」

「彼らにも私たちへの協力を呼びかけて欲しいの。」

「カバさんチームの方ですか？何のためにかお尋ねしても良いでありますか？」

「秋山さんがこれを受け入れてくれるなら。」

「ええ、現状でも協力はしてまずし話はしてみますが……あまり風紀委員と仲が良くなさそうなカバさんチームを何故……」

それを聞いたゴモヨは席を立ち、大きく息を吐いて背を向けた。

「……秋山さんには言いづらいのだけど……現状生徒会と風紀委員は協力関係にあるわ。でも私たちも生徒会が学園艦の住民の方々に許可を取らずに学園艦を海外に向かわせようとしていることをよく思っていない。」

学園艦や生徒会の仕事の状況によっては、風紀を守る者としてこれ責めないといけなくなるかもしれない。そうしないと角谷会長の学園艦存続を成し遂げたという威厳だけでこの学園艦を治められな

くなる。その反発の最前線の私たちへ影響する。」

「……それと何が……」

「……私たちがそれをやった時に、向こうが裏切りと感じたら生徒会はどうすると思う？」

「……権利を剥奪するとかでしようか？」

「剥奪したら暴動とかを規制する機関は警察くらいになるわよ。そして警察だけではこの広い学園艦全てをカバーするのは無理。」

「……となると……」

「さらなる『力』を持つ人たちをこちらに対抗させて私たちを従わせるわね、私ならそうするわ。」

『力』……まさか！』

「そう、戦車道を味方に引き入れる。戦車道は学園艦を護った人たち。それが生徒会側につけば、この住人は誰も逆らえなくなる。」

だからこそポルシェティーガーを動かせる自動車部がほぼ居ない今、保険として最大火力を持つIII突を使えないようにしておきたい。保険よ。」

「……」

「戦車道を利用してしまう事を申し訳なく思うけど、されてからではどうにもならないの。協力して貰えるかしら？」

「……分かりました。私も、戦車を武器にしたくはないですから。」

「こちらからの脅しには使うつもりは無いわ。」

「ありがとうございます。それで、どうすれば……」

他の風紀委員が活動している方を向いた。

「ヤボクいつ戻るか分かる？」

「ヤボク担当長ですか？深夜見回りの始まり前には戻ると思いますが。」

「遅いわね……それじゃあ秋山さんは早めにカバさんチームをこつちに協力させてくれるかしら、今のことは言わずに歴史からの洞察力を借りたいとか何とか言っつて。彼女たちもそういうの嫌うだろうから。」

あと明日の放課後にここに来て貰える？この先についてはそこで伝えるわ。」

「はい。よろしくお願いするであります。」

姿勢を正した後、優花里はそこを立ち去った。椅子に戻ったゴモヨは近くにいた一人の担当長を呼び止めた。

「あなたカナンのところだったわよね？」

「ええ、そうですが。」

「担当長に伝えて貰えるかしら？」

『生で2本目を食べるのは気が引ける。趣向を変えてちようだい。』
と。」

小山副会長は、この日の午後の配給にお出かけなさった。そう、決まってるという時に窓の外から飛んで来る。それがこの灰色の鳥というものだ。何故そんなことができるかを聞いたら、簡単だ、外に出たのを見つけたら行けばいい、それが定期的なら尚更簡単だ、とあしらわれた。こういう事を考えるのは人間中心主義と思われるかもしれないし、人ではない花によって身を立っている母や自分自身への侮辱となるかもしれないが、協力してくれているとはいえ気に触る。

「それで情報は何です？水はその後です。」

華は壁に腕を組みながら寄り掛かり立っている。鳥の表情は全く分からないが、嫌そうな感じを若干醸し出していた。

「例の風紀委員の奴らだが、前言った『胡瓜』のあと、新しく『あんま』という計画を立てたらしい。」

「本当にお腹が空いてきそうな名前ですね。」

「それとその内容なのだが、これは向こうが何を言っているかよく分からなかった。何やら『本丸』やら『櫓』やら言ってたんだが。」

「……はい？風紀委員が歴女に？」

「俺に聞くな。というより名前からの共通性がなさ過ぎだろう。」

「……つまり、隠語かもしれませんね。」

「何かを隠していると。まあ、聞いた感じそんな気はしたが。」

「胡瓜もあまりこちらに良さそうな計画ではありませんから、警戒しておきたいのですが……」

「副会長がそうしたくない。」

「そういうことです。次に動きがあったら少しは注意するとは言われたのですが、場合によっては夏休みと同義かもしれません。」

「そうだとしても何を使って警戒する？向こうは武装してその訓練まで毎日のように行っているんだぞ？逆に警戒されたら堪ったものはなからう。」

「あの鎮圧などからしてこちらに現在は敵意を向けてはいません。そ

して生徒会には戦車道という仲間がいます。」

「……方が一風紀委員が動いたらそれを使う気か。」

「みほさんは多分真実を伝えたら動かないでしょう。あの人は信念は曲げません。だからそうなった時は嘘をついてでも動かしてもらいます。最悪の時は私と麻子さんだけでI V号を動かします。」

「……それをやったら理由が何であれ生徒会と戦車道の信頼は崩壊するぞ？それが望まれることか？」

「……生徒会は風紀委員という『暴力装置』なしに動けない状態になっています。他の機関を作ろうにも人材も経験も予算ありません。取り敢えずの協力は維持せざるをえないのです、会長が交渉を成立させるまでは。そこまででいいのです。」

「……とにかく報告は以上だ。」

約束通りのものを持つてくると鳥はそれを摘み、終わると空へ帰って行った。鳥は自由ではないと聞いたことがある。鳥には意思がないからだ。しかしあの鳥は意志を持ってないかということも言えない。もし意思があつてそれが自由だと感じているならば、彼女は羨ましいと思うのだろうか。

そういえば、しばらく花を活ける時間もなかった。頭の中で刺したくらいだ。1日一回刺すということもいつの間にか崩れてしまった。ここに花や剣山がないから仕方ないともいえるが、自身の身体、自身の腕にヒビが入った気がした。しかもお母様とも会えない。あの教えを請うことはしばらく、いや……考えたくはないが永遠ということも無いわけではない。むしろ現状からしたらそうなりかねない。この部屋にはない剣山も、心の中にはしっかりと置かれていたようだ。

しかしそこにはアロエに混じってシャガが一本だけ刺さっている。シャガが良いものと感じる余裕は残念ながら彼女には無かった。一つ懐かしさを感じると連鎖的に浮かぶ。妄想的だった沙織さんの恋愛関連の言葉でさえ無性に聴きたくなる。

もはやそれは業務をこなすことで十分には抑えられない。他の膨大なる不安を以ってして緩和させ、人より先に私だけ崩れるわけには

いけないという思いを芯として持ち続けることが精一杯だった。

翌日昼 中華民国広西省柳州 広西航空学校

一機の小型の旅客機に荷物を抱えて軍服のまま二人は夕ラップを登って乗り込んだ。

「これはイギリスのものだったか？」

「製造から10年近い物だそうだ。」

「うちはそんなものばかりだけどな。武器とか特に。」

「早く改善しないと紅軍追討していない我々は兵の練度が劣っているからな、まともに張り合えなくなるぞ。」

「しかしイギリスも日本も武器は売ってくれたり顧問は送ってくれたりはするが、工場とかはないからなあ。装備の改良が効かん。」

「その分浙江財閥が付いてる蔣は有利だよな。うちにもいれればいいんだが。」

「スポンサーねえ……うちはインフラも悪いから商業さえ難があるんだよなあ。」

「……まあ、愚痴を言っても変わらん。広州へ連絡が済んだら行こう。と言ってたら来たようだ。」

白が首を向けると、腰より上の腹の辺りに黒く太いベルトを巻いた士官が一人全力で駆けてきた。

「連絡は済んだか？とはいってもそんなに急がなくてもいいのだが。」

「李閣下！白閣下！大変です！」

「どうした？広州で何かあったのか？」

「いえ、南京です！昨日南京で……汪精衛が撃たれました！」

「！死んだのか！」

思わず二人も席から腰を離す。

「まだ分かりませんが、が背中から数発撃たれたようです。」

「……厄介なことになったな。」

顔を歪めて李は頭を掻く。

「このまま死ぬことがあれば……」

「……蔣の独裁は加速する。そうでなくとも失脚するかもしれん。犯人は？」

「左派の者たちだそうです。」

「共産系か……」

「武漢の恨みとあったところか……これはまた広州で話し合いのようなことが増えたな。」

「そうだな。こちらに不利な出来事なのは間違いない。君、このことは桂林に伝えてくれ。」

「この記録お渡しますか？」

「いや、広州もこれを掴んでいないことはあるまい。向こうに頼る。」

「はっ！」

「白雲には連絡したな？」

「勿論です。」

「では報告ご苦労。出発する。滑走路を開けさせる。」

「はっ！」

先端のプロペラがエンジンの爆音とともに旋回を始め、操縦士が滑走路まで移動させる。前から長く伸びる滑走路が見える。とはいってもかなりお粗末なものだ。大人数の乗る旅客機は飛べない。しかもこれがこの広西のほぼ唯一の空港なのだからここの経済的劣勢が見て取れる。

「Take off！」

操縦士の号令の下、兵に見送られながら機体は少し揺れつつ加速を開始する。そしてそれが前輪が離れ、自らが手にするこの生地を白と李は離れた。空には若干の雲が漂っている。だが概ね青いと言って

いいだろう？

「????
????
????」

(アラアの御心のままに)。

「本当に神にでも祈りたい気分だよ。それで何時間くらいかかる？」

「2時間ほどですね。」

「やはり飛行機は早いな。石油を輸入せねばならんが、活用は重要だな。」

終礼後、礼を終えた優花里は教室から出て前にゴモヨに言われた通り風紀委員室へ向かう。そこまで急ぐ必要はない。風紀委員

は生徒会、またはその協力者と異なり授業をサボるようなことはない。つまりまだ終礼中の可能性が十分に存在するわけだ。

辿り着いた時すでに他の風紀委員が入っていたらしく、ドアが少し空いていた。一応ノックのあと入ると、つい昨日来たばかりなのに念入りにチェックされた。その者曰く、風紀委員関係者なら幹部から腕章貰った方がいいという。見分ける方法がそんな盗まれたら大変なものだとはチェック体制は厳しいのか緩いのかよく分からないが、とにかくまだ優花里を呼んだ張本人は来ていないようなので、来たら頼んでみることにした。

案内された椅子に腰掛け、前は詳しくは見ることに無かったこの風紀委員会室を見回してみた。前は来た途端やることが決まっていたから当たり前といえは当たり前だ。正面の委員長席の頭上には額縁入りで標語が書かれている。艦内安全、風紀興隆、尼削腕章、らしい。どうやら腕章は風紀委員にとっておかつぱ統一、そして風紀維持と同等の重要性を持つ代物のようだ。

「あら、秋山さん来てたの。待たせてしまつて申し訳ないわ。」

と思つているとその尼削ぎ集団のトップがお目見えになった。

「いえ、私も丁度さつき来たところでもありますから。」

「それならいいけど……ヤボク来てる?」

優花里から外されたゴモヨの視線はすでに来ているおかつぱたちの方に向けられる。

「ヤボクさんですか? どうやら中間試験の成績が芳しくなくて、担任の先生に呼び出されているらしいです。」

「……風紀委員の担当長としてどうなのよそれ。」

「もともとああいう人ですからね。」

途中の一言が優花里の心にも針状の物体による影響を与えたが、それはおくびにも出さなかった。ため息を吐きながらゴモヨは自身の席に着く。

「……すみません。今後のお仲間をご紹介しようと思つていたんだけど、当の本人に事情があつて遅れそうだから、今後に関する話を先にするわ。」

「あ、はい。」

「それで、カバさんチームに声は掛けた？」

「いえ、まだですが。」

「お願いだけど……全員確実に引き込んでくれる？」

「……全員、でありますか？どうしてそこまで……」

「彼女らを迎え入れるにさらに都合の良い情報を思い出したのよ。」

「何でありますか？」

「忍道。そう、彼女らは数少ない忍道の選択経験者よ。」

「忍道ってそんなに不人気でしたっけ？」

「かなりよ。スパイが人の道なんて普通はどうやっても思えないわ。」

「二桁いれば多い年だそうよ。」

「そうなんですか……」

「忍道経験者が入れればこちらの情報収集能力は大幅に上昇するわ。生徒会の暴走も防げて得にもなるわ。これは何時もの指示無視の嫌悪を引いて余りあるわ。」

「……なるほど。そういう事なら聞いてみましょう。」

「感謝するわ。風紀委員が行けば厳しいだろうから。それが済んだら本格的にこちらの情報収集に協力して貰うわ。前言ったように伏せてお願いするわね。注文が多くて申し訳ないけど。」

「分かりました。」

その時、慌ただしく一人の少女が飛び込んできた。

「すいあせん、委員長！遅れてすまないっすー！」

「謝る時ぐらい敬語使いなさいよ。既に秋山さん来てるんだから！」

「あ、こちらが例の秋山さんっすか？ども、学園艦店舗運営補佐担当長の矢暮といいます。ヤボクって呼ばれてんでそれで構わないっす。」

「ど、どうも……」

恐らくこのヤボクがおかつぱ頭で無ければ躊躇なく優花里は本当にこの者が風紀委員なのか尋ねただろう。

「それで、店舗運営補佐担当の方ですか。」

「そうっす。ですが今までもにやってる店舗が無いんでここんところはば情報集めしかやってないっすね。」

「それで秋山さんとカバさんチームは入って貰ったらヤボクのところに加わってもらう予定です……まあこんな口調だけと仕事仲間としては信頼していいわ。」

「潜入して会長の台湾入りを掴んだんでしたっけ。すげえっす！その技術是非とも教えて欲しいっす！よろしくお願いするっす！」

「よ、よろしくお願いします……」

手を握られ上下に思いつき振り回され、とりあえず理解の範疇外にいるという事は分かった。しかしこの相手を信頼している目は嘘をついているものではないようだ。

「それで何かないの、ヤボク？」

「何かって、今朝言っただばっかじゃないっすか。」

「他によ。」

「何かあったんですか？」

「やっとな生徒会の配給食糧の残りの見積もりが出たらしくてね。今のペースだとあと3週間で尽きるらしいわ。」

「確か学園艦に蓄えられているのが一月分でしたよね。配給量が少ないと思ったらそういう事でしたか。」

「元は少し運動する位の学生が1日で消費するエネルギーの3万人1ヶ月分用意していたらしいっすけど、今の配給量だと必要最低限量くらいっすね。」

「……ということは生徒会は配給を始めた段階で交渉が長期化するこゝとが分かっていた、と。」

「そこは間違いないと思うっす。それと昨日に手に入れてくださった香港に関する話から次のようなことが推察できるっす。」

「といたしますと？」

「私たちは中国から門前払い食らったと思ってやしたけど、実際はウチの学園艦の政体にまだ近い香港を通じて中国と交渉を図ろうとしているのではないかと思ってるっす。」

「……ほう。なるほどね。」

「あとは首都北京に近い北の黄海入っちゃうと出るのに大幅な旋回が必要になりやすから、食糧に限られる今その無駄を避けるためにここ

まで交渉しなかった。これが私らが出した結論です。」

「位置も予想だと香港の南東の海上だから妥当ね。」

「……流石です。あれだけの情報でここまで分かるとは……」

「まだ仮定が混じりやすから断定は出来ないっすがね。」

「こちら情報も出したから、秋山さんも頑張っつてね。協力したら更に詳しく分かってくるだろうから。」

「もちろんであります！」

「じゃあ早速、この休日中にカバさんチームの引き込みをお願いするわ。あと今後も協力してくれるなら、これを風紀委員室に入る時くらいは付けたほうがいいわね。」

ゴモヨは近くの棚の鍵を開け、ビニールの縦長の袋を取り出した。

「腕章でありますか？」

「これがあればここにはスルーパスで入れるから今後ここに来る時はこれを付けてお願いするわ。ただし無くさないでね。無くしたら見つかるまで探して貰っつて見つかるまで入れないのがこのルールになっつているから。」

「は、はい。ではこれで失礼します。」

優花里は腕章を貰っつてカバンにしまうと、深く一礼して退去した。

優花里がちよつと前掴んだ扉から目を離れたゴモヨはそれをヤボクの方に向ける。

「ヤボク……」

「勿論っすよ。腕章が渡っつたとしても我々としては彼女を信用しきっつている訳ではないのでしっつかりと監視対象に置いておくっす。」

「その後のカバさんチーム、2年の鈴木、松本、杉山、野上。その四人もよ。」

「信じていいのは根っつからの風紀委員だけ、っすからね。お任せください。」

「もっつとも戦車道の仲間ではあるけど、それはそれ、これはこれよ。」

「人との関係はその場ごつとに変わるといっつことっすね。」

「あと『あんまん』に関するごつとは？」

「エドムに基本任せてやすけど、まあ小山副会長の日程は読めてるん

で恐らく明後日には開始されるんじゃないっすかね？」

「余裕は与えない方が良くから丁度いいわね。」

風紀委員室を去った優花里が向かったのは家ではなかった。寧ろ家から離れて甲板から降りて学園艦の周りを囲んでいるテラスに降りる。まだ約束の時間には早いですが、先に着いて待っている分には支障はあるまい。決められた場所のベンチは幸い空いていた。とはいうものの散歩道を歩く人も見る限りはそこまではないので幸いというほどではないが、とにかく問題なく相方の分も確保できた。カバンを隣に置き、少し暇なので単語帳でも引っぱり出してみる。この位の人通りなら少し声を出していても問題ない。遠くのベンチにはまた同様のことをしているから、あまり目立たない。そのまま単語を上の方から順にぶつくさ3度言いながら下に、そして次のページへ続いていく。しばらくそこに目を落としていた。後ろでは時たまジョギングしている方の定期的な呼吸リズムと試験から解放された少女たちのお喋りなどが耳に入るが、特に内容などに気を止めることもない。しかし、ある一瞬間こえた低音はちよつと気になった。普通家にしたなら窓を開けてみるようなものでもなかったが、それは何か様子が違った。少なくともこの時期に合わず腕を捲つても汗を感じるほどの気候だが、寝る時にイラツとくる蚊の音ではない。そしてそれは単語帳を閉じた時には気づいたよりも遥かに大きくなった。その音の主は見つけられ、その姿をはっきり認められた。そしてそれが高速でこちらに迫ってきていると分かった時、彼女はそのものが向かうと思われる先へ全力疾走を始めた、カバンを置いていたことも忘れて。それはここにおいて良いものではなかった。いやいること自体は問題はないが、それがこの地で堂々と活躍の機会を与えられていることが、であつた。それは我々の戦車道は勿論サندانズ戦の後との用途ははつきり異なるものだった。優花里はその姿をこの目に一秒でも長く焼き付けんと顔を上げたまま腕を振り、ももを上げた。そしてそれが彼女の視界から消えた時、呆然と走りを止めた彼女はその場に立ち尽くした。これから会う人が前に行っていた言葉に関する意見が完全に片方に倒れるかもしれない出来事だった。戦車道で現在マー

クCが使われていない以上に、あのようなのは今使われるはずも必要もないもののように推察された。その呆然が途切れた時、彼女はカバンを置きっぱなしにしていたことを思い出し、慌ててベンチの方へと戻っていった。戻ってカバンの脇に単語帳を押し込んだ。

「グデーリアン、先に来てたのか。すまない。」

「！」

ちよつと遠目から声をかけたエルヴィンにとってこの後のカバンから離れた優花里が自身の方にダッシュで近づいてくる光景は流石に恐怖を感じざるを得なかった。

「い、いったいどうしたグデーリアン……」

「エルヴィン殿！あ、あの！」

「と、とにかく一回落ち着け。」

「第一次世界大戦、戦間期の頃の戦争の装備品に関する資料は持つてらっしゃいますか！」

眼光鋭く瞼は目の裏までめくり上がり、鼻息荒くエルヴィンの肩を揺さぶっていた。

「えっ……その頃の装備品？まあ、その頃の資料なしに第二次世界大戦が分かるはずもないから、歩兵、工兵、火砲、戦車、冬季装備、戦闘機、爆撃機、戦艦、空母、駆逐艦、軽巡洋艦とか基本的なものに関する資料はあるとは思いますが……」

「見せてください！今すぐ！全部！」

「……話すことはいいいのか？」

「私の記憶がなくなる前に！早く！」

「わ、分かったから服のエリを引っ張るな。顔を離してくれ。ゴーグルが落ちる。」

優花里に手を掴まれたエルヴィンは引きずられるように彼女の住むシエアハウスに連れ込まれた。ここまでされたら只事ではないなとは思ったが、それを聞いてくれそうな状況ではなかった。庭ではせっせとカエサルが例の装填マシンでトレーニングしていたが、一見してその優花里の違和感を感じ取った。

「エルヴィン、思ったより早かったな。というよりグデーリアン、大丈夫

夫か?」

「か、カエサル……ちよつとどうにか出来ないか?」

「どうにかつて……」

「カエサル殿! 趣味の資料はどこにありますか!」

「資料? それなら四人分纏めて二階に置いてあるが……」

「ありがとうございます!」

聞いた途端空いていた縁側から靴を脱ぎ捨てて一目散に階段を見つ、登って行ってしまった。その後を追おうとするが、靴を脱いだ時にはもう二階に消えていた。

「一体全体何事ぜよ。」

「火急の事態とお見受けするが。」

別の部屋にいた他の仲間もエルヴィンたちと合流した。エルヴィン自身も良く分かっていないが、取り敢えず聞かれたことと行動を見た通りに説明した。

「良く分からんと。」

「全く分からん。」

「もうそれは知的好奇心が収まるまで放っておくのが一番だと思っぜよ。」

「私も資料を下手に荒らされなければ大丈夫だ。グデーリアンはそこから辺の分別はあるだろう。」

「いや、それがありそうには見えなかったが……取り敢えずこのことは向こうの親御さんに伝えねばなるまい。」

「そうだな。今日配給受け取る者が貰いに行くついでにグデーリアンの家に寄つてウチにいることを言ってくるのはどうだ? 他の者はグデーリアンがやらかなさいか注意する。」

「そうだな、上で騒いでいるようではないし心配する必要はないと思うが。」

「それで、今日配給受け取るの誰ぜよ。」

「もんざか?」

「それでは家に寄るなら早めに出た方が良からう。失礼つかまつる。」
「カード忘れず持つていけよ。」

「承知。」

四つの食糧入りの袋を抱えて左衛門佐は赤と青と白の遺伝子とは異なる三重らせんの上昇を眺めていた。店の様子からして今は丁度営業中の様であるため髪を切る用がない者が入るのは憚られたが、用はあるし親御さんに心配かける訳にはいかぬと扉を引いた。

「失礼します。」

「はい？」

奥で顔を洗っていた優花里の父が顔を見せたが、眼鏡が無いためかえらく目を細めている。顔から水が滴っていたが元からパンチパーマの硬派な人に見えるだけあつて、格好が理髪店のそれではなかったら彼女は大きく一步引き退るだけではなく膝が笑い出しただろう。その父は顔を拭いて眼鏡を戻すといつも通りの秋山父、淳五郎の様子に戻った。

「学生の方ですか。いらつしやい。どんな髪型をお望みですか？」

「あ、いえ、グデ……優花里さんが……」

「優花里ですか？優花里ならまだ帰って来ていませんが、ご友人の方ですか？」

「ええ、杉山といます。それが、今資料を見せて欲しいと家に来て読み耽っているのです、しばらく帰ってこないかもしれないことをお知らせしよう。」

「何も持たせずにそれは失礼しました。いつ頃帰るか分かりますか？」

「いえ、一心不乱に眺めているみたいですので、それが一区切りつくまでは……」

「わざわざありがとうございます。ところで杉山さん、戦車道やつてらつしやいますか？」

「はい。優花里さんとはその伝です。」

「どうりで何処かでお見かけしたなと思いました。ところでちよつと髪切つていきませんか？優花里のご友人の方ならお安」

「ただいま。」

左衛門佐の後ろの扉を開いて優花里の母、好子が三人分の袋を持って帰ってきた。

「あらお客さん？」

「か、母さん。おかえり。」

「はじめまして。優花里さんと戦車道で一緒にさせてもらっております杉山といいます。」

「戦車道で一緒にの方ですよ。はじめまして優花里の母です。」

二人は互いに律儀に頭を下げる。

「優花里が杉山さんの家にお邪魔してることを言いに来たんだってさ。」

「あら、どうりで帰りが遅いと思つたら。わざわざすみません。」

「いえ、いつも為になることを教えてくださるのでそれに比べたらこんなこと……」

「確か前に優花里が言ってたけど、杉山さんたちって松本さんと同じチームで、ルームシェアしてるそうですね。」

「え、あ、はい。」

「そうなのかい？ そうなら早く言ってくれよ母さん。」

「取り敢えずアメでもいいかしら。良かったら持つて帰つて。」

淳五郎の言葉を聞かずに好子はレジのところにおいてある缶から五つ小分けのアメを出して、近くのポリ袋に詰めて左衛門佐の前に出した。

「遠慮なく貰つてちょうだい。」

「いえ、そんなわざわざ……」

「優花里の分も入っているから。」

「……はい。では、失礼しました。」

「今度は皆さんでいらしてくださいね。」

にこやかな顔の好子から袋を指に掛けられた左衛門佐はわざわざ頭のバンダナを取って一礼して髪を切ることなく理髪店から離れた。

家に帰ると、階段の下で住人総人が何やら話をしている。

「どうした？」

「おお、もんざか。伝えてきたな。」

「勿論、それでそこで話しているあたりグデーリアンに関して何かあったのか?」

「いや、上で物音が全然しなくなったのだが、調べものの邪魔になるかもしれないから呼びに行くのは気が引けてな。」

「如何せん、というわけか。」

「流石に外出禁止までには帰らせなければならぬから、呼んだほうがいいと思うぜよ。」

「仮に頭に血が上りすぎて倒れたとかなら尚更シヤレにならないからな。」

「……まあ確かにそうなっていたら大変だが、一応どうしているか確認くらいなら見た方がいいな。」

「というわけで、エルヴィン二階見てくるぜよ。」

「なんで私が!」

「お前の客人ぜよ。」

「それに調べ物の内容はお前の知識が一番使えるだろうしな。」

「そうだな。それじゃあエルヴィン頼む。飯は私たちで作っておくよ。」

「……わかった。」

何故友人に呼ばれて行ったらこんな貧乏くじを引く羽目になったのか。その友人がそのくじを握っていたからとしか思えないが、引いてしまったものは仕方ない。一つため息をついて階段の一段目に足を踏み出した。

「グデーリアーン。大丈夫か?」

最後の段を踏みしめて身体を持ち上げ、そのまま隣の扉から書庫に入る。灯りは点いていたので優花里を発見するのにそう時間は掛からない。見つけた優花里の姿は換気用の小窓の方を眺めながらきちんと正座して、両手を横に垂れ下げていた。

「どうしたんだ?」

「……」

エルヴィンは優花里の傍に落ちていた本を手を取った。それは工

ルヴィンが前に陸の本屋で出入れたものでアメリカの戦闘機、爆撃機の歴史が結構詳しく書かれているものだ。

「アメリカの戦闘機か……」

そう聞くと、優花里は身体を大きく震わせて首を元の位置に戻した。そして急にエルヴィンの方に向き直ると、飛びかかるようにしてその両肩を掴んだ。

「ど、どうしたんだ。また近いぞ。」

「……」

優花里は口を音も出さずにせわしなく開閉する。それを見ていたエルヴィンは落ち着けと一言告げて、優花里の両ほほを同時に叩いた。

「……はっ。」

「大丈夫か？」

「あ、いえ、大丈夫……です。」

「本当か？まあとにかく、何故うちにこれを見に来たんだ？そこから教えてくれ。」

「……前に……エルヴィン殿が仰っていたことは……正しかったんです。」

「正しかった？何が？」

「……この世界が……我々がいた世界ではない……ということですよ。」

「あの無理のある考えが何故今更。」

「……一機の戦闘機が……」

「が？」

「……この、大洗学園艦の上を飛び去ったんです。」

「……へっ？いや、私は見なかったが……確かに飛行機が飛んだような音はグデーリアンと会う前に聞いた気がするが……あれがどうかしたのか？」

「……私はエルヴィン殿に会う前から待ち合わせ場所にいたので、その時に、学園艦の上を、複葉機の戦闘機が飛び去っていったんです。」

「……ふ、複葉機だって？間違いないか。」

「ええ、結構近くまで来ていましたが、機銃が載せられていましたから、間違いなくそうです……我々がいた世界で複葉機が大空を舞っていることはほぼないことだと思っております。それも攻撃機が。」

「……この世界はそれが存在した時代だということになるわけだな。」
「はい。」

「……嘘だ。」

「……」

「グデーリアン！本当に複葉機だったのか！この世の全てを、友人を、家族を賭けても断言出来るか！」

エルヴィンは優花里の両肩を掴んで詰め寄り身体を揺さぶる。

「……少なくとも、機銃の載った複葉機だったとはこの身を賭けても断言できます。エルヴィン殿ならご存知のはずです。もはや世界は複葉機が活躍出来るほど甘くはないということ。」

「……」

「そして、風紀委員の方の予測によると、現在地は香港南東、そしてフィリピンの近くです。中国とアメリカが協力しているフィリピンが複葉機を未だに運用しているとは思えません。この世界は、少なくとも私たちがいた世界ではないと……」

「……言うな。まだ……まだ、確定じゃない。風紀委員の情報が嘘の可能性だつてある。」

「ですが！香港周辺に居るのは間違いありません！何せ私が、この耳で、会長が香港に向かわれていると生徒会から聞いたのでありますから！」

「……もう言い訳は効かないということか。あの光はやはりただの光ではなく、そして長期間の配給体制もそれが原因だったと。」

状況証拠さえもあやふやな所に物的証拠をぶちこまれたエルヴィンはやけに冷静に優花里と話した。

「……はい。」

「……生徒会はそれが分かって伏せているということか、混乱を避けるために。」

「……元々私は風紀委員から忍道経験者であるカバさんチームを情報

収集に協力させて欲しいと言われ、エルヴィン殿を通じてそれを成そうとしました。ですが、風紀委員は生徒会への反発が大きくなったらそれへの抵抗も辞さないと言っていました。そして風紀委員の方々はこのことをご存知ではありません。万が一それが大規模に実行されたら……」

「……我々の希望は潰えるな。」

「ですから協力なさらない方が賢明だと思うであります。風紀委員との約束を破るので心が痛みますが。」

「確かに下手に助長するのは止めた方がいいな。忍道経験者だからといったが、本命はその万が一の時の戦車、といったところだろう。うちの皆にも言う必要はない。」

「……やはり武力として戦車は見られてしまうのでしょうか……」

「スポーツは平和の象徴ということとき。」

「このことは、風紀委員の皆さんにも伏せた方がいいでしょうか？」

「……生徒会を大事にするなら、伏せるべきだろうな。生徒会もこのことを伏せるだけの事情があるはずだ、それこそ本当に私たちには思いもよらない。それが万が一風紀委員を通じて学園艦内に広まったら……そこまで考えてのことだろう。」

「なるほど……私は、風紀委員に引き続き付いていきます。ここで下手に離れては疑われるだけです。カバさんチームが協力しないことに関してはこちらから断りを入れておくであります。」

「決まりだな。グデーリアンは今回の件を断る。そしてお互いこのことは誰にも話さない。」

「そして……もし万が一がありそうならば……それを止める。」

「ええ。」

「……しかし我々の世界ではないなら、大洗を知る者がここにいない可能性も高い。親も……だれも頼れない。」

「……」

優故の罪悪感が優花里を包む。

「……今日はありがとうございました。それではこれで失礼します。」

優花里は膝に手を乗せながら立ち上がり一度伸びをすると、先導す

るエルヴィンに連れられて階段を降りた。

「エルヴィン、飯できたぞ。」

その下にカエサルが顔を覗かせた。

「もうそんな時間か。」

「あ、グデーリアン大丈夫だったのか。」

「ご迷惑おかけしたであります。」

「大丈夫なら良かった。せつかくだしこのアメでも持っていけ。」

優花里は腹に手を当てる。気づいてみれば小腹が空いてきていた。悩むにしても絶望するにしても糖分はある。そこでご好意に甘えてカエサルからアメを手にとると礼を言っただけで扉を出て、外でアメを口に入れた。かなり溶け易いアメだったようで、唇同士がよく貼り着きそうになったが、甘いアメだった。

「エルヴィン、グデーリアンは何しに来たんだ？」

「……ちよいと急ぎで飛行機を調べたかったんだとき、アメリカの。」
「それにしてもあの焦りようは奇妙だったがな。それよりもう出来るから、お前も手を洗って早く来い。」

夕飯にてエルヴィンはあまり箸が進まなかった。人知の及ばないものによる衝撃は確実にエルヴィンの心に欠片を生じさせた。それが呼ぶ影響はもう考えられなかった。それは他の3人に疑問を持たせたが、それを解決しようとする動きはなかった。

11月3日 中華民國広東省広州市 広東省政府本庁舎

朝早くからそこは騒がしく、そしてその建物の中の会議室に向けて二人の男が歩みを進めていた。

「しかし、何が狙いだ。大洗についてはこちらに来てからも情報を集めたが、とても有用とは思えん。」

「逆にそこまで占いとかで決めていたらこっちの論理で押し潰せますよ。」

「それもそうだな。」

指定された部屋をノックし、返事で許可を受けたと確認したのち、そこにお邪魔する。

「失礼。」

「失礼します。」

「李さんと白さんよくいらっしやった。急ながら来てくださったこと、感謝する。」

奥に座っていた陳が二人を出迎える。

「全くですよ。いくらなんでも前々日は急すぎます。」

「すまない。彼らを泊めている金が私の分でしたな、無駄にはできなかったんだ。それだけでは無論ないが。」

「それにしても、今回は西南政務委員会と執行部の合同での会議ですよ。」

「ああ、そうだが。」

「それにしても前に見た面々が一部いなくて他の人が多く見られるのですが。」

「……名目上、だからな。」

「名目上？」

「実際はここ広東省の政務委員の幹部とあなた方広西の幹部層に集まって貰っているうえ、今南京の会議に出ている奴もいる。」

「ということは雲南の奴らは抜いているということですね。」

「あそこは独自の財政政策を成功させている。こちらと組むことは望まない。我々が協力関係を強化して良いかについては、今後の錫と鉄鉱石購入継続を条件に龍から確認を取った。」

「ほう、首を縦に振ったのですか。」

白が意外そうに自身の顎の下を触った。

「こちらの規模が大きくなる事に依存はないらしい。まあ席はあちらに確保してあるからまずは酒でも一口やってからやろうじゃないか。すでに珍珠紅を用意してある。」

「あ……いや、私は……」

「健生はイスラームだから酒が呑めないんだ。それにわざわざ会議の前に酒を飲む必要もないし話合わねばならないことも多い。早めに始めよう。」

「ふうむ、確かに一人呑めぬままなのは気が引けるな。だったら立ち話もなんだし、席についてくれ。」

陳に指差された席に二人は並んで腰掛ける。すると党員の一人らしきものが二人に烏龍茶を手渡した。

「……では挨拶の酒を抜きにした訳だし、それぞれの挨拶も抜きでいい。話合わねばならないのはまずは大洗の件だな。」

「それもそうでしょうが、それよりも重要なのは一昨日汪精衛が銃撃を受けた事についてそれに伴う今後のこちらの動きもあるでしょう。」

「そういえば、奴は死んだのか？」

「いえ、まだその様な報告は受けていません。」

陳が横の余に聞くと余は首を横に振った。

「大きくはこの2件。それに今後の軍事、インフラの改善についても考える必要がありますね。」

「……では先に大洗の件に関してから入ろうか。まずは彼らの存在について、黄広東航空司令。」

「はっ。昨日我々広東空軍は彼らから聞いた場所をもとに、東沙群島方面にアーサーチン少尉によるカーチスホークII航空隊を派遣。彼の報告によると、その場所に彼らの記載通り全長約8キロほどの空母型のもので発見され、甲板部には住民の居住が確認できたとのことです。」

「……つまりとんでもない大きさのシロモノだということだな。」

「人口密度も結構高く、高層の建物も幾つか見られたそうです。」

「技術力も高いと。」

「そして彼らが香港に提出したのが皆さんの手元に用意したそれだ。」

李と白はそれを手に取った。この部屋にいる数十人程はそれを無言で眺めた。

「……なるほど、確かにこれはそのまま受け容れられるものではないな。」

「だが、今回のことを香港総督のピール卿に確認したところ、彼らは本国からの紹介状を得る時間さえ惜しんで香港を去ったそうだ。そして分かっている限りこの大洗学園艦は2週間以上無補給。もう備蓄の余裕はないと思われる。そこにこちらが付け入る余地がある。ち

なみに大洗学園艦を受け入れて良いかと聞いたら即答で了承をくれた。」

「それでこつちから要求を突きつけると。」

首を縦に振った後、身を起こして手を差し出しながら陳が話し始めた。

「私が考えているのはこうだ。そこに船からの鉄鋼や住人の資産を含むことでこちらの財政の足しになる。」

「住人って、どれ位いるんですか？」

「予測だと1万から4万人といったところだな。」

「なんだそれしか居ないのか。」

「そんなものだろう。住人よりかは学園艦にある資産から徴収するのが筋だな。」

「そもそも大洗は日本の学園艦なんだろう。受け入れて反発が起きないか？」

「隔離した地域に居住させれば良いだろう。そして仮に住民にやられてもこちらは責任などを取る必要もない。」

「こちらに上陸させるんですか！食わせる飯はどうするのですか？」

「飯は作らせる。土地さえ与えればあんな学園艦を作るところだ。その技術が与えられればこちらの食糧増産にも一役買うかもしれないぞ。」

「つまり、陳さんの考えは向こうからの要求は破棄してこつちから大洗の住人を何処かに集めて住まわせて、更に鉄鋼とか資産を徴収するということか。」

「無論土地だけ与えるがな。資産が微々たるほどなら取らなくても良いが。」

「下手に金は掛けたくないですからねえ。」

その場にいた市商會主席の熊少康も同調する。

「人材は居たら御の字だな。」

「そこまでやれば利益は出そうですね。というよりそこまでやらないとこつちが大損です。」

「学園艦についてはどうするのですか？」

「放っておけばいいだろう。物資を寄越せという上にこちらが船を出す筋合いもない。」

「最もですね。」

「……住まわせる先が広東であるならば私もそれで構わない。あと労働力をインフラ整備にかり出せるなら。」

「地主との交渉が着き次第、そこそこの土地を買収してそこに住まわせる。」

「買収資金は鉄鋼をイギリスやフランスに売れば良いですかね。」

「そうだな。」

「市商会としても徴収したものの一部を回して頂ければ依存はありません。」

李はこの陳を知る身として今回のこの議論をかなり意外に感じていた。今回の受け入れは中華民国、イギリス両国が蹴っている時点で受け入れは現実味の薄いものと思っていたため、陳の受け入れの意思の9割は占星術と風水から成り立っているのかと思っていたが、思いの外その割合を現実的な思考が取って代わっていたようだ。

土曜日であるその日、冷泉麻子は前日2冊の本を借りていた本を手にとって、朝飯もろくに食わずに読み進めていた。この行動はやはり続いている定期的な遅刻による配給食糧の受け取りミスというのもその要因である。最近は受け取らなかつた分の再配給もほぼなくなった。もう食糧を再度配る余裕がないのだろう、そこは麻子が知らないことなので予想に過ぎないが。お陰で腹が減る。だが他の要因として、二つの本のうち一つが『悪魔の本』であり、それに引き込まれたということもある。いや、『悪魔の本』と言うと語弊があるかもしれないが、少なくとも我々、いや学園艦を運用する全ての国の人民にとつて忌み嫌われるべき本であるのは確かだ。学園艦、戦後の重化学工業への支援と学生の自主自立を名目に艦船上に造られた人工都市、それが生む結果を遙か前に示している。それが今麻子が手に取っているフランスのSF作家ジュール・ヴェルヌが書いた『動く人工島』、原題『スクリュー島』である。もともと麻子はこれを読むつもりだったわけではない。これが引用資料として出ている一冊の評論

を見つけて、それに釣られてついでに借りてきたものだ。あらずじはその評論で知ってはいたものの、やはり原本のインパクトは別物である。特にこの大洗の現状を示しているのは最後の方にあるこの部分である。

いや、まだ終わっていない。スタンダード島はまたいつかつくられるだろう。……しかしながら、何度でもくりかえしておこうー人工の島を、海上を自由に動き回る島をつくることは、人間に許された限界をこえることではないのか、そして風も波も自由にできない人間には、創造主の権利を横取りすることは禁じられているのではあるまいか。

この評論を引用したまた別の評論によるあらずじを付けておくと、「それは『近代冶金産業の成果となるべき人工の島を創造しようという実際のへアメリカ機械万能的な考え』に基づいて、アメリカの一株式会社が造りだした、電気を動力として完全に電化された巨大な浮遊海上都市、最高で時速八ノットで動く『スタンダード島』の物語である。

(中略)

『へビッグへへの趣向、へ巨大なものへの尊敬』を有するアメリカ資本主義によって造りだされた、そして裕福なアメリカ人を主要な島民とするこの人工島は、最後は、シエイクスピアの時代から変わらない二大有力家族の反目という住民の内部対立と、電力によっては制御しえなかつた台風によって南太平洋上で崩壊する。」

(『恋する原兎』 高橋源一郎著 より)

というものである。お分かりだろう、この人工島と二大有力家族がそれぞれ何を示すかは。そしておまけに現在人類が原子力という創造主の権利を横取りしているかもしれないものを、この学園艦は搭載している。管理出来るのであれば我々がいた世界に核兵器は拡散してはいまい。

最早今回の出来事は第二次世界大戦戦後のアメリカ的社会観の導入によって範疇を超えることが出来るようになった人間、日本人に対する創造主の罰ではないのかとさえ思えてくる、たとえお化けを心底

嫌う麻子が同様に目に見えぬ創造主なんでものを信じたくないとしても。日本の住人たちにとつての戦後、それは今回の麻子たちの事態を考えない訳にはいかない。今そこに居ないとしても、である。

この麻子は元来注意を受ける対象が持つ感情を風紀委員に對し持つていた。その為か今回、風紀委員を疑う思いは生徒会に協力する者の中でも強い部類に含まれる。だからこそこの学園艦の中で三つある暴力装置、風紀委員、警察、そして戦車道の中で最大の風紀委員への警戒を強めるべきと考えている。その為には警察では弱すぎる為戦車道を頼らざるを得ないだろう。だが西住さんは動くまい。だからこそ少なくとも敵にはしておきたくはない、同じチームの者としても。

しかしその為に行動する許可を生徒会から取れていない上にそのことについて話すきっかけがない。誰が面と向かって『風紀委員が反発して何か行動を起こすかもしれないから、その時何もしないでくれ』と何も事情を知らない友人に言えるだろうか。しかも現状生徒会は風紀委員の力なしにこの学園艦を治められているとは言えない。その他を圧倒する『力』に握られている、とも言える。その葛藤の捌け口として、麻子は今度はその評論を手に取り、その現代の『スタンダード島』をしかも幾つも生み出した日本の近代化と現代化とは何なのかに頭を使い始めた。そっちの方がまだ解決のしがいがありそうに思えた。

広西大洗奮闘記 生徒会十@と学ぶ戦間期中国史講座
座 下

生徒会十@と学ぶ戦間期中国史講座 下

小山「どうもみなさんこんにちは。いつも『広西大洗奮闘記』をお読みいただき誠にありがとうございます。閲覧数が日々伸びるのを眺めるのが作者の至福の時だそうです。」

角谷「ありがとねー。」

五十鈴「今回は10話の解説会の続きでしたよね。何の解説をするのですか?」

角谷「この作品のタイトルに関するものだったよ。」

五十鈴「この『広西大洗奮闘記』ですか?」

角谷「そう。この広西が何かを説明しなくちゃならない。ストレートにバシツと言っちゃってもいいかな?」

小山「ここまで読んで来られた方なら分かるとは思いますが…どうでしょうか?」

角谷「それじゃ、クイズ形式にしようか!」

小山「そこまで広西、が使われているものはない気がします。」

検索中……

五十鈴「……ありませんね。」

角谷「うん……」

小山「他に出てくるのが鎌倉のコンビニだけって……」

冷泉「つまり、完全に隠した『つもり』だったわけだな。」

角谷「じゃあ言うしかないね。じゃ小山、よろしく。」

五十鈴「とその前に注意です。」

作者からこの変な設定だらけの駄文を読んでくださる心の広い読者様への注意

・WIKI参考にしています。

・キャラ崩壊。

・独自見解が混じります。(思想的な寄りはできるだけ抑えるつも

りです。)

・解説にネタを混ぜますが、実際の歴史とは一寸たりとも関係はございません。

・これで歴史を勉強した気にならないように、特に受験生! こんなの読むなら資料集や教科書見ろよ! 今回は特に受験に関係ない話も載せるから!

・これも歴史上のいかなる人物、出来事、思想を評価、賞賛、非難するものではありません。

・変なところあつたらコメよろし。てか絶対あると思う。

・物語本編の流れとは関係しません。

登場人物

解説 小山柚子 (メイン)

補足 冷泉麻子、角谷杏 (ツッコミ)

疑問提示 五十鈴華 (? の提示とか)

その他多くの歴史上の人物のみなさん

小山「今回のこの広西、は中国南部にある現在の広西壮族自治区のことです。実際は少し異なるのですが、だいたい同じと理解していただいてかまいません。中華民国成立初期、広西省は他の多くの省と同様軍閥による支配がなされていました。」

今回はこのこと隣の広東にいる軍閥の方たちが出てきますので、そこの方たちの紹介とその歴史を触れておきたいと思えます。」

冷泉「予備知識で持っている人とかほとんどいないだろうからな。」
小山「まず、なぜこのように清朝崩壊後の中国は軍閥による群雄割拠状態になったのか説明します。清朝末期においての中国南部の大反乱である太平天国の乱が広西省の金田村で発生し、それと前後して地方の異民族などが反乱を起こしました。これらは鎮圧されましたが、その後清は光緒親政によって満州人を中心とした中央集権的政府を作ろうとしたため反乱を鎮圧した漢族の有力者らからの反発を食らい、地方と中央の分裂が深刻化しました。」

また、その後に成立した中華民国も大総統よりも議会の権力が強く、地方にも一定の権限を与えていたため、袁世凱政権が成立しても

地方はその土地の有力者が支配するような状況でした。そして袁世凱が死亡すると地方勢力の力が強まり、本格的な群雄割拠状態になったのです。彼らは教育、衛生、軍事などの面で支配地の近代化を進める一方、各地で互いに争いを繰り広げました。」

角谷「そして今私がいる広東とそこのお仲間広西による中国国民党中央執行委員会西南執行部と中国国民党国民政府西南政務委員会つていうのも扱的にはその地方勢力の一つだね。今後はこれら二つを纏めて『西南派政権』と書くことにするよ。」

小山「まずはこの西南派政権の成り立ちから見えていきましょう。これは北伐ののちに蒋介石が南京政府での権力強化を進めていたことにある一人の男が反発したことから始まります。その人の名は胡漢民、字展堂。人物については後述しますが、1931年に中国国民党の立法院長であった彼は蒋介石が中華民国訓政時期約法を制定する際に反対し、蒋介石と対立します。」

それに対し蒋介石はその年の2月に立法院長の役を解き彼を捕らえて軟禁し、その法を可決させます。この強権的な政策に反発した汪兆銘や孫文の子の孫科などが広州で反蒋介石の広州国民政府を樹立しました。また同時期に満州事変が勃発し国内世論としても大同団結の動きが出てきます。」

これにより南京政府と広州政府との間で妥協がなされ、南京政府と広州政府を統合する代わりに、蒋介石は国民政府主席を辞任し、広東省の政務機関である西南執行部と西南政務委員会に多大な権利を与えました。実質的に外交権以外の全ての権限、例えば内政、軍事、財政、教育、司法などに関してほぼ握っていたようです。」

五十鈴「ほぼ独立政府ですね。」

角谷「例えば広東省では儒教に即した授業が行われてたみたいだしね。」

小山「この政権は名目上は蒋介石政権の下にありながら、実質的には西南地域、広東省、広西省、雲南省、貴州省、福建省の五つを支配する政権でした。西南派政権の構成員はほぼこの5省、特に広東省の者によって構成されており、その中心は政治における理論的支柱の胡

漢民、そして広東省の軍閥だった陳濟棠が握っていました。即ち軍事と政治の両輪のもとこの政権は運営されていたわけです。」

冷泉「これについては南京政府についても言えるな。南京政府において軍事は蔣介石、政治は汪兆銘だったわけだ。」

小山「南京政府はそれまでの蔣介石、胡漢民体制から林森をお飾りの主席とした蔣介石、汪兆銘体制になった訳ですから、そうとも言えますね。しかし、西南派政権のほうも南京政府に取って代わることを目標とする胡漢民と地方政権として現状維持を望む陳濟棠の間では確執があつたみたいです。この西南派政権は元々反蔣、反共、反日掲げていました。その為日本に対し宥和的な政策をとっていた蔣介石とは対立していました。」

実を言うと胡漢民はこの西南派政権設立前は中央集権的な国民党による軍事政権成立に賛成しており、その為の反軍閥戦争も支持します。ですが反蔣の立場を示すため考えをまるつきり反対に変えて地方分権を求めるようになります。」

角谷「私こういうところ考えを変える奴は好きじゃないねー。やっぱり人の上に立つなら芯はしっかりしてないと。」

小山「この後共産党の追討を続ける蔣介石に対し、胡漢民はこれを自殺政策とまで呼んで非難します。即ち日本を追い払ってこそ国内が安定すると主張しました。この背景には蔣介石が執拗に共産党を征伐したことにより広東省周辺の共産党員が減少、影響も低下したため共産党への敵視が薄まっていたからとも考えられています。」

五十鈴「なんかあべこべというか何というか……」

小山「ですが1934年には共産党による中華ソビエト共和国の根拠地瑞金が陥落、長征に出たことにより近くの共産党の影響はさらに大きく低下しました。これで三つの反、のうち一つはほぼ意味をなさなくなります。そしてもう一つ、反日の考えも崩れていきます。胡漢民は中国と日本の戦争において恐るべきは泥沼戦による経済停滞であると主張していましたが、口では言っても現実味は薄いものでした。」

元々日本が中国において活動していた華北と西南地域との距離差

も影響して、あまり反日は逼迫した問題とは言えませんでした。そこに対蒋介石政権の布石として日本が介入します。日本は松井石根らを中心とした日本大亜細亞協会による西南派政権への工作による『聯日の幻想』によって日本に対する警戒を薄めることに成功します。」

冷泉「この松井石根さんは日中戦争時に南京を攻略し、戦後東京裁判で死刑判決を受けているな。」

小山「この西南派政権への工作の例として1934年の『両広華僑銀行』案というものがあります。これは南洋華僑の本国への送金をする際の銀行を広州に置くという案です。これは日本にとってそれまで香港経由で行われていた送金を日本に都合のいい場に移すために行われました。西南派政権からしても当時南京政府によって幣制改革や浙江財閥をバツクとした税制を領内で施行されたため、西南派政権も財政的基盤としてこれを求めていましたが、結局日本政府が西南派政権を信用できずこの計画は流れてしまいます。」

また先ほどの経済面においてもそうですが、その他にも国境への軍隊駐留など蒋介石政権は西南派政権に対して財、軍両面で圧力をかけていきます。即ち、一番の敵は蒋介石だったわけです。」

角谷「でも私たちのいる時代はそうでもないっぽいけど？」

小山「もうこの時期には既に反蔣の運動は西南派政権内部の中央進出派と地方政権派の対立により限界を見せはじめていました。そしてさらにこの前年である1933年に東隣の福建省で国民党反蔣派の一部が起こした福建事変を機に、蒋介石は西南派政権に対し勧誘工作を仕掛けます。この福建事変には結局西南派政権は中立の立場を取り、蒋介石の軍によってこれは呆気なく鎮圧されます。」

この時に中立と引き換えに蒋介石政権に『改革政治案』というものを提示しました。これは理論的、抽象的部分しか受け入れられませんでしたが、これが蒋介石政権と西南派政権の接近のきっかけとなりました。」

角谷「蒋介石もそれまでの反蒋介石運動に対しては武力行動が中心だったけど、この頃になると懐柔とかも使ってくるんだよね。接近してもやっぱり蒋介石は西南派政権が嫌いだったみたいだけだね。」

小山「そしてこの後、蒋介石と胡漢民はかなりの速さで接近を図ります。和解工作が行われる中、1935年半ばから胡漢民はヨーロッパに外遊に出かけます。そしてその最中の11月1日に起こった汪兆銘狙撃事件によって胡漢民の南京政府復帰は現実味を増していきます。そして外遊中の胡漢民も反蔣からそれを抑える立場へと立場を変えます。」

その翌年に香港に帰国しますが、体調悪化により現地に残っているさなかの1936年5月、胡漢民は脳溢血で急死します。そして政治的支柱を失った西南派政権は陳済棠を中心として両広事変を起し、反日を掲げて蒋介石政権に対し武力行動に出ます。

しかしこれは陳済棠の部下の裏切りによって内から崩れて、間もなく西南派政権はその役目を終えます。そしてこれにより南京政府はそれまでの政治と軍の指導者による合作体制が終わり、蒋介石による軍部独裁政権が成立することになります。」

角谷「いやー、長かったね。」

小山「と言っても約5年ですが。」

冷泉「それでこの後はどうするんだ？」

小山「ちよつと付け足し程度に西南派政権の軍備についてちよつと言おうかと。これでも他の軍閥よりは突出した軍備を保有していたんですよ。」

五十鈴「お金ないのはそれが理由なのではないですか？」

小山「まあそれもあるかもしれませんが。とにかく簡単に纏めると陸軍は広東省12万、広西省3万を保有していました。さらに広西省は自警団制とよばれる徴兵制度によって両広事変の際に20万の部隊を編成しています。」

角谷「この時代の中国で徴兵制度を導入していたところは少なかつたんだよね。蒋介石政権もそうだったらしいし、ある意味で中国の中では先進的だったわけだ。」

小山「ですが蒋介石は中央軍のみで99万人の陸軍を保有、さらに第5次共産党追討次には100万の兵力を動員しており、対するには十分とはとても言えませんでした。ですがそれだけではなく、地方政

権としてはほぼ唯一独自の空軍を保有していました。機体数は輸送機、練習機などを込みで広東省に約120機、広西省に約50機です。これは当時の蒋介石政権の保有していた機体数が約300機であることを考慮すると充実していた方ではないかと思えます。」

冷泉「だが問題があった。これは蒋介石政権にも共通して言えるが、当時まだ中国には機体を生産、整備するに十分な工場が無かったんだ。そのためこれらの機体もアメリカ、イギリス、イタリア、ドイツ、日本などから買ったものしか無かった。そのために日中戦争時に中国空軍は開戦初期は奮戦したが機体の補充が間に合わず劣勢になってしまう。」

小山「こんなところでしようか。海軍はいたことにはいたみたいですが、輸送艦福安以外は何者か不明でした。他には海虎、宝璧、広金という3隻があつたみたいですが、これらが何か分かる方は教えて頂けると有り難いです。」

角谷「ありがとねー。それじゃ、19話以降作品に出てきた実在した人たちを紹介して終わりにするよ。」

李宗仁（字 徳鄰）

1890年広西省臨桂の生まれで、中華民国の軍人、政治家。新広西派の主要な指導者と言われる。1924年の旧広西派の陸榮廷の失脚後混乱状態にあつた広西省を統一し、広西省の統治を始める。北伐にも協力し各地で北方軍閥軍を破る戦功を挙げるが、その後地方勢力の力を削ごうとする蒋介石と対立。蔣桂戦争、中原大戦と二度の反蔣戦争を引き起こすが、いずれも敗れる。

1931年に広州国民政府が樹立されると新広西派もこれに参加、再び広西省支配を取り戻す。この後広西省で『三自三寓政策』や日本の航空顧問団の受け入れなどを実行し、多方面で実績を挙げる。両広事変では陳済棠と同調するが、敗れたのちにも広西省の支配を承認され、日中戦争にも参加している。

この日中戦争次には日本に対して大きな打撃を与えたと中国内に宣伝された台児荘の戦いを指揮した（実際には打撃は与えたものの日

本側の戦略的撤退で、後の徐州戦役に繋がる)。日中戦争終結後は国民党政府の幹部として中国国民党副総統、のち総統に就任するが、共産党による中国統一を止めることはできず、アメリカに逃亡する。しかしのちに中国に帰国し共産党政権から歓迎を受け、そのまま北京で没。

余談だが書道が上手い。

ちなみにH O I 2だとスキル3攻勢持ちの少将で、恐らく林彪、朱徳、毛沢東、ファルケンハウゼンの次くらいに中国では優秀な將軍。また研究機関としてはスキル4の人海戦術適正と火砲持ちで、ドクトリンにおいては中国ではファルケンハウゼンと白崇禧の次くらいには優秀だったと思う。

白崇禧(字 健生)

1893年広西省桂林の生まれで、中華民国の軍人、政治家。李宗仁と共に新広西派の主要な指導者と言われる。祖先はペルシャ商人で、そのため白崇禧もイスラーム教徒だった。李宗仁と共に広西省の支配を確立すると、北伐にて各地で勝利を挙げ、その功績から「小諸葛亮」と渾名された。ちなみに中国では一番の戦略家といえれば諸葛亮孔明とされていることからその能力の高さが伺える。

その後も李宗仁と共に広西省支配を行い、共に台児荘の戦いも指揮している。この日中戦争において焦土作戦による総力戦を提唱し蒋介石に受け入れられている。その一年前まで両広事変などで敵対関係にあったことも考えると相当信頼されていたことがわかる。また3度に渡る長沙会戦を指揮して日本軍を撃退している。

国共内戦時には共産党の林彪が占領した四平の奪回に成功し、これが国民党側の唯一の勝利となっている。台湾での反政府暴動である二、二八事件では参加した学生に条件付きで恩赦を与えるなどしたため現地の人からの敬愛を受けた。

しかしやはり蒋介石とはウマが合わず、国共内戦終盤には防衛大臣を罷免され、南方で最後まで抵抗したのち台湾に脱出したが、その後は実質隠居状態だった。1966年没。台北のイスラーム墓地に埋葬されている。

ちなみにH O I 2だとスキル2伏撃持ちの少将で、まあ優秀。研究機関としてはスキル4の電撃戦適正で恐らく中国最優秀かな？でも中国で電撃戦は要らんから微妙……因みにこれまでの中国には満州国は含まないです。含んだら一位独占するから。

Sir William Peel

1875年イングランドのNorthumberlandの生まれで、イギリスの政治家、外交官。1930年から1935年まで香港総督を勤める。香港総督の間は電話の自動化やイギリスとの定期フライト就航などの実績を残す。その前勤めたクアラルンプールと香港の通りにその名が残る。

実は5月で退任しているのですが、後任の人が来るのが12月だったので今作ではこの人を出しました。確認が取れずすみません……

Samuel Hoare, 1st Viscount Templewood

1880年ロンドンの生まれで、イギリスの政治家、外交官。第3次スタンリー・ボールドウィン政権の外務大臣を勤める。その他にもインド担当大臣、内務大臣、空軍大臣などを歴任する。英独海軍協定の締結とイタリアのエチオピア侵略に対してホーアラーヴァール協定を結び、イタリアの領土拡張を許した責任を取って辞職する。

Stanley Baldwin

1867年イングランドのウスターシャーの生まれで、イギリスの政治家、実業家。保守党の党首として3度に渡り首相を勤める。第2次政権では男女普通選挙権を認め、第3次政権ではドイツのヒトラー政権に対して消極的宥和政策を取る。

John Simon, 1st Viscount Simon

1873年マンチェスターの生まれで、イギリスの政治家。大蔵大臣や外務大臣、内務大臣、司法長官などを歴任する。1935年の時は内務大臣。

陳濟棠（字 伯南）

1890年に広東省防城（現在は広西チワン族自治区）の生

まれて、中華民國の軍人、政治家。西南派の指導者の一人とされる。北伐時には広東省に残って海南島の攻略を指揮する。中原大戦では蒋介石側につくも、

その後広州国民政府樹立を機に蒋介石と対立。胡漢民と共に西南派政権を立て広東省を実質的に支配する。この間の産業の育成やインフラの拡充については一定の評価が為されているが、教育においては孔子崇拜を強化したり占星術や風水を人事や財政に持ち込んだりもしている。1936年に両広事変を起こすも失敗し、これにより陳済棠の広東省支配は終わる。国共内戦終盤には海南島を守備するも失敗し台湾に脱出。1954年に台北で病没した。

ちなみにHOI2だとスキル1大将で補給管理と古典派持ち。李宗仁と同じ年なのに古典派持ちという悲しさ。研究機関としてはスキル3と上の二人には劣るも、人海戦術においては李宗仁と適正によっては同等くらいに使えたりするのかなあ。

李漢魂（字 伯豪）

1895年広東省呉川の生まれで、中華民國の軍人。広東派の軍人の一人とされる。北伐時に軍功を挙げ、その後は蒋介石派の張發奎の下で蔣桂戦争などを戦う。汪兆銘らが広州国民政府を樹立すると李漢魂もこれに参加、師団長に任ぜられる。

しかし1936年に陳済棠によって実戦部隊から名目上の地位に降格させられたことにより関係が悪化。両広事変の際には陳済棠を裏切り、内部崩壊の一因を作る。日中戦争時には武漢会戦などを指揮、善戦する。国共内戦終結後李宗仁と共にアメリカに脱出し、そのまま静かに余生を送る。1987年、ニューヨークで没。

余漢謀（字 握奇）

1897年広東省高要の生まれで、中華民國の軍人。広東派の軍人の一人とされる。蔣桂戦争を蒋介石側で戦ったのち、広州国民政府に加わる。大同団結ののちは紅軍追討に参加する。両広事変時には陳を裏切り、内部崩壊の一因を作る。

日中戦争時には李漢魂と共に広東省の守備につき、日本軍を相手に善戦。国共内戦敗北後台湾に脱出し、そのまま1981年台北で没。

胡漢民（字 展堂）

1880年広東省番禺の生まれで、中華民国の政治家。日本に留学し法政大学を卒業後、中国同盟会に加入。辛亥革命時には広東省での革命を成功させる。袁世凱の独裁成立後は孫文の活動に協力し、要職につく。一時政治の表舞台からは引くものの、上海クーデタから南京政府に協力する。

しかしのちに蔣介石と対立し軟禁され、解放後は三民主義信奉者として西南派政権の政治理論的支柱となる。しかし晩年は蔣介石に接近し、1936年に広州にて脳溢血で急死。

林雲ガイ（字 毅公）

1881年広東省信宜の生まれで、中華民国の政治家。孫文の政府では財務、法務において要職を歴任する。1935年時には広東省政府主席。西南派政権の内政に手腕を振るった。1948年没。

ガイはこごとへんに亥なのだが変換出来ないのご容赦を。

黄旭初（字 不明）

1892年広西省梧州の生まれで、中華民国の軍人、政治家。新広西派の主要な指導者とされる。新広西派の広西省統一に協力した後、北伐に李、白らが出向くとその留守を預かった。上海クーデタによって省内の共産党を肅清し日中戦争時にも省内で共産党の大弾圧を実施するなど、共産党に対する不信感、警戒心が特に強かった。1931年から国共内戦敗戦まで18年に渡り広西省の内政に手腕を振るった。敗戦後は香港に脱出し、そのまま現地で1975年没。

李品仙（字 鶴令）

1890年に広西省梧州の生まれで、中華民国の軍人。新広西派の軍人の一人とされる。元は蔣介石派の軍人の部下として北伐、蔣桂戦争を戦うが、後に新広西派に帰順。南寧軍官学校の校長などを勤め、日中戦争時には徐州会戦、武漢会戦で部隊を指揮する。またこれと共に共産党に対する肅清も行っている。国共内戦後は台湾に逃れ軍人を引退、1987年に没すまで隣組の長として余生を送る。

黄光鋭（字 不明）

広東航空司令。アメリカに住んでいた台北系の華僑。少な

くとも1932年から両広事変まで広東航空司令を勤めた。
アーサー・リッチン

1913年アメリカオレゴン州ポートランドの生まれで、中華民国空軍、アメリカ陸軍航空隊のパイロット。最終階級は少佐。広東系の父とペルー系の母の間に生まれ、1931年の満州事変を機に広東空軍に入隊し、両広事変後は中華民国空軍パイロットとして日中戦争に従軍。

日中戦争末期に中華民国空軍を除隊しアメリカ陸軍航空隊に入隊。戦後中国航空会社を勤めた後、ポートランドに帰り郵便局に勤務した。1997年ポートランドで没。アメリカでは第二次世界大戦初の撃墜王として認められている。

熊少康(字 不明)

1934年から日中戦争時に広州の陥落する1938年まで広州市商会の主席を勤める。実はこの選出のための選挙では17位だったことから、実際は国民党、そして市商会内の派閥の妥協により選ばれたと思われる。

小山「……多くありません?」

角谷「こんなもんじゃない?」

冷泉「さらに今後も新たな人が出る予定だからな。今後は解説回を書かない予定だから、その都度解説するぞ。」

小山「というより李宗仁と白崇禧の解説がやけに長い気が……」

角谷「そりゃ『広西』大洗奮闘記なんだから新広西派の人たちの話は長くなるよ。」

五十鈴「率直に疑問なんですけど……」

角谷「どうしたの?」

五十鈴「H O I 2って何ですか?」

角谷「スウェーデンのパラドックスインタラクティブ社というところで作った、第二次世界大戦の前後をモデルにしたパソコンゲームだつてさ。正式名称はH e a r t s o f I r o n I I っていうよ。作者が好きなんだつて。」

小山「作者自分のパソコン持ってないですよね？」

角谷「ないよ。というよりこのゲーム持ってないよ。ニコ動の実況見てハマったんだって。まあ詳しく話せば長くなるし、ニコ動とかでガルパン&HOI2の動画見た方が分かりやすいから良かったら見てみてね。」

小山「これまでの参考資料の一部です。高校の教科書とWIKIは除きます。一部どこのページ忘れてしまったので見つけ次第のせておきます。」

1930—1940年代中国華南地域における商人組織の研究
張集歆 2015年

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/61554/1/ChapfunCheong.pdf>

日中戦争と中国空軍 萩原充 2004年

[https://www.koryu.or.jp/08030301middle.nsf/1384a27fc66866a1a4925679800a62f6/398bea4145bfd29f49256f0b002cf44b/\\$FILE/hagiiwara2.pdf](https://www.koryu.or.jp/08030301middle.nsf/1384a27fc66866a1a4925679800a62f6/398bea4145bfd29f49256f0b002cf44b/$FILE/hagiiwara2.pdf)

ゼークトの中国訪問 一九三三年 —— ドイツ側の政治過程および中国政治への波紋 —— 田嶋信雄 2008年

<http://www.seijolaw.jp/pdf/slrl/SLR077005.pdf>

国民新聞1935年6月10日号 支那陸軍の全貌

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentView.jsp?METAID=10186344&TYPE=IMAGE|FILE&POSI>

神戸大学図書館データ作成

神戸又新日報1932年5月6日号 陳策の艦隊に向け第一弾を

放たん

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=10099555&TYPE=HTML|FILE&POS
||

余談

ダーズリン「どうしたのペコ、そんなそわそわして。」

オレンジペコ「いえ、今日誕生日だったのでイギリス史や香港史関係で出番がないかと……」

ダ「総督がおいでになったのと私たちはもともと出てないから無いわね。それにしても誕生日おめでとう、ペコ。」

アツサム「ダーズリン様、このままだと我々がこの作品に出る確率は1%も無いかと思われます。」

ダ「『不死の感情』の方で活躍するから問題なくてよ。」

オ（手が震えてらっしやる……）

広西大洗奮闘記 31 地下

予想外に明るい。昼間のようだ。土曜日はこの時間、学園にいる人間はそう多くない。ある場所からその二人は階段を降っていった。段数は69、その理由は誰も知らない。何時もはその奥の扉を叩き、管理の者の返事が来るまで待たねばならない。

だかその者が急いで来ることから分かるのはここで答えるのはこの役に相応しい真面目な者か、それともただ交代を急ぐサボりたがりかの二択である。その者は三つある鍵のうち二つを開けると、その向こうから扉越しに声を通した。

「第3条、全文。」

どうやら前者のようだ。しかもくそのつく、よりによってこれを選ぶとは。

「……風紀委員会会則第3条

第1項、風紀委員長は風紀委員総数の過半数の信任を持ってその役に任せられる。3名以上が立候補し過半を得る候補がない時は、上位2名にて決選投票を行う。

第2項、風紀委員長の任期は10月1日から次年度の9月30日までとする。

第3項、風紀委員長は風紀委員副委員長及び各担当長を任免する権利を有す。ただし解任に関しては全ての担当長の過半の賛成を得なければならぬ。

第4項、風紀委員長の解任は風紀委員総数の4分の1以上の署名で発議でき、風紀委員総数の3分の2以上の賛成を以ってこれを解任。時期風紀委員長の選出までは風紀委員副委員長がその任を代行し、後任は決まり次第その残りの任期を勤める。」

「……『マリが入院したそうですが?』」

『飯原麻里は大洗学園艦総合病院で順調に回復しています。』

「その声は間違いなく委員長ですね。すぐに開けますのでお待ちください。」

丁寧に確認が取られた後、最後の一度鍵が回る音がして外向きに扉

が開かれた。

「手続きの仕様ゆえ失礼いたしました。」

「いいえ、真面目なのは結構よ。」

ゴモヨは頭を下げながら腰に鉄の棒を戻す担当にそれを解くよう手で示す。

「副委員長もご一緒でしたか。」

「ご苦労様です。」

「それで、3人の様子はどうか？それを見に来ただけど。」

「特に抵抗はしませんし、画面を通じてですが真面目に授業も受けているようです。」

間にもう一つある扉の鍵を開けながらその者が答える。

「……こちらに対する不満はどう？」

「たまにぶつくき投げかけてくるそうです。」

「そのくらいが丁度いいわ。」

扉が重そうな音を開けて開き、通路を歩く。床の埃まで見えそうな明るさだ。

「こちらですね。」

案内された二人の前には広々とした左手側と縦の太めの筋が何本も通った右手側があった。その筋の向こうからは人の声がする。

「一応ここに入ってること以外はできる限りの手配はしています。食糧、水、学習用具、そして彼らの自室のものも一部移動して持ってまいました。彼らは全員寮やアパートに住んでいるので、面会希望がないのも有り難いです。」

「そう、じゃあそれぞれの個室から呼んで貰えるかしら？」

「分かりました。あと一応こちらをお持ちください。」

その者はゴモヨとパゾ美に二本の鉄の棒を渡すと、近くの鐘を打ち鳴らし中の3人を呼び出した。

「高田、杉本、吉田。出てこい。」

「はい。」

「何よ。」

「今日は何の指導でございますかあ。」

中からは文句を言いながら3人の女が姿を見せる。

「……この3人ね。」

「おや、今日は誰が指導の担当かと思っただら委員長と副委員長か。」

「我々をここに連れてきた張本人が何の用ですか？」

「簡単に言うなら、あなた方の願いのうちの一つを叶えに来たのよ。」

「願いですか。無論、ここを出れるわけではないでしょうが、何ですか？」

「私たちは自分で生徒会が何を隠していたのか調べたわ。それを教えようと思つてね。」

「……つまり、私たちが直訴して得ようとしていたことを伝えてくれると。」

「……信じられるかよ。生徒会の手先として私たちをここにぶち込んだ奴らだぞ。」

「無論それは承知よ。だけどこちらの立場を理解して貰えたら嬉しいわ。」

「立場ですか……とりあえずその内容を教えてください。」

「勿論よ。」

ゴモヨは近場の席に着くと、風紀委員が現状把握している内容を語り始めた。

「どこから話すべきかしら……まずは本当に日本からの補給は切られているわね。実際香港の南方の沖合、フィリピンの近くに現状いるみたいね。」

「どうりでこの季節にこんなに暑いわけか。」

「そしてこれまで通つて来た周辺の国に補給を貰えるか交渉しているわね。」

「それを学園艦の人々には伏せていると。」

「そうね。概要はこんなところかしら。」

「ところで、私たちにそれを伝えてどうするんです？ 私たちはここを出れない訳ですから意味はないのでは？」

「……その日が来たら、あなた方はここから出すわ。その代わりその時に我々に協力して欲しいの。」

「何の協力だ？」

「『これ』を使った行動よ。」

ゴモヨは右手に握った鉄の棒を左右に振る。

「相手は生徒会、ですか。」

「ええ。」

「驚いたな。まさか生徒会の指示に従っている風紀委員がそんなこと言い出すとは。」

「何時から風紀委員が生徒会の配下だと思っていたの？ 私たちが望むのは風紀の維持と学園艦の平穏。その後者が生徒会の要望と一致したから協力してただけよ。」

「それで、生徒会にそれを使って何をするんです？」

「さらなる情報開示ね。このまま海外の国と交渉してその国に下手に取り込まれたら、私たちは日本人ではなくなるわ。それは住人の同意なしにやって良いとは思えない。それを生徒会から正式に発表させて学園艦の住民が反対すれば、生徒会も流石にそれには逆らえない。力からしても学園艦で風紀委員に対抗できる機関はないから、問題ないはずよ。」

「で、その為の人員として協力すれば良いのか？」

「そうね。人員もしくは指揮官としてね。もし協力してくれれば次の寄港地で奢ったり風紀委員の幹部として待遇するわ。生徒会の圧政に最初に抵抗しようとした英雄としての賞賛も付けてね。」

「幹部の話は結構ね。この頭をおかっぱにされたらたまらないわ。」

「まあ、ここに閉じ込めた分だけの利益をくれるなら考えるさ。」

中の3人はそれぞれ顔を見合わせながらその方針に仕方なしの賛意を示す。何せ自分たちがやろうとしてたことを代行してくれるとこのうのだ。おまけにここから出られるなら素直にしたほうが良い。

「納得いただけただけようで感謝するわ。」

「それで、いつ出してくれるんだ？」

「動く当日よ。それまではダメね。」

「まあ、下手に解放したら生徒会から疑われるのは目に見えて分かりますからね。」

「それでは当日はお願いするわね。必ず朝には呼びに行くから。」

「……まあ、ギリギリまでバレないようにというやつですね。」

「そうよ。この不便は確実に解消するから、その時はよろしく頼むわよ。」

「まあ、出さなきや食糧不足にでもなつて外で暴動でも起きたらあなた方何されるかわかんないからな。信用しきつた訳ではないが、話は分かった。」

「では私も暇じゃないから失礼するわ。」

「あ、ありがとうございます。」

ゴモヨが鉄の棒を手に取りながら席を立つと、パゾ美は頭を下げながらそれに続く。

「監視は継続ね。一歩たりとも外には出さないですよ。」

「勿論です。それとこのことカナン担当長にお伝えしますね。」

「一応よろしくね。」

鉄の棒を監視担当に戻しながらゴモヨは耳打ちする。

「ではこちらへ。」

階段を昇る音が途絶えた時、再びここに静寂がもたらされた。

再び日の光を浴びていたゴモヨのタブレットに一つの帯が浮かび上がる。それを押すとパスワード設定が表示され、5文字のアルファベットを打ち込むと日本語の文が表示された。

「……こっちは安パイそうね。」

「ゴモヨ、どうしたの?」

その文を一通りチェックすると、ゴモヨは黙ってそれをパゾ美に手渡した。

「……ああ、なるほど。」

パゾ美はそのあと画面の上で指を動かし、最後に画面に触れてゴモヨに返した。ゴモヨも同様な行動をとり、最後に画面に触れると再びそれを元の場所に戻した。

広西大洗奮闘記 32 李のアイデア

まだ広州での会議は続く。

「……まあ、取り敢えず大洗を受け入れることは良いだろう。」

陳が背筋と腕を天井に近づける。

「そうだな。こちらも約束を実行してくれるならば異存はない。」

広西の代表として李も同意する。

「となると、次は汪精衛の狙撃を受けた今後についてか……容態は？」

「現在まだ報告が入って来ておりません。」

「……2日経って何も無いということは死にかけの状態が続いていると見るべきですね。」

「そこまで重篤ならば、政界からは一步引くことは確実として良いかと。」

「汪精衛が抜けるとなると、後釜は……」

「張岳軍辺りでしょうか？」

「……蔣の側近か。」

「何れにしても、蔣へのさらなる権力集中は間違いないだろうな。」

「そして、こちらへ牙を剥く時は……」

「共産党と日本次第でしょうね。どちらかが安定すれば、叩きに来るでしょう。」

「すでに経済的には叩かれまくっているけどな。だが我々は正直それに対して大きく打てる手が無いのも確かだ。一応ここは国民党の支配下。ここで国民党が税をとることに異論は出せない。」

陳は頭を抱える。

「ウチではそのようなことは無いですが、何せ山がちな広西ですから、税金はあまり有りません。」

「イギリスやフランスがこちらに肩入れしてくれそうな気配も無いしな。」

李も白も良い顔色ではない。

「金も無い。兵力も劣る。外交は不利。やること無いじゃないか。纏まっても烏合の衆だろうに。そしてそちらの主な支援元はアメリカ、

イギリス、ドイツ。こちらはフランス、日本。とても纏まれるとは思えん。」

「反蔣があるじゃないか。」

「それだけでは間違いなく内部分裂を呼びます。経済的な協力関係ならともかく、政治的にも協力関係を築くのは無理でしょう。」

「しかし、纏まっても軍事力では勝てないのだ。別個なら尚更無理だろう。ここは小異を捨てて大同すべきだ。即ち勝つ為には犠牲が必要だと相手に思わせなければならぬ！寧ろ鶏口、無為牛後！鶏口である為にはそれなりの力を持つ必要がある！」

「大同して蔣に面と反抗して得るのは日本と共産党だ！確かに共産党は落ち目だが、それでも日本相手には得策じゃない。」

「しかし、蔣に反目せねば我々の存在意義なんて他にないだろう！ただでさえ今の我々には展堂殿がいらつしやらないわけだから！」

「蔣と戦えば世論はついてきません。そんな中で勝ち目のない戦いが出来るはずがありません。それに戦争となれば蔣は間違いなくこちらに対して分断工作をこれまで以上に進めるでしょう。それに対抗出来ますか！」

「……ではこのまま滅べと。蔣は間違いなく牙を剥く。それに抗うなと。」

「我々が本格的に協力関係を強化したら蔣を刺激します。我々が戦うのは少なくとも今ではありません。」

「共産党を呑もうとし、そして今後も統一を進めていくだろう蔣に対して、まだ軍が境界に集中しきっていない時がそうなのではないか？」

「武力で勝つのは無理です、この先も。」

白が反対し、陳は若干これに押されつつあった。周りの広東の者は積極的に協力しようとしなない。これにも無論訳がある。

嘗てから広東と広西は敵対関係にあることが多かったのだ。そう、この李宗仁と白崇禧らの前に広西を支配していた陸榮廷の時から。蔣桂戦争の時も中原大戦の時もそうである。それでありながらここで手を組もうとしている事に心理的に拒否感を覚えるものもある。

白と陳の議論から抜けて考え込んでいた李がふと手を挙げた。

「どうした、李さん。」

「ちよつと考えがあつてな。」

「考え? どういうものだ?」

「まず広東、広西の双方からなる政務委員会を設立する。これは現状よりも遥かに権限を持ったものにする。」

「李さん、貴方は先程まで反対してたじゃないか。急にどうした。」

「だがこの委員会のトップを広東、広西どちらが握るか揉めるだろう。だから、折衷案として今回来た大洗のトップをこの委員長に就ける。」

その言葉を聞いた周りは一斉に静まり、各々の丸くされた目から放たれる視線が李の座る椅子の一点に集中する。

「……冗談、だろうか?」

「いや、結構本気だ。」

初めに口を開けて零した陳の言葉にも李は平然と答える。

「向こうの代表が女だったのも知っているよな。」

「それは向こうが『女子学園』と名乗っているのだから当然だろう。」

「いや待て、待て、本当に待て。お前はこれまでのこの中華の歴史を見て、女が政治に介入した時その王朝がどうなるか知っているだろう。」

八王の乱、則天武后、韋后、楊貴妃、万曆帝期、西太后。その後これらがどうなったかは言うまでもない。

それよりも外から来た者をトップに就けるとはお前はここの政治的権限を失いたいのか! それにそんな事したら更に支持を得られないだろう。」

「無論それは分かっている。だから手を打つ。まずは彼女に権限は与えない。椅子に座って判を押すだけだ。そして彼女が日本人であることは隠す。確かに広東も広西も華北や上海、南京ほどは反日の機運はないが、無いわけではない。」

「いや、そういうのはいい。就けて利益はあるのか!」

「……南京が断った大洗を受け入れ、保護するという名分が入る。」

「名分!? そんな物のために彼女をトップにするというのか!」

「今の我々にはこれが必要なんだ。では陳さん、展堂殿は来年欧州か

ら帰っていらつしやるようだが、彼をこちら側に戻せるか？」

「……控えめに言つて、出来るとは言えない。南京も引き込もうとしているし、厳しいのは間違いないだろう。」

「そう。展堂殿がいないうえに汪精衛が失脚するなら、西南政務委員会は成立経緯上その存在意義を失う。だからこそ、それに変わり得る存在が必要なのだ。」

「しかし、南京が彼らをその価値があるものとして認めるでしょうか？」

「鉄鋼だ。考えてみる。全長8km近いとんでもなくでかい船だぞ。内部を支える為に多くの鉄鋼が使用されているとみて間違いない。その一部でも南京に贈ると言ったら？」

「願つても無い話でしょうね。」

「南京からすれば日本人を受け入れるという彼らの嫌悪感を呼ぶ最大の理由がなくなる訳だ。その代わりに大洗の保護権をこちらが握る。」

「成る程、小分けにして定期的に送れば向こうは攻めると鉄鋼が止められるから躊躇するというわけですか。」

「それに向こうとしては日本人のいる大洗を引き受けたくないからこちらを潰す訳にもいかなくなる。潰して鉄鋼を得る為には大洗を保護しなくてはいけなくなるからな。そして我々が正式に保護権を保持していると示すにはトップに就けるのが分かりやすい。」

「……話は分かった。だが、やはり女をトップに据えるというのは妥当とは思えない……あの代表ではなくて適当に無能を捕まえて就ければこつちの政治に口を挟まないのではないか？」

「女であるというのにも訳がある。そもそもお飾りだからどちらでも良いというものもあるが、欧州では世界大戦後に女の地位が向上した。イギリス、アメリカでの男女平等の選挙権などがその典型だ。その中で女をトップに据えたら世界からどう見られる？」

「……進んでいると見られる、と。」

「そう、仮にそれがお飾りであっても張り子の虎の継続とは思われない。そして我々が生産体制を整えるまでは欧米の支援を受けなければ

ばならない。そしてその為に国や企業の幹部層に会うわけだから相手と話を通じる程度は有能でないと困る。」

「……その委員会に広東、広西双方が加われれば双方が現状を守れるということか……確かに一度会ってみて、それなりに話は通じる人間だったか……」

「だが、実権は持たせん。委員会での発言権もなくしてしまつて、象徴的存在にしてしまふ、というのが私の案だがどうだろう?」

「……この広東が守れるなら、私は如何なる手段でも取る。」

「伯南殿!しかし……」

広東の幹部層は陳に声をかけようとする。

「国外に脱出するような事態になるよりはマシだ。流石にそれをそのままという訳ではないが、大枠は同意しよう。」

その一言で周りの広東の者たちも陳が賛成しているからと反対の意は示さなかった。この一部には南京で籍を持っている者もいるが、それでも敵対する事になれば余程のことがない限り受け入れられることはあるまい。わざわざそれを捨てる必要はなかった。

「ではこの後細部を詰めていきたいが、その前に一旦休憩としよう。それにその統一した委員会を作るのならば、財政をどうするかや運営体系を決めなくてはならんし、やる事は多そうだな。取り敢えず昼食を用意しているから、食べていってくれ。」

「ご相伴に預かるよ。」

その会議室からはぞろぞろと参加していた者たちが連なつて出て行った。李と白もその最後に行く。

「徳鄰、どういうつもりだ。」

李の耳元に低い小声が来る。白のだ。

「陳さんが言った通りだ。もはや、我々に嘗ての、蔣に堂々と反旗を翻す程の力はない。合従するしか大広西を守るすべはない。そして大洗を受け入れるなら広東と共にこの策を取るのが妥当なだけだ。広西はそこまで反日の機運もないしな。」

「……だが、女がトップに就くとは……」

「反対か?」

「私も陳さんが言っていたようにするべきだと思うがな。下手に頭が良い奴を就けると面倒になる気がするが。」

「……寧ろそうでなくては困るのだ。」

「?何故?」

「……この会議の人数比を見る。殆ど広東の者たちだ。そして仮に委員会を作るならばその委員はやはり広東の者が多くなるだろう。その中で我々が安定した発言権を得る為には第三極がいる。それが大洗だ。」

「待て、大洗から引つ張ってくるトップには発言権を与えないんだろう? 発言権もない奴が第三極になる訳がないじゃないか。」

「多分求めてくるし、こちらは呑む。」

「流石に陳さんは認めないだろう。あの人からすれば大洗は駒だ。いや、我々もそう見るべきだろう。駒の言うことを呑むとは……」

「いや、呑む。考えてみる。そもそも奴らがここに来たのは偶然だ。元から来るわけじゃなかったというのは嵐の時に来たとかこちら宛の正式な要求書が無かったことから分かる。即ち正式に物資援助を頼んでいる他国が居てもおかしく無いわけだ。」

「……もしその国が先に大洗と手を結べば、この計画は終わる。そしてその先にあるのは……」

「その通り。我々が手を組むことの必要性は陳さんが一番良く知っているから、少し妥協してでも呑むだろう。何せ委員を占める人数で広東と広西の差が一人になる事はないだろうからな。」

「こちらからすればいいよりかはマシ、になりますけどね。」

「そしていた方が良い理由はさっき話した通り。即ちトップを場合によつてはこちら側に付ける機会が得られることが肝要なのだ。」

「確かにそうですね。」

「まあ詳しくは昼を食べてから考えることにしよう。もう着いたみたいだからな。」

「ですね。」

李も白も視界の向こうに見える料理に舌鼓を打ってから細かく考えることにした。

広西大洗奮闘記 33 硬鉄と軟鉄

土曜日、だがそんな事など考える者はここには滅多にいない。答えは簡単、いつも通りの日常の光景がここにいる者には見えているしその通りに身体を動かしているからだ。

「小山先輩、工学科の方が面会を申し出ています。」

席に着いて資料の上下を整えていた小山がちらりと腕時計を確認する。

「少し早めだけど、ちょうど良いわね。お迎えして。あと鉄鋼関連に絡んでる者を呼んでくれる?」

「分かりました。」

華は隣の部屋に戻って呼びに行き、小山が先程の資料を戻し終えた頃、華が連れてきた少し背の高い女性二人の後ろに呼んだ生徒会の者たちが着いてきた。その工学科の女性らは自動車部の様なツナギをしつかりと着こなしている。

「どうも、工学科の鹿島です。今回の依頼に関するグループリーダーを務めます。」

「清水です。サブリーダーを務めます。」

「生徒会副会長の小山です。今回の件に關しましては角谷会長に変わりましたわたし小山が務めます。よろしくお願いします。」

「こちらこそ。」

軍手を外して手を伸ばしてきた二人の手に答えると、早速鹿島が持っていたカバンに手をつける。

「それでは早速お話ししたいのですが、ホワイトボードのようなものはありますか?」

「ホワイトボードですか……」

「出来れば絵や図を用いて説明したいので。」

「うーん……」

「小山先輩、練習試合の前に使った第二小会議室はどうでしょう?土曜日ですの使っているところは無いはずです。」

「ああ、あそこなら確かにホワイトボードも有りますからね。」

「ではそちらで。」

工学科の二人は華に案内され、他の生徒会長室に来ていた生徒会の者たちもそれについていく。最後に小山がそこを出て、扉に手を触れたまま鍵穴を回した。

正面にはホワイトボードが立ち、その脇に工学科の二人、そしてそれと垂直に交わる縦長の低い机の両脇に大洗の制服の者たちが腰を下ろす。

「では早速今回受けました鉄鋼の切り出しについてご説明します。」

清水が資料を前に座る小山ともう一人に手渡している間に鹿島は口を開いた。

「今配っている資料をご覧になりつつお話を聞いて頂ければと思います。この学園艦はご存知の通り、一辺300mの鉄の立方体のブロックを無数のボルトで留めることで浮かんでいます。今回の依頼はこの立方体を切り出すことで鉄鋼を確保したいとのことでした。」

「はい、そうです。」

「まずはご用意した資料2ページ、この学園艦の内部構造図をご覧ください。この学園艦は先程のブロックを大体縦に25個、横に3個、上に2つ並べ、その形を瑞鶴型にし、その上に甲板下の設備を載せています。それで今回の計画に関してです。ここから依頼通り連絡通路の増設を名目にその壁となる鉄鋼の切断を行おうと思うのですが……」

そういうと鹿島はホワイトボードに立方体を図をきつと書いた。

「この縦が300mになります。確かに多くのブロックは途中に段を挟むことで倉庫などのスペースを確保しています。ですが空間の広い、例えば区切る天井まで100m以上ある一部のブロックに置いて、ここに持ち運べてしかも平面の状態から切り出せる様なものになりますと、あまり高いところでは出来ないのです。いえ、切り出せたとしても運搬が厳しかったりします。さらに言いますと切断出来る場所もあまり多くありません。エンジンや港の近くは避けなくてはなりませんし、上の甲板部を支えるだけの強度が保証できなくてはいけなかったりなどの多種の理由で想定なさっているよりも少ないと

思いますが、よろしいですか……」

「構いません。総量の予測は怎么样了ですか？」

「こちらの予測ですと約840立方メートル、総量6・6ktほどを見込んでいます。これは重機操作においての現在使用可能な燃料の量も考慮にいれた値なのでそれさえ貰えれば結構増えるとは思いますが。」

「?????、6・6kt!」

「はい。やはり少ないですか？」

「い、いえ、とんでもない!それでも十分すぎるくらいです!」

小山が大げさに顔の前で腕を左右に振る。

「それと、もう一つ問題があります。この学園艦は先程上下二層のブロックが積まれているとお話ししましたが、上層は硬鉄のブロックなんです。」

「硬鉄?」

「簡単に言うと、硬いけど脆いんです。下層は軟鉄と言って、柔らかいけど頑丈なのですが。硬鉄は船舶などに不向きです。目的は転売用とお聞きしますが、軟鉄よりは扱いにくいと思います。」

「どうして上層の方から取る鉄鋼の量が多いのですか?」

奥の方に座っていた生徒会の一人が手を上げる。

「学園艦全体のバランスから考えまして、重心を上げるのは良くないからです。そちらの方が艦が安定しませんから。」

「成る程。」

「それと下層にはあまり段が取られてないので切断しにくいというのもあります。大方の説明としてはこんなものですが、他には何かございますか?」

「出来た鉄鋼は何処に?」

「転売用とお聞きしてきますので、港の近くの空きスペースにサイズを揃えて順次用意する予定です。規格はこの取り出したままの形を維持出来る磨き鋼材で、6F品、すなわち光るくらい磨いた形にします。あ、そうだ。一番重要なことを忘れてました。」

鹿島は慌てた素振りです。手持ちの資料をめくりだす。

「硬鉄は鉄、炭素以外の配合は少ないのですが、軟鉄にはそこそこのク
ロム、約13%入っています。実質ステンレスです。すなわち鉄鋼と
して転売するのは厳しいと思いますが、よろしいですか?」
「寧ろ錆びにくいならそれに越したことはありません。」

小山も手持ちの資料のその部分を確認し、同意の意を示す。

「他にご質問のある方は?」

「価値はどれ程ですか?」

「私が手に入れている最新のステンレスレートが大体1t35万円、
鉄鋼のレートが6万円ですので、あまり加工しないことも考慮すると
13億円程度かと……」

「そう言われると価値はあまりなさそうな気がしますね。」

「……はい。正直これで学園艦の現状を打破しうるに十分な予算が確
保できるとは思えません。こちらは代え難い経験が出来ますから構
いませんが、本当によろしいですか?」

「ええ、そのまま実行してください。出来れば他にも鉄鋼、ステンレ
スの方でまだ切り出しが可能なところがあればそちらを優先的に願
いします。燃料に関しては万が一のさいは石油の流通を止めてま
でもそちらに回しますのでご安心ください。」

「分かりました。進み出たこちらもご期待に添えるよう善処します。
他には?」

鹿島とその脇に立つ清水の目の先に目立ってそびえるものはない。

「ではこのように実行します。どうぞよろしくお願いします。」

「こちらこそ。」

一歩前に進み出た鹿島の手に小山も席から立って応じる。

「何か有りましたら連絡をください。それでは失礼します。」

扉の前で二人並んでその長身を折り、軍手をはめ直しながら駆け足
で去って行った。ケータイさえ使えればここまで急がなくても良い
のだろうが。手元にあるあれが暫くは単なる硬い何かでしかないこ
とはやはり不便なことだと思わざるを得ない。

呼び出した生徒会の者たちは各自の業務に戻るよう指示し
た。やはりあの廃校の危機を乗り越えた人たち。この様な絶望的な

状況でも机の前で確実にこの学園艦に必要なことをこなしてくれている。さて私も業務に戻らなくてはならないのだろうが、午後の配給に出向くまでに一つの仕事をこなすには微妙な時間が残っている。そこで先程の資料に軽く目を通し、水を飲みながら暫しの間休むことにした。あとは出発まで待てばいいだろう。

と小山が考えていると、あの甲高い耳をつく電子音がそれを止めさせた。これが繋ぐ相手とその内容はすぐに分かる、それが非常に面倒なものであることも。前考撤回とでも言えればいいだろうか。現在この学園艦のトップとしてとり仕切るこの少女にはそのような些細な休息も与えられないようだ。

広西大洗奮闘記 34 人の噂は

「乾杯。」
「乾杯。」

都内のある高級レストランにて、高貴な服を着た高貴な3人の手元にあるワイングラスが天井の明かりを反射し透過させながら高く掲げられ、軽く弾性衝突を繰り返す。口元に戻されたその白い中身をそれぞれ味わったのち、机の上に戻す。

「君の再任決定を祝おうじゃないか、辻くん。」

「再任も何も首の皮に骨が付いただけですよ。」

「いやいや、こちらとしても君で安定してくれる方が助かるからな。続投おめでとう。」

黒縁眼鏡に微笑んだ顔で紳士とハゲが誉めたたえる。

「しかし、あれ程のことがもう鎮静化しているとは。」

「人の噂は七十五日と言いますが、本当にそれより短いですね。何より1週間前に海上保安庁がかなり捜索部隊を縮小しても文句のもの字も出なかったそうで。」

「全くだ。だからこそやり易いんだけどな。さて、戦車道連盟は今後の運営をどうなさるおつもりですか?」

「高校生に関しては今後は残った8校と今回の大洗の話を受けて参加を決めた2校を加えて運営していこうかと考えています。そうなる」とこの中で強いのはマジノとか辺りですかねえ。」

「あそこですか。確かアンツイオに負けたと聞きますが?」

「その中で、の話です。大洗の下手な参入でこれまでの暗黙の了解が崩れ、戦車道連盟の財政が崩壊する。それだけは理事長として避けなければいけない。まあ、2年後の世界大会ら辺は大学組と社会人で賄えば良いんじゃないですか?その先は知りませんが。」

そう言いながらハゲはワイングラスを口の前で大きく傾ける。

「そうですね。それで少なくとも力を入れた分の結果が取れると思いますよ。島田君もいることですし。」

「西住よりは島田の方が動かし易いということか?対立してくれた方

がそちらには良い気もするが。」

「そうですね。まあ私は今回のことがどの様にして起きたのかは知る気もしませんが、こちらの利に適うなら何の文句も有りません。しかも今回のことで手を組まれて逆らわれようものなら対処できませんし。こうなれば大規模には反発してこないでしょう。」

「貴方の責任問題が長期化、かつ大規模化するのを防げる訳か。」

「さて、こちらにも戦車道の補助金なんてものはどうでも良いですが、今回の奴らに払っていた運営費用はどうなるんですか？」

「まずは大洗のキャンセル費用関連、そしてあとは国費に繰り入れだ。予備費扱いだから今年は恐らく使えないだろうがな。」

「カネはあつて損はしませんからね。」

「あつて損はないどころではないぞ。他校の運営費がそれなりに賄えるからな。」

「まあ、今回の奴らの7つは私立ですから。しかも聖グロやらサンダースやらカネのあるところばかり。補給を止めても大洗の廃止繰り上げでさえ湧いたこつちの世論が沸騰するまでの時間が稼げますから、今回の策が一番妥当でしたな。」

「しかもその主は文科省の管理下。別に学問や研究を管轄する文科省が研究を管理下に入れても何ら問題はない。監視体制は信用出来る知り合いの運営する警備会社に頼んだ。万一どういうものか掴んでチクろうものなら職ごと吹っ飛ぶ。わざわざこのご不景気のなかやる者はいないさ。」

「はっはっは。高谷さん、そこら辺の腕は流石としか言いようがありませんな。」

「いやはや、お見事。」

「失礼します。」

酒も入り少し気分が盛り上がった頃に、ウェイトレスが少し大きめのまな板を3人の真ん中に置いた。

「前菜の盛り合わせでございます。」

「中身を教えて頂けるかね？」

「はい。こちらからレバーのパテ、サーモンのカルパッチョ、生ハムと

ルッコラのサラダ、ピクルス、それとチーズがゴルゴンゾーラ、青カビの計7種となっておりです。」

「おお、ありがとうございます。」

「それでは、ごゆっくりどうぞ。」

ウエイトレスは一礼して他の人の分の料理をもう片手にその場を去った。一品一品指し示すために前傾姿勢になりながらも一つ一つの皿は少しも傾けないバランス感覚には敬意を払わざるを得ない。

「んっ！このチーズ美味しいな。」

「少し塩気が効いてますが、これならワインも頭から少し重い頼んでも問題なかったですね。」

「まあ、過ぎたことは気にするもんじゃないよ。ところであの人たちが帰って来るとして一番その中に混じっていて欲しくない人っているかい、辻くん？」

「うーん、そうですね……西住の娘どもはどうでも良いですが、あの大洗の角谷とかいうチビ助は帰ってきて欲しくくないですね。」

「ほう、西住姉妹はいいのかね？」

「あの二人はまず妹は西住流じゃありませんし、姉も戦車乗りとしては優秀ですが没落した流派を盛り上げられる、まあ家元としての能力は十分には見えませんから。」

「なるほど、やはりあの二人は戦車乗りと。」

「私は門外漢なのでその様に見えますが、連盟会長としてはどの様にご覧になりますか？」

「……家元としての実務能力は、今の家元には敵わないでしょう。その実績と知名度でどれほどついてくるか、ですな。」

「やはりそうですか。」

「その点では島田の娘の方が遥かに優秀です。飛び級しただけの頭はあります。」

「話の分かる家元が戦車道の取り纏めとなればこっちもそちらも話が進めやすい。世界大会後の規模の調整などもね。」

「それはそうですね。では、メインが来る前に前菜、片付けてしまいましょう。」

「お、そうだな。」

3人は口を閉じてフォークのスピードを上げた。

「本日はありがとうございます。」

「いえいえ、こちらこそ。」

その後の食事は仕事の話などなく、たわいもない話が少しあった程度で終わった。

「それでは何かございましたら遠慮なく。」

「世界大会の運営に関しても島田さんと話を進めていきましょう。」

「これは戦車道の話抜きで我が国の威信にかけて成功させねばなりませんからな。」

「では。」

「では。」

一人だけ路線の違うハゲこと兎玉と別れ、辻と高谷は帰りを急ぐ。

「高谷さん。」

「ん？どうした。」

「万が一奴らが帰ってきた時の対応ってどうなっていますか？」

「話も薄れているだろうし、万一来ても整備が行き届いているとは思えない、とのことで老朽艦として処分する予定だ。何より一番消えてもらいたい大洗の原子力エンジンはすでに弱ってきているのだろう。」

「ええ、確かもう40年近く大規模な改修なしに運航しています。他の学園艦も帰るときには40年以上経過してるものと。」

「ならそれで十分だ。40年経過した原子力エンジンを復旧させる金を出さん。それなら国民も同意するだろう。」

「よく分かりました。ではその方針でこちらも資料を残しておきます。」

「頼んだぞ。では私はこちらだから。」

「はい。また明日。」

地下鉄の階段を降る高谷の背中を、辻はかなり身を折って見送った。

その姿が頭から消えていって、想像でしか感じられなくなる
とすぐに地下から風が舞い上がり思わず頭を抑えた。それをやり過
ごした辻は向きを変えて夜の街に消えた。

かなり厳しい状況だ。過去に飛ばされた以上に何かがあるか、と思われるかもしれないがついに来てしまったのだ。

「再処理燃料も実行済みの一部も使えますが元々大量に発電できる量ではありません。速度の維持なら兎も角、再加速となるとこの稼働率では厳しいかもしれません。一度ほぼ止まってしまっている以上、再び動かすならば慎重な判断をお願いします。」

それが艦長の一人、井上から告げられた言葉だった。要約すれば、現在東沙群島沖に停泊している我々が一度動き、停止し、再び移動することはできないということだ。会長が帰ってくるには都合がいいかもしれないが、ただでさえ食糧の備蓄残量がこれまでのペースの2週間半分を切りまずいのにこの状況はいいとは言えない。

香港とインドシナ、フィリピン、東インド、タイ……正直後半はあてにならないだろう。早く、早く打破しなければ、さらなる厚い壁に覆われる。華の握った手のひらの中に汗が湧き、それらが互いについて大きな汗の塊を形成する。

そして、風紀委員の「胡瓜」、「あんまん」。食べ物という点を除く記号性とそれが何を指しているか見当もつかない。明日へ踏み出す一歩先が落とし穴ではないか怯えながら暮らしていた。

食糧だけではない。石油、電力、特に後者は原子力エンジンが停止という事態になればもともと電力が不足気味の学園艦はどうしようもないのだ。石油も工学科へ回すと小山先輩が発言したことで、こちらには更なる市場への石油供給の削減を余儀なくされる。

もう最早街には配給用に使われるトラックなどを除けば動く車は殆どない。つまりそれをして工学科に送れる石油の量は大きく差がないわけだ。無補給の3週間、これは確実に大洗女子学園学園艦を蝕んでいた。

それともう一つ問題がある。それは角谷がこの大統領制に近い政体で生徒会長を名乗る上で欠かすことのできないものである。

選挙だ。

なぜ園などの3年生が引退している中で角谷が今もその地位に居られるかというと、夏休み中の廃校通告に伴う乗員総員の退艦とそれからの復帰という2学期初頭の業務の激化を受けて、角谷、小山両名が推薦での入学が決まっていたこともあり、任期を特別に3カ月延長することを生徒議会に提案。議会で過半数どころか2/3以上の賛成を受けて2012年度中はその地位を安堵されたのだ。

因みに学園艦への復帰作業は生徒は夏休み中に、他の者も9月の半ばには完全に終了していたのだから、生徒会の者たちの実務能力には頭が下がる。

ここでの問題はその後任である。現状を理解している者が生徒会長に就くのが望ましいが、この不満の溜まる状況でそれが確実だとは断言出来ない。そしてその後任予定として立候補するのが峠美津子という華と同学年の生徒会の者である。この者、今まで名前が一切出なかったように生徒会の中で目立つ存在ではない。寧ろ実務一辺倒の人物である。

どうしてその者か、というのはその面での同学年または下級生の信頼が厚いことと、角谷が今後は自分のような独創的な運営よりも更なる廃校になる要因を回避する為の堅実な運営を求めたからだ。

だが現状がこれである。流石に配給などの激務に追われながらこちらの候補を変える余裕はなく、そのまま峠が明後日の公示日に出馬する予定である。しかし他に名が知られた者が出馬すればどうなるか分からない。そしてそれが学園艦にどのような影響を及ぼすのか。小山もいない今、華は背もたれに身を委ねてその時を待った。前にそいつが言った通りならば間も無くその合図があるはずだからだ。そしてそれは10分もせずに来た。窓を開けるとあの灰色の鳥がいる。

「どうも。」

「よう。」

何時ものように窓の縁に脚を乗せ、水を求める。

「情報は？」

「一つのシェアハウスを風紀委員が重点的に監視している節がある。」

「何処です?」

「確か神山酒屋の隣、だったかな?庭のついた大きな家だ。」

「ああ、カバさんチームのシェアハウスですか。目的は分かりますか?」

「いや、どうやら派遣されている者も詳しい事情は分かっていないようだ。無論俺も分からん。他に例の風紀委員とやらについて何か目立った事はなかった。」

「カバさんチームですか……監視しているということは少なくとも味方にはなっていない。つまり戦車道で現在動かせる人数を満たしている中で最大火力の車輛は風紀委員側にはいない、わけですか。他には?例えば選挙とかという語で何か引つかかることは?」

「うーむ……確かにその語は数度飛んでる時に耳にした記憶があるが、意味のありそうなものではなかったな。『再来週の月曜日選挙だね。』とかいうものだ。」

「関心は皆さんあるようですね。」

「こんなものだろうか。」

「はいはい、水ですね。」

何時ものようにコップに汲んだ水を飲み干すと、その灰色の鳥はまた空へ飛び去った。窓を閉め鍵を掛け、入り口の鍵を開ける。

華は一度席に戻り、自身が任されていた電力管理に関するこれまでのデータを調べていた。何より原子力エンジンの出力低下はこの学園艦の住人全てにとって無視できない問題である。そしてエネルギーは住民全てに食糧、移動を除く日常生活を維持してもらう為に不可欠である。

生徒会は日常を出来るだけ維持することで住民の支持を取り付けようと考えている。そして電気、これは我々の日常には欠かせないもの。これの供給が止まってしまえばこれまで与えていた違和感に追い打ちをかけてしまう。

金の切れ目ではないが、電気の切れ目が縁の切れ目というわけだ。

「しかし、原子力の改善なしに供給が満たされることはない……か。それは前に再処理施設稼働時の状況から見ても……」

まだ一応原子力エンジンは動いてはいる。華は他の艦内資料なども手に取れる限り調べる対象とした。諦めたら、負け。その言葉通り僅かでもエネルギーを得られる手段をその残された時間の中で見つける為に。

外では陽が落ち、暗闇が辺りを包む。文化の日は冬至からそう離れてないが、ここで完全に陽が落ちるのは6時をゆうで回る。それほど西に来た証拠だ。そしてさらに時が過ぎ、生徒会分の配給食糧を纏めて調理した物が完成に近づいてきた頃、ぱつと隣の部屋の人口密度が元に戻る。何時もなら仕事に区切りをつけて華もそちらに移動し共に食事となるのだが、向かう前にその戻った要因の一人が生徒会長室に入ってきた。

「小山先輩、お疲れ様です。」

「……」

そろそろ願っていた時かと資料から手を離し席を立った華に、その者はつかつかと無言で接近する。

「……小山先輩？」

「……」

本当に下に顔を向けながら近づいてくるのに芯の強い華といえど、えもいえぬ恐怖を覚え思わず後ずさる。そして華が半歩下がる間に小山は二歩ほど近寄り、遂には華は壁と背中の間でその長髪を挟んでいた。

「え……」

そのまま小山は華の正面まで来た。下を向いたままである。背は少し華の方が大きい。だが只事ではない力を秘めた目がその差をものともせず睨みつける。一つの年の差、というものではない。

ダンッ！

小山の右足は半歩進み出て、その勢いに乗せて華の左側の壁にその右手を突き出した。

「……」

「……してませんよね。」

「……はい？」

「……独自に風紀委員に関する情報を集めて風紀委員に対策を取らない私を降ろそうとなんてしてないですよね！」

「……してないですよ。」

「本当ですね。」

「ええ。」

途中の一言で華は自身の鼓動が少し激しくなったのを感じたが、彼女らの前にある四つの塊がその伝達を緩和したようだ。暫く小山はその視線を華の二つの黒目に突き刺していたが、力を抜くようにそれを外した。

「嘘は……ついてないみたいね。」

「つきません。そもそも生徒会としては末尾に近い私は学園廃校阻止を成し遂げた小山先輩を降ろせません。」

「……そうよね。」

小山は頭を抱えながら深呼吸を繰り返す。

「……どうしてそのようなことを急に？」

「……配給途中に風紀委員から報告があつたの。『風紀委員への対応を取ろうとしない私に対して五十鈴さんを中心に私に対する反逆を狙っている様子がある。』と。」

「風紀委員がですか！」

「既に情報を収集している節がある、角谷会長が香港に向かってらして学園艦にいらっしやらない今がチャンスだと考えている、と。万が一事実なら……」

「そんなことはありません！私もここでの仕事を受けている一人です。学園艦の現状の厳しさは身に染みて分かっているつもりです。その中で風紀委員への対策というたった一つのことですら反逆なんてして混乱を起こしてはならないのは当然です！」

「そうよね。ごめんね。もう大丈夫、落ち着いたわ。ちよつと疲れたみたい。」

頭から手を外した小山は椅子に座り込み、深く長く息を吐く。やはりこの期間角谷杏と河嶋桃の存在なしに生徒の一部どころか学園艦

の全てを管理しなければならぬという重責は計り知れないものだ。その時、ふと華が急に顔をしかめ顎に指をかけた。

「どうしたの?」

「小山先輩、先ほど何と仰いました?」

「五十鈴さんが反逆を狙っている様子がある?」

「いえ、その後です。角谷会長がいらっしやらないというところ……」

「ああ、角谷会長が香港に向かってらして学園艦にいらっしやらない今がチャンスだと考えている、よね。」

「副会長ー。ご飯できてますよー。」

隣から無邪気な声がある。こんな仕事続きの中の食事は楽しみなものになる。自然、その前は騒がしくなる。

「はーい。」

小山も席を立ち、右腕の方を上へ伸ばした後扉へ向かう。

「小山先輩。いえ、小山副会長。」

ドアノブに手をかけていた小山はその声に反応して振り返る。

「不穏な情報が来ました。」

広西大雨奮闘記 36 諸君、私は日曜日が大好きだ。

日曜日は最高だ。前日に明日も日が高く昇るまで眠れると考えるだけで心が躍る、起きて針を見た時10時を回っているのを見るのはもう堪らない、とこのように考えられていたのはつい2週間前までのこと。そうも言ってられなくなったのが2週間前より後だ。そしてその頃から休日の2度寝が増えた。

理由は簡単だ。朝に配給を貰って帰って来たら寝るからだ。そうしないと食糧が足りずに餓死してしまいかねないから、たとえ朝死にかけていても起きねばならないゆえ致し方ない。学校に行く頻度はその為か若干増えた。学校に行く頻度、であるが。そして起きたら本を読むなり教科書見るなり中国語を勉強したり、というのがこの冷泉麻子の休日の過ごし方である。

この日もそのはずだった。朝の8時の配給を受け取り、冷蔵庫に詰めて、その日は朝から腹が減っていたので適当に火を通して食べる。どうせ腹が満たされたら寝るだろうと思いつつ皿によそい適当に摘む。寝ぼけて味をつけ忘れたことを食べてから理解し、近くにあった塩をぱつとかけ、また口に運ぶ。そしてそれらが皿の上から消えたことを薄らと見て、皿を水に漬けて口を拭き、寝床へ一歩ずつ近づいていく。

そのまま寝床に突入し、布団と融合して意識を飛ばそうとしていたが、結局このあと暫く麻子はそうすることは出来なかった。というのも10時前であったその時に家の中をチャイムの音が響き渡ったからだ。1935年に宅急便が来るわけなからうがと思いつつ融合を何とか解き、窓から顔を出す。

「はい？」

「あ、麻子起きてる。」

「ああ。沙織と、西住さんか。」

「おはよう、麻子さん。」

門の向こうにいたのは沙織とみほの二人だ。二人とも制服を着ている。

「今日日曜日だぞ。こんな朝早くにどうした？」

「朝早く、って10時だよ、麻子。配給取りに行つたの？」

「それは行つたぞ。それで何の用だ？」

「いや、明日久しぶりに戦車道だから、学校に行つてIV号の掃除でもやろうかなあと。」

「今日これからか？」

「そう。来る？」

「……行くとしても着替えて行くから遅くなるが、それでも良いか？」
「うん。じゃあ倉庫の前で待ってるね。」

こうして麻子の神聖なる2度寝の時間は消失した。麻子は朝出かけた時の服から制服にゆつくりと着替え、髪にカチューシャを嵌めて整える。それを終えると歯を磨き着替えを携え靴を履いて家の中から引きずり出される。

しかし会長からこの職務を受けた以上やらない訳にはいかない。五十鈴さんはこれよりも遥かにきつい仕事を受け持っている。私もサボる訳にはいかない。それにしても案外暖かい。長袖の制服だと下手せずとも汗をかきそうな程だ。

何時もはいる風紀委員も居ない校門を抜けて二人が先に着いているであろうレンガ倉庫へ足を運ぶ。入り口にたどり着こうとするとその前でその二人が中に入っていない。

「どうした？」

「あ、麻子きた。案外早かったね。」

「麻子さん。実は倉庫の鍵が開いてなくて……」

「まあ練習無い日だからそうだろうな。でも鍵なら西住さん場所知ってるんじゃないのか？」

「知ってはいるんだけど……」

「？」

「生徒会室だから今の状況考えるとちよつと入り辛くて……」

「成る程。じゃあ私が行つてくる。」

麻子は二人の前をそう言いながら通り過ぎていった。

「あ、私たちも」

その背中を追おうとした沙織を、みほの手が押し留める。

「みほりん？」

「……」

成る程、確かにこれでは入り辛いのも仕方ない。パソコンを叩く音以外に奥から激しく言い合っているのが耳に入るからだ。私ですら入り辛い。が、躊躇つてもいられない。2度のノックの後、一人の生徒会の者が姿を見せた。

「2年1科A組、冷泉麻子だ。」

「冷泉さんですか。本日は？」

「戦車の清掃の為に戦車道の倉庫の鍵を借りて、ついでに話をしたかったんだが……」

「今副会長は幹部を集めて会議を開いているので厳しいですね。あ、鍵です。」

「ありがとうございます。それで何の会議なんだ？」

「そうですね、私は下っぱなので詳しくは分かりませんが、どうやらそろそろ配給を始めて一月経つのでそれを受けた今後の対応など聞いています。ですが先程から聞こえてくる話からすると、風紀委員に關することみたいですね。」

「なるほど、それじゃあ後でまた鍵を返しにくる。倉庫の前にいる。」

「分かりました。何かありましたらこちらからお伝えします。」

その者の礼に見送られた麻子は倉庫の前に着くと倉庫の鍵を握って鍵を回し、久々に戦車の前に姿を見せる。

「じゃあ、早速始めよっか！」

奥から早々にモップを3本持ってきた沙織からそれのうちの一つを受け取ると、3人とも用意した服に変えて戦車を磨きだす。

「戦車外に出さなくていいの？」

「流石にエンジン回す訳にはいかないよ。」

「じゃあ他にかからないように注意しなきゃね。」

その為か沙織はホースを持ち出さずにモップとバケツ一つだけにしたようだ。鉄と繊維の水を潤滑剤とした摩擦音だけが三つの音源から反響する。麻子は用がなければ話すことは無い。だがその用を二人は生まないので一つ気になることを口にした。

「秋山さん、呼んでないのか?」

「ゆかりんなら朝呼びに行っただけど、なんか勉強しなきゃいけないから無理だって。」

「珍しいな。秋山さん、久々に戦車を見れると聞いたら勉強なんて放っぼり出して来ると思ったが。」

「試験の成績悪くて出られないのかもね。」

「そこまで厳しそうな親御さんとは思えんがな。そうだとしたらあそこまでのコレクションは揃えられない気がする。」

「……どうなんだろうね。」

また音源は三つに減る。だが、ここに来た事情からしてもこれで終わる訳にはいかない。風紀委員に関して、だと恐らく何も無いだろう。今学園艦の住民は大半が風紀委員を恐怖の象徴として捉えているだろうから。学園艦の今後、それに関わってきそうなテーマであり二人の気分を害しそうではないもの。配給はやめた方が無難だろうから、一つしかない。

「そういえば明日から会長の後任の選挙だが、誰が出るかって知ってるか?」

「選挙?」

「そういえばそんなのあったねー。」

「私よりかはそういう話とか聞いてると思うが……」

「確かバスケット部の赤峰さんって人が出るって話を聞いた気がするな。」

「II科のか?」

「そうそう。ただ本人の口からは聞いてないからどうとも言えないけどね。」

「確か、赤峰さんって結構真面目な人だって聞いたことがあるけど。」
「そうそう。真面目なだけにバスケット部の中でも外でも信頼されてるんだって。だけど成績は悪いとは言えないくらいらしいけどね。」

「……そうか。多分バスケに真面目すぎるとかじゃないのか？」

「そうかもね。でも流石に会長みたいにみぼりんを脅してきたりはしないと思うよ。」

「あはは……それはありがたいね。」

「相手は誰だろうな。」

「さあ？そこまでは知らないなあ。」

「正直会長さんが変わるって実感湧かないね。」

「あ、それ分かる。あと代わったら戦車道の優遇とか無くなるのかな？」

「それは困る。遅刻が……」

「麻子はどうせ配給で起きてるならもっと早く来なさいよ。」

「無理。」

「2度寝禁止にするよ！」

「それも無理。」

いつも通りの掛け合いがひと段落した頃に、沙織が手を止めた。

「……こんなところかなあ。」

「そうだね。あとは水気を乾拭きすればいいかな。ちよっと中までやるのは時間無さそうだし。」

「ほいじゃ、雑巾。」

近場に置いておいた雑巾を各人に配り、履帯の溝まで丁寧に磨く。戦車も鉄。現代のステンレスさえも扱いによっては錆びるのだ。下手な水気が残らないよう丁寧に磨く。電気系統には防水設備が付いているのは安心だ。だが彼女らも戦車を扱い始めて半年以上、これくらいはお手の物だ。

「明日が久し振りの練習だから念入りにやっちゃったね。」

「そうだな。」

倉庫の前の影がえらく短い事に気付き外に出てみると、かなり上に太陽がある。

「おお、そろそろ昼か。」

「確かにちよっとお腹空いてきたね。」

「出来れば他の車輛もやりたかったけど、やめといた方がいいね。」

「じゃあみんなで久々に昼ご飯食べない？」

「構わないが、うちの家あんまり食糧無いぞ？」

「良いよ良いよ。麻子はこの前くれたから。」

「だからあれはチャーハンのお返しだって言っただろ。」

「いや、じゃあみんなウチ来て！腕を振るうよ！」

「おいなんで決まってるんだ……まあ、いいか。それじゃ外に出よう。鍵かけるぞ。」

「はいはい。じゃあまずは用具の片付けからよ。あそこの水道に持つてくね。」

「じゃあ私は鍵返してくる。」

「早く戻って手伝いなさいよー。」

「はいはい。」

全くこの清掃の格好でも水を浴びて涼しいと感じるとは。生徒会室の前は相変わらず会議かと思いきや、嵐のあとの静けさがそこにあった。外に出てきた生徒会の者に鍵を渡すと、その奥の生徒会長室の方から出てきたと思われる華と目が合った。

「麻子さん？」

「五十鈴さんか。」

「どうして今日こちらに？」

華は部屋に飾られた2012年のカレンダーに目を向け、入り口に近づきながら声をかける。

「沙織と西住さんとIV号の清掃しないかという事になってな。安心しろ。水はそんなに使ってない。」

「そういえば明日戦車道でしたね。あ、すみません。幾つか質問したいのでちよつと来て頂けます？すぐに終わるので。」

「まあ、早めに頼む。」

中に迎えられた麻子は近くの壁に寄る。

「明日公示の生徒会長選挙なのですが、誰が出るかという話は聞いてます？..」

「ああ、さつきちようどその話をしててな、沙織曰くII科のバスケット部の赤峰という奴が出るって聞いたらしいが、それがどうしたか？」

「ほ、本当ですか！」

「沙織も又聞きらしいが。」

「あ、ありがとうございます！」

「あ、ああ。」

別れの挨拶もほぼ無く、華は隣の生徒会長室に駆け込んで行ってしまった。

「……大変そうだな。これは待った方が良いのか？」

「すみません。」

そう言うのと先程鍵をくれた生徒会の者が詫びを入れた。

「どうした？」

「どうやら上は選挙の相手が誰か計りかねていたみたいで……」

「なるほど、赤峰さんと角谷会長の後継の闘いというわけか。」

「はい、その通りです。」

向こうでは議論に燃料が投下されたようだ。まあ、貢献できたようなら何よりだ。

「あと何かありましたらこちらから伝えておきます。他に何かございますか？」

「いや、特に無いな。」

「では今後もよろしくお願いします。」

「すまない。邪魔した。」

思ったより時間を食った。沙織に下手に問われるのが一番面倒くさい。少しでも走って戻った方が良さだろう。

流石は沙織。飯が美味しい。この状況を一瞬でも忘れられるだけ美味いものを食えるだけ私はしあわせなのだろう。

広西大洗奮闘記 37 安敦とジャンヌ

「今回この様な形でご協力頂けたこと、心より感謝しております。」

「そちらこそ、こちらの提案を受け入れてくださってありがたい限りです。」

夜、ある寮のワンルームの中央にて二人の女子が正座しながら向かい合っていた。

「しかし今回ここまで話がさくさく進んでくれたのは驚きました。私たち今回話したのが始めてですのに。」

「それまで相談担当の者を何度か送ってくださったお陰です。こちらもその案を受けることは私が望むことですから。」

「やはり貴女を支援する甲斐がありそうですね。残念ながら私たちは立场上表立っては支援出来ませんが、こちらからそれが出来れば支援はありません。」

「なに、現体制は独裁寄りな体制。いずれ限界を迎えます。そして一番危険なのはその少し前、つまり人を見る目の無いものが後任を決め、その者が当選した時です。」

マルクス アウレリヌス アントニヌス。

ローマ五賢帝の最後となった彼の行為をここ大洗に再現する訳にはいきません。緊急性の高い事項が少なくなるだろうこの先を見据え切り替えるべきなんです。」

「あら、勉強の成績は良いとは言えないと聞いていましたが、ぱっとそんな事が出てくるんですか。」

「ええ、まあ。ただ勉強よりもバスケットが好きなのです。」

「しかし当選するとそのバスケットをする時間が短くなってしまうのでは？」

「なに、先程も言った通りです。私は知名度も実力も能力も全て劣ります。権限は他に割りますし、大それたことを実行するつもりもありません。そして下には重い実務を背負ってきた人々がいる。バスケットくらい参加しても問題無いでしょう。だから生徒会の者は変えませ

ん。

しかしあなた方こそよろしいのですか？この案を出すのであればあなたの参加するものにも間違いなく影響が出ますが。」

「私が戦車道に参加したのは学園を守るため。確かに今後も戦車道は必要だと思うわ。しかし現状戦車道は一人に頼っている。『ある』ことは必要だけど『顔となる』期間には限界がある。現状でもかなり投入しているのにそこにこれ以上の予算を投入することは好ましくないわ。」

「その通りです。我らの大洗女子学園の目下の問題は実績が少ないこと。それへの盾を一つに頼り過ぎるのはよろしくありません。」

「では、この内容で良いのね？」

「異論はありません。」

「ではそろそろ失礼します。」

「何もお出しできずすみません。」

「いいわ。この状況でもてなしを求める方が酷なもの。では健闘を祈ります、赤峰新生徒会長。」

「こちらこそ、後藤委員長。」

鞆を肩に掛け膝を伸ばしたゴモヨは扉の前に立つ最敬礼の赤峰に見送られ部屋を離れた。

その寮の下にはある車輛が停車していた。

「委員長、お迎えに来ました。」

「ありがとう。」

ゴモヨはその車輛の後ろから乗り込む。車内には数人が席を並べていた。見回りからの帰還組だろう。彼女らには話をするエネルギーは持ち合わせてないようだ。体力もこの配給の状況ではあまりいいとは言えない。だからこそ早期に動かなければならない。その意思をより一層強めた。

送って貰った先は学園ではなく自身の住む寮である。見回りの担当でもないゴモヨは外出禁止規定通り8時までに帰ることが望ましいと考えていた。そしてその通りにした。

荷物を置き制服から簡素な私服へと着替え、その途中で自身の存立意義の象徴を取り外す。本来の学生の身分ならばこの後机についた彼女は勉強に勤しむべきなのかもしれないが、彼女がとったのはタブレットと鞆に入れていた書類の一部である。中身は胡瓜に関するものだ。風紀委員の最重要機密書類の一つだ。

胡瓜追加計画は胡瓜計画作成後に内容を鑑みて本格的にクーデターに成るのは避けるべきだという提案を受けて加えられたものだ。確かにあらかじめ撒くための顔が立つことは損ではないし、不満が抑えられるならなおさらだ。その顔としてヤボクたちの調査で立候補を考えているという情報を得た赤峰に白羽の矢が立ったのだ。

夜間の見回りとして風紀委員が夜間に出歩けることを利用し、訪問担当に数度赤峰への接触を試みさせ意志の一致を確認。最後に計画をゴモヨが確認しに向かっていたわけである。彼女を当選させることが我々の、いやこの大洗女子学園の最大の利益となる。

戦車道は限界なのだ。最早これ以上の車輛を導入したとしてもそれを大会の試合の合間に整備可能な能力を備える自動車部は廃部寸前の人数であり、西住隊長も来年が最後。その後任、恐らく澤さんだろうが、が強豪チームのトップとして戦えていくほどの能力があるかは断言は出来ず、その先はなおさらである。おまけに元々廃校予定に入る学園都市、金がない。

考えてみればわかる。1輛戦車を導入するだけでも学園生徒の親の年収数十人分が一斉に消費されるのだ。黒森峰やサンダース、聖グロリアーナ、プラウダなどの様な戦車を整備、運用するだけの経済力が圧倒的に足りない。その為には今回の実績により増えるだろう学生から上がる学費を戦車道以外に充て、学園の魅力の多様化を図るしかない。

英雄は確かに必要である。しかし、ジャンヌダルクのような英雄もまた必要なのだ。

そして現生徒会にそれをする気はない。今後も戦車道に注力していく。そして我々が掴んだこの現状。それは綺麗事でもお題目でもなく、真に解消されるべきものなのだ。

書類の当該欄にチェックをつけた上で今後の内容に目を通す。明日には優花里からの報告が入る。大洗戦車道有数の火力をもつ車輛の行く末が決まる。そしてもう1輛、全国大会通算5輛撃破という華々しい実績を持つ車輛の為にゴモヨは朝かなり早く起床しなくてはならない。

少なくとも一つ櫓を陥落させることは出来る。出来ればもう一つも陥落させたいが、少なくとも敵でなければ良い。最後の一つは時間がない上にどう転ぶか分からないから捨て置く。まあ一つがこちらについていればそう変なことにはならないだろう。

そして我々はその結果を受けて、最後の本丸攻略作戦を実施に移す。本丸も敵でなければ良いが。ゴモヨは明日のため、やけに早く寝床についた。

人によってはブルーの頭文字のつく日が来た。午前の授業を受け終えた者の殆どは食堂で手を加えられた配給を口にする。しかしその流れの中にあつて一人、その髪がもさもさな少女は部屋で向かいにいる人間に頭を下げていた。

「……本当に申し訳ないであります。」

「……」

「カバさんチームの皆さんは一切協力する気はない、の一点張りで交渉の余地も無く……不甲斐ない結果になってしまいました。」

「……まあ予想はしていましたが、全員ダメでしたか……」

「はい……」

ゴモヨは両腕を組んで真一文字に結んだ口から低い音波のようなものを発する。

「……最悪でも敵対関係にはなつて欲しくは無いのよね。」

「敵対関係ですか。」

「そこお願い出来るかしら。つまり、学園艦の運営に関わる事への不介入、といったところね。」

「ですがそれですと今日から始まった選挙もそれに加えられてしまうのでは?。」

「……言葉選びつて難しいわね。じゃあ戦車を利用した学園艦の運営に関わる事への不介入、ならどうかしら。無論練習は入らないわよ。」

「了解であります。ではカバさんチームの皆さんにはそのように伝えておきます。」

「この後に?。」

「そうですね……それが丁度いいかと。」

「それじゃあ今後はヤボクの指示で動いて貰うことになるから、放課後来てくれる?。」

「了解であります。ではこの後、よろしく願います。」

「一緒に頑張りましょう。」

「それでは失礼します。」

優花里は入り口の前で敬礼した後腹でも減っていたのか早々に去って行ってしまった。学生の本分の勉強は頭を使う、即ちエネルギーをそこそこ消費するのだ。それなのに食糧が足りなければそう行動するのももつともだ。

「ヤボク。」

「なんすか、委員長？」

「話は聞いていたわね。」

「これから秋山さんがウチの下に入るってことつすよね。」

「そう。それで彼女の配置先だけ……」

「分かってますって。計画とは一番関係ない場所に配置する予定です。」

「何処よそれ？」

「生徒会の監視任務つす。前にそんな情報を拾ってきてくれたし妥当かなと。」

「なるほど、確かに関係ないわね。専任にでもして釘付けにしておきなさい。」

「了解つす。じゃあ昼飯行ってくるつす。」

さらにヤボクも部屋を駆け出していった。

「カナン。」

「お呼びでしょうか、委員長。」

「本丸攻略はどうなってる？」

「一応明日の予定ですが……本当にこのまま実行なさるのですか？」

「どういうこと？胡瓜に彼女が居て損はないと思うけど、権威的に。」

「相手と生徒会の関係は以前よりは確実に改善しています。もしかしたら情報が相手経由で流れる可能性も……」

「……確かに、口を封じる訳にはいかないから……」

「やはりIII突の者たちと同様に扱うのが一番心配ないと思います。」

「……確かに、3人、下手したら2人で動かして貰うのは無理があるわね……分かったわ。計画は変更。本丸には中立を求めなさい。でも感触があまりに良かったら頼んでみなさい。その判断は担当に任

せるわ。」

「謹んでお受けします。」

「では、私も昼食を頂きましょうか。」

彼女はこの後の食事と戦車道も楽しみではあるが、それよりも明日に予定されているあるものがさらに楽しみであった。

「行ってきてください。」

「……えっ?」

仕事に区切りをつけ、右腕で支えながら左腕を伸ばす華の左脇から小山の顔が現れた。

「行くって、何処にですか?」

「この後にある事といたたら?」

「……まさか戦車道ですか?」

「そのまさかです。」

「……確かに仕事はひと段落つきましたが、私は短期休学で休んでいる身。流石に本日の戦車道だけに出席する訳には……」

「大丈夫です。そこら辺はこちらで何とかかります。」

「それと皆さんが働いていらっしやるのに私だけ抜ける訳には……」

「生徒会には一人抜けた穴を埋められないような人材はいません。仕事も兼ねて行ってきてください。」

「仕事、というと風紀委員の最主力を通じて風紀委員の動向を掴めと。」

「それもありますが、他に生徒会に反対する流れがないか見てきてください。」

「戦車道の中ですか?」

「はい。私も今回の件を受けて、風紀委員との付き合いは情報入手経路が明かされるまで表面上まで縮小しようかと思っています。ですが、この先風紀委員に圧力をかけるような事態になった場合に戦車道の人たちには靡いて欲しくないのです。」

「……それで私の姿を見せた上での反応からその傾向を見せる人を見つけると。」

「はい。」

「そういうことなら分かりました。昼食、一足先に貰ってもよろしいですか?」

「ええ、勿論。」

「……それで重点的に見る人はいますか?」

「風紀委員の二人はそうとして……あとは冷泉さんに聞いた方が早いと思います。」

「なるほど、それはそうですね。それと昨日の件の礼を言わなくては。」

「そうですね。あれがなかったら不安だけが悪戯につのるばかりだったでしょう。生徒会を代表してお願いします。」

「分かりました。では、昼食を頂く旨を担当に伝えてきます。」

「よろしいお願いします。」

古来の伝統文化には、人の心が現れるものがあるらしい。茶の味だとか花の生け方、陶器の形、果ては竹刀の振るいかたにまで心の乱れというものを、その道の達人は感じ取れるそうだ。

西住みほは概要をおぼろげながら感じ取っていた。これは小さい頃から戦車と共に過ごしてきたみほだからこそ分かるものだ。練習当初は妙な違和感程度だと考えたが、どうしてもそう片付けられないものだった。

まずは車長としてである。

全員、いや沙織さんを除いてだが、どうも皆反応が遅い。配給の所為かとも思ったが、彼女らも配給一回分を食堂で食べてきたばかりだ。そうとは思えない。久々に会った華さんの砲撃の腕も休んでいただけとは思えないほど落ちている。比較すれば申し訳ないが河嶋先輩よりかは辛うじてマシというくらいだ。自転車に乗れた人間が久々に乗って乗れなくなることが無いように、6ヶ月は続けたであろうシユトリヒ計算はそうそう抜けるものではない。

そして誰よりも落ち着きを見せなかったのは優花里さんだ。決勝で移動中の高速装填を見せたとは思えないほど気が散っている。一

声掛けねば安全装置に指を挟みかねない有り様だった。

今回はツチヤさんからの要求で試合形式を取り入れなかったが、これで心底良かったと思える。確実に我々あんこうは敗北していただろうから。

そして隊長としてでもある。

2週間ぶりの練習だ。皆熱心に臨み練習出来なかった分を早々に取り戻すかと思っただがそうでもなかった。その傾向が見られなかったのは車輛としてはウサギさんチームとアrikイさんチームだけだ。

アヒルさん、カモさんチームは以前とは比較にならないほど腕が落ちていて、カバさんチームは腕は落ちていないがエルヴィンさんからの反応が明らかに悪い。何か確実にあったのだろうか誰一人それには答えなかった。この先試合が予定されていないだけマシだろう。

「西住隊長。」

「あ、澤さん。どうしました？」

「大丈夫ですか？随分考えていらっしやったようですが。」

「いえ、大丈夫です。それで、何か相談ですか？」

「相談というか……今日の皆さん、どうしてしまったんでしょう……」

「……分かりません。風紀委員の方は想像が付きませんが、他は……ウサギさんチームは何か気になることはありませんか？」

「うちのチームの中にはないです。ですが、特にアヒルさんチームが気になります。」

「……ウサギさんチームの中で何か気になることがあったら教えてください。お願いします。」

「分かりました。」

澤はチームの仲間のところに戻ってきた。何かある。みほが生徒会に任せるべきだと目を逸らし続けていたことの影響が戦車道の道具や予算だけではなく仲間にもまで露骨に現れた。

西を向いていた学園艦、沙織から聞いた麻子の言っていた話、この季節に合わない気候、そして日本に寄港出来ていないこと、そしてそろそろ配給が開始されて一月となる日が近づいていること。配給の量からしてまだ余力はあると思われるが、どれほどかは分からない。

何か出来ることはないか、いややらねば。

何が出来るかは分からない。しかし、何かしら行動を起こさなくてはならない。それが恩義あるこの学園に対する、せめてもの恩返しなのではないか。本気でみほはそう考え始めていた。

倉庫に戻ると、あんこうチームの面々が居るはずの場所には、沙織だけが待っていた。

「あれ？華さんとかは？」

「華は生徒会、ゆかりんと麻子も用事があるって先に行っちゃった。」

「華さんは分かるけど、麻子さんと優花里さんも？」

「そう。」

「……用事、か。」

「まあ麻子は生徒会じゃない？ゆかりんは分かんないけど。」

「……」

「みぼりん、どうしたの？」

「……沙織さん、一つ相談があるんだけど、いいかな？」

「なにになに？恋愛ごと……では絶対なさそうだけど。」

広西大洗奮闘記 39 囲まれて

この部屋の下の区分けを跨いだのは5日ぶりだ。夕方、窓の外はすでに紅い。迎えに来た軍人らしき人間に外に出るよう言われ、足を踏み出した。因みにこの軍人らしき人間も門番といつも飯時に来るボーイを除けば久々に来た人間である。流石に外に出ることもなくベッドで4泊するのは厳しい。どこに連れて行かれるかは知らないが、言えるのは私が、外の者から見たら優雅な監禁生活を送っていた間にも学園艦の食糧は刻一刻と減っていることだ。

この5日の無駄を如何せん、いやどうしようもない。出来るのは何としても食糧を手に入れ、学園艦に戻る術を見つけることだ。船を修理出来る機会も欲しい。はてさてどのような手に入れたものか。

馬車に揺られて案内された先は何やら高い建物である。その軍人らしき人間の案内に従って階段を登り、ある部屋の前に案内される。顎でされた指示を見る限りどうやら一人で入れということのようだ。待て待て、そもそもここがどこだか分かってない上に何の用事かも知らないのだ。おまけに私は中国語を話せない。せめて用件だけでも教えて貰えないかと聞こうとしたが、英語が通じないようだ。まあ殺されることは無いだろう、多分、と思いきり、3度のノックののち扉の向こうへ声を掛けた。

「Hello. I'm Annnzu, Annnzu Kadotani.

I come here……

(こんにちは、私は杏、角谷杏です。私は……)」

「Come in.

(入れ。)」

低い声で言い終わる前に返事されたため、ゆつくりと扉を押し出し、顔を覗かせる。

「Sit down there.

(そこに座れ。)」

部屋は入り口側が開いたコの字型に机が置かれ、その外周にあの役人とそんなに年の差が無さそうな人間十数人が席を連ねている。

そして、そのコに喰われるように小さな机と椅子が設置されていた。どこかの資料で見た気がするが、中国では昔はごぎに座っていたが、長江以南の方から椅子に座るようになったらしい。

椅子に座る。一応音は立てないよう注意して椅子を引く。座ってみるとまだ何も本質的な会話は行っていないのに漠然とした恐怖が襲った。周りの人間の約半数が軍服。彼らの階級は秋山ちゃんやエルヴィンちゃんなら分かるのだろうか。少なくとも下の方の階級では無さそう。そして正面にるのが前に部屋を訪ねた人間だとも分かった。

「……Why was I called here?」

（何故私はここに呼び出されたのですか？）

「That's the answer.」

（それがその答えだ。）

通訳らしき白い帽子の男に指し示された先には、いや机の上にあつたから見えていたが、紐で束ねられた紙の束があつた。

「Can I hold it?」

（持っていいですか？）

「Sure.」

（構わない。）

その束は裏返されていたため、そつと手にとって表を見る。そこには筆で書かれたらしき題の下に活字を使ったかのような文字が連なっていた。タイトルは

對申請驗收の大洗到廣州

Requisition on the acceptance
of Orain to Guangdong

（広東への大洗の受け入れに関する要求書）

中國國民黨中央執行委員會執行西南部

（中国国民党中央執行委員會西南執行部）

とある。

「Requisition on the acceptance
of Orain to Guangdong……」

これが何か、そんなものはすぐに分かる。希望だ。これまで得ようとするも得られなかった希望だ。

「What is this?」

（これは何ですか?）」

しかし何か、相手の口から聞きたい。

「If you approve this plan, we are ready to establish a friendship and cooperate with you to prosper.」

（もしこの計画を受け入れるなら、私たちはあなた方と友好を築き、相互の繁栄の為に協力する準備が出来ている。）」

そう、この言葉を、私は、一月弱、待つていたのだ。さて、相手は何を望む。紙の一番端をそつと掴み、めくる。中身は漢文ではなく英文だった。文字を見るに漢字のタイプライターが無いのが原因だろうか。

内容をここでグダグダ書くのは避ける。何せそれぞれの条項に注意書きなどが付いているのだ。ここに書ききれぬものではない。概要だけ纏めておこうと思う。

・ 大洗女子学園学園都市の処遇

住人は総員学園艦から退艦し、万山群島に於ける無人島に学園都市を設置し居住することを許す。この対象となる島の策定は合意後に決定する。その地に於いて、学園都市の開設と学園機構の維持を許す。

・ 学園艦乗員の権利

学園艦乗員には中華民国国民としての権利を一切認めない。ただし大洗女子学園学園都市の住人としての権利を認める。

・ 学園艦乗員の移動

学園都市である無人島以外への上陸は広東省政府が許可を出した者にのみ許す。海域は無人島の選定後決定する。

・ 大洗女子学園学園艦

学園艦は広東省政府の管轄とし、許可を出した者以外の乗艦を認め

ない。学園艦は1936年1月1日を以って大洗女子学園から広東省政府に明け渡される。

・学園機構の運営

学園機構の運営について、広東省政府から派遣した顧問官をそれに参画させる。また学園都市に於ける収入の4割を無償で広東省政府に納入する。また、学園都市への物資輸送は全て広東省珠海港を経由させる。

・角谷杏の処遇

角谷杏は広東省への上陸を認め、両広政務委員会（仮称）の成立次第、その委員長に就任する。

・軍事防衛関連

学園都市防衛について、学園都市設置から3カ年駐屯する事態が発生しなければ広東軍は駐屯権を放棄する。治安部隊の設置などに関しては、広東省政府の許可を必要とするため、初期に保持している武器類は広東省政府が保管する。その部隊を広東軍に編入することはしない。

・人材招集

大洗女子学園は現在保有している防衛部隊の幹部（階級少佐以上またはその参謀）または戦車道隊員を広東軍に招集させる。技術に関しては中山大学、広西大学、惠州学園の者を派遣し、実力があると認められた者を広東省政府に招集させる。またそれらに伴いその者らの広東省への上陸を許す。

悪くはない。日本からの自治権剥奪などの要求に比べれば。元より独立勢力としてやっていくなど不可能だということでは分かった。だから学園都市からすれば時間亡き今これに乗るのが最善。

だが行き先は無入島だ。インフラも何もあつたものではないだろう。そして経済、運営の首根っこを掴まれるのだ。何も無い島で3万人、しかも現状の学園艦では新たな物資を買い取れるこの時代の金もあるまい。移動も出来ない。死ぬも同然だ。あ、でもウサギさんチムなら生存可能かもしれないが。

私がやるべきなのは、ここから何が引き出せるかだ。大洗の未来の

ために。だがその前に幾つか確認しておきたい事がある。

「May I ask you some question?

(幾つか尋ねてもいいですか?)」

「OK.」

先ほどの通訳らしき男は腕を組んで頷いた。

「First, in this requisition, you don't write the position of Guwangdong Guwangsi Council. What is my role in this?

(最初に、この要求書では、あなた方は両広政務委員会の位置づけを書いていません。そこでの私の役割は何ですか?)」

通訳らしき男はチエンとかいう男に中国語、だと思ふ言葉で確認を取ると、返事した。

「We plan to have the participation on rights of Council and approve Commission decision.

(委員会の参加権と委員会決定の承認を予定している。)

「The participation rights.... Thank you. Next, where is Ladorne islands?

(参加権...ありがとうございます。次ですが、万山群島はどこにありますか?)」

「Out of Pearl River Delta.

(珠江デルタの外だ。)

なるほど、確かに香港入りする前、西側にチラチラ島が見えた。あれらのことか。この広州からは遠くもなく我々が動けばすぐに対処可能な場所だ。私たちがその場所になるのは吞まざるを得ない、か。だが、主導権を完全に向こうに奪われるわけにはいかない。

「Thank you for answering me. I certainly attend to your request. Well, I would like to enter in

to talks in order to conclude
an agreement which base on this
s requisition……

(お答えいただきありがとうございます。あなた方の要求はしかと承
りました。それではこの要求書をベースに協定の締結に向けた交渉
にはいりたいのですが……)」

「Talks? What is that purpose?

(交渉? その目的は?)」

不思議そうな顔で通訳らしき男が問い返してくる。チエンさんも
似たような顔だ。思わずえっ、と日本語が溢れる。が、答えねばなら
ない。

「To make better agreement of th
is for each other……

(この要求書を双方にとってより良い協定とするため……)」

「Better? NO! This requisition is
the BEST talks for us!

(より良い? 違う! この要求書こそが我々にとって『最も』良い協定だ
!)」

通訳らしき男は明日から身を乗り出し、私を指差しながら怒鳴りつ
ける。

「You say that I approve it unco
nditionally, don't you?

(あなたは私にこれを無条件で呑めと?)」

「All you can do is to sign it h
urry. Hurry!

(あなたはこれに早くサインだけすればいい。早く!)」

「Wait, wait, hung. You shouldn't
blame and timber girls. Calm do
wn.

(待て待て、黄。女の子は責めて急かすもんじやない。落ち着け。)

チエンさんが興奮しつつあった通訳らしき男を止めるように口を

挟んだ。

「Sorry sir.

(申し訳ありません、閣下。)」

「However,

(しかしながら、)」

今度はチエンさんが私の方を向いた。

「It is true that you can't afford to be, isn't it?

(あなた方が余裕がないのは、真実ではないかね?)」

「……」

「We made the air force search our school. As the result, the deck of your school ship was occupied by urban are. What this means is obvious. Your schoolship can't grow as much produce as its crews needs. So, you'd require a food of Hong Kong. At least, you don't receive respectable supplement for more than two weeks. Storage should be served on fuel and foods. Do you think it's also disadvantageous for your schoolship to make negotiations be prolonged excessively here?」

(我々は空軍にあなたの学園を調べさせた。その結果、あなたの学園艦の甲板上はほとんどが市街地で占められていると分かった。これが何を意味するかは明らかだ。

学園艦は乗員に必要な食糧を育てられない。だからこそあなた方は香港に食糧を要求したのだろう。少なくとも、あなた方は2週間以

上まともな補給を受けていない。燃料、食糧共に厳しいはずだ。ここで交渉を無闇に長引かせるのはあなたの学園艦にとつても不利益だと思うが?」

そうか。私は荷物を全て取られたのだった。私が持っていた情報に向こうも知っているようだ。

「……If do you say that I negotiate for that?」

(……もしそれでも私が交渉すると言ったら?)」

「You, I'll be here for a while.

(もうしばらくここにいて頂くことになります。)」

少しチェンさんから意識を解放すると、廊下の外からはかさばったような金属音がする。そしてこの周りにいる軍服らしきものに身を包んだ者たち。

何かは想像がついた。間違いなく今度は優雅ではない。威圧感、あの役人とは比べ物にならない、生きた威圧感が私を襲う。あの時、あの役人との交渉の時、私には味方が3人いた。だが、今は一人。本当に一人。

私は狐だったのだ。学園艦を、私たちの学校をなんとかしようとして上海、香港とやってきたが、何が出来た!今も何が主導権を取るだ!弱みさえ握られてるじゃないか!私はただ少し勉強が出来て、人を纏められて、砲手がちよつと上手いだけのただの女子だ!なぜ私はそんな事も分からなかったのだろうか!

叫んでもいられない。そうだとしても、私がどれほどちっぽけな存在だとしても、この身で引き受けた事はやらねばならない。この状況をひっくり返し得る、世界大会なんぞ掃いて捨てるような、そんなものを相手に不審に思われる前に突き出す必要がある。

何だ。

何がある!

『cheating each other……』

騙し、ハツタリだっていい!

この場を切り抜けられるなら。

今こそあのことを履行しないで
いつするんだ！

何か、

何か思いつけ！

きっかけだ！

きっかけさえあれば……

いや待て、

そもそも何故、私はここにいる？

広西大洗奮闘記 40 あくまで予測

戦車道の授業後、真っ先に華は生徒会室に駆け戻った。そして一言告げて会長室に入る。

「小山先輩、只今戻りました。」

小山は資料を片手に顔をこちらに向けた。

「お疲れ様。手続きは問題ないわ。それじゃ早速、練習の様子を聞きたいんだけど……」

「麻子さんがもうすぐ来ますから、それと共にした方がいいでしょう。」

「じゃあその前に。」

「どうしました?」

「これ見てくれる?」

小山から手渡されたのはB5の片面刷り、そんな単純なビラだ。だがその一番上には、

「赤峰光……」

「内容見てくれる?」

「……つまり反生徒会と。」

「生徒会そのものかはともかく、今の運営体制と方針には反対みたいなね。」

「しかし……これは住民からの支持はつきそうですね。」

「私たちから見たら……不可能と分かるんだけど……有権者に住民を含めているこの学園艦の運営体制だと……」

「向こうに有利ですね、こちらが情報を開示でもしない限り。」

「しかしそれをすれば、何故そのような情報を隠匿していたかが問題となります。」

「しかも安定がもたらされる前に情報を開示すれば学園艦の混乱は間違いないですね。それを考えて会長さんはこの事を伏せさせたのでしょうか。」

「ええ、それを辞める気は毛頭ありません。」

背後のノックが二人の意識をそちらに向かわせる。

「はい？」

「冷泉だ。」

「どうぞ。」

「失礼する。」

真つ先に二人のところに来た冷泉に、小山は少し姿勢を正した姿を見せた。

「さて、本題に入りましょう。今回参加して頂いた戦車道はどんな雰囲気だった？」

「そうですね……率直に言えば悪いです。」

「特に目立ったのはアヒルさんチームだな。無論カモさんも良くなかったが、それよりも酷い。」

「まあカモさんは生徒の様子を探りながらでしょうしそうだとは思いましたが、アヒルさんチームですか……」

「そしてそれよりも酷かったのが秋山さんだ。」

「秋山さん!?!?」

「何せあの西住さんからきつめの口調で注意されたくらいだからな。」

「……なるほど。」

「カバさんチームはエルヴィンさんがどうやらおかしかったようだ。西住さんが何度か聞き返していた。ちなみに西住さんはいつも通りだったな。」

「ウサギさんチームも問題なしです。他の方も特には……」

「……配給の影響、と断言するには影響が大きすぎますね。」

「……やはり何かしらの動きがあり、それに戦車道の人たちの一部が関与しているとみていいだろうな。」

「ちよつと聞きますが……エルヴィンさんだけ、ですか。」

「ああ、それは確実だ。おりようさんの操縦も左衛門佐さんの砲撃もほぼ変わりはなかったからな。」

「……エルヴィンさんと……アヒルさんか。」

「あの、前者は分かりませんが、後者はこれがヒントかも……」

「ん？赤峰さんの？」

「この部分です。」

「そういえばそんなものもあったな。」

華が指差したのは、ビラの中程に書かれていた文だ。

『学園予算の分配による学園の魅力の多角化を行い、再度の廃校要請を回避するための実績を生み出します！』

「これの『学園の魅力の多角化』、という所に部として現在正式な活動日程が取れていないバレー部が含まれるのでは？」

「なるほど。確かに彼女らからしたら部の復興は願っても無いことだ。あそこまで混乱していたのも頷けるな。」

「しかしそうすると、残りの二人は何でしょう？」

「……エルヴィンさんは分からないが、秋山さんなら心当たりがある。」

「何でしょう？」

「前も言ったと思うが、秋山さんは風紀委員に呼び出されたことがある。そこで何かしらの心を乱されることを言われたか、昨日の車輛清掃に来なかったのが彼女曰く勉強のことなのでその関連で何かあったか。考えられるのはその2択だ。」

「後者、ですかね？」

「いや、私は前に秋山さんが風紀委員に呼び出された時期なども考えたと前者も捨てがたいと思う。仲間を疑いたくはないが、この際仕方ないだろう。」

「しかし、何かを考えるにしても情報が足りません。予測等は立てられますが、それらはあくまで予測です。真実とは限らない。」

「しかもエルヴィンさん相手には予測すらも立て辛いと思います。」

「何か確信を導く手立てはないものでしょうか……」

「方法が無いわけじゃない。」

「えっ？」

「だがそれはある一人の不信感を招くことだが。そしてその人は、敵にするべきじゃない。」

「まあ、戦車道の報告は受けるまでもないわね。」

「はい……ですが、申し訳ありません。」

縮こまって優花里が机の前で頭を下げる。

「別にあなたは『私たちから頼んで協力して貰っている』だけ。あなたが罪悪感を抱く理由はないわ。」

「……はい。」

「それで、これからヤボクの下に入ってもらうんだけど、ヤボクいる？」

「はい、ここです。」

「それじゃ、例の場所に秋山さんを案内して。あと仕事の説明も。」

「ほい。じゃ、よろしくお願いするっす。」

「は、はい。」

やはり優花里はこのアンツイオにぴったり合いそうなノリに慣れない。ゴモヨに礼してヤボクに連れられて校舎内を歩き回って辿り着いたのは、幾つもの移り変わる画像が見える部屋だった。

「ここは？」

「監視室です。今回の件に伴って完全にウチの管轄となってるっす。」

「ここで何をすればいいでありますか？」

「放課後の生徒の監視っすね。とはいっても実質生徒会だけっすけど。」

「生徒会、ですか。」

「そつす。まあ、そんな変なことはないっすけどね。放課後にシフト通りに来て、このメモ以外のことがあれば上に報告、といった程度っすね。昨日なら冷泉麻子が来たとか。それ以外は本当に疑わしいの以外は別に言わなくていいっす。生徒会に反抗しそうな人間を見けるためっすけど前の一件が功を奏したようで。」

メモにあるのは配給など午後の定時に行われる事を纏めたものだ。

「それで、秋山さんっすけど、シフトは一応こんな感じで組んでいるので、まあこんなご時世っすし用もないと思うんでお願いするっす。」

「週に5時間ありますか……」

「みんなそんなもんっす。人によっちゃ3時間こなしてから夜間の見廻り行く奴もいるっすから。」

「……皆さん大変なのでありますね。」

「見廻り専任は自衛武器の使用訓練も毎日ありやすから、どこも似たようなもんす。それで、ゴモヨ委員長からまた潜入の仕事があるまではここに居るようにとの御達しなんで、よろしくっす。」

「は、はい。よろしくお願いするであります！」

画面の方を向いていた優花里は上司と見定めたその人物に敬礼を返す。

「ウチら店舗運営補佐はやってる店がなくなっちゃってんで、あとは幾つかの場所の監視任務もあるんですが、秋山さんはここをお願いします。」

「分かりました。」

「それと、少しこちらに来て頂いていいっすか？」

「はい？」

優花里はヤボクの案内される先、その部屋の画面から離れた奥へ進む。部屋のもは画面に集中していたり、少し仲間内で話をしている程度でこちらを気にする素振りはない。

「どうしました？」

「これは今回の監視の件には関係ないことで私が個人的に思うことなんすけど……」

背後を一回気にする。

「……今回のこの補給停止、秋山さんはどう考えているっすか？」

「どう、とは？」

「本当に我々の世界でネットが完全に切られ、寄港も補給も出来ずに一月近く漂流したまま国際社会からほっとかれることが可能か、ということっす。」

「……」

「……私は風紀委員の一員すし、反発したりする気は毛頭ないっすか、今の上はそこへの注視を怠っている気がするっす。秋山さん、あの台湾からの帰還を生で見ても、香港行き的情報を掴んだ方として、何か分かっていることはあるっすか？」

「……」

答えに躊躇する。優花里にとって自身の考えは一寸の狂いもなく

断定しきれるものではないが、疑えないのもまた事実。だが、彼女は信頼に値するか、と言われると否である。仕事上の関係に過ぎない。そして下手に不安は煽るべきじゃない。

「……そこまでは……」

「そうっすか……潜入までは無理っすけど情報の分析から判断するしかないっすね……それじゃ、シフト通りに仕事お願いするっす。時間取っちゃってすまないっす。」

ヤボクは画面の方に戻った。ただ髪型だけでない壁を感じつつも、シフト外であった彼女はちよつと告げてその場を離れた。

笑った。

目を閉じて、しかし彼女の顔は天井を向いている。そして笑った。不可解な光景だ。大の男たち、しかも軍人が混ざっている、に囲まれた中でたった一人のか弱い少女が、さらに言えばついさっきやんわりながら脅された状況で声を出して笑い始めたのだ。大の男たちは目を点にして互いに顔を見合わせる。

「……What is pleasant?」

（……何が可ましい?）」

陳が、問う。分からない。いや、分からないのではない、はずだ。

「What, s!」

（何が!）」

顔は斜め下、彼女の正面にいる陳の足元に戻るが、右手を相変わらず口に当てている。見下されたと感じた陳はその場の男を代弁して声を張り上げる。少女は、口から手をどかした。

「You don't notice producing disadvantage by yourself to wait me to accept just as it is.

（私がこのまま受け入れるのを待つことが、あなた方に不利益を生み出すことに気づいていないことです。）」

「Disadvantage? Such is a trivial thing.

（不利益? そんなものは些細なことだ。）」

「Is it really?」

（本当にそうですか?）」

「What?」

（何?）」

不気味だ。これがさつきまでの少女だったというのか。なんなら扉の向こうの者たちを呼んでもいいのだが、呼んだ方がいいのか。

「I don't want to say, but you p

robably seem to think our rival of negotiations is only you.

(言いたくなかったですが、どうやらあなた方は私たちの交渉相手はあなた方だけだと思っていらっしゃるようです。)

「What kind of thing is it?」

(どういうことだ?)」

「It's said that we'd already negotiated with a country with which you march .」

(私たちは既にあなた方が隣り合っている国と交渉に入っているでしょう、ということですよ。)

「Nanjing government? Did we hear the talk indeed?」

(南京か?その話は流石に聞いているぞ?)」

「No, a different neighboring country.」

(いえ、また別の隣国です。)

「……French Indochina. But is the school ship which has been just quite away from the home country accepted?」

(……フランス領インドシナ、か。しかし本国から相当離れたところの学園艦を受け入れてくれるものかな?)」

「When waiting for a half moon, we can establish a temporary self-sufficient organization. If we can be put between it, it's even possible to sail in a French mainland. When doing that, she would be considered to acceptant.」

(我々はあと半月待てば暫定的な自給体制が確立出来ます。その間を凌げればフランス本土にだって航行可能です。そうすれば受け入れも考えるでしょう。)」

「That's impossible! If it is a self-sufficient organization though there are also large-scale farms on the ground? I make them laugh.

(まさか。地上に大規模な農場も無いのに自給体制だと? 笑わせる。)」

「Because that's possible, we're a school ship, and I live. To produce no food has to be on the deck. But it would be more important than such thing. Maybe that we can choose an acceptance destination.

(それが可能だから我々は学園艦で生きていますよ。何も食糧を生産するのが甲板上である必要はない、ということですよ。しかしそんなことよりもっと大切なことがあるでしょう。我々が受け入れ先を選べるかもしれない、という状況が。)」

「When France accepts of course, it would be so, but when it wouldn't so, it's only us. You're Japanese, so her national opinion doesn't seem to approve.

(無論フランスが受け入れればだがな。そうでなければ我々だけだ。あなた方は日本人だ。国民世論が賛同するとは思えん。)」

「France accepts us. Anxiety under their eye is Nazis Germany. But because the United Kingdom

mand Italy are that state in
the strike laser front to seal
that, it would be enough
fect. France with which I mar-
h directly can, help begin in
g the armament expansion compe-
tition to seal Germany because
Poland is between Germany and
Soviet Union. Even though we
tell that, how much should we
funds for it be bad? If I say
that we who could do a self-suf-
ficient organization support
that, I'd take it certainly, eve-
n if we're Japanese. But, France
wouldn't let diplomatic infor-
mation leak as you didn't know
with Hong Kong.

(フランスは受け入れます。彼らの目下の懸念はナチスドイツ。しか
しそれを封じる為のストレーザー戦線はイギリスもイタリアもあの
様子です。十分な効果は無いでしょう。そうなればドイツとソ連の
間にポーランドがある以上、フランスはドイツを封じる為の軍備拡張
競争を始めざるを得ない。その為の資金は幾らあっても損では無い
はずです。自給体制が出来た我々がそれを支援すると言ったら確実
に乗ってくるでしょう。たとえば我々が日本人だとしても。もつとも、
あなた方が我々が香港と交渉していたことを知らなかったように、フ
ランスは外交情報を漏らしたりはしないでしょうが。)

「But she knows better than to
e admitted without also making
sure of the other side. And y

ou let information leak. It wouldn't be trusted

(しかし、向こうも確かめもせずに認めるほど愚かではあるまい。それにあなた方は情報を漏らした。信用はされないだろうな。)

「Isn't it forgotten? We were kept in a hotel here and, Hong Kong, like, is it done? Enough time should be granted to the ship of negotiation for Indochina left in a simultaneous period mostly. And when having that during that case, that plan better than the requisition sheet should also be gathered on the other side.

(忘れていませんか？我々はここでホテルに留め置かれただけでなく、香港でも同様にされているのですよ？ほぼ同時期に出てきたインドシナ行きの交渉の船は十分な時間が与えられていたはずですよ。そして、その時間あればそちらのその要求書よりも良い案が向こうでも纏まっているはずですよ。)

「You should just make them sign on this requisition. Time isn't a problem.

(なに、こちらの要求書にサインさせればいいだけだ。時間も何もなし。)

「If I'd like the contents, the other side will return a scission of France because your boss would wish to oppose with France.

(向こうのほうが良いと思ったら学園艦に戻ってフランスを当てにして破棄しましょう。フランスと敵対するのはあなたの方が上が望まないでしょうからね。)

「It's no joke! It would be impossible to protect the place where the appointment can't also be kept!

(冗談じゃないぞ! 約束も守れん所を守る訳がないだろう!)

「When democracy and also political power tend to change France, we should just appeal to national public opinion. Now, it's a main subject from this. Why do you wish for us? When the front visited me, Mr. Ch. n. Excellence and you had the response. "practically reinig over Guangdong" doing you should hold fear in the center alization of power—like policy Nanjin government is advancing. What is intended to continue the substitute al rule in it? Nanjin government asked us who declined as the importance of existence. Aschoolship, itself, if, in purpose of the profit I say. And because I didn't want to put Japanese in, autonomy was admitted for us. Is it different?

(フランスは民主主義、さらに政権が変わり易いならば国民世論に訴

えれば良いだけです。さて、これからが本題です。あなた方が何故我々を望むのか。その答えはチエン閣下、あなたが前私を訪ねた時にあった。『広東を実質的に支配』しているあなたは南京政府が進めている中央集権的政策に恐怖を抱いているはずです。その中で実質的な支配を続けるには何が必要か。その存在意義として南京政府が断った我々を求めた。学園艦そのもの、という利益のために。そして日本人を入れたくないから我々に自治を認めた。違いますか?」

「What do you pretend to know……」

(何を分かったふりをしている……)」

「We deny nothing of the requisition sheet. It's almost accepted, but I'd like to receive a place by the negotiations about that. Even if it's better to be a French plan using my power which is stop of a school, I'll get a school agree.

(何もその要求書の全てを否定する訳ではありません。大体は受け入れます。しかしそれに関する交渉の場を頂きたい。そうすれば学園のトップである私の力を使って、仮にフランスの案の方が良かったとしても学園を同意させてきましょう。)」

「It's impossible to be ……」

(貴様らなんかに……)」

「已經困難，陳。」

(もう無理だよ、チエンさん。)」

「李德鄰!? 什麼? 不可在這裡拉不明白的☒?」

(李德鄰! 何を言うか! ……ここで引いてはいけないのが分からないか! ……)」

「法國不介意，不過，與南京政府的關係到這裡敗露的以上，這邊什麼都不做整合條件困難。我們有必要是他們事實。用就這樣槍也亮出如果硬讓喝他們難以不成為敵對勢力。因為? 著所以大半認可，乘坐不是上

策☒？

(フランスはどうでも良いが、南京との関係がここまでばれている以上こちらが何もせず条件を纏めるのは無理だ。我々が彼らが必要としているのは事実だしな。このまま銃でも突き付けて無理矢理呑ませるなら彼らが反動勢力となりかねん。大半は認めると言っているのだから、乗るのが上策ではないか?)」

「可是……」

(しかし……)」

「還是想做女人脅背負亮出了有利的條件這樣的？名☒？」

(それとも女を脅して有利な条件を突き付けたという汚名を背負いたいのか?)」

角谷から見ても、耳で聞いてもこの二人の広東語の会話は分からないので黙って待つしかない。しばしの論議のち、どうやら話がまとまったようだ。

「Could you take negotiations？」

(交渉に乗って頂けますか?)」

通訳の白い帽子の男はチェンに確認を取ると、嘆息して返した。

「He said that I'll show interest in the proposal when it's gathered in the limited period.」

(期限内で纏まるならば話に乗りましょう、とのことです。)」

「何かしたのか？」

明日1日を交渉期間とすることを両者が承諾すると、委員会はその場で解散となった。その外で広西の二人が肩を揃えて話す。

「彼女にか？」

「それ以外にあるか。」

李は左右に首を振る。

「お前じゃないのか？」

「俺じゃないさ。単にあれ位のこと出来なければ、我々の上についてこの両広を指導するのは難しい、というだけさ。」

広西大洗奮闘記 42 最悪の状況

11月6日、昼休みの終了まであと15分、

「どうも皆さんこんにちは。清く正しく皆様に情報をお届けする、大洗女子学園放送部の王大河でございます！」

そろそろ生徒会の者たちが昼食に向かおうとした頃、その音が彼女らの足を止めさせた。

「さて本日は皆さんご存知であろう、あの角谷会長の後を継ぐ次期生徒会長の選挙についてお伝え致します。

昨日から本格的な選挙戦が始まり、各候補による住人の皆さんへの必死のアピールが行われました。

我々放送部は昨日夕方より配給所での調査などによって現在の2候補者の支持率を纏めました。果たしてどちらが優勢なのか……」

太鼓と思われる音の間隔が時が経つにつれ短くなる。間が空いたのち、一際大きな音がスピーカーから鳴り響いた。

「峠候補が23%、赤峰候補が26%！3ポイント差をつけて赤峰候補がリードしています！」

これについて今回の選挙管理委員長を務める岩城さんにお越し頂いております。岩城さん、どうぞご覧になりますか？」

「そうですね。まだまだ半数以上投票先を決めていない方がいらっしやいますので断定は出来ませんが、今回の選挙はやはり角谷会長への評価が票の分かれ目だと思えます。

確かに角谷会長は学園の廃校回避を勝ち取りましたが、これまでの若干強権的な運営への反発、また昨今の経済統制という状況に対する明確な説明が未だなされていないことへの不満など、現在の政権への不信は確かに存在します。

そこをいかに凌げるかが峠候補の勝利の鍵であり、そこをいかに深く突けるかが赤峰候補の勝利の鍵でしょう。」

「知名度による差はこちらの調査によりますと、若干赤峰候補の方が名が知られていたものの、大勢には影響ないようですね。」

「そうですね。赤峰候補の方が名が知られていますが、その評価が良

いとは言えないため選挙戦への影響はほぼ無いと思われれます。」

「なるほど、ありがとうございます。今後の両候補の活躍に期待しつつ、放送部としては随時選挙に関する情報を皆さんにお知らせしていきます。それでは、ごきげんよう！」

最後に音楽が流れ、スピーカーからの音は途絶えた。この放送部の女、やけにハイテンションであった、それを聞いていた生徒会の者たちの表情を強調するように。

「……3ポイント差、ですか。」

数秒の無音を挟んで、落ち着いた華の声が広がる。

「まさか逆転されているとは……」

「五十鈴さん。午後に緊急の会議を開きます。昼食後に会長室に集まるようホワイトボードに貼つといてください。」

「分かりました。机の用意は？」

「五十鈴さんの机、すみませんが一度寄せておいてください。時間は1時40分で。」

「では準備しておきます。」

小山は的確に指示を出すと、食事を早めにとろうとポケットを確かめてから部屋から去った。華は自身の机のものを少し下ろして前にずらし、生徒会長室のの中央を開ける。そこに緊急無線の置いてある奥の部屋に置いてある長机を一つつつ引つ張り出し、入り口に脚が引つかからないように机の裏側に身を入れながら生徒会長室に運び込む。その並べられた机の角をあわせるだけでここは会議室となる。

あとはホワイトボードに1340、緊急会議、生徒会長室にて、と書いた紙を貼り付けておけば大丈夫だろう。華は時計を確認する。1310、流石に無情な空腹を痛感し部屋の中に一声かけて食堂へ向かった。ウエストミンスターの鐘が背中を押す。

時間通り生徒会の者一回が会した。

「この後会議や用がある人は？」

その最奥に腰掛ける小山が確認を取る。

「3時の配給準備開始まではないんじゃないですか？」

回る椅子に腰掛けながら生徒会の者たちが顔を見合わせるが、特に

声をあげるものはいない。

「そうみたいです。それじゃ、早速だけど会議を始めましょう。」

「議題はあれですか、昼休みの放送で流れていた……」

「そう、残念ですけど選挙の現状はどうやってでも不利みたいです。」

「力及ばず、申し訳ございません……」

小山から見て左手、その二つ隣の場所にて頭を下げている少女が峠である。黒眼鏡に肩にかかる黒髪という容姿だ。

「いや、峠のせいじゃない。この状況だから。かといってこちらも向こうに言われっぱなしでいるわけにはいかない。何としても切り返さないと選挙戦中ずつと突かれてしまう。そうしたらこのまま負けだ。」

「かといって会長も帰って来てないのに情報を公開するなんて以ての外よ。しかも下手に公開したら選挙のためということが見え見えよ。やるべきじゃない。」

「学園艦の皆知りませんが、現状は廃校よりも更に危機的状況です。峠さんは勝たせなくてはいけません。部分的情報公開も含め検討すべきです。」

「部分的情報公開よりも選挙の争点をずらすことを考えるべきよ。」

「相手が突いてきて、更に住人の皆さんの生活に直結することなのに？」

「それでもやらなきゃ負ける。そして負けた事実が出来たら仮に今年中は現在の運営体制が続けられたとしても非難は免れない。」

生徒会の者たちは公開賛成と反対にはつきり分かれて論争が行われた。一人が声をあげれば、すぐさま他の者から反論が飛び出してくる。人数は半々、より若干反対寄りが優勢のようだ。

「それで、小山副会長はどの様に考えていらつしやいますか？」

「……」

黙然としていた小山に、話が来た。

「……私は、会長が帰って来てない中情報を公開することには反対です。そもそも我々が情報を伏せているのは補給が得られるまで混乱を避けるため。そして、その相手は未だ得られていません。選挙に於

いては、他の政策の実現性、という観点で押すべきだと思います。」

「……お言葉ですが副会長、」

その話の後、一人がが手を挙げた。その者は先程まで部分的情報公開に賛成していた丹波という者だ。

「どうしました、丹波さん？」

「副会長。残念ですが、我々はもう『最悪の状況』も考慮して行動せざるを得ないと思います。」

「最悪の状況？」

「……角谷会長が、戻っていらつしやらない可能性です。」

「不謹慎なことを言わないで！」

席から立ち上がり、その者の目を見据えて怒鳴りかける小山の姿がここにはあった。

「会長がそのようなことになる訳が」

「ないと誰が保証しているのですか？」

「……」

「我々が為すべきは学園艦の安寧。リーダーとはいえど一人の学生の為にそれを見誤るべきではありません。」

既に会長が出発されて12日、我々に残された時間も満足にあるとは言えません。保険の意味も兼ねて手は打つべきです。」

「手を打つって、何をするんだ？」

その者の隣の者が問う。

「他の国との交渉を模索するべきです。」

「フィリピンとかか？」

「他にはオランダ、タイなどですね。この期間帰って来ないとなると余程交渉が長期化しているかそれとも捕らえられたり遭難しているかの2択しか考えられません。」

無論後者でないことを願いますが、流石に香港一つに頼る訳にはいかないと思います。」

「学園艦のエンジンは？」

「2度出発したり下手な加速減速は効かないそうです。農業科、水産科による食糧増産も肥料も飼料も十分に無い状況では上手くいきま

せん。手を打った上で情報を本質を避けた上で公開し、不満を逸らし選挙の勝利を狙うのが妥当かと思えます。」

「……輸送船は会長が利用なさっているものの他には？」

「確か一隻修理中のものがあつたはずです。手はずが整うまでに応急修理させれば使えるかもしれないですね。」

「……分かりました。検討はしましょう。その点、船舶科に確認を取ってください。あとは情報公開は公開する範囲を定めてください。それをしっかりと決定可能ならば実行しましょう。住人の皆さんの不満をそらせるならば損はありません。」

「しかし、それが一部であると思われると下手に不信を煽るかも……」
「その内容の整合性も含めてです。確かに時間がありません。早急に取り掛かりましょう。あと、対象国家の選定も。」

「期限はいつに？」

「そうですね……流石にすぐには言えませんが、10日には選定が出来ていて、12日には出航しておきたいですね。ここから移動することは会長が帰ってくる可能性がある以上避けるべきですし、そうすると対象国への距離がこれまでよりも伸びますから。」

「担当は？」

「そうですね。では丹波さんを中心に三崎さん、流山さんで案を練ってください。」

「お言葉に添えるよう努めます。」

丹波や指名された生徒会の二人もそれを引き受けた。その場の者に確認を取るが反発はない。かくしてこの会議は円満に終了した。時間も配給準備が始まる時間に近い。

会長は帰って来るのだ。

帰って来るのだ。

授業後、みほは自宅のボコられグマの柵の下にカバンを置くと、日が出ている空の下で靴の踵を整えた。長袖では若干薄手な気もするが涼しさや寒さは感じない。配給開始までに一つ用事を済ませたい為、少し早足で目的地へと急いだ。

住宅街を進んだ先の酒屋の隣、目立つ門のところが目的地のカバさんチームの住むシェアハウスだ。門の向こうから中を見てみると広い庭の奥の縁側には帽子の上からゴーグルを着けたボーイッシュな人、エルヴィンが腰掛けている。

だがこちらには気づいておらず、どこか力無げに、古文での『なぐむ』が妥当な表現だろうか、そのような視線を出している。

「お、隊長。よくいらっしやった。上がってくれ。」

紅いマフラーが映えるこの家のリーダー、カエサルが引き戸を開けてみほを迎えた。手に誘われるままに門を開け家の中へお邪魔した。玄関も結構広く、二人が同時に履物を脱いでも問題ない。

「エルヴィンは一昨日くらいからずっとあんな調子なんだ。昨日の練習は迷惑かけてしまってますまない。リーダーとして代わりに謝ろう。」

「いえ。皆さんも……何と言いますか……それで、どうしてあんなってしまったか、ということとは皆さん知っているのですか？」

「いや、何かあったとは思うんだが、聞いても答えてくれなくてな。」

「皆さんにですか？」

「ああ、こんなことは初めてだ。金曜日にグデーリアンがウチに駆け込んできて以来何故かあんな感じなんだ。」

「グデーリアン？ 優花里さんがこちらにいらっしやったのですか？」

「ああ、何やらアメリカの戦闘機に関して資料を見に来たんだったかな？ それにしては様子がおかしかったが。」

「おかしい、とは具体的には？」

「そうだな、何かに追い立てられている、さながら……」

「武田に追われる徳川といったところだ。」

「左衛門佐さん。」

「もんざか。おりようはどうした？」

「ここにいるぜよ。隊長よくいらしたぜよ。すまんが我らではどうにも出来ぬぜよ。」

「何せあのエルヴィンが縁側であんな感じでブーツと日本茶を飲み出したからな。」

他の二人からも頭を下げらなければやるしかあるまい。ここに来る以前は躊躇いがあつたがそれを取り払つた。

「分かりました。」

みほは広間を渡り縁側に向かう。対応する方法は沙織に聞いたものを実行すればいいだろう。エルヴィンとは人一人分間をとつてみほも縁側に座つた。庭は庭のまままだ。隣から小さく茶を啜る音がする。

「エルヴィンさん。西住です。」

「隊長か。」

小さな声の返事を得られた。

「今日は暖かいですね。」

「そうだな。」

「やはりこここの家の庭、広いですね。」

「だろう。この庭は我々の自慢なんだ。」

さらに話を続けたが時間に余裕があるわけでもないため、性急かとも思ったが本題に入ることにした。

「何かあつたんですか？」

「何が？」

「この前の練習の時です。」

「……」

「流石にあの練習はエルヴィンさんらしくありません。」

「……久々の練習で気が抜けただけだ。」

「いいえ。私はこう見えても10年以上戦車に触れている人間です。ああいう時は悩みや苦痛がある時の行動。私もそうでしたから。話せることだけで大丈夫です。話して頂けませんか？」

「……」

「私は何を言われようとも最後まで聞きます。どうか……」

それでも窓の外を向く視線はこちらへ動こうとはしない。やはり待つべきだったかとも思ったが、やってしまったものは仕方ない。このまま続ける他ない。

「優花里さんと」

「時間とは、存在するのかわか？」

「はい？」

やっと来た小声の返事は、全く以ってこれまでの話の流れからは想定不可能なものだった。

「時間とは、存在するのだろうか？」

「時間、ですか？」

「いや、おそらく『しなければならぬ』のだろうか。」「？」

顔は変わらず庭に向けられている。みほに向けて話しているのかさえ分からない。

「確かに現在の24時間システムは人間が考えたものに過ぎない。フランス革命歴などがそういうものであることを示している。

だが、時の流れ、というものは恐らく存在するのだろうか。私がさっき『た』と口にした瞬間と『し』と言った瞬間には絶対的なタイムラグがある。それを同時には行えない。

仮に私が全く動かない状態で二つの瞬間の間いたとしても、必ずこの世の中の何処かで変化がある。

この世が全く動かない状態だったとしても、その間を何者かが知覚することが出来るならば、時間は存在するのだろうか。」

訳が分からない。もしこれが原因なのだとしたら、これの何れがエルヴィンをこうさせているのか。

「えつと……」

また一口、茶を口に含む。

「真実とは残酷だ。」

ぼそりと発されたその言葉を最後に、エルヴィンは何も話さなく

なった。みほが何かを言っても返事がない。

暫く隣に座っていたが、これ以上は無意味だと考えられたことと、時間的にそろそろ配給の受け取りに動こうと思案したみほは手をつけて立ち上がり、再び広間経由で玄関の方へ急いだ。

「隊長。」

「はい？」

部屋を出ようとしたところをカエサルに呼び止められる。

「何を話していたんだ？」

「えつと……時間は存在する、とかなんとか。」

「時間か？」

「ええ、私もよく分からなかったのですがそんな感じでした。」

「時間が存在していなければ我々の趣味の根本が崩れてしまうじゃないか。時間の流れが無ければ歴史は繋がらないからな。」

「……そういうことなのでしょうか。」

「そうなんじゃないか？さて、その様子を見るにエルヴァインから聞くのは無理そうか？」

「うーん……かなり厳しそうですね。これからも時々来ますので、その時はよろしくお願いします。」

「うむ、分かった。」

「では失礼しました。」

みほは玄関で両足のかかとに指を入れ、一礼してこの大きな家を去った。

「……時間か。」

「それとアメリカの戦闘機に深い関連があるとは思えんぜよ。」

「だが現にエルヴァインがああなっているんだから、グデーリアンとの関係も含めて何かあるんだろうな。そうだ、そろそろ配給行ってくるぞ。」

「もんぎ、よろしくぜよ。」

「イタリアンを久々に食べたいものだが……」

「贅沢言うな。オリーブオイルなんて配給される訳無いだろう。」

みほは一度家に戻り、配給を貰う袋を片手に再び靴を履いて貰うものを貰いに行く。一人分なので少し並んだものの受け取り自体はカードを見せれば終わりだ。そうでもしないとこの数を捌けないだろう。

しかしみほはそのまま帰る訳ではない。もう一ヶ所行くべき場所がある。陽は傾いているがまだ街灯は灯っていない。まだ帰っていない可能性もあるのでのんびり街を眺めながら歩く。

移ってから半年以上が過ぎ、土地勘もジョギングなどで順調に育まれていた。この時間先程のエルヴィンみたく物思いにふけるのも有りかと考えたが、とりあえず状況を纏めてみることにした。

まず現在学園艦には統制体制が敷かれ、そのせいで食糧は配給制になり、筆記用具なども数が制限され、おまけにコンビニを眺めることさえ出来ない。

次に麻子さん。沙織さんの家に来て無線機を急に借りたと言い、さらに絶望しているとか言って、その後生徒会に協力しているみたいだ。

そして華さん。生徒会に呼ばれてそのまま仕事をしている。優花里さんは風紀委員に呼び出されて、そして練習の時、思わず強く言ってしまうほど危なっかしかつた。安全装置はそれほど恐ろしいものだから。

そして私たちが気づいたのは、学園艦が一時期西を向いてさらに沿岸部を通っていながら寄港出来なかったこと。華さんの助言のおかげで戦車道の練習は出来るだろう。だが戦車道は何が出来るか。現実は何なのか。

そんなことを考えていたら正面から電柱に頭をぶつけた。みほにとつては稀によくあることであるが。頭を撫りながら一つの寮の前に来た。ここに居る者が目的である。この寮は朝早くから外に出られる為に一部の人間から人気があると言われる。

事情をそこそこ言えばその管理人はみほを部屋まで案内してくれた。どうやらみほがゆっくりしている間に早くも帰って来ていたようだ。その部屋の主である磯辺はみほの顔を見ると一瞬顔を歪ま

せたが、すぐに何時もの顔になってみほへの応対をした。

結論から書くと、このみほと磯辺の会話で得られたことは殆ど無かった。というのも練習時のことについて話をし始めると、磯辺が返答を頑なに拒否したからである。

ただ一つ得られたのは、動揺の原因があまり良くはないことだった。

翌日の昼の港には一応銀色の輝きを見せる輸送船が停泊していた。

「お二人ともお疲れ。」

「停泊さえして頂ければ何とでもなります。」

「まだ応急処置レベルですが学園艦に帰還する程度ならば問題ないでしょう。」

船舶科の有馬と永野がそれぞれ工具を握りながら答える。持ち込んでいた整備用の服は黒い汚れが見える。

「燃料とか中はどうだった？」

「二通り確認してみました。燃料は変化なし。内装も内部も問題なしです。まあ、嵐で大きくやられた部分の修復はまだですが。」

「そうか、それは良かったな。」

角谷の後ろには男が一人立ち、また少し離れたところに軍服姿の男たちが集まっている。

「松阪先生も、昨日はありがとうございました。先生がいなかったらここまで通じなかつたでしょう。」

「繁体字、一応分かって助かつたな。だが実質この交渉英語だったし、何よりこの交渉を纏めてくれた角谷くんの功績なのは間違いないさ。これで安心出来るよ。」

「ですが、問題はこれからでしょう。」

「まあ、学園艦の混乱は間違いないしさらに角谷くんは……」

「まだ南京側があるので何とも言えませんが大洗からは少し引かざるを得ませんね。」

船のエンジン音が高まっていく。

「まあ、小山たちがいれば何とかなるでしょう。」

I didn't think this negotiation was gathered in one day really really.

(まさか本当にこの交渉が1日で纏まるとは思っていなかった。)
後ろの男の一人が声を掛けた。角谷も振り向いて目を合わせる。

「It might calm down by the sharp
h·n·」

(相互に利がある形で落ち着いて良かったです、チエンさん。)

「Your school ship approves this,
doesn't it?」

(あなたの学園艦はこれを承認するんだな?)

「Sure. I make them admit certainly. As soon as that's concluded, it's said that they return to Guangzhou, and would you like
?」

(勿論です。確実に認めさせます。それが成立次第広州に戻るという
ことでよろしいですね?)

「Yes. If we admit it each other,
it doesn't make the sense.

(そうだ。我々が相互にこれを認めあつたとしても、これは意味をな
さない。)

「You're saying that it's the tu
rn to help you next, right?」

(次はあなた方を救う番だというわけですね。)

「You, too.

(あなた方もな。)

そう言い終わって握手を交わす。背の高い者と付き合うのは慣れている。陳の隣にいる人々とも次々に握手を交わす。どの人も硬く、ゴツゴツした手だ。

「会長、荷物乗せ終わりました。そろそろ出発しなければ……」

「Ms. Kadotani.

(角谷さん。)

陳から手渡された書類を受け取る。中身を確かめるが、急ごしらえで打ったのか時たま字がボケている。まあ読むのに問題はない程度だが。内容も相互で決定したことからの変更はないようだ。

「OK. No problem.

（大丈夫です。問題ありません。）」

「Then, We'll meet again. It's glory in Oarai.

（ではまた会おう。大洗に栄光を。）」

「It's prosperity in Guwangdong
Guwangsi.

（両広に繁栄を。）」

手を振りながら船に乗り込むと、船舶科の二人に合図を出す。それを見た二人は汽笛をこの広州の港に響かせると、船を出港させた。高々の登る日の下で角谷は港側を向きながら見送る人々に手を振り続ける。デルタの間を縫うように進む頃にはもう港も間を見えず、船内に戻る。

「船は大丈夫そうだね。」

「ええ、休んでた分働きますんでごゆっくりどうぞ。」

「いや休んでたって、ついさっきまで働いてたじゃん。」

「いえいえあの程度。」

舵を握りながら有馬が謙遜するが、顔は真剣そのものだ。

「会長。私たち、助かったんですよね。」

もう一人の永野が窓の外を双眼鏡で見渡しながら尋ねる。

「多分。」

「多分、ですか。」

「まだ確定はしてないね。まずこれが学園で承認される必要があること。」

「誰も死にたくないから、呑むんじゃないですか？拒否する理由も無いのですし。」

「そしてこれが実行されるには一つ条件があること。」

「何ですか、条件って？」

「今回認めて貰ったのは簡単に言うところ、地方政府みたいな所なのさ。だからその上の中央政府にこれを認めて貰わなきゃいけない。」
「なるほど。」

「そうなるかと角谷くんは南京に飛ぶわけか。」

「そうですね。ここまで来ましたから、何としても認めさせます。」

「それで、私たちはどうなるんですか？」

「……まずは学園艦を出払う。そしてこのデルタの外にある万山群島の島に移動する。」

「学園が無くなるんですか？」

「いや、そこでの一応の自治は認めて貰えた。つまりその島に学園都市を作る訳だ。輸送には相手が持つてる輸送船も貸してもらえらる予定。」

「……島で生活は出来るんですか？」

「一応艦内設備の一部は持って行って良いことになっているから、水は大丈夫。あとは最初に物資を前もって貰えるけど、島の整備は早めに済ませたいね。兎に角工学科かどうか関係なく全員協力して貰うよ。」

「出ていった後の学園艦はどうなるんですか？」

「鉄鋼供与の元になる。」

「戻れるんですか？」

「工学科と船舶科の上に聞かなきや分からないけど、供与量は予定ではかなりあるから、強度の低下は間違いないね。戻れるとは思いうよ。動けるかは分からないけど。」

「目下の課題はその島で生き延びれるか、だな。食糧も備蓄はもう少ないんだろう？」

「一応農業科と水産科に増産を依頼してありますが、その苗などを移送出来ればなんとかかなりあります。気候も温暖なので雨も多く溜められれば有効に使えますし。土地も多めに貰えるようにします。」

「やりようですか……」

「協力、よろしく頼むね。」

「勿論です。他に手は無いでしょうから。船に関してはこちらでやつ

ておきますので、休んでいてください。」

「んじや、お言葉に甘えて。学園艦と連絡取れたら教えてね。」

「分かりました。」

白いワンピースに身を包んでいた角谷は束ねられた書類を振りながら操縦室を去った。

「……やっぱり嬉しいんだろうね。」

その時の頭の上下具合からはそのようなことが察せられた。

昼食に向かおうとする前、みほは教室を出ると、一人のおかつぱの、年下そうに見える子に呼び止められた。

「西住みほさんですね。」

「はい、そうですけど……」

「私、風紀委員の者なのですが、少々お時間頂けますか？すぐに終わりますので。」

そのおかつぱの子はみほに腕章を見せる。

「……分かりました。」

逆らうべきではないし必要もない。みほはその者の案内の下廊下を進んだ。

「どちらに？」

「いえ、少し人気のない所に。申し遅れました。私、嘉沢といいます。高校治安維持担当のトップです。」

「はあ……」

「さて、ここら辺なら大丈夫ですかね？では早速。」

廊下の一番奥はこの時間の廊下を通る人間の大半は階段側を向くため目立たないうえ、学生二人が話している所をわざわざ止める人間もない。

「それで、用とは？」

「ええ。最近こちらの調査で、秘密裏に生徒会に対して力で反抗をしようとしている者たちがいるようです。」

「……」

「無論判明次第こちらも捕らえますが、もしかしたらその者たちは戦車道を利用しようと考えてるかもしれません。」

「……それで、私に何を？」

「戦車道がそのような動きに関与しないと隊長から証明を頂きたい。」

「私たちを疑うのですか？」

「そうです、残念ながら。あなた方は、仮に戦車道がスポーツだとしても、抑圧、攻勢の為の力となります。それにあなた方には名声がある。何せこの学園艦を守ったのだから。それゆえそのようなことに戦車道が加担しない確約を頂きたいのです。」

「……私は構いません。ですが、戦車道のみんなもとなると確約出来ません。」

「……分かりました。西住さんだけで結構です。でしたら生徒会の一部が強硬策を主張しているようなので、生徒会が抑圧を支持した際に隊長として協力しないことを約束して頂けますか？」

「本当ですか？」

「ええ。我々としても暴力的な抑圧は避けたいので、どうか……」

「……私個人で、と言うことで良いならば。」

「構いません。では、この紙にサインを。」

みほは紙を受け取ると、それを壁に押し当てて名前の欄らしき所に記入した。その紙を返すと、一礼して素早くその子は帰っていった。
「……何だったんだろう。」

みほも前回の練習から考えて風紀委員もただ監視しているだけじゃないだろうとは考えていた。だがそれが何かはさっぱりのため、みほ個人のことならば別に構わないだろうということになった。それよりも戦車道の仲間たちの異変の方が優先されるべきだった。

広西大洗奮闘記 45 我らの相手

69の階段がそれぞれ音を出す、二人分。そして辿り着いた先の挨拶は簡単だ。

「……『マリが入院したそうですが?』」

『飯原麻里は大洗学園艦総合病院で順調に回復しています。』
「どうぞ。」

予め伝えておけば前みたいな手間は省ける。見張りの者は鍵と扉を開けて律儀に礼をするとゴモヨを奥へ案内した。やはり床が光を反射している。案内させた先で、見張りの者は鐘を鳴らし3人を呼び出した。それぞれの個室からぞろぞろと吐き出され、牢の向こう側に並ぶ。

「おや、確かあなた方に呼び出されるのは朝だと伺っていましたが?」
「その前に一度来ても文句はないでしょう。風紀委員長と副委員長が。」

「ではお二人揃って何の用です?」

「そうね、元々当日まで待たせる計画だったけど、流石にちよつとやって貰うわ。」

「何を?」

「これ。」

ゴモヨは見張りの者が握る鉄の棒を指差す。

「……なるほど。流石に訓練無しでは使えないですし。」

「本来なら捕らえている人間に渡すべきものじゃないけど、この状況だからね。マニュアルなら風紀委員の大体が持つてるから、指導を受けといてちょうだい。あと訓練後はちゃんと見張りに返すこと。」

「はいはい。」

「……まあいいわ。しつかりやってちょうだい。」

「それで例の件はいつになるんです?」

「そうね……一週間以内のあなた方が予測がつかない日、とでも行っておこうかしら。」

「それってアレでしたっけ? 来週の火曜日にあるということは月曜日

に分かるので、その連鎖で予測がつかない日、ということとは不可能という問題でしたっけ？」

「いや、そんな理屈抜きでそんな日は来ないさ。何故って、毎日今日こそ解放されると思っておけば、予測がつかないなんてことはないからな。」

「そういうことよ。それで、お詫びは何かいいかしら？」

「そうですね。まあ、解放される日までには考えておきますよ。」

「じゃあ、準備もあるしここで失礼するわ。ここなら声も漏れないし訓練はしっかりやってちょうだい。」

「分かりました。」

ゴモヨが手を振りながらその場を立ち去るとパゾ美がそれに続き、それを見張りが追う。そして再び138の高い音を鳴らして太陽の下に立ち、思わず手で目の上を覆った。

風紀委員室の自身の机につくと、机の上の書類に目を通す。それは監視対象となっている者に関する情報、まあ何もないとあるだけだが、とそれ以外にサインのなされた一枚だ。その一枚の内容を見ると、どうやら本丸は中立を守るようだ。それは安心だ。個人のみといえど、その個人が学園艦にもたらす影響は計り知れない。近くの棚の特定のファイルの口を開き、中にそれを滑り込ませる。席に戻るとひよっこりとヤボクが正面に現れた。

「どうしたの、ヤボク？」

「一つだけ報告っす。生徒会が新たに動き出したみたいっすね。タイをを対象とする新たな計画案を策定しているみたいっす。」

「……香港が時間かかっているから、可能性をばら撒こうとしているのね。そういえば、タイって学園艦持ってたかしら？」

「確か国立だか王立だかの学園艦がタイ湾にいたはずっす。確かチュラロンコン学園だったっけ？」

「妥当な名前ね。まあ、運営経験あるなら狙い目なのかしら？」

「まだ生徒会も詳しく決めてないみたいなんで判明次第報告するっす。」

「よろしく。それにしても生徒会もこの時期になって他の候補を考え

始めるとは、余裕こいてるわね。食糧も大分減ってるでしょうに。」

「まあ、角谷会長を信頼しているとか何かじゃないっすか？」

「信頼は重要よ。だけど信頼だけじゃ運営は回らないわ。どちらかと言おうと信仰の方が近いかもしれないけど。」

「……まあ、引き続き調査は続けておくっす。情報は処理できれば幾らあっても困らないっすから。」

机の上には一つの山とそれから取り残された丘がある。丘の方は小山が読み、ペンを取ることで標高が下がっていく。最後の一枚、筆記用具の供給調整に関する資料を手取る。大概は現在の供給量で食糧が尽きるまでなんとか持ちそうだ、ただ一つ、チョコレートを除いては。

優先的に折れにくいチョコレートを供給したところ、その系統の備蓄が尽きかけているとのこと。それが尽きれば折れやすいチョコレートを使うことになる。即ち消費量が増える。そして折れやすいものなんてそう備蓄していない。供給量はもうギリギリのラインである。これ以上の削減が教師からの反発を導くことは想像に難くない。

だがもう夜も遅いうえ隣も就寝準備を始めている。明日に回すのがいいだろう。それは山の上に乗せず丘のあった場に戻し、山の上には重石を置く。華も片が付いたようなので、椅子を片付け倉庫から布団を引っ張り出し、床を確認した上で折られた布団を3倍に拡張する。人数分敷き終わると、水道へ足を運び身支度を整える。すでにシャワーは浴びているので、終わり次第布団に入り寝るだけだ。あくびをしながら一つ伸びびをして布団に突っ伏す。

疲れた。会長が帰って来るまでは私は実質的なトップとして全力でここを混乱無しに存続させなければならぬ。会長はこの心理的苦悩をずっとこの一年受け続けていたというのか。こういう時は寝るのが一番、早く寝てしまおうと這い上がって明かりを消し、布団を被って目を閉じた。

このあと耳につく電子音がレム睡眠に入る前に聞こえたのは、小山にとって幸いだっただろう。身を起こすと隣の部屋の緊急無線まで向かい会話ボタンを少し力を入れて押し込む。

「はい、こちら生徒会です。」

「小山副会長はいらっしやいますか！」

「私が小山ですが。」

「こちら船舶科の大橋です。角谷会長の乗っていらっしやる船と無線が繋がりました。」

「ほ、本当に、本当ですか！」

思わず手をつけて台の方に身を乗り出す。

「ええ、間違いありません。乗員含め皆無事だそうです。」

「今でも繋がってますか？」

「天候の悪化はなさそうですし、恐らくこのまま繋がりが続けるかと。」
「す、直ぐに艦橋に向かいます！」

「分かりました。お待ちしております。」

小山は耳のイヤホンを外しボタンを押し直すと、上着を一枚羽織つて、横たわる人々を避けながら生徒会長室から足を踏み出す。隣も暗く、ただ一ヶ所灯された光のみが目立つ。

「丹波さん。」

「あ、副会長。どうなさいました、こんな時間に？」

「会長が帰って来たわ。」

「え、本当ですか！それで結果は！」

丹波は読んでいた書籍を顔の方に風を送りながら閉じる。

「まだ分からない。けど直ぐに報告するから、ちよつと起きててくれる？」

「勿論です。」

丹波の返事を確認すると壁にかかった自転車の鍵のうち一番右を取り、ピンも取れる、いや飛ぶ。人に落ちなくて本当に良かったと丹波は起きている者が一人になったその部屋で少しずらした場所にピンを刺した。

自転車に跨り、夜の街を駆ける。街灯はまばら、あとは自転車の光のみだ。風紀委員の居そうところは避けるが急ぐ。目標は艦橋。辿り着くと艦橋の下に自転車を停め、そばの階段を駆け上る。階段の上で船舶科の船員に呼び止められると、膝に手について息を整えてか

ら操舵室に案内される。

「はあ……すいません、小山です。」

「副会長、こちらです。」

大橋が無線士の肩を叩き、変わるよう手で合図する。その者から無線機のちよつときつめのヘッドホンを借り頭にはめて、無線を繋いでもらう。

「もしもし聞こえますか？」

「はい、こちら輸送船B。」

「こちら大洗女子学園生徒会副会長の小山です。」

「小山副会長ですか。角谷会長に変わりましたでしょうか？」

「すみません。よろしく願います。」

間が空いたので、船舶科にペンと紙を手元に用意して貰う、そこに何行も書くことになるだろうことを願う。

「小山か。」

「会長……無事ですか！」

「まあ、何とかね。」

聴きたかった声。部分的な安心をもたらす。

「……香港との交渉は……」

「残念だが、香港とは失敗した。」

「……そうですか。」

「だが、別の場所との交渉に成功したよ！」

「！えっ、本当ですか！良かった……本当に良かった……それで別の場所って何処ですか？マカオですか？それとも仏領インドシナですか？」

「いや、そのどちらでもない。我々の相手は

中国国民党中央執行委員会西南執行部と中国国民党国民政府西南政務委員会だ。」

「はい？え、今中国国民党と仰いました？」

「言ったよ。」

「中華民国からは断られたんじや……」

「うーん……細かく言うのと長くなるけど、簡単に言うとお軍閥。」

「軍……閥？そ、そんな所と組んで大丈夫なのですか？」

「南京の国民党政権にも帰順するからね。」

「はあ……それで、どのような条件で交渉されたのですか？」

交渉結果を紙に記載すると、1枚ではとても足りず何枚も追加の紙を必要とした。

「……実際良いものなのでしょうか、これは。」

「多分ましな方だよ。我々としてはこれ以上引き伸ばしてもジリ貧だからね。交渉してここまで持つて行けただけでも成功さ。詳しくは戻ったらしよう。」

「いつ頃戻られますか？」

「明日の昼前らしいね、船舶科の二人の話によると。それでさ、小山にお願いがあるんだけど……」

翌日朝、昨日の配給を元に作られた朝食を食べ終えた歴女四人衆はそれぞれのカバンを手に学園への道を進もうとしていた。まだ時間はあるが、配給の受け取りを含めると妥当な時間ではある。夕方は担当が一人で行くが朝は担当配給決まっているが四人で行き、昼に回して貰うのが彼女らのいつもの行動だ。

しかし、エルヴィンだけはカバンを持ったまま窓の外を眺めている。外にはいつも庭にあるものの他に何か特別なものがあるようには後ろの三人には見えない。

「エルヴィン、どうしたぜよ？」

「行かないと配給の支払い並んでしまうぞ？」

「……今日の受け取り担当、おりようだったよな。」

「まあ、そうぜよ。」

「すまんが、カエサルにひとつ頼みたいことがあるんだが。」

「どうした？」

「占いをやって貰えないか？」

「占い？何で？」

「いや、何となく。」

エルヴィンは最近、変な行動もそうだが、このような変わったことを頼むようになった。前は確か外を眺めている時に双眼鏡が欲しいと言われ、貸した後は空を眺めていた。かなり上で飛行機が飛んでいたような気がしたが、わざわざそんなものを持ち出す理由は分からなかった。

「まあ、別にいいだろう。二人には金を渡しておけよ。」

「しかし昼飯分の金も心配になってきたぜよ。」

「然り。この状況が続けば仕送りも受け取れぬ。」

「早く何とかして欲しいな。」

エルヴィンはコイン2枚をおりように投げる。それをキャッチするとおりようと左衛門左は家から一足先に出掛けた。

「それで、占いって何をやればいい？」

「あの棒を倒すやつで。」

「何を占うんだ？」

「今日の吉となる方角を調べて欲しい。」

「それならすぐ終わるな。外に出てくれ。」

カエサルは倒すための棒を持ち出すと、エルヴィンと共に靴を履いて外に出た。晴れた朝の空の下、目を閉じたカエサルは何かを唱えると、気を吐いて目を見開き棒の上に置いた指を放す。棒はぱたんとある方向に倒れた。

「……どつちだ？」

「こつちが東だから……北か。」

「ということは、この学園艦北を向いているのか。」

「そうみたいだな。」

「これでいいか？」

「ああ、学園へ急ごう。」

学園の配給場所では支払う人と貰う人に分かれて列をなす。エルヴィンとカエサルが辿り着くと、左衛門左とおりようはすでに払い終わり彼女らを待っていた。

「終わったのか？」

「ああ、今日は四人分カードも見せずに払うだけで終わったぜよ。」

「カードのチェックは無かったのか？」

「然り。」

「珍しいな。一応毎回やっているはずだが。」

「まあ、そういう時もあるんだと思うぜよ。」

「そんなものか。」

「ぜよ。」

四人はそのまま学園に吸い込まれていった。

私が学校ですることは、ただ眠気に耐え何とか起き続けるか、耐えられず机に突っ伏すかのいずれかである。教師から言われることもほぼない。前は遅刻に慣れさせたが、今回は授業中の睡眠に慣れさせたようだ。するべき事は特にない。見張るべき相手はいるが、特に学

園内での動きはない。

西住さんは戦車道を除けば独自で行動する事はほぼ無く、担ぎ上げられる事は西住流での経験から良くは思わないだろう。風紀委員が積極的に西住さんと関わりを持つとうとする様子はない。そこまで注視する必要は特にないだろう。この授業はもうすぐ終わり、昼休みだ。

「……区切りがいいから今日はここまで。じゃ、号令。」

どうやら早めに授業が終わったようだ。伸びをしながら椅子から立ち上がり、号令の合図とともに腰を曲げる。

さて配給の支払いを済ませた以上、私は向かわねばならない。西住さんも机を片付けて向かおうとしていることだし、行くとしよう。あ、ペン落とした。

階段を下り大きな窓から光が差し込む広い食堂に辿り着く。これまでそれなりの期間学園で過ごしてきたが、やはりこの部屋は広い。その一角で、配給が始まる前よりも遥かに早く我々に食事が提供される。貴重な満腹を人によっては味わえる時間だからか周りにいる人々は気分が良さそうに見える。

まだ不満が表面化する様子は特にならない。しかし選挙は相変わらず相手の赤峰候補が有利。生徒会はどのようにして黙っていないのだろうか。

自分の昼食は少し時間は掛かったが、受け取れたし窓際の席にも座れた。たまには一人で気兼ねなく食事を取るといいうのもいいものだ。内容はご飯に味噌汁に和風野菜炒めに加工肉の揚げ物、最後に漬物が添えられている。味噌汁は普通、他も特筆する程の旨さではないが、悪くない。おかずで盛られたご飯を減らしていく、そうすると腹が満たされる。満腹までは眠気は一応それなりに回避できる。

ピンポンパンポン

「生徒会より全校生徒に連絡、全校生徒に連絡。本日の終礼後、中学生はグラウンド、高校生は体育館に集合してください。繰り返します。中学生はグラウンド、高校生は体育館に集合してください。緊急ではございますがご理解とご協力をお願いします。」

皿のものがだいぶなくなった頃に聞こえたのは私がこれまで聞いたことのない者の声による放送だ。初っ端の機械的な導入で会長ではないと分かったが、何事だろうか？しかもえらくへり下っていたように思える。食堂の画面には先程の要旨が表示され点滅している。

取り敢えずそのような話がある事を頭に入れ箸を再びとると、窓の外から再び時に光化学スモッグを知らせるような機械的な音声が聞こえた。

「お昼に失礼致します。大洗女子学園生徒会副会長小山柚子です。住民の皆様にご連絡致します。本日3時半より住民の皆様に向けて緊急放送を行います。その時間までに各配給場所にお集まりください。

繰り返します。本日3時半より緊急放送を行います。各配給場所にお集まりください。急ではございますがご理解とご協力をよろしくお願い致します。」

耳を窓につけるとその声が聞こえた。小山副会長がこちらということは、こちらの内容の方が重要だということだ。住民の皆さんまで集めてやること、となればだいぶ絞られる。そろそろ私の仕事が終わりそうだ。食堂を見渡してみるが、外の放送に注意を払っているような者は見当たらない。この食堂が喧騒に満ちているからだろうか。

その少し前、午前1時半ごろ、学園艦後方の補給船ドックはその間口を開いた。警笛を鳴らすことはなく、ゆっくりと一隻の輸送船が沖で回りながらそこに吸い込まれる。停止して碇を降ろすまでに時間は掛からなかった。船内から出てきた者たちは船舶科の者が立て掛けた梯子から角谷を先頭に降りてくる。

「会長、お疲れ様です。」

「お疲れ様です！」

小山に合わせ、来ていた艦長の一人井上も敬礼する。

「小山と井上ちゃん、ただいまー。」

「他の皆さんも……」

「いや、いいよ。まだ完全な解決ではないのだから。」

「船舶科としての努めです。」

続いて後から降りた松坂や船舶科の二人は小山の労いを丁重に断る。

「それにしても生徒会は小山一人だけかい？他は船舶科みただけど。」

「それはそうですよ。他の人は会長の提案のために奔走してるんですから。」

「そうだったそうだった。」

「それまでまだ時間がありますが、いかがなさいますか？」

「それに向け準備するよ。こちらでも荷物とか着替えとか色々あるからね。あとはそっちの現状詳しく教えて。」

「分かりました。」

「広東との内容については小山、直に一回見といてくれる？」

「分かりました。コピー取りますか？」

「まだインクの備蓄あるの？」

「統制体制のお陰で。」

「じゃ、先部屋行って予備も含めてとっちゃって。流石に心臓に悪いから。私も後から行くよ。」

「はい。」

小山は角谷から渡された紙の束を抱えて走り去った。

「船舶科の皆もご苦労様。」

「いえ、我々の学園が再び救われたのなら何よりです。」

「輸送船は大丈夫かな。無理させてみたいけど。」

「恐らく大丈夫でしょう。流石に無茶なことはさせてないようですね。」

「分かった。一応3時半になったら船舶科の人どこかに纏めておいてね。」

「分かりました。」

「では行こうか。」

「ええ、そうですね。」

久々のこの空気、久々のこの天井、久々のこの机に溜まった書類の山々。ここは変わらない。そして、プリンターの動作音も。

「しかし、改めて見ると凄まじい内容ですよ、これ。」

「まあ、現代社会なら見ることはない契約書だとは思うね。」

「それはそうだろ……」

「さて、まあ刷ったらこっち来てくれ。」

「はい。」

扉を開き、生徒会長室に踏み込む。こちらも出発前とは変わらな
い。あの光の前よりは設置される机が増えたりしたが。角谷は自身
の皮の椅子に、松坂は近くの手頃なパイプ椅子に腰掛ける。

「それにしても角谷くん。」

「先生、どうしました？」

「いや、帰り際のあの男達、どっから見ても軍人だったのだが、怖くな
かったのか？」

「そりゃ怖かったですよ、最初は。いきなりホテルから連れ出されて
条件呑めですよ？ですが交渉となって話してみますと、彼らの目的が
よく分かったんです。」

「何だね？」

「あのチェンという人は広東、そしてリーという人は広西。その自治
権を守ることです。護りたい、その想いは何処かしら通じる気がした
んです。」

「当時の背景から考えれば蒋介石の中央集権的政策への反発か。」

「上に逆い、独自性を護る。」

「まあ学園艦体制は地方分権の権化のような政策だからなあ。」

「上手くやっていける、いや、やってみせますよ。」

角谷が背もたれから身を起こすと資料を抱えた小山がその部屋に
加えられた。

「会長、刷り終わりました。」

角谷の前の机に刷った書類を置く。

「お疲れ。じゃあ現状をよろしく。」

「ではまずは食糧、燃料から。食糧は現在の備蓄食糧の残りから考え
ますとのこり15日、当初予定通りです。燃料は石油は現在ほぼ流通
させず、最初の3割程度残っています。使用しているのは配給と鉄鋼

を切らせている工学科のみです。」

「鉄鋼の量は？」

「確か6・6ktを予定しているそうです。」

「足りないねえ……食糧の増産計画は？」

「計画分が出来るのは先ですが、今年得られた分は全て回せるので、それを足して追加で3日もてばいいかと。」

「……厳しいね。」

「18日後が、26日が一つのラインです。ですがそれよりもまずいのが来週月曜に予定されている選挙です。こちらの峠さんが相手の赤峰候補に支持率で押されています。」

「それは大丈夫。」

「……分かりました。あとは方が一に向けて丹波さんらに新たな対象を探させております。彼女らはタイをターゲットにしたかったようですが、調査の結果タイ国王がこの時代タイにいなかったようなので候補探しに苦戦しているようです。」

「タイは立憲君主国だからねー。ちなみに何処にいるの？」

「スイスのローザンヌだそうです。まだ王のラーマ8世は10歳過ぎだそうです。」

「時間がないから無理だね、百万が一南京との交渉に失敗したとしても。まあ成功させるから心配ないさ。」

「あとはチョークの不足などが挙げられます。」

「それも大丈夫。暴動とかの動きは？」

「風紀委員が情報開示を求めようとしていた生徒を捕らえた事もあり、住民に動きはないそうです、が……その風紀委員、会長が香港に向かった事を知っていたようです。」

「風紀委員には？」

「全く伝えておりません。」

「つまり自力で調べたということだな。何の為に……」

「……風紀委員、動くかもね。」

「風紀委員は現在学園艦最強の暴力装置となっています。かといって下手に弾圧すると学園艦住民への抑止が薄れてしまいます。」

「まだ起きてないのは幸いだ。今日の夕方なら動かれても遠慮なく止められる。」

「現状はこのようなところでしようか。」

「ありがとう。だいたい把握した。さて、これからは本当に学園艦総動員体制だ。何としても乗り切るよ。あと小山、」

「はい。」

「ちよつとかーしま呼び出してくれる?」

「桃ちゃんですか? 特別授業次第ですが、それは何故?」

「今日の司会やって貰おうかなと。」

「えつと……河嶋くんか? 他の生徒会の者で良いんじゃないか?」

「いえ、出来れば司会の様子で今回の事情を悟られたくないので。」

「学園艦に放送後確認してみます。」

「よろしく。じゃあ、服替えるか。」

「私も流石にあるめーに着心地悪くなってきたからな。」

午後の授業は通常通りだった。先生は前で授業をし、生徒はそれを受ける。そして集中してメモを取る。だが麻子は寝ている模様。

6限が終わり終礼、これといった話はない。配布物も減り口頭での通達が増えたが、今日は一言、「体育館に一行で並ぶように」と告げられただけだった。終わったクラスの者はぞろぞろと体育館に向かう。

みほも沙織とともに廊下を進む。一緒にいたが、話すことは前のエルヴィンの件だ。

「……という感じだったんだよ。」

「らしくないね。ちよつとイメーヅ湧かないなあ。」

「戦車とかの話でも教えてはくれなさそうだし……どうしよう。」

「歴女の人がやってそうだもんね、それ。うーん……あんなに仲良しなカバさんチームの人にもそれだと私たちじゃ厳しいかもね。」

「だけどそうしないと……」

「みほりん心配しすぎ! 悩みなんて時間経てばどうでもよくなるものなんだから! そうじゃなきゃ失恋は終わらないよ!」

「……それとは違うと思うけどなあ……」

「いいや、違わないよ！人間、悩むと一度は止まっちゃうの、でも動かないわけにはいかなかったら、勝手にまた動くの！無理なら無理と割り切らなきゃ！」

「……そんなものかなあ……」

よくよく思えばここは廊下だ。廊下で談笑する者はいるが、ここまですれ交わす者は稀だ。そして大半の生徒が廊下を通っている。即ち沙織がとても目立つ。周りの者がこのような沙織の様子に慣れているとしても、ちよつとは噂になるかもしれない。

(無理なら無理、か……)

やっと気付いたように軽く固まっている沙織を横目に、みほは少し成長出来た気がした。

体育館ではクラスごとに横一列に並ぶ。この横は舞台と平行の向き、映画館での列と似たようなものだ。前が高1、中にみほたち高2、後ろは高3だ。ワイワイガヤガヤと騒がしい。こういう場所では一人の小さな声が反響して大きくなっていくものだ。

「ええい、お前ら静かにしろ！黙れ！」

この声は河嶋のか思ったが、河嶋は生徒会を引退しているはずだ。だが実際に舞台上にいる。前と変わらぬ。ふと周りを見渡してみた。カメラを用意しているような人がいる。何を取るのだろうか。舞台上で何があるのか。考える程謎だ。

「黙れ！座れ！早くしろ！」

指示に従い体育座りをする。やがてその声が鎮まるとみほたちが座る会場の電気が消え、河嶋が光に照らされた舞台の上で口を開いた。

「えー、本日はこのように集まってくれたこと、誠に感謝する。本日集まってもらったのは、会長より全校に向けての緊急の案内があるからだ。全員静かに聞くように。」

そういうと河嶋は舞台裏に下がっていった。会場は一瞬ざわつくが、角谷が姿をあらわすとぱつとそれが止まった。

みほには違和感しかなかった。角谷は制服の冬服であったが、いつもの緩い感じが見えない。背筋を伸ばして演説台に立とうとしてい

る。それもあるが、感じる雰囲気、周りから潰されるかのような濃密な雰囲気。それを纏ったまま角谷は立ち、台の上に紙を広げる音をマイクに拾わせる。そして、もの言う。

ここにいる、またはグラウンドにいる生徒諸君、船舶科の諸君、並びに教員の皆さん、そして配給場所で話を聞いていらつしやる住民の皆さん、どうもこんにちは。大洗女子学園生徒会長、角谷杏です。

ここにいる、またはグラウンドにいる生徒諸君、船舶科の諸君、並びに教員の皆さん、そして配給場所で話を聞いていらつしやる住民の皆さん、どうもこんにちは。大洗女子学園生徒会長、角谷杏です。この集合、放送の為に昼の放送の後、お時間を作って下さった方もいらつしやるでしょう。生徒会を代表して御礼申し上げます。

そこままでして急に今回このような場を設けましたのは、私たち生徒会から皆さんに謝罪し、お伝えしなければならぬことがあるからです。謝罪しなければならぬことは3点ございます。

まず、皆さんに本年10月10日以降儉約体制、統制体制、量を削減された配給に耐えて頂いたこと。

そしてその理由として発表したこちらの情報が不十分極まりなかったこと。それにもかかわらず目立った反発も無く1日2度並んで下さったことは感謝の念に堪えません。本当にありがとうございます。

最後は、我々生徒会が皆さんの未来に関わる最重要事項を伏せ続けていたことです。

まずは我々が住民の皆さんにお伝えしていた配給体制の理由、「南方の補給用の港が使用不能となった」というものは、実は港が使用不能であるというのは事実ですが、南方の港のみが使用不能という訳ではありません。現在、この世界のほぼ全ての港に停泊することは不可能な状況となっております。

このような不完全な情報を発表したのには訳があります。それが先程申しました「皆さんの未来に関わる最重要事項」、でございます。

ではその最重要事項とは何か。私がこれから語ることは皆さんには信じがたいことに違いありません。私自身も脳内で何回も否定し、現実ではないと信じようしました。しかし現状打開に向け行動するにつれて、それが真実であり、我々はその渦中にいることを思い知らされ続けました。

それは、ここが過去の世界であるということです。

もう一度言います。ここは我々からしたら過去の世界です。

さらに詳しく言いますとこの学園艦の外では今日は1935年1月9日です。

原因の詳細は分かっておりませんが、外部との交流の結果そうであると判明しております。証拠といつては何ですが、当時の香港総督であるウイリアム・ピール卿より預かった書状がこちらです。そして現在いるのは日本の近くではなく香港南方の東沙諸島近くです。

この内容が皆さんの未来への希望を、予定を奪い、絶望へと導くことであると理解してはいますが、それでも私はお伝えし、皆さんは理解して頂かねばなりません。

10月8日に学園艦が光に襲われました。それ以降外部との連絡が遮断され、補給船が途絶えた為、配給と儉約体制を導入しました。その後外部との接触に成功。先程お伝えした情報を手に入れました。そしてそれが判明して以降、生徒会としてはこの地での支援先を求め学園艦を南西へ航行させつつ外部との交渉を繰り返して参りましたが、これらの達成は残念ながら力及びませんでした。

しかしこの度新たな交渉の結果安定して物品を入手可能な状況に近づき、情報発表によっていたずらに住民の皆さんの不安を煽る事態にはならないと判断し、この度このような場にて現状をお伝えいたします。

この度、私角谷杏は大洗女子学園の代表として中国広東省にありま
す中国国民党中央執行委員会西南執行部と中国国民党国民政府西南
政務委員会との交渉に成功し、学園都市機構の維持を認められまし
た。

彼らを軍閥と呼べば分かりやすいのですが、受け入れて下さった敬意も込めてその呼称は用いません。今後はこの二つを合わせ西南政権と呼びますが、彼らは中華民国南京政府から正式に承認を受けている地方政権です。この政権とこちらの「大洗女子学園と西南政権との相互協定」を結び、このように向こうの指導者である陳済棠閣下や李宗仁閣下などの署名も得ております。

私はこれからさらに皆さんに苦勞をかけ、苦痛を与えてしまうこと

を非常に申し訳なく思います。それはあの「8月の悪夢」を再現することになっただけでなく、新たな生活を組み立てて頂くこと。そして我々が蔑視の対象となる地を選択せざるを得なかったことです。この時期中国では反日が声高に叫ばれています。

我々が住む所は中国本土から少し離れた無人島、ここから北方の広州沖の万山群島ではございますが、本土との交流無しには生活出来ないでしょう。そのような目にあうことは避けられません。この大洗女子学園学園艦住人3万人の生活の安定までは長い時間が掛かります。それまでの辛さは想像もつきませんが、それにも耐えてもらえねばなりません。

我々はこの学園艦を文科省から2度守り抜きました。しかし我々は3度目の守り抜かねばならない事態に直面しております。ですが、我々は戦車道があつたように、今回もこの協定という希望を掴んでおります。

我々はこれまでの生徒と住民の皆さんの努力を、思いをフイにしないうえにも何としてもこの希望の糸を掴みとらねばなりません。全力を賭して、この学園艦の住民の皆さんの中の一人でも飢えに苦しむような事態は避けなければなりません。

そして調査の結果この過去に知波単学園と聖グロリアーナ女学院が来ていることが分かつており、両校ともそれぞれ日本とイギリスの援助を獲得しています。2回目に我々を救うべく、国への反逆も恐れず、ただ友情のみで駆けつけた誇り高き彼らよりも先に、我々は不安に膝を屈してはいけません。

仮ににするとしたら、それは彼らへの重大な裏切りです。大洗女子学園はそれが運命だと諦めない、運命に抗う、そう出来ると私は信じしております。

抗う為に、私は学園艦の全てを動員した移動及びその後の生活の為の準備を整えたいと思います。明日の10日土曜日を最後に、全ての授業を打ち切らせて頂きます。まだ転居の準備とは言いませんが、学園艦設備や売却品の準備などやらねばならないことは多くあります。それに向けた準備をその日から始めて頂きたいのです。

残念ながら配給の食糧は節約はしてまいりましたが、十分に残っているとは言えません。ここの皆さんの学びの場という学園艦の存在意義を奪ってしまうことは申し訳ありませんが、島の準備が整い次第必ずや学び舎大洗女子学園を復活させます。その時までどうかご協力をお願いします。

今後を簡単に述べますと、この大洗女子学園学園都市の処遇に關しましては、皆さんは総員学園艦から退艦し、万山群島に於ける無人島に学園都市を設置し居住することになります。この対象となる島は現在未定ですが、間も無く決まる予定です。その地にて学園都市の開設を許されました。その地への荷物の輸送に關しては学園艦にある輸送船の他にも西南政権海軍保有の輸送艦をお借りする予定です。学園艦は広東省政府の管轄となり、この学園艦の内部または甲板上の鉄鋼を切り出して差し出す為、そのための人員以外は原則乗艦出来ません。

学園艦は1936年1月1日を以って大洗女子学園から西南政権に明け渡されます。先程の工学科の他にも人材としてご協力して頂く方もいらつしやいますが、それは個別に連絡致します。指名された方はご協力お願いします。

残念ながら、我々に残された時間は長くはありません。そしてその間にやらねばならないことは山ほどございます。この学園艦の全ての人間が協力しなければ実行出来ません。

辛いとは思いますが。厳しいとは思いますが。寂しいとは思いますが。ですがやらなければなりません。どうか、授業前に号令が元氣よくかけられる日までご協力お願いします。

以上で私からの話は終わりです。ご静聴ありがとうございました。

角谷は壇上から降り、一礼すると脇へ下がっていった。ざわめきはない。正しくはざわめくことができる程理解が追いつかない。司会場の場に立っていた小山は壇上のマイクを取りに行き、コードごと司会の場まで戻ってくると、それを口の前にあてた。

これから今後の動きに關与して頂く方を言います。内容をご説明

しますので指定された時刻に生徒会室までお越しくださいますようお願いいたします。

4時半、工学科の鹿島さん、清水さん。

4時50分、戦車道受講者のうち車長。

5時20分、学園長及び中学、高校の各教頭先生。

5時40分、被服科の顧問の先生方。

6時10分、船舶科の3艦長。

6時30分、各町内会長の皆さん。

7時、農業科及び水産科の顧問の先生方。

7時半、生徒議会議長、副議長、書記。

8時、商業科の顧問の先生方。

顧問の先生方は事情説明の為、履修生徒のうち何名かを呼んで頂けるとありがたいです。また、高3の元生徒会の者及び高2の冷泉さんは、これが終わりましたら至急生徒会室まで来てください。

質疑応答についてはこの場では省略し、生徒会室の前に目安箱を設置しておきますのでそちらに氏名を記入して投函してください。返答に関しては掲示板及び配給場所にて纏めて掲示する予定です。

以上で本日の集会を終了します。扉側の生徒から順に退出してください。

舞台の脇の控え室には角谷が先に戻っていた。部屋の隅にいる先に引いた河嶋は角谷と異なり小山に声をかけることはしない。

「終わったみたいだね。」

「ええ。質疑応答も書面で、しかも学園中に晒すと言ったとききましたから、そうそう仕事が割かれることは無いでしょう。」

「流石。じゃあ、お客さんを迎えるから部屋に戻るよ。ここの片付けもやらせといて。」

「既に全箇所にて始まっているはずですよ。ここから予定が立て込んでいますが、帰って来たばかりで大丈夫ですか?」

「体調?それなら問題ないよ。」

「なら良いのですが……では、時間も無いですし、」

「早く行くよ。かーしまも。」

「は、はい。」

角谷は河嶋の腕を引いて混み合う体育館の裏から引き上げた。生徒会室は3人が踏み込んでも返事はない。生徒会長室も同様。そして言われた通りの人が角谷が席に着くとすぐに来た。

「呼ばれた冷泉だが。」

「こっちへ。」

ドアの向こうの小山の手は入り口近くの麻子を案内する。

「他の方はいないのか?」

「みんな配給場所での案内しているわ。」

そんなことを言いつつ角谷の前まで来る。

「呼び出された冷泉だ。」

「久しぶり。冷泉ちゃん。」

「呼び出された人も多いし時間も無いのだろう。本題に入って欲しい。」

「そうだね。中国語の進みはどうか?」

「聞き取りは分からないが、少なくとも日常会話は問題ない。書くのも基本的には。」

「流石だねえ。何語?」

「広東語だ。中華民国に行く前日に頼まれて学ぶ中国語はそれと四川語くらいしか無いだろう。というより渡してくれた資料到北京、南京、広東しか無かったからな。」

「おつけー。じゃあ明日から来てくれる?」

「何処に?」

「広州經由南京。」

「広州は渡される島の交渉というのは分かるが、南京に何故行く?」

「この最後の方を読めば分かる。英語だから分かるでしょ。」

角谷は協定のコピーを麻子に渡す。パラパラ見るともう良いというように麻子は机に戻した。

「なるほど。選挙も考えるとこのことは伏せて正解だな。」

「そゆこと。これの履行に新体制樹立が条件になってるからね、それ

を南京政府に認めて貰わねばならないのさ。だからその為の会議とかに通訳として来て欲しい。」

「この前いた先生じゃダメなのか？」

「先生には交渉のあと島の場所を報告して貰わなきゃいけないから、それを頼むんだよ。前の交渉とかで苦労かけたしね。」

「で、私か。希望は満たせるか分からないが行こう。明日のいつだ？」

「夜の予定。それとこれからのそれぞれへの伝達は今後の為にも知っておいて貰いたいんだけどいい？」

「分かった。そろそろ来ているぞ。」

「本当だね。」

外の廊下を走る音は隣の部屋に入る音に変わった。

広西大洗奮闘記 48 スポーツたる戦車道

「こんな馬鹿な事がありますか!」

体育館での集会の少し後、ある小教室で行われている風紀委員緊急幹部会議にて、学園艦治安担当長ハマコは机を拳で殴りつけ、声を荒らげた。

「私たちが過去にいますって?冗談も大概にしなさい角谷杏!ここにいるのが何年生だと思っっているのです!」

「ではハマコ、何故生徒会はこんな発表をしたの?」

その正面にいる別の担当長が恐る恐る尋ねる。

「そんなもの決まってるでしょう。今度の選挙で峠を勝たせる為です。そしてこの状況を盾に生徒会は権限を強化する気です!」

「きゆうり最終計画の変更の必要はありません。計画通り明日実行すべきです。無論目標は異なりますが。」

ハマコにカナンも同調する。

「別の目標?」

「勿論、角谷政権の打倒です。あのような腐った言い訳しか出来ずに早々に日本を捨てる奴らを許してはいけません。あの時のゴモヨ委員長演説を我々は忘れません。」

「そうです。我々は日本語を話し、日本の文化を学ぶ日本の学園艦です!意見も聞かずに中国人にされてたまりますか!」

「あんな紙切れなんか簡単に作れる!証拠になんかなるものか!」

「角谷を倒せ!」

「そうだそうだ!行動の他に無し!」

「蜂起を!」

辺りの者からその二人へ同調するのが増えていく。前にいる副委員長のパゾ美もただ黙って聞いているだけである。同調しない者は彼らへの反対が自分たちの家族に、親戚に、他の学園艦の友人にもしかしたら2度と会えない事を意味すると理解しているため公然と言いつ返すことはない、ただ一人を除いては。

「あの一、少し宜しいっすか?」

手を挙げたのは学園艦店舗運営補佐担当長のヤボクである。一斉に視線が集中する。

「……えっと、学園艦店舗運営補佐はこれまで皆さんのご存知の通り情報収集を中心に行って来たつす。その身として言わせて貰うと、今回の角谷会長の発表、真実であると受け止めるべきだと思いつす。」

「ヤボク、お前は馬鹿なのですか？何があつたら過去にいるなんてふざけたことを信じられるのですか！」

「ふざけたことだとは自分も思いつすがそれでもいうのは、まずは今回の発表によりこれまでの情報の非合理性が一部ながら解明されたからつす。この中で日常的に台湾の事を中華民国と呼ぶ方はいらつしやるつすか？」

「……」

「いないと思いつす。ですが、調査によると生徒会は中華民国との交渉期、日常の会話に於いても中華民国の呼称を使用していることが確認されてるつす。これは実際に交渉したのが1935年の南京の中華民国を指しているとすれば筋が通るつす。」

「だけど今回の話のように生徒会が交渉相手に敬意を払っていたとすればそれでも通るじゃない。」

「確かにこれは穴があるつす。ですが次のはさらに分かりやすいと思いつす。日本の政府が我々を海上に一か月も放つておけると思いつすか？2度目の廃校の時もネットであんなに騒がれたんすよ。政府主導でそんな事をやれば政府の支持率がさらに下がること間違いなしつす。わざわざ追い出した利益に見合わないつすよ。」

さらに言えば、そもそも生徒会は仮に我々が現在にいるとすると、過去にいと我々に言う必要が無いんすよ。日本から補給が受けられないので中華人民共和国の一角に移転する、で話が通じるんですから。」

「そちらの方が非常時のイメージが分かりやすいからじゃないの？それと政府の財源が思っている以上にまずいとか。」

「政府は2度も廃校に失敗しているんすよ。予算の削減が目的なら他の抵抗と反発が少ない所を選ぶでしょうし、少なくとも角谷会長の退

任まで待つっすよ。」

「……本当にそうなの？」

「私はそう考えているっす。だから今回のきゆうりは中止して生徒会に協力するのが最善と思うっす。」

「そんな訳あるか！時間旅行つてのはな、過去より未来の方が行きやすいものなんだ。未来への時間旅行の手段さえ開発されてないのに、過去のなんてある訳ないだろ！過去にいるなんて嘘っぱちだ！」

「だから今説明したじゃないっすか！原因はいつでも良いんです！問題は実際に我々が過去の世界にいるってことっす！」

「原因無くして結果なし！」

「考えている場合ではないっす！」

「何だと！方が一真実だとしたらお前も私もここの奴らの殆ども親に逢えなくなるんだぞ！考えないでいられるか！」

「ですが信じざるを得ないっす、信じたくないにしても。下手な足掻きは止めるっす！」

「足掻きだつて……何言ってるの！」

ハマコが立ち上がる。椅子は後ろの2本の足を軸に倒れる。

「こんな状況で平然としていられるあんたの方がおかしいのよ！」

「風紀を守るにはこういう時だからこそ平然と対処するべきっす。」

歩き出す。他の担当長の後ろを回って。それがヤボクの背後すぐまで来た。

「やめなさい。」

「ここでこれまで黙然と構えていたパゾ美が昂るハマコを制する。」

「副委員長……」

「今後の行動は委員長が生徒会に呼ばれているから、それが終わってから決めるわ。だから一度落ち着きなさい、全員。」

「……」

「本当に過去にいいのか、それとも生徒会のハツタリなのか、それは分からない。だけどそれよりも、風紀委員が分裂するのは避けなきゃいけないでしょう？」

「……」

工学科の二人に話は伝え終えた。随分と驚かれた。何せ彼らの最初の予定だと6・6ktだった切り出す鉄鋼の量を100kt、15倍以上に増やせと要求したのだから。

だが甲板に人が住まなくなるから学園艦の強度は崩れなきや良いレベルで構わない、と伝えたら何とかなるかもしれないと返ってきた。どうやら甲板上に使用されているものや、艦内の設備の一部も加工して送るつもりらしい。勿論そうして貰わなければ困る。文字通り学園艦を総動員せねばならないのだ。

さて次呼び出したのが戦車道の各車長なのだが、今日の呼び出しの中で精神的に一番重いのがこれである。そして伝える相手は既にここに揃っている。

「よく来たね。」

「……」

座っている人数は私を含めて7人。後は後ろに立っている小山と冷泉ちゃんとかーしま。私が声を掛けても皆黙ったまま頷く程度しかない。先ほどの演説が精神的にきているのだろうか。

「最初に言っておくと、さっき話したことに嘘はないよ。本当にここは私たちからすれば過去のような感じだ。」

「……」

「そして、我々が広東に受け入れて貰うってことも。」

「……戦車道は、どうなるんですか？」

最初に口を開いたのは、西住ちゃんだ。やっぱり精神的に強かったか、はたまた今回の事態さえ読んでいたか。

「戦車道は情勢が安定するまでは練習はなしにするつもり、他の選択科目と同様ね。」

「……そうですか……」

「確認したら、中華民国に戦車道やってる所は一つしか無いみたいで、それが上海にあるから多分そっちでは協力して貰うことはないと思う。」

「……そっちでは、か。では何だ？」

「……言いくいけど、軍に。」

「軍？どういことだにや？」

「……士官学校に入って貰って卒業後士官として軍役について貰う、予定。」

「な、何故ですか！どうして急に……」

「いやー……向こうさ、士官クラスが足りてないみたいなんだよね。軍の規模はかなりあるみたいなんだけど。それでこの学園艦からは鉄鋼とかを出すけど、日本を嫌っている人が多い中華民国と交渉を、しかも短期間で纏めるのは厳しくてね……向こうの提案をかなり呑んでるのさ。」

「その中に、それがあったと。」

「そう。学園艦の規模からして防衛隊くらいいるんだろうと思われた訳。そしたらその指揮官がいる。」

「要するに、それを寄越せということですか？」

「澤ちゃんその通り。そしたらウチの学園で当てはまるのは戦車道と最近訓練している風紀委員くらいしか無い。」

「……」

やはりそうだろうかとは思ったが、空気が重い。嫌々やる見習い士官揃いだと大洗の新政権での影響力も下がる。0よりかは1でもあった方がましだ。

「……このアジア周辺は、10年以内に戦火に吞まれるよ、マカオを除いて。」

「そこじゃダメなのか？」

「経済規模的に無理。香港、広州とかに比べたら遥かに劣るよ。この時代にカジノは無いからね。アジアより先は現在の食糧備蓄的に無理。だから広東との関係を持って続けるしかない。待つのは日本との戦争だ。積極的に戦争する気は無いけど、防衛の観点からも軍にこちらの関係者を入れない。」

「……」

「頼む……」

これは命令には出来ない。脅すことも避けたい。何せ学園の為に

その保護者の軍に入り敵となるものが来たら殺して勝ってこい、と言っているのだから。そして、最初に口を開いた者は、震えている、小刻みに。

「……」

まだ皆が同意か反発を示そうとしなかった時、その者の拳が机に振るわれた。

「……」

皆の顔が私の方からそちらへ移る。私もそちらへ視線を向ける。

「……会長、貴女は……戦車道を何だと考えているのですか！」

「無論スポーツき、婦女子を育成する為の。ただしスポーツが行えるのは私は平和な時に限られると思っている。そして、今は残念ながら平和な時ではないよ。」

「そうではなく……貴女は戦車道を学園の廃校回避どころか、学園の存続にも利用するのですか！」

「そうさ。私は、西住ちゃんは知らないだろうけど、学園を護り、発展させることを公約に当選した。そして今までもそれを続けてきた。それだけは譲れないよ。」

「……」

「私の腕がないからこんな形になったけど、現状ではこれが最善だ。まあ、私は本土で政府機関に加わる予定だから、戦争回避の努力は出来ないわけじゃないけど、日本があの様子じゃねえ……まあ直ぐには決められないだろうけど、協力をお願いしたい。何か質問ある人はいら？」

「戦車道の他の人たちはどうなるんですか？」

「分からない。もしかしたらこれに参加してもらおう人も出るかもしれない。出来るだけ少なくて済むようにはするけどね。」

その先質問を出す人はいなかった。返答期限を告げられると、皆は人により速度の差はあるものの生徒会長室を去った。このあとまだ会うべき人物が待っているが、ここまで重い話はしない。最後の方にこんな話をする事になったらそれまでが気が重くて話せる気がしない。

私はこの一月で思いの外心が弱くなったのか。

「……冷泉ちゃん、小山。どう思う？」

「まあ、私も戦車道は軍事的なものではないというのには賛成せざるを得ないな。だがあの条項を守るにはこれしかないだろう。」

「だよねえ。乗ってくれるかな？」

「移転を開始して、身を以て現状を理解してくればあるいは……と
いったところではないでしょうか？」

「次は？」

「学園長と教頭先生です。」

「そこまですでもないね。」

その帰り、ゴモヨは磯部に近寄り、一言耳打ちした。それを聞いた磯部は近くの壁に手をつけて何かを共に吐き出すかのように大きく息を吐いた。

広西大洗奮闘記 49 生存のために

私は予感していたはずだ。この不可解な事態を。学園艦に補給船が来ず、寄港もできていない。家族に連絡も出来ない。そして麻子さんの行動。優花里さんの行動。華さんからの砲弾の異様な節約。戦車道の練習での仲間の違和感。エルヴィンさんと磯部さんの様子の变化。これの答えがこの些細ではないこと、パンドラの匣に隠されていることを。そして私は避けてきた、それを開くことを、ずっと。

恐らくこの予想から導かれる悲劇的な結末から目を背けたかったのだろう。その結果馬鹿な私の眼前に突きつけられたのはこの真実と要請である。

確かに真実はどうしようも出来ないものだ。学園艦の廃止のように交渉と戦車道でどうにか出来る代物ではない。だが要請は受けるか否かは私次第だ。皆は戦車道に関して、冷静なら無条件で私に付いてくる、または付いてきてしまいうだろう。私のような者に戦う軍人なんて務まるとは思えないし、やり抜ける意思もない。

だがこの学園艦は私に自分の戦車道を気付かせてくれた場所であり、私たちが守った場所である。そしてそれを真に守り抜いたトップが、私たちに頭を下げて願っているのである。

恐らく下手に相談してはいけないのだろう。仲間を信じているか否かではなく、相手が私以上に苦悶してしまうから。やっぱり私はあの時言われたように心配しすぎる性分で、悩みを抱えがちなのだろうか。そう思った時、あの時の言葉がふと蘇った。

(無理なものは無理)

気温はそうでもないが湿度が高い。周りにべったりと纏わりつく。歩幅も自然短くなっている。期限、そこまでには私は答えを出せるのだろうか……どちらを取ったとしても私には喉の小骨が残るだろう。

そう考えていると、私はいつの間にか歩道の段差に足を滑らせ尻もちをついていた。現実に対してはやり返せないのだ。配給の袋の中身は無事なようで、尻をはたいて先を急ぎ、帰ると手を洗い夕飯の支度を始めた。とはいってもこのような心境で手の込んだものを作る

訳がない。炊いてあった米と袋入りの野菜をレンジで温めて醤油を適宜かけて摘む。これで十分だ。甘い物なんて久しく食べてない。

それらを食べ終わり流しに皿を戻すと、寝巻きに着替え布団に倒れる。まだ寝る気は無いので先程のことは一旦置いておき、別の事を考えることにしたが、思いついたのは明日で授業が終わるというまたこの世界云々に関する事だった。

学生が明日で終わり。生徒ではあるが学ぶという目的を持つ学生ではなく。それは音も立てずに忍び寄り、今日の午後いきなり正面にその巨体を現した。仮に会長の案を呑んだとしても、それは職業、大人になる為の学生であり、学生になる為の学生ではなくなる。学園にはそうでない人も多いが、そうである人間は私を含む。

それはその巨体にもかかわらず実感が湧かせなかつた。だがふと高校3年生の皆さんは私よりも苦悩しているのかと思った。皆さんはあともうすぐにまで迫っていた受験、その為の勉強が一瞬で目的のないものに変容してしまった、その恐怖と失望に侵されているだろう。人のさらなる不幸を眺めて落ち着く、それは人として良くないことだが、それでもしないと頭の混乱は私の思考を制圧してしまいそうだった。

流石にこの方法は自己嫌悪に陥りそうだったので、身を起こしリモコンでテレビを起動させ、録画のページを表示させた。画面にはこれまで録画してきたものが並んでいる。多いのは無論ボコられクマのボコのシリーズだ。その中の一つを押して最初に混じった、もはや買うことの出来ないものを紹介するCMを飛ばすと、画面上には包帯を巻き腕を吊ったボコの姿が現れた。いつも通りやられては何度でも諦めず立ち上がる。それが何時もよりも愛おしく思えたのは何故だろうか。

商業科との話を終えた。大したことではない。今後の学園都市運営において商業はそここのウエートを占めるだろうから協力願いたい、それだけである。無論了承を得られた。

さて私は明日から出かけてしまうが、学園艦には問題が山積みだ。

先程も言った食糧の件も然りだが、私の最大の懸念は島での生活だ。行き先は無入島である。インフラも家さえもない。そこに移住開始から一月半程で3万人住める様にしなければならぬのだ。工学科にはかなり頑張って貰わなくてはならないだろう、ただでさえ鉄鋼の切り出しをやってもらっている上であるから申し訳ないが。

この期間、技術を持つ者には休みはなさそうだ。だが救いもある。この学園艦には組み立て式の仮設住宅が1000個用意されているのだ。学園艦の人口には足りないが、少なくとも島での初動をこなせるだけはある。

これは学園艦から脱出せねばならない事態の時に使用するものだが、今回こそが使いどきだろう。

「会長、お疲れ様です。」

「ん、ありがとね、冷泉ちゃんもね。」

小山が角谷の後ろから声を掛ける。角谷はそちらには向かず、背もたれに倒れる。

「どうも。これからどうするんだ？」

「隣はもう全員いるかな？」

「配給担当の人たちも帰ってるいると思いますよ。どうします？」

「ちよつとこれからについてちよつと皆に伝えたいんだけどいいかな？それが終わったら冷泉ちゃんは帰って良いよ。」

「分かった。」

「じゃあ、呼んできますね。」

向こうの部屋の者たち全員が仕事を一区切り付けるまでは10分ほどかかった。生徒会長室には角谷、小山、麻子が窓側に、ドア側に生徒会の者たち計36名が立っている。学年は高3から中1まで多彩だが、高校生の方が多い。

「それじゃ、明日から私たちは出かけちゃうし、明日はその準備で奔走することになりそうだから、今後について話しておくね。そつから先は小山に任せるから、その指示の下で仕事をこなすように。」

「はいー。」

「了解です。」

「まずは高3の人、聞いたとは思いますが私が昼に話したことは本当だし、今回の協定で向こうと話を纏めたのは事実だ。これから学園の廃校の回避に尽力してくれたその力を再び借りたい。受験勉強していた人は済まないとは思いますが、私ではどうしようもならない。その分こちらに全力で取り組んでほしい。」

「はいー」

「あとはこちらは皆も顔は見たことあると思うけど、普通一科2年の冷泉ちゃんだ。普通科学年主席なんだけど、中国語を学んで貰ったから今回は通訳として同行してもらおう。帰ったあとは業務にも参加してもらおうよ。」

「紹介に預かった冷泉だ。よろしく頼む。」

「さて、このように学園艦の現状を学園艦の皆さんにお知らせ出来た以上、生徒会の仕事にも幅が効くようになったから、これからは島で食糧を生産できるようにすることを最初の目標として行動していくよ。」

まずは学園艦からの移転、住居、農地整備、そして生産だ。少なくとも2年は見積もらなくてはならないだろうけど、その期間で済むよう進めてね。あとはその間の食糧などの購入に向けてだね。

まずは学園艦の鉄鋼以外に住民が保持しているものを徴収して向こうでの資金に変えていこうと思う。残念ながら食糧の備蓄はないけど、売れるものならある。何としても食糧の安定確保までこの学園艦住人3万人を生かさなければならぬよ。

徴収の最初は靴にしようと思う。一家一足ずつ出せば少しは資金の足しになる。そんな感じでこの学園の為に捧げるしか無いのさ。

住民の移転については、同行してくださる松阪先生は広州での島の交渉成立後帰って貰うから、その情報を得たら直ぐに準備して。一月半程しかないからゆっくりしている時間はないよー」

「はいー」

「じゃ、以上ー各自業務に戻ってー」

「はいー」

ぞろぞろと麻子をふくめた下級生が部屋から出て行く。新規で来

た高3は倉庫から引つ張り出してきた机で仕事する者が多い。案外この広かった生徒会長室も狭くなってきたものだ。

「会長―」

明日からの準備に入ろうとした矢先、外に出た下級生の一人が舞い戻ってきた。

「どうした?」

「お客様です。」

「この時間に?」

呼び出した人はもう全員来たし、今はもう外出は制限されているはず。

「誰?」

「風紀委員会の後藤委員長です。あと他に風紀委員が二人。」

「……まあ、お迎えして。」

「はい。」

ゴモヨが生徒会の者に連れられて角谷の前に来た。顔色はあまり良いとは言えない。しかも顔には汗が浮かんでいる。息の荒れようからもここまで急いで来たと思われる。

「風紀委員会委員長、後藤モヨ子です。まずは夜間行動制限を破ってしまったこと、申し訳ありません。」

「それはいいからさ、急にどうしたの?あとここ他の生徒会の人が聞いているけど大丈夫?」

「構いません。今回来たのは、緊急の要件をお伝えせねばならないからです。学園の未来に関わります。」

「……何?」

「風紀委員の一部が、決起を計画している模様です。」

「!?」

広西大洗奮闘記 50 対処

四人の座している位置を結ぶと出来るのは砂時計というべきか、正方形というべきか。多少の誤差はあれど、そのような形だ。部屋は外からの微かな月明かりで手元を示す。

「……じゃあ、話を始めよう。」

「その様子だと、『それだ！』はよした方が宜しいか？」

「そうしてくれると助かる。」

「分かったぜよ。」

「あの体育館での話の後私が呼ばれたのは知っているな。」

「無論。」

「まずはそこでも聞いたが、あの話は真実だそうだ。そしてそこで話されたのが、簡単に言うとな戦車道の車長は中国の士官学校に入って軍人になれ、とのことだった。」

「どういうことぜよ？」

「文字通りだ。一応お願いされた形だが、ほぼやらざるを得ないだろう。あの会長はそう言う人だ。」

「……ならば請け負う他なし、だろう。」

「そうは言われてもな……戦術というものは共通性もあるが、軍の全てをまとめる地位になる自信が、正直言うとない。」

「それを学ぶ為の士官学校ぜよ。」

「それと、私は現状をまだ心が受け入れきれてない。過去にいるって……信じられるか？」

「されど、一月も補給が出来ず、通信環境の一切も遮断されているのは流石に我々の時代では考えられない。」

「親にも会えないって……信じられるか？」

「……」

「……」

二人とも沈黙の時間を共鳴させる。

「確かにこのような場を設けてまでの会長の話だ。嘘だとは思えないし無下にする気もない。でも……私はこの時代を受け入れることも、

軍人として人を殺すよう命令を下せるようになる自信がない。」

「返答していないとなると、きつと期限が決められているはずだよ。いつぜよ?」

「三日後だ。」

「結構すぐだな……」

「それでも明日から会長が出掛けると言っただから時間はくれた方だろう。」

そして再び四人とも黙然とする。窓は閉められている為、風の音は窓を叩く音と化する。

「……エルヴィン。」

「……なんだ?」

この中で唯一これまで言葉を発していなかった者に声を掛ける。

「このところ、あまり深くは聞いてこなかったが、やはり様子が変だった。率直に聞こう。何を知っていた。」

「そうぜよ。グデーリアンが来た後のあの変化は何事ぜよ。」

「……」

腕を組み暫く頭を悩ませた後、それを解き三人の顔をそれぞれ眺める。

「……グデーリアンと言わないと決めていたが、ここまで来ればもはや隠す必要は無いな。私が知っていたのは、この学園艦が過去にいること。それだけだ。」

「今回の件の根幹ではないか!」

「……グデーリアンの時の飛行機、だったか、それか?」

「ああ。まあそれ以前にグデーリアン経由で中華民国と交渉していたことは知っていたが。」

「どうして、どうしてその事を私たちに教えてくれなかった!」

「知って何になる。単に今カエサルとかが抱えている絶望を先に抱えるだけだ。それに私も……正直信じたくなかった。だが、こう言われてしまったては受け入れるしかない。」

「……」

「……その話、私が変わろう。」

「何？」

「私が代わりに士官学校に行こうと言っている。」

「……本当か、エルヴィン。こちらとしては嬉しい、が……本当にいいのか？」

「数日前から知っていたから、少なくとも過去であるという心の準備は出来ている。そして今日の話でそれが示された後、確かに怖かった。この先どうなってしまうのか、という漠然とした不安に覆われた。」

「だけどその中で私は微かな高揚感を覚えていた。この世界が本当に1935年なら、第二次世界大戦の前なら、それは私が憧れている人がいる世界なのでは、私が憧れていた世界そのものなのでは、というな。」

「中華民国とドイツはまだこの時期は仲がいい。中華民国の軍人となればドイツと接触する何かしらの手段を得られるかもしれない。そうでもしなければ、恐怖に押し潰される。」

「それならそれでいいのだが……分かった。すまないが頼む。」

カエサルの頭は地面に近づきつつ、腰を中心に扇を描く。

「まあ、それでいいならこの話はいいか。それにしてもこれからどうなるんだ？」

「島に移るとか言ってたぜよ。」

「学園の教育機構が止まるからな。戦車道も出来なくなるらしい。」

「戦車はどうなるぜよ……」

「……もしかしたら乗れなくなるかもしれないな。それに聖グロリアーナや知波単の人もいるらしい。将来的にだが接触出来れば良いのだが……」

「曰く今回の件を伝えたところ、体育館の演説後の会議で生徒会への反発を示していた者たちが本格的に怒りだし、委員長が生徒会に従うと表明した途端活動からの離脱を宣言したらしい。説得を試みてもその、感情論で押され会議場所から相手が出て行って失敗したそうだ。」

向こう側に人数が多い学園艦治安、中学治安維持、高校治安維持の担当長がついてしまい、他にも何人が担当長が向こう側に回ったため、その下を味方につけられると人数では向こう側が上回り、武器運用の練度も勝るとのこと。

全く何とかして貰いたいものだが、こうなってしまったものは仕方ない。万が一行動を起こされた場合の鎮圧の手段を考えねば。前にはパイプ椅子に座らせた後藤ちゃん。後ろには小山と帰りそびれた冷泉ちゃんがいる。

「じゃあ、まずは向こうの動向は掴んでおいて。一応風紀委員からの離脱を宣言しているだけだから、明らかな敵対行動を起こさない限り動かないように。」

「は、はい。」

「そして何か行動を起こしたらこちらに報告した上で鎮圧して。」

「しかし、先程言いましたように人数も練度も不足しています。そしてこちらについた者の内、下から向こうにつくものが出ないとも限りません。完全な鎮圧は……」

「まあまあ、そもそもそっちの問題だから出来ればそっちで抑えて欲しいのさ。一応こちらでも対応は考えておくけどね。」

「あ、ありがとうございます。」

「いいよいいよ。」

「あとは、こちらは別件なのですが……例の特例風紀指導を受けさせている3人についてです。」

「確か直訴しようとしていた人たちでしたね。」

「そうです。今回の情報公開で監禁を継続する理由も無くなったかと思いますが、如何しますか?」

「……求めている情報はあげたから良いかもね。どう?」

「私も問題ないと思います。この状況でこれ以上不信感を煽るのは良くないかと。それに3人の、しかも一般生徒だけなら大丈夫でしょう。」

「それじゃ、そちらの判断に任せる。」

「分かりました。」

「じゃあ早めに済ませてね。」

「それでは、これで失礼します。」

この部屋の人間に、生徒会関係者以外はいなくなった。向こうの扉の閉まる音から暫くして、角谷が伸びをしながらたずねる。

「小山、対応は？」

「西南政権への悪印象を避ける為、懐柔を用いつつ温和に解決を図るのが妥当かと。それと並行して戦車道の投入を検討しておきます。出来れば武力衝突は避けたいところです。島での運営を考えますと治安維持の為に風紀委員は減らしたくありませんから。」

「……40点。」

「へっ?。」

「冷泉ちゃん、よろしく。」

「反発をした者たちは鎮圧の後に捕らえる他ないだろう。今回の件で風紀委員が生徒会に対する何かを計画していた可能性は高くなったから、その点をタネに風紀委員を抑えることになる。」

今後の円滑な運営の為に、反発した者たちを現在こちら側についている者たちに合流させ、下手に内部に火種を持たせるのはやめておきたい。寧ろここで力で抑えて今後治安維持に専念させる方が良い。絶対西南政権に悟られる前にスパッと終わらせた方がいいな。」

「な、何故生徒会に対する何かを計画していたと……」

「向こうについた主な人は学園艦治安、中学治安維持、高校治安維持の担当長だ。これらは学園の治安維持の根幹ゆえに委員長に近い人間を揃えているはず。仮にそうでなくともその者たちが今回の会長の話だけで感情論に走り、委員長、副委員長を振り切つてまで生徒会への武装蜂起を急に計画したと考えるのはいささか不自然だ。理由として弱い。」

即ち元からその素地があったと考えるべきだ。そう、生徒会に対する何かしらの計画があったと。実際こちらの持つる情報を調べていたりしていたしな。」

「なるほど……そういうことですか。」

「で、冷泉ちゃん。それだけ?。」

「いや、戦車道も全力で投入する。動いたら全力で鎮圧する体制を整える。」

「しかし、戦車道の皆さんがその為に乗ってくれるとは……」

「乗せる、何としても。今こつちについている風紀委員で脅してでも。そして背中を蹴飛ばしてやる。たまには蹴り返してやるというものも一興だ。そうすればおとなしくあの案を呑むさ。」

「冷泉ちゃんは明日から行くから戦車乗れないけど？」

「なら五十鈴さんに蹴ってもらうさ。あの人は力も心も強いからちようど良いと思うぞ。これでいいか？」

「オーケー。じゃ、小山。これを軸に対処策を講じてね。」

「若干不安ですが……分かりました。即座に鎮圧する方針を取ります。」

「それにしても、こんなことをパツと言えるなんて、冷泉ちゃんも変わったねえ。」

「変わらないさ。沙織には影響無いし、私も学園艦を残すための手を打てる位置にいるなら打っておきたい。それだけだ。」

「じゃ、帰っていいよ。明日からよろしくね。お疲れ。」

「こちらこそよろしく頼む。」

部屋には職務に従事する数名と、この少しの時間していない二人だけが残された。

広西大洗奮闘記 51 夢、そして正夢

5時31分、起床。床の横になっっている者たちに注意しながら隣に移動し、顔を洗い水を飲んだ後、昨夜作ってもらった分の書類を回収。その場でそれに目を通す。

6時丁度、朝の配給担当起床。すぐさま服を着替えて出掛けて行く。近場の一人に、今日から生徒会室に持ち込む分が増えていることを伝える。書類は少し当人と話をしなければ。

6時30分、アラームと共に全員起床。皆と一緒に布団を片付ける。始めの頃は宿泊行事のような雰囲気があったが、一月も続けられ作業である。裏に入れた後、腕を捲る。生徒会分の食糧が届けられる前にそれなりの準備は整えたい。

7時27分、人数分の朝食を鍋で完成させる。今日出来なければしばらく出来ないから、ちよつとくらい趣味を嗜んでも悪くない。人の役にも立つし。皿に入れよそって配る。自分も食べる。美味い。食材に大きな変化はなくなってきたが、味を変えた甲斐がある。

8時1分、完食。この備蓄を作ってくれた方とその元の食材を育てて下さった方に敬意を込めてご馳走様、と言う。食器を洗い場の担当にそれを渡す。

さて仕事だ。真っ先にやるのは今日議会にて可決してもらおう予定の総体規則案、正式名称大洗女子学園の非常時に伴う総動員体制導入等に関する規則、の内容を調整することだ。担当と小山を呼び出し椅子に座らせて話し合う。今回の案はこれまでの統制体制による物流の生徒会による一元的な管理に、学園の教育機構の一時的な停止と人員管理の権限を加えたものである。人員の定義は学園艦に住む全ての住人だ。そこに差はない。

さてここから残る生徒会の者たちがやり易いように整えていくか。

9時12分、大体纏まった。まずは人員の配置、管轄に於ける決定権を生徒会に限定する。しかしそれだけだと教員などから不満が出かねないから、中学、高校の教頭先生と町内会長に参加してもらおう。あらかじめ伝えておいてあるので混乱もない。

後は生徒の労働に関しては時間制限を設けた。中学生が5時間、高校生が6時間と定めておくが、将来的には延長も視野に入れる。あとは所持品回収は要請、即ち差し出し相手の許可を得るものとする、と記載する。主な変更点はこんなものだ。最後に一言、

『総動員体制は大洗女子学園の存続及びその住人の生命保護を目的として実行されるものであり、万山群島での新学園都市にて全学年での授業の開始後1週間後にこの法は効果を失い、廃案とする。』

と記せば、生徒会による完全独裁という不満や反論も多少は緩和されよう。そしてこれはタネだ。餌だ。キュウリの折れた分を捕まえるための。小山にはその点はしっかりと伝えておいた。次は所持品回収に関する意見調整だ。基本反対する気は無いが。

9時47分、こちらでも無事纏まった。取り敢えずたけのこの皮になりそうな物をちまちま貰っていくことになる。一人暮らしが多いとはいえどどの家も必要最低限以上の物品を持っている。それを使う。あとは質屋経由で札束をさばいた時の残りも。

11時7分、あのあと始めていた石油の備蓄と島での使用に関する資料が出来た。足りない。住民移住のための輸送船の使用でかなり使ってしまう。輸送船に押し込みながら運んで回数を節約するほかないだろう。出来るだけ広州からは買いたくない。

12時2分、他の生徒会の者の進捗と問題を席を回って聞き出した後、昼食をとる。やはり食糧や物品関連の管理は慣れてきつつあるが、人員管理は高3が増加したとはいえ対応仕切れるか若干不安だ。帰って来てから場合によっては生徒会の人員増も考慮に入れなければ。

12時27分、最後の8音が鳴り終わってすぐに完食し、食器も各自で洗う。口周りを少し気にした後小山を連れて大教授へ向かう。ここにて議会が開かれる。

開会に必要な人数は間も無く集まり、壇上で自身の口から今回の体制に関する説明をする。議会の人間は話が通じやすく助かる。議員の一人から万が一の為の暴走阻止機能の設置を求められたが、これまで通り生徒会長選挙及び議会選挙は年一度行くと署名した。

選挙準備費用は馬鹿にならないが、自治権を認めてくれた以上下手に西南政権に擦り寄る必要もないうえ、それで政権の安定が保証されるなら安いものだ。

13時14分、議会にて可決。明日から施行される。そうでなければ困る事情がある。帰りがてら放送が流れる。選挙に関するもの。放送部の今朝の調査の結果逆転したそう。赤峰側が今回の件に関する対応を早急に行えなかったのが痛手らしい。

また一歩進めた。放送部の例の者はショックだったのかは分からないが、前のようなハキハキした話し方ではない。

13時51分、艦内の補給船ドック着。集まった松阪先生と冷泉ちゃんと共にその輸送船を前にして大橋艦長から今回の出航について説明を受ける。出航は18時、目的地は広州、時間は半日強、さらに今回は鉄鋼の見本品を1t乗せていくそう。

今回同行してくれる船舶科の人は古賀と三川という長坂班の者だ。古賀はなかなか気さくで、三川は真面目そう。行程も確認をする。

14時56分、生徒会長室に戻る。荷物の中身の最終確認。これまでの資料と衣服関係と中国語関係など諸々。終わり次第午前が終わっている仕事のうち私の決済があるものに印を押す。そして最後は小山に出航後の決済を全面的に委任する書類に印を押す。

15時32分、夕方配給組が準備を始める。一人ずつ握手をして送り出す。

16時19分、やるべき書類のチェックは済ませた。2年はやはり長い。たけのこの皮が尽きる前に収入源を確保したい。塩か、魚か……

17時10分、ドックに再び着く。船舶科の者たちは忙しくなく輸送船に荷物を積み込み、鉄鋼も本来はクレーンなどで積み込むべきなのだが、石油の節約のため人力で運んでいる。今回北へ行く人は自身の荷物を船内の操舵室に運ぶ。服は今は制服にしてある。後船内でワンピースか他の正装に着替え、簡単に薄化粧するが、やはり此処を出るときぐらいはこの学園艦の正装でいたい。

17時47分、出航も間近に迫った頃、生徒会の人も見送りに来て

くれた。配給組はいないが他の人はいる。

18時、この協定を紙切れにしないための旅が始まる。汽笛一声学園をはや我が船は離れたり、とでも言おうか。いや、「我ら」の船とした方がいいか。船の外で手を振る。向こうも振り返ってくる。今回の旅で死にそうになるようなことはないだろうが、不安はある。しかし向こうの期待に満ちた顔はそれを紛れさせた。

18時33分、学園艦のドックを離れてしばらく、久々に鳥を見た。灰色の羽をしたヨウムだ。冷泉ちゃんと船舶科二人は驚き、松阪先生はため息を吐いた。これまでに出来たこととこれからすることを伝えると、頑張れとだけ返してきた。

このヨウムの通り此処がパラレルワールドで私たちは13年後には帰るならば、こつちにも大洗の痕跡は残した方がいいのか、生活が安定したら考えてもいい。鳥はその曇り空に羽を溶かしながら飛び去った。

今日の交流戦もそのセンチリオンの砲は弾薬が装填されさえもしなかった。撃破されたのは僅かに9輜。かなりのキルレートだ。それに時計を確認すると、まだあれには十分間に合いそうである。

しかし、彼女、13歳の大学生の顔は晴れない。いや、寧ろ勝つごとに虚しさが増していく。あれから一月。搜索は僅かな有志によって継続されているに過ぎない。そして痕跡はない。彼女を破った高校生の寄せ集め、それに参加した全ての者が失われた。

確かに彼女たちが失われてもこの世界に彼女に勝てる戦車道の間はあるだろう。それでも彼女たちは別だった。そのリーダーがボコ仲間であるとかではない。

戦えない。彼女はそのためにも新世界への挑戦を断ったのに。ある意味では助かったのかもしれないが、雨の後固まった安定した土地を失ったことは、特に人付き合いの得意でない彼女にとっては辛い。

だが彼女は戦車道を辞める気は毛頭ない。文科省に戦車道を侮辱されたに対する復讐という面や、島田流の名を挙げるといふ点もある。しかし、次こそは勝つ。西住みほ、いやあのチームそのものに。

学園艦が消えた場所からはまだ誰の屍も上がっていない。

生きている。間違はなく何処かで生きている。だからこそその時に相応しい姿でいる必要がある。それが根幹であった。

「全車ぐ苦勞、帰還して。」

島田愛里寿はマイクを口に当てそう命令を下した。

車輛の片付け、運搬準備、砲弾使用量など各種報告を済ませ、反省会を終えてやっとな戦車道の一試合は終わる。

「隊長、お疲れ様です。」

「ん。」

副官のアズミが声を掛けても軽く上の空である。オレンジに染まる西の空をただじつと眺める。

「……やっぱりあの件、相当シヨックなのかしら。」

同じく副官のメグミがアズミの背後から声をかける。

「あの学園艦の件？」

「そう。試合の後学園艦見て回った際に仲良くしてくださいましたそうだし……」

「そうだろうけど……正直どうしようもないよね。」

「戦車道はしっかりやってくださるけど、他がうまくいってないみたいだしね。この前教授に怒られているの見たよ。」

「どうしたの？」

バミューダ三姉妹が揃う。かのプランと同じ名前であることの共通点は何かしらを吸い込むことだけであろう。前者が戦車を、後者が学園艦を、である。

「いや、隊長の話。」

「ああ。で、元気出して貰うために私たちに出来ることはないか、って感じっ。」

「まあそうなんだけど……なんかある？」

「食事は？ハンバーグ店に誘うとか。」

「その後ボコミュ行きは確定だけど？」

「うっ……」

「……でしよっ？」

ここまでボコミュ行きを敬遠するには訳がある。彼女らは既に改装後に愛里寿と共に6回行っているのだ。元から好きというわけでもないのにそんな回数行けば自然行きたくなくなる。

「という訳で外は無理。」

「どうかそもそも心の問題だからね……物じゃ何ともならないですよ。」

「まあ、出来るのは隊長といつも通り振る舞い続けることだね。」

「うーん……そうだろうね。」

「同意。」

「じゃ、そんな感じで。」

そうメグミが纏めると、3人は揃って愛里寿に近づいた。

「……夕焼け綺麗ですね、隊長。」

「うん……」

「今日の勝利、おめでとうございます。」

「ん。」

「そろそろ時間です。撤収しましょう。」

「分かった。」

愛里寿は3人に連れられて先ほどの顔の向きとは逆に進む。

「そういえばね……」

「どうしました、隊長?」

「最近夢を見るの。」

「夢、ですか?どんな夢ですか?」

「みほが、他の高校の人も、みんな大人になって、また戦車道で戦うの。」

「大人って……どれくらいですか?」

「分かんない。でも今の大学みんなよりも年上。そして私も目線が同じ。」

「それで、その戦車道はどうなるんですか?」

「勝ち負けが付きそうところで、いつも目がさめる。」

「そのあとは私たちの勝ちに決まっていますよ。次は負けられませんから。」

「……これはね、単なる夢じゃない。正夢。必ず叶う。」

「そうです。叶いますよ。学園艦がなくなるなんて絶対可笑しいですから。ひよつこりと戻ってきますよ。」

「……うん。」

迎えのバスが目の前に並ぶ。

「帰りましょう、隊長。」

広西大洗奮闘記 52 名家の子孫

11月10日午後2時過ぎ、69段目の先に段はない。先にあるのは扉である。ノックすると見張り担当らしきものが向こうから声を掛けてきた。

「……『マリが入院したそうですが?』」

『飯原麻里は大洗学園艦総合病院で順調に回復しています。』

「ゴモヨ委員長ですか。すぐに開けますね。」

鍵が三つ周り、扉が開かれる。

「こちらへ。」

「ありがとう。あなた担当何処かしら?」

「高校治安維持です。」

見張りに案内され、輝かしい通路を進むと、その先には柵が立っている。

「こちらです。」

「ちよつとここから大事な話をするから、呼び出したら外で待つて貰えるかしら?」

「はあ……抵抗されることはないと思いますし、構いません。」

「ありがとう。」

「高田、杉本、吉田!出て来い!」

鐘を鳴らしながら見張りが叫ぶと、中から3人の女が奥から姿を見せた。

「はいはい……」

「訓練なら何時もやっているでしょ。」

「どうも。」

「おや、委員長ですか。」

「やつと解放ですか?」

ゴモヨの姿を認めた3人はパツと顔を明るくする。

「そう。やつと解放よ。」

「予想通りだな。」

「それで、私たちは蜂起に参加すればいいんです?」

「……そういえば、あなた達は聞いてなかったわね。」

「何をですか？」

「……ちよつと小声で頼むわ。いい、これから言うことは信じられないとは思うけど、恐らく本当。だから、心して聞いて。」

ゴモヨは柵に近づき腰を下ろすと、昨日角谷から発表されたことを伝えた。ここが過去であること。授業が今日のもので最後であること。そして昨日の会議録から見たそれが真実だと思われる理由。

それらを聞いた3人は茫然として何も言えないようだった。寧ろ入口の者に聞かれると面倒だから丁度良いが。

「……それで、これの件でややこしい事が起こったんだけど、それに関しては解放後にするわ。」

「……取り敢えずここから出れるんだな？」

「そこは変わりないわ。こんな感じで生徒会からも許可を得てるから心配いらないわ。」

ゴモヨは3人の前に角谷による印が押された書類を見せる。

「なるほど。」

「まあとにかくここを出る準備してくれる。早めに済ませたいの。」

「了解。」

奥の物の整理に向かい、それぞれの物を持ち出して来る。その間ゴモヨは見張りを呼び戻し、書類を見せた上で柵を開けるよう命じ、開けさせることに成功する。

中に入ったゴモヨは3人の荷物整理を手伝う。それぞれの所持していたカバンでは入らない分はゴモヨが持つて来ていたカバンに纏めて詰めていくことにした。

「それじゃ、失礼するわ。上にも伝えといてね。」

「……はっ。」

ゴモヨは3人の前に立ち、カバンを背負って階段を登って行く。段の1番上から外に踏み出すと、そこは輝かしい光に照らされていた。思わず3人は軽い呻き声のようなものをあげて目を閉じ、手で押さええる。

「大丈夫……じゃなさそうね。」

「すみません……久々過ぎて……」

「いや、仕方ないわよ。治ったら行きましょう。」

ゴモヨはこの光景を一月前と照らし合わせていた。だが慣れるのは早い。桿体細胞の無力化はすぐに済む。

「……もう大丈夫です。」

「3人とも?」

「はい。」

「じゃ、私の家へ。」

ゴモヨの住む寮には既に数名が部屋にたむろしていた。学園艦店舗運営補佐のヤボクを中心とした今回ゴモヨ側に残った担当長の面子である。

「集まってくれてどうもありがとう。」

靴を脱ぎながら玄関から4人が部屋に入る。

「委員長、大丈夫でしたか?」

「全く問題無かったわ。それじゃ、荷物を分け合って貰いながら話を聞いて貰える?」

「はい。」

「了解。」

「あいよ。」

「皆もいい?」

「勿論っす。」

担当長らに確認を取ると、皆うなづいて返してくる。ゴモヨはその者らの正面に腰を下ろし、その後ろでゴモヨのカバンを開き中身を分け合う。

「さて、じゃあ話を始めるわ。私たちは生徒会に従う、その事は良いわね?」

「勿論です。あんな現状ならば混乱を起こしてはいけません。その事はここの全員確認済みです。ここににいる者の部下の中で向こう側に回った者は現状いませんが、向こう側から寝返って来る者もいません。」

「そう。で、現状あの会長の発言に反発してこちらから分かれて蜂起

を計画している者がいるわ。」

「そつちに治安維持3担当が付いたから大変なんすよ。」
「なるほど。」

ヤボクが3人に伝えると、それぞれうなづいた。

「それに関してどういう手を打つかだけど、案はある?」

ゴモヨはそれぞれの担当長の顔を見渡す。

「……取り敢えず、数も練度も向こうが上です。拠点为重点的に防衛するしかないのではないのでしょうか?」

「確かに生徒会室と艦橋からは彼らを遠ざけなければなりません。それ以外ないと思われます。」

「やはりそうね。問題はそれでも突破を許しかねないというところね。」

「艦橋は入り口が限られますから少数でも守れるでしょう。しかし学園への外部からの侵入を防ぐとなると……広範囲に散るしかないかと。特に戦車道の演習場方面から入られるとグラウンドも近いですし面倒な事に……」

「それ抜きでも戦力を集中されると2倍弱を相手にする事になります。こちらの者たちも訓練はさせてはいますが、精鋭を含む彼らに対応仕切れるかどうか……」

「……ヤボク、向こうの動きは?」

「やはり急に決まったせいか大きな動きは報告されてないっす。大規模な蜂起を起こすなら流石に各家庭から個別に出発して来ることはないっすから、見張りによつて前兆は掴めると思ってるっす。恐らく今日の深夜までは無いかと思っす。」

「見張りなどが無力化される可能性は?」

「秋山さんを除いた全員使っているんで、全員一斉に無力化されることは無いと思ってるっす。」

「前兆が掴めたら早急に報告をお願いするわ。」

「勿論っす。無線を持たせてあるんで、連絡があれば直ぐ伝えられるっす。」

「なら良いわ。それじゃ、後ろの3人は訓練はさせてあるから、学園の

防衛について貰うわ。それで良いかしら?」

ゴモヨは足を崩し手について振り返る。

「まあ生徒会が情報明かしてくれているならこちらの要求満たされますし。」

「別に角谷会長にやめて欲しい訳では無いのです。」

「それより暴力でひっくり返そうとしている奴らを止めてやりましょう。」

「そう、ならお願いするわ。じゃ、今回の件を元に防衛プランを練るわよ。時間は今日の7時まで。そしたら私がそれを生徒会に持って行って調整するわ。」

「了解しました!」

「まずは防衛準備として、学園を守る部隊の学園宿泊証の発行を生徒会に要求し、鉄の棒の全員へ早急に配備しなくては。」

「しかし下手に向こうが動く前に配置についてはこちらの目的をバラすようなものじゃないか。」

「だが向こうの目的は角谷政権を倒す事。それなら生徒会を狙って来るのは変わらないでしょう。準備は整えておくべきです。」

「鉄の棒は持っていない人がいたら直ぐに配るよう下に伝えなさい。訓練と整備を怠らないよう。あとは配置ね……」

「艦橋は階段を、学園は校舎内と生徒会室前、あとは学園に入って来られる所を塞ぎましょう。」

「グラウンドと校門と搬入口と……」

「ここにパンフレットあるから、その中の地図を元に決めますか?」

「良いわね。見せてくれる?」

半折にされた紙を開き、担当長らの円の中心に置く。

「入口は学園正門、裏門、搬入口、グラウンド側の戦車道練習場、あとは船内から水産科用の出入り口、インフラ関連の整備用の入口、などといったところかしら?」

「そうですね。しかしそこまで数があるなら分散させず、全員校舎に配置して生徒会室に近づけないようにした方がいいのでは?」

「校舎に下手に入られると勢いづかれんで、やはり出来れば外で食

止めたいところっすね。」

「確かに……じゃあ水産科の入口は校舎内にあるから校舎内に半数弱。校門とグラウンドと搬入口にそれぞれ配置。艦橋は少数で対応して貰いましょう。もし艦橋に来なければ応援に来て貰うという形で良いかしら？」

「そんな感じじゃないでしょうか？」

「じゃああとは誰に何処について貰うかを……」

1時間後、配置が決まった。あとはこれに基づき生徒会から許可を取るだけだ。

到着予定時間は明日の9時、予定の万山群島を通り抜け広州に向かう為、香港行きよりも時間がかかる。明かりのついた操舵室、そこに椅子を置いて舵をとる二人の背中を眺める人間が3人。夜飯も済み、あとは寝るまでの時間が残されているだけである。

「……これで上手くいくんだな？」

「どうしたの、冷泉ちゃん？」

「いや、中華民国との交渉の件だ。」

「不安？」

「まあな。これが失敗したらどうにもならないわけだろう？しかも蒋介石政権は中央集権化を進めているはず。地方分権の先例を作ったくは無いんじゃないか？」

「そりゃそうだけど、こっちにも向こうに与えられる利がある。向こうはこれから導入する法幣の通用力を不安に思っているはずさ。何せ張居正以来の一大財政改革だ。しかもこれまでの貨幣の大元である銀を全廃しようと言っているわけだからね。まあ銀をアメリカが引き上げて高騰してるから仕方ないけど。」

そこで経済都市広州を握る我々が法幣導入を積極的に行うというのは、日本が華北侵略を目指している点からしても利はあるはずさ。そこと共産党征伐への増援、日本との戦時の際の出兵を盛り込めばいいよ。」

「ふむ……」

「しかも蔣介石、かなり地方は抑えているみたいだしね。新疆とチベットは無理みたいだけど。」

「その二つは後ろにソ連とイギリスが付いているからな。」

「バランス取りつつやっていくさ。そこんところ協力お願いね。」

「勿論、そのために来たからな。」

「私は今回は島についての交渉後帰って良いんだったね？」

「そうですね、松阪先生。学園都市を置ける島が決まったら帰るので、小山たちに伝えてください。そうしたら決めているであろう調査隊を派遣しますのです。」

「出来ればウチにあるのよりも詳細な地図も欲しいな。」

「そうですね。敷地はこれまでよりも広がる予定ですが、農地を作ることを考えると出来るだけ広げておきたいです。」

「だろうな。教員陣も協力してくれそうな様子だから、使ってくれ。」

「ええ、この学園艦に住んでいる全ての人間総動員する体制を行く前に整えて来たのでそうします。」

「そうか……」

「どうなさいました？」

「いや、教員陣の中には非常勤の者もいる。そういう者は学園艦に家族を乗せずに学園に勤める者もいる。幸い私はそうではないが、そういう者たちはどういう辛さを隠して協力すると言っているかを考えるとな……」

「学生にもそういう者は大勢居ます。それでも、いつか大洗に帰れると思って過ごすほかないです。」

「帰れるのか？」

「分かりません。ですが、それらしき情報は入って来ています。あ、これは内密にお願いしますね。」

「ああ。帰れば良いがな……」

「あ、そうだ。冷泉ちゃん、ちよつと良い？」

急に顔を緩めて麻子の方に振り返る。

「どうした？」

「冷泉ちゃん、今回私の通訳として来て貰うわけだけど、もしかしたら

見た目的にも信頼されないから、一つプロフィールを付け足したい。」
「プロフィール？何をだ？別に遅刻が多いとかは付けなくていいからな。」

「いや、名家の子孫になって貰いたいんだ。そうなった方が信頼が増すだろう？」

「名家に？いや、いきなりそう言われてもな……無理だろう。」

「だって苗字的に問題ないし。」

「苗字……ああ、冷泉家か。だが私は血縁あるのかさえ知らないぞ？」
「さ、流石にバレたらまずいし、やめた方が良いんじゃないか、角谷くん。」

「……どう？」

「会長の通訳と言えば問題無いと思うぞ。私自身急に和歌詠めと言われて出来ないしな。そこまで気にされないだろう。」

「……せっかく面白そうだったのにな……」

顎を腕に乗せ、それを肘に乗せて口を尖らせる。

「面白そうだけでやるのはやめてくれ。」

「三川ちゃん、航行はどう？」

「順調です。整備された甲斐あってか、元の速度で運行しても支障ありません。」

「それなら良かった。じゃ、明日からに期待して早く寝よう。快く迎えられるのは初めてじゃん。」

ゴモヨは皆と練り上げた防衛計画を片手に、いざという時早急に情報を掴めるようヤボクを近くに付けながら、暗闇の学園へ歩みを進める。校門を通り抜け向かうは生徒会室、いや生徒会長室だ。

「……静かつすね。」

「これから忙しくなるけどね。何か連絡来てる？」

「いや、幸い何も無いっす。」

「明日かしら……」

学園で行き先を迷うことはない。こんな時間に明かりがついているのは、夜間の船舶科の授業の教室か生徒会室の2択だからだ。そして前者がありえないとなれば後者しかない。後者の前にたどり着くと、大きな扉を叩き入室を請う。

「はい。」

「風紀委員長、後藤モヨ子です。」

「小山副会長がお待ちです。」

生徒会の者の一人に案内され奥に入る。奥の部屋の中では昨日よりも多くの人間がここで作業していた。

「失礼します。後藤です。蜂起勢への対処案を作成しましたのでもって参りました。」

「どうもありがとうございます。そちらの方は？」

「学園艦店舗運営補佐担当長の矢暮と言っす。情報関係を管轄してんで今回は万一の際に委員長にすぐに情報を伝えられるように同行して来たっす。」

「ここでは辞めなさいよその口調。」

「いいですよ。矢暮さんが来ている理由は分かりましたし、そんなこと気にして入られませんから。」

「はあ……すみません、ウチの部下が……」

「では、早速お話を。」

小山は会長の席を借り、その前に椅子を二つ並べ、二人をそこへ座らせた。

「はい。蜂起勢の方が数が多く、しかも精銳も向こうに回っているため、数を集中させて局所的に優位を確立して撃退し、弱らせたところを捕らえる、というのが作戦です。」

守るのは艦橋とここ学園の2ヶ所。配分比は1:9です。学園では校内への入口及び校内を守る予定です。その為出来れば今夜から風紀委員を学園に留め置いて欲しいのですが……」

「それに関しては明後日の選挙の会場準備補佐として学園宿泊証を発行しますのでご案心を。しかしそうなると思えば蜂起勢が動いた後こちらから動くのは厳しそうですね。」

「……正直蜂起勢が戦力の8割学園に集中させてきたら、撃退出来たとしても負傷者はこちらの半数……近くになるでしょう。」

「負傷者は減らして貰いたいですね。医薬品も限られる今大陸からは出来るだけ買いたくありませんし。まあ、取り敢えず大まかな方針はそれで構いません。相手が動かない限りこちらは向こうを潰せる明確な証拠を得られませんので。後で詳細を詰めましょう。そういうえば昼間の運動、聞きました？」

「赤峰候補のですか？部屋からながら聞きましたよ。何でも今回の発表は全て嘘だとか日本に帰るとかなんとか。昨日一日動いていませんでしたし流石に大丈夫だとは思いますがそれがどうしましたか？」

「昼間の放送で、向こうは自分たちが劣勢であることを知っているはずです。生徒会へのこれまでの不満を背景にそこそこ支持されていますから、加担されたら面倒だと。」

「落選した後に蜂起されればあり得るかもしれませんが、これまで選挙で戦っていますし民主主義を卑下したりはしないと思います。まあ、本当に負けるのが現実となったら分かりませんが。」

「……まあ、向こうについたら選挙後に特別風紀指導を受けさせて貰える？」

「了解しました。」

「あとこっちからひとつ。部下に調べさせてる限り部隊の集結などは見られないので、今日は来ないっぽいです。」

「ありがとう。じゃあちよつとそこで待ってて。」

小山は部屋の入り口側に進み、1名肩を叩いて連れて来た。

「じゃあ、細部を詰めていきたいんだけど、その前に援軍のアテが付いたわ。」

「援軍！本当ですか！ですが何処からの……いや、五十鈴さんを連れて来た……ということは……戦車道を使うつもりですか？」

「ええ、他にまともに増援となりそうなものは無いですから。戦車道がこちら側で参戦したらこちら側の正当性も高まりますし、見た目だけで威圧することも出来るでしょう。」

「いや……確かにそれはそうつすが、私たちや五十鈴さん、そして小山副会長ならともかく他の皆さんが協力してくださるんすか？」

「協力して貰えるようになったんですよ。」

「どういうことですか？」

「夕方の配給の際に、一つ掲示を出しておいたのですが、ご存知ですか？」

「ええ、総動員体制に関するものですよね？明日からとか書いてあって今日決定したにしては急だなあ、とは思いましたが。」

「こちらがその内容です。」

華が二人の後ろから書類を手渡す。

「……これがどうかしたつすか？」

「……なるほど、そういうことですか。」

「何がっすか、委員長？」

「人員管理に戦車道の方も入る、ということですね？」

「その通りです。今日は蜂起勢は来ないようですから、今夜日を超えてから戦車道の人たちを召集しても大丈夫でしょう。」

「なるほど。したらこちらのグラウンドと校門の方に回って貰って戦力の増強としましょう。ここらは抜かれたくないですから。」

「それでいいでしょう。他はそちらの案のままで結構です。」

「ありがとうございます。早速風紀委員に学園への召集をかけてもよろしいですか？」

「書類は後からでも何とかありますから構いませんよ。」

「分かりました。他に何か用はありますか？」

「いえ、特には。必ずこの動きを鎮圧してください。それだけです。」
「勿論です。私の不手際が起こしたものの、確実に私が抑えます。では失礼します。」

ゴモヨは席を立つとヤボクを連れて生徒会長室から去った。

「…………ふう。」

「小山副会長、お疲れですか?」

「五十鈴も急にありがとね。」

「いえ、私もIⅤ号乗ることになるでしょうから大丈夫です。しかし、今回負傷者を出す事態になってしまおうのでしょうか。」

「戦車を見て向こうが恐れをなして引いてしまおうのが一番いいものだと思いますね。」

「確かに鉄の棒を持った者同士の殴り合いよりかはそちらの方が良いですね。」

「それで、召集の準備は出来てる?」

「ええ、高3を含め全員召集します。あとは日を跨いだら各家庭を訪問するだけです。呼びに行く人の手配も出来てます。」

「なら大丈夫そうですね。」

「そういう訳で、今回あなた方をこちらへお呼びしたのです。」

深夜の学園内、とある教室に集められ席に座らされた戦車道の者たちを前に、教壇の裏から小山が話を続けた。前には他にゴモヨ、ヤボク、そして華が並ぶ。

「という訳で、ゴモヨ委員長と相談の上、風紀委員の方たちと4輛ずつ演習場に繋がるグラウンドと校門の警備について貰います。」

「わ、私たちに戦えと?」

前に座る磯部が机に上半身を乗せる。

「いえ、流石に戦車を見れば蜂起勢は引くと思いますよ。ですから恐らく正面切って戦うことにはならないかと。」

「よ、よかったあ…………。」

「今回はこの前の一件とは異なり、総動員体制の規則に基づいた生徒会の決定ですので従って貰います。それに今回の件が拡大して混乱

が抑えきれなかった場合、西南政権との協定がひっくり返される恐れがあります。何としても大きな混乱を起こさずに鎮めたいのです。ご協力を。」

「……はい。」

小山がみほの顔を見て通告すると、近くの澤が手を挙げる。

「あの、すみません。その風紀委員から離脱した人たちって本当に暴動とかを起こす気なんですか？」

「………ええ、こちらの得ている情報ですと既にあちら側について担当の者ほぼ全員に鉄の棒を配っている上、一部は既に一箇所にあつまっているつす。それに……彼らの目的はこの耳が間違っただけならば角谷会長とそれに繋がる政権を打倒する事です。」

今回の支持率調査で角谷会長後継の峠候補と赤峰候補な支持率の差がかなり開いているところから、それをひっくり返そうとするとなるとそれくらいしか手段はないかと思うつす。」

「……蜂起は間違いなし、ですか。」

「残念ながらそうつす。こちらとしても元仲間を弾圧したりはしたくないつす。ですからそちらの威を借る形になるつすが、よろしくお願いするつす。」

「……方が一向こうが引かなかつたら、どうなりますか？」

「一応校内にも部隊を配置していますので直接生徒会室に乗り込んでくることはないと思いますが、それだけで向こうの士気は上がると思いうので、道を防ぐなどして他の風紀委員の部隊の対処を待つてください。」

「……分かりました。」

「ではこちらの方で他の教室を宿泊所とする形で宿泊許可証を発行しておきましたので、準備してください。校舎内にいらつしやつてすぐご連絡が取れる状況ならば特に行動に規制はしません。以上です。あとゴモヨさん、防衛計画の最終調整をしたいので、この後生徒会室に来ていただけますか？」

「……はい。」

「あと五十鈴さん、皆さんの部屋の管理と監視を今日一日お願いしま

す。確か今日は配給関係ありませんでしたよね？」

「はい、大丈夫です。」

「では以上です。ごゆっくり。」

小山は全員の前で頭を下げると、ゴモヨとヤボクを連れてその部屋から立ち去った。残された者たちは華の案内の下で机が後ろに下げられた別の教室に案内される。

「ここですね。布団などは防災倉庫から持ち出して来ましたので、皆さんそちらを使ってください。」

布団は奥の方に準備されており、戦車道の面々は荷物を一箇所纏めると布団を開いて引き始めた。既に時間は深夜の1時を回っている。だがこんな状況から考えれば果てしなく楽しい行為である。

その晩、日が昇るまですべての布団の中のおしやべりが同時に止まることはなかった。内容は先ほどの話や現状の話ではなく、たわいもない日常の話だった。

小山はゴモヨを通じてヤボクを先に生徒会室に戻らせる。ゴモヨと小山は無言でその背中を眺めた。しばし二人は明かりもない廊下で立ちすくんでいたが、その静寂を先に打ち破ったのは小山だ。

「委員長。」

「……はい。」

「これからちよつと散歩に行きたいのですが、外出許可を頂けますか？」

「構いませんが、なぜこの時間に？」

「特に理由はありません。あと出来ればご一緒願いたいのですが。」

「……分かりました。」

二人は街灯もまともについていないグラウンドに出る。地面の砂を踏む音が途切れ途切れに鳴る。小山が、足を止めた。

「……ここなら本当に誰も来ません。本当のことを聞いてもいいですか？」

「本当のことですか……」

「ええ。短刀直入に言えば、あなた方風紀委員が今回の件の前から蜂起を計画していたのではないか、ということですよ。」

「……」

「先ほどヤボクさん、澤さんの質問に嘘を返しましたよね。蜂起側はまだ集結はしていないはずなのに。何故そうしたか。それは『何も知らない人には嘘を吐くしかなかった』から。私もあなた方も既に『風紀委員は蜂起するもの』という枠にはまっていたんです。」

「……」

「そちらがこちらの情報を集めていたことは掴んでいました。風紀委員は何かを企んでいる。先んじて抑えるべきだと諫言して来る人もいました。しかし私は廃校が決まった時からの恩からそれを退けてきた。」

「……」

「別に私はそれも有りますし計画していたこと事態を非難するつもりはありません、今回の蜂起を無事に抑えて対応を任せてくだされば。認めて頂けますか？」

「……」

「駄目ですか。」

「……本当に、追求は無いのですか？」

「我々としても今後の新たな学園都市運営において治安維持の為あなた方は必要です。蜂起側を完全に鎮圧して、今後も協力してくださいれば、特に問題ありません。」

「……分かりました、認めましょう。少し話が長くなりますので、何処かで腰を落ち着けませんか？」

「そんなにですか？」

「今となっては馬鹿らしいものですが。」

「折角ですし聞きましょう。」

グラウンド近くのレンガ倉庫の壁に背をつけ腰を下ろす。丸に近い月が空には輝いている。

ゴモヨはこれまでの経緯を説明した。それを考えた理由、実行計画、そして今回の蜂起側の担当長がその計画の中心的役割を担っていたこと。そんなことを風紀委員の話に絞りつつ話した。小山は黙ってそれを聞き、聞き終わると手を取った。

「……誤解が壁を生みました。しかし、その誤解は私たちの学園艦に安定をもたらす為には必要なことでした。」

「よく分かっております。」

「ですがその誤解は解かれました。私たちは今まで以上に手を取り合うべきです。あなた方は『何もしていません』。いいですね?」

「……はい。今後もさらなる関係強化を進めましょう。」

手を離す。小山は立ち上がり裾の砂を叩いて払い、背筋を伸ばした。小山の特徴は通常の人間が後ろにバランスを崩しそうな角度で伸びをしてもバランスを崩さないことである。

「では、早速8輻……いや、7輻の配置を決めましょう。」

「どれが動かないのですか?」

「私は流石に前線には出れませんから。」

広西大洗奮闘記 特別編1 12使徒に見下ろされ

1155年 スウェーデン王エーリク9世が征服。カトリックが布教されるが、宗教革命後スウェーデンがルター派を受容したため、ルター派が浸透する。

1581年 スウェーデン王がフィンランド及びカレリア大公を兼任する形で後のフィンランド公国が成立する。

1596年 農民が徴税と徴兵に対し棍棒戦争と呼ばれる反乱を起すが一年後鎮圧される。

1721年 スウェーデン、大北方戦争に敗北。ニスタット条約でロシアにエストニア、カレリア地方などを割譲し、バルト海での覇権を失う。

1809年 ナポレオン戦争の最中、スウェーデンはフィンランド戦争に敗れ、フレデリクスハムンの和約を結び、フィンランド大公の地位をロシア皇帝アレクサンドル1世が継ぐ。内政ではフィンランド人が登用され、後に公用語としてそれまでのスウェーデン語に加えフィンランド語も認められて行く中で、『フィンランド人』の民族意識が高まる。

1899年 ニコライ2世は露独関係悪化に伴う強権化を進め、その中でフィンランドの自治権廃止宣言を含む二月勅書に署名。公用語としてロシア語が強要される。フィンランド人の反発と民族意識もさらに高まる。第一次ロシア革命後、これは撤回され、女性参政権が認められた普通選挙による議院内閣制が成立する。

1914年 ロシア帝国、再び自治権停止。しかしロシアを輸出先として、最新技術を導入しつつ経済発展を遂げる。

1917年 第二次ロシア革命の混乱の最中、フィンランド共和国独立宣言。

1918年 フィンランド内戦勃発、白衛軍(資本主義派)の勝利。
1921年 パリ講和会議で独立が国際的に承認される。

これはそれから14年後、北欧の小国フィンランドで起こった異変にまつわる話である。

気温が低いと思われることも多いここフィンランドであるが、沿岸部はバルト海やメキシコ湾流のお陰で、北緯60度以上にあるにも関わらず日本の北海道とさして変わらない気候である。街の間人は長袖に薄手の上着を羽織った姿で街を闊歩している。彼らは広大な石段の一角に一度目をむけるが、気にせずそのまま通り過ぎて行く。

緯度が高い街の夜は早く、まだ5時にもなっていないのに完全に陽が落ち、辺りを照らすものは店と街灯のみである。

「……ねえ。」

「なんだい？」

石段の途中には3人の少女が腰掛けている。正面、すなわちヘルシンキ大聖堂を背景とした時に左側の子は厚手の上着を来てさらに震えており、右の茶髪の子はジャージ姿で後ろで手を組んでおり、真ん中の子はチューリップハットに同じくジャージで、膝の上に弦楽器を載せ奏でている。そしてこの奏でている音楽こそが辺りの人間を振り向かせる理由である。

その足元にはコインの一枚入った空き缶が置かれているが、前に来てまでこの音楽に耳を傾ける者はいない。

「……今晚どうするの？」

「どうするって？」

「どこで泊まるの？こことか路上寝泊まりは自殺行為よ絶対。」

「……人が寝る時、布団である必要はないんじゃないかな？」

「ミカはその音楽で1マルツカでも稼いでから言つてちょうだい！」

「後ろのでっかい建物に泊めさせてもらうってのは？」

「最終手段ね。私たちプロテスタントの作法とか知らないし。」

「町外れのどこかで野宿すればいいんじゃないかな？」

「ここ人口何十万もいる都市の中心ですけど？公園で野宿でもする気？確かにテントと寝袋は用意してるけど。しかもそこまで場所も分らないのに歩く気？一応私たちがこの国に居候しているんだから、下手に迷惑かけちゃダメでしょー！」

「野宿をする、それは本当に悪いことなのかな？」

「どーにかなるんじゃない？」

「ならなさそうだから言ってるんじゃない！全くもう、こんなことになるんだったらヘルシンキについて来るんじゃないくて学園艦に残ってればよかった！」

アキは口を膨らませてそっぽを向いてしまう。

「といつても、アキも自分で決めてついてきたんだろ？それじゃしようがないじゃん。そんなカツカすんなよ。そういえばさ、何でミカはポリからヘルシンキに来たのさ？ここまでついて来た私が言うのも何だけど。」

「風が呼んだからさ。」

「ミッコは？」

「面白そうだったから。」

「やっぱり……本当どうすんの？帰るにも鉄道に乗れるお金も無いんだよ？」

「別に帰って学園艦の食い扶持を潰す必要はないんじゃないかな？」

「野宿で良いじゃん。学園艦に残っても石油に制限かけられて戦車も車もバイクも乗れないんだから。」

ミカの指は変わらずこのカンテレの上を舞い、ミッコは腕を後ろで組み、2段上に頭をつけんばかりに身を反らせる。

「全く……」

「ミカはさつきから何を弾いてるのさ？学園じゃ聞いたことないけど？」

「この国の人にとって大切なものを伝えようとしているのさ。」

「へえ。」

「でもこの様子だと皆さん既にお持ちのようだね。」

最後の1音を弾き、11本の弦の震えを抑える。

「大切なものなら持つてるでしょ、何か知らないけど。それより曲変えたら？」

「……そうだね、次は何の曲にしようか。」

「ちよつと夕飯考えときなさいよ。」

「この一マルツカに聞いてみる。」

ミツコは缶に手を突っ込みコインを掴み取る。

「てかそれどこで手に入れたの?」

「秘密。じゃあ表が出たら夕飯について考えなくてもよし。そーれ。」
それを右の親指の上に乗せ空に弾き、右手の甲と左手の平で挟む。
左手を離すと、そこにはライオンの紋章が僅かな明かりを反射して輝いていた。

「表だな。じゃ問題なし。」

「何がどう問題なしなのよ。」

「……次は何時ものでしょう。」

「何時もの、って、アレ? いやあればダメでしょ、歌詞的に考えて。」

「歌わなきゃいいんじゃないかな。」

「日本の曲にしたら?」

「……あまり弾けない。」

「あ、そう。」

今度はリズムが速い曲がこの石段から広場に響いた。こちらに来る人はいない。

「……この曲聴いてると戦車乗りたくなるんだけど。」

「……曲を変えるかい?」

「いや、いい。」

背後からの風が止んだ。

かなり高齢に見える紳士は一人の秘書を共に付け、街を歩いていた。口から出て来るのは年甲斐もなく不満である。

「全く民主政治家の奴らは何を考えている!あの国の隣にある以上、軍備を整えて対応せねばならないというのが分からないのか!」

「ソ連と軍拡競争始めたら勝てないということでは……まだ恐慌の影響は残っているのですし……政府はソ連はしばらく内政に注視すると見ているようですし。」

「その目がいつ外を向くか分からないではないか!国を、我が国を潰す気か!ドイツが再軍備を始めた今、英仏がともに助けてくれるは

「ずがない！我が国は独自でこの国を守らねばならないのだ！」

「それは分かりますけど、だからといって閣下。予算が通らなかつたと言つて、また辞表にサインしようとしないうでください。」

「やつてられるか！」

「今の職はやつて頂かねば困ります。」

「ふん！」

「せめてこの場では落ち着いてください。」

カバン片手に帰りを急ぐ男を何とか秘書は抑えようとするが、機嫌は相変わらずだ。

「だから民主政治家の奴らは……あとあのリュティの野郎も……」

そして愚痴はこの長身の老人の口から変わらずロシア語の形で飛び出し続ける。帰る道を進んでいると元老院広場の大きな銅像がさら上から見下ろしている。そして二人の耳に入ったのは、音楽。それは老人の愚痴を一時停止させた。

「……大聖堂の方からだな。」

「こんな夜に日光浴でもしてる人間が居るんですかね？」

「……これはカンテレか？」

「そうみたいです……恐らくどっかの乞食か何かでしょう。」

「カンテレにしてはやけに速いな。聴いたことのない曲だ。興味深い。行くぞ。」

「えっ？どちらに？」

「この音楽を奏でる主に会いに行くのだ。」

老人は既に石段の方へ数歩歩みを進めていた。秘書はそれに遅れて広場を横切る。

「どどどうしたんですか急に？」

「なに、気になるだけだ。」

幅の広い石段にはそれぞれ離れた二組しか腰掛けていない。そして楽器を持っているか否かで演奏者か否かは判別可能だった。老人は斜めに段を登りそれらしき3人に接近する。

両端の二人はそれに気づいたようで、座ったまま老人に視線を合わせ、首から先のみ礼をした。音の連なりは絶えない。数段下にいるは

ずだが、かなり上から見下ろす形になる。

「……Kappaleen kuunneltavan?

(今弾いている曲は何だ?)」

「……………Karelia kehua jailylyttä po
lkkaa.

(カレリアを讃えるポルカさ。)

「Seonhyvbiisi.

(いい曲だ。)

ただ正面に立ち、瞳を閉じてその曲に聞き入る。だが途中と思われる
場所で区切り、初めてミカは顔を上げた。

「Haluatko kuulla udelleen alus
ta?

(もう一度始めから聞くことをお望みかな?)」

「Ninon. Pyydä alusta.

(そうだな。最初から頼む。)

たった二人に対する演奏会がひっそりと始まる。老人は今度は
しっかりと目を開き、ミカを視界に捉えながら聞き入る。両端の二人
は何が起きたのか分からずにいるようだが、とにかく老人はこの3人
が、例のボスニア湾にいる学園艦なるものの乗員であることを、その
右胸に付いたマークから察していた。

曲は再び最初の方のリズムに戻ったかと思えば再びさつき聞いた
リズムが耳に入る。そして指先で前方に描かれた四分円が、その曲の
終わりを告げていた。

「……………Tämbiisitä on loppu.

(この曲はこれで終わりさ。)

「Seolihyvbiisi. Koskattän
onhieman parmallatullella
todennkiseesti viettävät.

(いい曲だった。お陰で今日は少しマシな気分です。)

老人は拍手とともにその曲を讃える。

「Kiitos sanomalla, että onneksi.

(そう言つて頂けるとありがたいね。)

「Tulit t·nne Porri?

(君たちはポリから来たのかい?)」

「Nousta alukseen juna. Alkaen Porri.

(鉄道に乗つて来たよ。ポリからね。)

「……」

なるほど、かの学園艦の使節とやらが北西の港町ポリに現れてから一月以上が経つ。そこからはるばるここヘルシンキまで来た者たちが居ても不思議はない。そして政府は現状学園艦の実態の詳細をつかめていないらしい。

おまけにフィンランド語を話せ、話を聞き出せそんな人間がとりあえず目の前に一人。となれば取るべき道は自ずと決まる。

「Voit olla jossain y·py·t·n·i
Itana?

(今夜何処か泊まる当てはあるのかい?)」

「Ei.

(いや。)

それを聞き終えると、後ろで待っている秘書の方を向く。

「君、今日はこの後何もないよな?」

「は、はい。今夜は特に用事はございませんが……」

「それなら結構。彼らを我が家に招待するぞ。準備しろ。」

「へっ?」

「聞こえなかったのか? 招待するから準備しろと言つたのだ。」

「いえ、あの、この見ず知らずの者たちを招待するのですか?」

「ああそうだ。彼らは継続の者たちだ。話を聞きたい。」

「継続つて……あの学園艦とかいうものですか?」

「そうだ。先に帰っておけ。」

「いやしかしですね、閣下。あなた様をこの者たちと護衛なしで帰らせる訳には……」

「私は軍人だ。こんな者たちに負ける程まだ衰えてはいない。早くし

ろ。」

「はあ……分かりました。ですがお気をつけくださいね。」

秘書は首を左右に捻り、すぐさまその場から駆け出した。

「Olette asuville ihmisille ”jat kosota kouluun alukseen”?

(君たちは『継続学園艦』の者だな?)」

「Kyllä。」

(そうだよ。)

「Haluvat kysy meistä te, kun kuntelet muitä kappaleita. Tulevat illallinen tulemaan, eivätsaamitn?

(他の曲を聴くついでに、君たちの学園について聞きたい。夕食を都合するから来ては貰えないか?)」

「Minne mennä?」

(どちらに行くんだい?)」

「Seonminuntalo。」

(我が家だ。)

「Olen pelannut sitä sinulle oma almaterruttava inhyvönmit?」

(私はこれを掻き鳴らしつつ、あなたに母校についてお話しればいいのかな?)」

「Kyllä。」

(そうだ。)

「Kiitollisena kutsun. Voinsoitaaanmäkaksi ihmist?」

(では、御相伴にあずかろう。この二人も呼んでいいのかな?)」

「Envilit. Otansinut.

(構わない。案内しよう。)

「Odotavhän。」

(少し待って欲しい。)

先に進もうとする老人を制止させ、ミカはカンテレを脇に抱えすと立ち上がる。

「どうした、急に立ち上がった。」

「ねえミカ、何を話してたの?」

「この人の家に招待された。夕食をご馳走してくれるらしい。」

「……………はっ?」

「行くよ。もしかしたら今日は寝袋じゃないかもしれない。」

「いやあの、話が分からないんだけど。てかいいの?ついていって。」

「大丈夫……………だと思っう。」

「まあ、野宿したくないなら行くしかないわな。」

「Anteeksi. Kiitos etukäteen.

(すまない。宜しくお願いするよ。)

「Tule tule.

(ついて来てくれ。)

ミカは一步先に出た老人の後を追う。

「アキ行くぞ。」

「え、ちよつと待って……………」

なんだかんだ言っつてアキもついて来た。

「Tietojameist. Olen Mika. Tm.

on Mikko, on Aki.

(取り敢えず紹介しよう。私はミカ。こつちがミッコでそつちはアキ

だ。)

「Mika, Micko, Aki……………」

(ミカにミッコにアキか。)

老人は不思議そうに彼女らの顔を交互に眺める。

「Onko sinulla kysyttäv?

(何か疑問でも?)」

「……………Naiset olette?

(君たちは女性だよな?)」

「Ei ole niintärke.

(それは重要なことじゃない。)

「Vaikka harvinaisen……Voilola
otta.

(珍しいが、確かにそうかもしれないな。)

「Oletko varma, että haluat kysy
nimessä?

(名前を聞いても宜しいかな?)

「……Carl Gustaf……Carl Gustaf Man
nerheim. Tunnettu Gustav.

(カールⅡグスタフ、カールⅡグスタフⅡマンネルヘイム。グスタフ
と呼ばれている。)

「カールⅡグスタフⅡマンネルヘイム……

K, Kiitos etukäteen, Hännelyh
isyttens.

(よ、よろしくお願いします、閣下。)

一滴の水滴が、ミカの首から背へと流れる。

「Terveisii, Mika.

(よろしく、ミカ。)

それを悟られぬよう握手を交わす。しかし学園艦の情報を望んで
いることを加味しても、このお方はここまで我々を厚遇するのだらう
か、それは分からない。ただ一つ言えるのは

「……ちよつといいかな?」

「何だ?」

「何?」

「……やばい。」

広西大洗奮闘記 54 歓迎

朝日は大分前に上っている。するべきは間も無く訪れる下船の間までに準備を整えることだけ、だと思っていた。

「そろそろ着くよー。起きてよー。」

「……あと5分。」

「それ3回目。」

「無理。いくら会長さんから頼まれてもそれは無理だ。まだ30分あるだろう。」

「それでも着替えたり朝飯食べてもらわなきゃいけないから、早く起きて。布団も片付けなきゃいけないし。」

「断る。」

このぐうたら娘を連れてきたのは思ったよりも間違いだったのかもしれない、と角谷は今更ながら後悔していた。この者の友人にして覚悟の元になっている者は、毎朝この苦労を味わっているのだろうか。

「ならば……」

仕方なく強行手段に出ることにした。まずは掴んでいる掛け布団を奪い取ろうとするが、離しそうなそぶりはない。次は端に周り、敷き布団を掴んで思いつきり持ち上げる。すると麻子はゴロゴロと床の上を転がった。敷き布団をどっかに取っ払うと、掛け布団をかけた姿で震えている。

「床冷たいだろう。」

「……」

「いい加減頼むよ。通訳が寝起きじゃ困るからさ。」

「……」

動かない。流石に角谷にも怒りというものが芽生え始めた。声じゃ無理だ。ならば一つ手段がある。角谷は麻子の腰のあたりに腕を入れ、もう片手で支えながら力を込め、布団ごと彼女の肩に乗つけた。

「よっ……と。いやー、やったらいけるもんだね。」

「……えっ?」

「行くよー。」

しばし呆然としていたようだが、間も無く背中から手で叩かれるような感触が伝わってきた。

「待てええええ!」

「待てない。」

「降ろせええええ!」

「無理。」

何か喚いているが、操舵室に運ぶまで気にしないことにした。操舵室についたら床に降ろす。

「冷泉くん、やっと起きたか。」

「いや、寝ているところを持って来ました。」

「……」

「着替えて朝ごはん。早く。」

「……はい。」

目が覚めたようでも、渋々行動を始めた。辺りを見ると、船舶科の者が一人しかいないことに気づく。

「古賀ちゃん。三川ちゃんは?」

「入港の為の信号旗揚げに行ってます。」

「そう。」

「入港の許可が得られ次第着きますので、準備整えてくださいね。この様子だと定刻通りに着けると思っています。」

「りよーかい。」

角谷は自身の荷物の近くの椅子に腰を落ち着ける。

「角谷くん、そろそろだな。」

「まあ、今回は大丈夫じゃないですか? 学園の同意も得られていることですし。」

「そうだな。」

「南京とさえ何とかなれば、どうにかかりますよ。」

「まあ、頑張ってくださいよ。」

「勿論です。」

外からもう一人の船舶科の者が双眼鏡をぶら下げて帰って来た。

「お疲れー。」

「どうだった?」

「信号旗。チャーリー、間を空けてユニフォーム、ウイスキー、2。入港を許可する、ようこそ、とのこと。」

「……ようこそ、か。」

「よし、行くよ。」

輸送船は速度を少し上げて向こうに見える港の方へ近づく。

投錨。そしてロープが岸に固定される。梯子が下され、それをたどって降りて行く。最後の者が船内の鍵を固定し、段の下で合流する。

「大丈夫?」

「船内各部異常有りません。」

「ありがとう。」

「ここからどうするんだ?」

「確か……」

「あれか?」

見ると右手から馬車が駆けて来ている。それは角谷らの前で鞭打たれて止まった。

「……是角谷先生一行☒?」

「角谷さん御一行ですか?」

「是那樣。」

「(そうです。)」

「陳閣下是等。引導。」

「(陳閣下がお待ちです。ご案内します。)」

御者は何かの書面を麻子に見せた。

「……何だつて?」

「案内してくださるようだ。これは陳さんから、という証明書のようなだ。」

確かに御者の様子もそれを示している。

「じゃ乗って。」

「失禮。」

(失礼します。)

通訳の麻子を先頭に乗り込もうとすると、御者が制する仕草を見せた。

「各位船？ 正在船内受到？ 好像等的指示。」

(船員の皆さんは船内にてお待ちいただくよう、とのお達しを受けております。)

「……船員は船で待て、だと。」

「だって。じゃあ三川ちゃんと古賀ちゃんは船に戻っておいて。数日後には松阪先生が帰ることになるから、そうしたら学園艦までお願いね。食糧はあるね?」

「勿論です。分かりました!」

2人はすぐに馬車から離れ、船の方へ戻る。馬が頭を振って唸る。前に麻子と松阪、後ろに角谷が座る。御者は一礼して鞭を振るい、馬車を走らせた。

街の様子を眺めつつ着いた先は、以前と同じ建物だ。下車を勧められ、降りて入口に向かうと、その先には前の方々を列を連ねて待っていた。

「Hello, Annz u.

(こんにちは、杏。)

「Hello, Mr. Cheng. Nice to meet you.

(こんにちは、チェンさん。よろしく。)

その正面にいた者と和かに握手を交わす。

「I also expect to be able to hold a meeting meaningfully this time.

(今回も有意義な会議が出来ることを期待していますよ。)

「Me too. Who is that person?

(私もです。そちらの方は?)」

陳は麻子の方を指して聞く。

「She is my secretary.

(彼女は私の秘書だ。)」

「我是冷泉麻子。是不周到者，不過，請多關照。

(冷泉麻子という。不東者だが、よろしく頼む。)」

「！我是陳伯南。是這個廣東的首位。請多關照。

(私は陳伯南だ。この広東のトップだ。よろしく。)」

麻子が広東語で挨拶すると、一瞬驚いたようだったが、しっかり広東語で返してきた。

「Because the last time was in distress, and I had come with her, I made her come this time.

(前は遭難して来たから連れてこれなかつたけど、今回は来てもらったよ。)」

「The proposal seems to tend to go forward. Now, I'll decide about your reach right away. Thereis no time until we go to Nanjing so much.

(これで話が進み易くなりそうだ。さて早速あなた方の範囲について決めてしまおう。南京に行くまでに時間もあまり無いしな。)」

「I agree.

(そうですね。)」

一歩踏み出そうとした時、前にいた陳がふと足を止めた。

「Did you end negotiations with France?」

(フランスには断りを入れてくれたか?）」

「……………of course……………」

(も、勿論です。)」

「It's no problem then. Come this s.

(それなら構わない。こつちだ。)」

角谷は再び、そして他の者たちは初めて、あの時のコの字型に机が置かれた部屋に案内された。

学園の校舎に差し込む陽の光も赤みが増してきた。校舎に居た3グループのうち、片方は仕事を終えて帰宅の途に着いた。明日の選挙の準備を行っていた選挙管理委員会である。入り口の案内から受付、順路、記入台、投票箱。その有権者の一連の行動の為の設備の設置は先ほど終わりを迎えた。

もう一つは生徒会。彼らも移設先の決定後の行動に向けた準備を進めていた。仮説住宅の港への移動。島上陸後の探査機器、またはその代用の徴発。靴と服の回収キャンペーンの企画、輸送船の手配など人数が増えた分仕事も増え、とても落ち着いてはいられない。

そしてそのトップの小山はさらに落ち着いてはいられない理由があった。それは最後のグループが校舎に居るのと同じである。

今日の昼間、最後の世論調査が発表された。支持は峠に傾いてはいるが、赤峰候補にも結構な数の支持者がいる。仮に向こうが赤峰候補を押しして蜂起しそれが長期化する事態となったら、学園都市の内部の分断は避けられないものとなる。そしてその蜂起は、来るなら今夜か明日である。

そもそも我々は何としてもこれを鎮圧せねばならない。分断も、禍根も、今後への一切の障害を残してはいけない。今後の総動員体制の維持の為。

「小山副会長。」

「はい?」

一旦手を止めていた時、用がある一人が席の前を訪れた。

「服の徴収に関してですが、女物ばかりになりますが大丈夫なんですか?」

「向こうで金になれば何でも構いません。」

「では基本軍には卸さない方向で。」

「靴は運動靴系なら軍に卸します。ある程度の値段にはなると……いいですが。」

「分かりました。あともう一件、淡水化設備の移動に関してなんです

が、島に運ぶかそれとも今年一杯は学園艦内に残すか決めてほしいとのことです。」

「ああ……その件ですか……。正直向こうで動かせる動力が無いので、それが出来るまでは艦内に残すことになるかと思えます。」

「では島内開発の者たちの水はどうでしょうか？流石に輸送船で運ぶのは手間と燃料がかさみすぎるので。」

「雨水の保持施設を優先させてください。あとその為の手配を。」

「はい！艦内で利用可能なもの及び工具を徴発します！」

「あと初期派遣人員も決まったら伝えるように言ってください。」

「分かりました。失礼します。」

持っていたメモ帳にさっと一言書いて、その者は隣へ戻っていった。しかし2ヶ所に分かれて人が住むことになる、双方に生活できるだけの設備を手配しなくてはいけない。この物資がカツカツの学園艦であるが、それをやらねばならない。タンクなどがあれば良いのだが。

小山は再び自身の担当する業務に手を付けた。今度は残された学園艦の方を年末まで活動可能にする為の仕事である。学生や住人の皆さんにはこの学園艦にて仕事と生活を行なってもらわなければならないのだから。

年末までの食糧必要量は、計算ではこれまで使ってきた備蓄食糧の80%である。もっともこれは最低量であるうえ、島内開発を行う者たちには更に配らなければならなくなるかもしれない。それを買う先は、協定的に考えて広東からしかない。

食糧に変えるに値するもの。それをこの学園艦は必要としている。新たに徴発し得るものについて小山が思い悩んでいると、今度は別の者が席の前を訪れていた。

「はい？……」

「小山副会長。」

「矢暮さん……ということとは。」

「はい。各配給所周辺に旧風紀委員の者らが集まっていることが確認されたつす。」

「そう……ですか。」

「それと、こちらの見張り一人と連絡が取れなくなつたつす。向こうに捕えられたと見るべきかと。」

「……こちらに来るのは確実ですか？」

「はい。狙いが生徒会なのは間違いないつすから。いずれにしても、打つて出る力のない我々は心臓であるここを守る他ないつす。」

「そうですね……分かりました。では大洗女子学園生徒会長代理として命じます。何としてもこの学園校舎を守り抜きなさい！直ぐに配置に着くように！」

「了解したつす！」

背筋を伸ばしてヤボクが答えると、生徒会長室から駆け去つた。

「誰か手の空いている人！」

小山は立ち上がり辺りに呼びかけるが、周りの者は一瞬顔を上げ、首を横に一度振つて下げる。

「……ちよつと出ます。」

席を離れ扉を二つ開け放つと、待機している風紀委員の脇を通り抜け、近くの階段を二段飛ばして上がる。目当ては戦車道の者らがいる教室だ。取手に指をかけ、力強く横にずらす。

「五十鈴さん。」

「はい？」

「皆さんいますか？」

「えつと、今阪口さんがお手洗いに。小山先輩がいらつしやつたとなると……」

「はい。今夜、来ます。燃料は今ある分使つて、直ぐに移動させて待機させます。」

「分かりました。では直ぐに。」

「待つてください。私から指示します。」

暫くして阪口が部屋に戻つた時に目にしたのは、床に座りながら前に立つた小山の方を見ている戦車道の仲間らの姿だつた。

「Mr. Cheng. Is it really good？」

(チエンさん。本当によろしいのですか?)」

夕刻に学園都市に提供される島について協議を終えた後、角谷は会議室にて正面の男に声をかけた。

「What is n't good?»

(何か良くないことが?)」

「I'm surprised to use wider land than I expected.

(予想よりも多くの土地を利用できるので驚きました。)」

「Don't worry. It's because I could know the height of the technology you have from our baggage again. If you cooperate in our development and continue in our development and continue in our development, we have no loss.

(構わんよ。君たちの荷物から君たちの持つ技術の高さが再確認できたからな。こちらの発展と存続に協力してくれるなら損はない。)」

「Anti-Japanese and communist competition and development in Hainan. Of course. I want you to suppress power of the Communist who raises an anti-Japan openly and squarely too.

(対日、対共戦協力と、海南島開発ですか。勿論です。我々からしても反日を堂々と唱える共産党の勢力は抑えて欲しいですし。)」

話す2人の後ろには大洗側の松阪、麻子、広東側の黄光鋭、李伯豪が並んで追う。

「May you cooperate in a war with Japan as a Japanese?»

(しかし日本の者として、日本との戦いに協力して良いのかね?)」

「When allying oneself with you,

I have my heart set already.

And we,'re stranger to that country.

(あなた方と手を結ぶ時に既に心に決めています。それに我々はこの国とは縁がないですから。)

「It is the fact that you have come from the future. I can't help believing also to consider your school ship.

(君たちが未来から来たという話か。学園艦のことも考えると、信じざるを得んな。)

「I'm thankful for your understanding. Then, by calling landing 3 days later.

(ご理解感謝します。では上陸は3日後からということ。)

「Yes. I ask as the agreement. Hainan Dào has been developed by a Qiongy business bureau, but the result isn't good. I'd like to ask your help to get power.

(そうだ。協定通り頼むぞ。海南島の開発は瓊崖実業局を中心に行われているが、結果は芳しくない。力をつける為にあなた方の力を借りたいのだ。)

「We'll do our best to a name of our school. We need a powerful Guardian.

(我が学園の名にかけて、全力を尽くしましょう。学園の保護者として『力強い広東』が必要です。)

陳から差し出された右手を角谷は握り返した。その手を外すと、反対側を向く。

「松阪先生。」

「どうした？」

「指定された島についての書類と地図、お持ちですね？」

「ああ、あるぞ。これらを持って帰って渡せば良いんだな？」

「14日から移設可能とも伝えてください。」

「分かった。まさか今日のうちに帰れるとは思わなかったが。」

「Mr. Matsusaka and two people
of an accompaniment return for
a report to a school ship as I
spoke a short while ago.

（先程お話ししたように、松阪先生と随行の二人は学園への報告の為
帰ります。）

「I see. I'll make them arrange
a carriage to the harbor.

（分かっている。港までの馬車を手配させてある。）

「Thank you.

（ありがとうございます。）

「We'll go to Nanjin tomorrow
morning, too. I have also reserved
the same room at a hotel as
the front today, so I make you
show the way.

（我々も明日の朝には南京に向かう。今日も前と同じホテルを取つて
あるから、そちらに案内させよう。）

「OK.

（分かりました。）

「See you next time.

（また会おう。）

「Good bye.

（ええ、また。）

角谷は麻子と一歩先に出て、たどり着いた入り口の前に用意された
馬車に乗り込み、松阪と広東側の者たちに手を振った。李が御者に一

言伝え、鞭打たれ馬は地を蹴る。

「……取り敢えずはよし、かな。」

「どうだろうか。ここまで広州湾周辺に学園都市を拡げられたとなると、確実に対日本、対南京政府の戦争時の広州への蓋と見なされるのは確実だぞ。」

「そんなの万山群島をもらった時から決まってることさ。だからこそ軍事駐屯権の放棄に関してはそのままにしたんだし。」

「……確実に3年以内に戦争になると。」

「そ。ウチらは島内の衣食住の完備で手一杯だろうしね。」

「そして軍備に関れるかは西住さん達が参加してくれるかどうか、と。」

「やってくれると良いんだけどねえ。」

「あとは海南島開発か。」

「うまくいったら分け前もらえないかね。あとはこの土地に会う農業とかについての経験も得たいから。あとはさつきチエンさんにいった通りさ。」

「……そうか。」

地面からの振動を伝えながら、馬車は道を曲がった。

ゴモヨは生徒会長室の小山の横で無線機を耳に当てた。

「C班班長ヤボク、配置は問題ないっす。」

「了解。いつ来ても良いよう待機し、来た時は鎮圧に全力を尽くしなさい。」

「あと偵察から続報で、向こう動いたっす。配給所に集まった者らはほんの一部を除いて学園に向かってるっす。」

それと風紀委員以外の者が合流しているという情報も来ているっす。数は多くないようですが。」

「……支持者が付いているって事かしら？まあ、特に訓練はされていないだろうし、大した脅威にはならないでしょう。」

「ですが捕らえられる者も多く、いずれは向こうの様子が探れなくなるやも……。」

「分かったわ。取り敢えず最後の一人まで偵察を続けさせなさい。C班は一人として校舎内への侵入を許さないように。窓から来ることも考慮に入れなさいよ。」

「了解したっす。」

無線機を耳元から外し、机の上に置いた。

「……来ます。」

「そうですね。向こう側の人間は必ず捕らえるようにしてください。それが会長の指示ですから。」

「分かりました……。」

「小山副会長。」

先程のヤボクからの情報を他の班に伝達している間に、近くにいた生徒会の者が小山の左手に無線機を乗せる。

「こちらⅠⅤ号に繋がっています。」

「ありがとう。こちら小山です。武部さん、聞こえますか？」

「はい。こちらあんこう。」

「西住さんに繋げて頂けますか？」

「分かりました。」

受け答える声が一段低くなる。

「西住です。」

「小山です。西住さん、今回の件に関してお伝えします。蜂起勢は現在こちらに向かっています。西住さんは風紀委員と共にこれを退けてください。」

まずは渡した拡声器で警告、退かなければ次いで威嚇射撃をしてください。流石に戦車から撃たれば生身の向こうは引き下がると思っています。その後の追撃は風紀委員に任せてください。」

「……もし……方が一、それでも退かない時は？」

「……機銃も砲弾も人を殺さないように出来ていますよね？」

「勿論です。戦車道はスポーツですから。砲弾は人には当たらないようになっていますし、機銃も非殺傷弾を使用しています。」

「でしたら、向こうが威嚇でも退かない際は機銃による戦闘を許可します。撃退してください。」

「……え？」

「戦闘を許可します。残念ながら、向こうが想定しているのは戦車道でもスポーツでもありません。学園の命運を賭けた、ルールの無い戦いです。」

「いや……でも……」

「いつ撃つか、その判断はお任せします。なんなら撃たなくても構いません。学園校舎内に蜂起勢を入れない手段があるならば。」

「……」

「校舎内にいる風紀委員は、数も練度も外より劣っています。突破されたら厳しい、と後藤さんもおっしゃっていました。必ず外で食い止めてください。以上です。まあ来ないとは思いますが、皆さんの武運を祈ります。」

「あ、ちよつと……」

返事を聞かず、小山はスイッチを切った。音を立てて椅子の上に乗る。

「……副会長、大丈夫ですか？」

「……次を。」

「は、はい。ええとM3Leeですね。ただいま……」

さっきの者に突き返された無線機は、新たな繋ぎ先を探す。隣のゴモヨが、首を一段階前方に下げた。

「……そう……分かったわ。偵察の情報は無しで、指揮に専念しなさい。」

「どうなさいました？」

「……ヤボクから、偵察の者全員からの連絡が途絶えた、とのことです。」

「相手はこちらに向かっているというのは変わりないのでしょうか？」

「それはその通りです。」

揃ってひたいの汗を拭う。小山の前に、再びさっきの無線機が現れた。

「副会長、こちらM3Leeに繋いであります。」

「ありがとうございます。宇津木さん、聞こえますか？」

「聞こえてますよー。今梓に繋がりますね。」

戦闘。ルールのない戦い。そう、それは正にみほが心底避けて来た、避けようとした戦争そのもの。私が、その指揮をとるのか。

「……西住殿、どうなさいました？通信ではなんと？」

「……あ、ええとね……取り敢えずこの拡声器で警告、次いで威嚇射撃……だって。ここの突破させないように言われた……」

「向こうは生身の人間ですからね。撃たれたら身の安全を優先するでしょう。」

「だよね。誰だって痛いのがだし。」

乗員は車長兼装填手のみほ、通信手の沙織、操縦手の華、砲手の優花里と、麻子がいらない為、沙織を通信手に付けた以外は初めて戦車を動かした時と同様になっている。撃たないことを望むことに優秀な者は付けない。

「だよね……うん、そうだよね。」

「そうですよ。向こうもそこまで本気じゃありませんって。」

「あ、沙織さん……今の内容、こっち側の各車に伝えてくれる？」

「勿論！えっと、こちらあんこう。あひるさん、アリクイさん、レオポンさん、聞こえますか？」

『問題ありません。』

『大丈夫だよ。』

『OK。』

「小山副会長から伝達。相手が来たらまずはおんこうが警告します。ダメなら各車で威嚇射撃を行なってください。向こうに当てないよう。」

『了解しました。』

『分かった。』

『何とかやってみよう。あ、移動に関しては何か指示ある？』

「久々に鉄の匂いに囲まれ、少々テンションの上がっているナカジマが聞き返す。

「みぼりん。ナカジマさんから、移動に関しては何かあるか、って。」

「……近くに風紀委員の方もいるので、あまり急に、大きく動かないように、と伝えてください。」

「はい。」

「沙織は乗り出していた半身を戻し、無線をまたやり始める。」

「……」

「五十鈴殿、西住殿の顔に何か？」

「……あ、いえ。ちよつとボーとしてしまつて。」

「華さん、大丈夫？今まで生徒会忙しかつたと思うし。」

「大丈夫です。あんなことでへこたれてはられませんから。これからの方が移設関連で忙しくなります。」

「なら良いんだけど……」

「それに今回操縦はあまり必要ではないみたいです。問題ありません。休息代わりにします。」

「分かった。」

「みほの頭上の蓋が数度叩かれ、縁との衝突を繰り返す。震えるキューポラを押しつけて頭を出すと、一人のおかっぱ少女が覗き込んでいた。」

「ひゃっ！」

「あ、失礼いたしました。」

思わず縁に腰を当てて仰け反ったみほに対し、風紀委員らしき女は頭を掻きながら謝意を示す。

「私、このグラウンド防衛を担当するA班の班長の佐渡と申します。以後お見知り置きを。」

「は、はあ……よろしくお願いします。」

「早速ですが、今回の防衛に関して確認しておきたいことがあります。追撃は我々が行う、というのはご存知だと思いますが、向こうが来た際、戦闘の開始の合図は我々が出すかそちらが出すか、統一しておきたいと思ひまして。」

「ええ……えと。」

「こちらとしては、私の声ですと全員に届かないかもしれないので、こちらの砲声を合図にしたいのですが。」

「で、ですが砲撃は威嚇でも使いますし、出来ればそちらで判断していただきたいのですが……」

「戦闘が始まると戦車より前には出れません。戦闘になった際はそちらが主体になりますので、そちらが進めるべきかと思ひます。」

でしたら威嚇後のIV号の砲撃を合図に私が号令をかける、というのはいかがでしょうか？」

「ええと……」

「みほりん。澤さんから通信だよ。」

返答に戸惑っていると、沙織がみほを呼び止めた。それに気を引かれた間に、返事を待たず、ではよろしくとだけ言って、佐渡という女は戦車から飛び降りておかつぱの波の中に消えていった。

「あ、あの……」

「みほりん、取り敢えず繋ぐね。」

「う、うん……澤さん、どうしたの?」

「西住先輩、先程小山先輩から指示を受けまして、こちら校門側が戦闘する際は西住先輩の許可を得る、とのことですよ。」

「……え?」

澤に2度確認し直し、完全に一致した返事を聞いたみほは、生徒会室からの先程の無線の周波数に合わせ直すように沙織に指示した。接続の確認後、呼びかけた。何度も副会長の名を。だが返事らしきものもそのものも無い。

止むを得ずみほは届くかも分からないながらも明確に主張した。不可能であると。こちらでは暗い闇の下、慣れぬ歩兵である風紀委員にも指示せねばならず、ましてや校門側では実情さえも見えない。そのような状況で私が一元的に撃退開始を指示することはできない。そもそも私は戦車道をやる者として生身の人を攻撃する指示など出せない、と。

しかしそれでも音が帰ってくることはない。スイッチが切られていない以上聞こえているはずだ、と思ったが、向こうが聞かぬふりをしているのか。

どうしたらいい？本当に私がやらねばならないのか？ここで、自分で、人を育てるための戦車を人を傷つけるためのものにする決断をせねばならないのか。

「みぽりん……戦闘、つて？」

「……」

声に引かれ顔を上げると、華のほか二人はみほの顔を見つめている。

「……もし、威嚇しても退かなければ……あんこの指示の下撃退して、だって。」

「撃退って……砲撃や機銃で、でありますか？」

「……そう。」

「機銃で……て、私！無理無理無理無理、絶対無理だつて！」

「沙織さん、先程自分で、向こうは痛い嫌だろうから来ない、とおっしゃっていたではないですか。」

「そうだとしてもよ！来ても絶対人になんて撃ちたくないよ、私は！」
「ま、まずは撃たないで済むようにしましょう。そうする他ないであ

りますよ。」

「その為には話し合わなきゃいけない、と……」

全ての人の視線はみほの脇の拡声器を指す。

「みほりん、頑張ってね！頼むから！」

「私こういうのニガテなんだけどなあ……」

「落ち着いて言えば分かってくれますよ。同じ大洗女子学園の者同士で争うなど愚かであると。」

「ですが戦闘になった際真っ先に狙われるであろうのは、前方にいて、かつ戦車の指揮を執っている我々だと思いますよ。」

のぞき窓から外を眺めた華の目は動くことなく、言葉のみが3人に届く。

「ちよつと華、怖いこと言わないでよ！」

「なに、万が一戦闘になったら、ですよ。万が一。」

「とにかくさっきの澤殿の件は、向こうで判断してもらった方がいいと思います。」

「そうだね。小山副会長に無線が通じないから無許可になっちゃうけど、仕方ないか。沙織さん、また澤さんに繋げてくれる？」

「オツケー。」

しばし待った後、みほの耳にはさつき繰り返された声に戻ってきた。

「西住先輩、どうしましたか？こちらにはまだ相手らしき人はいらっしやっておりますが？そちら来ましたか？」

「いえ、まだです。こちらの要件はさっきの戦闘の許可のことなんです……申し訳ないのですが、そちらで判断してもらえませんか？現場を見ていない私が判断するのも難しいですし、こっちに集中したいので。」

「ですが、小山先輩の指示では……」

「澤さんがどうしても戦闘せざるを得ないと思えば実行してください。それをするのを私は今ここで許可します。」

「……良いんですか？本当に私が……」

「お任せします。勿論、戦闘は避けてください。」

「当然ですよ。」

「澤さんの方がお話するの上手いから、頑張つて説得してね。」

「はいっ！こちらの皆さんには私から話しておきます！」

「ありがとう、澤さん。」

「ありがとうございます！」

若干興奮気味な調子のまま無線は切られた。最後に吸った息を口をすぼめて細く長く吐き出す。

「これで校門側については一安心ですね。」

「あとはこつちの事もなんとかしたいんだけど……」

みほは再びキューポラから顔の上半分、次いで頭全てを外に晒す。辺りを見渡すが、いるのは緊張の面持ちでその時を待つ、皆同じような頭をした人の群れである。この中から、先程の佐渡という人間を抽出することが困難なのは明らかだった。

「んー……」

「みほさん、」

同様に頭上のハッチから顔を出していた華が、その首を後ろにひねりみほの方を向いている。

「来ます。」

「えっ？」

「力を持っていながら、それを誤った目的の為に使おうとする低俗な者たちの香りが。」

時刻は21時18分。演習場の林の向こうには確実に人がいる。姿が見える訳ではないが、漏れ出る足音や会話、金属音がそれを間接的に示す。グラウンドを照らすのは久々に灯された照明のみ。向こうの様子を眺めることは叶わない。

対してグラウンド側は何もできずにいた。向こうにいるのが蜂起するという風紀委員であるかも分からず、声がまともに届くかも分からない。

これは後ろの風紀委員も同様である。戦車が前にいる以上迂闊の前には出れない。しかも上からの命令で、さっきのことを伝えた以降

は西住みほと話してはならない、となっている。意味が分からないが、命令であるから仕方ない。

みほも佐渡も手段を打てずにいたところ、向こうの中から一人分の影がはつきりとしてきた。その者はフェンスを掴み、ひよいと乗り越えると、両手にそれぞれ何かを握りながら、みほらのいる方へ歩いてきた。その者の顔が光を反射する。

見たことのないクラスの人間全員の名前と誕生日を一致させられるみほにとって、一度会って正面から話したことのある人間の名を呼び起こすことは造作もなかった。

「嘉沢さん？」

「西住殿、あの人をどこ存知で？」

脇から顔を出して双眼鏡を通じて覗く優花里が返す。

「うん。一度だけ廊下で話しかけられたことがある。」

両足を揃え止まった。距離は60メートルほど。手に持っているのは右手に棒、左手にみほが持つのと同型の拡声器。頭にはおかつぱの広がりを抑えるように巻かれた鉢巻。左手を口の前に寄せた。

「……道を開けて貰えませんか？」

「……嘉沢さん。あなたは何の為にここに来ましたか？」

みほも口に拡声器を当てて返す。

「名前を覚えてくださっていたとは、ありがとうございます。私は、いえ我ら正統風紀委員会は、学園を、この大洗女子学園を取り戻す為にここに来ました。」

「……その為に、何をするのでですか？」

「時を偽り、皆を不安に陥れ、権限を更に強化しようとする生徒会を、我が校の民主的運営の原則を維持する為に打倒します。」

右

「……それが理由ならば、私はここを通すわけにはいきません。生徒会からそう指示を受けています。そして、速やかにここを立ち去ってください。」

「……」

左

「私は戦車道の選手として、学園の一員として、あなた方に砲を撃ちたくはありませんし傷つけるなんて以ての外です。理由がどうであれ今は補給の途絶えた危機的状況です。学園の内部で争っている場合ではありません。引いてください。お願いします。」

「……もし断ったら？」

「引くまで待ちます。」

少し右

「そつちに大挙して向かったら？」

「威嚇します。」

「それでも我らが一齐にそちらに走り出したりしたら？」

「……せ、戦闘を……」

「何ですか？よく聞こえませんか。」

「ここにいる戦車、それと風紀委員の皆さんに戦闘を許可して、あなた方を撃退します。」

「何の為に我らを撃退するのですか？」

「学園を守る為です。暴力的に進もうとするなら、止めます。」

左

「学園……それは現生徒会のことですか？」

「いえ。友達、私の戦車道。私の人生で大切なことを教えてくれた場所です。」

「場所は我らも残しますよ、戦車道も。そしてこのまま無抵抗で通していただければ、独裁体制を取ろうとしていた者らを除き罪には問いません。あなたの戦車の中の仲間も同様です。それでもあなたは戦いますか？」

少し右

「……総動員体制での生徒会の命令ですし、私は会長さんがおっしゃったことを信じます。ですが戦いなんてしたくありません。引いてください。」

「なぜ角谷さんの話を信じることができるのですか？」

「……どういうことでしょうか？」

「何を理由に、角谷さんが体育館で発表なされたことを信じるのか、そ

れを問うているのです。

あの場で示されたのは角谷さんの言葉と偽造なんて容易い紙切れのみ。そして電波、補給の停止、これらは角谷さんの言ったことに對する状況証拠に過ぎません。ましてやそれが我らが過去に行つたという奇天烈な考えのものならば、事実を示す証拠になり得ません。

ならば何故信じます？角谷さんがあなたが尊敬するに値する人物だからですか？尊敬する人が言うことなら、あなたは無条件で受け入れてしまうのですか？それがこの学園の伝統を破壊してしまうとしても。」

少し左

「そしてあの人が目的の為なら手段を選ばないことは身をもってご存知のはず。今回の総動員体制などのようにね。自由を抑圧し、生活を無闇に規制することが、良き将来に繋がるはずがない。

それでも、あの人の言ったことを信じますか？西住さん。」

しばし拡声器に拾われたのはみほの呼吸音のみだったが、やがて頷き返事をした。

「信じます。」

「何故？」

「……理由なんて必要無いからです。仲間との友情は、それだけで信じるに値します。」

「仮にその人がもたらすが、家族を、その他多くの夢を捨てさせるものだとしても？」

「はい。」

右

「……残念です、西住さん。あなたなら学園を纏めるのに相応しいのに。まあいいでしょう。それよりも後ろにいる奴らに言わねばならない事がありますから。」

嘉沢は右手に持つ棒の角度を上げ、声を一段と張り上げた。

「おい……そこにいる風紀委員を名乗る者ども！貴様ら何故そこにいる！あの時の演説を、あの時の宣言を忘れたのか！

生徒会の道を正す、風紀委員会が黄色く熟す、今は生徒会にお手を

しなければエサがもらえない立場に成り下がって二文字しか話せなくなつた奴が言つたことだが、それでもあの時の会場の一致は嘘か！生徒会の軛から脱しようとしたのは嘘か！

日本の学園艦であり続ける為に、互いを許そうとしたのは嘘か！無辜の学園艦の民が偏見や差別を受けることを避けようと言つた時、拍手をして賛同を示したのは嘘か！

それをあの角谷の言葉に委員長が同調しただけで真逆にひっくり返すとは、貴様らに、特に担当を率いる者に、意志は無いのか！」最後の方は怒鳴っている。拡声器を通じ、それは全校中に響き渡る。

話している間に奥のフェンスを演習場から出てきた十数人ほどが乗り越え、その前に並ぶ。

「意思がある者はこちらに来い。すぐに迎え入れるから、決意を示すこれを巻くといい。意思がなく、生徒会に擦り寄っていく風紀委員会が素晴らしいと思う者はこれから殴り倒されろ！時間はあまり無い。すぐに来い。」

みほが理解が追いつかずに茫然としていたところ、どこからともなく現れた佐渡が戦車に駆け上ると、みほの拡声器をひったくった。

「乳と蜜を垂れ流す娼婦は黙つてろ！ゴモヨ委員長をトップとする風紀委員会に加入している者たちに告ぐ。今から敵側に2歩以上担当長や私の許可なく歩いた者は許可なく殴り倒して構わん。」

「鞭を持った女王様気取りが何を言う！意思を持つ者よ、我らと共に行こう！」

「お前は担当長としてあのヤボクの話聞いていただろ！何故あれで満足しないのだ！状況証拠だけとはいえ少なくとも現実が宜しくない方に向かっていると分かるだろ！内部で戦っている場合じゃない！」

「誰があの風紀委員の担当長の癖して真面目の真の字も見せず、すきつ歯みみたいな話し方をする奴のことなんか信じるか！その危機に対する対処が誤っているから、戻れなくなる前に道を正すのだ！」

罵詈雑言が飛び交う中、みほはそれを無視して沙織を通じグラウン

ド側の各車に無線を繋いだ。

『西住隊長、どうしました?』

『これ、大丈夫じゃなさそうだね……』

『皆さん、落ち着いて聞いてください。これから威嚇射撃を行います。』

『威嚇、ですか。むしろ今の激昂している向こうを更に怒らせませんか?』

「理由は向こうが何かを待っている節が見られるからです。私と話しながら何かと左右を気にしていましたし、さつきも『時間が無い』と言いました。何か計画が組まれているのかもしれませんが。」

それが実行される前にここから退いて貰わなければなりません。ですので前にいる嘉沢さんと後ろに並んでいる人たちに対し威嚇射撃を行います。」

『なるほど。それでどうすればいいでしょう?』

「各車徹甲弾を使用してください。榴弾だと周りに影響が及びかねないので。あんこうがまず嘉沢さんに撃ちます。次いでアrikuiさんが嘉沢さんに、アヒルさんが奥の人たちに、最後にレオポンさんが嘉沢さんに撃ちます。」

無論威嚇ですので、当てずに近くに着弾させるよう注意してください。タイミングは任せます。あんこうに続いてください。」

『はい……』

『まあ、気をつけるよ……』

『精神的にクるけどね。当てないならいいよ。』

『では、お願いします。』

無線のマイクを切ると、車長の椅子から降りて目当ての砲弾を探す。

「優花里さん、威嚇射撃を行います。嘉沢さんに当てないようにしてください。」

「も、勿論であります……」

砲弾を抱えたみほはそれを砲の後ろに拳で押し込む。

「徹甲弾装填よし。安全装置よし。優花里さん、いけますか?」

「動かなければ……」

歯を食いしばり、照準器を見入りながらハンドルをゆっくりと回す。その手が止まった。

「幸いまだ言い争いに終始しています。今しか機会はありません……安
全装置解除……どうか、お願いします。」

広西大洗奮闘記 58 痛 怒 恨

IV号、発砲。轟音ののちに着弾したそれはあたりの土を巻き上げる。怒鳴っている途中だったのか、土煙を吸い込んでむせるのがかすかに聞こえる。優花里は狙い通り、当たらないけど限りなく近い位置、に着弾させたようだ。

引き金を引くのは久々なはずだが、やはり初めて乗って出来たように優花里にも天性の才能があるのだろうか。

「お見事。ありがとうございます、優花里さん。」

「いえ、それはいいのですが、西住殿……」

照準器に目を当てたまま優花里は口ごもる。

「どうしたの?」

「いえ、向こうの嘉沢殿、でしたっけ。こちらに歩いてきています。」

「……えっ?」

次いでアクリクイさんがその後方に撃ち込む。向こうが移動したため、若干距離が離れた。

みほはキューポラを開き、砲身が指し示す方に目をやる。確かに視線の先である少女、一步一步前進している。自身に向かって砲撃が行われているにも関わらず。

アヒルさんが後方の人たちに撃つ。これは人々の前方に着弾し、反射してフェンスに上手い具合に突き刺さる。だがフェンスの裏に戻る人は見られない。

10歩ほど進んだ嘉沢に向け、最後にして最大の威嚇が実行される。一際大きな砂煙が彼女の前進を阻み、全身を包み込む。確かに歩みは止まった。そして今しかこの言葉が意味をなす時はない。

みほはそばに立っていた佐渡に頼み、拡声器を返してもらう。スイッチが入っていることを確認し、口元に持ってきた。

「……これは警告です。今すぐに退いてください。次はありません。」

向くのは下。こちらを向く様子も下がる様子もない。両手には変わらず鉄の棒と拡声器。またむせるような動作を見せる。

「……警告、ですか。」

先程の怒鳴り合いが嘘のように声も小さく、トーンも低い。

「はいそうです。今すぐ退けば追撃などはしません。すぐに立ち去ってください。」

「……信じられますか。我らは戦う為に、まさにあなた方からすれば反乱にあたる形で行動を起こしています。独裁の安定を望む生徒会からすれば、退いた後徹底的にやることで、我らは逆らおうとする者への見せしめに丁度良い存在になるでしょう。追撃しないという選択肢はありませんし、我らも正義の為に退くわけにはいきません。」

「そんなのさせません！私は、これ以上人を傷つける為に戦車に乗りたくありません！もし生徒会がそんなことをさせるなら、私は逆に生徒会室に照準を定めさせます。」

「ふむ……出来ますか？今の我らにさえ威嚇しか出来ないあなたに、友のいる生徒会室を撃つことが。」

「……」

その言葉に返せずにいると、奥の森から甲高い金属音が辺りに響き渡る。こちらの何かしらの合図で無いのはもちろんだが、向こうにも反応は無い。

何れにせよ私はこの質問に答えねばならない。私が信頼に値する人物だと示さねばならない。

「……やってみせます、必ず。だからお願いです。これは生徒会とか関係なく、一人の大洗女子学園の学生としてお願いします。戦いたくないんです。」

「やってみせます、ですか……」

少し頭を捻る仕草をして黙り込み、しばらくして胸元から一枚の紙を出して広げた。

「西住さん、前に廊下でお会いした時にサインして貰ったこと、今ここでお話ししましょう。」

生徒会に対し力に対抗する者たちに対して生徒会が抑圧を支持した際に、隊長として協力しないことを約束する。

これを西住さん、あなたはこの紙にサインしました。どう見てもあなたの名前です。そして残念ながら、現状はその全てに違反してい

らっしやる。

そんなあなたが言うことをこの場で信頼しろ、というのはいくら何でも無茶です。戦車道は人の心を育てるものとお聞きしていましたが、その高校生の代表たるあなたがそんな人間だとは。

いや、そもそも戦車道そのものが、金を集め優秀な戦車を揃えれば勝敗まではともかく試合で優位に立てる、スポーツマンシップの欠片もないものでしたかな？そりゃあ大会で9連覇する学園なんかが出るわけです。だとしたら、残念ながら我らの学園で続けるわけにはいきませんねえ。

もう一度言います、西住さん。戦車を倉庫に戻し、無抵抗で道を開けてください。そうすればさっきの書面のことを履行なさったことにしましょう。戦車道も残しますし、今回のこと的一切、威嚇で私に向かつて砲撃を仕掛けたのも含めて水に流します。

しかしその場に残り我らの道を塞ぐというのなら、我らはあなたを含む戦車道の者らを敵とみなしてこの鉄の棒の鎊とし、独裁の進める者共を駆逐した暁には、保有する戦車の売却先を承認する権利を差し上げましょう。

では私は仲間に伝えねばならないことが有りますので、その間に戦車を移動させておいてくださいね。無論後ろから撃つ、という手段もあり得るでしょうが。」

それだけ言うと、反応も見ずに今度はみほらにその場で背を向ける。一つ咳払いして唾を吐き捨て、声の大きさを戻す。

「ここにいる正統風紀委員会の者に告ぐ。私は何故ここに立てているのか。あの土煙が登るほどの砲撃が近くに着弾する中、何故進めたのか。フェンスの内側の者らも、訓練を受けた風紀委員ではないにも関わらず、何故退かなかったのか。」

それは我らに現在の学園に逆らっても変えねばならない、という断固とした意思があるからだ！流されるままに、生徒会の金魚の糞に過ぎない奴らについていくだけの奴らとは訳が違う！

仮に奴らが真に学園を守ろうとする者なら、私は奴らの砲的になり、ここに立ち続けられないだろう。それに奴らを今ここでこうして

侮辱している間も、撃とうとも殴りかかろうとしないどころか、一部からは内部で殴り合う音が聞こえる有様だ。

腰抜けどもなど、一月近くこの鉄の棒を活用する訓練を受け続けた我々からすれば敵ではない！必ずや、我々が突撃したら混乱して逃げ出すだろう！そして全ての戦線で勝利し、その後学園に平和をもたらされるだろう。

諸君！時は近い！我々の学園艦が外国の所有物になるのではなく、真に日本のものとして留まる時が！角谷独裁政権が崩壊し、学園の智恵に溢れた学生による、真の民主的な自治が行われる時が！

それらは我々が突破し勝利することで手に入る。総員その時は全力でこの戦いに臨んで欲しい。

我々が母校大洗女子学園よ永遠なれ！」

嘉沢の右手の鉄の棒が夜空に向け突き上げられると、演習場から歓声とも叫び声ともとれる大きな音が木々の葉を揺らす。数は分からないが、一つのクラスよりかは遥かに多いことは明らかだった。

「総員指示があるまで、戦闘に備えよ！」

嘉沢が背を向けた後、みほは拡声器のスイッチを切ることもなく車長の席に座り込んだ。

「……みほりん……戦闘に、なるの？」

「沙織さん……取り敢えずこちらの車輛に繋げて貰える？」

「え？あ、うん、分かった……」

作業はすぐに済まされた。すぐに車長の声が耳に入る。

『西住隊長！あの人は何なんですか！いきなり出てきたと思えば西住隊長と戦車道を非難するとは！あんな人の言うことを信じるわけにはいきません！』

まずは磯部の怒声である。戦車道のスポーツマンシップを、ひいては自分たちのスポーツマンシップを否定されたも同然である。怒るのももつともだろう。

『でも、ここで倉庫に退いて中立に回るのも手の一つだと思おうよ……だって向こうが勝ったら戦車道廃止されちゃうんだよね。』

さらにこっち側のリーダーの人が指示した後、外から人が殴られるような音がするんだよ。こっち側、ボクたちが思ってるよりも統制取れてないんじゃないかな……』

『だとしたら逆に私たちを中心にここを守り切って生徒会に恩を売る、というのにも有りじゃない？向こうを信頼して負けられたら、生徒会から何されるか分かんないし。』

「……取り敢えずあんこうより各車に通達します。現状、申し訳ありませんが向こうに退いて貰うのは厳しいです。各車、機銃を使った戦闘に向けて準備をしてください。」

『了解しました！』

『まあやつときます。無論使わないといいけどね。』

みほの通達にすぐに反応したのは二人。しかし一人は即座に返さず、時を置いて尋ねた。

『西住さん、本気？』

「猫田さん？」

『本当に戦車で、人に対して弾を当てるんだよね？……ボクは皆さんより遅れて戦車道に参加したから気が引けるけど、それでも言わせてもらおうよ……』

西住さんの戦車道は、終わった後も楽しいんだ。相手とどんな事情が有って試合しても、結果的には仲良くなれたんだ。たとえそれに廃校がかかっているとしても。だから大洗は優勝できたし、あの北海道での試合でもみんな来てくれたんだと思う。

でも今回の戦い、戦闘は違うんだ。こっちが機銃を当てたら、非殺傷弾とはいえ相手は痛いし、下手したらこちらも殴られるかもしれない。それで残るのは痛みと怒りと恨みだけ。楽しさは生じないよね。本当にそんな戦いしていいのかな？戦車道の選手として。』

「……」

『あ、ごめん。言い過ぎたかな。でも戦闘する、というのは西住さんの本心なの？それを聞きたかっただけ。』

「……私は……会長さんは隠しはしますけど、嘘をつく人ではないと思います。体育館でお話なさったことも嘘ではないでしょう。」

私は生徒会を信じますし、その指示で嘉沢さんたちを退かせるよう
言われているなら、その指示通り動きます。」

『……それならいいんだ。ごめん……』

「いいえ。猫田さん、ありがとうございます。では繰り返します。各車、機銃での
戦闘に向けた準備をお願いします。以上です。」

『了解しました！』

『OK.』

『分かったよ。』

「通信、終わります。」

みほは無線のスイッチを二つとも解除し、頭の重さをキューポラの
枠に預けて一息つく。強気に言ってみたのはいいが、自身も心を決め
切れないでいる。本当に人に撃つ他無いか。キューポラから頭を
出して外を眺めるが、話は終わったようで嘉沢はこちらを見ながら仁
王立ちしている。退きそうにない。

『みほさん。』

「おわっ！」

急に入った無線はみほを驚かせ、椅子の上に戻らせる。

「は、華さん、どうしたの?」

『沙織さんと席を変わってもよろしいでしょうか?』

「華さん、無線使えたって?」

『沙織さんが一応各車に繋げたままにしておいてくださるそうです。』

「ならいいけど……どうして?」

『……私なら、躊躇いなく撃てます。みほさん。私は生徒会に加わり、
その一員として活動して参りました。はつきり申し上げます。あの
時、会長が体育館で申されたことに間違いはございません。』

私たちの学園は危機的状況です。一致してこれを使いこなさなければな
りません。彼女らがそれを乱そうとするなら、私はこれを潰さなけれ
ばいけません。それは総動員体制云々ではなく、私がここにいる限り
やらねばならないことです。

みほさん、やります。やらせてください。』

「……ありがとう、華さん。」

その時だった。その場が、その空間が一瞬にして暗黒に染め上げられたのは。グラウンドの照明はおろか、グラウンドを照らす役割の一部を担っていた校舎も暗く、その窓の位置すら見えない。自分の周りに空気を、足を通じ地を理解できるのみである。

あの時とは真逆の事態に、戦車道の者も風紀委員の者も混乱に陥る。みほは口の前に手を持ってきて鉄の棒しかないはずの左右を見回し、華が無線を弄ろうとするのを沙織が引き止め、優花里は持ち込んだカバンから懐中電灯を探すが、中々見つからない。

だが彼らの正面にいた者は冷静に、ただ笑っていた。

「くくく……予定より遅かったせいで待ち惚けを食らったじゃないですか……全く。では始めますか。」

右手の棒を一層力を込めて握る。

「きゅうり計画最終段階、黄熟作戦発動。」

左手の拡声器を口の前に当て、スイッチに指を掛ける。

「正統風紀委員会各員、攻勢を開始せよ！」

で挿絵を描けない作者の作画能力だとこれが限界だ。申し訳ない。

○は今正統風紀委員会のグラウンド突破隊隊長の嘉沢が立っている場所。

×は戦車がいる場所で、上から順にアリクイ、あんこう、アヒル、レオポンと並んでいる。そして戦車の後ろには、佐渡率いる風紀委員会のグラウンド防衛部隊が並ぶ。

口は見張り台のようなもの。アニメだと最初の練習の際に蝶野一等陸尉が判定を下していたところである。

ここグラウンドは、校舎や部室棟などの建物が並ぶ学園に於いて、唯一と言っていいほど大軍が展開可能な場所である。その点では数に於いて優勢な正統風紀委員会が有利であるが、一方戦車が出て来れる点でゴモヨ派側も有利である。これでグラウンドの状況はご理解頂けただろうか。

・と：は何も意味をなさない。ただハーメルンの投稿時に空白が詰まってしまうため入れたものである。

余談だが、図の「高いフェンス」の「い」の字辺りが、OPのあんこうチームの集合写真の撮影場所と思われる。

「西住殿！走って来てます！」

懐中電灯を取り出した優花里が横のハッチから僅かながら外を照らす。次々と風紀委員がフェンスを越え、みほらの方へ駆け出すのが音と合わせれば分かる。手にはやはり嘉沢のように鉄の棒が握られている。

もはや躊躇う時間はない。私が生徒会を信じるならば、私も生徒会から信じられる存在でなければならぬ。あの時の強気で自らそのものを引っ張らねばならない。みほは大きく息を吸い込み、咽頭マイクに指を当てて力を込めた。

「各車、戦闘開始ッ！」

IV号戦車 MG34

八九式中戦車 九一式車載軽機

三式中戦車 九七式重機関銃

ポルシエテイーガー MG34

日本とドイツの、前方に付く各車一つの機関銃が火を噴いた。フェンスからの距離は約100メートル。みほが息を吸い込む間に、第一波との距離は詰められていた。その人の群れに銃弾が襲いかかる。同時にいくつもの砲声も鳴り響いた。

暗闇の中ながら、左右に散らしながら撃てば当たるものも出る。非殺傷弾は死ぬような傷は与えない程度の威力である。一方モデルとなる機関銃の掃射範囲に一致するよう初速はそこそ高、ねこにやーが言ったように、当たれば痛みは十分与えられる仕様になっている。少なくとも、当たった部位によってはその場にうずくまる程度には。

銃声の合間から呻き声が漏れるようになった。それはただ痛みに耐えて呻いているものばかりではなく、確実に言葉として理解可能なものもある。

「痛いよお、痛いよお。」

「目が……目があー」

しかしキューポラの下、ヘッドホンで耳を塞いでいたみほにはそれは届かなかつた。

戦車に搭載された機関銃は正面への対処が元々の存在価値であり、基本的にあまり左右角を広く取れない。そして50メートルを優に超えるグラウンドの幅に対して戦車は4輦しか無いため、結果戦車と戦車の間には三角形の安全地帯が生まれる。そこに入れた正統風紀委員は前進して突破しようとするが、ゴモヨ派風紀委員がそれを塞ぎ、多数の棒による殴り合いが勃発する。

殴り合いになれば若干正統側が優勢である。きゆうり計画の為にこの一月鉄の棒の使用訓練を受けた者が、多くこちら側に付いているからである。対して戦車は周りにゴモヨ派がいるため、安易に動けない。

「食い止めろ！そこからこじ開けて機関銃の射線に押し出すんだ！」

「ここで突破出来ねば、この学園に未来は無いぞ！それを邪魔する者は躊躇なく殴り倒せ！進め！」

「戦車に近づけ！奴らを止めろ！1輦でも止められれば行ける！」

配置された中の指導者に位置する者らが、双方共に声を張り上げる。機銃による損害で優位が削がれ、正統側も押し込めずにいる。だがゴモヨ派もそれを押し返すだけの練度はない。

華も暗闇の中間こえる半ば悲鳴に近いもののみを頼りに、左右に銃弾をばら撒く。懐中電灯の明かりもない今、本当に照準が水平になっているかは分からない。だがそれよりも銃弾の装填の間の空き時間等も考えると、火力が不足している。

「優花里さん！砲塔の機銃で支援をお願いします！」

「五十鈴殿？」

「火力が不足してます！向こうの突破と戦車への接近を防いでくださいー！」

「しかし俯角の関係で遠距離しか出来ないでありますよ？」

「構いません。どうせ遠くには蜂起勢しかいないんですから。」

「そういうことなら、支援しましょう。」

優花里も最大限砲を下に向け、見えないながらも掃射を開始した。そしてそれに合わせ叫び声も大きくなってきていた。しかしみほには分からない。ただヘッドホンの隙間から少しずつ痛みに苦しむ声があったが、次に入ってきた音声はそれを塞いでしまった。

『西住隊長！こっちに相手がたくさんいて、捌ききれいていません！』

「磯辺さん！大丈夫ですか！」

『一応大丈夫ですが、どうやら近くを守っていた人の中で混乱があったようで、押されています！増援を！このっ！』

何かが削れたようだ。

「で、ですが戦車を動かすのは……無線も、今は華さん手をつけられないしし……」

『拡声器、持ってらっしゃいませんか？それで呼んでください！』

「わ、分かりました。直ぐに。」

みほは近くに落としていた拡声器を拾い上げ、キューポラから顔を出した。

「えっと……ふ、風紀委員の方、アヒルさんチームの方を助けてあげてくださいー！」

とにかく後ろを向いて、機械を通して声を出した。ところが自分の手のひらさえ見えない世界ではそれが届いたか目では、無論鼻と手と口では確かめられない。反応を聴く為に耳のヘッドホンを外す。しかし足音なんて確認しようがなかった。

「ガハッ……」

「そろそろ目は慣れたか！何としてもここを通すな！」

棒のぶつかる金属音。戦闘が始まる前に聞いたものより遥かに大きくなり、あちこちから耳に突き刺さる。

「アグッ！グボツ……ゲエエ……」

「突け！腹とか弱いところを突いて行動不能にしろ！振りかぶるのは隙が大きすぎる！」

「はあ……はあ……」

苦痛の呻き声は銃声や砲声などに混じってであるが、初めてみほの耳に入った。機銃の装填の合間、その音はいつそう大きくなる。

「ぐああ……」

「足をやれ！とにかく人の山を築いてでも止めるんだ！」

金属音が激しくなれば、鈍い音の鳴る頻度も高くなる。その主がどちら側だとしても、多くの犠牲が生じているのは明らかだった。

固まった。これに私はどう反応すればいい？怪我する人が多く出ているのを悲しむべきか、こんな事態を引き起こした向こうの人たちを非難するべきか……それとも……ここで人を傷付けている私たちを非難するべきか……

耳元を過ぎる風のようにただ銃声や砲声を通り抜け、布団に入っただぐのように目の前は真っ暗。ヘッドホンを首に巻き、キューポラの棒で身体を支えながら、立ち尽くす。

『……みほさん。こちらの人数、明らかに減ってます。』

「……」

『みほさん？』

「……ああ、すみません。どうしました？」

華の報告によりヘッドホンが首の後ろに震えを伝えた為に、幸いその意識の喪失は直ぐにゆり戻された。

『こちらの人数が、機銃からの反応からして減っています。下手したら今射線上にいないかもしれません。』

『五十鈴殿の言う通りです。』

『そ、それは向こうが退いてるってこと?』

『いえ、恐らくは……あんこうが二つ機銃を使っていると知って、他の箇所からの突破を狙っていると思われれます。』

『そうになると、前方に一つしか付いてないのは、八九式と三式でしょうか?レオポンさんが一つしか使っていない可能性もありますが。西住殿、そこ確認していただけますか?』

『あ、分かった。でもさっきアヒルさんの方に増援を頼んだから、そっちには行かないかも……だとしたら、アリクイさん?』

『とにかく各車の現状は確認したほうがいいであります。』

『うん、分かった。』

二つのスイッチを押し込んで、まず繋がるはナカジマである。

『あ、西住さん?』

『ナカジマさん、そちらの現状を教えてください。』

『現状?といっても機銃で……ああそうだ。ホシノ曰くさつきより敵に当たってる感じがしないってさ。周りも突破されてはないし、取り敢えず無事だよ。』

『ありがとうございます。向こうがまた来るかもしれません。引き続き警戒しておいてください。』

『勿論さ。』

『お願いします。以上、通信終わります。えっと、次はアリクイさんに』

『進めえー!』

耳を塞いでいてもはつきり分かるような大声がした。周りの金属音が弱くなったらからかもかもしれないが。

『えっ、何事!各車警戒を』

声の主は、間違いない。嘉沢だ。それに気づいたと同時に、通信が入った。

『に、西住さん……』

「猫田さん！」

『こ、こつちに……来てるんだ……敵……』

「本当ですか！対処は！」

『薄っすらと見えてる感じだと……今はギリギリ耐えてる。でも機銃の装填の間に、確実にこつちに近づいて来てるんだ。』

「で、でしたらまた増援を頼んで……」

『……ちよつと手が離せなくなりそうぞな。』

「猫田さん！」

『ボクとびよたんさんでなんとかするよ。』

「何とかって、えっ？」

聞き返すが、唾を嚙下する音のみが一回返された。

『一つ聞いていいかな？』

「何でしょう？」

『ここでは何をしても許されるのかな？』

「……私たちが結果的に彼らをここから退かせられれば、それに必要なことだったとされるでしょう。」

『で、その為には学園の校舎内に侵入させない。すなわちここを突破されないのが必要不可欠と。』

「その通りです。」

『……こういう戦いは、片方が諦めるまで終わらないと思うんだ。そして向こうは勝利を諦めることはできない。負けた時どうなるか分かっているからね。こつちも、負けられない。理由は言うまでもないね。生徒会の話云々を抜きにしても。』

僅かに響きが伝わる。それとねこにヤーのマイクがずれたようだ。

『だからボクが自らを危険に晒すことを、許して欲しいんだな。』

「……」

答えられなかった。いや、答えても意味がなかったというのが妥当か。その直後、ねこにヤーのマイクとヘッドホンは、ねこにヤー本人に一切の音を伝えることはなかったのだから。

みほはこの暗黒を恨んだ。出来るなら自分も飛んでも助けに行きたかった。明るくて周囲の状況が把握可能なら、再び助けに向かっ

ただろう。しかし足場も満足に見えないここでは危険過ぎるとい
他なく、前から来ていないか確認すべく、ぼやける正面を眺めるしか
なかった。

「びよたんさん。いける?」

半身をすでに乗り出しながら聞く。

「もちろんなり!夏からの訓練の成果を役立てる時がきたびよ!」

びよたんは右腕の袖を捲り上げながら応じる。

「西住さんから許可はもらったんだ。ももがーさんは引き続き撃ち続
けて欲しいんだな。ボクら二人はそれを守る。こつちに視線を引き
つけて、突破しようとする圧力を減らそうと思うんだにや。」

「了解なり!残弾はなんとかなるもも!」

「了解っちゃ!」

ねこにやーがコードの付くものを取り払うと、キューポラから続い
てびよたんが準備を整え、戦車の上に姿を見せた。

「ボクが右、びよたんさんは左で!」

「背中は任せたびよ!」

もう鉢巻を巻いた者らは足元に迫っていた。

言葉の通りねこにやーが右側、びよたんが左側に陣取った。びよたんは足元の機銃の銃口に注意しつつ、車体のその銃口の上に少し足を開いて構える。それを気にしなくて良いねこにやーはそこから一段降りて余裕を持って構えた。砲撃の音は変わらずである。

「ねこにやー……めんどくさい方私に押し付けたぞな？」

「何のことかにや。こつちの方が機銃の援護がないからやりにくいから、変わんないんだな。それより、もう来てる。」

風紀委員は鉢巻を巻いた者らにじりじりと詰め寄られていた。ねこにやーの足元にいた一人の風紀委員が肩に一撃を喰らい、その場にうずくまってしまった。その殴りかかった者はすかさず三式に登ろうと片足を掛けた。

ねこにやーの腹の辺りに向け鋼棒が突き出される。それを左肘で先を逸らせ、右腕の関節にストレートで拳を当てる。バランスを崩したその者は左足を戦車に乗せる前に落とされた。

肩に相応の痛みはあるはずだが、チャンスと襲いかかった風紀委員を庇いながらもあしらい、風紀委員は背後のもう一人に殴り倒された。

「戦車に乗り込め！機銃を止めるぞ！」

先程の者が肩を抑えながらねこにやーの方に棒を向けて叫んだ。眼光凄まじく、口に見える歯は破片でも飛んで来そうなほど硬く食いしばられている。

合図と共に周りから計二人登ってくる。近くから来た一人は足に攻撃してきたのでそのまま蹴り落としたが、他の一人は車体の上その両足を置いた。

半身になり棒の先をこちらに向けて構えている。後ろから次々来ていることを考えると、時間を取られるわけにはいかない。しかし敵もそれを分かっているのか、攻撃を仕掛けてこない。ならば乗せられているのが分かっているても、こちらから攻める他ない。

初手に突き出ている肘を狙うが容易く躲され、距離を詰めるとすぐ

に首を突いてくる。それを交わし顔面に拳を当てようとするが、頬を掠っただけに終わる。その間に相手は首に当てた棒を引き抜き、突き立てようとする。だが、間一髪で右腕でフックを放ちヒットさせることに成功した。少し腹に当てられたが、腹筋で何とか堪えた。

フックでバランスを崩した相手は、唾を吐き出しつつも何とかその場に足を留めた。その間に別の者が乗りかかろうとしたので、これを肘であしらう。

その僅かな間は戦車の上に立つものに十分な時間だった。

「……い……ん……か……」

ねこにやーの方に合わせていた視線を外し、右足の足元の音源に目を向ける。砲を跨いで反対側に行こうとしているが、ぴよたんはこれまた攻防を繰り返しており、対応出来そうな余裕はない。

一步前に出た。僅かな機会。相手に一撃をも食らわさずして背中を見せた。そして向かう先には止められてはならぬもの。行くしかない。

振るわれた拳は鈍い音を立てて後頭部、皮膚の裏に脳幹がある部分に命中した。激痛に気を取られるうちに砲を軸にして回転し、機銃の真ん前に落ちる。

「ぎやあああー」

結果腰と背中中に弾を少なくとも5発は受けたその者は、転がりながら戦車から落ちた。

すぐに振り返り登る者が居ないか確認する。三人ほどこちらを見ているが、一步距離を置いている。

この後一人だけ三式に足を踏み入れた者が居た。その者はねこにやーの脇腹を殴りつけたが、その後すぐ蹴り落とされた。それ以降、鉢巻を巻いた者らは一人分隙間を空けて見張るのみだった。無論、さらに足場の狭いぴよたんの方へ上がり、まともに痛撃を食らわせることが出来るものも居なかった。

三式の方面は危険であったが、幸いにも機銃のお陰で大軍の来襲は防げていた。八九式の方面は増援もあり押し返すことが出来、またI

V号、ポルシエテイーガーの方面も問題なく対処出来ていた。また三式の方面も、音がそこからしか聞こえなくなれば真つ暗だろうと分らないはずがなく、既に増援が着いており、戦車は止められても数が減った正統側では突破は困難であった。事実、三式に最後の人間が乗り込んですぐ、正統側の前進は止まった。

そして運悪く、ここで急にグラウンドの電力が回復した。煌々とグラウンドのザラザラした土地を照らす照明。数多の影が生まれ、曖昧だった情勢が鮮明に映し出された。

一度全ての人間が目を抑えたが、すぐにそれぞれ行動を再開する。だが先程までと比べて正統側の抵抗が弱い。三式周辺で突破を図って側面より奥に進出していた者らも、間もなく叩き出された。他の箇所もほぼ押し返しており、戦局は完全に戦車道とゴモヨ派側が有利となっていた。

だがキューポラから身を乗り出したみほの目に入ったのは、IV号の正面から扇状に広がる人間達の群れだった。皆生きている。ただ、死んではいけないというだけであるが。

ある人間は棒を握り締めながらうつ伏せに倒れ、両足から血を流している。立とうにも力が入らないようである。それでも顔を伏せたまま這ってこちらへゆつくりと近づいてきている。

別の人間は棒を手放し、倒れ込んで右腕を抑えながら唸っている。間もなく左手で棒を掴み直し戦闘の真つ最中に突っ込んだが、すぐさま返り討ちに合う。

また棒をだらんと垂らし、ふらふらと頭から血を流しながらも一人こちらへ近づく者がいたが、すぐに華の機銃の的となった。

他には吐瀉物を近くにして立ち上がろうとするが、目眩でも起こしたか何度も立ち止まってしまう者。そのまま座り込んでしまう。

その他にも多様な事情をもってそこに居続ける者が、IV号の前にはごろごろいた。

『優花里さん、こちらは大丈夫です。機銃はアリクイさんの方へ！』

「了解であります！」

機銃の引き金を握る二人は、もはや戦闘の興奮に吞まれていた。砲

塔がみほとともにゆっくりと反時計回りし、砲の角度が少し上がってから再び火を吹いた。そして後方にいた者らが次々と餌食になっていく。

ここは本来なら喜ぶべきだろう。相手が倒されこちらが押せば押すほど、任された指示を全う出来て戦車道を残せるのだから。しかしこの群れを見ると思わずみほは口を押さえた。見ていられなかった。吐くことはなかったが、喉の奥をずっと弱々しく弄られ続けていた。

一人の鉢巻を巻いた女が優花里が狙っていた群れから押し出された。顎の下を拭ってから女が顔を上げる。みほと目があった、片目だけ。それが自身が戦闘を命じる前に話していた女だと確信するまで少し時間が掛かった。

みほはそのただ一つの瞳から顔を背けられなかった。何かに取り憑かれたのか、眼球と首が回らない。

バケモノであった。

顔そのものから、身体全体から恨みと怒りをぶつけるバケモノであった。そうとしか表せない。

それがこちらに走り出してきても、意識は合わせられる小さな黒い点に集中させられた。華が機銃で狙いをつけてぶっ放す。だが動じない。止めようと出てきたゴモヨ派の者を躊躇なく殴り倒しながら、弾がかすった足から赤い滝を創りつつ迫ってきていた。おまけに今まで倒れていた者たちの一部や周りから出てきた者がそれに続き、華はそちらにも気を取られることになった。

その呪縛から解き放たれたのは、相手が身体全体を声帯として叫んでいたからである。

「西住い、みほおおー！」
と。

しかしその時にはもう、そいつはIV号の操縦席の上に足を載せていた。鉄の棒は今まさにみほの頭上に弧を描き振り下ろされようとしていた。みほはとっさに右手に持っていた拡声器を頭上に当てる。

物体同士が激突する音が響き、額左に鉄の棒を通じて拡声器のマイク部分が叩きつけられた。痛みと引き換えに鉄の棒の勢いを削ぐこ

とに成功し、柄と本体との間にある窪みで棒を受け止めていた。だが相手はみほから目を逸らせること無く両手で鋼棒を力強く押し込こんでおり、幾ら戦車道で鍛えた腕力で防ごうとしても拡声器はジリジリと顔に近づいてきた。拡声器は軋み始め限界が近いことを示していた。

「西住みほ……せめてお前だけはッ……」

鉄の棒が拡声器から離れる。一步引いてから、次の攻撃が打ち出されるかと思われた。みほは無意識のうちに目を閉じた。だが、鈍く重い打撃音はしたが額に軽い痛みを感じる以外に何もなかった。不思議に思ったみほがうつすら目を開けると、相手はみほが痛むのと同じ場所を押さえていた。宙を舞っていた物が車体の上を転がる。鉄の棒より少し短い。

「西住殿から離れる！」

砲塔側面のハッチから顔を出した優花里の右腕は、そいつの顔の方に向けられていた。そいつは視線をみほから優花里へ移した。

「黙ってる！」

そいつが振り落す鉄の棒は優花里の頭蓋を叩き割ろうとしていた。だが優花里は車内へ勢いよく身を隠したため彼女の頭ではなくハッチを変形させるに留まった。

「嫌っ！」

拡声器はそいつの右側こめかみに食い込んだ。そのうえ優花里を殴るために重心が左側へ寄っていたのも相まって、相手はIV号から足を滑らせ頭から地面に衝突した。

「捕らえろオ！」

すぐに近くにいたゴモヨ派の風紀委員が群がり、そいつを取り押さえる。うつ伏せにして鉢巻を外す。

「カナン！確保オ！」

尻に乗り鉢巻で両手首を縛った人間が肩甲骨のあたりを抑えながら叫ぶ。その時、ギリギリで保たれていた戦線の堰は、一気に破れた。

誰が言ったか、誰から行動したかは分からない。鉢巻を巻いた者達は残置せざるを得なかった者達に目を向けることもなく、蟻が行列の

近くで足を鳴らされたかのように、てんでばらばらに戦車に背を向けた。ゴモヨ派の風紀委員はすかさず追撃を開始する。もはやどの戦車も機銃を撃つ必要がない。砲撃の音も止んでいる。

間も無く、グラウンドにて頭に鉢巻を巻いている者のうち、まともに動ける者は居なくなつた。ゴモヨ派が佐渡の合図の後に、勝利の喜びを示す声を轟かす。

みほはそれには従わなかつた。ただ呆然と額左側の痛みと右手に持つ拡声器の感触に全てを委ねていた。正面には先程よりも多くの者が地に伏せている。

耳から入る各車長からの喜びや祝福。戦車の周りにたむろする風紀委員からの感謝。それらは半開きの口からすぐに漏れ出ていった。

みほは途端に足腰の力が抜けてしまい、紐の切れた操り人形の様、勢いよく椅子に座りこんだ。するとどこかに当たつた訳では無いのに関わらず、手に持っていた拡声器の柄から本体が外れ車体の上へ落ちていった。その時割れたのは、拡声器だけではなかつた。

広西大洗奮闘記 61 空を舞う

保健室のベッドではとても足りない。防災倉庫から毛布を取り出し、教室の机を下げて怪我人のために敷いていく。その上に寝られるのは半数よりも下である。

「報告によりますと、怪我人はこちら側が42人、蜂起勢は60人を超えます。これは捕らえたうちの怪我人の人数のため、逃げたものを含めればもつと増えるでしょう。」

「重傷者は？」

「骨折、頭部の負傷は計27人。内臓をやられた者が計5名。病院行きの者は以上です。病院の受け入れはすでに完了しています。」

「……そうですか。死者0で良かったですよ、本当に。だけど医療品の消費が……」

ゴモヨからの報告を受けた小山は、ほっとする一方大きな問題に頭を悩ませる。

「これからの薬の購入先も無いですし、広東から買ってもいくらふっかけられるか……」

「……誠に迷惑お掛け致しました。」

「まあなつてしまったものは仕方ないです。問題はこつからです。何せ今日あと1時間ちよつと経てば選挙が始まってしまいますから、そこまでゴタゴタを引つ張るわけにはいきません。それで蜂起勢への対処は？」

「はい。只今向こう側に付いた担当を元に搜索をしております。今回の被害を見るに、再起できる力はないと思われる為、徐々に炙り出していかうかと。動ける者は調査に乗り出しています。」

「かといって、逃げたのはこつちにいるのよりも多いと聞きましたけど……」

「捕らえたのは87人。確かに逃げている人数の方が多いと思われるますが、向こうの幹部層への調査の結果、指導的役割を果たしていた3人のうち1人を捕らえることが出来たので、頭は削げたかと。それに今学園にいる者のうち、こちら側の者は早急に回復出来るよう取り計

らっていただけだったので、万が一もう一度来ても対処は十分可能です。」
「成る程。ではこれから蜂起勢は学園の教室内に監禁とするので、その見張りをお任せしますね。あと今後の対応も一任します。また今回のような件を起こさないでください。」

「分かりました。では風紀委員に指示をして参ります。」
「お願いします。」

ゴモヨが生徒会長室のドアノブに手を掛けると、ノックが帰ってきた。ドアを開けて立ち去ると、そこには生徒会の者が立っている。

「丹波さん、どうしました?」

「副会長、選管の岩城さんがいらっしやってます。」

「呼んでください。すぐに終わるでしょうし。その間に今回の被害を簡単に纏めてきてください。」

「はい。それではお呼びしますね。」

間も無く、一人の女子が綺麗に最敬礼してから丹波の促すまま入った。小山は席を立ち手を差し出す。

「本日の選挙を執り行います、岩城です。よろしくお願い致します。」

岩城は眉ひとつ動かさずそれに応じる。

「ええ、よろしく。」

「選挙に関して確認に参りました。投票時間は8時から20時まで。体育館を投票所として行います。また公正を期す為、本日の選挙活動は一切禁じられております。そのところ特に心に留めておいてください。」

「勿論です。話は以上ですか?」

「あとは誘導ルートが変わるくらいでしょうか。何れにせよ一階で完結させます。それにしても、昨日の夜学園の方が煩かったのですが、何かあったんですか?」

「いえ、単なる喧嘩です。」

「……随分と壮大な喧嘩だったんですね。」

「ええ、本当にもう。まあ、選挙には影響ないと思いますよ。」

「それなら何よりです。では私はこれで。本日の選挙が大洗の未来にとって実りある結果を導きますように。あ、そうだ。投票箱のチェツ

ク、なさいますか?」

「いえ、忙しいので結構です。今日は頑張ってください。」
「投票よろしく願います。」

再びきつちりと礼をして、岩城は少し駆け足で部屋を出た。それと入れ替わる形で丹波がメモ帳片手に小山の前に来た。

「集まった今回の被害に関する報告です。まずは怪我人、」

「それはさつき後藤さんから聞きましたから、他のお願ひします。」

「あ、これは失礼を。では建造物への被害です。今回の被害は校門周辺のタイルと壁、そして門そのものが破壊されました。戦闘の状況から戦車による砲撃によるものと思われまます。」

「澤さんの方ですね。で、修復は?」

「今後の島の開発等も考えると、瓦礫をどかしたら放置が得策かと。あとは校舎の窓が一箇所破損しました。こちらは破片を片付けたら木の板で塞ぐ予定です。」

「グラウンドの方は?」

「こちらは幸いにも一部の演習場側のフェンスが損傷している以外は被害はありません。まあ血痕などを除けば、ですが。」

「……それは処理したほうがいいですね。」

「捕まえた蜂起勢を使って処分させようと考えています。」

「では回復した人が増えたら、見張りをつけて実行させるよう風紀委員に指示を。」

「はい。あとは戦車の損害です。といってもIⅤ号のハッチがへしやげたのと、三式の砲が歪んだことの計2点です。」

「校門側はともかく、グラウンドもそれだけなのですか?」

「結局あまり接近出来なかったんでしようかね?まあ、当面戦車道はしないので問題無いかと思いますが。」

「そうですね。被害は以上でしょうか?」

「そうですね。まあ、この後始末は原因となった風紀委員に押し付けましよう。こっちは島関係で手一杯ですし。」

「そうしますか。」

「あと被害とは別でもう一件ございまして、今回のことを公表するか、

するとしたらどの程度まで公表するか、決めて欲しいそうです。」

「ふーむ、話して損はないですね。こちらが勝ったんですし、生徒会の威信を高めるには悪くない材料ですしね。せっかく医療品ばら撒いたのですから、十分に利用しなくてはなりません。」

「公表しますか？」

「他の生徒会の人にも確認した上でもう一回来てくれますか？私は賛成だけ。」

「あ、分かりました。あと他に確認してくることはございますか？」

「うーん……無いですね。ちよつと出かけてくるので、目を通して欲しい書類があったら机の上に置いて欲しい、とだけお願いします。」

「どちらに？」

「戦車道の方への挨拶と風紀委員会の方への見舞いに。」

「分かりました。失礼しました。」

一言メモを取ってから早速丹波は部屋にいる生徒会の者に確認を始めた。小山は立ち上がり、窓側に顔を向けた。明るくなってからしばらく、本日は雲が張っている。11月12日月曜日の平和の始まりである。

朝、そこには男らと二人の女が並んでいた。

広東からは陳済棠と繆培南、字経成。他の者は残って、余漢謀は紅軍追討の為に戻った。

広西からは李宗仁。白崇禧は報告も兼ねて広西に帰った。流石にもう一人付き添いと呼ぶ時間は無かったようだ。

そして女二人、角谷杏と冷泉麻子。彼女らは案内されるままホテルから馬車に乗って運ばれてきた。ここから向かうは南京、中国国民党第五次全国代表大会が行われようとしているその場所である。

彼らが現在いるのは、これまでの舞台であった中心地の現越秀区や海珠区、それに黄埔区といった珠江河口から少し登った所よりもやや北にある白雲飛行場である。

「……」

「What do you do？」

(何しているんだい?)」

黄金色の機体を前にして角谷がただじつと眺めていたため、陳が声をかけた。

「What is this?

(これ、何です?)」

「Airplane. Go to Nanjing by this.
Ride on it from there.

(飛行機さ。これで南京へ行く。あっちから乗ってくれ。)」

「……OK.

(……分かりました。)」

羽の付け根に梯子を立てて、開かれた扉の中に男から入っていく。最後に少し足を震わせながら麻子が乗り込むと、係りの者らしき人間が音を立てつつ扉を閉じ、ロックを掛けた。

「Thank you for coming here.

(来てくれてありがたい。)」

最初に乗り込んだ陳は、先頭近くでパイロットらしい西洋人と握手を交わす。

「Leave the trip to me. May I come to Dixiochang airport?

(私に任せてください。大校場飛行場まででよろしいでしょうか?)」

「OK. I'm counting on you.

(そうだ。よろしく頼むよ。)」

席は中央の通路を挟んで片側に1列5席並んでいる。前の2席を空けて、右手側に女子が腰を下ろした。

「Everyone, please lock your seat belt.

(皆さん、シートベルトを締めてください。)」

操縦士が各席を見て、ベルトを持ち上げて締まりを確認する。全て安全だと判明すると、操縦士は扉の前で敬礼し、その向こうに消えた。間も無く、アナウンスが入る。

「Good morning, ladies and gentlemen

emem. Welcome aboard China National Aviation Corporation to Nanjin. Your pilot today is me, Captain Allen Brown. Our flight time to Dixiōchāng Airport is expected to be 4 hours. We hope you will enjoy your flight with us.

(おはようございます、紳士淑女の皆さん。中国航空公司、南京行きをご利用頂き、ありがとうございます。本日のパイロットは私、アレックス・ブラウンです。大校場飛行場までの飛行時間は4時間を予定しております。それでは皆さん、快適な空の旅をお楽しみください。)

機体が揺れてエンジン音が鳴り響き、黄金色の鷲は地上を滑らかに滑る。一度停止すると、そこからさらにエンジンとプロペラを回転させ、揺れる滑走路からふわりと空へと旅立った。窓の外から見ると、地上の滑走路は小さくなり、果ては広州の市街までも窓の枠からはみ出した。

だが後ろの人間は窓を閉め、歯がすっかり噛み合っていないかのような音を立てる。

「冷泉ちゃん、大丈夫?」

「……」

変化なし。

「冷泉ちゃんって、高所恐怖症だっけ?」

上下に動かされた首が、それが正しいと示している。

「悪いけど我慢して。一緒に来てもらわないと困るから。」

「うう……」

本当に、間違えていたかもしれない。まあ飛行機に乗るとは思ってなかったから仕方ないけど。

「Is she all right?」

(彼女は大丈夫かい?)」

「Maybe。」

(多分。)

一度耳抜きをしてから窓の外を眺めると、もう視界の上半分以上は白く波打つ海であった。その水平線の奥を目を細めて除くが、残念ながら学園艦の情勢は見えない。

「……」

「……不安か？」

「多少は。」

「流石に私らの戦車道を舐められても困るんだがな。」

「だけど戦車道じゃないからねえ。どう転ぶか……まあ戦いになつてたら、それと峠ちゃんか勝つと信じてやってくしかないんだけどさ。」

「それより大丈夫なんだろうな、この飛行機。」

「いや、幾らなんでも陳さんとか要人乗せてるんだから大丈夫でしょう。この時期なら既にアメリカではリンドバーグがパイロットとして就職できるくらいは旅客機飛んでるし。なんなら聞いてみるよ。」

Excuse me, Mr. Cheng.

(チエンさん、すみません。)

「What？」

(何だね?)

「Where is this airplane from？」

(この飛行機、何処のですか?)

「Boeing, in USA. According to what you heard, we were able to buy it at a moderate low price by the result that it was hard to use this for in the USA.

(アメリカのボーイング社のだ。聞いたところだと、アメリカではこれが使いづらかったらしくて、こちらはそこそこの安値で買ったそうだ。)

「I see. Thank you for your explanation.

(そうなんですか。説明していただきありがとうございます。)

ほら、大丈夫だったでしょ。」

「……ほんの少しは安心できた。」

「んじや、適当に過ぎしといて。私は今後の体制について書類、南京行くまでにもう一度目を通しとくから。なんなら南京語の本有るけど、見る？」

「いや、酔いそうだからやめとく。それに飛行機の中じや捗らないしな。」

「あ、そう。」

角谷は頭上にかざしていた本をカバンに戻し、閉じられた書類を膝の上に置いて、パラパラと中に目を通し始めた。

戦車道の者らは体調に万が一があった時のために、校舎内の教室に二つに分けて待機させていた。無論午前うちに返すつもりである。その片方を部屋の、階段に近い方の扉の前で、肩に鞆をぶら下げた小山は足を揃えた。扉の前に手の甲を向け叩こうとしたが、それを直前で止めた。中から聞こえる幼い声に耳を傾けた。

「……本当にやるの？」

「うん。そうする。」

「やめた方がいいと思うけどなあ。」

「なんでやろうとするの？」

「……夏にも思っただけけど、やっぱり私、ここもみんなも好きなんだ。でもそれが今大変なことになってる。学園艦の下の方から音がするようになったし、きっと私たちの知らないところでいろいろと話が進んでるんだと思う。」

だから私も出来ることで協力したい。だけど戦車道は多分ここでは通じないから、その経験が使えるような今回頼まれたことを受けたいんだ。」

「でもそうすると、移設するとかいう島には行かないんでしょう？それに軍人になるってことは、下手したら死んじゃうかもしれないんだよ？いいの？」

「士官は前線に行くわけじゃないから大丈夫だよ。さすがに女子高生をすぐに送り込むこともないだろうし。それに休暇がないってこともないだろうから、暇がもらえたら帰ってくるよ。」

「……」

「……そこまでやろうっていうならいいけど、一つ約束してくれる？」

「何？」

「何かあったら絶対私たちに言うこと！特に梓は真面目に考えすぎる質なんだから。必ずだよ！必ず！」

「あはは……分かったよ。」

会話が少し途切れた時を待って、手の甲を前方に数度倒した。一言

告げてから部屋に入る。なるほど、うさぎさんチームは扉の近くに居たのか。あまり大きな声ではないと思っただけだ。

「小山さん。」

部屋で適当に席についていたものの視線が、一気に小山に集まった。困惑、興味、そして数少ない無関心が混在している。

「皆さん、気分が悪いなどはございませんか？」

一応確認しておく。こちら側では身体的な傷は無いはずだが、精神的なものなら想定し得る。だが幸いそこにいる顔を見る限り、特に問題有りそうな者はいない。

顔を眺めつつ、小山は部屋を歩いていた。立ち止まると周りの机をいくつか退かして、周りの座った人間からも小山が視認できるようにした。床に膝をついた。

「本当に、ありがとうございました！」

急にその部屋の全員に向けて頭を下げた。勿論全員啞然とその背中を見つめていた。

「……どういふことでしょうか？」

その中で最初にまともに反応したのは澤である。自身の座っていた席から立ち、小山の方へ歩み寄る。

「……今回の防衛、実はかなり厳しかったんです。校舎内への侵入を一部で許しましたし、グラウンドでも西住さんが負傷する程際どい戦いでした。」

そんな中、校門を守った皆さんは砲撃や機銃で毅然と対処してください、こちら側の犠牲者無しで撃退してくださいました。お陰で学園の不法な暴力を撃滅し、未来への希望を守ることが出来たんです。

本当にありがとうございます！」

再び顔を床につける。

「いや、私たちは指示どおり実行しただけ。本当に褒められるべきは計画を立てたそちらや風紀委員では？」

同室のカエサルが返す。

「それでもです。実質戦車3輜でかなりの人数を引きつけ、尚且つ退けてくださったんですから、学園を現在纏めている私が頭を下げない

わけにはいきません。」

「とにかく顔を上げてください。幾ら何でも申し訳ないです。」

「……失礼します。」

少し待ってから小山は顔を上げた。立てた膝に手を置いて立ち上がる。

「……それに、皆さんがこれほどの戦いを経ながらも、こうして皆さん無事でいらっしやって、本当に良かったです。本当に、ありがとうございます。ございます。そして澤さん。」

小山が体の向きを澤の方に変える。

「はい？」

「すみません。先程外で聞いてしまったのですが、澤さんこの前の話、受けてくださるのというのは本当ですか？」

「えっと……士官学校の話ですか？」

「そうです。」

「本当です。が、確認させてください。本当に向こうで戦車道は出来ないのですか？戦車道で協力できるならそうしたいのですが。」

「残念ながら、この前もお話したように我々が頼る広東には戦車道はありません。そしてこの時代の戦争があるのはもはや確実。移設先の都市を守る為に、軍の事情を知っている人が欲しいのです。」

「ありがとうございます。でしたら、私がどこまで出来るかは分かりませんが、やれる限りやってみましょう。」

「ありがとうございますー！」

小山は澤の右手を両手で握り締める。澤の手は両手に包まれながらも、向こうの手によって冷やされた。

「えっと、でしたら……これこれ、この書類の名前欄に名前を、こちらのボールペンでお願いします。」

「分かりました。」

ボールペンを受け取った澤は近くの机の上でスラスラと記入する。

「今後の話はまた別の機会になりますが、よろしくお願いします。恐らく11月中には一回お話し出来るかと。」

「小山さん。」

紙を受け取っていると、そこに一人割って入った者がいた。平たい帽子を被った女、エルヴィンである。

「どうしました、松本さん。」

「士官学校に行つて欲しい、という件をカエサルから聞いたのだが、この時代の歴史の知識や戦術などは私の方が知っている。その件を私が変わつて行くことは出来るか？」

「えっ？は、はい。宜しいならば構いませんが……」

「一つ条件が有つてもか？」

「……お聞きしましょう。」

「ドイツに留学に行かせて欲しい。この時期なら中独合作は成り立っているはず。行くのは難しくは無いはずだ。」

「ふむ……残念ながら今の学園から費用を出すととなると難しいですね。しかし士官学校に入つてくださるならば、話があつた時にこちらから推薦しましょう。無論そうになると、学校で優秀な成績を取らねばならないでしょうが。」

あと、ドイツ語どれくらい使えます？」

「資料の原文を読める程には。」

「ではそういう人がいると話を通しておきます。では松本さんもこちらに記入を。」

エルヴィンも紙を受け取り、すぐに小山に返した。

「先程も言いましたが、今後については少し先になります。ではお二方は宜しく願います。」

あ、そうだ。園さん、少しお話ししたいので、廊下に来て頂けませんか？」

「……今後の話？」

「そこまで長くないので。」

「分かったわ。」

「では他の皆さんは今回の仕事、本当にありがとうございました。朝食がこの後用意されますので、配給のものですみませんが召し上がつていってください。」

扉の前で深く礼をして、ソド子を連れて外に出る。扉をそつと閉

め、階段の前の方に誘導する。

「ここなら良さそうですね。では早速。」

「今後の風紀委員会をどう運営するか相談に来た、でいいのかしら?」
「半分正解ですね。今後の運営、それは重要です。何せこれからインフラも何も無い島で生きていけるよう、働いて頂がなければならぬのです。下手したら反抗も起こり得るでしょう。」

「今回みたいなの?」

「いえ、大人が絡むと今回よりも手強いかもしれません。向こう側に付きはしなかったものの、生徒会に反感を持つ者はいるでしょうし。」

その為にまずは現在の後藤委員長、金春副委員長は辞任してもらいます。今回の分断を纏めきれなかったのは彼女らですし。」

「……生徒会による風紀委員会への介入と受け取られるけど、まあ仕方ないでしょうね。私にかつての部下を打たせる羽目になったのは……ということでしょう。」

「ええそうです。問題はその後継です。会長らは今回の参加者を排除して委員会を構成するおつもりですが、私は過半数が向こうに回った以上、それでは人員が不足すると思っています。」

「話が長いわ。要点は何よ?」

ため息をついて、近くの柱にもたれる。

「……両派を貴女に纏めて頂きたいです。無論学年とかそういう話は無しです。この学園に暫く新入生は入らないですから。」

「……なかなか難しい提案ね。実際がそうだととしても、生徒会との提携に反対だった者が数多くいる中で、生徒会と提携して機密保持と戦車道を支援した私が出るかしら?」

「ですが後任の候補者が、今回向こう側に付いた人は取り敢えず抜くとして、こちら側の幹部クラスとなると、矢暮さんと佐渡さん……くらいなんですよ。」

「ヤボクはだめよ! あんなのがなったら風紀委員会は、学園の風紀は崩壊するわ!」

「そうなんです。彼女、風紀委員の中で支持を得られていない。佐渡さんは持ってた担当が小規模で力を認められていない。即ち現行幹

部層になれそうな人がいないんです。」

「……話は分かったわ。だけど少し待ってくれる？」

「ええ、構いませんが。ですが少なくとも明後日までには結論をください。島への派遣の第一波の監視として幾人か行って頂くので、それまでに新たな指導体制が成立していて欲しいのです。」

「なるほど。なら私が呑もうと呑むまいと、新委員長に現状をさらに詳しく説明して頂けるかしら？そちらに秘密がなくなるほど。」

「……分かりました。無論、そちらが団結して指示に従ってくれるのが前提ですが。」

「取り敢えず検討しとくわ。生徒会室に言いに行けばいいかしら？」

「はい。よろしくお願いします。後藤さんと金春さんにはこちらから伝えておきますので。」

「よろしく頼むわ。」

「では私は次は西住さんたちの見舞いに行かねばならないので。」

小山はソド子の脇を、手を軽く掲げながら通り過ぎた。話が終わったことは違いないが、部屋に帰ろうとしない。

「……話は分かるわ。向こうの言っていることが真実なら、という条件は付くけど。問題は……力を回復した風紀委員会で、生徒会が何をさせようとしているか。その為には情報ね。どうせ勉強は無駄になったから、その処理に時間を回しますか。」

周りに人がいないことを確認してからあくびを一つして、ゆっくりと廊下に踏み出した。

次に行くは先程の部屋の二つ先、戦車道の者らが集められたもう一つの部屋である。軽くノックして入ると、すぐに扉を強めに開く。

「失礼します。」

一礼後、ツカツカとみほが横たわる場へと詰め寄る。

「西住さん、頭の怪我は大丈夫ですか？」

みほが横たわるのは、背もたれを外に出して2列に並べられた椅子の真ん中に敷かれた布団の上である。左ひたいはガーゼがテープで固定されている。みほが身を起こそうとするが、それは小山に制され

る。

「小山さん……ありがとうございます。まだ軽く痛みますが、だいぶ良くなりました。」

「それは何よりです。体調の方は？」

「……少しは。ですが、食欲は余り……」

「では今日はゆっくりしてください。何なら寮までの送迎も手配します。」

「い、いえ。それほどでもありませんから」

「無理はしないでください。西住さんは学園の英雄なんです。ましてや今回の件に協力してください。さうならなおさらです。」

「……」

近くの椅子は淑やかに座った小山の下敷きとなる。みほの見る先が小山を外れた。

「他の皆さんも勿論ですが、それでも今回の防衛を澤さんの方面も含め指揮してくださった西住さんには礼を申し上げなければ。」

「……ありがとうございます。」

「しかも向こう側のグラウンド方面の指揮官だった嘉沢さんを捕らえるのに活躍したのも西住さんだそうじゃないですか。本当に何と言ったらいいでしょう！」

「……」

「私としては表彰したいくらいなのですが、何ぶん仕事を立て込んでまして、このような見舞いだけになってしまうこと、申し訳ありません。」

小山の両膝が伸ばされる。

「他の皆さんも、本当にありがとうございます。学園を守れたのは、その身を捧げて戦った皆さんのお陰です。特にアークイさんチームの方々は戦車からその身を出してまで戦ってくださいました。」

「なんて事はないにや。喰らったのはわき腹だけ。しかももう治ったんだな。」

「流石です。では西住さんはこのままお待ちください。他の皆さんは……これから朝食が届けられる手筈なので、それを食べたなら帰って今

日はゆっくり休んでください。五十鈴さんは夕方の配給から合流してください。

あ、そうでした。車長の方々は、この前お話しした件、今日までにお返事を頂きたいと思えます。既に澤さんとエルヴィンさんが参加してくださることが決まりましたので、どうぞよろしくお願いします。」

音がした。急に開いた扉が見せたのは、一人の生徒会の者だった。

「小山副会長！こちらでしたか。」

「どうしたんですか？」

「連絡です！松阪先生の乗る船がこちらに帰って来るそうです！」

「本当ですか。随分早いですね。すぐに島への移設担当を集めてください！移設に関する情報も先生から得るように！」

小山はすぐにその生徒会の者の側による。

「既に集合済みです。お早めに。」

「ではすみませんが、よろしくお願いします。ありがとうございます！」

扉の前で身を翻して軽く頭を下げると、その者と並んで走っていった。

間もなく部屋に朝食が運び込まれた。みほ以外の者はそれを完食してから各自家路についた。みほは結局、沙織に支えられながら帰っていった。帰り道で何を話したか、それは知らない。

広西大洗奮闘記 63 周りを囲う塀の中に

麻子は窓の外を見ないようにした後、眠りに落ちていた。目を覚ました昼過ぎには、空を舞う大鷲は城壁の外に降り立とうとしていた。少し揺れながらスピードを落とし、滑走路から少し脇に逸れて停止し、プロペラが回転をやめた。間も無く扉の前に梯子が掛けられ、開いた。

「You can unlock your seatbelt.
Thank you for using China National Aviation Corporation today.

(シートベルトを外して大丈夫です。本日は中国航空会社をご利用いただきありがとうございます。)

パイロットのアナウンスの後、拍手がわき起こった。理由の一つはここに無事に運んでくれた感謝であろう。角谷はかばんを持ち、列の最後尾に続いて機体から降り立った。

こちらの天気は風はないが軽く雨。上着を着けていても少し肌寒い。持っていた折りたたみ傘を開くと、後ろの人間が壮大に息を吐いて地上に降り立った。

「大丈夫だったでしょ?」

「……まあな。帰りもこれなのか?」

「多分。他の手段って船くらいだよ。」

「まだ船の方がマシなんだがな。」

最後尾に例の西洋人パイロットが降りて、係の者に話を聞いた後、機内に戻りその場からゆっくりと離れていった。その場から少し離れると、軍服を着た男が一人、彼らの方に走ってきた。

「陳閣下の御一行で宜しいですか?」

「ああ、そうだが。」

敬礼に対し、敬礼で返す。

「私、この航空隊の李と申します。車が外に用意されてますので、そちらまでご案内します。」

「おお、それはありがたい。案内を頼むよ。」
「こちらへ。」

角谷らも陳の指示を受けてついていく。広々とした中に複葉機がいくつかパイロットとともに並べられている。外に出て駐機場の中を過ぎて建物の中を通り過ぎ外に出ると、案内の手の先に2輛の車が用意されていた。

「別れてお乗りください。」

「そうか、それじゃあうちら三人とそちらの二人で別れるか。それでいいか？」

「私たちはそれでいいのでは？」

返したのは広東からの付き人、繆だ。李宗仁もうなづいて応じる。少し運転士の様子を見てから、陳が口を開いた。

「Please ride on this.

(あなた方はこっちの方に乗ってくれ。)」

「OK。」

ちよつと高いところで開かれた扉から、傘を畳んで車内に乗り込む。麻子はまだ寝ぼけが抜けきってなかったので、角谷が引つ張り上げた。

「助かる。」

「早くしつかり目覚めてよ。もう南京に着いてるんだから。」

「かといって私の広東語はここでは通じないぞ。」

「良いんだよ。私らがこっちで仕事が出来理由の一つを見せられるんだから。あと知識的にもありがたいしね。」

扉を音を立てて閉めると、車は前を追う形で車体を前進させた。周りは首都の近くでありながらちらほらと畑らしきものと小さな民家が見え、右側の川を挟んだ向こうには高い石壁が連なっている。暫くして車は右に曲がり、正面の大きな石造りの門を四つ次々とくぐる。そこを抜けると、あたりは低層アパートが並ぶ住宅地に入った。

道行く人は余りいない。すれ違う車もほとんどない。そして門から続く直線の道から逸れた奥には、お世辞にも綺麗とは言えない光景が見え隠れする。そんな中角谷らは何も話さずに、カタリカタリと骨

が鳴りながら前を追う車輛に身を委ねた。

10分ほど経つと、少し左右に曲がつてから辺りには露店や食堂が立ち並ぶようになった。こちら辺になると、昼飯時のためか食事をする人が店先に座ったり、列をなしたりしている。辛そうな香りに混じって胡麻油の匂いが鼻をくすぐり、食事する音も耳を撫でるが、腹を抑えつつ目的地まで堪えた。

そのまま真つ直ぐ走ること5分強。車は先にブレーキをかけた車の後ろに停車した。開かれた扉から軽く飛び降りる。雨は余り気にならない。

先程から正面に見えていた門が、目と鼻の先でそびえる。上側中央には右から「国民政府」の文字。そしてその上ではためく青天白日旗。間も無く現れたスーツの男に連れられ、真ん中の一際大きなアーチをくぐった。

嚴重な身体チェックを受けた後、一度応接間らしき所に案内された。何やらこの前南京でテロが起こり、重役が撃たれたばかりなのだという。案内した男に支持された通りに椅子に座る。飯はない。

五人で並んで待つこと五分、護衛に囲まれながら数名の男らが部屋に來た。革靴が絨毯の敷かれた床を鳴らす。そのひとりが帽子を取った。言い方はあまりよろしくないが、その帽子の下に光るひたいを隠していた者が、角谷らの前の中心、自分らの真ん中に座る陳の前に座った。なるほど、世界史の資料集の写真で見たものそのままの蔣介石本人である。彼我を隔てるものはただの中央の机のみ。

口火を切ったのは陳である。

「今日は急ながらこのような場を設けてくれたことに感謝する。」

「こちらとしても、今回の全国代表大会に参加してくれたこと、うれしく思う。」

隣の通訳を通じて蔣が返す。

「で、彼女らがその大洗の者か。しかし大洗のことは知っていたが、まさかお前から話が来るとはな。何が起こるかは分からないものだ。」

「あなた方が断ったからこつちに回って來たんだよ。」

「まあいい。それにしても早めに話す機会が持ちたいとは、随分急だな。」

「出来れば予備会議期間中に大枠を決めたいからな。」

「予備会議って、明日までだぞ？ 幾ら何でも早すぎる。」

「なあに大枠だ。YesかNoかだけでも構わん。ウチとしては大洗からの利益をあなた方に還元出来れば良いんだ。」

今度は今回の動きの要因を成した李が口を挟む。

「利益、ねえ。」

「話聞いているなら分かるとも思うが、何せあのでかい船だぞ。どんな利益を奴らが握ってるかなんて十分検討がつくじゃないか。」

「だが早すぎる。幾ら何でも無理だ。何せ一度南京で断ってるんだ。そもそもこつちが受ける理はない。少なくとも2日では不可能だ。まあ代表大会期間中に議論出来る機会を設けようかとは考えているが……」

「が？……何か引き換えに、か。」
「……」

李、陳は蔣の目を覗くが、蔣は真つ向からそれに対峙する。

その会話に口を挟みようがなかった女子二人はただ顔を会話の飛び交う方へ向けるしかなかった。

「……何言ってるか分かる？」

「とりあえず、陳さんが早めに決めたいと言ってるようだが……向こうのはチンプンカンプンだ。」

「議論の機会が欲しいと言っているんですよ。」

日本語で話していた彼女らは前から発話された日本語に思わず身を逸らす。それを言ったのは、一人の若そうな男だった。

「あ、失礼。私、来月から外交部長を務めます、張と申します。このように日本語話せますので、何かあればお伝えしましょう。」

「あ、ありがとうございます。」

「今話しているのはあなた方が出した案をこれからの代表大会にかけるかどうか、についてですね。」

「……で、どうなんです？ 実際この案呑んでくださるのですか？」

「それは流石に私からは言えません。ですがどうやら議論にはなるみたいですよ。」

「それはありがた」

残念ながら、空気の読めない腹の虫には、そのありがたさが伝わらなかつたようだ。

天を覆うネズミ色の雲が晴れる気配は無い。部屋に駆け戻った小山は、船舶科の者から無線を通じて島への移転に関する情報を受け取る。思ったよりも早く、こちらも十分に急がねばならないと思わせられるものだった。下手したら人員をさらに割かねばならないかもしれない。

生徒会長室で既に集合していた担当の者らを前に、日程の調整を行った。忙しくなるが、計画よりも数日繰り上げて行うことが出来そうだ。学園艦を出ていく時期は、仮に遅く出来ても大幅には変わらないだろう。早く行動を起こすに越したことはない。

既に地理部、地学部及び顧問、教科担当教師陣による調査班員を決めており、今夜にも召集をかけるそうだ。船舶科への連絡も忘れない。

業務に戻ってもらう。次に持ち込まれたのは今回の件についての発表内容の確認だ。暴動の勃発とその無事鎮圧、現在は平穏である、というものだ。生徒会の者全員から確認は取ってあるそうだ。

「選管への確認は？」

「それだけならば赤峰氏への批判には当たらない、との立場です。」

「峠さんへの支持になるかは確認済み？」

「……まだです。」

「下手に穴を作ってはいけません。一言一句まで調整をしてきてください。いくら票で勝っても違反で落とされちゃどうにもなりません。」

「で、でしたら投票時間終了後に発表した方が無難なのは？」

「もう既に蜂起勢の鎮圧から半日経ちます。引き伸ばして投票後にすると、住民の皆さんに投票時間中には言えなかった事が隠されているのでは、と疑われるでしょう。」

「早めに発表すればまだ、治療などの対応に追われていた、と説明出来ます。下手に不信を煽ることはしたくありませんから。あ、中身はこれで構いません。」

「了解です。早急に纏めてきます。」

「あとは放送部との調整ですね。発表はいつ頃になりますか?」

「これの纏めが終わる時間によりますが、昼過ぎにはなるかと。」

「それでは松阪先生を迎えに行つたあとですね。よろしくお願いします。」

その者は軽く身を倒したのみで、即座に部屋を去つた。だが直ぐに次の者が現れた。曰く放送で徴集に関することも伝えて欲しいとのこと。忙しさはあるが、皆の顔はそこまで深刻ではない、学園艦の情勢を知らせた時と比べれば。

昼食を食堂で済ませたのち、小山は体育館で一票投じた。無論入れたのは二つの地形のうち緩やかな方である。鋭い方は危険だ。

そこからは生徒会長室に帰るのではなく、合流した生徒会の者を連れ船内に入り、奥深くへと潜っていく。広々としたエレベーターが為すものではなく、ピアノでも出せるか分からないほどの甲高い音も耳に入る。扉がボタンの点滅のちに両脇へ避けていく。

踏み出したのはこれからこの学園艦で最も忙しい場になるであろうドックである。今はただ二隻の輸送船が停泊しているのみだが、いずれはこの二隻もたくさん荷を積んでいなくなるのだろう。

そのうちの一隻に近づく。既に二人が集まっている場へだ。

「もういらしていたんですか。すみません、松阪先生。ちよつと用が立て込んでまして。井上さんもお手数おかけします。」

「いや、構わんさ。うちらが予定より早めに着いたんだしな。」

「なに、これも仕事のうちですから。」

松阪に続き学園艦の艦長の一人、井上が腕を組み、軽く笑いながら答えた。

「あ、それでこれが例の関係書類だ。」

カバンから大きめの少し厚みのある封筒を取り出し、小山の手に載せる。小山はそれをすかさず横にいるもう一人に受け流す。受け取つた時には既にその者の身体はエレベーターの方へ向いている。開けてあつた箱の中に入ると、即座に上に行つてしまった。

「……早いな。」

「14日には調査班を送りますから。少なくとも開発の為の第一波は18日には送りますし。あ、それで会長はいつ頃南京からお戻りになるかご存知ですか？」

「いや、知らない。だが確か今日には南京に飛んでるはずだ。」

「南京ですか。とうとう最終段階、といったところでしようか。」

「角谷くんは自信ありげだったし、大丈夫だろう。こつちとしてもやって貰わねばならないしな。」

「確認終わりました。」

「おう、お疲れ。」

船内から梯子をつたって降りてきた二人を井上が迎える。

「二人ともありがとう。助かったよ。」

松阪も手を握って感謝を伝える。

「今日はお二人にもお休みを与えてあげてください。」
「勿論さ。」

「いえ艦長、我々は船の中でまるまる休んだようなものですし、学園の存続の危機にある中、安易に休憩をいただく訳には……」

乗員の一人三川が胸の前で手を左右に振る。

「なに、休んどけ。どうせ休みが終わったらさらに働いてもらうからな。物品輸送に向こうへの設置とか。」

まあ生徒会が最初に知らせてた通り、停泊する港がないからな。島にまともな港が出来るまではゴムボートに載せて往復しなくちゃいけないわけよ。

んで、そこを担当してもらおうから休んどけ。投票にも行って欲しいし。因みに仕事は明後日からな。」

「はあ……ではありがたく。」

「お休みを頂きます。」

半ば萎縮しながら二人はその考えを改めた。そして小山から航海中行われたことの簡易的な説明を受け、甲板上へと登っていった。

「それで私は次に何をすれば良いのかな？ 残念ながら南京も広州も、ましてやここも北京語が通じる環境ではないのだが。」

「華北での日本との関係の情報を得るのに有用です。そこらへんにそ

の腕を存分に奮って頂こうかと。」

「ははは、行き先は北京か？この時代有数の重要地点じゃないか。それは重大だ。」

「ですが仕事に回っていただくのは先になりますので、それまでは学園管内で作業に従事してください。こちらから伝達します。」

「分かった。そしたら資料も渡したし、久々に家に帰ってもいいかな？」

「ええ、構いません。今後もよろしく願います。」

こうしてこのドックには船のほか二人のみとなった。井上が行き先を指し示すので、その通り案内される。

「それで小山副会長。先ほどお伝えした通り、調査班が使用する輸送船は修理が完了しております。生徒会の丹波という人から話を聞いて修理は進めていきましたが、船舶科の皆の頑張りで、細部まで問題ない状態に持っていくことが出来ました。」

「それはありがたいです。輸送船が満足に利用出来れば向こうに売る恩も少なくて済みます。それでこちらの方が規模が大きいんです。たっけ？」

「はい。一応こっちは食糧輸送用に使われていたものでしたから、容量は向こうよりあります。鉄鋼輸送としても使えるかと。まあその分燃料食いますがね。」

歩いている間に周りや中に白い船舶科の制服を着た者が群がる船が目の前に来た。確かに銀白に輝くそれは先程見ていたものよりも大きい。

「燃料はこっちでなんとかします。明日で石油関係の販売を停止しますし。」

「しかし工学科も使ってるって聞いてますし、足りませんか？」

「ギリギリなのは否めませんが、都合はつけます。最悪車に入ってるガソリンを抜いてきてでも。そちらもものを詰め込む時は、できるだけ多くお願いしますね。」

「分かりました。下さるならば、その分船舶科としてお応えしましょう。人員はどうしますか？うちらのも島に送りますか？」

「いえ、まだです。基本船舶科の皆さんは船に関することに専念してもらいます。」

「じゃそのこと他の艦長にも伝えときますね。こつちからは以上です。」

「では私も失礼します。お仕事頑張ってください。」

「そちらも。」

手を振られながら小山はもと来た道かける。学園を統べる小山に時間的な余裕はそれほど無いのである。用がこの後あるかも知れぬならなおさらだ。

耳を甲高い音が通り抜け、学園に戻る。そこから生徒会室に戻ると、今朝来たうちの二人が席の前で、制服を着た人を連れて席で待っていた。

「副会長。」

「纏まりましたか。」

「ええ、選管としてはこの発表内容を問題なしとみなします。このままならば。」

「分かりました。放送部はいつ出来ます?」

「14時30分、そこから放送室を手配済みです。」

放送部長が書類を目の前に示した。

「分かりました。すぐに行きましょう。岩城さん、お手数おかけしました。」

「いえ。」

「では後ほど。」

やはり足を止める余裕は無いのか、すぐに二つの扉を開け放っていった。

学園艦の住人の皆さんこんにちは。生徒会副会長の小山柚子です。今回は私から昨日夜にありました暴動についてお伝え致します。

昨日22時ごろ、一部生徒などによる暴動が学園校舎周辺で発生し、敷地内に侵入しました。これに対し我々は撤退を要求したものの受け入れられず、止むを得ず風紀委員と戦車道選択者らによる鎮圧を行いました。結果としてこれを撃退することに成功し、本日未明から

完全に平穏な状況にあります。その関係上、昨夜は校舎周辺で大きな砲声が発しました。近所の方に事前に連絡出来ず申し訳ありませんが、どうかご理解お願いします。現在は風紀委員により、首謀者及び計画参加者の捜索を行っています。

今回の鎮圧の成功はあの戦車道の英雄たちと風紀委員の諸君の頑張りによるものです。私は学園艦を束ねる一人として、彼らに最大級の賛辞を送ります。その一方でこの大洗女子学園が団結せねばならないこの情勢下においてこのようなことが発生し、胸が塞がる思いであります。

参加者に伝えます。即座に自首なさい。あなた方は負けました。もはやこれ以上の抵抗は無意味です。既に名前、住所、顔は割れています。速やかに投降しなさい。

この大洗女子学園のため、住人の皆さんの一層の結束を、私は心から所望致します。

以上です。

「カッターー！」

「いやー良かったですよ、副会長。母性を抱えつつも淡々と、時に冷酷に。前も思いましたけど、副会長もしかしなくても名女優になれるのではないですか？」

マイクから口を離し耳のヘッドホンを外すと、放送部の者による賞賛の嵐であった。

「いえいえ、ただ読んだだけなのにそう言われましても。」

「そう謙遜なさらずに。」

「それにしても、今回は緊張しました。会長はこれよりも緊張することを、これよりもっと長くやってらしたんですよね。」

「そうですね。あれは放映もされてましたのでずっと台本見るわけにもいかないですし、おまけに身振りも交えてましたからね。やはり会長になってから色々となさってましたから、経験値あったのでは？」

「なるほど。あ、ではお世話になりました。私はこれで。」

小山は背もたれに手をかけ、自らの腰を浮かせた。

「またお願いしますね。」

やはり度々起点に帰らざるを得ない。髪を手櫛でとかしてから、生徒会室に戻る。ノックして開けると、その正面に小柄の生徒会の者が待ち構えていた。

「小山副会長、面会希望の方が。」

「どなたです。」

「ナカジマさんと、猫田さんです。」

私の前には紙が二枚。しかしその更に奥の二人はそれを手に取るうとはしない。背もたれに身を乗せると、椅子がぎしりと鳴る。

「お二人が並ぶとは、結構珍しい気がしますね。」

「まあ確かにそうかもしれないんだな。」

「たまたま道中会っただけだからね。」

見た限り昨日のことは大きく影響してはいないようだ。

「立ち話もなんですし、早速本題に入りましょう。検討はついていますか、要件はなんですか?」

「……小山さん。前の士官の話だけど、私は断ることにしたよ。」

「ボクもだな。パソコンいじってる方がよっぽど楽しいにや。」

「私も機械弄ってたいからね。断っても構わないでしょ?」

予想通りの返答だ。この二人を話に加えたのは戦車道の中で差をつけるのを避けるためではない。

「……ええ。現状この話に乗ってくれている人は居ますから。」

「誰かな?」

「澤さんと松本さんです。他のお二人はまだですね。」

「まあエルヴィンさんは分からなくもないにや。寧ろこの時代にいることを喜びそうなんだな。」

「澤さんはちよつと意外だな。西住隊長が決めてから同調すると思っただけど。」

「今回校門側の指揮を取って、意思を固めなされたようです。」

「で、代わりとってはなんだけど、自動車部の技術で手伝えることがあるなら喜んでお助けするよ。重機から車の運転、とにかく機械系なら何でもやるよ。」

「ボクは夏から鍛えたこの身体で貢献したいんだな。燃料だって無限じゃないから、肉体で出来るならそっちでやったらいいにや。」

右腕を曲げて力こぶを強調する。服越しではあるが、上辺はもつとも遠くに球を投げるための軌道を描いていると思う。役に立ちそう

「そうなりますと、お二人とも島への派遣第1波になりますね。18日からの予定です。」

「結構先だね。明日から行けとか言われるのかと思ってたけど。」

「まだ開発の計画さえも十分に決まってないので、それを纏めてからですね。まあ、それまではこっちから指定する業務について頂く事になるかと。当面はアリクイさんも自動車部の方も工学科関連だったはずですよ。」

「工学科……って、何やってるにや？」

「船から鉄鋼を切り出しているんですよ。広東に渡すんです。そういう契約なので。」

「私たち急に行って大丈夫ですかね？」

「話は回してますから問題ないですよ。確か明日ある人は夕方の配給の掲示に載せるので、それに従ってください。」

「了解にや。」

「頑張らなきゃね。」

「足を運んで頂きありがとうございます。そうだ。不要な靴や服、布地が現在徴発対象なので、持っていたら提供お願いします。」

「勿論。ウチにあるのは確か出したよ。制服と作業服があれば他は何とかなるからね。」

「ボクは服とカーテン出したかな？」

「ありがとうございます。では話はこちらからは無いので、明日に備えてください。」

「はい。」

「失礼するにや。」

二人が出て行くと席を立ち、隣の部屋でいくつかに纏まる集団の一つに声を掛けた。

「失礼します。」

「あ、副会長。如何しました？」

そこを取り仕切る三崎が服の一つを手に取りながらこちらを向く。「徴収の量はどのくらいですか？」

「靴が5千を超えるくらい、服は8千弱、といったところですよ。率直に言って集まりが悪いです。恐らく広東には買い叩かれるでしょうから、住民の食糧の為となりますともっと必要です。」

「その数ならもう一度、今度は半ば強制で徴収は行います。ですがそれ込みでも作るしかないですね。明日からの被服科の作業に期待しましょう。」

「以前質屋経由で集めたものはどうするんですか？売るならこっちから商業科に話を通しますが。」

「いえ、現状は保留です。特に貴金属はそのまま価値を保てますので、タイミングを見計らおうかと。他の類は大陸の有力者へ恩を売るのに使えるといいですね。」

「賄賂ですか……」

「贈り物です。もつともこの時代のブランドなんてシャネルが通じれば御の字ですから、たいして出来る数は有りませんが。」

「そしたらこの時代に無いものは普通に卸しますか？」

「あの一。」

集団の向かい側にいた一人がおずおずと口を挟んだ。

「副会長、場合によってはウチ独特のブランドだって言って値を上げるのもありかと思っただんですが。」

「それは厳しいですね。私たちがブランドを作れるほどの力があると、恐らく向こうは認識していません。向こうの方を呼んで力を見せる、という手もあるのですが、そんな余裕は現状ありません。」

「……厳しいですね。」

「本当その通りです。私たちはこの世界において何の力もありません。軍事は無論、文化、経済など元の世界で力と見なされる全てをここに来て失ってるんですから。」

「それで島で満足に飯を作れるようになるまで最低2年、ですか……鉄鋼の売却なしで何とかなるのでしょうか？」

三崎が頭の後ろを指で搔く。

「島の開発班によると、塩田開発と漁業を財源と主食とする案があるようです。島ですし、それで凌ぐしか無いでしょう。」

「あとは商業科が向こうで商機を捉えられるか、ですね。」

「期待しておきましょう。すみません、失礼しました。作業を続けてください。」

再び先程の椅子が、ぎしりと音を立てた。果たして我々は戦争までにある程度生活を安定させることが出来るのだろうか。恐らく否だろう。満足に家が揃うかさえ分らない。獲れる魚が美味しいことを祈るばかりだ。

右腕の肘を左手の指4本で捉え、頭の方へ強く引き寄せる。肘は頭頂部を過ぎて左肩に到達する。そこで軽く身体に力を込めたあと、それを緩め右腕を前回しした。

3回転目の途中の時に扉を開けた生徒会の一人が伝えたのは、またしても小山への来客だった。手元にあった書類へのサインを終えて傍に積んでから、その者の入室を認める。

その小さな競技者の性格を理解している者からすれば、現在この空間を包んでいる薄ら暗い雰囲気は似合わないどころでは無いだろう。その発生源が私では無く、この者本人であるならなおさらだ。

私は今朝、負傷者に関する報告の前、ある一枚の書類を受け取っていた。簡単なものであるが、ただ話をしようと正面に立たせた時に机に載せるだけで、先程の雰囲気醸し出させることが出来るものだ。

「まあ、要件は分かっていますが、如何なさるか決まりましたか?」
返事はない。漏れ聞こえるのは扉の向こうで話し合う声のみ。

「会長が戻られる前から、士官学校行きに向けた必要事項を履修してもらいたいで、折角ここにいらしたのですから、ここで決めてくださるとありがたいです。」

この者の心の中を表すならば、何故つ、が繰り返し書かれているだろう。顔を見れば卵に黄身が入っているかどうかよりも明らかである。

「そういうえば、体育館はしばらく使えなくなります。確か校舎から島へ搬出する荷物の置き場になるはずです。何れにしてもバレーを続けなされるのは厳しいと思いますよ。前に会長が仰っていましたが、現

在はスポーツを安心して出来るほど平和ではないのです。」

「……どういうつもりですか？」

「何がですか？私はただこの前の話に乗る、イエスカノーか、と尋ねているだけです。」

「その紙は……」

「ああこれですか。単なる業務書類の一つです。お気になさらず。」

動かさない。変わらず彼女の目の前に突きつける。

「……ふむ。私としてはこのまま待つて頂いても構わないのですが、返事が頂けるまでは部屋からは出せません。先延ばしにされるのは嫌なので。」

「……脅しですか？」

「いえいえ、そう言われるとは心外ですね。会長があなた方に頭を下げてお願いしたというのに。これはあなた方の今後の生き方に関わることです。下手に強制は出来ません。」

「断ることも出来ると。」

「勿論です。既にナカジマさんと猫田さんが断りを入れてくださっています。他で頑張ってくださいるようですから。」

「……」

悩んでいる。私の言っていることが何処まで真意か凶りかねているのだろう。そこそこ本気だというのに。仕方ない。

「まあただ待つのも暇ですし、少しお話しますか。軽く聞き流して頂いて構いません。」

昨晚の礼は朝行つたので抜きにしますが、現在は昨晚の蜂起に参加した人をこちらに付いた風紀委員が捕らえております。まだ成果は芳しくないようですがね。

実は今回の蜂起、今回風紀委員が分裂する前から計画されていた様なんです。こつちから情報を出して向こうが割れた結果今回の規模で済んだようですが、仮に風紀委員会全員が蜂起していたら、こつちは難なく潰されていたでしょう。そしたら学園はどうなってしまうか、今思うと不安になります。

そしてそれに風紀委員以外で絡んでいた人がいたらしいのです。

風紀委員会は追及されなければならないと思うので、仮に本当にいるとしたら、今回蜂起した人ほどではないですが、話を聞く必要はあるかと思えます。最悪今回の蜂起勢と同様の対処を取らざるを得ないかもしれません。」

バレエで鍛えた脚力で封じようとしているようだが、膝が笑っているのは分かる。

「しかし学園艦は現在総動員体制下にあります。正直今回捕らえた人たちにさえ、タダ飯を喰わせる余裕は無いでしょう。ですから捕らえた人たちには働いてもらうことになります。恐らく向こうへ売るものの制作という単純作業でしょう。朝から晩までです。食糧の残りも考えると、飯も減らしますか。」

だがもし仮に、その人に代え難く、かつ学園運営に役立つ能力があるならば、そちらを有効に使って頂きたいと考えているのですが、どう思われます?」

「……そうしたほうがよろしいのでは?」

「やっぱりそうですよね。ではその方針を相談してみますか。それで、お決めになりましたか?」

彼女の両手の拳は、自らを締め、後戻りさせない為のものだろうか。

「……私は、軍に入って役に立てますか?」

「それは努力次第でしょう。ですが西住さんの指揮を間近で見、アーツイオ戦では大戦果を、さらにプラウダ戦でのあの疾走、黒森峰でも敢闘し、おまけに知波単の皆さんを纏めておられました。」

努力する力と的確な根性、それは確実に『たたかうこと』において有用であると、私は信じてますよ。」

「……そう、ですか。戻ってきて、またバレエ出来ますかね……」

「ええーお任せください。我々生徒会はこの学園を、住人や学生の皆さんも守り通してみせます。かつて二度、この学園の存続が決まったように!」

「………受けます。やります。」

「おおつ。ありがとう、ありがとうございませす! よろしいですね!」
「………はこ。」

「で、でしたらこちらにサインを。」

机から別の紙を取り出す。この前澤とエルヴィンが名を書いたものと同じだ。その右手にペンを与える。震えている。小刻みに、しかし幅は大きく。そつと包んでやる。彼女は大きく息を吐き、膝よりもしつかりとそれを抑えた。

磯、辺、典、子。

机の上に彼女の名を記した書面は二枚に増えた。

「ありがとうございます！でしたら本土での学校に向けて中国語の授業をする予定ですので、必ず出席してください。詳細は追って連絡します。」

「分かりました。やると決めた以上はやり抜いてみせます。」

「期待していますよ。」

手を差し出す。彼女は手を一度閉じて開き、それに応じた。

「他に何か聞きたいことはございますか？」

「いつ頃向こうに行くのですか？」

「恐らく12月ですね。向こうのどこに行くかにもよりますが。会長が今回の出先で確認なさるはずですから、決まり次第すぐにお伝えします。」

「よろしくお願いします。澤さんとエルヴィンさんも一緒に行きますので、是非一緒に頑張ってください。他には？」

「取り敢えずはないです。ではまた。」

「布類の寄付と投票もお願いしますね。」

彼女に付き添って直々に校門まで送り出した。出た後も後ろから手を振って見送る。

彼女は優秀だ。戦車道において、あの八九式で駆け回れる程だ。おまけに機転も利く。送り出して恥になる人物では決してない。軽く行き先を縛ったとはいえ、決めた以上はやり切ってくれるだろう。いつの間に空の雲も、灰から白に変わっていた。

「そうだ、松阪先生に中国語の授業の件お伝えしなくては。あと教室も確保しないと……それは小教室で何とかなるかな？」

空はまだ曇り。差し込む夕日はまだ片付けられていないグラウンドを照らす。そちらの入り口を避け、人の集まるボロボロの校門から中を進む。配給の時刻の少し前、既に人はここに並んでいる。一旦剥がれた煉瓦に足を取られたが、校舎の中に入るには問題ない。マイクを持つ人間からは若干距離を取った。

手紙を見せて投票手続きを済ませ、靴を脱いでから体育館に踏み込む。淡々と話す担当から薄っぺらい投票用紙を受け取り、壁よりにある空いている机に向かう。両脇は衝立が立つのみだ。

少し揺れる机を抑えつつ、鉛筆である人の名を書く。一度消しゴムを手にとったが、私はこう決めた以上この名を書くしかない。消すことはできぬ。机から取って鈍い銀色の箱にそれを挿し込むと、コトと音がして中に吸い込まれた。小さいが、悪くない音だ。

さてそのまま出れば投票は終わりだが、私がここに来た理由は終わっていない。私はこれから自らを壊さねばならない。最早崩れ掛かっているものだが、それに終止符を打たねばならない。後戻りは出来ぬ。

目的の部屋の前に来た。かつては二人の仲間が、友が隣に居たが、今は一人だ。今朝送ってもらった友にはその後帰らせた。若干強めに言ってしまったが、大丈夫だろうか。また謝る機会があれば良いのだが。

手を胸元に持って来たが、そこから前に倒せない。震える。側から見たら奇妙なことこの上ないだろう。心に決めたのに踏ん切りが付かずにいる。

扉は開かれた。推したわけでも敲いたわけでもない。勝手に開かれたのだ。

「……西住さん？戦車道の西住さんですか？」

向こうの者がそう尋ねてきた。

戦車道の西住みほ、か。

「……小山先輩はいらっしゃいますか？」

「ええ、今奥にいらっしゃるはずですよ。案内させますね。誰か、西住さんを奥へ。」

振り返って一声掛けると、その対応してくれた者は副会長は人使いが荒い、などとぶつぶつ言いながら走り去っていった。

対してこちらは以前とは大きく違う。広大な場の中央に並べられた時と異なり、今回は辺りには他の人たちが席を並べ、人によっては業務に注力している。

「……お返事を伺いましょうか。」

こちらから右側にいた人は、今まさに正面から私を囁目する。どちらでもない。彼女の目は温和に受け入れるわけでも、冷酷につき放すわけでもない。どちらでも受け入れるだろう、無論これからの返事を望むだろうが。

「……え、えと……私、やります！」

「……お、おお！ほ、本当ですか！」

座っていた彼女の顔が急速に近づいた。

「はい。」

「ではすぐにこちらの紙に、と言いたいところですが、その前に一つ聞いておきたいことがあります。今回の決断をした要因が『生徒会から頼まれたから』のみならば、こちらから参加はお断りします。向こうに行つて、しかも軍人になつて頂くやる気が、私たちからの外圧のみで続くとは思えません。」

「他にも、あります。」

「何ですか？」

「……私は戦車道には戻れないからです。私は今回、戦車道以外の目的で戦車に乗つて、そして戦いました、生身の人間と。攻撃しました、生身の人間に。しかもその戦いは、私が下手なことをしなければ、説得して避けられたものでした。私はそれが完全な自衛だったと納得出来ません。きつとこの先も。」

仮にこの世界で、はたまた帰つて来ることが出来、現代で戦車道が

出来たとしても、今回のことを胸にしまいつつ戦うことになります。嘉沢さんを殴ってしまった時の手の感触や、正面に広がる……人たちの思い出しながら。これでは少なくとも以前のように戦車道は出来ません。無理なものは無理、です。

ここから出る時に沙織さんと共に戦車をちらりと見ていったんです。ですが駄目でした。見るとあの時、明かりが回復した時に見えた光景が脳内に呼び起こされ、吐き気とともにしばらく消えませんでした。今は何とかなっていますけれど。

昨年夏、私がしたことはご存知だと思います。そしてその非難を避けてここに来ました。戦車道をやる事になったものの、皆のお陰で私はあの水音を克服出来ました。

ですが此度は私が皆とともに、いえ、皆に命じて犠牲が生じました。これだけは皆さんとは克服出来ません。だとしたら、また逃げるしかない。

でも、もう逃げたくない。皆を置いて、大洗を捨てて何処かに行くなんて、今の私には出来ない。考えられない。

この相反する思いが重なり合って出来た考えは、今回の話に乗る事でした。軍人としてこの戦車道から離れ、かつ大洗と皆を守る。これしかありませんでした。」

「……本当に軍人になって、学園を、それを守護する西南政権を存続させるべく、多数の人の死を目の当たりにしても良いと？戦争は率直に言って避けられませんか？」

「……それは私が軍人としてやったんだ、と割り切れます。いえ、絶対割り切ります。そしてそれで私の今回の悪夢が悪夢のうちの一つとなり、かつ皆が無事でいられるのなら、やってみせます。決して屈さず。」

私に目的をください。戦車道を抜きにした、次の。」

「……では生徒会よりお願いです。士官学校で学んだのち西南政権の軍に入り、広東、広西両省、そしてこの大洗女子学園を防衛してください。」

「分かりました。」

「ではこちらの書類にサインを。」

みほは一步机のように寄り、小山からペンを受け取った。若干字が曲がっているが、それでもミミズが這ったような字ではない。

西住みほ、確実に楷書でそう書かれている。

「ありがとうございます。あの二度の絶望的な戦いに勝った西住さんなら、この時代でも活躍なさるでしょう。」

小山はこれまでの3枚より一層丁寧な、それをファイルの中に収める。

「いえ、あれは私一人の力では……そういえば他に誰がいらつしやるのですか?」

「澤さん、松本……いえ、エルヴィンさん、磯辺さん、そして西住さんの計4人です。」

「……結構いますね。」

「はい。思ったより皆さん乗ってくださいました。皆さんと一緒にですから、上手くやっついていけると思えますよ。それでは今後ともよろしく願います。」

「はい。」

小山先輩が右手を差し出してきた。躊躇うことなくこれに応じる。この人もまた私が守るべきものの一つなのだから。

その後今後に関する話を聞いた。短期間ではあるが、集中的に中国語、繁体字を学ぶことになるそうだ。字さえ読み書きできるなら、ある程度のコミュニケーションは取れるからだそうだ。出発するひと月先までにどこまで学べるかは分からないが、他に何も無いのだから、これに力を注ぐことにしよう。

再び客を見送った私の頭上からは、雲は失われていた。暗くなった空に瞬くいくつかの光がその証明である。西住さんは呑んだ。お辞儀のふりして頭突きをかまし、握手するふりをして人差し指と親指の間を圧迫した甲斐があるというものだ。これで冷泉さんの言う『蹴り返してやる』は達成できたのだろう。これでいい。大洗女子学園の存続の為ならばこれでいいのだ。その為ならば、私たちは悪事を働いてさえも良いと心に決めたのだ。

それにしても西住さんは、下手なことをしなかつたら避けられた、と言っていた。生徒会の絶対打倒を目指す蜂起勢相手では、戦車道はこちらの味方に付けた以上お互いの戦闘は避けられなかったと思うが、他に何かあったのだろうか。まあ気にするほどでもないか。

外の空気をすっかり吸い込み吐き出してから部屋に戻ると、一件報告が入っていた。持ってきたのは金春さんだという。

『蜂起した者らの指導者の一人、中学治安維持担当長、江戸川夢華確保。しかし依然として学園艦治安維持担当長、浜公子の行方は不明。』
遅い。かなりが怪我のため学園に拘束されているとはいえ、丸一日逃げ続けられるとは。しかもこの決して大きくない学園の中で、である。

腕時計を見ると、間も無く短針と長針が成す角が、約40分ぶりに共に2/3πを超えようとしている。許可はもう出してある。壁には使用されたポスターが数枚固定され、数本選挙活動で使った幟が寄りかかっている。窓ではカーテンが外部への光の漏出を防いでいる。針が1ではなく2の方を差した時、スピーカーが教室の空気を震わせた。夕方の配給が終わった者もすでに合流し、固唾を飲んで耳を澄ませる。

「どうも皆さんこんばんは。清く正しく皆様にお届けする、大洗女子学園放送部の王大河でございます！ただいま夜の8時を回りました。これからは本日用行われました生徒会長選挙についてお伝えいたします。

放送部は各投票所での出口調査などから独自に結果を予測いたしました。皆さまご存知のように、今回出馬したのは峠候補と赤峰候補でございますが、果たして有権者は学園都市の未来をどちらに託したのでしょうか！それでは発表します！」

太鼓の叩かれる感覚がどんどん短くなり、そして一度大きく叩かれそれから止まった。

「今回の選挙……峠候補が当選確実となっております！峠候補の得票率66%、赤峰候補の得票率34%と予測されます！」

わあつ、と歡喜がその部屋を支配した。席から立ち上がり腕を突き上げたり、隣の者とハイタッチする者もいる。私も思わず腰のあたりで両手を握り締めた。ここまでの差が有るなら、誤差で狂うことも無いだろう。

黒眼鏡の次期生徒会長は感謝を述べながら周りの者からの握手に応じている。周りの人が減ると、私も肩を軽く叩いて賛辞を述べた。「おめでとう。」

「ありがとうございます、副会長。この峠、先代には敵いませんが、学園存続の為に出来ることを堅実にこなしていきます。」

「是非そうしてください。島で都市を維持していくのは難しいでしょう。だからこそ基本に忠実に運営し、必須であることを確実に行わなければなりません。」

「分かっております。角谷会長は向こうに行ってしまいますが、小山副会長には引き続き私たちを支えて頂きたいと思えます。」

「もとよりそのつもりです。今の生徒会は人が抜けて回るほど人員に余力はありませんから。何か相談があれば喜んで応じますよ。」

和かだつた顔は間も無く真顔になり、終いには眉間にシワを寄せ顔を伏せた。

「……では早速。今回の選挙の得票率です。今聞いた話だと66%とのことですが、誤差を考えても少なくとも3割、投票率によっては半数近くが生徒会への賛意を示していないことになります。」

非有権者の少ないこの学園都市において、それだけの人間が私を、ひいては生徒会を支持していないのは、これから一致団結して事態に対処せねばならない以上、懸念材料と言わざるを得ません。どうするべきでしょう?」

「……考えはあるのですか?」

「一応有ります。それは今回の相手候補だった赤峰さんをこちらに引き込むことです。総動員体制によって人事の権限は生徒会に有りますから、入れるのは難しくないでしょう。役職は実務系のものを適当に作ります。仮にそれで支障が有っても、学園の混乱を抑えられることと引き換えなら割に合うかと。」

「ならそれで構わないかと思えます。無論他の人に確認を取ってからになります。この話は私が私の代のうちに進めておきます。」

「宜しいのですか？会長が戻られる前に決めてしまわれて。学園の運営の根幹にも関わることかと思えますが。」

「私は会長から権限を請け負ってますし、状況的に彼女の政策を受け入れられないのは事実です。それでも学園を纏めるには貴女が言った他にやり用はないでしょう。それに懸念材料を次代に回したくは無いですから。」

不安そうな顔を和らげようと微笑みかけた。

「……分かりました。お任せしましょう。」

「こんばんはー！新聞部ですー！」

峠さんが顔を上げてからすぐ、後ろの扉が開け放たれ、メモ帳を片手に持つ瓶底眼鏡とカメラ持ちの二人が入ってきた。

「当選確実おめでとうございませう！この部屋で取材しても宜しいでしょうか！」

「ええどうぞ。それでしたらまずは万歳三唱しましょうか。」

「いいですね。そうしましょう。」

カメラ持ちがこちらにそれを向ける中、私たちは机に沿って並ぶ。

「万歳！」

教壇の位置に立つ峠が一度叫ぶと、他の者もそれに習い、フラッシュが焚かれた。

「万歳！」

「二万歳！」

「万歳！」

「二万歳！」

3度腕が振り上げられ、それが降ろされると拍手が鳴り響く。

「おめでとう！」

「いよっ、新会長！」

祝いの声もまた広がる。壇上から峠が制するまで少し時間を取った。

「どうも皆さん、この度次期生徒会長への当選が確實となりました、峠

美津子です。この度は皆さんの支援と有権者の皆さんの支持によって勝利することができました。本当にありがとうございます。

私の役目は公約の通り堅実な運営です。特に島移設による困難に対しては確実に一歩一歩問題を解決していくことが重要だと考えています。

それに伴い、私は学園の分断の解消も進めます。今回赤峰氏を支持していたとしても、必要とあらば積極的に登用していきます。今後もよろしく願います！」

中々の口上だ。私は取材を受ける峠を片目に仕事場へ戻ることにした。遊びは終わりだ。

翌日、選挙の喧騒も終わりを告げたこの日から、総動員体制は本格的に始動する。各学科や生徒会は布地以外の本格的な物品回収の案内を配給所に掲示し始めた。

学園校舎では朝早くから被服科の者らが準備を行い、10時ごろに一部の生徒や大人たちが作業員として集められた。徴発した布地を向こうに少しでも高く転売出来るようにする為である。

「我々が作るのは簡素な洋服です。しかし向こうの服よりは破れたりしづらいでしょうから、それを利点にして向こうへ売却します。こちらから指示を出しますので、それに従ってください。」

体育館に集められた人々を前に被服科のリーダーが簡単に話した。紙で作られた番号の札を持たされ、蜂起勢が収監された高校棟ではなく、中学棟の方へ連れて行かれる。その教室でやるのは布の裁断などだ。工程別に部屋が分けられており、各部屋の担当者がそれぞれに説明を行う。

「サイズは黒板に記してありますので、そのサイズでペン入れしてください。定規はこちらで金属製のものが用意されていますので、それを使ってください。終わった布はこちらへ。出来るだけ布地の無駄がないようにお願いします。」

「チャコペンでペン入れされたものをハサミで切ります。迅速かつ丁寧に、大きくズレて布地を無駄にすることが無いようにお願いします。切れ端も使い道を探るので捨てずにこちらへ。」

「おいお前ら！手を抜くんじゃねえぞ！大洗の服は質が悪いなんて評価を貰うようなものを作るんじゃねえ！今まで習ったことを思い出し、学園の危機に対して被服科が何もしていなかったなんて言葉を払拭してやれ！ミシンを貸して下さった方もいるんだから、その方の分まで丁寧に縫い上げろ！いいかッ！」

「ボタンはしっかり固定してください。糸はこちらから出来るだけ供給します。引っ張ったら千切れてしまうということが無いようにお願いします。」

「今回の服は平面裁断となりますので、しっかりと服を伸ばして埃をブラシで払ってからアイロンをかけてからこちらに持ってきてください。」

「向こうからアイロンされた服が来ますので、それをきっちり畳んで箱詰めします。箱のサイズはコンビニのもので統一しました。服の種類と箱の上限枚数を確認しつつ、ずれないように入れて下さい。」

「箱はこちらへ。ここは被服科が倉庫として借りた場所なので、遠慮なく奥の方から積んで下さい。最大5段でお願いします。」

10時を過ぎた頃、作業が開始された。アイロンをかける班には以前回収された服が運び込まれ、動員された婦人や学生が次々に形を整える。被服科の一部が箱を持って中継しつつ、部屋を超えて布が仕上がっていく。服は食糧の期限が来る前に売却し、食糧に変えるものの一つのため、学園の校舎を貸すなど重点的に行われる。衣食住の一角ゆえ、金にならないことはないだろう、と踏んでいる。

昼前には高校棟から一部生徒がおかつぱの見張りとともに外に出て、グラウンドの片付けを始めた。出したものは自分たちで片付ける、保育園の子供でも言われる当然のことだ。集めた土砂は農業科が取り敢えず回収していったが、果たして砂利混じりの土をどう用いるのかは知らない。

また商業科も動き出している。ここは向こうへの商品の売却を担う重要な学科である。学科長が向こうへ物を売るのに言語を使えないのはいけない、と松阪先生に一部生徒を連れて直談判に向かったそうだ。

生徒会を交えて相談した結果、軍人組と合同で、漢文の先生も参加して大教室で繁体字筆記授業をすることとなった。日程は明日から。松阪先生には将来かなりの恩返しをしなくてはならない。しかし出来るのはいつになるだろうか。

他には大きなものを回収して売却することに力を注いでいる。主に家具だ。流石に学園という性質ゆえ授業に必要な備品は売れないが、あと一月半までに島に運べるものは限られるのだから、どう見ても持ち込めない大きな家具などは食糧に変えることにしたのだ。収

益を得られることを期待しよう。

角谷と小山の印が押された書類が各配給所に掲示され、リアカーと配給が終わったトラック2両、それ用の人員数名を借りて家庭を回る。家々を説得すれば返事は上々。場所によっては、入ってる皿ごと食器棚を得られたこともあったそうな。食器は学園艦は揺れる為落としても問題無いように、プラスチック製であることが多い。その為若干雑に運んでも無価値にはなりにくい。船で納品する我々にとつてはかなり有難いのだ。大型のものでは他に机や椅子、絨毯などがトラックで倉庫へ運ばれ、並べられていった。

家具はふきんで磨き、よく乾かす。小さな傷は傷を誤魔化すクレヨンで埋め、壊れている場合は簡単に修復する。皿は家から洗剤を掻き集め、それでよく洗ってから箱に詰める。陶器の皿が混じっていたら新聞紙に包んで別の箱に入れた。種類がバラバラだがなんとかなるだろう。食糧の限界は26日、約2週間後に迫っている。

余談だが、この時に西住さんの部屋の低い机も回収したとのことだ。それと一度向こうの物価を調べたいと言ってきているのだが、都合はついてない。

他には水産科が周辺海域での試験漁業に向けた作業を開始している。ここら辺の魚類の生態を調べること、養殖する魚の選定や効果的な漁獲方法の選択に役立てるそう。その為には島に行く前に一回船を出したいと言ってきたが、流石に第1波の派遣の時に繰り越してもらった。燃料は節約せねばならない。

詳しいことは開発班に任せているが、どうやら向こうで大規模な養殖場所を作ろうとしているらしい。向こうから貰った地図だけが判断材料のためどこまで正確かは分からないが、万山群島の島の一つの、移住地域の真ん中あたりにある東嶼島、そこは小文字のuを反転させて東に45度傾けたような形をしているのだが、そのuに蓋をするようにネットを張って養殖場所にしたいそう。簡単に計算するとネットの幅は約300m、奥行きは1kmに及ぶらしい。養殖は餌さえ何とかなれば魅力的な食糧供給手段である。野菜クズなども餌になればいいのだが。

農業科は現地での生産に向け、場合によっては学園艦からの客土を視野に入れつつ計画を練っているそうだ。淡水の確保出来る量次第だろうが、洗濯などは暫く海でやることになるに違いない。あとは建築資材の為に学園艦上の木の一部を伐採している。

船舶科は学園艦の安定と調査の船を出す準備に全力を注いでいる。現在学園艦は動いていない。その為嵐などが来ると揺れやすい状態になっている。もう一本錨を下ろして支えるそうだ。

調査の船にはかなりの量の物を詰め込む。最初に送る約50人分が暫く暮らせる用の水と食糧は勿論、そこに仮設住宅のセット、それを早く組み立てる為の重機、調査の為に借りた一番ゴツそうな車、あとは向こうの土地を簡単に整備する為のスコップやら斧などの機材、服など最低限の日用品や薬品、雨水を蓄える為の大型のタンク、そして最後に載せる人々などである。

そこに水産科用の機材も載せるのだから燃費は考えないことにした。食糧を積んだカバンが旅行中に軽くなるように、島に降ろしたら楽になるのである。

無論この学園艦を統率する生徒会にも仕事はある。その約50人に向けた最初の説明会かつ最後の説明会に私は足を運んでいた。ここにいるのバスケ部、器械体操部、女子サッカー部、ソフトボール部などといった運動部に所属していた者が多い。体育科教諭もいるから要するに彼らは労働力である。他には開発班の者や地理部の顧問などの教諭などの識者もいる。

開発班のトップが拡大印刷した地図を前に説明する。拠点となるのは許可された島の中で一番南にあり、面積も恐らく一番大きな大万山島である。直径3kmの丸い島だ。学園艦よりも少し小さいくらいである。ここにまずは居住可能なように整える。

まずは島を船で一周して外郭を確認し、環境を調べるとともに、居住地域を選定する。次いで調査担当が決めた場所に小舟で上陸し、実際に可能か判断する。それが可ならやっと大型のゴムボートに仮設住宅のセットと人員を載せて上陸する。

上陸後は仮設住宅を設置して雨風をしのげるように。森を伐採す

る必要があるなら、木材確保の為にそれを実施する。それと同時に並行してタンクを設置し、水を手に入れる。あとは適宜農地や居住地の拡大にひたすら邁進する一方で、輸送船が入れるように港を整備する。これにより大型の重機も運び込めるようになる。

輸送船はゴムボートによる人員上陸後、それを引き戻して数度に渡り船内の物資を送り込む。終了後水産科による試験漁業を行い、再び食糧を送り込むべく学園艦に帰還する。水産科の結果次第では、松阪先生が乗って帰られた輸送船にも漁業を行わせたのち、会長の帰還のため広州に送る。漁業で食糧備蓄の限界を少しでも伸ばしたい。

今年中に島に全員が移住を完了する、その目標に向け全学科、全生徒、全学園艦の住人が各々の業務に取り組んでいる。日が傾く頃には仕事が終わりを告げて、談笑したり腕を伸ばしながら、彼らは配給の列に並ぶ。

その夕方の各配給所には、他の回収の案内に混じって、ある一枚の標語が貼り付けられていた。書き手の名は書かれていない。

『全てを学園へ』

夜であった。私は最後の書類を効果あるものにすべく、朱肉に印を押し付けた。中身は農業科による演習場での伐採範囲の拡大である。伐採により土が流れ出るかを気にしているような文面だが、それはそこまで重要ではない。無論資材増強の為許可する。印の凹みが奥側にあることを確認してから、所定欄に押し付ける。手の平の中央を上に乗せ、最後に一際力を込めてから、ずれないように気をつけてそれをはずす。確かに小山と滲みなく転写された。

辺りは布団で床が埋まっている。私もこれからそこにすぐに突っ込む予定であった。座面から離れ、膝を伸ばす。

しかしそれを見計らっていたかのように、同じく生徒会長室に布団を敷いていた者らの一部が、わざわざ布団から出てきてこちらの前に集う。隣の部屋からも来る者がおり、いつの間にか10名ほどに膨れ上がった。

「……皆さん、明日からも仕事あるのですから、早めに休んだ方が良いですよ。私もこれから寝ますし。」

「失礼しました、小山副会長。ですがこれだけは確認させて頂きたいんです。」

集団から一歩抜け出て姿勢を正し、小山に問いかけたのは流山だ。「今回蜂起に参加した者たちを赦し、風紀委員会を統一し直す、という話は本当でしょうか？」

「ええ。勿論蜂起を指揮した者は特別指導に送りますがね。風紀委員会は先代の園さん呼び戻して委員長に据えて、統合させるつもりでいます。」

「何故ですか？奴らは我々に反旗を翻そうとし、一部は本当に蜂起したのですよ？治安維持は現行こちらに付いた者で十分でしょうか？何故わざわざ赦して力を回復させる必要があるのですか？むしろさらに厳しく罰するべきです。」

「……」

「それに会長の指示は風紀委員の内部に火種を持たせないようにする

ことであつたはず。ついこの前殴り合つた二派を纏めるのは厳しいでしょう。ですから今からでも撤回してください。これがここにいる者の意志です。夜も遅いですし、日をまたぐ前に返答を頂きたいです。」

小山はゆつくりと席に腰を戻す。

「……3日です。」

「……何がですか?」

「総動員体制は学生や住人の皆さんに学園への奉仕を強制するものです。たとえば学園の存続の危機という背景があろうと、それは変わりません。」

最初は学園の為に、という忠義に似た心によつて、皆さんは働いてくださるでしょう。しかしただでさえ選挙での得票率が半分程度なのですから、それは永くは持ちません。特に一般人参加率の高い被服科の業務では、間も無くそれが顕著に現れるでしょう。

人間は基本仕事をせず、しかし生きるのに支障が無ければ働かないものです。働いても利益はなし、それに気づかれてしまつては、私たちが取れる手段は一つしか有りません。何だと思えます?」

「……働きに応じて食糧配給に差をつける、でしょうか?」

後ろの者が手を上げて述べる。

「残念ながらそれは不可能です。すでに朝夕足して1日に必要最低限のエネルギーを満たす量しか配給していませんし、何より備蓄は26日には尽きてしまいます。差をつけるとなると、どうしても量を増やさねばならない。」

私にはいつ来るか分からない物資供給に期待して、期限を縮めることはできません。

それに希望者を募つて働いてもらうことも考えましたが、そこで生まれる需要と供給の差を埋めるには、何れにしても強制的に働いて貰わなくてはなりません。それに今の我々には、その希望を募る為に割ける人員もいません。」

「……それについては分かりました。しかし風紀委員会を統合させてまで何をやらせるのです? 人員としてなら他に動員すればよろしい

でしょう。」

「分かりませんか。働いて貰う上で相手がサボりそうなら、こちらが取る手段は簡単です。見張れば良いのです。働きが悪いなら罰するなり、変えて食糧を削減するなり出来ます。何より見張りがいるだけで、サボりたい人に対する圧力になります。」

風紀委員は元々生徒が健全な学園生活を送る為にあつた委員会。まさに天職でしょう。」

「それだけならば現行のみで十分でしょう。わざわざこの前殴り合つた者らを統合するのはリスクが高すぎます。」

「いいえ足りません。この先島の開発や学園艦からの撤収が本格的に始まると、あちこちで労働が行われるでしょう。こちらについた風紀委員は150人程、しかも今でも病院のベッドの上にいる者がいます。とても多くの場所を見張り続けるには足りません。」

今回向こうが蜂起したのは、私たちが言ったことが理解されなかったからです。そして彼女らにはそれを否定しようとするだけの力があつた。風紀委員からの報告によると、今回向こうに着いた者の多くは、我々の排除を狙う担当長にただ追従しただけ、だそうです。理解して頂ければ、活路は十分見いだせると思います。」

それに我々の直属の暴力装置は彼女らしかいません。武力蜂起という前例が出来てしまった以上、次に警戒せねばなりません。その為の人員はいるに越したことはありません。」

問題はある事は知っていますが、これから学園にいる者全てにタダ飯を食らわせ続けるのは得策ではないですし、強制労働させたとしても、それを見張る為には風紀委員は多く割かれてしまうでしょう。でしたら彼らを組み込んで互いに監視させる方が効率的です。」

「ただ追従しただけというのは、自分たちが助かる為の嘘かもしれないよ。いやむしろそうだと疑うべきです！それに会長からの指示もあります。部下としてそれに従うべきでしょう。」

「皆さんは会長からの指示なら全て従うのですか！たとえば会長の指示でも間違いがあるなら正すべきでしょう！」

「すみません。」

互いに睨み合いながら言い合う小山と流山に割って入る者がいた。「取り敢えず一度落ち着きましよう。寝ている人もいますし。」

丹波である。本来は茶がかったロングの髪であるが、薄暗い部屋の中ではほぼ黒である。

「それもそうですね。」

「一旦落ち着きましよう。しかし見張る為に風紀委員がさらに多く必要というのはわかりましたが、蜂起した者らを取り込むのは如何なものかと……」

「そこで一つ提案なのですが、蜂起勢に着いた者のうち問題無さそうな人間を引き戻せば良いんじゃないでしょうか？」

「それが誰か分かれば苦労はしないでしょう。どうやって判別するんです？」

「今でも怪我で学園の校舎や病院にいる人を殴った人は除きます。それほど重い怪我を負わせるほど強く攻撃したなら、本気で生徒会に反抗しようとしたとみなして良いでしょう。それと蜂起後1日以上逃げたり、捕らえた時に反抗した人を除けばそこそこ数は減るかと思えます。」

「で、それ以外は問題無いとして呼び戻すんですか？」

「あとはそれ以外の人の捕らえた後の様子次第でしょう。明らかに生徒会に反逆するようなことを言っていたり、態度が悪い人は弾けば良いでしょう。これなら私たちの側に残った風紀委員が風紀委員会の中で過半数超えるでしょうし、捕らえる人数も減らせますが、いかがでしょうか？」

「……それくらいしかないでしょうな。」

「そうですね。明日幸い後藤さん、金春さん、園さん呼び出してありますので、そこで調整してみます。それが可能な程見張られているか気がなりますが、それで良いですか？」

「ええ、構いませんよ。」

「他の方は？」

小山は声を後ろの方まで投ずる。

「はい。」

周りを気にしてか、小声で揃って返してくる。

「では皆さん早く寝ましょう。もうすぐ日を超えますよ。」

14日、朝から再び総動員体制に合わせて各学科が動き始めていたが、この日は特に船の下においてその動きが顕著であった。

船内ドックの下で船形帽を被った船舶科の者らが最終確認の作業に追われていた。大橋、長坂、井上という三人の艦長が勢ぞろいしていることから、この作業の壮大さが想像つくだろう。

「4000食、確認終わりました！」

「1000L、こちらも載せてあります！」

「ニーゴー（シヨベルカーの規格の一つ 幅が片側車線くらい）、載せてあります！燃料も満タンです！外部からの検査によると問題無しだそうです！」

時折船内から船の甲板上に出て来た船舶科の者が大橋に報告する。

「仮設の確認はまだか！」

「工具の数、確認終了です！」

「ゴムボート、最終点検完了！エンジン、ボート本体ともに良好！」

「仮設も予定数揃ってます！クッション材の配置も完了！目立った損傷はありません！」

「よし来た！これで一区切りついたな。他に確認がまだのものは？」

「ないです。持ち込み品については確認が終了しました。」

「よし。」

隣のチェックが表に縦3列並ぶ紙を見せてもらった後、頬を緩ませて何度もうなづく。

「そっちはどうなの？」

「長坂か。こっちは問題無い。船の方はどうなんだ？」

「急で仕上げたから何か不備が出るかと思ってたけど、問題無いね。寧ろ好調さ。私がこの船で出たいくらい。」

「それならいいんだが……てか、お前の目の下のクマは何とかならないのか？既に授業が中止されいるっていうのに。」

「無茶言わないでよ。今朝もギリギリまで担当に付いてたんだから仕

方ないでしょ。しかも船長に井上を付けるって話になって、その為の引き継ぎとかもあつたんだから。」

「それは上手くいったからよかつたじゃん。しかし……天気は今日は問題なさそうなんだが。」

「それは何よりじゃない。」

「雨がこないとタンクに水がたまらん。流石に水不足で死なせる訳にはいかないから、次もまた同じくらい運び込まなくてはいけないなあ。燃料が……」

「ああ……まあ、それはお天道様次第だろうね。ウチらでどうこうなるものじゃないし。それより、両方終わっているなら乗って行く人以外降ろす?」

「そうだな。じゃ。」

右手に持っていた拡声器を口元に当てる。

「おーい、そろそろ乗ってくやつ以外は降りろ。出航が近いぞ。」

「はーい。」

呼びかけると、船の脇のはしごから一人ずつ船舶科の者らが降りてくる。彼らは大橋や長坂の指の指示に従って、船から少し離れて数列に並ぶ。二人は少し離れたところでカバンなどを手に待つ人々の方へ向かった。

「すみません皆さん、お待たせしました。只今船の準備が整いましたので、順に乗ってください。船内は狭いですが、何卒ご了承ください。」

揃って頭を下げ、はしごの方へと誘導する。先生や身体の大きな学生が次々と乗り込んでいき、最後に大きな網などを持った黒く焼けた水産科の者らが意気揚々と足を踏み込み、一緒に行く船舶科の者に案内される。

船内は狭い。少なくとも本来この輸送船を管理する人員が過ごせる程度の設備しかない。だがそこに50人を超える大人数を乗せるしかない。小部屋に足の踏み場も無いほど詰め込まれるか、機材と共に倉庫で寝袋だろう。二人は文句を言いつつ殴りかかられないことを祈った。幸い杞憂に終わったが。

背後でエレベーターが開き、見送りに来た人々が吐き出される。その正面にいたのは小山だ。

「準備は如何ですか？」

「今乗り込んで頂いているところです。船と無線の安定が確認されたら、出航します。船、資材共に状態は良好。正に理想的と言えます。」

「それは何よりです。新学園都市の船出としては最高です。」

「全くです。皆さんは向こうの方でお待ちください。こちら辺は船舶科が通るかと思うので。」

「分かりました。そのように誘導しておきます。」

「ご協力感謝します。」

学園長や町内会の人は用意されたパイプ椅子に腰掛けており、他に10名程立ってこちらを見つめる者がいる。小山は一人で適宜この見送りの人の列を整えた。こういう人がいるから、生徒会はそのために暴走気味になる会長の元でも動けるのだろう。

間も無く船の上で船舶科の者の一人が、こちらに向けて拳の上で親指を突き立てているのを見た。完了のサインだ。同じサインを二人も返す。ここで船の甲板のこちら側にこの度の船長、井上が姿を現した。見るのも恥ずかしくなるほどカクカクした動きである。船の中央で止まって向き直り、紙を開いた。

「……コホン……え、えーと……この度は大洗女子学園の新学園都市建設に向けた第一波の見送りにお越し下さり、ありがとうございます。この度この船の船長を務めます井上です。えー……何時もは学園艦の艦長を務めています私ですが、必ずここにこの船と戻るべき人を、連れて帰って来ます。よ、よろしく願います……以上です……」

船舶科の中では、十分良い挨拶だったのではないか。拍手がそれを示していると思う。

「それでは……出航！」

井上が右腕を掲げると、船舶科の一人が列から出て来て、船と繋げてあった縄を外す。エンジン音がドックに響き渡り、船はゆっくりとその場を離れた。

「帽ふれー！」

本来は紙テープなどをつけて見送りたいところだが、腕以外に振れるものがこれくらいしかない。ここにいる船舶科の者は自身のそれを振って見送った。

ピーーと短音を鳴らし、船は右に曲がりつつ学園艦から離れる。船は我々に後尾を向けた。その時だった。船に乗る水産科の一人が船の後尾で旗を振った。船が掲げるものとは大きく異なる。

大漁旗だった。本来なら帰りに振るはずだが、向こうも振り返さずにはいられなかったのだろうか。中央上の「大漁」の横書きの文字から下に90度回した位置に、「洗」の文字が金の糸で刺繍されている。魚は「洗」が左右を分け、右に鯛、左に鮫鰈。まさに大洗らしい大漁旗と言える。揺れる船の上でバサバサと左右に豪快に振られるそれに、ここにいる人は不安の中での希望を感じ取っていた。

私は400mを超える距離を登り、再び太陽の下に帰ってきた。空を見る限り雲は浮かんでいるが、今日一日は大丈夫だろう。島の開発が上手くいくかは祈るしかないが、その為の銃後を固める事は出来る。暫く後に3人を呼び出した。彼らが必要なのである。

学園まで戻って生徒会室に戻ると、既に半数近くは昼食を取りに行っていた。腕時計を見れば、確かにそれがふさわしい時刻である。踵を返して食堂へ向かうことにした。

食堂にいたのは生徒会の者だけではなく、陽が差し込む窓際を中心に、被服科に動員された一部が食事を取っている。食事は一汁二菜、儉約体制以来の量が維持されている。私が食事を取っている間にも、時折被服科の者が食堂にいる者に声をかけ、仕事へと引き戻していていた。時間には若干余裕を持たせているようで、呼ばれた者の殆どはその皿を空にしていた。今はまだ大丈夫そうである。だが明日がこうとは限らない。

帰り掛けにある教室の前を通りかかった。一旦足を揃える。中からは珍しく作業する音ではなく、授業をしている声がある。繁体字の使用に関する特別クラスである。1日6時間の徹底した詰め込み授業であるが、これで向こうで文字での交流が出来るようになって欲しい。いつかは私も出来るようになってねばならないだろう。正直気が重い、それだけは口にしてはならない。

予定の時間は2時のはずであるが、10分前に戻つてくると、既に予定の3人は生徒会室に揃っていた。流星は風紀委員、約束はきちんと守る。遅れたことに少し謝罪を述べてから奥へと案内する。

「こちらへ。」

「小山さん、少し良いかしら？」

「園さん、どうしました？」

私が一歩隣に足を踏み込んだ時に呼び止められる。

「ここじゃなくて別の部屋はない？ここちよつと騒がしいし。」

「……何か話でも？」

「あまり大っぴらにはされたくない話をね。因みに例の話は受けるわ。無論条件はそのままだけどね。」

「こちらの秘密も話せと。」

「何かはあるんでしょう?」

「まあ、無いと言ったら嘘になりますね。そうですね……被服科の作業と収監とかからも離れている所となると……あ、元々繁体字講座に使う予定だった小教室があるのですが、そこは如何ですか?」

「何処?」

「中学棟2階の北側です。そこなら被服科からも風紀委員からも離れているので、双方話しやすいかと。」

「……2人とも良い?」

園さんは後ろの2人に振り返って聞く。

「ええ。構いません。」

「それでは決まりですね。元々確保してあった部屋なのですぐに行きましよう。」

「そうね。」

「皆さん、少し出掛けます。私の印が必要な書類などは、机の上に置いておいてください。」

少し間延びした返事を聞いてから、借りた時に受け取った鍵を手に、4人の集団となって私たちは部屋を去った。

扉の脇のスイッチを入れると、幾つかの机と椅子、正面の小さなホワイトボードが映し出された。

「机まとめようかしら。」

「お願いします。」

風紀委員の3人が部屋の真ん中にスペースを作ってから、机を3つと1つが向かい合うように並べる。私は先に一つの方に腰を落ち着け、3人に座るよう促した。真ん中に後藤さん、左右にそれぞれ園さん、金春さんが座る。

「よろしくお願いします。」

「こちらこそ。」

「……さてだらだらと話す時間もない上、現職のお二人もいることで

すし、こちらから如何して欲しいかお伝えしましょう。

まずは今回の蜂起に参加した者の一部を風紀委員会に引き戻して欲しいです。これから労働時の見張りなどとして頂きますし、それに前例が出来てしまった以上、次の蜂起にも備えねばならないので、人員を増やし力を回復して貰うに越したことはありません。条件についてはこちらの書面に記しましたが、何かあれば詰めていきましよう。

それと率直に言えば、後藤さん、金春さんのお二人には風紀委員会の委員長、副委員長を退いて頂きたい。まあ理由はお分かりでしょう。」

「……え？」

後藤さんの首が少しこつちに突き出された。

「どうしたの、ゴモヨ。」

「だって……小山先輩あの時、追求するつもりは無いって……」

「口約束は約束ではありませんよ……というのは冗談ですが、確かに風紀委員会が生徒会を打倒すべく蜂起する計画を練っていたことに關しては、誤解も解きましたし目を瞑ります。しかし貴女がたが分断された風紀委員会を纏めきれず、今回の蜂起に繋がってしまったことについては、責任を取って貰わねばなりません。」

「……生徒会打倒？」

園さんが右眉を吊り上げる。彼女にとって今回の蜂起は、風紀委員の一部が勝手に起こしたものだ、という理解だっただろうから当然である。私の方へ向けていた顔を隣へ回した。

「……………ゴモヨ、それは貴女を中心にして計画したの？」

「……………そうです。」

「いつする気だったの？」

「……………配給開始から一月後です。その時ならば蜂起の正統性も立てられると」

急に立ち上がった園さんの右手が後藤さんの左頬へ振り下ろされ、風船が割れるような音がその部屋に鳴った。

「馬鹿じゃないの！」

叩かれた当人は何をされたか分からず、ただ痛みのある所を撫でる。

「なんで角谷会長の在任中に蜂起なんて馬鹿なことするのよ！学園艦を救ったあの人がいる間は、どう考えてもそれに反抗する正統性なんて得られるわけ無いじゃない！」

「しかし調査で儉約体制、統制体制を導入する原因に関する情報を隠しているのは明らかでしたし……こんな状況とは知りませんでした……食糧の備蓄量を考慮に入れるとその限界までには生徒会が得た情報は公開されるべきでして……」

「黙りなさい！風紀委員会がかつての権限を取り戻し、学園の風紀を強固にするのは、角谷会長が辞めて戦車道目当てで生徒が増えてから良かったのよ！それの方が確実に権限を拡大する正統性を得られるじゃない！」

「……」

「それで開校時の誉望を勝ち得る。それが風紀委員会が取る道だったのよ。たとえば生徒会の指示に頭を下げ、さらに学園の情勢が良くなかったとしてもね！」

「……面目次第もございませぬ。」

後藤さんもその隣の金春さんも顔を伏せたまま動かない。肩を下させつつ荒く息をする園さんは、一度深く息を吐き出してから席に座りなおした。

「……小山さん。」

「何でしょう。」

「私は新委員長への就任の件についても受けるし、これだけのことをしでかした上、現状は信じがたいけど危機的である以上、これからも生徒会の指示の下風紀、治安維持に努めるわ。だからそちらが持っているまだ公開していない情報と、我々の力を回復させて何をさせるのか、それを教えてくれるかしら。」

なるほど、自分から本音を見せつけ、代償としてこちらの本音を求める。単純だがな悪くない。話を受けるならそんな事せずとも話したのだが。

私は一度立ち上がって扉を開け、左右に人がいないことを確認した後、内側から鍵をかけた。

「どうしたのかしら?」

「あなたがしてくださった話は弾けた夢ですが、私がこれから話すのは学園の今後、引いては学園の地位に関わる事項です。情報の秘匿には万全を期したいんです。ここから先は内密にお願いします。少し長くなりますがよろしいですか?」

私は彼女の顔を正面から覗き込む。向こうは動じることなく背もたれに身を預けた。

「まあいいわ。それで学園の今後は万山群島、でしたっけ?そこに移るはずよね。」

「それは学園都市の話です。会長は群島のさらに奥、大陸で要職に就く予定です。」

「予定、ということはまだ未定ということかしら?」

「ええ、実は学園がここに残るかはまだ最終決定ではないのです。その最終決定は会長がただいま向かっているであろう南京にて行われます。我々が頼る西南政権の上にある南京国民政府に許可を貰わねばならないので。」

万が一、万が一ですがその決定が拒否されたら学園に混乱が生じます。その時のための抑止であって欲しいというのが一つです。」

「……失敗したら厳しいわよね。」

「正直その通りです。少なくとも食糧の購入が出来ねば学園は保ちません。ですがそういう時だからこそ混乱は避けたいのです。」

それともう一つ理由があります。実は驚くべきことに、それが許可された際、会長は向こうの西南政権でトップに就くそうなんです。」

「トップ?向こうの政権の首相になるってことかしら?」

「だいたいそんな感じですよ。どうやら向こうでは二つの大きな派閥があるようで、組織の改変を機に、それを纏めるべく中立の会長をトップに就けたいそうなんです。」

正直私も分かっていないが、今知っていることは伝えていく。

「それがどう風紀委員会に関係するのよ。私たちは暫く学園の風紀、

治安維持や見張りで手一杯だと思うわ。大陸での政権なんて絡みようがないわよ?」

「それには向こうの事情を話さねばなりませんね。西南政権は中国南部の広東省と広西省を治める、南京国民政府からの半独立政権なのですが、軍事的、経済的に南京国民政府から圧迫を受けているみたいなんです。」

「それで半独立状態を守る為に、学園艦と会長を利用するということ?」

「そんな感じです。この二つの派閥、それぞれ広東の陳濟棠氏の軍閥と広西の李宗仁氏の軍閥なんですが、軍閥の名の通り彼らは直属の軍を保有しています。」

それに対して会長は身一つでそこに参加せねばなりません。会長が政権内で一定の発言権を持つ為には、軍とまでは言いませんが実力行使が可能な組織を配下に欲しい。」

新学園都市が生活可能な程まで整い、授業が再開されてからで構いません。会長直属の治安組織として力を発揮して頂きたい。だからこそ今から風紀委員会を拡大し、力を回復して欲しいのです。」

「……つまり警察、角谷会長直属の警察になれってこと?流石にそれは考えさせて貰うわ。風紀委員長と成るからには委員の安全も考えなくてはならないし、それも大分先の事でしょう?直ぐにはいとは言えないわ。」

「それは構いません。ですが念頭には置いておいてください。その役割を担えそうなのは少なくとも私にはあなた方以外思いつかないのですから。」

「それより会長が許可を貰えることを願うしかないわね。」

「それは最もなのですが……今後ですが、後藤さん、金春さん?」

「は、はい?」

半ば呆然としていた二人は言葉に反応して揃って勢い良く上半身を起こした。

「お二人には辞表の提出という形で委員長、副委員長を辞職して頂きたいです。今日にでも。その後そちらの会則第3条に基づき新委員

長、副委員長を選出して下さい。副委員長は園さん、考えていらつしやいますか？」

「そうねえ……正直この2人と治安維持担当の3人が候補から欠けているのは痛いけど……確か蜂起の時にグラウンドに居たの、サド美だったわよね？」

「はい。」

「だったらその功績を買って副委員長に登用しましょう。」

「しかし彼女、担当が小学校風紀補佐ですので、副委員長に出来るほどの支持が得られないのでは？」

「基本私が仕切るから大丈夫よ。基本は真面目だし、大担当が欠けるんだから何とかなるわ。」

「それならよろしくお願いします。お二人は早急に辞表を提出し、総会を開くように。」

「……もし開かなかつたら？」

「総動員体制の生徒会権限で、船内の鉄鋼切り出しに参加して貰います。」

「……我々が蜂起勢を撃退した部隊とのお忘れでは？」

「それを止められなかったあなた方に誰が付いてくるでしょうか？しかもまだ怪我人も多いというのに。その程度の数なら生徒会の者が一致すれば跳ね返せます。もつともそんなことはしたくありませんが。」

出来るだけ刺々しく伝わるよう口調などを意識する。

「ゴモヨ、辞めなさい。見苦しいわよ。」

「……了解しました。直ぐに手続きを開始します。」

「そうして頂けるとありがたいです。こちらから話せる事は他に特にありませんが、そちらからはございますか？」

「いえ、無いわ。蜂起参加者の風紀委員会復帰に関しては私がするわ。条件もこれで問題無しよ。」

「それは何よりです。ではそのように。私はこれで失礼します。例の件、考えておいてくださいね。」

「考えてはおくわ。私が成ったら即座に伝えるからよろしく。」

私はそれに右手を軽く上げて応じ、机を共に戻して彼らを先に退出させた後、扉の鍵を掛けた。

この計画が本当に成り立つのかは分からない。たった200人程の小さな委員会で何万という軍を配下に持つ人々に抵抗なんて可能なのだろうか。学園での状況が丸く収まったら風紀委員会はさらに拡大する必要があるかも知れない。そして拡大した後、まだ彼女らは我々の下についているだろうか。

私は生徒会室に戻るべく鍵を握り直し、歩みを進めた。彼女のいう通り、今はまだ考えるべきでは無いのかも知れない。

2日間の予備会議は今日で終わりを告げた。この間に蔣氏は各所と多様な議題について調整や議論を交わしたそうだ。その一つが我々両広にまつわることである。

結果的に言えば、この話は通ることになった。色々な条件がつけられたが、取り敢えず陳済棠氏と李宗仁氏による広東省、広西省の支配は存続する運びになった。主な条件は次の通りである。

- ・西南政務委員会 of 両広政務委員会への改称（雲南省、貴州省、福建省への支配権を正式に放棄）、西南執行部と統合
- ・両広政務委員会の大洗女子学園の保護権を承認
- ・南京国民政府、蔣介石政権への帰順
- ・共産党掃討作戦への増派、対日戦への絶対協力
- ・鄒魯、胡漢民両氏（共に国民党の元老）の南京国民政府への復帰を支持

- ・南京国民政府に許可を得ない海外借款の禁止
- ・寧漢鉄道（広州〜武漢）の早期開通に向けた相互協力
- ・財務部改革幣制令の両広地域への即時適用、広東省、広西省、広州市立銀行の所有する現銀の回収（法幣の両広地域への即時普及、銀の使用の禁止、両広地域での独自紙幣の廃止）

- ・両広地域における南京国民政府による徴税を承認
- ・大洗学園艦から得られる鉄鋼の配分比は南京国民政府と両広政務委員会で9：1、可能な限り提供すること

・シヤム国民党における陳守明派（蔣介石派）への支持

簡単に言えば軍事、内政における独自性は維持出来たものの、経済は浙江財閥系が握る法幣の影響下に、さらに借款に南京国民政府の義務が必要となったことで、独自外交も封じられたことになる。経済が握られるということは、軍を維持する為の金を掌握されたに等しい。だがこれでも軍事侵攻の末に吞まされるよりもマシなのである。

私角谷杏にとっても内政の独自性が守られれば、一応得た発言権を使って大洗の存続の為に手段が打てる。有難いことだ。ただしこれに条件が付いた。私がこの両広政務委員会の委員長に就く際、当然だが中国国民党の党員にならねばならない。その為に私は中国人となるそう。

私は中国風の名前に改名し、今回の代表大会で中国語で就任における演説を、中国人と見えるようにすることで承認する予定だそう。国民が反日を望んでいる以上、間違っても私が日本人だとバレてはならないからだ。

これは困った。私は中国語など話せない。しかもそれが19日、たった5日後である。

どうしようかと考えた末、まず冷泉ちゃんに原稿を書いてもらい、その発音を張さんに教えて貰い、その音読を繰り返してなんとかすることで決着した。アルファベットに音を見分ける点を打つことで「マ」だけで4種類ある中国語を見分けようというのである。

しかし同時に私は傍聴者としてはあるが、情勢を詳しく知る為の代表大会に出席しなければならぬ。果たして満足な練習時間を得られるのだろうか。

私はその日を過ぎたら、J u · x i n g（角 杏）となる。ならねばならない。これが私の大勝負だ。今度こそは西住ちゃんに頼ることなく、この角谷杏が勝利を勝ち取るんだ。

この日からも生徒会は事務処理に忙殺され続けた。

予期されていたことではあるが、どう見ても動員された人々の労働効率が落ちた。簡単に言えば、被服科から生み出される服の数が初日から3割減つたのである。ここでひとつ喝を入れたいところだが、それを入れられる風紀委員会は組織改編の真つ最中である。ただ耐えるしかない。その材料となる布地さえ十分確保している訳ではないのだから。

そう、真つ先に出る問題は授業を止める程の緊張状態に相応しい程の動員を必要とする仕事が多分でないことである。被服科だつてせいぜい3桁いれば十分であるし、船内の鉄鋼の切断や水産科の手伝い、商品の売り込みなどは専門技術を必要とする。輸送など専門技術を必要としない所でさえ、少なくとも体力がいる。おまけに農業科は追加の人員を現状必要としていない。

緊張状態が続かねば、生徒会がすべての権限を握っている理由がなくなる。それをもとに反発されるのだけは避けねばならない。だが島に送り込もうにも向こうは大人数を受け入れることは出来ない。

ではどうするか。無理にでも仕事を創り出すしかない。半ば本末転倒であるが、戦車道の関係上会長があのように発表した直後に導入せざるを得なかったのだから、今更どうにもならない。一応方法はある。

一つは輸送を人力で置き換えることである。どうせ人の燃料たる飯は配給分だけなのだから、それで石油が減らせるならこちらとしては有難い。しかし住民の不満は免れない。

もう一つは農業科に無理を言つて投入し、向こうで育てる為の苗の栽培する農地をより拡大することである。しかしこれには農業科の支えが不可欠であるし、試しに話した所向こうでの水の手配の安定化と十分な肥料を寄越すのが最低条件だそうだ。前者は淡水化装置の移設で何とかならなくもないが、後者だけは生ゴミで堆肥でも作らないと他に手がない。リンや窒素なんか貴重品である。

結果商業科に頼み、回収時のトラック輸送の多くを手置き換えて増員して貰った。効率なんかゴミ箱に投げ捨てた。燃料保存という大義名分もある。そして数日毎に働く人を入れ替えることにした。また被服科にも服をたたむなどの単純作業にて人員を拡大して貰った。これも人員を交代することにしたのだ。

残念ながら船舶科の鉄鋼輸送は人力では、出来る人に限りがあるとして拒否されたが、全体が増えただけマシだ。そして定期的に入れ替える人員の選定の仕事は、生徒会にのしかかったわけだ。

こうして部分的に解決されたが、本質的には住民を島に送り込んで開発を進めなければ意味がない。早く、少しでも早く第2波を送り込みたい。

他にも問題はあある。いつ原子力エンジンを止めるか、石油の備蓄はいつまで保たせるか、漁業をした場合の配給方法は、魚の種類、個体による不平等をいかに埋めるか、若しくはほっとくか、保存食にする際にどのような手法を取るか、島に移る際にどれほどの荷物の持ち込みを認めるか、大陸とより頻繁に連絡出来るようにする為の手段は何か、塩田開発をどこに任せるか、生徒会の増員をするか、ゴミの回収処分をいつまで続けるか、島に移った後の居住先をどう振り分けるか、町内会は存続させるか、物は売れるのか、技術者となれる者はいるのか、そしてそもそも我々は本当に移転出来るのか。

最後は会長が良い返事を持って帰って来なければいかなる手も打てない。他の問題の解決か判断を進めつつ、その時を待つかどうか。

この間に風紀委員会では緊急総会が開かれ、後藤さん、金春さんの辞表の受理と、園さんの風紀委員への復帰と風紀委員会委員長への就任、また佐渡さんの風紀委員会副委員長の就任が過半数の支持を得て承認された。

就任を受けて園さんは組織の改変に着手した。今回の蜂起側に参加した担当長の委員会から正式に追放し、その中でも大規模な中学治安維持、高校治安維持、学園艦治安維持の3担当は解体し、店舗運営補佐も含めて学園治安維持担当に統合、そして後藤さんが新たにここ

の担当長に、矢暮さんが副担当長に就いた。条件に合った人員や高3生の復帰などで規模が拡大したら、見張り担当、鎮圧即応担当などに再分割するそうだ。

その次の日には逃げていた最後の担当長、浜公子が艦内の倉庫で確保された。この者が蜂起側のうち最後まで逃げ続けた者では無かったが、これで彼らが再び蜂起する可能性は潰えた。担当長は収監後の態度次第では特別風紀指導の対象になるだろう。彼女らに復帰の道はない。

18日には第1波を乗せていた輸送船が漁獲調査を終えて帰還した。荷物を島に運ぶだけでゴムボートが沖合と島を少なくとも10往復したようだ。しかし第1波が上陸したことで拠点は確保した。まずは大万山島の南西部にある湾を中心に中心部に向けて広げていく予定である。

漁獲調査の結果は上々だったようだ。海鮮料理も多い広東料理の母たるこの島付近の海は、気候が温暖であるのと大陸棚が広がっているお陰で良い漁場になっている。魚の種類も量も豊富で、生活の支えには十分なるだろう、とのことだ。水産科が大規模な養殖場を設置するのを計画している事もあり、向こうからの食料購入量を減らすことが出来そうなのは喜ばしい。

船舶科には輸送船の簡単な整備の後、島への浄水と仮説住宅の追加輸送と共に、会長を広州へ迎えに行つて貰う。雨は派遣後に降つたから大丈夫だとは思うが、タンクがまだ設置されていなかった場合に対処しておく。帰りには広州で約束された物資を受け取る予定だ。容量が足りなければ漁船として運用予定のもう一隻も向かわせる。

これと同時に無線を島と繋げる方策を実行する。現在のアンテナは艦橋の天辺にあるのだが、それでも島まで電波は届かない。その為に仮ではあるが中継拠点を途中に浮かべることが計画され、実際に試験機械を投下することになった。

電波を中継するアンテナを工学科の協力の下一つ取り外し、電波を中継出来るようにして貰う。それをビニールプールを分厚くしたようなものに乗せて、潮に流されないように重りを垂らして浮かべるの

だ。もつとも使っているのは電池であるし、将来的には艦橋の天辺のアンテナの通信可能範囲を広げるのが最善だが、今はここから運び出すものに関して密に連絡を取れるようにするだけで良い。船が帰るまで状況が分からないよりありがたいのだ。

そしてこの船も次の日には出港していった。

前回の中国国民党全国代表大会は1931年に行われた。その時は汪兆銘らを中心に広州国民政府が組織されており、彼らとの妥協も兼ねて南京と広州で日程を分けて行ったそうだが、今回の第五次全国代表大会は全日程がここ南京で行われる。

2日間の予備会議を終えて始まった本会議では、まず国民政府主席の林森が開会を宣言した。赤い服を着せて恰幅をさらに良くすれば冬の街角に立ってそうである。次いでかの孫文の息子孫科が中央執行委員会を、張継が中央監察委員会を代表して党務報告を行なった。この中で孫は中華民国憲法の制定に関しても触れた。大統領が実質的に実権を有するものだそうだ。

翌日は蒋介石が中央の政治について、また何応欽が軍事について報告した。何応欽の報告の中心は6〜7月にあつた河北からの撤退に関するものであり、半ば内政干渉ではとの疑問には、日本からの要求を自発的に履行したと応じた。

1日の休日を挟んで翌日から会議が再開された。しかし会則の変更など主眼となりそうなことはあまりなかった。

この日までに陳さんや李さんのツテを通じて多くの人物と面会した。

まずは閻錫山。彼は山西省を中心に華北の一部を掌握しているが、保境安民を唱えて山西省を模範たる省に育て上げた。その能力と実績は評価に値する。さらに山西省は河北や共産党の拠点とも近く、情報を得るにも有り難い存在だ。蒋介石に睨まれないようにはあるが、緩やかに連携を図ってみよう。

次いで孔祥熙、小太りなこの人物は財政部長を務め、今回の幣制改革を主導する人間の一人である。広東や広西でも正式に法幣を採用

する流れとなり、その為に調整の場が設けられた。ここでは私が口を挟む機会は無かったが、陳さんや李さんを通じて導入に関する調整を行ったそうだ。細部は銀行間で詰めるらしい。これで両広は浙江財閥に経済的に握られることとなるだろうが、日中戦争で長江下流、中流域が荒らされたら、香港に近い広州にもチャンスがある。

他にも孫科などにも面会する機会があり、彼曰く今後暫くは蒋介石独裁への動きは止まらないだろうとのことだった。

会った中で特に目立つ人物はドイツのフアルケンハウゼン氏だった。陳さんからは今回の条件によってドイツからのさらなる借款やドイツ資本による工場建設は厳しくなった、と伝えていた。私も取り敢えず英語で自己紹介して握手を交わしたが、背も高く正直無愛想な感じだった。

別れた後陳さんが感じ悪そうな顔をしていたので訪ねたところ、彼が先代と同様予定の2倍の給与を受け取っているからだと言った。もつともその分役に立っているから何も言えないそうだが。

その間に、私は張さんの発音に記号をつけた紙を見ながら、宿泊先で冷泉ちゃんと共に音読を繰り返していた。

翌日、遂に私が話さねばならない日が来た。この日はまずは蒋介石が再び壇上に登った。彼が報告するのは外交に関するものである。

「……我々は和平が完全に絶望となる前には決して和平を放棄してはならないし、犠牲は最後の最後まで、むやみやたらと犠牲を口にしてはならない。しかし彼の国が我が国に止め処なく侵攻を開始し、即ち最後の最後という段階に達したならば、党と国家の命令に服し、最後の決心を下す。」

こう言って演説を締めた。日本が河北への影響力を拡大している以上、それ以上の南下に対しては何か手を打たねばならない。しかしその為には残存赤匪を駆逐して背後を固めねばならない。これがこの蔣の意思であり、この考えのもと現状の国民政府は回っている。

この後にある案が提出された。その名は

『切？ 推行地方自治以完成？ 政工作案（地方自治をしつかりと遂行し、訓政活動を完成させることに関する案）』

である。実はこの案の中に今回の両広政務委員会の設立と大洗の参加及び学園都市建設の許可に関することが記載されている。これが可決されねばならない。

その為にまず陳さんが壇上に立ち、今回の両広政務委員会の設立及び大洗の受け入れに関する経緯を話した。

「……訓政、ひいてはその先へ我が中華民国を発展させるべく、商工業の統制と交通の整備を完遂せねばならないのです。……両広は日本からも共産党からも影響の少ない地であるからこそ、ここでならば統一中華完成後の未来を見つめることが出来ます。……」

事前に言った通り私たちが日本から来たことは伏せてくれている。もつとも、お偉いさんがたは知っているだろうが。何れにせよ我々はここに来た以上、この場所存続の為に全力を尽くすだけである。新学園都市が安定したら可能な限り援助すると言わなくては。

次いで李さんがそれに伴って為された南京国民政府との合意について説明した。

「……我々は蔣氏による赤匪の撲滅を支持します。その為に必要とあらば、我が広西も礼送出共の考えを捨てて、陝西に部隊を派遣することも厭いません。……」

共産党は恐らく日本と戦う前に根絶出来ないだろう。私はそれを知っている。だがここで少なくとも1948年までいなければならぬ以上、彼らの力が弱まるに越したことはない。

そして遂に私の番が来た。私が日本語ではなく、中国語で演説をする時が。李さんが次が私だと伝えた後、壇上から降りる。三つ折りの紙を片手に、私は太陽の紋章が正面に彫られた卓の後ろに立った。ここから見える顔はあの時よりも少ない。だがそれが成す迫力はそれよりも遥かに大きい。息を深く吸って吐き出す。

「見面初次。是我，前頭那樣被介紹的角杏。」

（お初にお目にかかります。私が紹介されました、角杏です。）

広西大洗奮闘記 オリキャラなどの紹介回

今回も広西大洗奮闘記をご覧頂きありがとうございます。今回は読者様からご要望を受けまして、自身の確認も兼ねましてオリキャラを紹介すると共に、前回の紹介後に出た歴史上の人物を紹介する回です。

所属ごとに紹介していきますので、ごゆるりにご覧ください。

オリキャラ紹介

船舶科

艦長

長坂 馨（ながさか かおる） 高校2年

船舶科第一班艦長。

9月に先代の引退を機に副艦長から昇格。高1から副艦長を務めていたこともあり、部下からの信頼は厚い。一応船舶科を束ねる存在だが、実際は他の2人の担当の時間は業務をそれぞれに委任している。

3艦長の中では一番女っぽく、化粧にも興味はあるが、時間がなくて出来ていない。

成績は船舶科内では上位。髪は黒いセミロング。好きなものはマシユマロ。

家族はシングルマザーに兄1人。

大橋 明（おおはし あかり） 高校2年

船舶科第二班艦長。

元々第二班の物品搬入係を担当していたが、先代の引退を機に艦長に昇格。性格は艦長の中で一番真面目で、融通が利かないことから一部生徒からは堅物と呼ばれている。

成績は船舶科内では中程。髪は薄い茶髪で短め。メガネをかけている。

元々物品搬入係だった為風紀委員会の資材検査担当と面識があり、船舶科の情報統制の際に風紀委員会との中継役を担っていた。

好きなものは煎餅。家族は父母のみ。

井上 佑月（いのうえ ゆずき）高校2年
船舶科第三班艦長。

元々第三班の操舵係を担当していたが、先代の引退を機に艦長に昇格。性格は艦長の中では一番ズボラで、部屋も控えめに言って綺麗ではない。が、天気の子測と操舵術に於いては船舶科の中でも群を抜いて優れており、大万山島への第一波の輸送船船長も務めている。

成績は赤点ギリギリ。髪は黒い短髪。海藻が苦手。背が146cmと低め。

家族は父母に兄2人に姉1人、弟1人。
一般乗組員

山本 礼子（やまもと れいこ）高校2年

長坂班にの操舵係に所属。

角谷会長が上海に行く時の輸送船の乗組員の一人。

操舵に関しては非常に優秀である。髪は黒い短髪。仕事では真面目だが、普段は快活な性格。他学年とも広い交友関係を持つ。成績は上位。

中学の時に父を喪い、高校に上がる時家計のために学費の無い船舶科に転科した。そのことを話されることを嫌がる。

麻子の中学時代の友人で、麻子のことを「レッちゃん」と呼ぶ。

甘いものは自分からはあまり食べないが、麻子と出かけた時はよく食べた。

田中 凜（たなか りん）高校2年

長坂班にの操舵係に所属。

角谷会長が上海に行く時の輸送船の乗組員の一人。操舵に関してはそこそこ。

髪は茶色の肩にかからない程度のストレート。成績は中程。

実家は大洗の漁師だが兄がいる為、水産科ではなく船舶科に進学した。夢はクルーズ船の船長。

有馬 正奈（ありま せいな）高校2年

大橋班の無線係に所属。

角谷会長が香港、広州に行く輸送船の乗組員の一人。黒の短髪。

成績は赤点になるのが一教科だけで留年を堪えているレベル。好きな船は空母「翔鶴」。手先は結構器用で趣味は兄に影響されプラモデル。実家はシングルマザーに兄2人。

永野 美南子（ながの みなこ） 高校2年

大橋班の操舵係に所属。

角谷会長が香港、広州に行く時の輸送船の乗組員の一人。黒のロングでメガネを掛けている。

成績はそこそこ優秀。犬好き。

将来の夢は学園艦への輸送船の乗組員。それ以上になる気は無い。実家は離婚しており父のみ。

古賀 峯香（こが みねか） 高校1年

長坂班のドック運用整備係に所属。

角谷会長が再度広州に行く時の輸送船の乗組員の一人。一時期操舵係に所属していた為、操舵も一応できる。黒髪の短髪。

気さくな性格で、船舶科では珍しく他の学科との交友関係も広い。高1の纏めの立場でもあり、次期艦長の一人と目されていた。

両親は離婚後それぞれ再婚しており、実家は祖母宅。

三川 和江（みかわ かずえ） 高校1年

長坂班の入港手続き係に所属。

角谷会長が再度広州に行く時の輸送船の乗組員の一人。茶がかつたロングヘア。

物静かであり喋らないが、仕事は的確にこなす為信頼されている。成績は中の上。

家族は父母と姉1人。

工学科

鹿島 穂花（かしま ほのか） 高校2年

学園艦からの鉄鋼切り出しに関するグループのグループリーダー。背は華と比べても高い。

清水 亜紀（しみず あき） 高校2年

学園艦からの鉄鋼切り出しに関するグループのサブリーダー。背

は華と比べても高い。

風紀委員会

江戸川 夢華（えどがわ ゆめか） 高校2年

あだ名はエドム。中学治安維持担当長を務める。おかつぱの長さはそど子より少し長め。

中1から風紀委員会を務め続ける根っからの風紀委員で治安維持担当に入り、先代の引退を機に担当長に就任する。

正統風紀委員会の蜂起を主導した一人で、正門からの突入隊の指揮を執るが、M3を中心とした猛砲撃の前に撤退。翌日に自室で確保される。

趣味は読書。両親は共働きで弟と妹がいる。

名前の由来は聖書に登場するヨルダン南西部の地域名エドムから。

嘉沢 南美（かざわ なんみ） 高校2年

あだ名はカナン。高校治安維持担当長を務める。おかつぱの長さはそど子とほぼ同じ。

中2から風紀委員会に入るが、違反摘発で功績を認められ、高1の時に高校治安維持担当に入り、先代の引退を機に担当長に就任する。担当長就任後も校則違反者や問題生徒を自ら摘発するなど率先して行動し、肝っ玉の強さは折り紙付きである。また裏工作なども得意。

正統風紀委員会の蜂起を主導した一人で、演習場、グラウンド突入隊の指揮を執るが、I V号を中心とした戦車道部隊や、佐渡が指揮する風紀委員会の部隊に撃退され、最後にみほに対して特攻を仕掛けるが失敗し、確保される。

モンブランが好き。家族は父母に姉1人。

名前の由来は聖書に登場する「約束の地」カナンから。

浜 公子（はま きみこ） 高校2年

あだ名はハマコ。学園艦治安維持担当長を務める。おかつぱはそど子より短め。

中1からこの担当に付き続け、先代の引退を機に担当長に就任する。元はそこまで仕事のある担当ではなかったが、風紀委員会の権限

強化に伴い鉄の棒の運用など重要な地位を担うようになった。

正統風紀委員会の蜂起を主導した一人で、蜂起時は嘉沢の家で連絡の統括を担当していた。蜂起の失敗を受けて即座に身を隠し、支持者の支援も受けつつ17日まで逃亡を続け、再度蜂起の機会を狙っていた。

習字が得意。家族は両親と弟2人。

名前の由来は聖書に登場するカナン王国の都ハマトから。

矢暮 久子（やぐれ ひさこ）高校2年

あだ名はヤボク。店舗運営補佐担当長を務める。おかつぱは風紀委員の中でもかなり短めで、黒眼鏡を掛けている。

風紀委員らしくなく生活態度、学習成績共にお世辞にも良いとは言えない。あまり敬語で話さず、文末に「つす」と付けるのが口癖。よくそれをそど子やゴモヨに注意されたが、治す気はさらさらない。

だが機転が利き、情報を正確に理解する能力に長けており、思わぬところで風紀委員会を救ったりする。仕事も一応こなす為、なんだかんだ周りから注意されながらも、一定の信頼を置かれている。

中2から風紀委員会に入るが、理由は「ここにいれば留年は避けられそうだから」。だが他に店舗運営補佐担当の高2が居なかった為、担当長に就任した。

趣味は釣り。家族は両親と兄1人、妹2人。

名前の由来は聖書に登場するヤボク川から。これは現在のヨルダン西部を流れるヨルダン川の支流、ザルカ川（青い川の意味）に同定されている。

ちよつと頭の良さげなペパロニをイメージしてキャラを作った。

佐渡 暁美（さど あけみ）高校2年

あだ名はサド美。小学校風紀補佐担当長を務める。おかつぱはそど子より短め。

中1から風紀委員会に入り、高1から小学校風紀補佐に移りそのまま担当長になるが、実績がなかった為あまり目立たなかった。

しかし正統風紀委員会の蜂起時にグラウンド突入隊から学園を守った功績を買われ、第2次そど子体制の副委員長に抜擢される。

ホラー映画が好きで、上陸した時はよく見に行く。家族は両親のみ。

名前の由来は「ソドム百二十日または淫蕩学校」を書いたフランス人作家マルキ・ド・サドから。

生徒会

峠 美津子（とうげ みつこ）高校2年

生徒会の一人。肩までかかる黒髪に黒眼鏡を掛けている。

中2から生徒会に所属し、生徒会の実務を担い続けた。物静かで自分から何かする性格ではないが、実務能力においては信頼されており、角谷会長が廃校回避後の安定した運営を狙って次期生徒会長として指名した。

現在は動員人員管理班に入っている。

成績は上位。趣味はジョギング。家族は両親と姉1人。

丹波 那月（たんば なつき）高校2年

生徒会の一人。髪は茶がかつたロングヘア。

中1から生徒会に所属し、生徒会の実務を担い続けた。実務能力は中程だが、物怖じせず意見を言える性格から、この先峠を支える存在として期待されていた。

現在は動員人員管理班に入っている。

成績は中程。山菜が苦手。家族は両親のみ。

三崎 結衣（みさき ゆい）高校1年

生徒会の一人。髪は黒髪の短髪で、茶色の眼鏡を掛けている。

中2から生徒会に所属し、生徒会の実務を担い続けた。実務能力は高く、高1にして物資総合管理班の班長を担っている。

成績は優秀。好きなものはマグロ。家族は兄1人、弟1人。

流山 遥（ながれやま はるか）高校1年

生徒会の一人。髪は黒髪のロングヘア。

中2から生徒会に所属し、生徒会の実務を担い続けた。実務能力は普通より上程度だが、人を説得する力は優秀である。

成績は中程。好きな花はツツジ。家族は弟1人。

選挙管理委員会

岩城 昌（いわき まさ）高校2年

選挙管理委員会委員長。黒髪の肩までのセミロングで、眼鏡を掛けている。空気は読める。

先生

松阪 忠良（まつざか ただよし）36歳

大洗女子学園英語科教員。体格はスラツとしており、スーツが似合う。

一時期台南と北京にそれぞれ住んでいたことがあり、お陰で一応簡体字、繁体字が書け、北京語を話せる。

基本的には生徒の自主性を重んじる教育を支持しており、今回の件についても教員に角谷会長を主導に行うことを認めるよう説得した一人。

ソフトボール部の顧問を務めており、部活がある時は指導に加わる。独身。

官僚

高谷 正嗣（たかや まさつぐ）54歳

文部科学省の官僚で、辻の上司にあたる高等教育企画課長を務める。

省内エリートの人であり、上り詰めるために悪どい手も厭わない。今回も文部科学省の失敗を潰すため、研究開発基盤課に手を回し、バミューダの使用権を手に入れた。

一応天下りには絡まなかった模様。

実在の人物

張群（ちよう ぐん）字 岳軍

中華民国の政治家。蒋介石の側近。

四川省成都の役人の家に生まれ、軍人を志し蒋介石らと共に日本に

留学した。辛亥革命にも参加するが袁世凱の軍に敗れ日本に亡命、陸軍士官学校に入学した。

帰国後は一時期北京政府に加わることもあったが、北伐後は蔣介石と行動を共にする。その日本語能力を買われ、特に日本との交渉に従事した。1935年末に汪兆銘狙撃事件を受けた組織改編で、その後任として外交部長に付いた。

終戦後、国共内戦を経て台湾へ逃亡。国民政府の要職を務めると共に、日本との交渉も務める。

1990年、台北にて病没。102歳。

繆培南（ぼく ばいなん）字 経成

中華民国の軍人。粵軍（広東軍）出身。

広東省嘉応の生まれで、辛亥革命後に軍人を志し、保定陸軍軍官学校で学ぶ。北伐に参加し、一時期広東省での内乱に加わるも、蔣介石に屈服し、北伐に再び参加する。

後に病氣療養の為香港に行くが、回復後陳済棠に招聘され、両広事変までこれに従う。

日中戦争中は国民革命軍の軍人及び政治家として働くが、終戦後1949年に職を辞して家族と香港に移住する。

1975年、香港九龍で病没、76歳。

李桂丹（り けいたん）字 不明

中華民国の空軍パイロット。日中戦争初期に活躍したパイロット「四大金剛」の一人とされる。

遼寧省新民で生まれ、7歳で父を亡くし母の手で育てられる。中央軍官学校に入るが、優秀だった為中央航空学校に転学し、卒業後も教官として止まる。

日中戦争開戦後すぐに日本の空軍機を1機共同で撃破、1機共同で大破させ、一躍英雄となる。

しかし翌年武漢での航空戦で撃墜され死亡。24歳。

1935年に大校飛行場にいたかは確証が持てない。

孫科（そん か）字 哲生

中華民国の政治家。

孫文の子として広東省広州に生まれる。4歳の時からアメリカに渡り、現地で教育を受ける。若い時から中国同盟会に加わり、その一員として孫文を支え、臨終を看取る。

北伐時は国民政府の一員として手腕を振るうが、1931年に胡漢民が軟禁されると汪兆銘らと広州国民政府を樹立し反蒋介石運動を行う。後に満州事変を機に大同団結し行政院長となるが、一カ月で失敗に終わる。

1933年に立法院長となり、中華民国憲法の策定作業を進める。当初総統が権力を有しない議院内閣制の統治機構を志向していたが、蒋介石の反対で総統が実質的権力を握るように改めさせられた。この憲法は1936年5月5日に公布されている。

日中戦争開戦後はソ連との関係構築に力を尽くし、中ソ相互不可侵条約の締結と援助、借款取得に漕ぎ着ける。

国共内戦の最中蒋介石が下野し李宗仁が代理総統となるが、馬が合わず下野。フランス、アメリカに移住する。

後に台湾へ移り、1973年心臓病により病没。81歳。

何応欽（なん おうきん）字 敬之

中華民国の軍人。蒋介石の片腕とされる。

貴州省興義の生まれ。軍人として貴州、武昌で学んだ後、日本に留学し蒋介石と知り合う。

北伐時は蒋介石を支える立場としてその勝利に貢献し、北伐完了後も総参謀長としてこれを支える。

満州事変後は北京に赴任し、蒋介石の安内攘外路線を守りつつ、日本との交渉にあたる。

日中戦争開戦後は軍制、計画、指揮の責任を負う形で中国軍の指揮を執り続け、日本降伏後は中国内陸部の日本軍の帰還を遂行した。

その後は軍内の対立で敗れ罷免され、後に復帰するも台湾へ逃亡し、その後も蒋介石を支える。1987年、台北で病没。98歳。

閻錫山（えん しゃくざん）字 伯川

中華民国の軍人。山西派の指導者とされる。

山西省代の地主の家に生まれ、軍人を志し日本に留学、孫文と知り

合う。

辛亥革命に参加し、その後袁世凱から山西都督に任命され、軍権を握る。この山西省での閻による支配は中華人民共和国成立直前まで続く。

その間閻は保境安民（山西モンロー主義）を唱え、豊富な資源を元に工業化を進め、山西省を模範省に育て上げる。

北伐時は当初は中立であったが、後に国民政府側に加わり討伐に参加。これにより閻の勢力圏は一時華北一体に広がる。

しかし蔣介石と対立し中原大戦を起こすが敗北。再び山西省のみに勢力圏が縮小する。

日中戦争では地盤の山西に共産党、日本軍、国民政府軍が入り動揺する。日本とは停戦する一方、共産党との衝突は続いた。

国共内戦では残留日本軍も使つて人民解放軍と戦うが、敗れ台湾に逃亡。

台湾では反共記述に専念し、1960年台北で病没、78歳。

アレクサンダーⅡフォンⅡファルケンハウゼン

(Alexander von Falkenhäusen)

ドイツの軍人。

プロイセン王国のシレジア地方のユンカーの生まれ。探検家を目指したが、軍人の道を進むことになる。

日露戦争を機に日本を研究し、1910年から第一次世界大戦勃発までドイツ大使館で駐在武官を務めた。

第一次世界大戦では西部戦線、東部戦線、トルコ戦線の各地で参謀を務める。終戦後もヴァイマル共和国の陸軍に残留。1931年まで残るが、退役に追い込まれる。ナチスには加入しなかった。

1933年に蔣介石の軍事顧問として推薦され、東アジアでの日本の覇権は揺らがないと考えつつもこれを受け入れ。翌年中国に渡る。

中国では軍事顧問団の団長となり、中国軍の育成と基礎づくりに従事した。しかし塹壕戦を教訓に作った南京防衛用のゼークトラインは日中戦争で突破され、ヒトラー政権による中独合作の放棄によりドイツへ帰国する。

第二次世界大戦では北フランス、ベルギーでの軍政を管轄し、ユダヤ人の迫害に務めるが、その遅延も試みた。

戦争末期にはヒトラー暗殺計画に加わるもこれに失敗、起訴はされなかったが強制収容所に送られる。

戦後はベルギーで軍事裁判を受けるが、ユダヤ人を救おうと試みたことや、それまでの強制収容所での拘留を考慮して3週間で解放。余生を西ドイツで過ごし、1966年、ラインラント＝プファルツ州ナツサウで病没。87歳。

戦後も蒋介石との交流は続き、手紙の交換や蒋介石による経済的援助が行われた。

今までの参考文献一覧

客家アイデンティティ形成過程の研究 : 中華民国初期の著名政治家・軍人の出自をめぐる議論を中心に

https://tohoku.repo.nii.ac.jp/index.php?action=repositoryaction|download&item_id=5116&item_no=1&attribute_id=18&file_no=1&page_id=33&block_id=38

1930年代における国民党党内権力闘争の一側面 : 寧粵対立の中の蔣胡合作構想

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/60543/1/15003cheong.pdf>

欧米よりも日本に万事を学ぶが最善だ

広西を模範省に盛り建てた李氏建設の苦心を語る

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?META>

ID || 10106342 & TYPE || IMAGE | FILE & PO
S || 1

ゼークトの中国訪問 一九三三年 —— ドイツ側の政治過程および中国政治への波紋 ——

http://www.seijollaw.jp/pdf/sl_r/SLR-077-005.pdf

2, 国民党重要大会・会議

<http://www.geocities.jp/CollegeLife/7906/2-4-2.htm>

日中戦争と中国空軍

[http://www.koryu.or.jp/08-03-03-01-middle.nsf/1384a27fc66866a14925679800a62f6/398bea4145bfd29f49256f0b002cf44b/\\$FILE/hagiwara2.pdf](http://www.koryu.or.jp/08-03-03-01-middle.nsf/1384a27fc66866a14925679800a62f6/398bea4145bfd29f49256f0b002cf44b/$FILE/hagiwara2.pdf)

支那陸軍の全貌

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID || 10186344 & TYPE || IMAGE | FILE & POS || 1>

中華民国時期海南島の調査・開発について

<http://www.shihoukai-innter.com/chukaminnokokujikikaianntounochousakaihatsunitesuite.pdf>

台湾政府文書から見た冷戦期台湾の民間航空

<http://www.ltcue.ac.jp/home/k>

gakkaishironsyuu/ronsyukeisai/524/oshii.pdf

村嶋英治 著・訳：ウオラサック・マハッタノーボン 共訳・編集
シヤム華人の政治：タイ国における華僑の政治運動 1924年
—1941年チュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センター、バンコク、1996年

http://www.jstage.jst.go.jp/article/seal971/1997/26/1997_26144.pdf

南京政権の鉄道建設と対外関係（下） 一一号漢鉄道への日本の対応を中心に――

http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/31685/1/35(1)-P125-143.pdf

西南支の現状

(1) 広東の人事一新 中央色に塗り替え 幣制改革に宋子良氏の辣腕 広東本社特派員 辻衛

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/dspace/jsp/ja/ContentView.jsp?METAID=10105817&TYPE=IMAGE|FILE|POSS

中関における紙鰐乱行の状況

http://muroran-it.repo.nii.ac.jp/?action=repository|action|common|download&item_id=7306&item_no=1&attribute_id=24&file_no=1

『日中戦争の諸相』軍事史学会 綿正社 1997年発行

学校にあった日中戦争関連本。かなり分厚いので李宗仁関連とドイツ軍事顧問団の所だけ目を通した。

神戸大学は偉大

「見面初次。是我，前頭那樣被介紹的角杏。

（お初にお目にかかります。私が紹介されました、角杏です。）

對要這次，全國代表大會的議題的，『由這個國家接受大洗學園艦』，我作為那個學園艦的領導人真的感到高興。

（この度は、『この国が大洗学園艦を受け入れてくださるか』が議題に取り上げられたことをその学園艦の指導者として、本当に喜ばしく思っています。）

首先？明大洗學園艦的現状。大洗學園艦現在為廣東省的南的東沙群島海上停泊著，如果這個議題被承認，馬上對萬山群島為使學園都市移設，推進著準備。

（まずは大洗学園艦の現状を説明します。大洗学園艦は現在広東省の南、東沙群島沖に停泊しており、この議題が承認されたら直ぐに万山群島に学園都市を移設出来るよう、準備を整えています。）

人口是約3萬人。那個其中普通的學生也在，不過對，這個國家的發展有用的人材也有很多。又有技術的人材，從這邊無條件派出。

（人口は約3万人。その中には一般の学生もおりますが、この国の発展に役立つ人材も多くおります。そして技術を持つ人材はこちらから惜しみなくお送りします。）

如果被這個國家接受，我們為把大萬山島作為中心各個島嶼遷移學園都市，能數年？自給的那樣整理環境，必定此後幾十年也渡行持續還恩。

（この国に受け入れられた暁には、学園都市を大万山島を中心とした島々に移し、数年のうちに自給出来るよう整えて、その後何十年にも渡って恩を返し続けてみせます。）

可以那個的事，會根據能加上那個偉人的名的大學的教授陣容等被表示。

（それが可能であることは、かの偉人の名を冠した大学の教授陣などによって明らかにされるでしょう。）

作為大洗學園都市的領導人在這裡宣言不放棄又做即使有怎樣的事態，對萬山群島移設做的學園都市，與中華民國一起為了雙方的生存和

發展竭盡力量，今後也使之繼續這個政策的。

（またたとえばどのような事態があらうとも、万山群島に移設した学園都市を放棄せず、中華民國と共に双方の生存と発展の為に力を尽くし、この政策を継続させることを、大洗学園都市の指導者としてここに宣言します。）

以及一同我為了這個中華的更成為的發展，兩廣政務委員會的成立會能承認事，實在感謝。如果兩廣政務委員會成立，我就任那個委員長。（それと共に、この中華の更なる発展の為に、両広政務委員會の設立が認められるであろうこと、誠に感謝致します。両広政務委員會が成立した場合、私はその委員長に就任することになっています。）

我外觀那樣孱弱的女人有，不過是一邊得到，陳伯南先生和李德鄰先生等的合作，因為廣東廣西的繁榮，獻出全力。

（見た目の通りか弱い女ではございますが、陳伯南氏や李德鄰氏などの協力を得つつ、広東、広西の成長の為、この身を捧げる所存でございます。）

許多人對小女人而且擔挑政治，地方的主席的有不滿的我很明白。

（私のような小さな女が政治を、しかも一地方の主席を担うことに不満を持つ方が多いことはよく承知しております。）

可是我，想能請從這個？法理解，不過沒有，與兩廣的關係。

（しかし私は、この喋りから分かっていただけるかと思いますが、両広との繋がりは余りありません。）

如果假如我當真？準了權力掌握，下面的日我被槍斃的身姿是浮現在南海吧。因為西太皇后的時代能成為象溯尋一樣的事態不，請放心。

（仮に私が本気で権力の掌握を狙ったとしたら、次の日には私が銃殺された姿が南シナ海に浮かんでいることでしょう。西太后の時代に辿ったような事態には成り得ませんので、ご安心ください。）

我想用這裡表達對我的政治的信念。

（ここで私の政治に対する信念を表したいと思えます。）

杏花飛簾散余春 明月入？尋幽人

褰衣步月踏花影 炯如流水涵青葦

花間置酒清香發 爭挽長條落香雪

山城薄酒不堪飲 勸君且吸杯中月

洞簫聲斷月明中 惟憂月落酒杯空

明朝卷地春風惡 但見綠葉棲殘紅

（杏花が簾に降りかかって春の気配が尽きようとする頃、名月が戸口から入ってきて自分を訪ねてくれた。衣をかかげ月光を浴びながら花の影を踏めば、まるで流水が浮草を浸しているように鮮やかに見える。）

花に囲まれて盃を汲めば清香が発し、なにも長い枝を引き寄せて雪のような白い花びらを盃に落とすこともない。ただこの酒は山中のものとはなはだ薄くて不味いので、せめて盃に写った月影でも飲んでほしい。

洞簫（笛の一種）の音が月明の中でやんだ後に、月影も消えて盃に何も残らないのが残念だ。明朝春風が花びらをことごとく落としたならば、せめて新緑の間に散り残った赤い花でも探してほしい。）

*月夜與客飲酒杏花下：蘇軾の詩を読む

<http://chinese.hix05.com/sushi/sushil/sushil27.getuya.html>
より

這個當然我現在讀的詩沒有。只是引用了那個有名的蘇東坡的詩。在這裡，我是一本的杏的樹。

（これは勿論私が今読んだ詩ではございません。かの有名な蘇東坡の詩を引用しただけです。ここに於いて、私は一本の杏の木でございませぬ。）

杏的樹散_□的白的花將樂趣給予人們。所謂那個樂趣，那為了為民政轉移中華民國需要，不過從自己打算參加，政治秩序的心讓國民出芽。而且需要光是教育沒有，多種多樣東西。

（杏の木が振り撒く白い花は人々に楽しみを与えます。その楽しみとは、中華民國を民政に移行する為に必要な、政治秩序に能動的に参加しようとする心を国民に芽生えさせるものです。それには教育だけではなく、多種多様なものが必要でしょう。）

為了那個獲得粉身碎骨做一方面相當於這個，怎麼風很強地即使吹，

這個中華與紅血肉一起在這個地好好地持續架設根。也由於強的風紅的花即使散落了。

（その獲得の為に粉骨碎身してこれに当たる一方、どんなに風が強く吹こうとも、この中華は赤い血肉と共にこの地にしっかりと根を張り続けるのです。強い風で多くの赤い花が散ろうとも。）

我們必須向民政的轉移慎重有。義大利，德國。這個2國家一同以向民政的轉移作為目標，不過迴轉著，到結果獨裁。不由能幹的人的獨裁雖？壞，不過，我們應該遵照三民主義以民權的伸長作為目標的以上，一樣的道前進防除。

（我々は民政への移行に慎重であらねばなりません。イタリア、ドイツ。この2国は共に民政に移行をめざしましたが、結果独裁に戻っております。有能な者による独裁が悪いとは言いませんが、我々は三民主義に則り民権の伸長を目指している以上、同じ道を辿るのは避けるべきです。）

鴉片戰爭以後這個國家被置於列強國間接的統治下，國民背負了多的苦惱。為了又蔣閣下成為從那個使之擺？這個國家的列強國，通過訓政的指導做多的政策實行的我也很好地知道。

（アヘン戦争以降この国は列強国の間接的な支配下に置かれ、国民は多大な苦悩を背負ってきました。そして蔣閣下がこの国をそれから脱却させ列強国に加える為に、訓政の指導の下多くの政策を実行なさっているのも存じております。）

因此完全為民政轉移，應該對等到這個國家成為列強國國民擔負政治的我們的不安？失。並且我想到那個被達成，以蔣閣下為中心繼續訓政的好。

（従って完全に民政に移行するのは、この国が列強国になり国民が政治を担うことに対し我々の不安がなくなるまで待つべきでございませす。そしてそれが成されるまでは蔣閣下を中心に訓政を続けることが得策かと思いません。）

余誓以至誠，加入中國國民黨為黨員，信仰三民主義，遵行本黨黨章及黨員守則，為建設中華為人本、安全、優質的社會，實現中華民國為自由、民主、均富和統一的國家而奮鬥。？不參加或支持其他政黨，如

有違背，願受黨紀處分，謹誓。

（私は中国国民党党员として加入し、三民主義を信奉し、本党の党規則及び党员規則を守り、中国の建設の為に人間本位で、安全、良質な社会を築き、中華民國が自由で民主的で、国民皆が富む国家の建設の為に奮闘します。決して他の政党に参加せず、支持せず、もし背いた場合は党規則に則り罰せられることを望み、謹んで誓います。）

大洗和中華民國萬？。

（大洗と中華民國万歳。）」

広西大洗奮闘記 72 支援物資

11月20日、空に浮かぶは雲。余り良い天気ではないが、これ以上は崩れまい。波も高くはないし、空気もそう告げていない。

無線の中継所試験機によって島と学園艦が接続可能かどうかを確認し、積み荷の水と仮設住宅をゴムボートで島に下ろした後、これまで行つたことのある古賀に指示を仰ぎつつ、湾内の奥へと船は進む。

珠江河口には大きく東江と西江があり、その境目にあるのがマカオである。黄埔の港に入るには東江に進み、一番大きな水路を選んでいけば良い。

所々に島があり狭隘な海峡も多いが、この規模の船が進める航路はそう多くない。周りに浮かぶジャンク船も余り大きくないのもそれ故だろう。湾の北端に到達したところで船長である私が直々に舵を取り、左に舵を切つて奥に進んでいくと目的の港に辿り着く。いくつかの船着き場には船が停泊しているが、空きも多い。

大洗の校章と信号旗を掲げさせると、チャリー、間を空けてユニフォーム、ウイスキー、2と返つてきた。港湾案内人による手旗信号に従い指定された岸壁に船を接岸させる。いつも船の舷側どころか錨泊地そのもの見えないような学園艦を泊めているのだ。この位はお茶の子さいさいである。

錨を降ろし係留ロープをボラードに掛けて固定する。そしてタラップを降ろさせてから操舵室の外に出ると、船着き場にはすでにスーツを着た人と、その周りに4〜5人の軍人らしき人が細長い銃を携えている。思わず怯むが、銃はこちらには向けられていない。一つ息を吐いてから膝を揃えて敬礼すると、スーツを着た初老の男は和かに敬礼を返してきてくれた。

乗せて来た英語教師を呼ぶよう頼んでからハシゴを伝つて降り、取り敢えず挨拶する為にと用意された紙を取り出す。そしてそこに並べられた言葉を話し始めた。

「えーと……Thank you for coming to meet. I, m Inoue, one of the capt

ain of Orain school ship. I would like to ask you about our relief supplies.

(迎えに来て頂きありがとうございます。私は大洗学園艦の艦長の一
人、井上といいます。我々への支援物資について伺いたいのです
が。)

「I'm Lin, President of Guangdong Province Government. We have started to load them into the transport ship. Can you look at it?」

(広東省政府主席の林です。既に輸送艦に積み始めています。ご覧になりますか?)

「……Y, yes!」

(は、はい!)

何を言っているかの詳細は分からなかったが、取り敢えずプレジデントと言っていたから偉い人だろうとは読めたうえ、何よりこちらに案内してくださるようなそぶりである。

船から降りて来た英語教師の小原と合流し簡単な通訳を依頼して、他の船舶科の者を船で待たせた後、その者についていく。

周りを軍人に囲まれながら話を詳しく聞いてみると、この人は広東省政府主席という立場であり、今回の支援物資の管理も担当しているらしい。昨日学園艦を受け入れる為の最終手続きが完了し、物資を乗せて明後日には輸送艦を出港させる予定だそうだ。

こちらからはそれに関する感謝と、今回の支援物資の量について伺った。その量を小原先生から伺った時はもう一度聞き直した。

- ・米50トン (粃殻付きのまま)
- ・船舶用燃料450L
- ・サツマイモ80トン

思ったよりももらえるものだと思い、再び片言にも程がある英語で感謝を述べたが、通じたようだ。

米が粃殻付きというのは、量は減るがそのまま植えることが可能という点でありがたい。種粃とする分を残しても住人一人につき10合は手に入る計算だ。燃料も生徒会が儉約させているとはいえかなりギリギリだった。ここで貰えるのは非常にありがたい。サツマイモは島に最初に植えるには丁度いいのだろうか。細かいところは農業科に任せよう。

これ以上を望むならここ黄埔に来て広州市商会を通じて取引せよ、とのことだ。そしてその為には金が無ければならない。それは商業科がなすべきことだ。

案内された先には細長い船が一隻停泊していた。その人が言うには、これは海軍の輸送艦『福安』で、これでまずは燃料とイモの一部を輸送してくださるという。残りの物資は『福安』も手伝うが、こちらの輸送船で多くを運んで欲しいとのことだった。勿論貰えるものを貰わぬ道理はない。総動員体制が導入されたお陰で物資を貰っても生徒会による管理体制を解除する必要性が無くなったのだ。おまけに受け取れるなら受け取るように、というのが小山副会長からの指示である。

輸送艦には物資の他に視察団も乗るそうだ。簡単に言えばここ広州が誇る大学の教授たちである。大洗がいかなる学園都市なのか、そして本当に使える人材がいるのか調査する為だという。これもわざわざ断るような話ではない。

考えてみれば人材がいるか確かめる前に支援物資を送ることを決めるというのは不可解な話ではあるが、恐らく向こうもそこまで期待してないのだろう。我々が存在していること、それが向こうの利益なのかもしれない。これは生徒会が関わる話だ。

さつきからずっとどこかに任せているので、私らも自分から行動する。こちらも今からでも支援物資を輸送船に積み始めたいと伝えると、人員は送れないが構わないか尋ねられた。今回は船舶科の者も多く乗ってきている。そんな荷物も運べぬほどひ弱な人間を乗せてきたつもりはない。勿論 yes と返した。倉庫で持ってきた箱の中に芋やら米やらを移し、それを船までリレーする。夜になって船の中で

寝る頃には予定の8割積み終わっており、向こうには結構驚かれた。会長が戻られるのはまだ先になるそうなので、予定通り向こうの『福安』と共に学園艦に入ることになる。

それまでの袋入りのものが減った代わりに、配給に魚が混じるようになった。部位も種類も様々であるが、少なくとも毒になる部分は混じっていない。赤身の時もあるし、脂が乗ってる時もある。これらを捌くために生徒会はさらに住人を動員したらしく、学園艦にも緊張感がいつそう漂ってきた。

学園艦では引き続き服の生産と鉄鋼切り出し、商品の回収などがそれぞれの学科の主導で行われている。私たちも自宅から棚などを提供した。こうしなければ飯がないというのなら仕方ない。

この日の夕方、4人分の配給を受け取った私は仲間と共に家路についていた。もう夕方である。そして帰った後も私には勉強がのしかかる。いやそれどころか授業が終わった後の帰りである現在でさえ、私の手には単語カードが握られている。

繁体字は日本の現在の漢字と一番近い文字だと言われている。だが細かいところで異なっている。例えば『樂』は『楽』になる。だがそれらと日本語と漢字が異なるものを覚えるのが非常に面倒くさい。私たちの今後に関係する軍事で例を挙げるなら、『銃』は『槍』となる。因みに日本語の『槍』は『矛』となる。訳がわからん。文法がほぼ漢文と同じなのが救いであろうか。

「……エルヴィンさん、真面目だね。」

隣から単語カードを覗き込む者がいる。私たちの隊長である。

「まあ、向こうの軍人になるからには、出来るだけ向こうの人と話せたほうが良いだろうからな。ドイツに行きたいならこつちで優秀でなくちゃならない。」

「軍人かあ……正直実感湧かないなあ。日常的に何しているんだろう。」

「訓練とか演習とかだろう。あとは地位が上がれば政治関係のことも

出てくるな。」

「それは嫌だね……」

「確か軍事学校に行くって話だったよね。」

「南京には確か陸軍軍官学校があったはずだが、広州にも陸軍軍官学校があるのかもしれない。どっちに行くのかは分からないな。」

「中国語も難しいですが、軍事ではとにかく戦車道で学んだことも使いつつ、頑張るだけです!」

磯辺さんは見る限り自分から軍人になることを了承したのか疑わしくなる時があるが、澤さんは教室でも言っていた理由からかかなりやる気がある。士気があるのは望ましいが、無駄に命を張ろうとしたりしなければ良いのだが。

さてこの4人は軍人として大陸に行かねばならないというだけで、自宅がそれぞれ近いわけではない。では何故一緒に歩いているかというところ、今夜私のシェアハウスと一緒に食事をしようという話になったからである。明日は7日間続いた繁体字の授業も休みとなる。また明後日から7日間授業は続けられるが、それでも折角だから集まろう、と隊長が提案してくださったのだ。

玄関に踏み入れると、カエサル、左衛門佐、おりょうの3人が入り口で待っていた。各々の分も含めて配給された食糧を手渡すと、今日は3人で食事をするから待っている、とのこと居間に4人揃って通された。低めの机を前にしてそれぞれ腰を下ろす。

「いやあ、濟まないな。あまり綺麗な家じゃなくて。」

「いえ、エルヴィンさんありがとうございます。わざわざ自宅をお借りしてしまって。」

「あ、いや、隊長に謝ってもらう程では……まあ、くつろいでください。」

「ではお言葉に甘えて。」

やはり名家の出身ゆえか、隊長はとても礼儀正しい。その後は4人でたわいのない話をしつつ、料理が出来るのを待った。

間も無く食卓に確認が持ち寄った食材による料理が並び始めた。まずは各自に茶碗に入った飯と取り皿、あとは箸が並べられる。その後大皿入りでおかずが並び始める。

まずはタイの親戚のような魚の蒸したものだ。これは私が持ち帰った4枚の魚の切り身をそのまま薄く味をつけて蒸したものだ。今日の配給の中に白ネギが混ざっていたのもこの料理にした理由らしく、魚の脇には一緒に蒸された緑の葉、上にはさつと水に通された白髪ねぎが乗っている。

残り3枚のサバのような魚はそれぞれ背骨に直角に、普通の2枚は半分に、一番大きな1枚は3等分になるよう切ったあと塩焼きに。そして先ほどのタイのような魚はとった骨を中心におりようがアラ汁にしてくれた。久々に腹いっぱい食べられそうである。

あとは配給で配られた人参や茄子、キャベツなどの野菜の炒め物と作っていた漬物、これで全てだ。あとは各自に緑茶を配れば完了である。そしてカエサルの前に最後の緑茶が置かれ、皆その時いた場所の近くの皿の前に腰を落ち着けた。

飯のいい匂いが居間に充満する。つばが口から漏れ出ぬように気をつける。昼間ずっと慣れぬ言語を必死に勉強した頭には、もはやそれを感じるくらい力しか残されていない。が、ウチに呼んだ人としてその前に一言でも話しておかねばなるまい。

膝に手をつけて立ち上がると、残り7人の視線がこちらを向く。

「えっと……今日で繁体字の特別授業が半分終わりました。お疲れ様でした。まだまだ残り半分ありますが、明日も休みですし料理も3人が腕をふるってくれたので、疲れを癒す意味でもまあ、楽しんでいただくさ。それでは、いただきますしよう。」

「いただきますーす！」

皆揃って手を合わせ、箸を手に汁に手を伸ばす。私も腰を下ろし正座して手を合わせ、左手で箸を取り、右手でお椀を取る。縁から口に含んだ汁から、そしてそれが移った口内の空気から広がるのは魚の出

汁。脂の感触なく舌にも残らない一時的な快感。『たのしさ』ではなく『うれしさ』。

美味い。

味噌は入っているが、この短時間であるが寧ろ発酵でも誘ったかのように出汁を引き立てている。魚が新鮮で良いものだったからなのだろう。水揚げしてすぐ動員された人が捌くそうだし、十分納得出来る。箸で適宜身の切れ端を捕まえたので食べたが、出汁が抜けたとは思えないほど身に弾力がある。息を吐いてから腕を机にゆつくりと戻そうとする。

「あのー、すみません。取り箸はありますか？」

先に腕を置いていた隊長が襖に近いカエサルの居る正面を向いて聞く。

「ああ、そうか。すまない。いつもウチは直箸で取るもんでな。ちよつと台所から持ってこよう。」

頼まれた人は持っていた箸を置いてからすつと立ち上がり、畳を踏みしめて部屋を去る。皿から直箸で取れないとなれば、自ずと食べられるものは決まってくる。漬物を少し齧って白米を頬張りながら時を待つことにした。

が、遅い。台所から使い回しの割り箸を3膳持つてくるだけにもかかわらず、2分近く待たされている。正面の澤さんはこのままコブができて取れるのではないか、と思うほどほつぺが落ちそうなのが表情から読み取れるし、私も作ってもらった飯に文句は言いたくない。だが流石に漬物、白米、汁のループで耐えるのは厳しいものがある。

変な音などはしないので緊急事態が起こったとは考えにくいが、気になる。客も待たせていることだし、私が直々に見に行く他ない。緑茶を軽く飲んでから立ち上がり、襖の方へと進んだところで、目の前に人が立ち塞がった。

「わっ……て、カエサルか。」

「何が。驚くことでもないだろう。」

「遅かったじゃないか……って、何持つてるんだ、それ？」

カエサルの両方の拳の中には箸と瓶が握られている。

「ああ、丁度良い。台所にこれがもう一本有るから、こつち持ってきてくれ。」

「あ、ああ。」

訳もわからず台所に来て持って見たものの、中身は透明でラベルにはアルファベットが書かれている。少なくともドイツ語ではない。言われた通り持っていくと、向こうでは先程よりも騒がしくなっていた。

「カエサルさん、これどうしたんですか？」

「夏に助けてくれたお礼にひなちゃんを食事に誘ったんだが、奢ったらその後にお礼として貰ったんだ。」

「たーかちゃん。飲む前から少し顔赤いぜよー。」

「おりよう黙れ。アンツイオ製の白ぶどうジュースなんだが飲む機会が無くてな、せつかくの宴だし、魚料理だから持って来た。」

「白ぶどうジュース……」

「そう。」

「……いや、これってワ」

「白ぶどうジュース。」

「……」

「白ぶどうジュース。な○ちゃん白ぶどうの親戚。」

「あつ、はい。」

通した。本当に大丈夫なんだろうか。

部屋に戻るとすでに取り箸が配られ始めており、私は2本あった瓶のそばにもう一本を加え、左衛門佐とおりようの後ろを抜けて腰を下ろした。

私はやつと皿の上に乗せた蒸し魚に箸を伸ばすことが出来た。箸が触れると、身は表面の筋に沿ってホロリと崩れる。その崩れた端を取って口の中に運ぶ。温度も待たされたせいかな丁度よい。

舌でさえ崩れそうなほどの身。だがそれで崩れるのは繊維状までである。最後のそれだけはしっかりと噛み切らねばならない。そしてここそがこの魚が旨味を存分に吐き出してくれる時である。この繊維だけが身としての弾力を保っている。

良い。その弾力から弾き飛ぶ風味が私を震わせる。主な味は塩のみ。即ちそれ以外は魚本来のものだ。鼻から息をするだけでも、脳みその奥まで快感が伝わる。人は匂いで味を感じているというのは間違いないだろう。

次は塩焼き。取り箸で一切れ取って蒸し魚の隣に汁がつかないように乗せ、早速頂く。焼き魚は時間が命。冷めて硬くなった魚など今日のような宴にはごめんだ。箸で口に運んで舌に乗せた時に広がったのは今度は違った魚の美味さ。そう、皮の下の脂である。

上のさっぱりした身と下の脂、混ぜ合わさった時の調和。そうだな、例えるならジャガイモもチーズもそれぞれ美味いが、合わせた時の味はその合計を絶する。2+2≠50、そんな感じだ。

こつちも基本塩と魚以外の味はしない。配給は食材は配られるが、調味料は塩と時々砂糖、稀に醤油のパックがある程度。それ故家の備蓄が尽きれば薄味が主流にならざるを得ないのだ。

だがそれが良い。

「美味しい。」

隊長も澤さんも磯辺さんも皆美味そうに魚を口に運ぶ。特に隊長の屈託のない笑みはこの部屋に映える。裏表のない感情表現、きつと黒森峰では抑えてきたものなのだろうが、これがこの人が多くの人に愛される理由なのだろう。

「ほんと美味しいですよ！かばさんチームの皆さんってお料理上手なんですわね！」

「本当か！それは良かった。残すのもなんだし、腹一杯食べていってくれ！」

「五十鈴さんが居たら全部食べられてしまいますけどね。」

部屋が笑いに包まれる。そしてこの楽しいな雰囲気も魚を美味しくする見事な調味料だ。箸が進む。白髪ネギの束になって歯に抗う様も柔らかい魚と合わされば心地よいことこの上ない。

楽しい雰囲気の中でいつの間にか焼き魚は腹に収まり、蒸し魚の半分弱と白飯がわずかに残るのみ。だがまだ食欲はまだまだある。炒

め物とアラ汁が残っているから、それを補うことはできそうだな。

「カエサルが持ってきたんだから、カエサルから飲むべきだろう。」

「そうだな。一杯頂こう。」

どこから持ってきたのか、ジュースの瓶に蓋をしているコルクの栓抜きを刺し、ポンと引き抜く。

「このまま入れて良いのか？」

「よく分からないけど、大丈夫だと思うぜよ。」

コップを近くに寄せ、一旦瓶を机から下ろして先をコップの縁に寄せ、ゆっくりとその半分ほどまで注ぐ。

「取り敢えず味わってみろ。」

「ん。」

カエサルはコップを揺らして香りを嗅いだ後、軽く口に運ぶ。

「……」

「どうぞよ？」

「軽めで……甘くは無いな。今日のやつには合うんじゃないのか？美味いぞ。」

魚に合うジュースってなんだよ、とか客観的に突っ込んではいけない。この部屋にいる我々の主観的な判断に於いて、この瓶の中身はジュースなのだ。

「じゃあ一杯貰うぜよ。」

「私も貰おう。」

早速私以外の2人もコップにジュースを注いで味わう。カエサルに至ってはもう2杯目を注いでいる。

「私も取り敢えず一杯。」

貰ってみることにした。

その後客人にもジュースが配られ、本当に魚に合った為、瓶一本目は私が食事を終えようとしている時に尽きた。

「いやー、もう一本空ける？」

「開けちゃいましょう！」

澤さんは半分くらいジュースの雰囲気には呑まれている。あの一年生を纏めているのだから、ノリがあれば乗ってしまう傾向はあるのだ

ろう。

「おりよう達も飲むか？」

「せっかくなら頂くぜよ。」

「私ももう一杯良いですか？」

「私も願います。」

「隊長は頭を痛めたと聞いたけど、これ以上大丈夫ぜよ？」

「……痛みもだいぶ治まってきたので、問題ないです。」

隊長と磯辺さんもコップを差し出してきた。

「決まりだな。」

再び部屋でポンと音が鳴り、コップの中に半透明な液体が注がれていく。私も折角だからと頂くことにした。

しかし私は間も無く飯を食べ終わってしまった。気がつくともまたカエサルがいない。目を閉じて一息ついた時に部屋から出ていったのだろうか。

一杯飲み終えた頃、カエサルが袋を持って帰ってきた。

「カエサル。何が入ってるんだ、それ？」

「これも貰い物なんだが、アンツイオでよく使うチーズだそうだ。食べるか？」

「カエサル、お前さん隠しているもの多過ぎだろう。」

「べ、別に隠していた訳ではないぞ。ただ貰い物だから、適当な時に食べようとしていただけだ。」

「まあいい。折角だから食べよう。丁度食べ終わったところだからな。」

チーズの種類はペコリーノ・トスカーナというらしく、牛の乳ではなく羊の乳から作られているそう。貰ってからカエサルが暫く保管していたせいか、硬くなってきている。カエサルが聞いた話だと、今の時期のものはスタジオナートと呼ばれるらしい。まな板を持ってきて切ってから机の中央に置かれる。

食べ終わっている人間はそのチーズへと手を伸ばす。私も一つ取って食べてみる。硬い。が、食べて噛んでみると、溶ける。匂いは少ないが、味には少し鼻の奥をじんとさせるような味わいがあり、個

性がある。そしてこのジュースにも合う。溶けたチーズの脂分をジュースが見事に流してくれる。かみ合わさった味わいも良い。

「これいいぜよー!」

「見事。」

「いいですね、これ!」

他の人の口にも合ったようで、皿に盛られたチーズの山は少しずつ削れていく。

2本目もカラになってしまった。私はチーズで2杯しか飲んでない。一番飲んだのは意外にも隊長であった。結構なハイペースで飲むものだから止めようとしたが、結局かなり飲んでしまわれた。

流石に堪えたのか机に顔を突っ伏している。片付け始めているので皿に顔を突っ込むことは無いが、明後日から授業も再開する為、体調だけは壊してもらいたくない。

「ちよつと隊長隣の部屋に連れて行った方がいいか?」

「そうだな……皿洗いはやっておくから、エルヴィン、頼めるか?」

「了解。あと水一杯頼む。」

ウチの3人に磯辺さんが手伝う形で台所では片付けが始まった。

澤さんはちよつと休んだら片付けに加わるそうだ。

「ちよつと隊長、失礼する、よつ、と。」

肩を抱えて持ち上げる。

「歩けるか?」

「えへへ、エルヴィンさーん。」

だめだこりや。試合中の隊長はおろか、日常生活での隊長をも通り越して抜けておられる。隣の部屋に移して壁に寄りかからせて、水が来るのを待つ。

「全くどうしたんだ、隊長。」

「……」

「もうすぐ水が来るから、それ飲んで少し休んだら今日明日は家で休んでいてくれよ。明後日から授業なんだから。」

「……エルヴィンさん……」

「どうしました?」

「……うつ……ぐすつ……」

「ちよつ、ど、どうした？」

隊長が急に泣き出した。両手のひらで目元を拭っている。

「……嫌だよ……」

「嫌って……何がだ？」

「……戦争なんて嫌！」

「……」

「軍人になるなんて嫌！なれるわけ無い！例え仲間が死んでしまっても、勝つために戦い続けなきゃいけないなんて、嫌！人を殺すよう命令なんてしたくない！」

「……」

何も、言えない。確かにそうだ。川に落ちたりエンジンが止まった仲間を必死に助けようとする人に軍人が適しているか、と聞かれれば、keineと返すしかないだろう。軍人になることに希望を持ってしまっている自分が申し訳なくなる。

「でも、逃げたくない！もう自分からも、戦車道からも、学校からも、逃げたくない！やるしかないのは分かってる！でも……このままじゃ……」

「……」

「どうかしたぜよ？」

そこへコップを持ったおりようが現れた。

「いや、ちよつとな……水ありがとう。」

コップを右手で受け取ると、隊長の前に差し出す。おりようは空気を readんだのか、私が受け取るとすぐに立ち去って片付けに戻った。

「少し水でも飲んで落ち着いて。飲めるか？」

「……」

隊長は無言で両手でコップを包み、ゆつくりと喉の奥に水を送り始めた。暫くしてゆつくりと口元からコップを離す。

「……落ち着いた？」

「……少し。」

「……そうだな。私は軍人になってドイツに行きたい。それを希望に

している。隊長も何か、ほんのちよつとだけでもいいから、希望を持たれては？」

「希望……？軍人に？」

「例えば……出来るだけ人を苦しめない軍人を志すとか。」

「人を……苦しめない？」

「軍人になった時、戦争をするかどうかを決めるのは上だ。私たちはほぼ関わることは出来ないだろう。」

だとしたら、軍人として兵士を無駄に死なせたり、相手の捕虜を思いやったり、民衆に不必要な苦勞を背負わせたりするような事をしないし、させない。自分の力が及ぶ範囲内で出来るだけそれを試みるのはどうだ？」

「……」

「確かにそれが通じるかは分からないし、影響を及ぼせる範囲も広くないだろう。しかしやらないより良いと思うぞ？」

「……少し考えてみます。」

隊長は膝を立て、立ち上がろうとした。

「大丈夫か？」

「大丈夫……」

確かに先程よりは脚に力が入っているが、まだまだ一人で帰るには厳しそうである。

「家まで送らせてくれ。」

「……すみません、お願いします。」

隊長を左肩で支えながら片付け途中の者らに一言告げて、玄関と飛び石を超えて道へと出る。隊長の家の場所は分かる。ゆっくりとではあるが、二人三脚のように歩調を合わせ、先へ進む。

「……さっきは私らしくなかったな。歴史以外のことを人に語るとは……」

「……くくつ……」

「え、何かおかしな事でも言ったか？」

「いえ、前に縁側でお話した時は時間に関して話してくださいだったので、今更どうなされたのかなあ、と。」

「……忘れてほしい。さつき話したことは私が考えることでしかない。しかしやらねばならないことに楽しみを見出すのは、結構大事だと思う。」

今夜は薄手の服では少し肌寒いくらいだ。ふと空を見上げる。雲ひとつない。

「今ゆっくりと歩いている時でさえ、空の星が綺麗だと思えば、心が澄み渡るのだから。」

昨日21日には風紀委員会にて組織改編が再び行われた。大まかに言えば、前年度まで在籍していた高校3年生を風紀委員会に復帰させることを生徒会を通じて発表したのである。

これで一時期は150人程、怪我人を抜けば100人強にまで減っていた風紀委員が、怪我から復帰した分も合わせれば200人程まで増加したのである。

病院にいる怪我人の数もあと4人。蜂起の鎮圧後手術を受けた者たちだが、全員回復傾向にあり命に関わることはない、と医者は言っている。

風紀委員会は大洗学園艦、新学園都市に於いて重要な治安維持、労働監視部隊としての地位を回復したと言えるだろう。

正直園さんの復帰人事に異論や不満が湧くのは覚悟していたが、今回の混乱を受けた人事とのことで生徒会に対する反発もほぼない。これで安心して仕事を任せられる。実際動員した住人による労働への監視任務の範囲、対応人員は増加した。

動員した住人による労働といえば、水産科が取った魚を捌く仕事を増やした。学園艦の中でも自炊を主とする寮に住む者や学園艦在住の者の母親、料理が上手い者などを重点的に配給場所を通じて呼び出している。

配給に回しているのは漁獲高の9割。残り1割を保存食とするべく加工するのもこの仕事だ。魚はここ数日は安定して獲得出来ているが、これがいつまで続くかは不明瞭だ。備蓄は作って損はない。もともと元来学園艦に備蓄されていた分の保存食は尽きかけているのだが。

魚の配給は配給場所での住人の様子から見ても好印象だと思われる。これまで入っていた主なタンパク源といえば、配給食糧に入っていた加工肉、場合によっては卵白で繋ぎ合わせたようだ合成肉だったりしたから、それに比べればはるかに美味いはずだ。

とにかくも会長による最終段階や支援物資に関する報告が無い以

上、ここに滞在出来ない可能性も考慮せねばならない。飯は確保するに越したことはない。

とはいうものの、配給と人員確保を残せば、生徒会に出来る仕事は2回目の万山群島への開発担当の派遣準備などであり、そこまで多くない。私も印を押す作業の合間に少しゆったりと水を飲むことが出来る。

昨日の夜から早朝にかけて雨が降った為湿度が高い過ぎにくい日ではあったが、皆が不平を言わず働いてくれるのもこの作業量のお陰である。

そんな中、緊急無線の甲高い音が鳴った。試験機械を通じて繋げた島から毎日報告は入って来るが、それは夕方。少なくとも朝の配給準備が終わったばかりの今には掛かってこないはずである。取り敢えずそれに出ることにした。

隣の部屋に入って無線の会話ボタンを入れ、イヤホンの向こうの声に耳を傾ける。

「はい、こちら生徒会の小山です。」

「こちら船舶科の艦長大橋です。おはようございます、小山副会長。」

「何か御用ですか?」

「ええ、今日はとても良い知らせと余り良くない知らせをお伝えしようと思ひまして。どちらからお聞きになりますか?」

「えっ……」

真面目な大橋にしては回りくどい話し方なので奇妙に思ったが、やはりその声は大橋に間違いない。

「じゃあ、良い知らせからお願ひします。」

「島からの無線を通じまして、井上の輸送船が西南政権からの支援物資を積んで万山群島近くを航行付近だと分かりました。」

「……ということは、会長の最後の交渉が南京で無事成功した……ということ?…そうで良いですよね!?!?」

「ええ、それで間違いないでしょう。」

「……」

小山は思わず目元を抑えた。膝からも力が抜けかけた。

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫……です……でも、安心してしまつて……会長、本当にありがとうございました……」

「……気持ちは分かりますが、泣くのはもう一つの話聞いてからになさつてください。そのもう一つなのですが、今回は我々の輸送船Aの他、もう一隻輸送艦を向こうが使わせてくれたそうで、そちらの『福安』なる輸送艦もいます。お陰で予定物資量の大半を今回のみで運べたそうです。」

「そこまで悪い話には聞こえませんが？」

「で、その『福安』なのですが、乗っているのは物資だけではありません。学園艦への視察団と一緒に乗っているんです。」

「……え？」

「お分かりですね？」

「……え？西南政権の、ですか？」

「はい。向こうの井上が勝手にOK出したようです。」

「……まつてちよつと待つて。本当？」

「本当に本当です。」

「……いつここに着くか分かる？」

「今日の夕方4時頃かと。」

「人数は？」

「調査する方が6人、それを護衛する軍人の方が20人です。向こうの視察団のトップは謝東閔という方だそうです。謝罪の謝に東、門構えに文書の文です。」

「……あ、ありがとう。受け入れ準備を進めておくわ。」

「ウチの井上が勝手にやつちやつてすみませんが、後で叱つときますのでよろしくお願いします。こちらでドックの整備、清掃などは済ませておきましょう。」

「それでは失礼します。」

小山はその返事を聞くことなく会話ボタンを押して会話を終わらせると、イヤホンを引っぱがしてすぐに生徒会長室に駆け込んだ。頬に流れるのは同じ水のはずだが、温度がかなり違う。

「……副会長？」

近場にいた高3の生徒会の者が不思議そうに尋ねてくる。何からどう言うべきか迷ったが、暫く情報を整理してから生徒会の者を呼び集めて、大橋から伝えられた情報を語り始めた。反応は笑顔の後絶望。見事に小山の前例を踏襲した。

「時間もありませんし、一旦各々今やっている作業を一番早く区切れるところで区切ってください。手の空いてる人はこちらから指示を出しますので、すぐにその通り行動してください。」

仕事に取り掛かれる者が一步前に出てきた。その数10人程。細かく予定を立てる時間もない。必要と思われることを指示として出し、その後は高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応するしかない。

取り敢えず必要だと思われることを矢継ぎ早に発する。

一つ、視察団の宿泊施設の準備。『ローマよりローマ』とあだ名されるアンツイオや芸術に強いマジノならいざ知らず、この学園艦は公立の学園艦で、しかも艦上に目ぼしい観光地も無いため、目立った宿泊施設がない。文化祭など外部から客が来る際は港に停泊し、その地の宿泊施設を利用して貰う程である。

私たちの学園艦の力を侮られない為にも、何とかしてちよつとは豪華な施設を用意せねばならない。商業科の集めた商品や華道、香道の顧問と履修者の作品も、場合によっては利用しよう。

一つ、案内の準備。ドックでは吹奏楽部の演奏をもって歓迎することにした。というよりいつも使っているドックが地味すぎるのだ。少し華を添えねば幾ら何でも申し訳ない。

それとドックからの案内ルートをこちらで設定し、そこを重点的に清掃する。その為の人員は暇そうな奴を動員した。こういうことがあるから総動員体制には感謝せねばなるまい。視察団の中にそのルートから外れたい方がいると面倒だが、その時は致し方ない。

学園の校舎にも呼ぶ為、グラウンドや校門、理科の実験室などの整備は重視する。

一つ、歓迎の準備。飯、余興、その他諸々。どれだけ影響力のある

人々が来るかは分からないが、恩は売って損はないだろう。取り敢えず茶道の顧問と履修者による接待と長刀道、合気道の試合を企画。我が校の文化的側面を伝えるにはうってつけだ。なんだかクール ज्याパンの宣伝みたくなってしまうが、まあいいだろう。

飯は水産科が養殖しているアンコウがまだあるはずである。泳ぐもので食べないのは潜水艦だけと言われる広東料理の故郷から来る方々なら、アンコウも大丈夫だろう。鍋にするには少し暑い天気だが、他にも唐揚げなどやりようはあるし、あん肝から汁を作ってもいい。そこら辺は学園艦にある食事処の料理人を掻き集めて考えて貰おう。他にも美味しい魚を取り揃えて貰う。

大きく分けてこの3つ。即座に人を呼びに行かせ、作業に当たってもらおう。

箒の音、それが学園艦のあちこちから聞こえるようになる。あとは学園艦に活気があるよう見せる為、学園艦内の店舗のシャツターを開けさせた。実際に住人に者を売らせる訳ではないが、店を空けて電気を点ければ営業しているようには見せられる。

呼び出した人間はそのまま呼び出した仕事に関する指揮をとり、こちらに指示を仰ぐ暇もない程働いてくれる。順路はこっちで用意したのを仕事を区切らせた者に届けさせたので、こっちから行けば何とか歓迎してくれるはずだ。

私は今日の配給開始が遅れる可能性がある事を艦内に布告した。また放送部の人々に声を褒められてから、耳が詰まるような音の鳴るエレベーターで艦の中へとどんどん沈み、足が着いて扉が開けて見せた先は刻々と準備の進んでいたドックであった。

吹奏楽部は楽器の類をチューニングしているのか、単調な音が広がる。その後ろで待つは学園の為に何かしたいと集まった風紀委員。鉄の棒を持って横にずらりと並んで貰った。学園を印象付ける一つにはなるだろう。

船舶科の艦長、長坂もこちらに現れた。船舶科の制服なのは良いが、肌が白っぽい。薄化粧しているのだろう。

「長坂さん、どうも。急ながら清掃して頂きありがとうございます。」

「大橋から呼び出されて何事かと思いましたが、こちらこそ本当にすみません。」

「いえ、それにしても、化粧をなさったのですか？」

「いやあ、こういう時くらいしか化粧を許される場面も時間もありませんから。副会長もなさっているではありませんか。」

「少しですけどね。」

背後からはチューニングを済ませた吹奏楽部による練習が行われる。演奏曲は体育祭での入場曲で演奏には慣れているとはいえ、部活を辞めた間のカンはそうもいかないようだ。間に合ってくれば良いが。

「そういえば副会長は何語で向こうの方々と話されるのですか？」

「英語のつもりです。生憎今の学園艦には広東語が出来る方がいらつしやらないので。会長までとはいきませんが、何とかしましょう。この先何年も付き合うのに通訳つけるのも印象悪いですしね。」

「なるほど。輸送船はもう直ぐかと思われます。少し待ちましょう。」
ふうとペットボトルに汲んだ水を飲んで一息つき、化粧と服が乱れないよう気をつけながら、私はその時を待った。緊張はする。一つの悪態が全てをおじゃんにしてしまうかもしれないのだから。

吹奏楽部の曲が一致し、拍手の波でドックが吞まれて直ぐ、学園艦のドックの入り口が大きく開き始めた。吹奏楽部の者は楽器を持ち直し、風紀委員は右肩に右手で握った鉄の棒を縦に当て、私は『福安』が停泊予定の場所に長坂と進む。

我々の学園艦の仲間としての力を見せる時が来た。

広西大洗奮闘記 75 案内

輸送船が姿を見せると同時に、指揮者である吹奏楽部の部長が吹奏楽部が演奏を開始させた。先に姿を見せたのは輸送船。ドック中に入ると、こちらへとゆつくりと進んで来る。船の上では船上に掲げられている他に、こちらに向けて大洗の旗を振っている者がいる。流石に大漁旗を振るのは妥当とはいえないからだろう。

そしてそれから距離を開けること100m程、一回り小さな輸送艦が警笛を鳴らしてゆつくりと付いてきた。船舶科の者による手旗信号によって予定された場所に誘導され、二隻の船はドックの内に収まった。そのタイミングで私は右手を掲げる。それを見た指揮者は演奏を区切りの良い所で、最後に一際強く音を鳴らさせて止めた。

錨を下ろしタラップが用意され、学園艦に踏み入り、戻る準備が整った。艦の中から英語教師の小原の案内で、銃を抱えた軍人で挟まれたスーツの男たちの集団が現れる。先にタラップを降りて来るのは軍人のみ、残りはまだ船の上にいる。

その中でも軍服がやけにしつかりした者、恐らく将校だろう、が小山と長坂の前に立つ。その両脇には銃を片手で握り、もう片手には拳銃を用意した兵が並ぶ。

地位は高そうだが、会長もこれに抗い、あの内容を勝ち取られたのだ。私も無用意に下手に出てはいけない。

「Nice to meet you, I am Yuzuko, Yuzuko Koyama, Vice-president of Orai student council. I am going to show you to Orai school ship instead of Annzu Kadotani, president of Orai student council.

(初めまして。私は大洗生徒会副会長小山柚子と申します。私がこの度は生徒会長角谷杏の名代として、大洗学園艦をご案内いたします。)

右手を差し出すと、兵の銃がこちらを向いた。思わず両手を挙げた。何か間違えたかと不安になったが、幸い引き金に指は掛からなかった。その後向こうの3人が少し中国語で話した後、例の将校が声を掛けてきた。まだ銃口はこちらを見ている。

「You guide us, don't you?」

（お前が案内するのか?）」

「Yes, I do.」

（ええ。）」

「Search you in order to confirm that you don't have any weapons.」

（武器を持っていないか確認する為調べさせてもらう。）」

「……」

成る程、私が安全な人間であることを確約せねばならない程の重役が来ているということか。なら尚更向こうの機嫌を損ねることはしてはならないだろう。

「OK.」

私は両手を挙げたままその場に立ち尽くした。銃を降ろした兵2人が柔らかい身体のあちこちを叩いて調べる。金属探知機でもあれば楽だが、そういうものも手元がない。

「I'm Lei Baa Hou. Lieutenant General of Guāngdōng Army. Mr. Chen, First class general of National Revolutionary Army, told me to investigate your power of military.」

（私は李伯豪。広東陸軍中將だ。大洗学園艦の軍事面での調査を陳一級上將より依頼された。）」

「Our president told us about Mr. Chen. She said that he was a suitable man to protect our」

school ship.

(陳閣下については会長より伺っております。我が学園艦を保護して頂くに相応しい方だと聞いております。)」

叩かれながら挨拶を返す。へそより上と下の確認する時間の比率が2:1なのは気に入くないが、暫くして兵が手を離し、少し李と話す。

「Who is she next to you?

(隣の者は?)」

「She is the captain of the school ship.

(彼女はこの学園艦の艦長です。)」

「Though I heard that your school is girl's high school, do you even carry its management?

(あなた方の学園は女子の学校とは聞いていたが、その管理まで担っているのですか?)」

「Yes. When there is need, it's guided by a teacher, but this school is managed by a student basically. She stays here, and take charge of carrying goods I received from you in.

(はい。必要とあらば教師による指示が入りますが、基本的には学生を主体に学園は運営されています。彼女はここに残って、頂いた物資の搬入を担ってもらいます。)」

「OK. We leave our Infantryman in this transport, so don't behave stupidly. Search her, too.

(そうか。輸送艦には兵を残すので、下手なことはしないように。彼女も調べるぞ。)」

「Sure. We do not injure you, wh

o support us, of course.

(勿論。無論支援してくださる方を傷付けるような真似は致しません
がね。)

長坂さん、両手挙げてもらえる？」

そう訊くと隣の艦長は顔を歪ませ半歩後退した。

「わ、私もですか……」

「こちらに不安を抱かせない為に、どうかお願いします。」

「どうかさつきSureって言っちゃってるじゃないですか。ええい、後は野となれ山となれ！」

私の近くにいた兵が長坂さんの方に移り、また身体を叩き始めた。向こうの目には疑いが残っているが、長坂さんも調べ終わると、どうやらかなり少ないようだ。私が調べられた時間よりも短かったのは、恐らく地位に差があると見られたからだろう。

「Thanks to your cooperation.

(ご協力感謝する。)」

礼を述べ、その将校は振り返って何か言った。それを訊くと船に残っていた軍人とスーツを着た人々がタラップに足を掛けた。私はタラップの元へ進み、降りて来た一人一人に頭を下げる。全員降り終わって私が下がると、タラップの下に集まっていた人の中から一人こちらに出て来た。

「初めまして。私は視察団の代表の謝進喜と言います。よろしく願いします。」

差し出された握手に応じようとした私は少しの間動きを止めた。

「……初めまして。私はこの学園艦の代表角谷杏に変わりました皆さんをご案内します、生徒会副会長の小山柚子です。謝様、日本語お手です。」

「生まれが台湾なもので。」

一瞬間に疑問符が浮かんだが、間も無く理解出来た。この時代では、台湾はかなり前から日本領なのだ。すぐに差し出された手をとる。首を少し上げると、まだ30にもなっていないかのような若い顔があった。

「今回は中山大学と広州市自治会を代表しまして、この視察団に参りました。案内はお任せします。」

「分かりました。案内するのは私一人なので基本は団体で移動して頂きます。」

「承知しました。ではこの度の視察団の方をご紹介します。」

まずは先に降りていらした、広東陸軍の李伯豪中将。

次いで広州市商会から銅鉄鉛錫業をやっておられる仇啓光執行委員と、塩業をやっておられる趙静山執行、常務委員。

広東省立勤大学（現在の華南師範大学）から李泰初商学院院長。

また広西からは馬君武広西大学学長がいらっしゃいました。後の方々は広東陸軍第2師第6軍の者達です。」

彼は一人ずつ手のひらで示しつつ紹介してくださった。物腰柔らかい人のようだ。

「わざわざありがとうございます。物資は私たちがここを離れましたら、学園艦の運行を担当する者らに運ばせます。」

「こちらこそ、この様な歓迎をありがとうございます。それではこつちも準備が整ったようですので、出発しましょう。」

後ろでは先程の李が兵士を二つの組みに分け、片方を船の方へ戻す。

「分かりました。」

Please follow me.

（付いてきてください。）

私は後ろに計17人の人を引き連れて学園艦の旅に出発した。一応小原先生も同行してください。まずは再び演奏を始めた吹奏楽部と風紀委員の前を通り過ぎ、ドックから抜ける。

まず向かうは工学科が鉄鋼を切り出している現場だ。用意させたヘルメットを配つてから、火花が飛び散るもと工学科の鹿島を呼んで案内させる。ここでは特に市商会の仇という男が細かい所まで質問してきたが、小原先生の通訳で何とか解決出来たようだ。私も切り出す現場まで足を運んだことは無かったので、実際学べることもあった。

そこから上に行き、たった今育てた魚を網で取ろうとしている水産科の養殖場を見せる。そもそも船内で養殖が出来ていることに驚いているようだったが、ここでの経験は移設先の島で、ひいては広東にもお伝えすると言うと、中々興味深そうな反応が返ってくる。広東料理は何でも食べるというが、あれはむしろまともな飯が足りないからなのかもしれない。

次は地上に出て学園の校舎を案内する。特に理科実験室を見せると、この中でも歳をとったように見える馬が、興味深そうに器具などを眺めていた。この部屋もしばらく使ってなかったので綺麗かどうか気になったが、どうやら印象は悪くないようだ。

もうすでに学園での服の生産はひと段落ついており、学園には見回る少数の警備員のみ。また校舎の中を案内する中で、学園について多くの事を尋ねられたが、答えられる限り答えた。

例えば学園都市の統治機構。

例えば派遣予定人材。

例えば学園艦の食糧事情。

例えば大陸に売却するもの。などなど。

弱味を見せるのは悪いかもされないが、逆に強みばかり見せすぎるのも疑われる要因になるはずである。

そうこうしているうちに日が暮れてきた。夜は学園艦にたまたまあった空き家を適当に改修させたものをそのまま宿とする。宿では茶の湯、取り敢えず今の所出来る限りのことをした夕食。その後はその家の庭で長刀道の履修者による試合を見せた。反応は悪くない、はずだ。

疲れた。また明日の案内を謝氏に約束して、私は生徒会長室に戻ることにした。明日は、雨が降りそうである。

翌日朝、暗闇の生徒会室の中起き上がった。窓の外の音を確認してから、着替えて近場の余り熟睡出来てなさそうな一年生を揺らして起こす。その人間が茶色の眼鏡を付けて服を着替えている間、私は人を踏まないように移動し、生徒会室の隅に残ったありったけのビニール傘を左腕で拾い上げ、それらとは別にもう一本手に握った。

何事かとこちらに来た三崎にその束を持たせ、さらに数本持つてくるように告げて一足先に部屋を出る。音は大きくなった。三崎が両腕に抱えて追いつくと、揃って校舎から足を踏み出した。

グラウンドは正統風紀委員会の奴らを動員して片付けさせ終わっている。外は少し明るくなり始めていたが、学園艦では高いところか船のへりの公園でもなければ日の出を見ることは出来ない。

傘を差してその中に傘持ちを入れたまま、薄暗い街を歩く。店はまだ全く開いていない。街灯も付いていない街の中を、道の黒いアスファルトは雨水を弾き返しながら、真っ直ぐに伸びて先細っている。

「副会長。」

「三崎さん、朝早くからありがとう。」

傘を持ちながら傘をさせない女が口を開いた。視線は前を向いたまま。

「いえ、向こうが起きる前に着かねばならないですから。」

「とにかく何とか好印象持つて欲しいからね。恩や媚を売ってうまく行くなら、やるしかないでしょう。」

「それは良いのですが……西南政権からの支援物資、正直頂いた量ではこの先の運営はかなり厳しいかと思えます。」

「確か米は1人10合以上でしたか？他にもサツマイモを頂いたと聞いていますが。」

「しかし米も粃殻付きですし、サツマイモは中々保存が効きません。米は水の確保が安定してさらに余剰が無ければ、栽培は厳しいかと思われれます。そして開墾したての田畑は生産力の点で普通の田畑よりかなり劣ると聞いてます。何より我々には畑や田を作る人員など直

ぐに用意出来ません。季節も実感は薄いですが冬ですし。」

「水は学園艦から淡水化装置を移せば状況は多少ましになるでしょう。発電装置も移転しますし。しかも冬に近い今でさえそこその頻度で雨が降っていますから、夏場にうまく貯められれば米の栽培も不可能ではないでしょう。」

「それに今我々は残り3万人弱を島に引っ越しさせなくてはならないのですよ。残り一月で。間に合いますかね?」

「島の開発なら第2波の派遣は明日に送りますし、地盤さえ固まれば加速度的に送り込めます。最後はもう輸送船に人だけを積んで運んでもらうかもしれないです。とにかく船舶科と協力して全員運んでもらいます。」

輸送艦の福安も輸送に貸してくださるとのこと、島に港が出来たら安定して物資も人も輸送出来ると思いますよ。」

「その港は12月上旬に出来るかどうか、だそうですし、その物資輸送に輸送船を使い続けたら漁業が満足に出来なくなります。保存食だって大してありませんのに。」

「保存食の材料なら来たじやないですか。」

「……米ですか?糠漬けでも作れと?」

「あなたは本当に大洗の、しかも生徒会の人間なのですか?」

正直不満を述べるならまともな対応策をだしてもらいたいものだが、あと一年で間に合うだろうか。向こうはいまいちピンと来ていないようだ。

全く、生徒会の者として思い出せないのは不味いだろう。暫く会っていない者に関することとはいええ。

「干し芋にするんですよ。そうすれば元の芋程は場所も取らなくなりますし、その加工の為に人員を動員出来ます。」

「……干し芋、ですか?」

「そうです。会長が帰るまでには作れるようにしますよ。峠さんとかに頼んで来ましたから。サツマイモは今後種イモ以外は基本干し芋にしますよ。」

「……飽きませんか?」

「何を今更。魚も配給しますから何とかありますよ。」

学園艦の横からやつと直接日光が差し込むようになった。宿になつてゐる空き家は次の角を曲がつてすぐになった。雨は依然傘を地面に落としたビーズの如く鳴らす。

見張りに立つてゐた軍人2人が私たちの姿を捉え、銃へかける握力を強くする。

「Good morning, gentlemen. It is rainy today, so I bring you umbrella.

(紳士の皆様、おはようございます。本日は雨ですので、傘をお持ちしました。)」

兵は片手で銃を握ると、門の前で私たちを待たせ一人が中に入つていく。暫くすると兵は謝を連れてこちらに現れた。謝は引き戸の向こうからこちらを見て、銃の引き金から指を外させた。

「謝さん、朝早くに失礼致します。本日は雨ですので、傘をお持ちしました。」

「小山さん、ありがとうございます。皆はもう少し休むとのことで、朝食はもう少し後で問題ありません。」

「分かりました。船で半日かけていらつしやつたのですから、ゆっくり休んでください。本日は学園艦の甲板部と教育についてお伝えした後、艦橋部をご案内します。そして今日中に出航なさる、と。」

「はい、それで問題ありません。」

「少し食事の手伝いをしますので、上がつてもよろしいでしょうか。」

「先程から台所で料理人とやらが働いておりますが?」

「他の人だけに働かせるわけには参りませんので。」

「そういう事でしたらどうぞ。あなた様だけになります。」

「では失礼致します。」

小山は先に三崎を玄関の前に立たせると、傘を畳んで軽く雨を払い、一礼して玄関の方に入った。三崎には傘を玄関の脇に立て掛けさせ、私は手を濯いで湯気の立ち上るその場へと赴いた。

朝食も料理人が手をかけて作ったものを食べて頂いた。飯に関し

ては特に評価はされないが、突き返されることもないので安心していい。食べ終わったら傘を渡し、店の開かれ始めた学園艦を巡る。雨足は先程よりは治まってきている。

校舎では繁体字の特別授業をちらつと見学し、そこから小原先生を呼んで学園の指導方針について話して貰った。私からは将来的に大陸から生徒を向かえる様な時が来たとしても、基本的には学園の方針は変えることはせず、我々の自治は守っていききたいと伝えた。

学園艦の道中では半ば無理に開かせた店らが扉を開けている。通りがかったパン屋は、シャツターは開かれていたが、中の籠の中にはパンは数切れのみ。恐らく後で自分で食っても腹は満たされないだろう。ほとんどの店に元気に挨拶させたから、視察団の印象は悪くあるまい。

艦橋部ではまた大橋を案内に加えて船舶科の仕事を見せて貰ったが、人員の大半はドックの方で物資を搬入するのに割かれており、ここにいる人員は少しかである。寧ろこんなに少ない人員で仕事を回していることを利用して、学園の技術力を示せたと考えたい。

結局戦車は動かさずに、日が沈んだ夜になってドックにエレベーターに降りてきた。道中でも時々見られたように、馬がエレベーターの中の壁を叩いたり感触を確かめている。戸が開くと、そこは目がくらむほどい輝かしい場所だった。その戸の目の前で長坂が身を折りたたんで待っている。

「小山副会長。輸送船、輸送艦計2隻、出航の準備も物資の搬入も完了しております。後は皆様方の乗艦のみです。」

「第2波の人員計100人とその為の仮設住宅、あと木材もですか?」「勿論です。なんとか載せてあります。皆様には早めに福安にご乗艦頂きたいと思えます。」

また集まった吹奏楽部によって再び音楽が奏でられ始めた。来た時は一度だけ音を外していたが、今回はそんなことはない。背筋を伸ばして構えた風紀委員の前を經由して福安の前に到着すると、タラップがすぐに用意された。脇に立ち頭を下げている間、皆それに軍人が混ざりつつ乗り込んでいく。最後に謝が片足を乗せた時、小山に尋ね

た。

「視察団の皆を代表して最後に一つだけお伺いします。この学園艦は、この巨体をどうやって動かしているのですか？」

来た。聞かれる可能性として最も高かったものが。だがその為返答も既に決まっている。

「……それだけはお答え出来ません。」

「そうですか。ではまたお会いしましょう。いつかその答えを聞きたいものです。共に末永く繁栄せんことを。」

「共に末永く繁栄せんことを。」

船は汽笛をあげ、2隻が縦に並んで開かれたゲートから海の上へと立ち去った。雨はいつの間にか止んでいる。

これで学園艦の詳細な情勢は西南政権に伝えられる。私たちはそこそこ正直に話した。強がっても吐き出せるものはない。これが、これが会長の助けになるか否か、いや、なることを祈るしかあるまい。

遠くの海に映える船の明かりが、そのかけらも残さず闇に交じった時、私はすぐに身を翻した。次だ。次の派遣、次の売却、次の配給。全てを確認し、実行しなくては。

広西大洗奮闘記 77 かいはずぐらし！

どうも、こちらは南シナ海の北、広州の沖合の島、大万山島です。私は新川佐紀。生徒会の開発班のうち、島に残った二人のうちの一人です。新学園都市の中核となるであろうこの島をどのように人が住めるようにしているのか、お伝えしていきたいと思います。

まずは生きるのに必要な水。これはペットボトルに入れて大陸から持つて来たものと、あとは島にある山の上にタンクを設置して、雨水を集めて対応しています。水の排出口には濾過設備が設置してあるので、飲むのは煮沸してからの方がいいですが、それ以外ならそのまま問題なく使えます。

海水も出来ればここに入れて使ってはみたいのですが、海水を使うと塩とかのせいで濾過用の膜の消耗が早くなるので、淡水だけで持ちこたえます。海水淡水化装置も来る予定ですが、燃料が満足にあるかわからない以上、膜もいつかは自分たちで生産せざるを得ないでしょう。

あとは食事は備蓄を割いて運んで来たのを、開発班の皆と分け合いながら食べてます。あまり量はないので、私も現在は1日2食です。腹は空きますが、堪えます。

開発方針としては、上陸した南西部の沿岸では港の建造。近海を掘って土を取り出し、輸送船が湾の奥に入れるようにしているのですが、なにぶん機械などは海中には入れませんので、スコップですくってゴムボートで島に持ち込む作業を繰り返している者らがいます。土からは貝や塩が取れるのですが、塩の方は今の所回収していません。焼いた貝は美味いんですがね。

内陸では住居の建設と農地の場所の選定及び開発を行っています。目下はプレハブの仮設住宅の設置に力を割いています。しかしこれだけでは学園艦の全住民は住めませんので、島の木材を切り出して家を建てています。壁と屋根と窓しかない簡易的なものですが。洪水や地震が来たら一発でおじやんになります、とにかく今は数です。

コンテナ仮設住宅の方が早く設置できるのですが、コンテナは運ぶ

のに船のスペースを使いますし、新造するなら窓などを開ける為に工学科の力を借りねばなりません。彼らは学園艦からの鉄鋼切り出しで仕事一杯な為、こちらに振り分けて貰うのは厳しいでしょう。

この地は基本珠江河口にあるため、基本的な地質も礫、砂、泥という中学受験で習う一般的なもので、中国で4番目に大きい川の河口ゆえ土地の栄養は豊富で、農業は十分可能です。耕地面積もこの島だけでそこそこ確保できると思われます。住人全員分の食糧は全ての島の耕地面積を限界まで広げたら自給出来るかもしれません。

基本は農業科が移植するものと、支援物資として届けられたというサツマイモを植える予定です。大唐米（赤米。土地が悪くても作れるが味は悪い。）が手に入ったら植えて行こうかと思えます。5年くらいはそれで堪えるかもしれません。残りは漁業と商業科の購入に期待しましょう。

さて、私はそろそろ夕方の学園艦へ今日の報告をしなくてはなりません。無線の中継拠点のお陰で学園艦とのやり取りもしやすくなりました。ちよいつと無線を繋いで来ますので、御機嫌よう。

やっと2週間近く続いた全国大会も終わりを告げ、私たちも広東へ戻る運びとなった。一応12月の頭には全国大会よりも小規模の中全会があるのだが、討議内容が中央の事に限られるとのことで私たちは参加しない。行きと同様中華門の外にある大校場飛行場まで車で送ってもらい、飛行機で帰ることとなる。

帰り際、私が今回の全国大会で注目されたからか、いろんな人から声を掛けられた。新しく外交部長になった張さんのようなお偉いさんもいれば、名前も詳しく覚えていない普通の役人もいた。これらの対応は私の握手を除いては冷泉ちゃんがやってくれたが、言語が通じているところを見ると、どうやら大会でいろんな話を聞いてるうちに上海語も習得してしまったらしい。確かに教材は貸したが、だからと言って早すぎるだろう。だがそれができる脳みそがあるから、私の秘書としては頼もしいのだが。

そしてその蔣介石は国民政府の建物の前までわざわざ我々の見送

りに来た。理由は分からないが、恐らく我々より正式に優位に立つたことを見せる為だろうか。その為か秘書と軍人数人を侍らせている。

私は冷泉ちゃんを通してその男と言葉を交わす。

「因此次的全國大會出現可喜的結果的，衷心感謝。

（この度の全國大會での喜ばしい結果、誠に感謝します。）」

「期待著今後的兩廣的發展。角委員長。請無論如何發揮那個才幹。

（これからの両広の発展に期待していますよ、角委員長。ぜひその手腕を發揮してください。）」

「還到明年旁邊不過是黨員、蔣閣下。角杏因為中華民國的發展，僅僅援助。因此祝一切順利。

（まだ来年までは一端の黨員に過ぎませんよ、蔣閣下。中華民國の発展の為、角杏ささやかながらお力添えします。それでは御機嫌よう。）」

最敬礼を返す。正式に国民党員として認められてからは、制服であるチャイナドレスを着ているが、思いの外動きづらい。制服というものは大概がそうであるものだが。

私たちは行きと同じく少し高いところの座席へ登り、先に登った冷泉ちゃんの隣に座る。車はまたカタカタと音を鳴らしながらエンジン音を鳴らして、この国の中心を離れた。

今日はもう昼過ぎ。昼食は取ったので行きみたく腹の虫に困ることはない。街の風景はあまり変わらず、そろそろ昼の時間の店を閉じ始め、外に出ていた机などをせわしなく中へしまいでいることが少し違う程度だ。街の人は車に目を向けることはない。ただ己の世界の為に必要なことを着々と進めている。

角を二回曲がるとまた見えてきた。低層アパートの窓の外に時々洗濯物が見える。天気は曇りだが干さねばならないものは干すしかないのだろう。時々子供がこちらの方を見るが、直ぐに目をそらす。我々は異物でしかないのだろう。

四つの石の門を抜け、左に曲がる。また見えるのは工場も少しあるが、大半は畑と時々家。場所によっては米がまだ穂を垂らしている。ただ暫くその風景を眺めていた私は少し言葉を発する気になった。

「冷泉ちゃん。」

「どうした？」

「これからさ、暫く帰れないんだよね？」

「学園艦には後一回だけ返してくれると言ってたな。だがそれ以外は人などと会ったりするのに忙殺されるそうさ。」

「まあ確かにたった一月で政治組織を築くんだから、人脈は重要だね。」

「外交が封じられてるから国内に限るけどな。一応そこそこ上海語もいけるようになったし、これからも秘書暮らしだろうから今後も頼むぞ、委員長。」

「冷泉ちゃんまで言うか！……それにしても、外交ねえ……香港の人とか元気にしてんのかなあ。」

「香港か……繋がりはあると思うが、正式な付き合いは出来ないぞ。」
「ピール卿とかアーサーさんとか世話になったから、いつかはお礼に行きたいねえ。」

車は空港の敷地へと足を踏み入れた。先程から聞こえてはいたが、訓練中なのだろうか。時折複葉機が車よりも大きな音とともに、大空へと旅立っていった。

広西大洗奮闘記 78 法要

2012年11月26日、月曜日、仏滅。ただ空のお天道様だけが青の中で際立つ。

あの学園艦たちが消えた日が10月8日であるから、ちょうど7週間が経過していた。オレンジの建物の脇を少し冷たい海風が通り抜ける。この日大洗アウトレットモールの広々とした駐車場を利用して、大洗舞祭も大洗あんこう祭も中止されたこの町で、ある行事が行われた。学園都市住民の四十九日の法要が開かれるのである。

最早これ以上海上保安庁が学園艦の捜索をしても何も見つからないだろう、というのは明らかだった。沈んだと思われる地点の周辺海域のソナーでも沈没した学園艦の影はない、という奇怪な話はあるものの、またこの太平洋や日本海に、かの学園艦たちがそのままの姿で浮上する様は、誰も想像出来なかった。

学園艦らはどうなったのか。それが判らなければ、誰がやったのかなんて憶測しか持てなかった。

学園都市住民は大洗町そのものより多く、仏教、神道、キリスト教などといった多様な宗教を信仰している。そしてその内部でも多様な宗派に別れている。四十九日ゆえに仏教が主導するかと思えば、大洗にある仏教系の寺院でも大きく真言宗、天台宗、日蓮宗、浄土真宗に別れており、おまけに信徒、寺院数ともに最大宗派の真言宗も2派に割れているなど複雑であり、どこがこの法要を主導するか問題になった。

結局、期限ギリギリまで続いた論争の末、この大洗町にある寺院、神社、福音派教会に加え、水戸のカトリック教会から神父を、モスクからウラマーを派遣して貰い、合同でその死を悼むこととなった。ユダヤ教は学園都市住民の中に信徒がいなかった為、代表者の参加は認められたが、主導する宗教の中に加えることは見送られた。

参加する寺院、神社、教会は次の通りである。

・寺院

西光院

原始真宗本山願入寺
金剛院
日蓮宗菊盛寺
日蓮宗護国寺
真言宗智山派成就院
真言宗智山派寶珠院
真言宗智山派浮蓮院
真言宗智山派不動院
高野山真言宗西光院
天台宗西福寺
・神社
大洗磯前神社
道祖神社
神明宮
諏訪神社
浅間神社
大貫町稻荷神社
八幡神社
金刀比羅神社
須賀神社
永町磯鼻稻荷神社
弟橘比賣神社
成田町稻荷神社
日光神社
富士神社
鈴稻荷神社
磯浜町稻荷神社
・教会
大洗キリスト教会（福音派）
カトリック水戸教会
・モスク

水戸アブーバカルモスク

そして今日がその当日である。集まった人々がアスファルトをさらに黒く染めていた。

高々とそびえる三角のガラスの塔が背後からそれを見つめる中、少しでも心に踏ん切りが付けられた住民の親、兄弟姉妹、その他の親類、町の人、町議会議員や県議会のお偉いさん、果てには県知事までこの港町に足を運んでいる。大洗女子学園学園艦が大洗町、そして茨城県のシンボルとしてどれ程の恩恵をもたらしていたか、を示す証左であろうか。

実際戦車道大会の優勝で学園の名は一躍全国に知れ渡ったし、その後の揉め事も結果的にはイメージの向上につながった。この恩恵が実際県や町のイメージアップに繋がったのは事実だ。

だが何より、この大洗学園艦が大洗町の経済に多大な影響を与えていたことが、町議会議員総員13名が最前列で椅子に座っている要因だろう。

大洗は太平洋岸北部と首都圏との交通の結節点にあたり、北からの荷はここから陸路で各地に向かうか、房総半島を回って東京湾内に入るかのいずれかである。東京湾内に入れない学園艦たちにとっても、大洗は銚子、館山、三浦、熱海、下田に並ぶ関東周辺の主要寄港地の一つに数えられる。そしてこの主要寄港地に最も多く立ち寄るのは、ここを母港とする大洗女子学園学園艦だった。

そもそも古来から都市とは消費を強いられた人間の集合体である。学園都市も学園艦内部で学業の一環として生産活動をしているとはいえ、少なくとも食料、日用品などが外部から持ち込まれなければ生活が成り立たない。また学園都市は若者ばかりである為、成長期、流産、学業など消費を促進する要因は多くある。

そして寄港の時、その消費は港のお膝元、大洗ならば大洗、水戸、ひたちなか、銚子に集中する。ラマダーンの日没後のような盛り上がりが起こる。学園艦の規模は小さいとはいえ、財源が少なく自前で工業製品を作る力がない上、その頻度が高い大洗学園都市が与える経済効果は、それを住民に印象付けるに足るものだったと言える。

それを丸々、しかも予定では生き残れるはずだったのに失われたのだから、道徳的な感情抜きにしても人々が哀悼の意を示すのは妥当だろう。

人力車にてこの地に着いた髪を結った和服の淑女も、男の助けを借りて地上を踏み、人力車に邪魔にならぬようこの場を離れるよう命じると、これに参加すべくフェンスの間、何時もは車が通るであろう境を超えた。既に辺りには数え切れない程の人で埋められており、受付の向こうは空気も視界も暗い。

仮設のテントの下にある受付に向かい、学年ごとに少し並んで待つと、折り畳みの机の上での記帳を求められた。置いてある筆ペンにて自身の名を刻み込む。

「えっと、2年普通科A組の五十鈴華さんの親御さんですね。この度は突然のことですぞかしお嘆きのことでしょう。かける言葉もございません。

会場内、出来るだけ奥の方に詰めてお並びください。こちらは供養の際に必要となります。忘れずお持ちください。」

受付の者の決まりきった言葉を会釈のみで流して札を受け取り、係員の案内に従って奥の方へ進む。

開始20分前には着いたのだが、ただ立っただけでも隣の人とぶつかりかねない。そこにさらに人が詰め込まれる。恐らく受付の対応から考えて、ここには供花スタンドの見える方にいるはずの南南西を向いた要人と、生徒の保護者しか入っておらず、残りはガラス張りの塔の下の広場にいると思われる。

確かに今日は暑くないが、陸から乾燥する風が吹き付ける中、カバンの中に水筒を入れてきたことに安堵していた。

周りにはハンカチ片手に涙を拭う人もいるものの、私はそうする必要がない。こうして死を認めさせようとする式典の場においても、それに今一実感が伴わないのである。

遺体を見ていないこともあるが、学園艦が消えたことも考えると、この世にいないことは認めるほかない。しかしこの世にいないとしても、どこか他の場所で華を咲かせている気がしてやまないのだ。橋

のない川の対岸のような場所で。

一人娘がそこに向かった後、華道の繋がりの中で多くの人が私のもとに足を運んだ。その中に汚い感情をしまい込んでいるのを感じ続けてしまったのも、娘が何処かにいるのでは、という気にさせる要因の一つであるのかもしれない。私がここに来たのは、葬式をしてしまった以上忌明けしなくてはならない。それだけの理由だ。

昼一時、予定通り法要はお偉いさん方による式辞で始まった。

「……未来を見ることが、それを支えることが出来た幾万の若者の命が、この太平洋の海の底に散ってしまったこと。本当に何と申し上げたら良いか、思いつくどのような言葉も陳腐に思えて仕方ありません。……」

「……娘が主導する学園艦がこのような惨事に見舞われてしまいました。もはや二度と、顔さえも写真を通じてしか目に入ることもありません。私はこの先どう生きればいいのか、どうすれば良いのか、それを『お母ちゃん』と呼んでくれる娘に尋ねる訳にもいかないのです。……」

「……かつて今も、大洗女子学園学園艦は変わらず大洗に寄港しては我々を、我が町をその巨軀から見守ってくださいました。学園艦あつての大洗であり、大洗あつての学園艦でございました。その相互性が失われてしまった今、皆様を悼むのは勿論です。

しかし皆様が築くはずだった未来も我々は見つめ、より良きものとせねばならないと感じております。どのようなことがあろうとも、再びこのような惨事に遭う若者を、それを悲しむ親を生み出してはならないのです。……」

長々した挨拶が続く。渡された札から考えて、この後はここにいる多くの人が並んで前に向かうのだから、先にこういう話を纏めてやってしまおうというのは分かる。だが長い。悼みたい思いは感じるが、この為に我々は1時間以上前に集まったのか。

ここで文部科学省からの代表者が挨拶をしなかったのは気になったが、保護者の代表者が話している途中に泣き出してしまったし、そのせいで時間が伸びてしまったのだろうか。この時間は決まってい

るのだから。

14時14分より1分間、黙禱。向くは南南西、太平洋の八丈島東の沖合。その時、その場所にいたはずの大洗女子学園学園艦は文字通り姿を消した。あの時のようなサイレンも鳴らず、波の音だけは意に介さず響いた。

その後は前の方の人から順に並んで一瞬前の台に手を合わせる。建物側からは人がどんどん抜けていつているように感じる。目の前のスペースが開いて暫く、黙禱から2時間ほど経過して、私も列らしき列に加わることが出来た。

そこからまだ並ぶこと1時間。やっと次に左に曲がれば、私も台に手を合わせられる。そう思っただけで待っていると、斜め後ろから車の音がした。今日も車は時々会場前を通っているのだが、その縦に長い車は彼女が入って来た入り口の前で止まり、喪服の女性が降りて来ているのを見た。

その女の顔は遠目ながら、華道以外の情報には疎い彼女でも見たことがある顔だった。間違いなく西住流家元の西住しほである。

彼女がテントの中に入っていったのを見てみると、目の前に少々スペースが生じている。多少慌ててそれを詰める間に、その姿を見失ってしまった。

列に沿って曲がって、私は初めて西北西と東南東を結ぶ直線上に置かれた台を目にした。置かれているのは基本花束。他にも希望者から集められた写真もあるが、榊など植物が目立つ。その中で寺によっては箱に入った仏像、神社によつては箱に入った御神体を持つて来て、経や祝詞を述べている。

その後ろで人々は祈りを捧げている。長い人もいれば短い人もいる。空いたスペースに次々人が入り、終わったらすぐに抜けるシステムだ。丁度目の前から一人抜けたので、菩提寺の前ではないがそこに立ち入って手を合わせ、ここからいなくなってしまった人のために祈りを捧げた。

すぐに一步下がり、またベルトコンベアに乗つかる。流されるまま、私は一度曲がつて暫く進んだ後、会場外に押し出された。既に多くの人は帰っているらしく、案外スペースも広い。

帰る為には新三郎を呼び戻さねばならない。呼んだとしてもすぐには来ないし、彼女も暫くしたら来るだろう。娘が彼女の娘に世話になったのだから、挨拶しておくのが筋だ。ここで待つ他ない。

新三郎に一言連絡して、塔の足元の芝の上で暫く立ち尽くす。弱まってきた風が草を通じて足元を、髪を通じて着物の布地の上を流れる。

列が途切れ途切れになってきた。出て来たものは揃って泣き腫らしている。そう、ここまで来ると最後の方に回って子供や親などの為に嘆き続けた人間しか残らないのだ。

ここにはこの世の悲しみの一部が凝縮されている。世界の中では数あるうちの一つに過ぎない、というのがこの世界の哀しいところではあるのだが。

だがその中で毅然としているように見える女性がいる。その人が

列から弾かれると、会場は閉じられた。

だが匂う。近づいてみると、他のものに混じっている上に微かではあるが、確かにそれが感じられた。涙の匂い。恐らく服に何重にも重ねられた、永遠に抜けないもの。

私はそれに気づいていることを気取られないように、少し早足で近づく。

「西住しほ様、でございますか?」

「……はい。」

「私、五十鈴華の母の五十鈴百合と申します。娘がご息女様にお世話になりました。」

「ああ、五十鈴さんの……」

彼女には娘の名の方が遥かに通りがよいようだ。

「……この度はご息女のご不幸、心よりお悔やみ申し上げます。彼女は間違いなくこの先の戦車道の砲手の道を切り開く方でありました。同じ戦車道を学ぶ者としてなんと言ったら良いか……」

「そちらもご息女様を二人とも、同時に逢えなくなってしまったと伺っております。それは私には想像しかねることでございます。私こそなんと言ったら……」

「……やめましょう。西住流は常に前へ進む流派。惨めな気分にはなりません。」

「……ええ。いずれにせよ、娘がお世話になりました。またお世話になる日が来ると祈っています。」

「……私はこの後も用が有りますので、これで失礼します。」

「こちらこそ、時間を取らせてしまい申し訳ありませんでした。」

彼女は近くに停められた縦に長い車に乗り込むと、何処かへ向けて走り去っていった。きつと彼女は私を奇妙な人だと思っただろう。だがそれで良い。あの涙からして、死んだと信じる故か、はたまた私たちが知り得ないようなことを知っている故か、精神状態が宜しくない。深酒まで付いているから、ほぼ間違いないだろう。

もし前者ならば、彼女の心持ちは少しは上向くだろう。娘の友の母を僅かばかり救う。それが今私にできる微かな自己満足なのだから。

「奥様……」

新三郎はやはり早い。すぐに隣に停まり、台を通じて私を上に乗せる。

「このまま戻られますか？」

「そうしなさい。」

人力車は海から離れ、ようこそ通りをエスコの前、ガード下を通過しながら国道51号を目指し駆けていく。一つの明かりは沈み、やがて細かい明かりが所々から道中を照らすようになる。

「……新三郎？」

時折持ち手から右手を離し、顔の方に腕を持っていつている。

「……すみません、奥様。お嬢のことを思い出してしまつて……特にあの時、お嬢が勘当されて港に送つた後の帰りとかを……」

「本当に新三郎は泣き虫ね。」

「男なのに面目無い……」

「……前を向きなさい、新三郎。あの娘はそう簡単には死なないわ。なんていったつてあの多感な時期に勘当されても、それに最高の作品で返して来るような強い娘ですもの。」

「……しかし……幾ら何でも学園艦がなくなったというのに……」

「私はあの娘が死んだなんて絶対に信じない。海の底からあの子の遺体でも上がつてこない限り。ただ今は私たちと逢えないだけ。大海原の向こう側、そんな所に居るわ。そしてそこで必ずあの娘は強く生きています。」

「……」

「五十鈴の家の主人として命令するわ。華は何処かで生きていると信じなさい。そして華のことでまた泣くことは許しません。」

「……はい。」

大きな輪っかの横を抜けて、二本の足は二つの車輪に支えられつつ、さらに強く回り始めた。

さてこちら、生徒会長室。2012年にいけば戦車道の砲手の道を切り開いていただろう方は、今日も業務に勤しんでいた。高3生の復職により業務は分散されたものの、配給とか人員配置とか業務もそこそこある為、以前ほどではないが暇ではない。

私五十鈴華の所属は動員人員管理班。多種ある生徒会の仕事の中でも忙しい部類に入ります。もともと仕事が少なめな班は手が空くと忙しい所へ引つ張られますから、不公平がある訳ではありませんが。

この日も明日の魚を捌く為、また服製作の為の人員を選んで、夕方の掲示に向けてペンで紙に書き込みます。正直ペンもプリンター用のインクも切れつつあるので、班ごとの言い争いの種になることもあります。しかし授業がなくなつて鉛筆やシャーペンの芯が売れなくなつてこちらに回つて来やすいのもあり、大体はこれらを代用して収まっています。鉛筆なら向こうからも調達可能でしょう、おそらく。

人員を選ぶといっても、候補者のリストの中からまずは今日やっている方を除き、それ以外の中で前日体調が悪そうだったとか怪我したなど作業するに支障のありそうな方を除いて、残りから選抜します。この時あまり作業が上手くない方も上手い方も関係なく混ぜます。上手い方ばかり選抜すれば、休もうと手を抜く奴ばかり現れますし、上手くない方ばかり選抜すれば、単純に作業効率が落ちるからです。回収した布に限りある被服科の作業ならいざ知らず、毎日大量の魚を捌かねばならないのならば効率が高くあつて欲しいのです。

で、朝から何とか両方選抜を終えて配給所での掲示用のものを作成し終わりますと、もう既に午後の2時半を回っています。時間が掛かり過ぎだと思われるかもしれませんが、班の人員の一部は被服科の作業を見回って皆の労働意欲の確認を行っていますから仕方ありません。勿論抜き打ちですよ。

さて今日はこの後は配給の仕事がある訳なのですが、出発までのあと1時間ほどで何が出来るか。次のことも考えて物資総合管理の手

伝いに行っても良いのですが、明日また人員を選ぶ準備をしておくという手もありますね。

他に仕事があればそれに充てようかと、両手の指を組んで前に伸ばしてから、席から立って辺りを見渡す。こちらで仕事をしているのは少数である外部折衷班のみ。

「五十鈴さん？」

後ろから声を掛けられ振り返ると、小山副会長が窓を背にこちらへ手招きしている。

「どうしました？」

「今手空いてますか？」

「えっ、はい。ついさつき明日の動員人員も決まりましたので、配給に行くまで手は空いてますが。」

「でしたら一つお願いしたいことがあるんですけど……」

「戦車道の関連ですか？」

「そうじゃなくてですね……これ見てもらえますか？」

副会長に指さされた紙箱の中には、奥に多様な色、手前に濃淡混じる緑。

「花、ですか？」

「そうです。農業科が山の木を切っているじゃないですか。そして一部の土は結構栄養ありそうだから、島に客土したいらしいんですよ。そうすると一部生えている草や花を抜かなきゃいけないから、その花を何かに使ってください、とこっちにくれたんです。」

華道選択者に回すという手もあるんですけど、この前視察団の歓迎手伝ったもらったばかりですし、感謝も兼ねて生徒会として住民の皆さんの生活に文字通り花を添えたいんですよ。

花瓶は有りますけど、花の取り合わせとかは私たちだとよく分からないので、配給の時間までに簡単に生けて貰えますか？」

「良いんですか？他の仕事に回らなくて？」

「開発班は下で次の派遣の準備ですし、他も人員は足りてますから、配給まで手伝いが必要な所はないでしょう。物資班も明々後日の売却の準備を手伝っていますし。」

「花瓶を置く場所は配給所ですか？」

「そうです。」

確かに何か一仕事為すには時間が足りないし、其の仕事が無いと云われれば、目の前の事をするしかない。

「分かりました。私のもので宜しければ。」

華は花と花瓶を自分の机の上に移した。箱を傾かせて、それらと正面から向き合う。配給所で花瓶に刺して人から見られるなら、左右180度から見られても格好が付くようにしなければならぬ。

花は菊にサフラン、ブバルティア、ナスタチウムなど。色も赤やオレンジ、紫など多彩である。テーマは安定感。今の生徒会が住民の皆さんに伝えて然るべきものである。

濃い色の花は瓶の淵に近い方に、そして上の方に飾る花は色が薄く、小さい花にする。花の茎や花そのものを傷めないようゆっくりと一本ずつ刺していく。もっともこれには花を刺すのが一月半ぶりという理由もある。

刺しながら時々瓶を左右両側から眺め、自身の方を外に向けた時どこからも眺めが良いように調整する。一箇所から良くとも他からどう見ても穴があるなら、安定感は示せない。

手を付けてから約40分、現在時刻15時20分。やっと納得出来る花を生けられた。出来ればこれを完璧なものへと導きたいが、その時間はない。

「小山先輩。」

「はい？」

会長の席で書類に目を通していた小山を呼ぶ。机に軽く書類を置いた小山が席を立て近づいて来た。

「こんな感じで宜しいでしょうか？」

「ええ、とても綺麗ですし、見てて落ち着きます。では後で学園の配給所を担当する人に渡しておいてください。」

「はい。では私もそろそろ準備を。」

この日、学園の配給所に置かれた花瓶に、生徒会の担当の者が気を遣ったのか、『五十鈴華作』という札を置いた。元々戦車道にて優勝に

導いた砲手として名を知られてはいたが、これによって一層名を知られることになる。

配給の中身は半分以上が捌かれた魚の身になった。燃料の確保により操業に余裕が生まれたこともあるが、なによりこの操業が無ければ食糧が尽きていたのだ。最早次の購入で命を伸ばせなければ致命的だと言っても過言ではない。誰も口にしないが、この世界を訪れてから数度目の絶望要塞に向き合わねばならないことは、手を見ながら覚えざるを得なかった。

こうして大洗学園艦が浮かんでいる間にも、歴史は刻々と進む。イタリヤによるエチオピア侵攻は10月6日に遺恨の地アドワを、15日に旧都阿克苏ムを占領。11日に国際連盟による経済制裁の発動が決定され、翌月の18日に発動された。しかしその間の21日にドイツが連盟から脱退を宣言し、元々加盟していないアメリカと貿易が可能だった為、率直に言えば効果はあまり無い。

我々の関連で重要なことは11月9日、上海で日本海軍一等水兵中山秀雄が射殺された中山水兵射殺事件の勃発である。射殺された場所は租界と中国人街の境の路上であり、上海の租界内には多くの日本人が住み、それを狙った暴動も怒っていた為、日本はこれに対し犯人の逮捕及び排日活動の取り締まりを強く要求した。

これは全国代表大会前の為大洗の受け入れの結果に影響があるかと思われたが、幸い結果には影響はなかった。蔣介石が両広への懐柔を優先したとも取れるし、角谷杏を中国人とする以上、日本への必要以上の刺激を避けたとも取れる。

いずれにせよ中国国内に於ける排日運動は蔣介石の意向に関わらず激化しており、大洗も大陸と交流するには注意が必要だ。

また両広の蔣介石への態度の大転換は、日本の反蔣介石的な李宗仁や陳済棠への軍事支援などの政策に対しても大きな影響を与えたが、角杏に関しては実質的な権限は皆無と見なされ、特に注意は注がれなかった。

この後日本は両広に対する航空機など一切の軍備の売却を取りや

め、国内では蒋介石政権の基盤が幣制改革などで強化される中、対支一撃論が勢いを増すことになる。

広西大洗奮闘記 特別編2 ナポリタン

ドゥーチェの先にはドゥーチェが居た。

文字に起こせばその通りなのだが、そのドゥーチェらは完全に異なるものである。一人はえらくカールのかかった長い銀髪の巻き髪を顔の両柄にぶら下げ、座りながら生まれたての子鹿の如く震えている。

しかしもう片方は帽子をかぶっている為分かりづらいが、ひたいの目立つ中年であり、奥で机を前に堂々と椅子に腰掛けている。

サヴォイア・カリニャーノ家のヴィットーリオ・エマヌエーレ3世の治めるイタリア王国首都ローマ。バチカン市国からテベレ川を渡り東にあるヴェネツィア宮殿。今回の部屋とは異なるが、この宮殿の世界地図の間が男のドゥーチェの執務室である。ヴェネツィア広場を挟んで向かい側にはヴァレンティニーニ宮殿があり、北西にはパントオン、南東には本物のコロッセオ、北にはトレビの泉がある。

彼らのいる縦に長いこの部屋の奥に机があり、背後には円柱状にフレスコ画と思われる壁画、そしてその上は半球状に曲がり、円柱状の天井が女子のドゥーチェとその金髪の副官の上を過ぎる。

昼間のはずだが、その割にはあまり明るくない。それが寧ろ彼女らの恐れを助長させている。

さてこの後この堂々としたドゥーチェの方に食事が提供されるのだが、少々時間が空く。それまでこの一人だけ寒空の下にいるようなドゥーチェがここに来た経緯について述べておこう。

このドゥーチェが乗るアンツィオ学園艦がこの世に現れたのは、西にコルシカ島、サルデーニャ島、南にフランス領チュニジアとシチリア島、東から北へイタリア半島が横たわるティレニア海の中央、東経12度、北緯40度付近であった。

もつともそれがはつきりと分かったのはもう少し後、北東に進んでガエータ湾沖のポンツィアーネ諸島に接近した時である。

アンツィオ学園艦は入ってきたラジオなどを通じて情勢を把握すると、イタリアと関係を持ってないか探り始めた。指導層の一部はここ

から離れてフランスと提携するよう提案したが、それは除外された。理由としてはコルシカ海峡やサルデーニャ島南方を航行可能か不明瞭であることもあるが、何よりアンツィオの廉価な食糧供給体制を維持する為にも、早急に食糧を購入出来るようにして学園都市住民の不满を抑えたかったのである。

これに対しイタリア側もイタリア空軍の偵察により存在が確認されたことを受けて交渉に応じ、その前段階としてジョヴァンニ・ジエンティーレを中心としたローマ大学の教授陣によつて視察が行われた。彼らは視察後の報告書の一節に

「Roma ・ statò completato nelle
Issole Ponziane.

(ローマはポンツィアーネ諸島で完成した)」

と書いたことで知られている。

もつともイタリア側もただで受け入れたわけではない。エチオピア侵攻に伴う国際連盟の経済制裁は国内経済に影響を与えており、政府は自給自足体制の構築を進めていた。安価な食糧供給の為に学園艦内での穀物生産を重視していたアンツィオ学園艦の技術などが、その構築を早めるとみなされたからである。また諜報機関SIMを通じて他国の一部が同様の学園艦と接触していることを掴んでいたのも要因として挙げられる。

こうしてこの地に現れてから1月弱、11月2日。ガエータ湾内の都市テツラチナにて協定が結ばれた。これにより学園艦内の物資供与、ポンツィアーネ諸島の対岸のラツィオ州で進められている農地開発への人員と技術の提供、イタリア政府官僚への学園都市運営権の移譲、軍備のイタリア軍編入。それと引き換えにイタリア国营企業との交易が認められ、学園艦はイタリア王国に編入されることが定められた。のちにこれはファシスト大評議会で承認され、施行された。

これによりイタリアは元々イタリア化していたようなところを、エチオピアよりも先に実質的な植民地として獲得したのである。

実際にドゥーチェ本人が総帥警護大隊数名と学園艦を訪れ、黒服を着てローマ式敬礼をした学園艦の住民の男性の間を歩き、学園都市中

心部の学園長の執務室のバルコニーから住民に向けて演説をした。
この演説の一節に

「Coloro che parlano italiano
seguono lo stile di vita italia-
no, accettano come un italiano
o.

(イタリア語を話しイタリアの生活様式を踏襲する者は、イタリアの
民として受け入れよう。)」

とあるように、彼自身の思想が反映されたものだった。

これを高名な映画監督アレックスサンドロ・ブラゼッティが撮影し、国
からのさらなるイタリア国立映画実験センターへの助成金と引き換
えにプロパガンダ映画を製作し、大規模な学園艦という未知の物体を
かなり有利な条件で屈服させたドゥーチェへの個人崇拜をさらに強
固なものとした。

アンツイオ学園都市はラツィオ州ラティーナ県のコムーネ(地方自
治体)としてイタリア領にされ、官僚などは即座に担当者が派遣され
てさらなるイタリア化政策が進められたのだが、テツラチナ協定の条
件の一つである軍備の提供はあまり重要視されなかった。

学園艦に陸海空軍などあるはずもなく、警官隊は学園都市警備の為
動かせず、風紀委員に至っては報告書にアスカリ(伊領アフリカの現
地民兵)以下の士気と武装であると酷評されていることからわかる。
る。

唯一可能性があったのがこの女子のドゥーチェ、本名安斎千代美率
いる戦車道部隊であった。安斎千代美を中心に統率が取れており、C
V33を中心とした戦車の編成はイタリア軍でも活躍可能だと見な
されたのだが、ドゥーチェ自身が黄禍論的思想を持っており、バドリ
オ元帥を中心とした陸軍が女子を編入する事に反対したことで、流れ
ることが九分九厘決定していた。

しかしこれを聞いて怒りを覚えた人間が一名。彼女はペパロニと
呼ばれている。戦車道部隊の未編入はドゥーチェアンチヨビとその
補佐官カルパッチョの有能さを無碍にするものだ、として輸送船を経

由してローマに向かい、何とムツソリーニに対し直訴を行うという暴挙に出たが、その場で取り押さえられた。

もつともこれはその場で警護大隊によつて銃殺されかねないことであるのだが、自らと同様ドゥーチェと呼ばれ、しかも部下が命を賭けてまで能力を訴えるその人柄に興味を持ったムツソリーニによつてその場での銃殺は取り止められ、ペパロニは監禁された。

ムツソリーニは陸軍のエチオピアでの統治権限強化と引き換えに、アンチョビとカルパッチョが学園艦からイタリア北部、ヴェネツィアとジェノヴァの間あたりの町モデナへ呼び出された。ここには名だたる陸軍軍人を輩出した歴史あるモデナ陸軍士官学校がある。この試験を受けさせることを認めさせたのだ。

急遽イタリア語の試験を受ける事になったアンチョビとカルパッチョであったが、試験の結果はアンチョビは英語以外は、カルパッチョはほぼ全て入学要件を満たしている、ときた。おまけに2人ともたった数日の試験期間中に士官候補生数名と友好関係を築くなど、コミュニケーション能力の高さを発揮した。

しかしあくまで陸軍の要人には軍人としての採用に反対する者が多く、ムツソリーニ自身も彼らに対する黄禍論的意識は薄まっていたものの、実際に入學させるかどうかについては慎重だった。

そこで最後に機会を設けることにした。ペパロニの解放とアンチョビ、カルパッチョの士官候補生としての入学許可の条件として、ペパロニが何かしらでムツソリーニを納得させること。これをペパロニとアンチョビ、カルパッチョに通達したのである。そしてその為の場が、ここヴェネツィア宮殿というわけである。

考えてみれば唯でさえムツソリーニ次第で全て解釈可能な課題なうえ、イタリア人を料理にて納得させようなどという行為を選んだのだ。それには疑問点しか湧かないが、ペパロニはそれを選んでしまったのである。

アンチョビは軍人となることを心から望んでいるわけではない。しかし自分の腹心たるペパロニの為には動かざるを得ないのである。白く身を包んだシェフにより、料理が運ばれ、机の上に置かれる。

その皿から鳴る水が即座に蒸発する音、それによって運ばれる香りによって、離れて座っていた2人にもそれが何なのかすぐに分かった。「あのバカ……イタリア人相手に鉄板ナポリタン出す奴があるか……」

ナポリタンはイタリアのナポリのトマトソースパスタがアメリカ、日本でそれぞれ独自に改変され生み出されたもの。本場のイタリア人からは偽物と罵倒されても仕方ないものである。

「いえ、ドゥーチエ。寧ろ有りかもしれません。単なるイタリアンパスタなら本場の人間には敵いませんから、珍しく比較対象が少ないところにチャンスがあるかも……」

説明を受けた後、机に向かうムツソリーニは暫くじつとその鉄板を見つめた。フォークを手に取り、巻きつけて口に運ぶ。咀嚼。そして嚙下。しばしじつととまっているムツソリーニを前にアクションを取れる者はいない。

「…… Cosa vuoi convincere? 」

(……これで何を納得させたい?) 」

まだ2人は何も反応できない。

「Certamente come questo non ho mangiato. Non male. Tuttavia, cosa vuoi convincere? 」

(確かにこの食べたことのない感触。悪くはない。だが、これで何を納得させたい?) 」

カルパッチョは少し隣を見た。その表情は緊張により歪んでいた。一つ息を吐いて、カルパッチョは口を開いた。

「L'anostranave scolastica. sc
arsa. Pensoche fosse impossibile
ile consenare merci in modo s
oddisfacente. Pertanto, lo stud
ente vive in qualche modo face
ndo affaricon i turisti.」

(我が学園艦は貧乏です。そちらに満足に物資をお渡しすることも出

来ていないと思います。それゆえ、学生は観光客相手に商売して何とか生活しています。)

Quello che offriamo questa volta ▪ uno di quelli in vendita. Per fornire a basso costo, anche la salsa di pomodoro non completa mente utilizzata. Tutta via, tra le altre limitazioni, i nostri studenti della nave scolastica stanno facendo il loro meglio per fornire pasti deliziosi al massimo, offrendo piacere alle persone.

(今回ご提供しましたのは、その売り物の一つです。安く提供するため、トマトソースさえ十分に使えていません。しかし制限ある中でも我が学園艦の学生は最高に美味しいもの、人に喜びを与える食事を提供しようと、全力を尽くしています。)

La gente non pu ▪ essere felice senza un pasto delizioso e disfacente. Questa ▪ la politica fondatale della nostra avescolastica. Ma da sola non ▪ felice. Affidabile, se non un pasto delizioso ▪ solo un piacere temporaneo.

(人は満足出来る美味しい食事無しには幸福には成り得ない。それが我が学園艦の基本方針です。しかしそれだけでは幸福ではありません。安心、それが無ければ美味しい食事も一時的な快楽に過ぎません。)

Per questo, ▪ necessario che questo regno italiano sia sicuro. Capisco che la conquista de

ll, Etiopia in questo momento
sarà anche il fondamento della
sua fondazione. E il regno italia-
liano è il padre assoluto di que-
sta nave scolastica, la mia
avvicinazione con il regno ita-
liano.

(その為に必要なのは、このイタリア王国が安泰であること。この度
のエチオピア征服もその安泰の基盤となる為、と理解しております。
そしてイタリア王国はこの学園艦の絶対的な父であり、イタリア王国
あつての我が学園艦です。)

Amiamo la nave scolastica, la
cultura italiana. Cos'è per la
prosperità italiana, voglio far
la salute per amore della pa-
ce, anche se divento un soldato.

(私たちは学園艦を、イタリアの文化を愛しております。ですからイ
タリアの繁栄の為、平穩の為、軍人となって忠義を尽くしたいので
す。)

Quando, Italia perde, penso c-
he la nave scolastica andrò di-
strutta. Mi scusi per aver de-
dicato noi stessi.

(イタリアが負けるときは、学園艦が滅びる時と思っています。どう
か私たちの身を捧げることをお許しく下さい。)

ムツソリーニは動かない。次いでそれを聞いたアンチヨビが語り
始めた。

Per favore scusami dispre-
zzo dei miei subordinati. Mi
rispondo a bilite che non posso

s mettere di sbagliaarmi. Sem
p unisci, per favore cambiam
Tuttavia, se lo permetti, mi pe
rmetta di mettermi in battagli
a per godermi i migliori pasti
con i miei colleghi dopo la b
attaglia. I mali dell'essere u
na donna sono in mente. A cas
a della mia amata scuola, per
avore la sciamia combatte per
l'Italia che rispettiamo.

(今回の部下の無礼をお許してください。間違いなく止められなかった私の責任です。罰するなら私に変わらせてください。それでもしお許しくださるのであれば、戦いの後仲間と最高の食事を楽しむ為、戦いに身を投じることを認めて下さい。女であることの弊害は覚悟の上です。愛する学園の為、尊敬するイタリアの為、戦わせてください。)

ムツソリーニただじつと頭を下げ続ける2人を前に顔を上げるように告げた。

「Puoi scommettere la tua vita per la città, o...? Immagino che tu non sembri avere niente da chiamare a casa e entrare nella tua città natale.

(都市の為に命を賭けられる、か……どうやら君たちに故郷を呼んで乗り込んで来ようとかいう気は少しも無いようだ。)

もう一回フオークに巻きつけて、最後に卵焼きの切れ端を刺して食べる。今度は咀嚼する速度が明らかにゆっくりだ。

「…… Buono. Antonina, Carmela. Appreziamo che entrambi inno
dicano cose che entreranno

nell' accademia militare. Malo
ammettere. Se vuoi rimanere
oldato in futuro, per favore fa
i la tua fedeltà. Per pepperoni,
riconosc che non c'è scopo as
assinio e lascia te mi liberarlo
dopo una breve frase.

(…：美味い。アントニーナ、カルメーラ。両名がそう名乗る事、また
士官学校入学を認めよう。ただし認めるだけだ。その先も軍人とし
て残りたいなら、その為に忠義を尽くせ。ペパロニに付いては暗殺目
的はなかったと認め、短期刑の後釈放させよう。)

広西大洗奮闘記 81 取引

11月29日夕刻、漁船代わりの輸送船Bは明日の配給の為の魚を取りに行った。釣らねば明日は干物の配給になるだろう。そして少し遅れて同じドックから、輸送船Aと福安は多量の荷と人を積んで出航した。積載量は規定を突破しつつあるが、それでも行かねばならない。生きる為に。

人は最早すし詰め、または荷の隙間に載るような形式となっている。現に我々もそうである。きつとこれから出航する船もそうなるのだろう。

学園艦に残された燃料は言うほど無い。生徒会によって許可のない学園艦内での石油の取引は禁止されているが、漁船としての運用は食糧と引き換えに確実に燃料を消費しているに違いない。

船は上下に揺れながら進む。学園艦との交信と星を頼りに行われる夜間の航行の末、翌日の早朝大万山島近海に到着。ゴムボートを呼び出し、人員と食糧の一部を届けた。金属製の仮設住宅と共に木造の平屋の家がちらほら見えており、建設は順調だと思われる。

こつちでも地引網や釣りなどで食糧は得ているそうなので、渡す食糧は全員の2日分のみだそう。水は昨日の午前中雨が降っていたから、恐らく大丈夫なだろう。今日のこの後雨が来ないことを祈る。

船は北へ、そして広い川の中を奥へと進み、兩岸の島と木造ジャンク船の間をすり抜けて、目的地の黄埔港に到着したのは昼過ぎ。最早12月目前なのにこの暖かさ。もう慣れてしまった。

ここ黄埔港は実は未だ建設途中である。今回我々はここの完成している一部の施設にて商取引を行うことになる。

黄埔といえば軍官学校をイメージされる方が多いと思われるが、ここが選ばれたのには理由がある。まずは初期に交渉されていた珠海の立地が悪かったこと。鉄道もまともに通っておらず、広州からも遠いことを理由に、今回の取引先の広州市商会から猛反発を食らって改訂したらしい。

そして移した場所がここ黄埔。広州市街中心部から15kmほど離れたところにある。香港と広州を結ぶ九広鉄道が近くに通っており、物資の般若搬出に有利な上、広州市街中心部からは多少離れている。来年開通予定の寧漢鉄道とも接続する予定なのは幸いだ。

広州市商会も西南政権も我々が商業網を広げ、権益や思想を広げることを警戒しているようだ。現に我々もここ以外に上陸、または移動することは認められていない。

私は船舶科の許可を得た後、タラップにて船から降りて、待っていた軍人に身体検査される。嫌だが致し方ない。その後その軍人に連れられて一人の男の前に来た。

「How do you do? I'm happy to meet you. I say Hung, Guangzhou city commercial firm chief.

(初めまして。お会い出来て光栄です。広州市商会主席の熊と申します。)」

「How do you do? I'm into, the Oarai female school commercial department chief. I'm sincere and expect dealings with a profit of both today. This is the fee which established this place.

(初めまして。大洗女子学園商業科代表の伊藤と申します。本日は誠実で、双方に利のある取引を期待しています。こちらは今回の場を設けてくださった御礼です。)」

私は生徒会から預かっていた金の装飾のされた器の入った箱を手渡す。その中年の小太りの男はそれを受け取って、中身を確認してから握手に応じた。

「Oh, thank you very much. I'll move to dealings right away. What did you have this time?」

(これはこれは、ありがとうございます。早速取引に移りましょう。今回はどのようなものを持っていらつしやったのですか?)」

「Clothes, tableware and furniture. And the part of the offered steel is also brought.

(服、食器、家具などです。それと提供する鉄鋼の一部も持って来ました。)」

「Clothes and furniture... I leave them to Tung and Jun. Steel to Kau.

(服と家具ですか……童と袁にやらせましょう。鉄鋼は仇ですな。)」

「We don't have money by that about dealing, so it told to take an exchange with a food?」

(取引に関しては、こちらはそちらでの金を持っていないので、食糧との交換の形を取ることは伝えられていますか?)」

「Of course. We have prepared rice and sweet potato this time. I'll pay you the shortage from our pound making funds.

Then the respective dealings in a decided place, please. You'll talk with us about future's contents of transaction and frequency at that building.

(勿論です。今回こちらでは米とサツマイモを用意してあります。足りない分はこちらの資金からお支払いしましょう。)

それではそれぞれの取引は決められた場所にてお願いします。貴女は私たちとあちらの建物で今後の取引内容や頻度などについてお話ししましょう。)」

「I see. We'll begin to carry go

ods out immediately.

(分かりました。早速商品の搬出を始めます。)

船に戻って荷物の持ち出しを指示し、それに合わせて商業科の部下たちが輸送船から商品の入った段ボールや緩衝材で包まれた物、ひいては商品をそのまま持ち出す。家具と食器、そして衣服はそれぞれ別の場所に分かれるよう案内され、レジャーシートの上に並べられた。箱を開けたりして商品を並べ、学んだ中国語をノートに書いて見せて商品の概要を説明する。集まってくる商人たちは商品をじつと見つめながら、場合によっては詳細な説明を求めてくる。

「I want you to teach me humidity management on this shelf about a durable period.

(この棚の湿度管理及び耐用年数を教えて欲しい。)

「What is the material of these clothes?」

(この服の材料は何だ?)」

鉄鋼は市商会の専門の人と工学科の者がそれぞれ話を進めている。どうやらこっちは船の中で鉄鋼の内容を確認した上で、別の船に積み替えて、鉄などを管理する集団の本拠地に運ぶようだ。金が絡まないからややこしくはないだろう。

対してこちらは将来的に売る予定の物と、この取引の頻度について、熊氏と同席する数人と私たち商業科幹部が交渉する。こちらとしては一月に2度ほど開催して食糧を確保していきたいところだが、向こうはあまり高頻度での開催に乗り気ではない。理由は恐らく前述したものと同じか、またはこちらを富ませたくないからだろう。

話し始めてから少しして、ノックの後に軍服の男に連れられて、久々に見た顔とまた別に立派な服を着た男が現れた。

「角谷会長!」

「どもどもー。久しぶりー、伊藤ちゃん。」

「お元気ですか?」

「何とかね。」

この人はきつといき続ける限りこんな生き方をしていきそうな気がする。付いてきた男は熊氏と話をしている。余り喜ばしいことではないのか、表情は固い。

「こちらの方は？」

「ウチらの親方。」

「へっ？」

「西南政務委員会執行部の陳さんっていうんだけど、まあ学園都市を管理する組織のトップになる人。」

「そんな方がなぜこちらに？」

「ウチらの初取引の視察というのと、取引の詳細を現地を見て決めるため。後は市商会の人との人脈作り。」

「なるほど。」

「Nice to meet you, Mr. Hung. I, m Jue, Jue Dian.

(初めまして、熊様。私は角杏です。)

「Oh, you are……」

(ああ、貴女が……)

「There is no time. We'll discuss a main subject right away.

(時間も無い。早速本題に入ろう。)

その後数時間の議論の末、これからは毎月20日に黄埔での取引が行われることが決まった。その間に港内のあちこちで取引が進み、持ってきたものの大半と引き換えに当座の食糧の確保に成功した。服1枚とサツマイモ50g交換、まあ大体服4枚でサツマイモ1本などレートは決して良くはないが、向こうの金もイギリスポンドや法幣という新通貨で確保できたので、魚を取ることも考えれば何とかなっただろう。

これから十何年と相手にしていくのだから私たちが商品を取引する中で信用を勝ち得ていけば良いだけだ。あとは得たものをそれぞれ持ってきた箱などに詰めて船に積み込んで行く。力仕事で飯も水も僅かに持つてきた分しかないが、耐えてくれている。

船に運ぶのを見つつ、闇の中角谷会長に近づく。

「本日は冷泉さん取引を手伝っていただいたそうで、ありがとうございます。ございます、角谷会長。向こうに伝えることはありますか？」

「うーん、そうだ。生徒会長は？」

「峠さんで決まりました。生徒会による運営体制は今後も揺らがないでしょう。」

「それを聞いて安心したよ。こっちからは一つだけ。来月の10日に、戦車道の人たちをこっちに派遣するよう伝えてくれる？そう言えば小山たちには分かるはずだから。」

12月に入った。日本では初の年賀郵便切手が発売されているというが、こっちは年賀ハガキを送る必要のある人間もいないのだから大したことではない。ただ生徒会は本日も住民の安全、安心と配給や動員の管理に気を配っている。

昨日夜、航海を経て輸送船が多く、情報を携えて広州から帰還した。会長と面会出来たというし、更に現地の情報も得られたので何よりだ。

取引の結果は、持ち込んだ商品の8割5分以上を裁くことが出来たという上々のものだった。それだけこちらの商品が相手の気を引いたと見て良いのだろうか。

それによつて獲得した食糧は我々の命を繋ぐに十分なものである。これから暫くは米とサツマイモと魚以外は貝とか野草になるかもしれないが、無いよりはマシだ。我々生徒会はサーカスが提供出来ない以上、パンを途絶えさせる訳にはいかないのだ。

もちろんすべてがうまく成功した訳ではなかった。丹波さんの発案で試された取引の中での外貨獲得は、全額燃料購入に注ぎ込まざるを得なかったそうだ。まずは相手の信用を得るべきだ、という商業科の伊藤さんが言うことも最もであるし、燃料も確保しなくてはならないものであるから、そこまで落ち込むことも無い。

さて、今日の天気は晴れ。窓の外では見事に空が海より明るく見える。その昼にある二人組が私のもとを訪ねてきた。工学科の鹿島さんと船舶科の大橋さんである。彼らは間違いなく学園艦と学園都市の生存に欠かせない存在である。

「鉄鋼の切り出しの状況はいかがでしょう？」

「はい。これまでの総生産量は約600t。内訳は硬鉄が400t、軟鉄が200t程となっています。まだまだ予定の10万tには程遠い状況ですが、作業への慣れも見えますので、生産効率を上げることは可能です。」

鹿島さんが書面を手にかなり上から話す。

「ありがとうございます。学園艦が骸骨のようになろうとも、続けてください。信用を損なってはなりませんから。」

「しかしこの度初めて広州に鉄鋼が送られました。船に積みきれず現在400t以上がまだ学園艦の倉庫に残されています。」

「本当ですか？」

「本当です。現状は今年中の新学園都市の建設が第一ですから、輸送においてその為の物資が優先されるのは当然のことです。しかし我々としても出荷されないまま磨かねばならないのは心苦しいのです。」

こちらの生産技術の高さは以前の視察団を通じて把握されていると思いますし、鉄鋼の生産量を減らしても宜しいでしょうか？無論技術維持の為少量は生産しますが。数にしますと人数は1/4、生産量は1/5程です。」

「船舶科の方からも、認めてやってくださいませんか？」

「……そうかもしれませんが、人員は如何のですか？確かに技術力は島の開発でも有用でしょう。しかし工学科のその余剰人員全てを送って、受け入れられるほどの準備は整っていません。」

「はい。その為我々の新たな仕事の草案を持ってまいりました。」

私の目の前に鹿島さんが持っていた書類が置かれる。手書きであるが枚数は少なく、読むのに苦労はない。こちらが一枚目を見ながら向こう話しかけてくる。

「学園艦がここから移動しないことが決定しました。またこの先の学園艦からの人口の減少により、原子力エンジンにより学園艦内の電力を持続させることは十分可能と判断しております。また淡水化装置の移設後の動力も詳細が決まっていなかったことでした。」

学園都市の配置先の島の数は確か4つありますが、現状はその一つの大万山島にしか都市を建設していません。一つお願いです。小万山島をください。」

思わず手元の水を噴き出しかけた。

「娘さんをくださいみたいに言わないでください。」

「事実ですから。」

二人とも無表情。何を言っているか分からない。

「太陽光発電の設置先として、小万山島をください。」

「……えっ？大万山島北部の未開発の地域に作るんじゃない？小万山島に？」

「はい、その通りです。」

「……如何やって大万山島に送るの？」

「海底ケーブルを設置して、それで送ろうかと考えています。」

「出来るの？」

「はい。大万山島と小万山島の間には約1.2 kmの海峡があります。が、学園艦中に張り巡らされている電線網を取り外して転用すれば、繋ぐことはできます。電線の周りに加工を施せば、海底ケーブルとすることも可能と思われれます。」

「でも、なんでわざわざ……」

「それに関しては私から。今後の開発において、必ずや小万山島を使わねばならない時が来るでしょう。その時にどう運用するかが問題になります。仮に小万山島を農地にした場合、その農産物は全て船などで都市に運ばねばなりません。都市にしたら食糧を分散して届けねばならず、燃料消費が増えます。」

それに比べて、小万山島で発電に重点を置いて、電力のみを都市に送った方が遥かにコストが掛かりません。水もこの地は雨水が豊富なので、若干の補充で足りるでしょう。

しかし電線網からの電線の回収時間を縮小し、早期に淡水化装置稼働させる為には、それらの距離はできるだけ短い方が望ましいので、小万山島が適当となるわけです。

また太陽光発電の為の伐採により材木も増加が見込めます。」

「……確かにそうかもしれませんが、発電量はどれ位になりますか？」

「それは私から。日本での発電量は通常のもジュール20枚あたり5500kwh、船舶科のデータによると広州は日照時間が日本の約4/5ですが、北回帰線に近く夏場の日光が強いのでそれを考慮して約4800kwh。学園艦内で太陽光発電が設置されている住居は約

4000件、他にも学園校舎やその他施設に取り付けられていることを考慮すると、その全てを一年間フル稼働させた場合、約3100万kwhの発電量が得られます。

設置出力に換算すると約3kw。火力発電所や原子力発電所と比較すると微々たるものかもしれませんが、用途を淡水化装置に限定するならばかなり有用だと思われます。

必要な面積は太陽光発電同士の間隔も考えますと、0.28?。土砂流出を防ぐ林を残すとしても、十分とれる敷地面積です。

日差しによって発電量、ひいては淡水の生産量も変わる可能性がありますますが、ある程度備蓄しながら運用すれば安定供給が望めるでしょう。」

「……この資料は残しておいてください。生徒会の人たちと相談して決めます。本日中にお返事しますのでお待ちください。」

「より良いお返事を期待します。」

二人は私に礼をすると、即座に立ち去った。工学科の手が空くというのはとても良い話だし、島の開発に有利なのは間違いない。おまけに淡水化装置の動力源を確保できるというのは魅力的だ。

しかし問題もある。海底ケーブルが整備できる代物なのか、というのもあるし、その為に学園艦から電線を取るということは、学園艦での生活を完全に捨てるということ。たとえばあの鳥の言う通り戻れたとして、その場で廃艦にされ得るということ。

午後には生徒会の人を集めて今回の件及び商業科が持ち帰ってきた情報などについて議論の場を設けた。学園艦が帰れる可能性は伝えていたので議論は紛糾したが、何よりも我々が今日を、明日を新学園都市で生存していくことが重要とされ、工学科と船舶科合同のこの企画は認可された。

それと共に一つの案が浮上した。世界情勢を正確に掴む為、言語的に支障のない日本にスパイを入れようというものだ。確かに我々は現在聖グロリアーナと知波単しか存在を把握できていない。他にいるならば、それは安心感を与えるだろう。これは認可され、その為の要員も全会一致で決まった。

また島の人口が増加するにつれ、現地から生徒会の者をさらに派遣して欲しいと要望が度々来ていた。これにも高校2・3年生の数名を派遣して暫く対処することを決定し、夕方に島の者らに伝達した。

広西大洗奮闘記 83 旅行者と仕事上の理由

その日からも学園艦の人口は減っていた。町のあちこちで工事が始まり、許可を得た家や学園艦の施設に設置してある太陽光発電モジュールが回収され始めた。

電線に関しては既に移住した人の多い地域を中心に、ヘルメットを被ってゴム手袋を嵌めながら、鳶職のように電柱に登った工学科の者による回収が進められている。

もっとも回収された後も輸送船で運ぶものの中核は食糧と人員などであり、これらは後回しにされる。タオルなどで磨かれ、補修可能なものは補修する。

あとは次の輸送で仮設住宅のセットが全て運び終わる。この組み立てが進めば次々人を送りこめる。そして後は加速度的に木造簡易住宅を増やし、それに合わせ人員を送り込む。じきに食糧の備蓄拠点も大万山島に移し、港が整備され次第漁業の拠点も島に移る。此処が都市遺跡となるのだ。

12月5日にその輸送も終了した。途中で雨に降られたが積荷に影響なくて幸いだ。食糧、特に穀物は下手に湿気らせると黴が生えたりする。金で買ったものをわざわざ黴の温床にしてやる義理はない。許容ラインは青黴。

向こうに派遣した人は既に4桁に及んでおり、それを管理する人員も不足している。向こうでは生徒会の2人が彼らを纏めているが、朝から晩まで働いて担当を決め、細かな調整を行っているらしい。追加人員はこちらの仕事の調整もあり、次々回の派遣にて行ってもらうことが決まっている。

内訳は高校2年生が五十鈴さん、岸部さん、大瀧さん。高校3年生が尾根咲さん、沼津さんの計5人。担当の内訳は動員人員管理班から2人、物資総合管理班から2人、住民生活保持班1人となっている。漁獲量は安定しているし、購入した燃料と食糧が日々減少することを除けば不安はない。

都市内部に於ける反抗の動きも無い、と風紀委員会から報告を受

け、つい先日赤峰さんを生徒会に加えて、学園都市の分断の修復を行った。

また服や乾物の生産においても特段の変化は見られない。住民の皆さんもこの不可思議な情勢に完全に呑まれつつあると言えよう。これで我々は生産と移住に注力出来る。

私の机の前を訪れる人は時々いる。先日の鹿島んと大橋さんなどが良い例だ。仕事上の報告が殆どであり、あとは新たな仕事の案を持ち寄る人もいるが、場合によってはいつ島へ行くのか、また島に行く日を先延ばしにして欲しい、と嘆願してくる住民の方が来る時もある。そういう話は動員人員管理班に回すけれども。

こちらから用がある時は緊急無線、最早緊急も名ばかりとなつてしまったが、を使用したり、外部折衷班に頼んで内容を伝えてもらうかの何れかであり、こちらに来てもらうことはない。

まあ要するに、私自身が呼んで目の前に訪れてもらう人と話すことは、かなり稀だということだ。その相手はとある生徒である。

「つまらないものですが。」

彼らの前に置かれた机の上に紙皿を挟んで干し芋が用意される。干し芋が入っている袋は普通のパックであり、商業用には見えない。

「あ、どうも。」

「朝に急にお呼びして申し訳ありません。こちらに足をお運び頂きありがとうございます。被服科の動員にも参加して頂いているというのに。」

「いえいえ。」

「挨拶はここまでにして、この度お呼びした要件についてお話ししましょう。」

「どのような件でありますか?」

「はい。現在この世界は1935年の過去の世界だと推測されていますが、我々生徒会でも関係を結んだ西南政権以外の情報については十分に掴みきれいていません。聖グロリアーナと知波単がこの地について、我々は蒋介石率いる南京政府に認めてもらった。これが本当に限界

です。

大洗学園都市は少なくとも開発が済むまでは、島の外との交流はほんの一部に限られ、その僅かな穴から得られる情報はとても少ないでしょう。今はそれに対して何も行動できなくとも、情勢は把握しておきたいのです。

単純に申し上げますと、日本に行つて情報を伝えて頂きたい。」

「日本……ですか？」

「ええ、それが一番怪しまれませんので。英語か他の言語を母国語並みに話せるのであれば話は別ですが。」

「私たちが選ばれたのは……私に他の学園艦へのスパイの経験が有るからでしょうか？」

「そうです。優花里さんは間違いなく学園一優秀な諜報員でしょう。かつて2度潜入した経験は、他の誰にも得ることはできないものです。リスクは一番少ない方がいい、となればまず優秀な諜報員を選ぶのは当然のことです。」

「しかしサンダースの時もバレかけましたし、本当に大丈夫でしょうか？しかもそのレベルになると、家族が許すかどうか……」

「やはりそこが壁ですか……」

「学園艦なら捕まっても間違いなく生きて釈放されます。しかし本当にスパイするとなると、捕まれば殺される可能性も有りますし、学園都市や保護している西南政権にも影響が出かねないのでは？」

「学園に協力したくないのですが、やはり怖いであります。」
「そこまで潜入とか暗殺とかいうレベルではなく、新聞や現地情勢、また他の学園艦について出回っている情報を把握して頂くだけで宜しいのですが……」

「……つまり旅券で行つても問題ないか？」

「恐らくは。出発して頂くのはそれ待ちになりますが、上海を経由して向かつて頂くことになるかと。旅費は何とかこちらで都合出来るようにします。」

「それなら、多分大丈夫だと思いますが……」

「また詳細はこちらから伝えますので、心待ちにしておいてください。」

少なくとも来年のうちには行つて頂くと幸いです。」

「は、はい！」

「その干し芋は時間を割いてもらったお礼として持つて行ってください。」

「良いのでありますか！」

「勿論です。」

「ありがとうございます！・レーションも食べきってしまったて足りなかったんですよ。」

「喜んでもらえて何よりです。カバンに入れて持つて帰つてくださいね。」

「では失礼するであります！」

敬礼してきたので、一応こちらも見よう見まねで返しておいた。外貨獲得と情報は表裏一体だ。早急に居住、自給体制を確立し、継続的な移出品目の生産を進める必要がある。しかし住民の生活が最も肝心なのは事実。焦りは禁物ということも忘れてはならない。

私も一枚、干し芋を食べてみた。喉の渴きを潤すのは浄水だが、芋の甘みが心地よい。

6日朝に帰還した輸送船に人と資材を詰め込み、翌日送る。それが帰ってきたさらに次の日である9日、遂に生徒会の追加人員と軍人希望者が海を渡る時である。ドックから船舶科と生徒会の小山らに見送られ、西住みほ以下軍人希望者と生徒会追加人員、また移住者の一部は輸送艦福安に乗り込み、出航した。

学園艦を離れるのは2ヶ月半ぶり。学園艦よりはるかに揺れる船室の一角で、私たちは最後の確認に明け暮れていた。航海の時間は約半日ほど。これまで2週間と少し学び続けたことが抜けていないかエルヴィンさんの資料から得られたことも含めてチェックを繰り返す。

どのような処遇を受けるのかは分からないが、少なくともせめて単語だけの筆談くらいは出来ないと思う。

持つてきた家財道具は制限もあった為僅か。一部食器に服、あとは

ボコの人形くらいである。

私は人を出来るだけ生かし、見殺しにしない軍人を目指して、学園を、友達を、守り抜きたい。その為にいかなる障害が立ちかはだかろうとも、叶わないと知っていても、私はぶつかっていかねければならない、と思う。

輸送艦と輸送船はほぼ真北へと舵をとる。白く後ろに続いている波も、今夜は満月に近い月にしつかりと照らされている。五十鈴華は左側に存在感を残す学園艦をちらりと見ると、正面の海原へと視線を移した。

多くの人、特に住民はもう眠りについており、起きているのは他に船舶科と船の運行に携わる軍人層くらいなものだろう。船舶科からは深夜帯の勝手な行動に責任は取れないと言われたが、別に海に落ちるわけでもないのだから気にしていない。

私も微かな荷物をまとめて海を渡り、新たな都市の建設に力を尽くすことになったが、その道中西住さんらと行動を共にすることになった。彼女らには軍人という特別な職務を背負うことから、一人用のスペースが、といっても衝立や荷物で区切られ足を伸ばせる程度のものだが、与えられており、その衝立を重ねて端に寄せ、軍人に必要な勉強を繰り返していたようだ。

ようだ、というのは私自身はその光景を目撃していないからだ。艦内で到着直後の仕事内容の擦り合わせを行い、船舶科との調整を行った上で自由行動が認められた。

彼女らの部屋に着いた時には、勉強道具は部屋の隅に寄せられており、気軽な会話が行われていた。私も許可を取ってからそれに加わった。

久々に仕事関係の要件で話す機会を得たことで、その場は大いに盛り上がった。中国語の特別授業にいた面白い人やその前期が終わった後の打ち上げでの出来事などを聞いた。私からは配給所に花を生けたこと、最近加工されて上がってくる干し芋が美味しいことなどを話題にあげた。

元々戦車道を通じて関係を深めた間柄であるし、以前でさえ長々と話し続けられたのだ。話題は尽きない。おまけにそこにトランプが混ざれば言わずもがなである。私も結構勝ったが、会長なら全勝しているであろう。

しかし出航から4時間後、この部屋にいて2時間弱、そろそろ部屋に帰って一眠りしようと思つてその場を去つたが、到着までは後4時間ほど。中々に微妙な時間である。眠つたところで十分に疲れはとれまい。むしろ嫌な眠気が残るだけである、というわけで帰りがてら外で潮風に当たつていたのだ。

もつとも普通なら残りの時間くらい横になるのが妥当なのだろう。しかし思うところがある。彼女の心は壊れていなかった。学園の人間の織りなす燦々たる光景を見た後でも、自らの判断のもとそれを実行したとしても。

彼女は今でも敵と戦つた後は仲良く出来ると信じている上に、仲間を失いたくはないと考えているようだ。戦場ではそんな考えが通じないというのは、私でもいくらから見当がつく。

戦いとは命の消える場所。それは軍人のみに限らず、一般人の魂はおろか、神経、精神をも喰らい尽くす。そんな話は今まで何度も聞き、テレビで流されてきた。

彼女は現実に耐えられるのだろうか。捨ててきた西住の教えが当に正義、大正義となり得る場所で。友人として平穩を願う一方で、学園都市の官僚として活躍を願う。

果たして私自身はどう思うべきなのか。天上に輝く大輪は、何も答えてはくれない。

— 12月も半ばを過ぎた。

新たな政権樹立に向けた工程は着々と進み、新体制もほぼ固まりつつある。と言いつつも発言権しかない彼女に出来るのは僅かなことだけ。ただ思い出しきれないほど多くの広東の有力な人々、例えば郷紳や商人、軍人などと面識を作っておきつつ、省内の情勢を把握すること。それが全てだった。

だがこの西南政務委員会の統治する範囲は広東だけではない。隣の広西も含まれる。こちらは昔から南方の貿易によって発展していた広東とは異なり、清の時代に広まったサツマイモなどによって耕地面積が拡大したことにより、内陸への進出が大きく進んだことで発展

した。

それはともかく、私たち2人は飛行機でそこに向かう。話によると柳州という街から、李さんらの拠点桂林へ向かうとのことだ。乗るのは小型の飛行機。小さな2人なら後ろに詰めて乗れるだろう、という半ば無茶振りで空を超えることとなった。我々の立場も実質そういうものでしかないということだ。

再び白雲飛行場から揺れる滑走路を通じて飛び立ち、数時間ほど身を委ねる。私も広東語の本や手に入れた英中辞書を通じて少しずつ理解しつつあるが、やはり隣の人なしには生活は成り立たない。

その感謝すべき人は、朝早くに起こされたからかすっかり眠りについていた。そして私もそれに続いた。

広西大洗奮闘記 85 ひこうき

貴州省

.....湖南省.....

.....⑤.....江西省.....

広西省.....福建省

④.....

.....広東省.....

.....①.....

.....

.....⑥③.....

.....

.....②.....

① 広州

② 万山群島

③ 香港

④ 柳州

⑤ 桂林

⑥ マカオ

.....陸

.....海

.....省の境界線

上は参考までに製作した広東省、広西省西部の概略図だ。縮尺など
があつてゐる保証はないことをご理解頂きたい。

航空学校が併設された柳州の飛行場は町の中心街の南方にある。
柳州は広西省の中心に近いところにあり、市内の真ん中を蛇行する西
江の支流柳江が通過する。それ故広西省周辺の交通、物流の拠点と
なつており、ここから多くの農産物が消費地広東に向けて下つてい
く。

かといつて政治の中心はかつての省都南寧か両広政務委員会移行
時に中心となる桂林であり、文化的な中心地は桂林である。私たちが

ここに来るのはこの先も交通の中継地点としてだろう。

白雲飛行場よりもさらに揺れる滑走路に身を委ねた後、飛行機は段々と速度を落としていった。そこから誘導に従いある場所で停止する。

制服が引つかからないように気をつけてながら飛行機から降りると、飛行機の足元に脚立を出していた若い訓練兵が敬礼を示してきた。降り終わった私も足を揃えて返す。

どうやら軍務関係者には一応私が新たなトップになることがそこ受け入れられているようだ。もつとも軍の指揮に私が関われるはずもないが。

私は冷泉ちゃんと共に、その襟があまり固くなさそうな軍服を着た訓練兵に連れられて施設に誘導される。まずは広西空軍施設の視察を行うのだ。周りには複葉機が多く見える。というより飛行機はそれしかない。

誘導された先には他の者とは少し違う、自動車部を思い起こさせる服を着た人が待っていた。その者は私の姿を捉えると、持っていた手袋を外す。

「你是角委員長？」

（あなたが角委員長ですか？）

「這位是那個人。」

（この方がそうです。）

向こうが差し出して着た手に私も応じる。

「我是角。請多關照。」

（角です。よろしくお願いします。）

この程度なら私でも対応できる。しかしこの程度だ。これまでに何十回と人と話してきたのに、現状此れに毛が生えた程度しか話せない。故に隣の人に頼ることになる。

「我是朱。廣西航校柳州機械廠總工程師。因為此次有李先生的請求，我引導這裡。」

（朱と申します。広西空軍柳州機械工場の総工程主任を務めています。今回は李さんの要請により、ここをご案内します。）

案内に従って格納庫や整備施設などへと足を運ぶ。周りを山に囲まれた中の片隅にある平地。この取り残されたような地では、北からの敵機来襲には不利ではないのだろうか。

この施設は1年前に完成したばかりだが、設備としては広東のものにすら見劣りするうえ、機械は既に中古品の雰囲気を漂わせている。仮に戦争状態に入っていたら、損傷機体が続発し、その整備に時間がかかってしまうだろう。その間に空爆されたら終いだ。

辺りを見回すが、機体が多様だ。銀色のものがあるかと思ったら茶色のものまで。大きさも大小様々で、展覧会だつて開けそうだ。そのことについて冷泉ちゃんを通じて伝えてもらう。

「機體の種類が使多能看到，不過？」

（こちらも機體の種類が多いように見受けられますが？）

「是。我們的空軍主要從英國和日本導入機體，英國人和德國人的顧問的指導一邊受到持續訓練。機體の種類從學生用的訓練機到戰鬥機，計50架也備齊。」

（はい。我々の空軍は主にイギリスと日本から機體を導入し、イギリス人とドイツ人の顧問の指導のもと訓練を続けています。機體の種類も学生用の訓練機から戦闘機まで、計50機ほど取り揃えています。）

「戰鬥機の細目變成怎樣？」

（戦闘機の内訳は？）

「是來自日本的九一式戰鬥機9架，甲四型戰鬥機10架，來自英國的 Armstrong-Whitworth Al61架20架。前和牛虻俄626存在，不過，現狀只是這個。」

（日本からの九一式戦闘機が9機、甲四型戦闘機が10機、イギリスからのアームストロング・ホイットワースA16が16機の35機です。前はアブロ626とかも有ったのですが、現狀はこれだけですね。）

日本に抵抗するには心もとないが、地方の軍閥が形の上で揃えているだけでもマシなのだろうか。というよりかなりが日本機なのだが、これは兵士の心情から考えて良いのだろうか。

「因為以此次的協定來自日本的支援斷？，日本的機體的零部件不足被預料。即使進行了生？，如果戰爭開始全然也不？。」

（この度の協定で日本からの支援が途絶えた影響で、日本の機体の部品が不足することが見込まれます。生産を行ったとしても、戦争が始まれば全然足りません。）

「與日本和中國的開戰想儘可能推遲。機體與廣東聯合，儘可能統一想形式導入，不過，壞，不過只是我的權限沒辦法。那麼？來那個幾？」

（日中開戦はできるだけ遅らせたいですね。機体は広東と合同で、形式を出来るだけ統一して導入していきたいですけども、私の権限だけではどうにもなりません。そういうえはあれは何ですか？）

私は少し離れたところにある機体を指差す。機体といっても他と異なり、木製の枠組みだけで、色も塗られずに外晒されている。

「那是我們的新型機的模型。為參考設計著九一型，不過，為能實戰投入是還前頭吧。」

（あれは我々の新型機の模型です。九一型を参考に設計しています。が、実戦に投入出来るのはまだまだ先でしょう。）

「作為暫時那個完成了，能提高那個機體的生？率？？」

（仮に完成したとして、機体の生産性を高めることは出来ますか？）

「嚴厲。機器也不？，如果即使能增加生？量，使用那個的飛行員的數也不？。」

（厳しいですね。作る機械も足りませんし、なんとか増やしたとしても、それを使うパイロットの数が足りません。）

「是那樣？」……

（そうですか……）」

そこからは航空学校の校舎などを視察した。広東のそれがコンクリート造りだったのに比べて、こちらは木造。環境的にも恵まれているわけでもないだろう。その中でも時々すれ違い敬礼する兵士の目には、確実に光が見えた。鏡を見たい。

この視察中に別の飛行機が同じ滑走路に着陸したような音がした。訓練機かと尋ねたが、どうやらそのような予定はないそうだ。だがここに来るのは我々だけではないだろう、とあまり気にしなかった。

道に面した出口で見送りを受ける。用意された車に乗り込み、冷泉ちゃんを引つ張り上げると、手を振りながら別れを告げた。車は市街地の東を通って迂回し、山の中を川に沿い、ときに離れつつ北東へ登っていく。

桂林までは約180km。だが道は曲がりくねっており、おまけに整備も万全ではないので、時間がかかる。平地の直線道路で40km、山道だとスピードが落ちるし、窓から枝が入りかかる。初老の白髪の運転士から、乗る前に外に手を出さないようにとは言われたが、そんなに子供ではないし、何より出す気にもならない。

私は暫く枝に注意を払いつつ、広東語の教本に目を投じていた。隣はただ漫然と窓の枠に肘をつき、外を眺めている。車はかなり揺れる。日常的に船の上であつたことを、密かに感謝した。

だいぶ走っていると、暗くなった空を背後に町が浮かび上がってきた。

「那個是桂林的街。如果已經暫梳子增加到達李閣下的小宅（あれが桂林の街です。もう暫くしたら李閣下のお宅に着きますよ。）」

運転士へ尋ねさせると、そう帰ってきた。これまで見てきたのか上海、広州という大都市だったからか、そこに僅かに漏れ出る光はとても小さかった。

そこへ続いているであろう道から外れ、北へ進んでいく。左手に池を見て、それを見送った後、車はスピードを落とし始めた。着いたころには完全に陽が沈んでいた。広州を出てから半日以上が過ぎていた。

正面にそびえ立つのは巨大な灰色の石の壁。高さは10メートル近いだろう。窓はその壁の真ん中やや上に、高さ1メートル、幅は50センチほどと思われるものが入り口を挟んで左に2つ。あとは右の長い壁の同じ高さに延々と付いている。日本の城の狭間を彷彿とさせる。

運転士が扉を開け、冷泉ちゃんから先に降りる。扉の前には出迎えと思われる使用人がおり、運転士と話をした後我々を手で奥へと案内

した。

入り口を通り抜けると中庭があり、赤く塗られた柱と、石と木が備えられた庭が光に照らされている。その回廊を通り抜けると、ある部屋に案内された。客間のように椅子が用意されている。背負っていた荷物を胸元に抱え、ご主人の来訪を待った。

直ぐに例の方が目の前に現れた。李さんである。

「Chairperson Jue, welcome to my home.

(角委員長、ようこそ我が家へ。)」

「I'm bothering you. I'm not a chairperson yet.

(お邪魔しております。まだ委員長ではありませんが。)」

お互いに握手を交わす。李さんとは通訳なしで話せる為、少しは話しやすい。

「I visited an astronautics school in Lixhōu and spent very meaningful time.

(本日は柳州の航空学校を訪問しまして、非常に有意義な時を過ごされました。)」

「That's above all. Now, it's before time of the dinner, but Xi, he is my subordinator and was going to Guangdong, has brought something fascinating home. You wouldn't see yet. Do you see it?」

(それは何よりだ。さて夕食の前に何だが、広東に行かせていた部下の夏が面白いものを持って帰ってきたのだが、あなた方はまだ見えないだろう。見るか?)」

「What is that?」

(それは何ですか?)」

「That's candidate draft beer of military personnel's evaluation on table from your school.」

(あなた方の学園から来た軍人候補生の評価表だ。)

「I see, it seems fascinating. I don't have a mind to interrupt, so may I show it to me?」

(なるほど、面白そうですね。口出す気は無いので、見せていただいてもよろしいですか?)」

「Please follow me. It's in my office.」

(付いて来てくれ。執務室にある。)

今度は冷泉ちゃんも一緒に李さんの背中が続く。廊下を歩いて直ぐ、鍵のかかった扉を開いて中に入ると、正面の大きな机が我々を出迎えた。

「That is this.」

(これだ。)

李さんは厚い紙の束を手を取った。

部屋正面の机の前に二つの椅子が設置され、そこに座るよう言われる。私たちがそこに腰掛けると、李さんも書類片手に大きな革張りの椅子に腰を落ち着けた。

「This is a report of on desk practice officer carried out in a military office in Guangdong. As for this on desk practice, it seemed to be performed the cause of your assumption to replace the Central Command where the officer cadet Guangdong military to lead an excellent student of the military officer school.

(これは広東の軍官学校で行われた机上演習の報告書だ。今回の机上演習は君たちの軍人候補生4人率いる広東軍が、軍官学校の優秀生4人率いる中央軍を撃退する、という想定のもと行われたらしい。)

「Cantonese army repluses Central army, doesn't it?」

(広東軍で中央軍を撃退、ですか?)」

無理だ。中央軍は1年前の共産党との戦いに100万近くの兵を動員したと聞いている。対して広東軍は12万。おまけに武器弾薬もその他の装備の備蓄も十分では無く、士気も低いことは今まで確認してきた。いくら机上演習とはいえ、そのことを考慮していないはずはない。

「There seem to be no people who have finished standing more candidly than in the former candidly draft beer according to

o a report.

(報告によると、これまでの候補生の中で一月以上耐えきつた人はな
らう。)」

「How does it do?」

(どのように行うのですか?)」

「Candidate draft beer gives a r
oom to an indentant separately
with the respective groups of
candidate draft beer, and is su
es a directive in the indentan
's room from the room. An int
endant changes the frame which
shows an army on the map and
makes them report a result of
the battle to each room based
on the directions. They seem t
o have repeated this earnestly.
After changing at 72 minutes
for that day, it's said that they
did that all the while continui
ously. If a result is real, the
y are clogged on two days and
a half, for about 50 days, and
it's said that your candidate
draft beer didn't surrender.

(候補生のそれぞれのグループと監督官に部屋を別々に与え、候補生
らは部屋から監督官の部屋に指示を出す。その指示を元に監督官が
地図上で軍を表すコマを動かして、戦闘などの結果を各部屋に報告さ
せる。これをひたすら繰り返したらしい。

1日は72分に置き換えられて、それを昼夜ぶつ続けで行ったそう
だ。結果は現実で2日半、つまり戦場なら約50日間、君たちの候補

生は降伏しなかったそうだ。」

ボードゲームの延長みたいなものか。

「……Do you seem able to accept our candidate draft beer at military officer school?」

(……私たちの候補生は受け入れて頂けそうですか?)」

「Maybe. However, the difference would occur to the status by the ability certainly. The person who can't admit entrance may go out.

(恐らく。だが間違いなく能力によって地位に差は生まれるだろう。入学が認められない者が出るかもしれない。)」

「I understand that.

(それは承知しています。)

それそうだ。体力的に大変だったみたいだが、こちらも能力のない飯ぐらいを抱える余裕が無いことくらいは知っている。私がうなづくと、隣の冷泉ちゃんが軽く手を挙げた。

「Excuse me. If possible, could you tell me the value of the candidate draft beer?」

(すみません。出来れば良いので候補生の評価もお聞かせ願えますか?)」

「……OK. The way of a practice is quite fascinating. First, sail

(……まあいいだろう。演習の方法の方が結構面白いのだがな。まずは西。)」

評価は書類の終わりの方に書かれていたようだ。

「Sail? Ah, Nishizumi.

(セイ? ああ、西住ちゃんですか。)」

「She's excellent. When polishing this rude ore, she'd become a wonderful commander. It's said that they can find the weak point of the enemy's front immediately in particular. If you can see actually without looking from the sky, there is not his much wonderful ability. However, there is also a problem. It's said that she made them cause of the Cantonese surrender.

(彼女は優秀だ。この原石を磨き上げれば、素晴らしい指揮官になるだろう。特に敵の前線の弱点を即座に見つけられるそうだ。上から眺めずに見抜けるなら、これほど素晴らしい能力はない。

ただ問題もある。彼女が広州陥落の原因を生んだそうだ。)

「What is the cause?»

(と聞いてますと?)」

「When 30 days pass, Central army has a reinforced. Excellent draft ber indicated offensive using that. As a result, certain unit was surrounded. Ordinariness makes front retreat, and a defensive war should be spread again.

But Sail aimed at breakthrough of siege, and they succeeded in a little soldier, rescue and exchange for many damage and

time.

The front is broken through quickly because a unit was pulled out from the other front for the offensive of course, and without being alarmed enough to resist, Guangzhou surrendered, and practice is therefore on which has ended.

I think she's particular about once of victory and doesn't have a strategic viewpoint sufficiently from this result. If they were aiming to keep fighting really lengthily temporarily, I can't understand these tactics.

(30日が経過すると、中央軍が10万人増強されるルールになっている。それを使って優秀生が攻勢を指示した。その結果、一部の部隊が包囲された。普通は前線を後退させて防衛戦を張り直すのが道理だ。

しかし西は包囲網の打開を狙った。そして多くの被害と時間と引き換えに、わずかな兵の救出に成功した。

勿論その攻勢の為に他の戦線から戦力を引き抜いたため戦線は一気に突破され、広州は十分な抵抗も出来ずに陥落し、演習は終わった、というわけだ。

私はこの結果から彼女は一回の勝利に拘り、戦略的視点を十分に持っていないと考えている。仮に彼女らが本当に長く戦い続けることを目指していたなら、私はこの戦術が理解出来ない。」

「It's behavior appropriate for Nishizumi.

(西住ちゃんらしい行動ですね。)

「Even if you understand that name by an army, is unified in west, can you understand these mysterious tactics?」

(軍での呼称は西に統一していることは理解して頂くとして、この奇怪な戦術が理解出来るのか?)

「She's more scared to lose my company than she wins. That may be caused by her doing panzer fahren.」

(彼女は勝つよりも仲間を失うことを恐れているのです。それは彼女が戦車道をやってきたことに起因しているだろうと思われれます。)

「I see.
(なるほど。)」

「I asked my subordinates not to make her do that but……」

(そうさせないように頼んできたのですが。)

「It doesn't seem that they could boot her off.」

(蹴り落とせなかったようだな。)

「I expect that she's trained by an army.」

(軍で鍛えられることを期待しましょう。)

李さんは紙を一枚めくった。

「Second, chunga.」

(次に松。)

「It means Erwin.」

(エルヴィンさんだな。)

「Erwin? What is the name like the German? I hear that the

r Japanese last name is Matsumoto.

(エルヴィン?何だそのドイツ人のような名前は?こちらでは日本の姓は松本と聞いているが。)

「She's calling each other by a nickname in her company in a dormitory by a school ship, and her sobriquet there is Erwin.

(彼女は学園艦での察にて仲間内であだ名で呼びあつていまして、そこでのあだ名がエルヴィンなんです。)

「By the way, she's quite excellent, too. It's inferior to Sail of the ability to see through the weak point, but she has the strategic angle of the supplement, the consumption and the political viewpoint.

A Cantonese army aimed a gap of enemy's command of the air made all of them prepare aerial bombardment in particular. And she made them counterattack the army all together, and enemy was repulsed temporarily.

It seems that a Cantonese army thinks they don't know whether it's the strategy which can be used from now on because the number of fuselages isn't e

nough but it's worth considering.

(まあそれはいいとして、彼女もなかなか優秀だ。彼女は弱点を見抜く能力に於いては西に劣るが、補給、消耗、政治的視点など戦略的な視点がある程度持ち合わせている。)

特に保有する航空機全てを敵の制空権の合間を縫って空爆を仕掛け、それに合わせて陸軍を反撃させ、一時的に敵を撃退した。

機体数が十分ではない為、今後有用な作戦かは疑問符が付くが、検討する価値はある、と向こうは考えているようだ。)

Her fault is to aim too much and stick in order to produce the situation of the old tactics. When it was the strategy a short while ago, I aimed at a siege extermination from a big breakthrough, and even if advance could be held at a reserve army, the military power was put in. Clear failure. If she can even conquer that, and it'll be, she is worth of bringing up.

(欠点はかつての戦術の状況を作り出そうと狙い過ぎて固執してしまうことだ。先程の作戦の際も大突破からの包囲殲滅を狙い、後詰めに進軍を止められても兵力を投入したそうだ。明らかな失敗だろう。)

そこさえ克服できれば、育て甲斐があるのは事実だ。)

I hope that whether it, s trained and is she develops.

(鍛えられて伸びるといいですね。)

I may suggest that she, d like to travel Germany in studying

abroad.

(ドイツに留学に行きたいと言い出すかもしれないな。)

「It depends on an international situation, but it'll be somewhat impossible. Third, Zakk 6.

(国際情勢次第だが、この4人の中で一番可能性があるのは彼女だろうな。次に澤。)

「It means Sawa.

(澤さんだな。)

「If I say her value simply, the emergency is able, but time will be usually not completely satisfactory. There are no cases that she takes notice of supplement during a war, and it's said that there were also several cases that she spoke personally.

(彼女の評価は、単純に言うなら非常時は有能だが通常時は今ひとつ、だろう。戦争中の補給への意識が低く、自ら発言することが少なかつた。)

「I can understand that she doesn't have the ability to settle on people.

(人を統制する力が不十分だというのは理解出来ますね。)

「A necessary concept should be told to military personnel, but it's because the true character of the person isn't changed.

Even if it's changed by force,
only the man who broke can do
spirit.
She's proper as the man who t
akes an order from a senior of
ficial, moves an army and leads
a victory, but it's probably
ifficult to aim at any more st
atus. Finally, Geil.

(必要な概念は教えれば良いが、軍人教育でも人の本性は変えられな
いからな。無理やり変えても、ぶっ壊れて使い物にならない人間しか
出来ない。

上官からの命令を受けて軍を動かし、勝利を導く人間としては妥当
だが、それ以上の地位は難しいだろう。最後に磯。)

「It means Isobe.

(磯辺さんだな。)

「She won't be at all. She would
n't be able to become an offic
er. The reason can be explained
d by one words she uses.

(彼女はどうにもならん。恐らく士官には成れないだろう。その理由
は彼女が多用する一つの言葉で説明できる。)

「Guatlheis, isn't it?

(根性、か。)

「Right. In English, Guts. The o
fficer isn't supposed to tell
theory of mind. It's to a nonc
ommissioned officer that that
is permitted. An officer has t
o think rationally to an enemy
by the soldier who has and ma

keep up with the best work. When every her giving an order I'm saying so that wouldn't heal at all.

(その通り。英語だとGutsか。士官は精神論を語ってはならない。それが許されるのは下士官までだ。士官は持っている兵で敵に対し合理的に考えて最高の仕事をこなさねばならない。命令の度にそう言っているようではとても治らないだろうな。)

「Even if it's ordered with "Guts!" certainly, someone don't know how to handle.

(確かに命令で『根性!』とか言われましても、どうすれば良いのか分からないでしょうからね。)

「That's it for the talk.

(こんなところだろうか。)

「Thank you for teaching.

(教えてくださりありがとうございます。)

礼をしようと席から腰を離すと、後ろからの同じ高さの2音がそれを途中で止めさせた。

「主人先生、吃飯的準備就緒了。

(ご主人様、食事の用意が整いました。)

「明白了。

(分かった。)

李さんも書類を置いて立ち上がる。

「I'll offer you food served in a pot. The cook's feed in my house is good.

(今夜は鍋をご馳走しよう。私の家の料理人の飯は美味いぞ。)

「I'll have it thankfully.

(ありがたく頂きます。)

「A dining room is there.

(食堂はこつちだ。)

部屋から出ると、女の召使いが我々を待っていた。手には口ウソク。あたりの土壁をボウつと柔らかく照らし出す。本格的に暗くなった建物の中を進んでいくと、一際大きな扉の前で止まった。

重そうなドアを真ん中に立った召使いが力強く両方一気に開ける。中から湯気が漏れることはないが、確かに四角い机の上に置かれた鍋は蓋が置かれており、穴から湯気が噴き出している。

「It looks delicious!

(美味しそうな鍋ですね。)

「Of course!

(勿論だ。)

私たちが扉側、李さんが奥に座り、召使いがそれぞれの腕に中身をよせる。間も無く他の方がノックの後後ろから現れた。

「??的。」

(妻よ。)

「我遲到想壞。?們是顧客?」

(遅れて悪かったわ。彼女らがお客様?)

「對了。」

(そうだ。)

「?們非常看上去年輕。」

(随分と若い方々ね。)

彼女が李さんの隣へ回る間、右へ回っていた首が元に戻る。

「She is my wife, Gwok3die1git3.

(彼女は私の妻の郭德潔だ。)

「She's your wife! I'm June the party member of the Kuomintang.

(奥さまでしたか。私は中国国民党員の角と申します。)

「我是秘書的冷。」

(秘書官の冷だ。)

我々は一応軽く席を立てて礼をする。

「我是郭。貴女人們看上去年輕。是幾?」?

(郭です。本当に若いわね。お幾つ?)」

「以17? 同?。」

(17歳で同じ年です。)」

「It's better to speak, but because we'll eat rather early。」

(話すのも良いが、鍋が冷めてしまう。早めにいただこう。)」

そこに李さんが割って入り、残り3人はすぐさま席に着いた。既に碗だけではなくグラスも用意されており、白い飲み物が注がれている。

「紀念向角新委員長の廣西省的來訪，乾杯！」

(では、角新委員長の広西省来訪を記念して、乾杯!)」

「乾杯!」

私たちは杯の飲み物を飲み干す。食事の機会はかなりあった為、こういうものも少しは慣れた。若干腹に熱がこもるが、食えば楽になるだろう。

「What kind of pot is today?」

(今日はどうな鍋なんですか?)」

「A pot of river fish, meat and taro potato。」

(川魚と肉と里芋の鍋だ。)」

「What is the meat?」

(肉?)」

「Dog meat。」

(犬肉だ。)」

「I see.

(そうですか。)」

私はすぐに手をつけた。真つ先に肉から。隣の冷泉ちゃんは一瞬顔が引きつったが、すぐに手をつけた。里芋だったが。

つけ添えのタレは赤く、ニンニクの香りがする。四川の鍋なら普通にその中に具が浮かんでいるだろう。ひとつ違うとすれば中に白い豆腐らしきものが浮いていることくらいだ。

その豆腐らしきものを崩し、肉をタレにつけて口に運ぶと香ばしい香りと共にタレの重層的な味が広がる。肉はともかく、タレに違和感はなかった。茨城県民には親しみあるものに近かったからだ。

納豆。つまりこの白いものはルーツの同じ豆腐を発酵させたもの、といったところだろう。沖縄だと豆腐ようと言うとかなんとか。普通にチャレンジした甲斐はある味だ。肉も犬だと思わなければ、普通の肉だ。

「This is the dish which seems to gain its physical strength very much.

(とても体力がつきそうな料理ですね。)」

「There is a second helping, so you're eating one after another, and it's no problem.

(お代わりもあるから、どんどん食べてくれて構わない。)」

隣の冷泉ちゃんも間も無く肉に手をつけた。私は魚を箸でとる。これもなかなか柔らかい。鮎のように下手な臭みがなく、清らかな風味だ。里芋の味の染み込み具合も、料理を趣味としているから分かるが、粘着性を含めこの塩梅に落ち着かせるには技術がいる。目の前の中年は腕利きの料理人を雇えるだけの金はあるとみた。

奥様も交えて当たり障りのない話しをするうちに腕が空になり、すかさず使用人がお代わりをよそってくる。そしてその次も食べ切り

そうになると、また次がよそわれる。昼飯はまともに食っていないのでありがたい。白飯と飲み物を交え食事は進んだが、暫くすると腹が一杯になった。

いや腹が一杯どころか、正直食い過ぎた気がする。与えられた部屋のベッドに腰を下ろしてから、つくづくそう思う。顔が熱い。

明かりは壁に見えるロウソクのみ。その周りだけが円形にぼうつと光を広げ、自身の燭台の影を写す。

部屋の片隅に置かれた机に置かれた水を一気に飲み干すと、その水が食い物の隙間を埋めてゲップを誘発する。そのまま背中をベッドに委ねた。

天井もどう見ても石造りであり、舌のように燭台から光の輪が楕円状に伸びている。だがその端は向かいの壁には届かない。

再び私は腹から湧き上がる息を空に吐いた。腕時計を確認すると、時間は9時を回っている。まだ眠るには早い、この明かりで机に向かって勉強するのも無理だろう。いや、出来なくはないが、この人に余裕のなさをさらけ出すのは宜しくない。

あの人は我々が有利な条件でここと協定を結ぶのに協力してくれた人だ。そしてそうさせたのも利があったること。つまりそれを以って私を広西省側に付けようとしている。

私としてはどちらにもつきたくない。どちらかに加担したら、その反対側が委員会の主導権を握った途端、学園の立ち位置は危うくなる。発言権を利用し彼らの対立を仲介した上で、理想ならビスマルクの如く自らの利、即ち学園都市の存続とそれを支える両広の経済的発展、それに誘導する。

だが上手くいくだろうか。私はあの眼鏡にだつて手のひらで踊らされた。その手から飛び降りれたのは西住ちゃんの力。おまけに私は現在椅子に座るお飾りだ。直属の軍事力を持った2人にはどうやっても叶わない。

……ダメだダメだ。私は学園都市を生かす者にして、この両広の指導者。弱気になつてはいけない。頭を冷やそうと指を額に当てた。

考えていると喉が渴いた。ベッドから立ってコップを握る。

とその時、左から音がした。そちらにあるのは扉だ。私はとりあえず知っている広東語で返事する。

「はい？」

「郭徳潔よ。お邪魔してもいいかしら？」

「どうぞ。」

扉を開けた。そこにいたのは李さんとほぼ似たような身長的女性だった。無論私よりも10センチ以上大きい。

「こちらへ。」

私は椅子へ彼女を誘導し、自らはベッドの上に腰掛ける。

「ご用件は？」

「大したことはないわ。それより話しづらいなら英語でも構わないわ。師範学校にも行っていたから、それなりには出来るわよ。」

「大丈夫です。なんなら秘書を呼んでできますので……」

「いえ、今夜は2人でゆつくりとお話したいの。」

少し身構えていたが、本当に軽く話をしただけのようなうだ。確かに寝る前に時間は空いていたので、私はそれらを了承した。単語は出来るだけ簡単なものにしよう。

「あ、ちなみに旦那には何も言っていないわ。私がただ話したかったから来たの。」

「大丈夫なんでしょうか、それは。」

「大丈夫よ。私の性格くらい理解してるわ。早速だけど、貴女たち何者？いきなり広州に来てこちら辺の代表になるなんて。」

「私は大洗女子学園という学校が載っている学園艦のトップでした。理由の詳細は分かりませんが気づいたらこの世界にいて、住民の飯のアテを探していたらここにたどり着きました。そして対応を話し合った結果、私から見ても奇妙な結果に落ち着いたんです。」

「ふーん……変な話もあるものね。学園艦ってどんな感じなのかしら？」

「うーん……船の甲板を平たくして家とかを建てている感じだと思っ
て頂ければ……」

イメージを手で空中に描きながら簡単に伝えようとする。

「それが鉄製でとても大きくて、何万人も住んでるのね。想像し難いわ。」

確かに彼女も内陸の出身だという。交通の便が余り宜しくないことだと、船といえは川を下るジャンク船なのだろうか。

「私はそこでの選挙を受けて学園都市の指導者になりました。まあそこでなんだかんだ苦勞が有ったのですが、だからこそ今の状況にも対処出来ているんだと思ってます。」

「……選挙、ねえ……そういえば今日の鍋は如何だったかしら？」

「美味しかったですよ。今日余り暖かくなかったので、鍋はありがたかったです。」

「そうでしょうか？ 靈川の黄色い犬の肉を使ったから、あれより美味しい肉はそうそう無いわ。あ、靈川はこつから北東にあるわ。」

「そうなんですか？」

「なにせ『頭の良い犬は靈川を通らない』って言われるくらいですもの。本来は水は使わないで脂で肉と内臓と香辛料だけで一緒に茹でるのよ。でもあの人が貴女がたが慣れていないだろうから、と今回の料理にさせたのよ。」

「……お気遣いありがとうございます。特に秘書は猫好き故に助かりました。私もこの地のトップとなったからには、文化、風習も身につけていかないと……」

「大丈夫よ。一挙手一投足民草に知らされるわけでも無いんだから。でも言葉だけは早急に身につけた方が良いわね。」

「南京で話した時は何とかかりましたが、広東語も身につけないと……時間を見つけては進めているんですが、なかなか……秘書の脳みそこには感心するばかりです。」

「確かにあの子は発音も違和感なかったわね。音読は早いわよ。私はこの英語、そうやって習得したわ。」

「取り敢えず新年の挨拶までには一応できるようにはします。」

「そうそう、一つお願い良いかしら？」

「はい、何でしょうか？」

ずっと座って話していた我々だが、彼女がスツと立ち上がった。

「抱きしめても良いかしら?」

「ふえっ?」

思わず変な声が漏れる。

「急にごめんなさいね。私、子供がいないのよ。あの人ももう40後半だし、仕事も忙しそうだし。だから変わりという失礼だけど、その温もりを味わっても良いかしら?」

「あの……李さんにお子さんはいらっしやらないのですか?」

「もう1人の奥さんとの間に男の子がいるわ。広州の学校に通ってるはずよ。で、良いかしら?」

目頭が輝かしく光っている。話も聞いて貰ったし、恩返しとしてはちようどいい。

「ええ、構いません。」

「じゃ、こつち来てくれる?」

彼女は両手を広げて待ち構えている。私がゆっくりと近づきあと少しでぶつかる頃、彼女の両手が私の背中を包み、私の顔は彼女の左肩に当たった。

「ぶふっ。」

「ああ。いいわ、この感じ。」

肩に当たる双丘に少し劣等感を感じなかったといえは嘘になるが、それよりも香でも焚いたのか、服から落ち着く良い香りがした。私も両手を彼女の背中に回す。

なによりも本当に、温かい。両腕同士を握り直し、何も考えずに暫く私はそれに身を委ねていた。時間の流れは、頭から抜けていた。

「……こつちを向いてくれる?」

頭上から声がする。私は顔をずらしてそれに応じた。彼女の顔は、少し暗くこちらを見つめている。

「……やっぱり。」

「何が……でしょうか。」

少し喋りにくい。

「貴女、泣いてるわ。」

「えっ……」

馬鹿な。私は人前で涙なんて……あの優勝の時でさえ……

手のロツクを外して右手を目元に持つてくる。人差し指に、水滴が乗った。

「あれ……本当だ。」

「……今日は、泣いて良いわ。私の予想でしかないけど、親にはしばらく会ってないんでしょう?」

「……」

彼女の胸の中であなづく。一回、夢で飛び起きたこともあった。

「しばらく……無かったんだけど……」

「泣いて良いわ。あの人には、私が泣いていたことしておくから。」

よく見ると、彼女の目尻も光っていた。理由は恐らく私には分からないことなのだろう、と何処と無く推測がついた。

「……ぐっ……」

また私は、時を忘れた。

その後数日間ここ広西で視察を繰り返した。農業の状況やそれを取り仕切る者たち。その一環で農業試験研究を行っている蔡雨沢という技正にも会った。

軍人。そして広西自警団の訓練状況。正式な陸軍は3万しかいないが、このような自警団制度によりいざという時動員出来るようにしているようだ。

政治家。そして文化人。桂林には数は少ないが、若干左派的な思想を持った人もいる。恐らく中央よりまだマシなこつちに来たのだろう。

このような人々との交流の末、私は27日に広州へ帰還する。李さんの家では何度も食事を頂いたが、犬肉は結局一度だけだった。だが他にもビーフンやちまきなど、なかなか美味しいものがある。広州のものもいいが、こちらが悪くない。

広西は環境、地形、人口、工業力、そのいずれも広東に劣る。だからこそ海南島で農業新技術を生み出し、生活の改善、軍事優先にも耐

えられる社会を育てねばならない。時間は少なく、私にできることも少ない。だが、人々の生活は私にその信念を更に深く抱かせるには十分だった。

広西大洗奮闘記 88 先の未来を

私は広西省における交流の中で珠江流域の農村地帯や梧州、南寧などの都市部を訪れた。河川が多く水は豊富だが、ただでさえ国土の7割以上が山地または丘陵地であり、おまけに国土の5割が石灰岩で出来ているためアルカリ土であり、弱酸性から中性が最適とされる農業に適しているとは言えない。

だが気候は多雨で温暖なため、かつてから果物の生産が盛んであり、米においても二期作、三期作が可能である。それ以外にも最近では淡水漁業が発展してきている。我が学園の水産科は母港の性質上海水魚の養殖が主体のため、この点における技術導入は望めないのが残念だ。

都市においては特に南部にある南寧は省内で最も人口も多く、経済的にも非常に発展していた。ここから政治拠点を桂林に移転する理由は、清代以前の政治的中心地であり、李さんの根拠地というのもあるが、メインは鉄道と対日戦略である。

現在、来年全通予定の寧漢鉄道の途中の湖南省衡陽から分岐して桂林、柳州へ向かう計画があり、これには詳細な建設計画もある。5年後に完成予定だ。しかしその先、つまり南寧や仏領インドシナ国境への詳細な延伸計画は現在無く、恐らく10年後までには出来ないと思われる。

その間にどう情勢が動くか読めない以上、本拠地は繁栄しやすい条件が整っている方がよい。桂林が広西の軍需物資生産、輸送拠点になれば南京政府もやすやすとは潰せないだろう、という読みもある。

もう一つの対日戦略の方が簡単だ。南寧の方が海に近いのだ。日本と戦争になったら、我々は華北と上海からの攻撃のみで負けるわけにはいかない。長期戦になった時、制海権を取った日本軍は間違いない上陸作戦を仕掛けてくる。

香港とマカオという中立の防壁がある広州はまだいいとしても、それ以外は十分に上陸される危険性がある。そして陳さんの故郷である広東省西端に近い欽州や、その近くの防城港や北海に上陸された

ら、南寧まで地形の障壁はない。政府拠点の移転は面倒だし、何より住民のイメージを悪化させる。

それに比べて桂林は非常に内陸にあり、おまけに北には南嶺山脈が近く、南方には柳江という壁もある、まさに天然の要害である。南方の高地が低めという弱点はあるが、防衛拠点としては妥当だ。

この広西にもミャオ族やチワン族などの民族問題やアヘンの蔓延など問題は多々あるのだが、財源の問題や国父である孫文の思想を考慮すると、どれもこれも一筋縄ではいかない。

中央政府が禁止しているのに、アヘン専売が財源であるのはどうなんだ、ということは元は半独立状態だったから気にしてはいけない。農村全て掌握できるほどのインフラと官僚機構が整ってないため、農村から満足な徴税が出来ないのだ。現代日本も最近までクロヨンとかトーゴーサンとか呼ばれてたので人のことは言えんが。

これからさらに中央政府による徴税も行われる以上、財源を切り捨てるわけにもいかない。軍人層、自警団の一部にも広まっており、軍事力低下も不安要素なのだが。

広東においても軍の掌握の度合いなど同様の問題がわんさか転がっており、日本との戦争が近づくと前にか改善の道を見つけたいが、私だけではどうにもならない。因みに広東省の主要財源は砂糖の専売だ。アヘンに比べればまだこつちの方が健康的だな。

だが専売にも安く買い叩くと生産効率が悪化するとか、貨幣価値が不安定だと結果的に安く買い叩くことになってしまうという弱点もあるし、何より天候に左右される。法幣により貨幣価値はある程度は安定するだろうが、財政における比率を縮小していけるのが理想だ。

ここまで長々と両広の情勢を語ってきたが、結局主導権は私にはない。陳さんと李さんの道に乗っかるしかないのだ。それを変える権力はない。しかしこの立場にいるからこそ、私は出来るだけ先を見る人間になりたい。

この世界に少なくとも3隻の学園艦がいる以上、私の知っている通りには歴史は動くまい。それ故に未来を予測し切れる訳ではない。この世界も『学園艦とその住民がいる』という条件下で必然性に従っ

て動くのだろう。バタフライエフェクトは私の知り得ない位置に確実に存在する。

だが論理はそれなりにわかる。結局戦争の長期化に対応するため法幣の増刷し、大幅なインフレを引き起こした。それと国民党の腐敗により民心は離反し、米ソの二大国はそれぞれ消極的支援に留めたため、戦争期に解放地を拡大して地方の支持を得ていた共産党が勝った。これが大まかなシナリオだろう。

私にとって学園都市の生存が全てだ。共産党が我々をどう扱うかわからない以上、一応協定を結んだ西南政務委員会、ひいては南京国民政府の方に残っていて欲しい。

だがそれだけではない。私は共産党政権成立後の政治を知っている。それがそのままこの世界で成されるかは分からないが、少なくとも、恐らく、多分国民政府の方がマシな結果になるだろう。断言出来ないのが辛い。

私はこれまでに多くの人を見てきた。工業資本家、商人、佃戸制に近い状態で残る地主、その下の農民、労働者、軍人、政治家。彼らの中には未来に希望を持つ人もいれば、目の前のことにしか注目していない人もいる。この人らも皆生きているのだ。明日を生きるために。

これによつて私が狙う道が見えてきた。学園都市の温存のため、両広を安定的に統治し、発展をもたらす。これは私がこの地位にとどまり、僅かな影響力を残すにも必要なことだ。そしてそれを支える南京政府も残す。つまり共産党を主流にはさせない。

この方針のために目指すのは、まずは日本の早期撃退。これにより戦争による経済負担を軽減する。次いでその後の国共内戦において国民政府への協力。この二つで成果を残し両広の政権に対する発言権が強化されれば理想的だ。腐敗は……まあ、まず私は加担しないようにしよう。

私はあの鳥によると13年後に帰るらしい。しかし立つ鳥は跡を濁さない。帰るとしても、ここの人たちが誇れる場を残そう。

そんな考えごとをしていることなぞ知りようもない飛行機は、12月28日昼前、柳州の学生に見送られつつ空港を離れ、広州へと飛ん

だ。

夕刻赤い太陽が建物の隙間を照らす中、我々は広州の白雲飛行場へ着いた。それを陳さんからの使者と名乗る人物が私たちを迎えた。確かに陳さんの証明書を持っており、国民党員でもある。おまけにこの訓練兵にも敬礼されている。彼は外へと我々を案内した。

用意された車に乗って南へ走り続けると、一軒の建物の前にたどり着いた。車を用意されているのは私の本格的な要職就任が近づいているからだろう。

「こちらが角新委員長の御宅となります。」

その家は広州の町の外れ、長寿路地区にある壁で囲われた庭付きの大きな家だった。中国風の雰囲気の中に、洋風の曲線が上手く組み合わさっている。

私は半ば呆然としてそれを眺めていたが、ここはかつて広東省政府に協力した要人が住んでいた家だったが、その死を機に家族は故郷へ帰り、家は売り払ったのだと教えられた。私はこの家で広州の中心部と往復して過ごすこととなる。

召使いを雇わねば掃除もままならなさそうな家だが、家代を差っ引いても私の手取りの給料も一応あるため、場合によっては雇うことも考えなければならぬ。でも料理は私の仕事だ。これは譲れない。

もう少し小さい家でも良いのだが、仮にも委員長としての権威の問題もあるのだろう。私は見て回ってこの家に住むことを認めた。

次にこれからの仕事場に案内される。広東省政府の省長公署の一室が私の仕事場だ。正式な仕事はまだないが、それでも最近行われた業務に関する資料にはさつと目を通す。そこに陳さんが現れ、本質には関わらない簡単な疑問点を確認すると、今度は陳さんも一緒にある場所へと赴いた。

そこは広州の町にある写真館。そこで写真を撮るそうさ。何のためかという、簡単に言えば私の存在を広く伝えるためだ。下手な文章より画像の方が見ていて分かりやすい。特に軍人層には重点的に配るらしい。政務委員会に忠誠を誓うような軍隊が出来たら、確かに

見てわかるものは重要なかもしれない。

しかしこういうものは立った姿や上半身のみ、または首から上だけというのがセオリーだと思うが、それ以外にも足を組んで床に座ったりした写真を撮ったのは一体どうしたことだろうか。

これが終わり次第、私は今日から3日間休暇ぎ与えられる。

今度は黄埔の港へと向かう。町の中を進んでいると、いくつか並ぶ中の一つの船の前で、見覚えのある服装をした女子が我々を待っていた。

「お久しぶりです、角谷会長。」

「大橋ちゃんか、久しぶり。気分はどう？」

「悪くはありません。次で住民の輸送は最後になりますから。」

12月28日夜、我々は輸送艦『福安』に乗り込み、黄埔の港から警笛をあげる船と共に離れた。

夜の闇の中、明かりは出航後しばらくすると急に少なくなり、こちらのマスト灯の明かりの方が強くなり、それが海面を円形に浮かび上がらせる。

時々漁船と家の灯りが僅かにあるのみ。

ここで勤めるのは広東海軍の船員らである。

その補佐を無線係を中心とした英語が出来るものが務めている。

服は支給品が間に合っていないらしく、陸軍のものが混じっていたり私服だったりとまちまちだ。

我々は操舵室にて様子を確認した。

彼らの働きぶりについても聞いたが、軍の給料の未払いはよくある事らしく、こちらは配給の食料を提供し、仮設住宅の一室をただで貸すことで給料代わりとしている。

お陰で目立った事故は無いようだ。

確かに陸と空は力が入れられていたが、海は交易路以外は特に注力していないのだろう。

日本と戦争になったら、河口付近でさえ安全を保証できるか分からないのに制海権なんて確保出来るはずもないし、選択と集中の際の排除対象として妥当ではある。

話を聞いた後は船舶科から与えられたちんまりとした部屋に入る。

他の船員はハンモックだったりするそうだから、これでも船長並みの待遇だそうだ。

用意してもらった服に着替えた後、椅子に座り貫つた握り飯を甘くなるまで齧りながら、川、そして海へとその船に揺られる事4時間。

島の隙間をくぐり抜け万山群島に接近し、大万山島を左から時計回りに迂回して島の南西にある万山港へ入る。

外部にもこの呼称を適用しているそうだ。

下船の準備をして甲板で待つが、そこから見える港は僅か一月でこ

さえられたにしてはそこそこ設備が整っていた。

島そのものは夜ゆえほとんど真つ暗だったが、仮設住宅の一つを用いて設置された港湾管理事務所の上からは、学園艦のお古のライトが辺りを照らしている。

隣のもつと大きな輸送船を認めるまでもなく、それをも光源と成して煌煌と光を照射していた。

船から降ろしたスロープ、という名のただの金属板をおりて陸地を踏んだ。

流石に全面をコンクリートで固める余裕は無いようで、側面に石を積んであるだけで、他は土そのままだ。

側面の崩壊によって船が入れなくなることだけは避けた感じか。

「お帰りなさいませ、会長。」

私の一番信頼する部下が、到着を迎えた。

「ただいま。」

船のことは船舶科に任せ、私たちはこの島の中核である生徒会事務所所向かう。

もはや建物の一部ではなく、一つの施設として成り立っている。

使っている仮設住宅は3つだ。

人も住んでないのに贅沢な使い方をしていると思われるかもしれないが、これでも前の生徒会室と生徒会長室を足した面積の半分ほどしかない。

しかもそのうち一個は書類などの倉庫として利用している。

つまり実際はかなり狭い。

その分外回りを増やしたり、仕事用の机を共用したり、晴れた日は外を仕事場にすることで、何とか人が動ける程度のスペースを確保したそうだ。

無論そんなスペースで全員が横になって眠ることはできないので、他にも住居が用意されている。

家族と一緒に学園艦に住んでいた者も生徒会にはいるが、全員こちらで集団で生活している。

いざという時はすぐに人員を用意出来ないといけないからだ。特にこの先はそのようなことも仕事に応じて増えるだろう。

で、休暇でこの地を訪れた私たちには、当然住居なんて割り当てられていない。

無論生徒会関連施設で人が2人追加で横になれる場所を確保できるものはない。

そういうわけで私たちの寝る場所は少し離れた所にいた船舶科の船長らが使っている仮設住宅の隅っこを借りることになった。

3人で一棟使っているようだが、明らかに生徒会よりいい思いをしている。

羨ましいし小山もそうだと言っていたが、船舶科の職務を行うのもここだそうであるし、何より専門職ゆえ待遇は他の人よりマシでなくてはならない。

そのうち一人の大橋ちゃんが漁船運行の指揮をとって留守であるため、残りのスペースを寝床として借受ける。

寝る前に彼らとはこの状況と私の環境について互いに話をした。

こつちでは先日の黄埔での貿易で当面の燃料の確保は出来たものの、やはり値段は値切られているため、一回の売却品全てを売っぱらってやつと食糧や燃料必需品の必要分が購入できる状況らしい。

あとは医薬品に関しては購入のめどが立っておらず、病気などは残り僅かの医薬品と自然治癒に任せざるを得ないという。

服や家具などの商品に関しては市商会の興味を引けているようなので、漁獲量の安定とこれからの挽回に期待しよう。

こつちからは向こうの情勢だ。

我々が歴史で学んだことと大きくは相違ないが、偉人個人を見た感想はなかなか学べるものではないため、皆が知っている程度の人物のそこらを重点的に話した。

向こうの経済や社会について安易に語るのは避けた。

我々は向こうからはしばらく脱却出来ない。

あとは冷泉ちゃんに広東語をスラスラ話してもらって驚かれたりと、結構気楽なまま話は進んだ。

寝たのは0時半を過ぎた頃。

ちなみにこちらの時間は12月25日、クリスマスを以って1時間遅らせてある。

サマータイムならぬウインタータイムといったところか。

違うとなれば仮に春になつても元に戻らない、というところだろうか。

次の日の朝、私は早めに目を覚ました。

時計はまだ6時前をさしている。

この部屋には雨戸が付いてないから仕方ないことである。

しかし他の人はまだ眠っており、私は身を起こすとそろそろと部屋の外に出た。

天気は快晴ではなかったが、やっと昇ったばかりの太陽を前に、寝間着のまま大きく四肢を伸ばす。

風が潮の香りを運んでくるなか、久々に記憶のままにラジオ体操を始めてみた。

頭の中で8拍子のリズムを打ちながら腕を振ったり飛んだり跳ねたり、上半身を倒したり回したりと多様な動きをし続ける。

そうしている間に、いくつかの自転車が連なつて前を通り過ぎた。見るとどれも前後の籠に大量の荷物を載せている。

地面は舗装などされておらず、砂利や土がそのまま露出している。バランスを崩さないか心配だったが、全く気にするそぶりもなく、

生徒会の者らは結構なスピードで通り過ぎていった。

私はまだ体操は途中だったが、それを途中で中断して、軽く着替えて生徒会の建物へ向かうことにした。

建物の前には長机が設置され、人が慌ただしく行き交っていた。

「本日朝分の確認！芋、魚、米！」

「芋、魚、米！規定量の存在を確認します！」

「開場まで残り35分！」

生徒会の面々が昨日見た姿とは大きく異なり、声を張り上げながら配給開始の手続きを進めている。

魚市とかがイメージとしては適當か。
かなり規模は小さいが。

「あ、会長。」

そのうち一人が私がかかなり近づいてから存在に気づいた。

「手伝うことある?」

「副会長に確認を。」

見事にたらい回された。

小山もここにいるようだが、生憎指示を連続して繰り出しており、とても話しかけられそうな気がしない。

これはあれか? 邪魔だから離れてろってことか?

「会長?」

と思つてたらあちら側がこちらに気がついた。

「確か第三配給所の人員と配給食糧が足りないはずなので、そちらに回ってください。」

「それってどこにある?」

「食糧は後ろの倉庫の脇に札を付けて置いてありますので、それを脇の自転車に積んでいってください。」

場所はこつから北に1.5kmくらい行ったところにあります。

時間がギリギリなので、急ぎめをお願いします。」

「分かった。」

すぐに目線を切つて目当ての倉庫と書かれた看板の下へ足を運ぶと、確かに1229、第三と札のついた袋が二つあった。

しかしどちらもかなり重い。

私に小山を持ち上げられる程度の筋力があつたことにつくづく感謝した。

それらを前後の籠に乗せ固定し、サドルを少し下げたから、私はこのよく分からぬ大地の上を走り出した。

本当に舗装のほの字もない。

ただ少し黒と灰色の混じった土の上を、風邪をかき分けて自転車は駆けていく。

先ほどは少し遠かったのでわからなかったが、自転車用の道は片側

一車線ずつ用意されているようで、そこからは石や小石は除外されて、少しばかり整地されている。

だがアスファルトよりはかなり走りやすく、おまけに荷物のせいでもギアが重い。

とりあえず3段階ギアが変えられるママチャリだったので、一番軽いやつにした。

スピードに乗ってくれば多少は走りやすくなったが、それでもバランスだけは常に気を使う。

風景も基本単調である。

視界の両側はだいたい山で、北西の方へ平地は伸びている。

山の上には雨水を集める施設があるはずだ。

農地はまだ木の柱がその将来的な存在を指し示すのみ。

ある程度固まって立っている家々はさつきまで居た仮設住宅と同じ形のものか、木造の簡単に建てられた掘っ建て小屋の親戚みたいな家だけだ。

雨風をしのげることをだけを目的に作られているらしく、窓があってもガラスがなくビニールの膜や袋を割いたものを繋ぎ合わせて光を取り入れている。

その家の近くにはすでにちらほらと人が起き始めていて、外で活動を始めている。

途中に行くつかの分かれ道を確認しながら、言われた通り北へ向かう道を10分くらい走っていると、向かいから別の自転車の群れが向かってきた。

その先頭にいたのは丹波ちゃんである。

「おはよう。」

離れたところから声をかけると、目の前で自転車の群れはブレーキをかけた。

「会長、その配給物資、第三配給所のものですか？」

「そうだよ。小山にこっからもう少し北に行っただけと聞いてるんだけど。」

「それウチのところのものなんで、ついてきてください。」

次のところとか少し道が入り組んでいるんで。」

「了解、案内頼むよ。」

自転車は左車線に移り、丹波ちゃんが先頭に付いてこぎ始めた。

その直後を追いかけしばらく走っていると、確かに配給のためと思われる施設を発見した。

といっても木の柱が4本、それを支えるように三側面に斜めに木材が入っている。

その上には簡単な屋根が横たわっている。

既にそこにはここで配給を受け取るらしき人がある程度の列をなしている。

「荷物はそこに、すぐに紐を解いて準備してください。」

「了解。」

「残り15分!」

「名簿と数量の確認すぐに!」

「芋、魚、米!」

3種類追加されているのを確認しました。

数量の確認に移ります!」

「えつと……10、20……」

「遅い!」

もっと大まかでもいいから!」

「名簿確認!」

「物資は足りなきやあとで持って来るしかないね。」

他に袋はなかったと思うけど。」

慌しい時間が駿馬のごとく駆け抜け、配給が始まった。

「C1地区の方はこちらにお並びください!」

「4名さまですね。」

こちらになります。」

地区ごとに整理されて、次々にカードチェックと引き換えに、食料が人々が持ってきた袋に入れられていく。

ただ機械の如く作業を繰り返すこと1時間半、ついに最後の一人の

袋に米が投下された。

「ありがとうございます。」

その一人をお辞儀で見送り、仕事は終わりとなった。

私はふうと息を吐いて伸びをしようかとしたが、他の者はそんなことをする気配すら見せず、食糧の入っていた袋を纏めたりと淡々と後片付けを始める。

「急ぎますよ。」

仕事の割り振り先の監視の他に、今日は引き継ぎが有りますんで。」

「あ、そうか。」

私もそれに加わり、10分ほどで荷物を自転車に積み込んで、今度は軽々とそれをこぎ始めた。

「配給用の特別人員を準備しても良いんじゃないかな、この仕事量。」
「今更ですよ。」

仮にそうしたとして、隙間の時間にやってもらえる仕事の目処が立ってないんです。

製塩とか農場仮設整備、服製造、水の回収、果ては小万山島の太陽光発電所の設置準備。

特に水は雨水と僅かな雨水だけでは足りませんから、ビニールを使って海水から水蒸気を回収して、凝縮して水にするっていうみみっちいことまでやってます。

どれも途中で事務所に来て手伝ってもらうにしても厳しい仕事です。

それに配給する際の指導もしなくてははいけませんし。」

「私が何とかなったんだから、新しい人入れても何とかなると思うよ。逆に実務の時間が削られちゃうから、仕事に支障をきたすんじゃない?」

「これまでみたいに機密保護の意味合いも薄くなるし。」

「……話は通してみましよう。」

新会長次第ですがね。」

「新会長……ねえ。」

「そういえば会長ってしばらく帰ってきてませんでしたよね?」

「ああ、前に出たのが11月10日だから、会えたのは一月半ぶりかな？」

「人員の追加で思い出したんですが、既に高3生以外が加わっているの、ご存知ですか？」

「ほう、誰？」

「選挙で戦った赤峰さんです。」

「……何故入れたの？」

「いやいや、そんな怒らないでくださいよ。」

「しょうがないんですよ。」

生徒会長選挙の投票総数の半数近くが棄権もしくは赤峰票だったんですから。

「こうでもして不安要素を取り込んどかないと現体制の存続に不安が生じます。」

「仕事は出来るの？」

「仕事は……正直主要な部分は任せてないですね。」

「一から学んでもらわなきゃいけないし、元々頭の回転が速い人間ではないようなので。」

「あ、でもちゃんと政治思想については生徒会業務には持ち込まない、という誓約書にサインはしてもらっています。」

「確か小山さんが嚴重に保管なさっているはずです。」

「そう、ならまあいいか。」

「自転車は一列に等速運動を続ける。」

戻ってきた私たちは他の生徒会の者らも集まって事務所の前の広場に集まることになっている。

「広場といっても単に何も無い土地があるだけである。」

「道から外れて自転車を元あった場所に戻す間、丹波ちゃんは配給内容の確認を小山と行っていた。」

「私は分からないので袋を倉庫の中に入れる。」

「他の班はもう帰還していよう、既に広場には見知った顔とそこから疎外され気味な一人の姿を確認できる。」

その日の午前の配給業務が完全に終了すると、私以外の第三配給所の者らもその集団に加わる。

朝食だ。

結構遅くなってしまったが。

焼いた魚と炊いた米はわかるが、サツマイモはどうやら干し芋以外に加工されたようだ。

「これは？」

近くの者に訊く。

「蒸かした芋です。」

「じゃがいもじゃないけど？」

「蒸かした芋です。」

量は少なく、これで1日2食というのは少し信じられないが、恐らく私が向こうの様々な場所で好待遇を受けたからだろう。

美味かったからよし。

飯が終わると、片付けの最中何処からか町内会や学園長らが集まってきた。

それが終わると、ここの広場にて私の生徒会長最後の仕事が始まる。

私が他の生徒会の者の前の小山と河嶋の側に近づき、河嶋が一声かけると、皆一様に冬服のまま体育座りしてこちらを眺めた。

「これより2012年度生徒会引き継ぎ式を始める。」

来年度は1936年度扱いになることをご了承願いたい。

まずは来年度書記から。」

役職ごとに次々に呼び出された一個下の学年が引き継ぎを行なっていく。

とはいっても資料は既に纏めて生徒会室にあるため、実際は紙切れを一枚渡すだけだ。

それが私たちが単なる生徒会の者へと戻す力を持つ。

私のものも大ききとか紙質は一切変わらないが、私のものはさらなる力を持つ。

「副委員長、丹波那月。」

「はいー!」

卒業式とはこのようなものなのだろうな。

「おめでとう。」

「これからも頑張つてね。」

「ありがとうございます。」

右手、左手の順で紙を手に取り、半分に丸めて元いた場へ戻る。

次だ。

「委員長、峠美津子。」

「はい。」

私も前に出て、新会長を迎える。

肩までかかった黒髪が、こちらへ海風で流される。

それさえも愛おしい。

私は右手を出す。

その上にポケットから出てきた彼女の生徒手帳が置かれる。

その上に、さらに彼女の右手が。

「峠美津子殿。」

貴女は大洗女子学園の新生徒会長として、学園生徒の学業に最適な

環境づくりに最大限力を注ぐことを誓いますか?」

「誓います。」

「学園艦に居住する住民に対し、安全で不自由なく生活する自由と権

利を保障することを誓いますか?」

「誓います。」

「謹厳実直の精神に基づき、自らの手に落ち着いた権限を私欲の為に

使わないことを誓いますか?」

「誓います。」

「生徒会の仕事をこなしつつ……」

私はここから先、言える気がしなかった。

小山の顔を少し確認すると、そのまま続けるように、と言っている。

「……学業との両立に邁進することを誓いますか?」

「……誓います。」

「では最後に。」

皆の視線がこちらを向いたのを感じた。

ここから先は予定にはないはずなのだから。

だが、これは私が確認しておかばならない。

「学園住民の餓死者を出さず、生活の早期安定を実現し、学園都市の建設、学園教育の復活、総動員体制の早期解除に向けて邁進することを誓いますか？」

「誓います。」

一際はつきりした声だった。

そしてこの時だけ、軽くうなづいた。

「ではここに、生徒会長角谷杏最後の責務として、新生徒会長として峠美津子を承認することを宣言します。」

私は生徒手帳を返し、彼女の名が入った紙を手渡した。

「ありがとうございます。」

これで終わった。

終わってしまった。

「最後に。」

皆の前に向き直る。

「私は向こうに帰ったら、間違いなく5年はこの万山群島に足を踏み入れることはない。

だから次帰ってきたら都市が出来、学業が再会できているように期待しているよ。」

「はい。」

皆一様にうなづいた。

「以上をもって、2012年度生徒会引き継ぎ式を終了する。」

各自担当の仕事に戻るように。」

生徒会の者らは拍手の後、自転車に乗る者、生徒会室に入る者などと別れていった。

残された学園長らの前に私たちは進む。

「本日はありがとうございます。」

「いえいえ、構いませんよ。」

仕事ばかりでは老骨に來ますからね。」

小山の礼に対し、老いた町内会長の一人が自分の肩を叩いた。
私は学園長の前に進み出る。

「学園長先生、今まで本当にありがとうございます。」

「迷惑をお掛けして申し訳ありません。」

「仕方ないさ。」

私は国と県に任命された身分に過ぎない。

国の方針に反発しようっていうなら、私から権限がなくなるのは自明さ。

これからも運営に口出しはしないよ。

君たちでここまでやってきたんだし、私は授業がないなら見守った
り車乗ることにしか能がないからね。」

「ご協力感謝します。」

「君もだ。」

なんか向こうの政府首班になるとか聞いているけど、大丈夫なのか
い?」

「はい。」

政権が存続して欲しい理由をお互いに理解してますから。」

「ならいい。」

力を発揮できるよう祈っているよ。」

「ありがとうございます。」

お元気で。」

固い握手を交わす。

固さは陳さんら程ではないな。

「会長、この後は……」

「もう会長じゃないぞ、小山。」

「そうでした。」

しかしそうなるとなんとお呼びしたら……考えたら分からなくな
ってきます。」

「何でもないさ。」

それにしてもさっきのは疲れたね。

私もああやって宣誓した身だから言えたことじゃないけど。」

「仕方ありませんよ、伝統なんですから。」

「こんな状況だからこそ守っていかないと。」

「それでこの先はいかがなさるのです?」

「学園艦の最終人員輸送の船が昼に出るんだろう?」

「それに乗って学園艦見て、そのまま広州に戻るさ。」

「分かりました。」

あと3時間ほどありますが、その間は?」

「仕事の邪魔しちゃいけないし、出る準備して冷泉ちゃんを起こしてから、ちよつと島を自転車ですらうてみるよ。」

「ここ最近移動が馬車とか車とか飛行機ばかりで運動してないからねえ。」

「分かりました。」

自転車で島の沿岸を一周することにした。

総距離9.6kmほどであるが、そこにて住民が生徒会や科類担当の者らを通じて労働している。

最早ここに来たら心の分別もある程度つくのだろうか、皆淡々とそれに取り組んでいた。

海は青くて広く、そして何処にあっても海を見れば必ず島の影があった。

小万山島でも作業の音がこちらまで響いており、順調さが伝わって来た。

準備も整え港に戻ると、船舶科が船の準備に精を出している。

「行き先、大洗女子学園学園艦。」

「行き先、大洗女子学園学園艦。」

確認よし!」

「燃料の残量、確認終了しました。」

「よし分かった。」

各自出航直前準備まで待機!」

「はい!」

元気な声に続いて、私は艦長へ近づくと、

「今回は長坂ちゃんか。」

「会長も乗って行かれるんでしたよね？」

「そうそう、安全に頼むよ。」

「最早何度も通った航路ですからご安心を。とはいってもいつも初めの気持ちで舵を取らねば、というのが船の大原則です。」

「それはありがたいね。」

「後1時間ほどで出航になります。」

乗って待ってます？」

「そうだね。」

逆に外で待つてて生徒会の人に会うと泣いちゃうかもしれない。」

「だいぶ涙脆くなりましたか、会長？」

「そんなことないさ。」

ただ、広州に戻ったら本当にこの先数年、下手したら10年戻ってこれないからね。」

「そうならないことを願いますよ。」

ではこちらからです。」

部屋は船員待機の部屋の奥が空いていますので、そちらでお待ちください。」

私は輸送船Bの側面に回り、用意された金属板を登る。

その途中でこの島を見ると、先ほどまでよりはるかに大きく思えた。

広西大洗奮闘記 90 願はくは（終）

荷物を言われた部屋に持ち込み、壁のスイッチで明かりを灯した。白熱電球の橙に近い明かりが部屋を照らし出す。

その部屋は広いが、その隅はただパイプ椅子があるのみだ。まあ寝る気は無いので構わないのだが。

間も無く冷泉ちゃんも後ろからやって来て、私のものの脇に荷物を置いた。

「それでどうするんだ。」

「私はこのまま勉強して待つつもりだけど、冷泉ちゃんは？」

「そうだな……もう少し外を見てくる。」

ここにいてもやることないからな。」

「準備は済んでるようだけど、邪魔にならないようにね。」

「あいよ。」

部屋から冷泉ちゃんの姿が消えると、私は参考書を手に取り、椅子に腰掛けた。

椅子に包容力はなく、ギシリとバネが歪む。

場数を踏んでもやはり広東語の習得は上手くいかない。

やはり単語の抜けが目立つ、特に日本と漢字の意味が違うもの。

やはりまだまだ何を言うかを先に考えてしまい、出だしが遅れる。

というより最早ネイティブ顔負けクラスで習得していて、おまけに

上海語にも対応出来ている秘書が化け物なだけなのだが。

ここの隅っこなら音読していても問題はないだろう。

しばらく経った。

とはいえどまだ1時間どころか30分すら経っていないはずだが、

足音が近づいてきた。

「どうしたんだい？」

長坂ちゃんにもう乗つとけつて言われた？」

冷泉ちゃんである。

参考書を閉じながら応じる。

「いや、会長、貴女にお客さんだ。」

私の天敵がやってきた。」

露骨に顔を歪ませる。

「……なるほど、行ってくる。」

手に持っていたものを椅子の上に置き、私も再び金属板の上の方へと戻る。

銀色の金属に囲まれた通路を通り抜けた先の船の足元には確かに人が2人いた。

予想していたが、予想していなかった。

「園ちゃんか。」

「お久しぶりね、角谷会長。」

「ついさつきその肩書きは捨てたよ。」

私はまたこの地を踏みなおした。

「風紀委員会新委員長の園みどり子よ。」

「副委員長の佐渡暁美です。」

「新委員長なのか。」

「今回小山副会長の要請でまた就任することとなったわ。」

まずは会長ご退任おめでとう。

この先付き合ひがあるなら、対応は私たちが行うこととなることを伝えておくわ。」

「付き合ひ？」

私は暫くこっちは戻ってこないけど。」

「では小山会長から聞いた件はあの方の独断ということ？」

「とりあえず暫くはそっちとの関係は無いと思うけど、その件ってどんなの？」

向こうが耳元に顔を寄せてきて、小声で話しかけて来る。

「……ちよつと人目につくところは避けたほうが。」

内容が内容なのよ。」

「ふーん……じゃ、船の中来る？」

まだ暫く出ないみたいだし、その前に降りれば大丈夫でしょう。

私と冷泉ちゃん以外私たちのいる場所の近くには人いないし。」

「冷泉さん……。」

寝坊、止まってる？」

「そんな訳ないじゃん。」

「私もいつも仕事前起こすの苦労してるよ。」

「それは指導が必要ね。」

「お邪魔するわ。」

「サド美、貴女はここで待って事情を伝えておきなさい。」

「了解しました。」

「じゃ、行こっか。」

「私は彼女を船にあげた。」

「成る程、実力部隊か……」

部屋にあげた時またさつきと同じ顔をした冷泉ちゃんも、渋々席につきながら新委員長の話を聞いている。

無論小言を言われた後だ。

「そう。」

「向こうの主な指導者2人は軍人なのよね？」

「それはその通りさ。」

「だとしたらその中で少しでも権力を得るとしたら、直属の実働部隊が要るのは事実じゃないの？」

「しばらくは無理だと覚悟してるよ。」

「そもそも私にあるのは発言権だけだ。」

「多数決に参加する権利さえない。」

「それに向こうの軍事、政治体制はほぼ維持されるから、私が口出しできる隙がないしね。」

「私は単に月に一回政務委員会の総会が開かれて出席するだけさ。」

「ずいぶん暇そうね、それだけなら。」

「無論それだけじゃない。」

書類への署名や押印は山ほどあるし、政権の顔や人気取りの役目も担わされるみたい。

国内、国外両面においてね。

「会合とか宴会とかも増えるから、太らないことを切に願ってるよ。」
「本当にはんぺん型となった自分など未来永劫勘弁願いたい。」

「こっちは必要な食料を手に入れるのに手一杯なのに、良い身分ね。」

それより、さっきの件についてはどう考えているの?」

「時期尚早。」

まず私が政権内でどうなるかも分からないし、下手に動くとりアルで首が飛びかねないからね。」

傀儡に身を置いて様子を見るよ。」

冷泉ちゃんは どう思う?」

「可能性はほとんど無いだろう。」

そもそも風紀委員会を治安組織としても、武装は鉄の棒、上手く
いって拳銃だろうな。」

機関銃と大砲に敵う訳ないだろう。」

本当に南シナ海に浮かぶことになるぞ?」

「……そう、なら良かったわ。」

顔はそれが真意だと物語っているように見えた。

組織の長として部下が死なぬよう願うのは妥当だろう。」

「そういえば風紀委員会の分裂どうなった?」

「ああ、あの件ね。」

あれなら出ていった奴の鎮圧に成功して、私が新委員長になった
後、向こうについた担当長と一時収監してた時の行動を見て、問題無
いものは復帰させてるわ。」

「大丈夫なのか、それは……下手したら生徒会に反対しても許される
と考えられてしまわないか?」

「でも担当長は例外なく収監を継続してるし、お陰で人員は倍増した
から、何かあった時の対処はしやすくなったわ。」

向こうについた者たちの方が鉄の棒の使い方が上手いのよね。」

社会の不安定化による風紀悪化と反乱は必ず抑え込むから、心配い
らないわ。」

身を乗り出してくる。

膝の上の拳が意思の硬さを示すなら、信じるに足るだろう。」

「そのための代償も軽いものじゃなかったけどね。」

医薬品はそもそも抗生物質がまともに無いときたし、備蓄もかなり

使っちゃったし。」

「将来的な生産も視野に置いてるとは聞いてるわ。

実際に行われるなら、積極的に支持するつもりよ。

いずれにしても、私たちは学園都市のみに集中していて構わない、ということでもいいかしら？」

「OK」

「出航まですぐのようだし、失礼するわ。

また会いましょう、角谷委員長。」

「それも大陸に帰ってからだけだね。」

彼女は私と固く握手を交わし、船を去った。

にわかに船の中が騒がしくなってくる。

この部屋にも待機組と思われる船舶科がぞろぞろと踏み込んできて、我々による独占状態は崩れた。

後10分。

椅子の下が揺れていた状態から前進へと変わった。

私たちは船長とともに、船が前方右に見せてきた港の全容を眺める。

私が帰ってきてから乗り換える船が反対側で待機し、この船がいたところには大きな空白が生じている。

そして昨日とは異なり、2本の旗が港湾事務所の脇から翻っていた。

1本は無論大洗の旗。

もう1本は国民党の青天白日旗。

私が乗った船に載せてあったものを、要人歓迎の印として掲げたらしい。

暫く先まで掲げておくという。

空気しか発せない私が要人とは。

船舶科の者らは前方に警戒しながら、面舵に転舵させる。

ここから8時間私たちはこの船と運命をともにするのだ。すなわち暇だ。

音読しに戻ろうにも、先ほどの部屋では交代要員が仮眠を取っていたして、とてもそう出来そうな雰囲気ではない。

「長坂ちゃん、船内の雰囲気は良さそうだね。」

小声で語りかける。

「ええ、何とか。」

自分たちが学園を支えている気がより感じられるという話はよく聞きます。」

「いい感じだね。」

「しかし変な噂も流れたりしてますし、このやる気がいつまで続くかも読み切れません。」

「変な噂？」

「はあ、それがなんともウチの船舶科の一部が向こうの軍人相手に売ってるって話です。」

「売ってるって……」

「そういうことです。」

まあ流石に向こうの人間もそこまで金が有るようには思えないので、根も葉もないものでしょうが。」

「それならそれでいいんだけど、問題はその噂がなぜ立ったか、だね。」

「おそらくそれだけ食事がギリギリだからでしょう。」

現状非難の意味もあるかもしれませんが。」

「何とかなりそう？」

「やはり水資源の確保が急務です。」

どのような開発を行うにしても、それが必須であるのは疑いありません。

実際にこの先は住民の残っている荷物と装備品の輸送に切り替わるのですが、その際も淡水化装置及びその為の発電装置を優先的に運びます。」

「そうしてくれると助かるよ。」

電気が十分手に入れば生活の幅も広がるからね。

工学科には頑張ってもらわないと。」

「我々はその為にいつでも船を万全の状態に保っておきます。」

「そうしてくれると助かるよ。」

「というか、さっきの話ここでしちゃって大丈夫なの？」

「下手に広東の軍人に伝わったら面倒なんじゃ？」

「大丈夫ですよ。」

さっきの話はもう結構広がってますし、こっちの人間は向こうの航路の人間とは暫く関わってないので、伝わることはないと思いますよ。

何か秘密の話はここでなさっては？」

「そんな必要ないよ、本当に。」

「本当ですかあ？」

「本当だって。」

隠して何か出来るほど私力ないもの。」

流石に話をし続けるのも悪い。

相手は仕事 중이다。

というわけで音読もまともにも出来ない部屋に戻ってきた。

「冷泉ちゃん、起きてたのかい？」

「折角なら横になって寝たい。」

「贅沢な。」

「だって周りもそうしているじゃないか。」

それで、ここは本音で話せそうか？」

「多分、向こうの航路の人間とは付き合いがないって船長が言ってたから。」

それにこっちにいるのも仮眠とってる人だけでしょ？

いけるいける。」

「そうか……さっきの話は本音じゃないよな？」

「……半分は本音。」

実際あの2人には逆らえないよ。

逆らったら私は傀儡どころかその地位からも引き摺り下ろされかねない。

こっちのそういう動きは、私を受け入れた以上敏感になってるだろうしね。

だが向こうの改革、ひいては民政を狙いたいのは本当。」
「そうだろうな。」

現在も広東省政府の庁舎には女子トイレが来客用に一つあるのみ。
男女格差の改善もやった方がいいかも知れないな。」

「まあそこは私が顔役やれば多少は改善されると踏んでるけど……民政移管は如何ともしがたいね。」

あとは風紀委員の本土導入も。」

「その機会はあると考えているぞ。」

戦争時だ。

つまり本土から兵を引いた時、そこに治安維持の空白が生まれる。」

「向こうも読んでる気がするけどねえ。」

「逆にそこで何も出来なければ、貴女はずっと傀儡のままだ。」

あ、あと一応西安事件に介入するって手もあるな。」

どういう道に行くかはともかく。」

「……とりあえず考えとくよ。」

まずは広東語話せないかどうかにもならない。」

話はそこでやめた。

ここで話し続けてどうにかなるものでもないと思う。

ハツと気がつく、私の足元には参考書が表紙と背表紙を上にして
転がっていた。

眠っていたようだ。

しかも目と鼻の先の人員が交代したのに気づかないほど。

隣もしっかり熟睡している。

時計を確認すると、あと1時間半。

腹が鳴った。

しかし渡されているのは水滴を集めた水が入ったペットボトルの
み。

これも島では貴重品らしい。

口の中の酸っぱい干からびたみかんの皮を何とかまともにする為、
それを一口飲み、暫く口の中で転がす。

何となく甘い。

無条件に口の中の害悪を吸収したそれは、喉の奥へと吸い込まれた。

参考書を手に取り鞆に仕舞う。

少しページに折り目がついてしまったが、しょうがないと割り切ろう。

椅子から立つと、なんとも私の身体は単純に出来ているかを知覚した。

水を飲んだらトイレに行きたくなるとは。

トイレから帰ると、船長が部屋の前にはいた。

私を待っていたのか、会うとすぐに私に甲板に来るよう誘った。

この輸送船Aは残り2隻よりでかく、甲板も水面より結構上にある。

その分船内も広いため、荷物の輸送にはもってこいなわけだ。

学園艦と比べてはいけませんが、甲板に着いた時私の息は上がっていた。

運動してないせいもあるんだろうな。

「ごっちはです。」

「はあ……一体何さ……」

船首の方に向かうと、水平線よりは手前にあるが、進行方向にずっと行ったところが丸く明るいのに気づく。

「あれは……?」

「学園艦の最期の火です。」

「どういうこと?」

イカ漁には向いてそうだけど。」

「学園艦のエンジンの原子力発電が作っている電気を止まる前に消費させているんです。」

まあ、あと1週間もせずに消えますが。

明るいでしょう?」

「成る程、動かなくなつた分使わないといけないわけか。」

「あのまま原子力発電を回し続けるのも不安ですし、何より発電量が

減りつつある中で使わないと電流が強くなって、電線が発熱とかして危険なんですよ。

電線も回収されていってますし。

住んでる人もいるにはいるので、発電が長く続いてくれた方がいいんですけどね。」

「魚とか採ってないの?」

「遠すぎるんで無理ですよ。」

「勿体ないねえ。」

赤色巨星のような炎は、みるみるうちにこちらへと近づいていった。

学園艦のドックへの入り口は開いている。

港に入り込むのは定刻通り。

そして鋏を降ろすのも定刻通りだ。

再び金属板が設置されて、私は土ではなく鉄製の栈橋の上に降り立った。

ここには生徒会の者が学園艦駐在担当として一人残されている。

そしてその者と残り3人が我々の到着を迎えた。

「お久しぶりです、角谷さん、で良いんでしょうか?」

「なんか微妙だけど、まあいいか、三崎ちゃん。」

「大洗女子学園学園艦へようこそじゃ。」

「ようこそなり。」

「ようこそだっちゃ。」

「アライクイさんもこっちにいたのか。」

「力仕事を手伝ってもらってます。」

「ここまでの人材は他にはいませんから。」

「照れるもも。」

港で船舶科と三崎ちゃんが話し合っている。

ここから最後の住民輸送が行われる。

しかし運び終わるのは住民のみだ。

家財道具や電力関連、鉄鋼や淡水化装置などはまだまだここから運

び出される。

無論この船の空きスペースにも載る。

明々後日からここは広東省政府の所属になるが、鉄鋼輸送の名目で船も送り込めるし、内容確認の名目で万山港に寄港もさせられるから、輸送に支障はない。

住民の輸送を急いだのは、早急に配給を一本化するためというのが大きい。

出港は今夜2時、6時間後だ。

その間私は鍵をもらい暫くの別れをすることにした。

甲板の上までエレベーターで戻って、人も殆どいないのにもいつもよりも明るい道を、自宅に向けて歩く。

まれに人とすれ違ったが、彼らが最後の住民であろう。

学生寮もそのまま、入り口も通路も目がやられそうなほど煌々と輝いていた。

部屋に入ると何も無い。

仕事で生徒会室で寝泊まりしたこともある身であったが、ワンルールの空間がやけに愛おしく、広く見えた。

スペアキーを寮長さんが持っているから、売却品として全て持っていったのだろう。

食器類とか棚とか新居に持ってつちやだめだったのか。

だめなんだろうな。

自分だけ、なんて許されるはずもない。

床の木の上に靴下のまま上がりこむ。

コンロのスイッチを押しても、ただカチカチと音がするのみ。

窓の向こうも徒らに明るだけ。

息を大きく吸って吐いてから、私はここを後にした。

生徒会室。

広い。

絨毯の色の奥にある机とその周りのものだけが残っている。

他の机なども全て向こうに輸送してるか、ドック近くの倉庫にあるのだろう。

ここには靴のまま堂々と侵入する。
その机は三崎ちゃんのものらしい。

料理も自分でしているような形跡がある。

隣、元私の机は綺麗にされた上で机の上に折られた紙が載っていた。
た。

そこに書かれていた言葉が、その席が「元」私の席だということ
痛感させた。

こつちにも他に机はない。

どうやら向こうからの担当者も一人と通訳のようだ。

確か今の間に向こうから島に来て、そしてこれが戻った後、折り返しこれに乗ってくるという。

僻地任務なので誰が行くかギリギリまで揉めたのだろう。

その方と生活する三崎ちゃんは英語が出来るからまだマシだろうが、頑張つてその人たちと付き合い、ここで生活して貰うしかない。

帰り道、肩に何かが触れた。

いや、乗った。

「久しぶり、ヨウムさん、だっけ？」

「その通りだ、こちらこそ久しぶり。」

人がみるみる減つて君が来た、ということはこれはみんな揃つて移住した、つてところかな？」

「鳥頭とは思えないくらい良くやるね。」

「失礼な。」

それで、私も移住していいの？」

「さあね、私は島の動きは知らないよ。」

行つてから考えれば？」

「次の船の甲板にでも乗つかるか。」

流石にゴミも漁れないんじゃない？」

「懸命な判断だと思つよ。」

向こうもご飯は少ないだろうけど。」

あと、あの話は本当に嘘じゃないんだね？」

「当たり前だろう。」

嘘を言って何になるというのだ？」

「それもそうか。」

「では失礼、また会おう。」

鳥は肩から離れた。

白い光の中で灰色はしばらく目立ち続けた。

普通は小汚く見え好きになれそうにないその色が、何故か格好良い気がした。

エレベーターの重厚な扉が音を立てて開く。

目の前もすぐく明るいが、先ほどよりは暗く見える。

ドックに戻ってきた。

せわしなく荷物が積み込まれている。

どうやら太陽光発電のパネルやそれ以外のものも一斉に運んでいくようだ。

棧橋に近づいていると、一人待つ者がいる。

「何しに行つていたんだ？」

「ちよつとお別れにさ。」

「折角なんだから私も連れて行つてくれていいじゃないか。」

「こんな夜遅くに人を叩き起こす趣味はないよ。」

「もうこれからは出かけられないか。」

「まだ出航まで3時間あるし、いいんじゃない？」

「じゃあ、折角だし家に行つてくる。」

「行つてらっしゃい。」

しかし奥のエレベーターは上に向かってしまっているのが横の表示でわかる。

「こりやしばらく来ないね。」

おそろく住民か誰かでしょ。

じゃ、私先帰るから。」

私は棧橋の方へと戻る。

だがその前にやつておきたいことがある。

少し手の空いてそうな三崎ちゃんに、磁石があるかを尋ねると、倉

庫のあたりにあるのでは、と帰ってきた。

何かするのですか、と聞かれたが特に大したことはない。

仕事は船舶科に任せられるからと付いてきたので、折角だから見てもらおう。

磁石は丸いものだった。

近くの鉄壁に当たると、結構しつかりくつつくようで、爪を隙間に差し込んでやっとながら削がせた。

「良いね。」

「何をしますか？」

「ちよつと意気込みを残しておこうかな、って。」

「へー。」

向こうの人間らしく漢詩かなんかで残すんですか？」

それには答えず、私はポケットにあらかじめ入れていた白紙を開き、近くの平そうな壁に当たって書き始めた。

願はくは

鉄の大船

また踏まん

而立を超えし

師も駆ける頃

これを貼り付ける。

カチンと小気味好い音とともに、それは引いても動かなくなった。

「和歌ですか。」

これって、西行のパクリじゃないですか。」

「馬鹿、本歌取りと言ってよ。」

「しかも『鉄の大船』って素で書いちゃってる時点であまり上手くありませんよ、これ。」

「仕方ないね。」

和歌なんて読んだことないもん。

あ、あれ剥がさないでいてね。」

「まあ位置的にも邪魔にならないからいいですけど……」

「それじゃ船に戻るよ。」

私はそれに手を二回叩いて礼をして、背を向けた。

「高木様、こちらへお願いします。」

荷物等は後日お渡ししますので。」

「おーい、この電線の束は何処に置けばいいんだ？」

「こつちはタンス一つなり。」

「パネル20枚だっちゃ。」

「載せちゃっていいから船内で聞いてくれ。」

私は荷物と新たな人が乗り込むのを横目に船へと進む。

化け物じみた量の荷物を持っている3人もしっぴかり協力しているようだ。

片足を金属板に載せる。

私の両足は暫くここに付かないだろう。

右足のつま先が、そこを離れた。

数歩進んで船に乗る。

そして中の通路を進んで鞆の側に戻り、電気を灯して参考書を手に取った。

而立のため一語でも多く頭に叩き込む。

汽笛とともに鉄の大魚から、一つの都市と四匹の動物、そして一つの実と果肉が産み落とされた。

それらの、そしてこの世界の運命を私は知らない。

広西大洗奮闘記特別編 習志野

見事だ、と思う。

履帯の締め具合も適当であり、装甲の清掃も定期的に行なっていることがうかがえる。

車体の歪みなども見当たらない。

それが奥の方へ横一列に整然と並べられている。

乗っている者らにも大事に扱われているのだろうか。

我が帝国陸軍の技術部がこれを整備した者たちに劣っているとは微塵も考えていないが、女の遊びから来たにしては大事にされているようだ。

これらはなんでもつい先日東京湾近くに現れた巨大な船から降りて来たという。

だがこの戦車の形式は間違いなく我が国のもの。

おまけにそんな巨大な船、なんでも太平洋を横断したりする大きな船など比較にならぬほど大きいと聞いたその船を作れる国など、我が国は無論、欧米列強でさえ作れるとは思えん。

支那の南方にて同様の船があるとの話も新聞で見た記憶はあるが、詳しくは覚えてない。

彼らは我が国にあらずして我が国である、非常に不可思議な存在であった。

しかし利益が貰えるならば、些細なことについて人々が何も言わなくなってくるのが道理。

同じ言葉が通じることもあり、この国はこの顕界と異界との境界にいそうな者らを心情的にも受け入れていた。

何れにせよどのような者であろうと、この戦車に乗る者には一度会っても良いと、前から考えていた。

満蒙での経験からいずればこの戦車、またその後継が戦場を駆け巡ることになるだろうと考え、戦車兵への転属を希望した時に、である。

その時にこのような大量の戦車が確保されたのは、私としても枠の拡大の意味でありがたい。

「履帯に異常なし。」

「おい、そっちはどうだ？」

「はっ、砲及び機械類異常なしであります！」

「よし、次行くぞ。」

それらを確認しているのは二人の女子。

正月が過ぎ切って間もないのに、しかもこの赤鬼も青くなる寒い空の下で、薄着で一両一両細部を確認していつている。

一人はそこそこ長身の黒髪。

もう一人は一回り小柄な丸眼鏡の女だ。

おさげを両側に吊るしているだけに、軍服では無かったら一介の女学生だと見間違うだろう。

この戦車の持ち主であろう。

だが服装は軍服に近い気はするが、階級章が付いていない。

女子が軍に所属などしているはずもないので当然といえば当然だ。

時々手に息を吐きかけながら、その様子をただ眺めていた。

そのうち背が高い方がしばらくして気づき、こちらに視線を向ける。

もう一人を呼び止め、そろって戦車から降りると、両足を揃え敬礼を決めた。

その時私はこの女子らに美しさを見出した。

さながら広い草原を駆ける一陣の風のようにであり、凜とした立ち姿である。

その風が私にも吹き付けられる気がして、少し寒気を感じた。

この姿、部下にも敬礼の指針としておきたいぐらいだ。

すぐに私も答礼する。

こちらにも最上の礼を尽くさねば失礼だ。

「陸軍歩兵少尉の西住だ、名を聞こう。」

「はっ、名乗り遅れました！」

私は知波単戦車隊長、西であります！」

「同じく知波単戦車隊長、福田であります！」

「本日は我が戦車隊に如何なるご用件でありますか！」

正直耳に来るほど甲高い。

日頃低い男の声ばかり聴いてる故か。

「私も間もなくここの練習部に入るものでな。

新たに来る戦車が少し気になったので眺めていただけだ。

特にこれといった用はない。

それにしても、先程から実に念入りに確認しているな。」

「はっ、本日知波単学園艦より戦車をこちらの騎兵学校に持ち込むように指示を受けておりまして、戦車隊を代表して我々が随行しました。」

立つ鳥跡を濁さずと言いますし、最善の状態でお渡ししたいと考えております！」

「良い心がけだな。

戦車はこれからの戦争の要となろう。

これに命を預ける者が出て来るかも知れん。

いや、昨今の状況から考えて間違いなく出て来るだろう。

それに訓練で事故に遭われては軍人の意味がない。

練習部の一人としてよろしく頼む。」

「はっ！」

それにしても、命を預かる戦車……でありますか……」

おさげの女子が戦車を横目に見ながらぼやく。

「不満か？」

戦車道は人を殺さぬものだそうだが。」

「い、いえ、滅相も無い……」

我々の学園艦をお守りくださっているこの国を守るのにこの戦車が必要ならば、お断りする理由はございません。」

「まあ良い。

何事も ならぬといふは なきものを ならぬといふは なさぬ
なりけり

という言葉もある。

為さねばならぬ時は為さねばならぬのだ。

何があってもな。」

目を細め一瞬視線を逸らしたが、すぐに視線を戻す。

一つ気になることがある。

「それで知波単は戦車道をやってしていると聴いておるが、この戦車がこちらのものとなった場合、そなたらはどうするのだ？」

「はっ、戦車連隊の訓練が優先された上で、燃料と訓練施設の借り賃、及び訓練後の整備とその費用がこちらの負担であれば、訓練しても構わないと伺っております。」

ですが、夏の世界大会には久留米の教導団が主体となって参加するそう、なぜ我々がこのような場を用意して頂いたかは申し訳ありませんが存じておりません。

「ここの師団や騎兵学校の方のお計らいとは伺っているのですが……」

「そうか、だとしたらこの先も見かける時があるやもしれんな。」

「はっ、その際はよろしくお願い致します！」

「こちらこそ。」

そなたらの方が乗り慣れているだろう。」

「勿体ないお言葉であります！」

「正月は体が鈍る。」

久々だったが、やはり鍛錬は間をおいてはいかん。」

男が汗を拭きながら敷地内を歩いている。

「あいつの調子も上手くいってないなあ。」

年もあるかもしれんし、流石にこの夏は厳しいかもしれん。

主体はアスコットになるかもな。」

この男もまた軍人であり、騎兵学校の教官の一人である。

「まあ、力を尽くすしかないだろう。」

変な期待も付いて来るだろうし、それを感じてあいつが荒れなきやいいんだが……」

顔を軽く歪ませながら頭の後ろを搔く。

今はあいつを少し休ませ、少ししたら世話をする、そのために必要な暇だ。

正月を超えて間もないとはいえ、陸軍は暇ではない。施設でも時々人とすれ違う。

身分が上の者には敬礼を、下の者には答礼しつつ散歩を続ける。気がつくと戦車連隊がいる辺りへと来ていた。

こここの辺りはあまり人がいないようだ。

今朝方騒がしかった気がしたのだが。

今年の夏に戦車学校が出来るという話だが、私はその頃にはここにはおるまい。

だがとある道の角に差し掛かり、視線を軽く右へ向けると、ずらりと戦車が横に並んでいたのには魂消た。

その列の奥側で人が話している。

後ろを向いている者らの一人はやけに髪が長い。

だが軍服らしきものを着ているようだ。

まさか軍人で長髪な人間なんぞ居らんとは思うが、念のため近づく。

時間潰しとしても悪くない。

向こうもこちらに気づき奥の男が敬礼したのに合わせ、向こうを向いていたものらが振り返って敬礼してきた。

こちらも七三分けの髪をのぞかせて応える。

一人の少尉に……後の二人は女子？

軍服かと思ったが微妙に違うようだ。

「……何故ここに？」

戦車道なら久留米じゃないのか？」

「はっ、本日知波単学園艦から、陸軍へ戦車の納入のため参りました。

知波単戦車隊隊長の西であります！」

「西……」

「同じく知波単戦車隊軽戦車隊一番車車長、福田であります！」

軍人ではないようだ。

ならば長髪を叱る必要はない。

少し二人を見下ろした後、男は顔を軽くあげた。

「今月より戦車第2連隊練習部所属、西住です。」

お名前は存じております、西大尉。」

「流石に知られているか。」

「気恥ずかしそうに頬をかく。」

「我が国で知らぬ者は稀だと思いますが。」

「それもそうか。」

「それで君は？」

「はっ、たまたま戦車の納入を見かけたもので。」

「これから世話になる戦車の前任者を知って損はないかと。」

「なるほどね。」

納得する仕草をしてから、軽く身をかがめ、女子らと視線を合わせる。

「君の名も西か。」

「はっ、西大尉のようなご高名な方と見えることができ、非常に光栄であります！」

「ははっ、君らは軍人じゃない。」

「そこまで軍人らしくいる必要もないだろうに。」

「しかし無位無官の者が役職ある方に出会った際は、相手に合わせて礼儀を尽くすべきかと。」

高価そうな軍服の袖を横に広げて一息を吐くと、戦車をちらりと眺めてから次の言葉を紡いだ。

「知波単、だっけ？」

知波単の人とは初めて会ったけど、女子に軍人らしく話させるとは、面白い教育をしてるんだね。」

「はっ、

『知恵の波を單身渡れるような進取の精神に溢れる学生になるように』

「が我が校の名の由来でありますゆえ、自立向上の精神が求められております！」

「戦車道もその指針ゆえ、といったところかな？」

「どちらから申しますと、我が校では馬術関連の部活動が盛んでありますから、そちらの方が適しているかと。」

目が輝く。自分でもわかる。

「知波単に乗馬が得意な者がいるのか？」

「はっ、うちの戦車道の人員以上は。」

「技術は？」

「全国大会にいった者ならいくらかかりますが……」

非常に面白そうだ。

「……ちよつと学校長に頼んでみるか。」

君らはここには来るのかい？」

「はい、ありがたいことにこの設備をお借りできましたので。」

「じゃ、また何かあったらよろしく頼むよ。」

私は馬の世話に戻らないといけないから。」

男は背を向け、その場を立ち去っていった。

装飾の一部が少し揺れている。

その背中が角の向こうに消えると、長身の女子が敬礼を解いた。

「ふう……」

肩に疲れが溜まったのか少し右肩を回している。

「戦車の納入だけかと思ったら、とんでもない方に会ったであります

な、隊長。」

「うむ……」

彼女らははつと後ろの私に気づいたようだ。

すぐに戻り敬礼し直す。

「も、申し訳ありませんでした。」

気が緩んでおりました！」

「い、いや、軍人ではないし構わんよ。」

話が長引いたな。

私もそろそろ戻ることにする。」

私も彼女らに背を向ける。

流石に立ち話が過ぎた。

もともと彼女らはこの戦車らの確認をしていたのであり、私と話す

ためにいたのではない。

邪魔し続ける道理もない。

「西住少尉、ありがとうございます！」

「こちらこそ。」

練習頑張れよ。」

その背中も間もなく消えた。

敬礼を解いてまた腕を回すと、長髪の女子は大きく息を吸った。

「福田、あと少しぱっぱと終わらせるぞ！」

「了解であります！」

彼女らは先ほどのものの隣の戦車に飛び乗った。

陽は落ち、暗闇が包む千葉港。

ここからは海路知波単学園艦への船が出ている。

といっても学園艦がもともと保有していた船を転用してただけであり、運行も船舶科が担っているため、便数も少ない上20時代のこれが最終便だ。

学園艦は国に編入されているため、船に乗るのに金以外特別に必要なものはない。

船内の椅子で腰を落ち着けたところで、隣の福田が口を開いた。

「西隊長、これから練習はどのようになるのでありますか？」

「月一が限度だろうな。」

全員が海を渡り、向こうの施設代や借り賃を払い続けるのは、部費も縮小されている我々には負担がでかすぎる。」

「厳しくなりますな……」

「それにこの時代の戦車道は、我々のものとは違う。」

カーボンなんてないし日本では馬上薙刀が戦車になった程度だ。」

「では我々はどうしたら……」

「カーボンは外して提供してしまっただから紅白戦とかは出来んが、かといってやり方を改める訳にもいくまい。」

このまま地道に知波単戦車道を進むしかあるまい。

こういう時なら、突撃も許されよう。」

「……」

船は出航した。

舵を切り、闇夜の中館山沖の学園艦を目指す。

確かにこのままではジリ貧だ。

すでに学園艦では朝鮮や満州への移民の希望者の募集を開始している。

食糧も高騰気味、輸送船の頻度がこれでは都市からの人の流出は避けられないのだろう。

何もできないならば、我々もその一人に加え入れられるかも知れない。

隊長として学園艦から切り離される仲間なぞ見逃すわけにはいかない。

それに地位的にも日本に従属している。

最近では危険思想を持っているとして、住民の一人が特高に治安維持法違反で捕まったと聞く。

あの自由で自発的な知波単の土台が揺らごうとしていた。

こんな時、西住殿、いやさっきの方ではなく大洗の方だが、いやさっきの方も否定する訳にはいかな……まあいい、その方ならどうするのだろうか。

きつと我々には思いもよらない作戦で危機を乗り越えてしまうのだろうか。

「……隊長。」

「どうした、福田。」

「悩み事、でありますか？」

「……まあな。」

我々の運命は学園に決められている。

この先学園はどうなるのやら……私にも想像つかん。

戦車道が出来なくなろうとも、その精神を守る戦車道の仲間が引き裂かれることだけは避けたいのだが……」

「……私、一つ計画があるのでありますが……それが成功すれば……」

「……何？小声でいい。教えてくれ。」

福田は少し耳元に口を寄せた。

「今年の2月に……」

ちょうどその時、外に舞い出した粉雪の中で船が長く警笛を鳴らした。

非常に、非常に長かった。